

---

# 王と細工師

骨貝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王と細工師

### 【Nコード】

N8464E

### 【作者名】

骨貝

### 【あらすじ】

”闇”が跋扈し夜から光を奪って10年。それを全て追いつた青年が戴冠する。その日の出会いから彼と、彼を憎む細工師と、その兄弟子の三人を巡る恋が始まる。

## 1・戴冠式にて

とある国の戴冠式。

一歩一歩、白亜の神殿の階段を登っていく青い服の男がいる。

男、新たな王は若々しく美しく、堂々としており、これからの王国の繁栄を予見させ、この日のために集った民衆は彼に熱狂した。しかし場を満たすのは荘厳な威に打たれた静けさだった。したがって静寂の中に熱は宿り、王が壇上上がったとき最高潮に達した。背をむけていたその顔をこちらに向けたとき、聴衆を見るその目は民を睥睨するのではなく、民の視線と想いを受け取るものだったから。

彼は為すだろう

かけらの不安もない、確信が波のようにひたひた広がっていく。

壇上には、黒く質素な服を纏った神官長が立っている。その手に持つは竜の血が満ちた神秘の石の杯。王とならんとする者と、それを見定めるような黒衣の老人の目がしばしかち合った。青年のゆるぎない透徹した眼を眺め、老人はなにやらうつすら微笑むと祝詞を唱えて杯を掲げた。

しずしずと手渡されたそれを受け取って、躊躇なく呷る。

資格が無ければ死に至ると知っていても彼は惑わなかった。

彼は為すだろう

而して『王』は倒れなかった。平然としている。

観衆はいよいよ耐え切れずに叫び出した。彼は為した、彼は為し

ただだ！！

空白の歴史はいよいよ終わりだ、守り神が再び我らを救う！！！もう夜に脅えることはない、我らの元に月と星と祭りが帰ってくるのだ！！

神官長は足元の崩れることのない『王』の様子を見て静かにうなずいた。それを見て、巫女達が頭を下げて退出していく。彼のための冠を届けるため。

「成程、疑っていたのだな」

ここに冠がないからもしやと思ったが。王は老人に向かって呟いた。

「ええ、あなたが屍鬼になって神聖なあれを汚すことが万に一つもないとは言えませんから」

にやり、と皺のよった、けれど張りのある顔が笑う。相変わらず食えない爺だな、と青年はこっそり呻いた。

「またなんとも皮肉なことだな。国を救ったものが国を滅ぼすことを危惧するとは」

しかもお前の育てた子どもだ。

「当然のことです。あなたが人である限り、完全ではないのですよ。生きる限り、欲と無縁なものはおらぬのです。大きいか、小さいかの違いで」

「では私の中の小さな欲が育たぬことを祈ろう。民を愛し守ろうという気持ち以上に膨らまぬように」

「私も祈っておりますよ」

珍しく含みのない笑みが両者の間で交わされた。

「……ところで遅いな、何かあったのではないか」

「いえ、大丈夫かと思いますが。確かに少し遅いですね、まさか」

「お、お待ちくださいませ、き、きゃあああ」

「あなた様はお控えにっ…ぐっ」

抑えられたうめき声が近づいてくる。

「…何かあったのではないか」

「…そのようですな。はて」

「お。あなたが『王』様？」

暢気で高めな声と共に、果たして現れたのは、なんとも味気なく、くたびれた様子の服を羽織った少年だった。

観衆も壇上の異変に気付いたらしくがやがやと騒ぎ出す。

なぜなら突然に現れた薄汚れた闖入者に驚いたこともあるし、その手に無造作に王たる者の証が握られていたこともある。

少年を引き戻そう捕まえようとする巫女やら衛兵やらを、王は「待て」、とあっさりと止めた。

少年はあわてることのない王の様子に多少つまらなさそうな顔をした。

「ふん。まったく人格者なこつて、新しい『王』様は。」

「いかにも。ところでお主がそれを授けてくれるのかな」

少年の手にゆれる黄金の煌きを王は指した。彼は指でくるくると王冠を回しながら王の黒髪の天辺から足の先まで不躰にじろじろ眺めた。やがて王の凧いだ青空を閉じ込めたような目を見つめ、くりくりとした鷲色の目を細めた。

「どうしよっかな」

「おい」

「ねえ、これ欲しい？」

少年は首をかしげて答えを待っている。

「ああ、欲しくはないが要る」

「ふうん」

少年は王の答えが少し気に入らなかったらしい。

「ま、いいや。竜の血が認めただからあんたは資格者だろうよ。でも、それが分かっている俺ちよつとひねくれてるから。あんたに今から1つ質問して、俺の気に入る答えを出したらこれをあげる」  
どうする？

ざわり。再び聴衆が揺れる。滞りなく行くかに見えた戴冠式に訪れた珍事に、正直言つて面白がっている。なにせこんなに明るい気分なのは彼らには久しぶりだったから。彼らの王が、寛容に貧しうなきまぐれな少年に付き合っていることは、彼らの声に王がこれから耳を傾けてくれるだろうという希望を持たせた。

そんな寛大な王様は、再び試されている。  
例えそれが遊びであっても、うまく答えられねば、不吉なこともなる。さて王は、どうするのか。

「承知した。」

人々が息をつめて見つめる中、王は少し面倒そうだったが頷いた。そう来なくては。ギャラリ―は耳をそばだてた。

「その代わりよく答えた暁にはその手で私に冠を」

続く王の言葉に、さすがに少年はびっくりとした顔をした。目と同じ色の短い髪を、冠をもたぬほうの手でがしがし掻いた。

「い、や、それは許されることじゃないんじゃないのか？」

「私がそう望む」

にっこりと青年は笑む。

「お、王！！」

「神官長を差し置いて、そんな」

「いけません！！何をおっしゃってるんですか」

飛び交う声もどこ吹く風で青年が先ほどから沈黙を保っている老人を見やると、老いたりはいつものように笑った。

「ああ、構いませんよ」

「あんたらどうかしてるな」

呆気にとられた様子で少年が呟く。

「気にするな、昔からだ」

「そう。…分かった。いいよ。あんたの答えが気に入ったらだけど」

その少年が言うと王は満足そうに頷いた。

「では問いをどうぞ、承ろつか」

ひとつ呼吸をして、大真面目な顔で少年は王に問うた。

「これをなんだと思う」

王冠を掲げて。

## 2・工房にて

一晩空けて。ここは煌びやかな王宮でも荘厳な神殿でもない、王都のはずれにある古ぼけた工房。

窓から流れる朝の白い光が、この工房の売り物を七色にきらめかせた。

「あゝあゝ」

そこには昨日、王に問いかけをした少年がいる。

「どうしたの、フィー」

「だって何で王様が石言葉を知っているの。つまらん」

「さあ、文武両道であらせられるからね、あの方は」

「完全無欠人間って可愛くないと思わない、ロイ？」

「というかお前は求める答えをあの男が出さなかったらどうしたんだ」

「えゝ？あれ溶かしてなんか別のもの作ってたよ」

「それはやばすぎるだろう」

「そうかなあ」

「間違いなく」

そうかなあと椅子に膝立ちでがったんがったんと座って揺らす少年を、もう一人の優しげな青年は危ないよ、と苦笑して咎めた。

「格好いいじゃない、>其れは統べるものの証であると同時に我らが竜とその子らを尊び忠誠を誓う証<って彼は言い切ったでしょう」

金の石言葉は尊敬と忠誠。そして権力とかの力の象徴でもある。

「統べるもの、で止めてたらなあ」

「冠をやりはしなかったのに。」

「何でまたそんなに拘るんだか。お咎めなしで帰ってきただけでも奇跡と思うよ。フィーが蛮行に走るたびに心臓が凍りそうになる」

「ごめんって。ほんとは、さ…あの王冠、溶かしたりするもんか。」



だって私欲しかつたんだよ、あれ。本当は、欲しかつたんだ。渡したくなかった。だからあそこまで行った。気に入らないよ、だって、あいつに、あいつのせいで」

「フィー」

違うよ、だめだよ、と悲しそうにロイに首を振られてフィーは押し黙った。

ぐすん、と鼻を鳴らす。

時計のかちこちなる音と、フィーを落ち着かせようとロイが入れたお茶の香があたりに漂った。

無言のままお茶を飲んで、心が穏やかになっただらしい。すると考えていることもふと漏れるようで。

「しかも、ばれた」

「は？」

あ。うっかり言ってしまった。少年は仕方なく、言葉を続ける。

「女ってばれた」

「はあああああ!!?!?」

常日頃温厚なロイがすつとんきょうな大声を上げた。危うく噴出しかけたお茶を器官に入らせて苦しそうにしている。

「ど、どうしてさ」

息も絶え絶えと聞かれた。

「……わからん」

「わからん、じゃないでしょう。ああ、とうとうこの工房も閉めなければならぬときが」

王国では女子が就ける職業は限られており、彼女の選んだ生業は女子厳禁とされるものだった。不浄が石に映ると言って。

そんなことはないのに。迷信である。彼女は細工師であり、強く自分の作るものに誇りを持っていた。だが、世間には面倒だから性別を隠していた。男として振舞っていた。それゆえ、あんな大立ち回りをしては目立つので、ちらとでも疑われぬよう男の服と香を纏い、少し長くしていた髪もばっさり切った。それなのに、あの男

にばれてしまった。

求める答えを得て、すこし震える手で男の艶やかな黒髪に差すように冠を載せたとき、こちらを見上げた王が、すっと手を挿んであるうことか口付けを落したのだ。しかも「ありがとう、お嬢さん？」と言った。思わず目を見開いてしまった。その言葉に動揺するのになかった。動揺が彼の疑いを確信へと変えてしまった。ばれてしまったからには、一瞬職を奪われることを覚悟したけれど。

ロイを安心させるべく少年のような少女は、微笑む。

「口止めしてきたから大丈夫」

「…どうやって？」

「今度細工物いくつかただでやるつつたらいいって  
「なるほど」

「納得したんだ？」

「フィーがしていた耳飾を見れば、それがどれだけの価値が分かったんだろう。目もいいな、今度の王は」

「忌々しいことに」

よかつたじゃない、とロイは再び落ち着いた様子だ。

「で、その後は走って逃げてきたわけ」

「幻術を使った」

「…もう何も言わないよ。また僕の作った道具を持ち出したんだね。そつだろつとは思ってたけれど」

「よくできていた。王に気付かれた瞬間に使えばよかつたよ」

術のこめられた石のはまつた指輪を撫でる。このお陰で助かった。  
「まつたく、君が一度も痛い目にあわないのが不思議だ」

そう言いながら、彼は嬉しそつだ。作ったものを褒められるのは誰しも嬉しいものだ。その価値が何であるか理解している人間にそつされると特に。

それからしばらく。客もあまり来ない店なので、のんびり彼らは

作業していた。そこに。

「ずいぶん寂れた店だな」

音もなく一人の男が訪れていた。深くフードを被っている。

「どちらさまでしょうか？」

ロイが警戒を含んだ声で問う。フィーは顔をしかめた。

2人が気配に気付かないなんて。

「ああ、いきなりすまなかったな、ヴィーでいい。一応客だ」

その声に。

「げげっ、ヴィエロア王！！」

「ああ」

突然の客を、フィーは後ずさって、ロイはなにやら、ああこいつだからか、といわんばかりの態度で迎えた。

「げげ、に、ああ、とはなんだ、失礼だな」

ばさり、とフードを外すと、冴えない店に似つかわしくない涼しげな空気を漂わせた精悍な顔が、不機嫌そうに姿を現した。間違いない、王だ。

「お嬢さん、約束だろう、口封じの代償を貰いに来た」

と王は表情を改めてフィーの方を見やる。

「き、昨日の今日で気が早くはないか」

「忘れられたらかなわんからな。」

「よくここが分かったな……」

フィーはうんざりとした様子だ。

「神官長に聞いたよ、まったく飛んだ茶番だ、あの人も人が悪い」

そんなに俺を王にしたくないのかね、と王様、もといヴィーは苦い顔をしている。

「気のいい爺ちゃんじゃん。用件言って王に会わせてって頼んだらあっさりいいよつつつたもん」

「胡散臭い古だぬきだ。まったく、そいつに居所をばらされたのだから」

「あ。」

「…罰当たりな…」

ロイは溜息をついた。神官長というのはフィー流に言うなら「結構凄くて偉い人」だ。神たる竜と話すことができ、巫女と神官を束ねる人望を持つ。癒しの術と薬の最たるものを備えた唯一の人間。それを爺ちゃんと狸呼ばわりだ。ああ嘆かわしい。ロイはそこそこ信心深かった。商売繁盛を祈るために。

「で、名前くらいは聞かせてくれるのか？」

ややあつて、そう尋ねるヴィーの言葉に、だんまりを決め込んだフィーを無視してロイはいった。

「僕はロインズと言います。一応このオーナーになるかな。そこにいるのがフィオナで家に 住み込みで働いてる稼ぎ頭。細工を見れば分かると思うけど、細工師としては天才。でも、ちょっとお転婆なところがあつて…。昨日はそんなフィーが失礼をしたみたいで、僕から謝っておきます。申し訳ない」

あまり敬っているとも言えない口調だが、ロイの持つふんわりとした空気はそれを感じさせない。むしろ彼の深い声が心地よいと思わせる。それは王をして例外ではなかった。彼は笑った。

「構わない。まあ、余興になつたし、終わったことだ。何か事情があつたのだろうか？」

「…」

「フィオナ、と言ったか」

フィーは唇をかんでいる。ロイは少しはらはらした。彼女の憎悪を知っていたから。

「…フィーでいい。そう呼ばれると虫唾が走る」

しかし、少し息を吐き出すと、彼女はいつもの調子で言った。

「分かった。ではフィー、私に何をくれるんだ？」

フィーは迷った。嫌いな相手である。しかし、彼女は美しいものが好きだ。人間も同じ。ヴィーの外見に罪はなく、その存在に罪が

あるのであつて、成程彼は綺麗な人間だつた。彼が王と聞いた誰も  
がそれを否定できないだろう。真つ直ぐこちらを射抜く青玉の瞳。  
絹で結われた絹糸より艶やかに流れる黒髪。細く形のいい鼻梁、彫  
りの深い顔立ち。薄い唇は意志の強さをあらわすように一文字に結  
ばれている。美しいものはそのままでも美しい。けれど細工師の彼  
女としてはそれを如何に彩るかに胸を躍らせる。嫌いな人間だが美  
しい人間だ。であるからにはそれを飾るための「仕事」は真剣にし  
よう。

「希望があれば何うよ、あなたの求める細工を新しく作ろう。あい  
にく作りおきのものはあなたに合いそうなものがない」

フィーの言葉にロイがピクリと眉を動かした。彼女は気の向くま  
まに作るのが好きで、滅多に自ら進んで特定の人に合わせて作るこ  
とはしない。勿論、頼まれて誰かに合わせて作るときもあるがいや  
いやながらといった感じた。彼女流に言うなら、出来たものが勝手  
に似合う人間を引き寄せる。その通り、不思議と彼女の作ったもの  
は見合う人間に買われていった。しかし時に創作意欲を沸かせる人  
間に出会うことがあるらしい。そんな時彼女は楽しそうだ。それが、  
この男、とは。

グイーはと見ると、驚いた顔をしている。そんな彼女のことをあ  
る程度聞いていたのだろうか。

「しかし」

「まあ、そうすると時間かかるし、嫌なら適当にあるもの見繕つて  
持つて行ってくれないけど」

早口にフィーは遮った。なにやら残念そうだ。見るからにしゅん  
としている。

「いや。…光荣だ、頼むよ」

そんなフィーを見て王は柔らかく笑ってそう言った。ああ、やはり彼は彼女の気性を知っていたらしい。フィーはたちまちに嬉しそうな顔をした。とび色の目が踊るような朝の光を映して輝いているのを王は眩しそうに見つめると、ぽつりと呟いた。

「いくつかお前の作ったものを見せてもらえるか？」

「別にいいがやらんぞ？」

フィーは怪訝な顔をした。

「分かっている。見るだけでいい」

「本当？」

「どうして疑う」

「そうですねえ、フィーの細工は多分、ヴィーのような人なら見たら欲しくなりますよ」

ロイの言葉に王は不可解な顔をしている。

「あなたは見合う、というか従えてしまうでしょうからね、彼女の作品といえど。すこし、羨ましいですね」

「？ロイも見合うものが多いぞ」

フィーはそう言って笑った。間違いなくロイも綺麗だ。銀糸の髪、薄い水色の瞳。

「ありがとう」

ふっと笑う彼を見て、変なロイ、とフィーは思った。

### 3・休日

「あら、フィー、久しぶり」

「レオナ、あんた店番サボりすぎだ。あら、じゃない、あらじゃ」

私は溜息をついた。工房にヴィーと私が籠っている間、小さな販売所にいるべき売り子のこの女性は休み時間を多くとる悪癖があった。

「あいつかわらず率直ね。そんなだと、ちょっとかっこいいくらい  
のあんたじゃ女の子にもてないわよ」

「放つとけ」

「ロイさんを見習いなさいよ、あの優しさを！」

「あれは放任とも言っな」

「負け惜しみね」

「なにがだ」

何かとレオナは私に突っかかってくる。今日も、だ。ひらひら追  
い払う仕草をすると憤慨しながら付いてきたが工房の方の扉をぱた  
りと閉じてやり過ごした。こちらを呪うような声が聞こえてきたが  
知ったことか。やれやれだ。

工房にはロイと私以外にもレオナのように何人か職人や店子がい  
るが、私の性別を知らないものは多い。もし知ったら。そう考えた  
とき軽蔑されると嫌だな、と思うのだ。気のいい人たちがとても多  
いし、彼らは私を受け入れてくれるだろうと思うけれど、でも。騙  
していることへの罪悪感と信じきれない自分の醜さと。ずいぶん前  
に男として振舞うことを決めて以来、それなりに葛藤はあった。い  
まさら恥ずかしいのもある。

工房を見回す。今はがらんとしている。今日は、細工師にとって  
休みの日。私が細工をするのは趣味もあるからこうして休みでもこ

ここにいるし、ただでさえ少ない客を逃さないため店は開いているが、レオナとロイと私しかない。

…女としては膨らみに欠けた細い細い体、とがった顎、高めな背、低めな声をしている自分を思う。さらに今は短い髪をとまってなおさら、女と間違われることはない。服に拘りは少なく、今も白い綿のシャツに麻のズボンというシンプルないでたちだ。そして首には細工師紋。大抵の女性にはないだろう、それははっきりとした刺青である。そのデザインは自分でし、オールマイティーなロイが入れてくれたもの。この国の神であり、シンボルでもある竜のモチーフで一見それとは分らないところも含めてお気に入りだ。この刺青を見ると、時々いるあの王のように変に鋭い人間に出くわしても、男だと納得してくれる。便利だ。このままでもいいか、と思う。生涯、男を突き通すなら。特に女としていきたいと思わない。私には、細工がある。扉にもたれてぼんやりしていた。

…頭の中を様々なイメージがよぎる。一人きりだった自分、初めて道端で拾った石に触れた感動、誰にも教わらずに手が勝手に動くようにして作った細工を見て驚いた師匠の顔、楽しい修行、ロイとの出会い、溶け落ちる金属、花、こぼれる果実、白い部屋、握り締めた手の冷たさ、はらりとおちた髪、私の細工を見て言葉を失ったあの澄み切った深い青い瞳…

店のほうから、客がやってきたのか楽しげな声が響く。高くかわいらしい声、丸みを帯びた小さな体。レオナはいいな、と本当はちよつぷり思った。柑橘の香をまとわせて、いつも快活で。そういう人を深く知らずに羨む自分の馬鹿らしさを知っていてもうらやましい。

「ん？ファイ？」

「ああ、ロイか」

店から入る入り口とは逆にある裏口からいつの間にかやら入っていたらしい。ロイがすぐ目の前にいて驚いた。



「どうしたの、ぼんやりして。熱でもある？」

その冷たい大きな手が伸びて額に触れた。ひんやりと心地よくて目を閉じる。

「熱は無いみたいだけど？」

「なんだか人生について考えちゃって」

そう言うと、彼は黙って手をそっとはずした。

「…フィーが。人生を」

なんだ、その、拙くも雛が飛ばうと試みたのを見た親鳥のような目は。

「なあロイ、あんた年2つしか変わらないんだからさ、その目は止めてくれ」

「え、どんな目してた？」

自覚がない。怖い。

「まあ少し驚いただけだよ。ともかくお茶入れてあげようか」

ロイのお茶は好きだ。何か薬でも入っているのではないかと疑いなくなるくらい落ち着く。趣味がハーブを育てることと菓子作りというのはどうだろう。素敵ではある。しかし女とよく間違われるその綺麗さと穏やかさをやっぱり分けて欲しい。

「美味しい？」

「とても」

しみじみと彼の入れてきてくれたお茶を飲んで呟く。

「ありがとう。…ねえ、フィー」

「なんだ」

「どう、悩んでたのかわからないけど、話聞くくらいしか出来ないけど。何言っても聞くし、それで僕とフィーの間が変わることはないから」

ロイはいつでも温かい。低く心地よい声をぼんやり聞いた。

「うん。…うん」

彼だって私がどんなことを思い悩むか想像は付くのだ。けれどそれを分かっている、といわないところが彼のいいところだ。なんだか

別にいろんなことがどうでも良くなった。

「こうやってお茶入れてくれるだけでも十分。なんか、大丈夫な気分になる」

「そう?」

「そ」

ざあああ、と音がする。通り雨が、降ってきたようだ。

「この間の」

「ん?」

「…いや、なんでもないよ」

「言ってくれ、気持ち悪い」

「ああ。いや、王への細工は出来た?」

「なんだ、それが。今考え中だよ」

「珍しい。いつもならばぱっと作っちゃうのに」

「何でかな。手が動かなくなつて。イメージなら湧き出てくるんだけど、なんか1つに絞れない。そもそも何にするかな。首飾り以外なら、つて言つてたから腕輪にするかアンクレットにするか。あ、鼻輪とか作つたりしたら面白いかな。無理やり付けさせたら笑えるだろうな」

「その想像はさせないで…」

あの顔に鼻輪。たちの悪い冗談だ。それでまじめな顔をして謁見とか。楽しそうだけれど、この国の品位が疑われてしまう。

「ま、まじめに言えば耳飾り、かな。王族の衣装って袖長いのが多いから、腕輪はちょっと。指はサイズ測るのが面倒だし」

「どんなのにする予定?」

「ううん。銀を使うのは決定だけど嵌める石と形が決まらなくって冠の金にあえて合わない色にするのは嫌味だ。実際彼には銀が似合うと思うからそうしようと考えたのだが。」

「いらいらしてる?」

「いや、考えるのは楽しい。まあ、生きてる間にできればいいからの気長さでやっていいと 言っていたから、別の仕事の合間にや

「ってみるさ」

「今日もちよっとデザインを籠りつきりで考えようかと思っていたが。」

「そつ。…ところで」

「ロイの目が光るのを見てあきらめることにした。」

「なにか」

「ちよつとある貴族屋敷に注文を聞きに行つて欲しいな、なんて  
げ。それはちよつと。」

「面倒だし、や」

「やだと言いたかった。しかしロイは私の言葉を見事に遮る。」

「雇い主は誰でしょう？」

「もちろんよろこんですすんでやらせていただきまするいさま  
我ながら棒読みだ。」

「…何で休日」

「住み込みの代金滞納があつたつけ」

「何・の・話・か・な」

「ぎぎぎぎと首をそらして目をそらした。」

「はあ。君が払つというから貰つてるだけで、僕は別に構わないけど。あれだけ給料あるんだから、気に入った石があると糸目つけずにお金使うの止めればいいと思う」

「ごてごて飾り付けるより、見るだけなんだ、いい趣味だろ」

「その趣味が分からない」

「好きなときに好きな宝石が手元にあつて好きなだけ眺められる贅  
沢は捨てられない。この命に代えても」

「宝石集めは私の、唯一と言つていい妄執だ、分かっている。だから止めないで欲しい。大体、長期の休みのときは自分で掘り出しに言つてお金は使わないように努力しているのに。なぜ、あれだけの稼ぎが幻のように消えて言つてしまふのか不思議だ。」

「なんか、宝石を一人見つめるフィーの目って怖いんだよね…どっか行っちゃいそうぞ」

そんなこと、ない、とも言い切れないかな。めくるめく宝石の世界に取り込まれてるから。原石のまま加工したくない美しい石たちのことを思うと自然と頬が緩む。

「幸せそうだね…。ああ、そうだ、もし行ってくれるなら休日手当てで僕がこの間偶然買ったアレクサンドライトの上物をあげる」

「ほんとに!?!」

「ちゃんと仕事できたら…待って、どこに行くか分からないのに出て行くのは止めて」

思わず体が先に動き出していた。

「ごめん。で、どこに行けばいい?」

「ヒューモンド家に行つて。あと、着替えて。」

「はいよ」

ヒューモンド家はお得意さんだ。あそこの令嬢は気の置けない人で、まあ貴族然としたところは多少あるけど許せる程度。好きなほうだ。ならばとつとと向かおう。

私は雨のせいで薄暗い部屋で、去り際のロイの顔がさえない表情だったことに気がつかなかった。

「邪魔してごめん、フィー」

彼の呟きも雨音がかき消してしまった。

#### 4・お屋敷でのお仕事

「エルファンド工房のものですが。ローズお嬢様はいらっしゃいますでしょうか」

「少々お待ちくださいませ…」

「はい。お願いします」

敬語を話すのは疲れる。得意ではない。屋敷の中へと向かった執事を見送り、私はこっそり溜息を呑みこんだ。

公爵の屋敷の中ともなれば、うかうか気を抜くことは許されないからだ。

辺りを見回してみると、ここは本当にでかい屋敷だな、と思う。

家の工房だって結構でかい。でも、比べるのが馬鹿馬鹿しくなるほどにここは広いし、天井も無駄に高い。私の部屋など、ここに暮らす公爵一家には犬小屋のように思われるのではないだろうか。

通された先の商人用の待合室で、南方のロヴェルナの湖畔を描いた匂いやかな油絵を眺めてお金持ちで生きるってどんなだろうかと私は夢想してしまっただけで、それは目の前の絵と同じで現実味が無かった。それこそものすごい額のお金は、石を扱うものとして見慣れたものだけれど、私の場合さっぱり生活に結びつかない。眺める宝石があつて、食うに困らなくて、ロイのお茶とお菓子があればいい。…よくよく考えたらロイもお金はあるはずなのに、私たちの暮らす家は質素なものだ。彼は一体何につき込んでいるのだろう。

「お待たせいたしました。お会いになるそうです、どうぞ付いていらしてください」

「ありがとうございます」

「こちらです」

この部屋から、ローズお嬢様の部屋までの道のりは覚えているが、この執事は毎回丁寧に案内してくれる。ロマンスグレーの髪といい、縁なし眼鏡といい、非常に格好いい老執事だ。

広い廊下を渡って、階段を上った奥の部屋にたどり着くと、彼はお辞儀して退室していった。彼のその動きは実に滑らかだ。プロだ。

「フイー!!!!!!」

退出する執事に見とれていると抱きついてくる塊があった。

「…お久しぶりです」

結構痛かったが何も言えないのが平民の悲しい性である。

「本当にお久しぶりよ。また痩せてしまったんじゃないかって？ ちゃんと食べてるの？」

金の巻き毛はくるくると肩に落ち、ほっぺただけ赤い真つ白な丸い顔をふわりと包む。やさしい緑の目が心配げにゆれて。ああ。

砂糖菓子よりもリスのよう。ローズお嬢様はバラと言ってもまだつぼみのかわいらしさで溢れている。自然と微笑が浮かぶ。

「ええちゃんと食べてますよ、私の場合、どうやら横ではなく身長に栄養がいつてしまうようなのです」

「まあ。私と変わって欲しい」

「ローズお嬢様はそのままに愛らしいですよ」

そう言う彼女が照れて笑ったが、ふと何かに気づいたように眉を寄せた。

「フイー、髪が」

そう呟いたローズ嬢の指が伸びてきて、残ばらな私の髪に痛ましげに触れる。

「ええ、ちよつと邪魔になってきたので切ってしまいました」

「そう…長いあなたの髪がいじりがあって、私はす…うん、短いのもいいんじゃない？ 素敵よ」

ちよつと睨むと彼女は慌てて言葉を変えた。愛嬌のある人である。

「それで、今日はいかなるご注文がおりですか」

「ああ、今度の舞踏会のためのネックレスをお願いしたくって」  
「舞踏会？」

「あら、ご存知ないのかしら」

「残念ながら。お恥ずかしい」

細工師としてそういう情報には耳ざといのだが、最近いろいろあって疲れていたせいか聞き逃してしまっていたらしい。

「そんなことはないけれど、珍しいこと。ええとね、その舞踏会は、今度即位なさったかのヴェイエア国王陛下がこの国の貴族達と顔合わせの意味も含めて開催なさるらしいの。かなり大規模なものになるみたいだから、あなたも忙しくなるんじゃないかって？」

「…そうですね」  
稼ぎ時がやってくるわけだ。こればかりは素直に王様に感謝しよう。

「やっぱり。それだから、今あなたが捕まってよかったわ。もう少ししたら注文が一杯になってしまつてしまうでしょう？　いくら仕事の速いあなたといえどゆっくりお願いをすることは出来なかつたでしょうし」

「そうですね。私もローズお嬢様への首飾りが丁寧に作れそうで嬉しいです」

「あら。お上手ですこと」

「本音ですよ」

「そうかしら」

「ええ」

貴族もいろいろだが、彼女のために細工を作るのは、比較的楽しい。

「当日のご衣装などはお決まりで？」

「ええ。マリー、持ってきて頂戴」

「はい！」

全体のバランスは大切だ。彼女は衣装を先に決めるタイプだが、人によつては装飾品から始めるものもある。それぞれにあわせて、仕事をする。

「こちらになります！」

「うわあ」

白いシンプルなデザインの、けれどドレープがたっぷりとりられた絹のドレス。よくみると分かる、繊細な百合の刺繍が職人技を思わせた。

「いいですね。これを身に付けて踊るあなたの姿が目浮かぶようだ。きつとお似合いになるでしょうね」

「ふふふ。そうですね？」

白か…。ミルクホワイトよりも雪の白だ。同じくらい白い肌をした彼女だから似合うだろう。私なら…無理だな。想像するまでもない。

「そうですね、では首飾りも上品なものがいい。小ぶりのエメラルドをいくつか使いたしましょう。耳には…そうだな、エメラルドか、真珠か。どちらでもいいでしょう。どちらになさいますか」

「そうね、では、真珠でお願いできる？実は丁度この間、16の祝いに父にいただいたものがあるの。あなたの意見を聞いて、もし真珠を使うつもりがなさそうだったら諦めようと思っていたのだけれど」

「素晴らしい。…見せていただけますか」

大きさに少し危惧があったが、大丈夫だった。これなら。



「いいですね…ではお預かりします。デザインに何かご注文がありますか」

その答えを、彼女はいつもと同じように言ってみせた。

「私はあなたを信じきっているのよ、任せるわ」

「光栄です」

正直とても嬉しい。こういう言葉をもらつと、この仕事をやっていて良かったと思う。細かい難しい注文をつけられて、やり直しながらそれをこなすのも面白いけれど。

「ではフイー、よろしくお願いしますね」

「承りました」

これで、受注は終了だ。予算を問うまでもない。なぜなら彼女はこの国有数の公爵家の娘。金払いのいい客は素晴らしい。

気の赴くままに材料を使える予定を1つ手に入れて、私はほくほくと屋敷を出た。外に出ると、あんなに激しく降っていた雨は止んでいた。

## 5・主、再び

公爵家に行った帰りに、私は紅茶屋に寄ることにした。大口の注文を取り付けた祝いにロイにお土産を買うつもりで。

「フイー？」

私を呼ぶ声に振り向くと、そこには見知った顔がある。

「え！？ なぜ、おう…むぐ！？」

叫ぼうとした瞬間に相手に口をふさがれた。

風景に溶け込んで、というか気配を消して王様がいた。彼はまたもやフードを被っている。

「ヴイー、でいい」

「ぐ…」

息が詰まった。触れられる不快さと息苦しさに、仕方なく頷いてみせる。するとようやく彼の大きな手が離れていって、私は咽こんだ。

はては、私を殺す気が、貴様。

「げほ… ヴイー、あんた何で城下町にいるんだ、今一番忙しいときじゃないのか？」

「さぼりだ」

「おい」

「冗談。休憩だ」

「……」

似たようなものじゃないか。睨みつける私に、お忍びの王様は快活に笑ってみせた。

「まさかこんなところでフィーに鉢合わせるとは思わなかった。休日だから、ぶらぶらしていればひょっとしてどこか出会うかもしれないとは思っていたが。嬉しい偶然もあるものだ」

このナンパ男はよほどの暇人なんだろうか。

「俺は全くあんたと出くわす予定は無かったがな。遺憾の念に堪えない。というかあんた働けよ」

「あいにく城の部下が優秀で仕事は少ない。それにしても、やはり『俺』と称するか。まあ外だからな」

「…どう自分を称そうが、俺の勝手だ。それにしても気楽な家業だこつて」

「そつじやなきや、やってられない」

「王様はそう言ったが、よく見ると前あったときより多少やつれていた。だから、本当にここにいるのは彼なりの息抜きなのかもしれない。そう思っただけ見直した。まあ、一応竜の血に選ばれた人間だ。優秀でないはずがないだろう。是非に過労死するくらい頑張ってくれ、そしたら王冠は私が貰ってやる。そんなことを考えていると、王様は首を傾げた。」

「お前はどつしてここに？」

「ああ、こつちは仕事の帰りだ。」

「ちょっとロイに土産を買おうと思っただけ。あいつ紅茶に目がないからな、特にここのは高いけど美味しい。自分でハーブは作っても茶葉は作らないあいつのお気に入りのお店なんだよ。だからロイと大口注文の喜びを分かち合おうかと」

「へえ」

「ここにいるってことは、ヴィーも紅茶が好きなのか？」

「ああ、まあな。俺は特にこだわりはないが、紅茶は好きだ。どんな銘柄でも飲むな」

無類の、というやつだろうか。まあ、王様ともなればロイヤルテイー飲み放題、まずいの当たることもないだろう。ふうん、と呟いて、私は目当ての茶葉を探す。

……あつた。この店一番人気のダージリンは幸運なことに売り切れていなかった。うきうきとそれを手に取る。ロイの驚きと喜びが目に浮かぶようだ。彼の薄い青い目が蕩ける様は見ごたえがある。アクアマリンのようで思わず目玉をくり抜きたくなる。一度心からそう言つと、褒めているのに、大層ロイが複雑な顔をしたのを思い出して、笑ってしまう。

「おまえ」

うっかり隣存在を失念していた。声をかけられて、私は表情を消す。やはりこの王様は気配を薄めるのに随分長けているらしい。

「うん？」

しかしまだいるとは一体何の用だろう。ああ、口封じの代償のことな。

「注文を受けた品ならまだできていないぞ。悪いな」

「……それはまあ生きてる間にくれば、それでいい」

「じゃああなたにか」

「いや、ここまで存在を忘れ去られたのが久しぶりでちょっと驚いたものでな」

その言葉に顔を向けて眺めやると、王様はどうやら面白くなさそうな顔をしている。：膨れ面というのに私は年齢制限をかけたんだがどうだろう。王様はとっくに成人していたと思っただが。

「ああ、ごめん。あんた気配消すの上手いからさ」

「というか私はあんまりあんたが好きじゃあないし仕方ない。」

「何を考えていたんだ？ずいぶん楽しげだったが」

「ああ、ロイのこと考えてたんだよ。あいつの目、本当にアクアマリンみたいで綺麗だからな」

「まあ確かにな。かなりの美人だが、残念ながらあれは男だな」

「流石だな……」

「そうか？ 間違いようがないだろう」

「こともなげに王様はそういった。私の性別を見破っただけのことはある。ロイを女と違って求婚してきた数多の男達とは一味違うよ。うだ。ロイは線が細かいし、私より色白だし、綺麗だ。王様の精悍な美しさとは違う、繊細な美しさだと思う。背は高いけれど。低い頃は、今よりさらなる頻度で女と間違われて泣いていた。」

「それ聞くと喜ぶよ、あいつに言ってやれ。『お前は間違いなく男だ』ってさ」

「きつと喜ぶだろう。」

「…お前は喜ばないか？」

「なにが」

「適当に話しながらもさつさと会計を済ませて私は外に出た。」

「王様の手にも高級茶葉の入った袋が揺れている。その袋と質素な服で庶民的、とは言いがたいが一般人に見えなくもない。どこぞの貴族の係累とは思われるだろうけど。」

「俺はお前が女にしか見えない。一番初めに会ったときから」

「んなつ……」

「王様の空いたほうの手でいきなり顎をとられて、私は慄いた。フーのせいで陰になっても相変わらず秀麗な顔が近づく。公道の店先で何をする気だ、この人。」

「離せ。俺まで世間に変態扱いされる謂れはない」

どう見ても男同士のじゃれあいだ。女に見られたいとは思わないし同性愛に理解はあるが、それでも尚止めてほしい。思い切り睨んだのに甘く笑う男が理解できない。ああ。私はいやよいやも好きのうちは大抵妄想だと思っている、あれはセクハラが好きな親父のためだけに都合のいい押し文句だ。

「お前には、周りに本来の性として見られることへの望みはないのか？ 女性として愛され、あるいは恋をしたいという希望は？」  
「ないね」

不愉快な男の手を、強く打って払う。  
「少なくとも、あんたからそう扱われるのは苦痛でしかないよ」

オマエガオウニナツタセイデ

「あんたは嫌いだ」  
「そうか？」

撥ね退けられたその手が赤くなっているのを見ても、何の罪悪感もわかない。私の手は細工を作るために強いから、打ちようによっては相手が固い手をしていても血が流れる。彼の手にも血が滲んだ。そうだ、もつと傷つけばいい。

けれど、相手も私同様、何も感じていないようにその血を舐めて微笑んだ。笑っているのに、ぞつとする。なにか、底が分からない生き物だと思った。

「俺はフィーが気に入った」

ふつと空気を和らげて、王はにっこり笑った。いや、にんまり。いや、にやり、だ。

「はい？」

「逃げ足が速いところ、俺の手に傷を作るほどの強さ、俺を嫌って

いるところ、その手が誰をも惑わす細工を手がけるところ、自身の欲求と感情に正直なところ、強い力のある目」

… あんたは被虐嗜好者か？

「フイー。お前が姿を消した後、気になって探した。見つけて、その手になる細工を見たときに惹かれた。こんなものを人の手が創れるなんて、つてな。あれから何度もお前のところに行こうとしたけど止められたよ」

「そりゃ、止めてくれた人に感謝しなきゃな、俺はそもそも顔すら合わせたくない」

あんたは私の才に惚れたんだろう？

金が石をくれるなら、そして注文は代理人を立てるなら、喜んで望むものを提供してやる。私じゃなくて細工だが。

「つれないことだ。じゃあ、今から家まで送ると言っても断るか」  
「勿論」

「ならば仕方ないな。今日は退散しよう」  
「結構。さらばだ」

ああ、はやく別れようじゃないか。正直ここから一刻も早く離れたい。紅茶店の入り口からは少しずれたところにそろそろと移動したものの、周りの視線が痛い。これでようやく別れられるとほっとして、私は急いで身を翻して歩き出そうとした。

その時、ぎっ、と腕をつかまれる。振り返って、殺意をこめて睨みつけると奴はそれに嬉しそうに笑った。

「また、会いに行く」

そう言って、彼は強引にとった私の手の指先に口付けた。

…不覚！思わず繰り出したこちらの蹴りをさらりとかわし、嵐は去った。



## 6・帰宅

フィーは工房兼我が家へと帰ってすぐ、手を洗いに行った。そのことはいつも通りの行動だったが、彼女はずいぶん長い時間流水に手をひたしてぼうつとしていた。それを食堂からロイは眺めていた。

これと同じ光景を数週間前にも見た。

あれは、彼女が王冠を巡って王と問答した日の真夜中。

これと同じ光景を数年前にも見た。

その時の彼女は血だらけで、その行為の理由はよく知っていたけれど、今と数週間前は何が原因か分からない。

おそらくは、あの王が何かやらかしたのだろう。気に入らない。

「ロイ兄ちゃん、フィーどうしたんだろう」

小さい弟が心配げに彼女を見守っている。それを見て、こわばった自分の顔が解けた。ああ、これが多分純粹で正しい姿なのに、僕は。

「…シライ、そっとしておいてあげよう」

「でも」

「相変わらずロイさん優しいですねー」

明るい声が響いた。今日はレオナがいる。彼女が仕事から帰ろうとする折に夕食に誘ったから。よくあることだ。基本は、フィーとシライと僕の三人だが、工房の職人やら店子が一緒に食べて行ったり、泊まっていたりすることも多いのでこの家は賑やかだ。

と、レオナがすたすたフィーの元へ行った。

「フィー！」

ぼんやりしちゃって一体どうしたっていうわけ？ 怪我したの？ 相変わらずドジねえ、よくあることじゃない。怪我したんならい

つまでも水につけてたら治りはしないんだから、さっさとこっちに  
来る！ あら、怪我じゃないって？ じゃあ、何項垂れてんのよ、  
元気出しなさいよ、ほら、もうご飯よ！ みんな待ってるわよ」

止めるまもなく、彼女はフィーのところに行った。実のところ彼  
女がフィーを好きらしいというのは、みなよく分かっている。知ら  
ないのは他人のそうした感情に疎いフィーだけ。

とは言っても直情径行な彼女を快くは思っているらしいが、邪険  
に扱うのは今のようなきも恐れず彼女が踏み込んでいくからだろ  
う。正直レオナのそんなところが羨ましくもある。

「…レオナか。くたばれ」

前言撤回。フィーの声は地を這うようだった。

「ひ、酷すぎる。悲しいことに慣れてるけどね！」

「フィー、女の子にそれはちょっと言い過ぎ」

咎めると、フィーの虚ろな目はこちらに向いた。

「ああ、ロイ。その目玉を今すぐにくれるなら俺の心は癒される」

「ロイ兄ちゃん、とうとう諦めるの…？」

「諦めないから」

「えー」

「えー、じゃない。フィー。ほら、もう手は十分綺麗だよ？」

彼女の手を、濡れるのもかまわず掴むと抵抗された。

「いやだ。まだ穢れているんだ」

もう、ほんとに何があつたんだか。

「大丈夫だから」

しっかりとその手をタオルで包み込むと、しびしびといった様子  
で彼女はそれを受けた。

「フィーってロイには従うよね。これは付き合いの長さなの？」  
レオナに問われ、緩く首を振る。それは少し違う。

「フィー。アレクサンドライトは部屋に置いといたよ」

「本当に！？ やった！ ちょっと行ってくる」

途端にフィーは、落ち込みを消し去って部屋へ飛んでいった。

「うん、やっぱり金づきあいの長さかな」

「利害関係、か。それならレオナ姉ちゃんも頑張ればきつと」

「そうね、でも悲しいわね」

レオナとシライが呟いた。否定は出来ないので黙っていた。

それからしばらくして戻ってきた彼女は、いつも通りだった。笑顔で宝石の礼を言っ、僕にお土産の茶葉をくれて、今日うまく取れた契約のことを喜んでいた。

でも、結局何があったか告げなかった。それがなんだか腑に落ちなかった。

## 7・冠の謎と王の眩き

王冠は純金のみで出来ている。それを目の前に腕を組んで考え込んでいるとふと思いついたことがあった。

「なあ」

「なんですか、王。喋る暇があるなら仕事してください」

俺に応じる補佐は実に素っ気無かった。

この前、王に付く補佐といったら、優秀なだけでなく豊満な美女がいいというところの補佐は笑って、あなたアホですか、と言った。この補佐は文句なく優秀だが、男で、しかも仕事人間と来ている。最悪な組み合わせだ。

そんなわけでこいつの命令を聞く気はない。俺は補佐の言葉を無視して続けた。

「この冠どう思う」

「シンプルなデザインですね」

「当たらずとも遠からずだ」

「なんですか、なにか他に言っただけのことでも？」

「シンプルすぎるんだ。何故、石が埋まってないのだろうな？」

「はあ？」

「輝きが足りないじゃないか」

「十分きらきらしていますよ。そんなごてごて飾り物してたら邪魔です」

「冗談だよ。いや、これでは力が半減するように思われて、な。お前黄金の力ってなんだと思う」

「…伝導、ですか」

ほう。分かってるじゃないか。だから石がもし付いていたら王の力はより大きなものになったろうと思うのだが。

「その通り。純粹に竜神の力の受け皿となるためといえば、まあ、それまでかもしれないが」

「それでいいじゃないですか」

「うーん」

細い糸を編んだかのようなつくり。そこには石を当てはめられそうなら5つの穴がある。その隙間を、デザインと見るか、欠損と見るか。

「さて。どうしようかな」

「何かひっかかっているなら私じゃなく神官長へどうぞ」

「狸が正直に答えるかな」

「聞き方によるんじゃないですか。分かりづらくてまどろっこしいことこの上ない深遠なヒントくらい、くれるかもしれませんよ」

「そのために努力する気は起きないな。……他に聞いてみたい者ならいるが、あれは答えてくれるかな」

会う口実にはなるか。

「王」

「なんだ」

「顔がにやけて気持ち悪いです。あと、判子曲がってます。書類を私が見た後だと言って一顧だにせず機械的に押していくのは止めてください」

「信頼の表れだ」

「ちつとも嬉しくありません。働け」

「働いているだろう、馬車馬のごとく」

「厩舎に行つて彼らの爪の垢をせんで飲んでをお勧めします」

「不味そうだな」

「あなたにはいい薬でしょう。大体、昼間はどこ行ってたんですか」  
「慈善事業？」

「どこが。たんなる散歩でしょうが。確かに私も紅茶は好きですが、いたずらに城下に行くのはよしてください。あなたがいくら強いとはいえ、街中で正体がばれたらあなたの愛する民に押しつぶされて、うっかり死ぬかもしれませんよ。いい気味ですけど」

「生き汚いから心配するな」

そう答えると、はあ、と溜息をつかれた。急に真面目な顔を、補佐はこちらに向けた。

「闇を払って。あなたは大体何を望んだんですか。王位じゃなかったんですか？」

「なんだろうな」

「まじめな問いにはまじめに答えてくださいよ」

「まあ、とっかかりは楽しかったことだな」

「戦うのが？」

「そう。別に最初は大層なことは考えてたわけじゃない。いつのまにか、ここにいたんだ」

「へえ、大物ですね」

呆れた口調だ。戦闘狂と暗に罵られている気がする。

「そうか？ うん、だがまあ、平和は嫌いじゃない。それを望んで戦ってきたのも事実だ。夜の酒場と色町に人が集えるのはいいことだし」

「…それがあなたにとっての平和というなら羨ましいくらい暢気なことですね」

「普通だろ。お前ももう少し世俗にまみれたらどうだ。かつたい石頭しやがって。俺はいつもお前のぶつけてくるカドが痛い」

「良識に痛む良心があなたに幸運にも少しはお有りのようで、よか

「つたですよ」

「なんか遠まわしに馬鹿にしていないか」

「もつと直截的に申し上げた方がよかったですか」

「いい。なんだかもう疲れた」

「強壮薬でも持ってきましようか」

「狸の薬は例外なく辛いからいい」

例の爺お手製だ。薬なのだから、苦いなら分かるのだがなぜか奴が寄越すのは口と喉が火傷しそうなくらい辛いのがいただけない。嫌がらせとしか思えない。

ああ、はやく仕事が終わらないものか。

「あなた次第です」

「心を読むな」

「顔色を読んだんですよ、失敬な」

「お前はたまに何も言わない俺と会話ができてることがあって怖いんだよ」

「そうですか？

……ああ、王、1カ月後に舞踏会がありますよね、覚えてますか？」

「なあ、お前は俺の記憶力がないものだと思ってるよな？」

「まあ極度の健忘症とは思っていませんが」

「…覚えてるよ、何かあったのか」

「出席が確定した招待客の一覧を作っておいたので、お目通しください。それぞれの客の詳細はすべて暗記しておくこと」

「無理」

「お願いしますね、それでは私はもう休みますので失礼いたします」

「だから無理だって」

「…なんとかしろよ、鳥頭」

優秀な部下は暴言を吐いて立ち去った。

出来ないことはない。だがしかし、招待客が何百人いるか分かっているのだろうか。面倒なことこの上ない。

舞踏会か。

呟いて、天井をぼんやりと眺める。

ガキのころは、そんなものの存在すら知らなかったのにな。それなのに無邪気に、「王様になりたい」と言っていた自分。

俺は、何を求めて王になったのか。親友で元同僚である補佐の問いへの答えは、半分は本気だ。しかし、そもそもは食いつばぐれなために、しがない飲み屋の息子は夜を占領した闇に立ち向かうことにしたのだと言ったら、呆れられるだろうか。

…そんなことをつらつらと考えていると、なんだか滑稽だと思った。いろいろなことが。

親父は今頃、再び人の手に帰ってきた自由な夜に浮かれて、酒盛りをしているのだろう。一度城に招いたが、結局来なかった。「そんな、どん詰まりに息が詰まるところはごめんだ」と、そう言っても、よくやったな、さすが俺の息子だ、と言われたときは少し嬉しかった。

「がんばれよ」、とも言っていたか。

……とりあえず仕事をしよう。そう思い、口うるさい補佐が置いていったリストを持ち上げた。ふと、その時手の甲に夕方に付けられた赤い傷が目に入った。彼女のしていた指輪に傷付けられた跡だ。もう血は止まっている其処を、丹念に指でなぞってみる。一瞬目に止まった彼女の指輪は、単純なつくりに見えるのに実はよく見るとひどく凝っていて、美しかった。きっと彼女の作品なのだろう。俺の顔は今緩んでいるだろうか。



憎悪に燃える琥珀の目を思い出す。躊躇無く切られた短い薄茶の髪が夕日に燃えてまるで鬘のようだった。彼女の憎悪は“あのひと”を思い出させて愉快だ。もういないあのひと。初めて会ったとき、その感情を隠そうとして隠し切れない、少年のような彼女に興味がわいた。何が彼女にあのような憎悪を起こさせるのか気になって。そうでなければ、戴冠を邪魔する人間などさつさと追い払っていただろう。

そうだ。

彼らを舞踏会に呼ぼうか？　すると会いに行く手間が省ける。

…楽しみになってきた。彼女は果たしてどんな格好で訪れるだろう。

断られない勝算があった。王は、くつりと笑った。

## 8・招待状

「ぶとうかい？」

その単語を聞いたとき、思わず同音の別の言葉が私の頭に浮かんだ。このロイがそれに招かれたって事は、つまり。

「戦うわけ？」

「言つと思った、踊るんだよお莫迦さん」

「ええ！？」

嵐はひとたび吹くだけじゃ気が済まなかったらしい。工房が戦場のように稼働している最中のお昼休みに、それはまた来襲した。みなお昼をばらばらに取っている今、ロイと私しか食堂にはいない。

「ああ、『舞踏会』。招かれるなんて凄じくない、えらくなつたね、ロイ。なあどんな衣装がいい？ 私選んでいい？ シライは？」

「フイー、他人事じゃないよ」

「なんで」

「君宛にも招待状は来ている。というか、多分僕に来た方がおまけなような気がする。」

あらゆる職の中からそれぞれ随一の才能のあるものとその雇い主が招かれるみたいで、細工は家の工房の君が選ばれたってわけ」

「げ。断ろうよ…」

精霊国随一の細工師と見なされたのは、正直とても嬉しい。しかしそんな晴れ舞台に立つと、男と偽る身としては危険ばかりが増す顔を見せる相手はこれでも最低限に絞っているのだ。戴冠式の時きだって、観衆には背を見せるように、死角に入るように立ち回っていた。それに舞踏会には、王がいる。会いたくない。

そんな私のことをロイは心配そうに見つめて、けれどこう言った。

「フィーの事情を考えると、断りたいところなんだけどね。でも、  
ばれる危険は増しても、これはチャンスなんだ。国内からしか客が  
いないならちよつと参加は迷うところだけど、今回、国外の賓客も  
招かれるっていうから。その意味するところは分かるね」

…成程。工房の名をさらに売り、うまく行けば他国の王室の御用  
達になれるチャンスというわけだ。断れば、おそらく次点の細工師  
の工房に声がかかり、そこが旨みを得ることになる。それは認める  
わけにはいかない。

「分かった。お金のためだな」

「ごめん。当日はばれないように僕も気を使うから」

弱っているロイの笑顔に私は弱い。平気だつて、と頼もしく頷い  
ておいた。しょうがない。それに第一、王様がわざわざ私に構う時  
間のはつきり言つて〇に等しいだろう。これは彼にとって、顔見せ  
であり顔合わせであり腹の探り合いであり、遊びに費やす時間はな  
い…はずだ。間違いなく。

「ねえ、フィー」

いろいろ考えて、自分を納得させていると、ロイの不安げな声  
がした。

「なんだ？」

「舞踏会で、踊れる？」

「ははっ、ご冗談を」

平民の祭りの踊りなら踊れなくもない。あくまで男性役のだけど。

「だよねえ」

「ロイは？」

「舞踏会までの期間で多分出来るようになるよ。まあ、付け焼刃に  
なるだろうけど」

ロイ、その器用さをどうか私に分けてください。

「フィーは……どうしようか」  
「練習、する暇があんまりないな」

現状、工房は殺人的に忙しい。ひっきりなしに来る注文は、細工師たちに食事と睡眠以外の時間を許さない。普段は気ままに好きな細工を作っているフィーも、例外ではない。ロイは言った。

「多分踊ることなんてないと思うんだけどさ。僕たちが踊りの輪に入る意味がないしね。どうやら、展示の周辺で宣伝したり説明したり実演したりが主な仕事らしいんだけど」

「じゃあいいんじゃないか？」

手が空きそうなロイはともかく実演で細工を作らされるなら私に暇はない。そうだ、ロイが踊るのは宣伝になるかもしれない。なにせ、この顔だし。

「ロイだけやれば？」

「だけどね」

相手がいないと練習し辛いのだと彼は言った。

確かに市井のものに本格的なダンスのお相手は願えない。ならば、相手はご令嬢であることが望ましい。そうなると、見目麗しいロイならば喜んで教えてくれる貴族令嬢も一杯いそうなのだけれど、練習時間が早朝と夜しかない。そんな時間に女性の時間を拘束すれば、下手すると彼の命に関わる場合もあるわけで。妥協して、踊りのセンスのある平民の女の子を選んだって同じことだ。

「そんなわけで、申し訳ないけれど、本当に悪いんだけど、フィーにダンスの相手になって欲しい。無理には言わないけど。駄目かい？」

と、私はロイに頼まれたのだった。あの弱った笑みで。水色の瞳

は潤み絶るような色を湛え、柳眉は悲しげに垂れ、桃色の唇はすまなさそうな弧を描く。そうされると断れないと知っているんじゃないかと疑いたい。くっ…

私は一生懸命彼から目をそらそうとしたが、結局、その抵抗は長く持たなかった。

どうしても、吸いつけられるように、宝石のような美しい瞳を見てしまう。そして、気付くと私は、「いいよ」と答えていたのだ。

かくして、ロイと私のダンス特訓の日々が幕を開けたのだった。

## 閑話 1

ダンス。舞踏。

それはどこかロマンティックな響きだ。

けれど、朝の光に溶けそうになった廃人寸前のボロ雑巾、つまり今の私には、その言葉が呪われたもののようにすら思えた。仕事時間を潰すわけにもいかず、仕事前の早朝、仕事が終わったあとの晩の2回、舞踏会に向けた踊りの練習をし始めて、もう一週間になる。その結果、踊りというのはひどく疲れるものだを知った。一方で仕事もばんばん入ってくるので、本当に休む暇がない。筋肉痛で痛む体をさすっていると、朝食の支度をしに訪れたシライに、ぽん、と肩を叩かれた。慰めてくれて嬉しい。しかしその顔が老人を労わる目つきに似ているのが多少気にかかるが。

「シライ、私は燃え尽きてしまいそうだ」

「おつかれさま。フィー、薬湯入れたから飲んで。筋肉痛にきくよ」

シライのはんなりした笑顔が眩しい。彼はロイより黒が少し濃くて銀より灰色の髪をしていて、瞳もそれと同色だ。けれど、ロイと兄弟であるのを示すのはその優しげな顔と穏やかな性格。ロイJr.などと工房の人たちにかかわれつつ、愛されている。年に似合わないくらい賢いところや、ロイより儲けに興味がないだけ純粋なところ、何より幼いとはいえ彼には料理の腕があるから。シライの手作りの夕飯をいただいでいく人は、大概リピーターになる。工房の職人や店子の人たちは勿論、懇意にしている商人やはては上客の貴族まで舌鼓を打たせるのだからすごい。私は料理はからきしだめだ。裁縫などは比較的得意だが、料理に関して、もう作るな、とあのロイにすら言われてしまえば、向いていないと嫌でも分かる。原因は、

彩を重視しすぎて味に頼着しないところにあるかもしれない。

温かい薬湯をありがたくいただきながらそんなことを考えていた。苦味すら、絶妙な味を織り成す風味のひとつとなって溶け込んでいて、やっぱりおいしかった。

「うまい。なあ、シライ、きっと将来はロイに似ていいお嫁さんになれるぞ」

「ロイ兄ちゃんに似るのはともかく、それはうれしくないよ、フィ」

困った顔をするシライはかわいい。男の子だなあ。

「…フィー、僕もシライも男だよ。フィーなら貰われてもいいけど」  
やってきたロイに冗談交じりに苦笑された。細身な彼だが、持久力は私よりもあるのか、疲れた様子は少し見られるものの体を痛めているという話は聞かない。私より年上な癖に。いや、私が若者らしくないのだろうか。

「じゃあ貰っちゃおうかな。でも…ああ、何故私は女なのかな」

はなはだ疑問だ。嫁よりは旦那になりたいと私は思う。女らしさの欠片もない私だが、巷の女性が一番男性に求めるといふ経済力な自信はある。

私と逆に女性らしいといえばレオナ。彼女の方が私同様に初心者とはいえ、踊りなどは得意だったかもしれない。そんな気がする。というか、レオナの阿呆。彼女のさぼり癖をこんなに怨んだことはかつてない。レオナがもし、遅寝早起き、毎日出勤の優秀な店子だったら、彼女こそロイの練習相手になっただろうに！ そうしたら私はいまだかつてないほど疲れたりしなかった…。

まあ、これが八つ当たりとは分かっていた。ロイと踊っていて、何故だかスムーズに動けない自分にいらだっていたのだ。

思わず溜息がでる。そんな私に、

「意外とフィーって不器用だよな、手先はあんな器用なのに」  
シライが不思議そうに言う。

「細工師は足使わないし」  
苦笑して私はそう答える。足など無くても、両手があれば生きていける。

「そうだね。天は二物を与え召さなかったか。フィーは体力があるほつだと思つてたけど、見事に筋肉痛になつちゃうし」  
「山登りとは使う筋肉が違うからな」

宝石を採るために時々自ら山には登るし、かなりきついことなる場合もあるが、その時はこんな酷いことにはならない。

ここ数日で分かった。私に踊れというのが間違っている。

ああ、だがそれにしたつて申し訳ない。

ロイの足にあざが出来ているだろうことを思うと。

「ごめんな。ロイの足踏んでばかりで、私本当に役立たずで」

謝ると、ロイは首を振つて微笑んだ。

「平気。無理通してるのはこっちの方だし。フィーはよくがんばつてるし、最初の頃よりステップは全然出来てるよ」

「そうか？」

「そうそう。舞踏会までに、フィーもきつと踊れるようになる」

「それを聞いて安心したよ」

私が踊れるようになってもしようがないが、ロイの相手役をしっかりと勤められるくらいには上達しないと足を引っ張ってしまう。

「フィー、ドレス着ておどらないの？」

シライが無邪気に聞いてきたが、私は首を振った。ドレス？ 何の拷問だ、それは。

想像しただけで顔が青くなるのが分かる。



「それは無理」

舞踏会なんて、あんな目立つ場で女とばれようものなら私は死ぬ。というよりあのひらひらを私が纏うって？それは社会的死だ、精神的死だ。そもそも仕事を奪われたら。

私には何も無い。

「フィー？　じゃあやっぱり男装なの？」

「ん？　ああ、ロイよりも女にモテそうなくらいに男前になってみせる」

「ほんとに！？　楽しみ！」

シライはわくわくしている。がしがしと手触りのいいその頭をかき回すように撫でると、ちょっと嫌がりながら嬉しそうだった。かわい。

ちなみに、ロイの見たところでは、フィーは実際踊りのセンスを持っている。リズム感と音感は結構いいし、覚えも早い。ただ、ちょっと足が不器用なだけだ。本人は全くダンスの才覚はないと思っているようだけれど。

それなのに何故上達に時間がかかるのかというと、彼女は、緊張してしまっているから。ロイと手をつなぐときに。今までには、無かったことだ。ぎこちないその動きが伝わってくるほどに、彼女がロイに対して緊張することなんてなかった。そんなフィーの緊張が、彼としては嬉しいけれど、苛立ってしまう。彼女がそんなことを意識するきっかけが、彼にあると思えないためだ。

王、ヴィーと呼んでくれと言っていたか。ずいぶん気さくな人だとロイは思った。きっと彼は、いい王になるとも。けれどあの人は、

彼女にどんな言葉を言って、彼女にどんな風に触れたのか。フィーと王の騒動についてロイは知っている。噂があつて、工房の職人の一人が彼女をからかっていたからだ。からかいをいつもみたいに流さないフィーのその顔はどこか無表情で。

やになつちやうよ、やっぱりあいつは嫌いだな、とロイに口の端をゆがめて笑って見せた彼女の顔が、ロイは忘れられなかった。

## 閑話 2

レオナは工房奥の厨房で、シライの料理を眺めながらぶうたれていた。

「ねえ、シライ、またまたロイさんとフィーはダンスの練習しに出かけちゃったの？」

「そうだよ」

「何でいつつもいつつも二人でつるんてるのかしら。本当仲いいのね。招かれていないとはいえ、私も混ざりたい！ 踊らなくてもいいからフィーとロイさんの踊るところを見たい！」

フィーとロイは、レオナも含む工房の皆に、貴族の令嬢2人に無理を言っただけの練習を頼み込んだのだ、と言っていた。

シライは勿論嘘と知っていた。ばれたら、まずい。

「駄目だよ」

「それが分からないわ。恥ずかしいから付いてくるなって言われるとついて言ってみたくなくなるのが人間の性情つてもものじゃないかしら」  
そう言っている彼女は練習初日から2人を付けていくのだが捕まらないのだ。

「まあ、レオナ姉ちゃんつけて行っても、いつつもまかれちゃうしね。諦めるしかないよ」

「悔しい！！」

シライはレオナがサボり癖さえなければロイの相手役として混ぜられたのに、とは言わなかった。

「元気出して、レオナ姉ちゃん。今日のシチューは飛び切り美味し

「いよ？」

「シライ…大きくなってもお姉ちゃんと仲良くしましょね」

「もちろん。僕も大きくなったらフィーみたいな細工師になって口イお兄ちゃんを手伝って、工房の誇りになるんだ」

おたまで鍋をかき混ぜながら、きらきらと目を輝かせて夢見る少年のかわいさに、レオナは思わずぎゅっと抱きしめた。

と、食べ物のにんにくに惹かれたのか、どかどかと工房で残業していた男達が入ってきた。

「飯だ飯だー！」

……あら。相変わらずシライはもててるな。レオナ、とって食うなよ、みんなのシライなんだからな。おっ、今日はシチューか」

「そっだよ」

「毎度の事ながらつまそう…シライ、お前本当凄いな、10歳とは思えん」

「脱帽だ」

「ありがとう」

シライは照れくさそうに頬をかいた。その間にも、厨房に人は集まる。

「フィーとロイの奴今日もいないのか、ちょっと寂しいな」

「な。でも我らが工房の晴れ舞台のためだ。2人にはしかと頑張ってもらわにゃ」

「そっじゃそっじゃ。目指すは国一ならず世界一のエルファンド工房じゃ」

「おおー！」

「うおおー！！」

「乾杯じゃあー！！」

なぜか最後には祝うことが無くても乾杯して騒々しい食事は始まる。

腕利きの職人である彼らは単に酒好きの集団でもある。職人は個人主義も多いものだが、この工房は違う。やけに仲が良かった。そして普段はバカなことばかりしているそんな彼らこそが、山のような細工の発注をこなす。感嘆の溜息が思わずこぼれる大胆な意匠のダイヤのネックレス、完全な円を描いた連鎖している不思議な金の腕輪、七色の宝石を殺さず引き立てる数々の細工。見とれるばかりだ。それらを手がけるその仕事ぶりははつきり言って格好いい。年離れた老人から若者まで、皆。

さすがにロイさんより綺麗な人はいないけど。そうレオナは考えた。彼の水色の目が真剣みを帯びて光る様は女性のみならず男性まで惑わす色香がある。

ああ、でも。それよりも、フィーは。

フィーの仕事姿を初めて見た時に、誰より彼に惹かれた。ロイさんほど容姿が端麗なわけではない、でも生き生きして踊るような茶色の目と、一級の芸術品としか呼べないようなジュエリーを生む手を持つあの天才に。今も、惹かれ続けている。そっけなくされるばかりで切ないが。

レオナが考え込んでいると、

「レオナちゃん、今日も追跡失敗したのお？」

と、わいわい今日の成果を話し合っている食堂に、妖艶な美女が入ってきた。彼女も店子の一人である。

「あ、ビスクさん。そうなんですよ、あの二人って人を撒くのは相変わらず上手なんだから。頭にきちゃう。さつきシライに慰めてもらってたところです。それにしても珍しいですね、今晚はこちらで食べて行きますか？」

「ええ。たまにはいいかと思ってね」

「うれしいな。ここ女の子で夕飯までいる子って少ないですから。今日は女二人で飲みましょう！」

「ふふ、では、乾杯。レオナはほんとによくここにいるわね。ということはまだまだご家族との不仲は続行中なの？」

「それはもう。いっそ家出してここに住みたいくらいですけど、ロイさんがそれは良くないって。家族は大事にしなきゃ駄目だよ、っていつから」

「ああ、ロイね。彼はそんなこと言いそう。そしてなにかに腹が立つても彼の言葉は不思議と聞きちゃうのよね」

「そうそう。だから家帰っても一言も口聞かないけど、それでも、私の今の帰る場所はあそこなんだなって……」

「そっか。うん、私も家族とはいろいろあったからうるさくは言えないけど、家があるうちは帰るといたほうがいいっていうのには賛成。勿論、家族のつながりが全てでは決まれないと思っではいるけれど。まあ、どうしても耐え切れなくらい嫌なことがあったら、ロイも泊めてくれるわよ、ずっとは無理だろうけど。ここだってレオナちゃんの居場所なんだから」

「ビスクさん……ありがとう」

「そんな環境に感謝して、仕事サボるのは程々にしなさいよ？」

「はあい」

「よしよし。」

……はああ、にしても、シライの料理は美味いわねえ。あの二人が出来たてを 食べられないのは残念なことだわ」

「おいしいですよねえ。その点に関してはあの二人が可哀想だとも思います」

二人はあっという間にシチューを平らげる。

「フィーとロイは、今頃どうしてるかしら」

「お相手のお嬢さんの足ふんずけてなきやいいけど」

「ロイはともかくフィーはやりそうね」

「うん、すごくやりそう。そして謝らなさそう」

「…言いにくいけど、フィーはあなた以外には結構紳士よ？」

「くっ。知ってますとも！ 思わずフィーと踊る自分を想定しただけです！」

「かわいいわねえ、レオナ。惚れるならロイにしとけばいいのに」

「そんなこと。ビスクさん、ロイさんが好きなくせに言いますね。でも、そうですよね…：…なんで、フィーなんだろう」

「恋は理屈じゃないからねえ。だいたいまあ、人って突出した人間には惹かれやすいものよ、しょうがないわ。私がロイの美貌に惹かれるように。まあ、これでも飲んでなさい」

「いただきます…」

強めの酒とともに夜は更けていく。

窓から覗く、空に浮かぶ月はもうすぐ満月。舞踏会の日は丁度満月の日になるらしい。二人も今頃、月を眺めて焦っているのだろうか。レオナはそんなことを思った。

## 9 ・それは夢のような

「痛っ」

「うわ、ごめん」

「大丈夫」

舞踏会に向けた練習の最中のこと。

フィーはやっぱり相手の足を踏んでいた。

「もうかなり疲れたみたいだね、今日はもうこの辺にしとく？」

ロイの、月光を受けて淡く光る水色の目が気遣わしげな色に揺れているのを見て、フィーは微笑んだ。

「ん、確かに。でもちよつと休憩してもう一回やろう。あと3日しかないだろう。今日で最後にするんだろ？」

「……………ありがとう」

城下町から少し離れた、周囲に家のない原っぱが2人の練習場所だった。どさりと腰を下ろすとフィーは草が背中に付くのも構わずに、ごろりとそこへ転がった。

「くああ。眠い」

フィーはそう言って大あくびをした。隣にロイも座って、つられたようにあくびをしている。

と、ロイが呟くように言った。

「フィー、本当にお疲れ様。おかげで万一のことがあっても恥をかなくて済みそうだ。ありがとう」

「どういたしまして。なんだかんだ言ってるけど、私も結構楽しかったし。こんなこと無ければ、生涯女役で踊ることも無かっただろ



うしな」

「生涯？それはないでしょう」

「うっん、まず私相手に躍ろうって言う男は現れないだろうし。髪短いし、粗野だし」

ロイはフィーを見つめ、そんなことないって首を振ったけれど、それは事実だとフィーは思う。

短い髪をつまんで光に透かす。嫌いな色ではない。でも、これより遙かに顔の傍にある、月に照らされた銀の髪のほうが美しい。月の女神ってこんな感じかな？彼と並ぶと余計に自分の方が男らしく見えるような気がするのだ。そんなことを考えながら、フィーが思わず銀の髪を引っ張ると、ロイはなにか考え事でもしていたのか、驚いたようにびくりとした。

「あ、ごめん。ロイの髪ってさらさらしてるから、つい手が伸びちゃってさ。いやだった？」

「全然」

ふわりとロイはわらう。

「よかった。私ロイの髪が好きだな、本物の銀みたい」

許可を得たので遠慮なく手ですく。流れるそれは艶やかで。細工に使いたくなるくらいだった。

「僕はフィーの髪のほうが好きだよ。」

「へ？ そう？ どのあたりが」

「獅子の鬣みたいで」

褒めてるのかそれは。胡乱な目をして睨みあげると、彼はくすりと笑った。

「そんな顔して。褒めてるのに。ねえ、触っていい？」

そう言っつて、こちらが答えるまもなく、ロイの手が伸びてきたかと思うと、フィーの短い髪を持ち上げて口付けた。

嫌悪はないけど驚いた。そんな私になぜかどこか安堵した目をして私の髪をゆつくり彼はすいている。ロイが。ロイがこんなことしたのって一体いつ以来だろう。そう言えば子どもの頃はいつもこんな調子だったつけ。私をお姫様扱いしてくれた。変わったのは

「ねえ、フィー」

「ななな、なんだ？」

踊るときより顔近い。

「他の男はともかく、僕はフィーを誘うよ。フィーが望むなら、いつだって」

やめて欲しい。そんな顔をしないでくれ。

蕩ける笑みのなか普段より深いターコイズの色をした瞳が細められてそこはかとなく色気が漂う。これは犯罪だ。と、動揺したときふと思いついた。

……なんだ。

ひよっとして女らしく私を扱って励まそうと、そういうわけか。そう思うと、落ち着いてきた。そう、ロイは優しいのだ。優しさが痛い。

「ありがとう。でもほら私が女として踊ると、下手したら性別がばれてしまうわけだし、そうすると下手すると細工資格剥奪だし。だから気持ちだけ貰っとく」

「…そう？ ……そうかな」

ロイ、残念そうな目をしてこちらを見つめないでくれ。

「そうです。むしろ踊るにしろ逆の方がしっくり来るよ、きつと。ロイが女装してさ、私が男装。うん、しっくり」

間違いない。自信がある。完璧にエスコートしてあげよう。男どもの羨む顔が目には浮かぶようだ。頷いていると、ロイは首を振った。

「確かにフィーは女性の平均よりかなり背は高いほうだけど、僕の方がそれより高いからね」

「ぐ」

「それにフィーは可愛いと思うよ。何でみんな気付かないのか不思議なくらい」

「う」

これは、昔よく見た兄馬鹿モードだ。久々に全開だ。そんな彼に嫌な人物が思わず重なった。

「……ロイってばいきなりどうしたんだ？あの愚王みたいだ」

「……そう？」

なんだ。表情を消して黙るな。怖い。

王のこと、格好いいとか言ってたじゃないか。それなのに彼に例えたら嫌がるとは。

ロイはじつと沈黙している間、私の髪をすいていた。丁寧な手つき。こうしていると、本当に小さい頃を思い出す。心地よくて目を閉じる。うっかり眠ってしまいそうだ。

「このままでもいいけれど、フィー本当に眠そうだね。……踊りましょうか、フィオナ様」

沈黙を終わらせてそう呟くと、ロイは私の髪から手を離し、流れ

るような仕草で立ち上がって、こちらに手を伸ばした。何かを誤魔化されたような気がしたが、たまにはお姫様扱いも悪くはない。休憩もまあまあ取れたし。

「よろこんで」

演じるように淑やかに手を差し出すと、しっかりと冷たい手につかまれて優しく起こされる。

「ではワルツを」

彼は静かに歌いだした。それにあわせてステップを踏み出す。

ずっと今まで、彼の歌にあわせて練習していた。どこで覚えたのか知らないが、優雅なそれは私がサビしか知らない宮廷音楽の旋律を見事になぞっている。音痴な私には羨ましい見事な歌いつぶりだ。声もいいし。

長い腕が腰に回される。距離が近い。けれど、彼は体温が低いのか、暑苦しさを感じない。これだけ踊ったのにどこかひんやりしていて、その上優美で。きらきらしくて、まるで別の生き物みたいだと思う。

踊り初めの頃の緊張はずいぶん解れてきたが、見慣れている整った顔の破壊力は健在だ。いかにも楽しそうに彼に微笑まれると、気恥ずかしい。私も一応は女なんだな、とこんなときに思う。

でも、今日でそんなことを思うのも最後。3日後には本番だ。

最後くらいは失敗をしたくなくて、筋肉痛を頭の隅に追いやり、私は細工を手がけるときくらいに真剣に踊った。真っ直ぐに、空色の目を見つめて。

一晩の夢。

ふと歌声が途切れる。

「フィー」

「ん」

「あのさ」

「なんだよ」

問うように、ステップに集中して俯きがちだった目を上げると、珍しくひどく真剣な目をしたロイがいて、どきりとした。

「舞踏会では王に近づかないようにね」

…は？ 何を言い出すかと思えば。まあ、あいつが口止めしているとは言っても気まぐれにへんな態度をされたらまずいか。

「あつちが来ない限り傍にいくつもりは全くないが。あいつも暇じゃないんだ、接点はないだろ。心配しなくても大丈夫だよ」

「そう、だよ。ごめん変なこと言った」

「どうしたんだ、疲れてるんじゃないのか」

「いや、大丈夫」

変なロイ。

王、か。

……数週間前の失態を思い出す。やっぱり大通りでやりあったのは人目を引いていたらしく、変なのに捕まっていたなあ、だの、女にあまりもてずとも男にもてるなあ、だのさんざからかわれた。最悪だ。だが何より、冗談なのだといつものようにうまくかわせない自分も嫌だった。

ああ、あんな男にあんなふうにあられるなんて！

慣れているロイはともかく、やたらと女扱いを受けるのは正直好まない。細工師の資格の話だけではなくて、男装を始めたのにはそれなりに理由がある。嫌な思い出が、王と会ったあの日以来、夢に再現されるようになった。幼い私、傘がないのに止まない雨、冷たい床、乱暴な手、叫び声、血に塗れた私の体。断片が何度も執拗に

繰り返されて、眠れなかった。繰り返される悪夢。それ以上思い出したくなくて、首を振った。暗い顔をしているとロイが心配する。彼は知っているから。

が、やはり気付かれてしまったらしい。つないでいた手を少し強く握られた。

「フイー」

気遣う声が胸に染みる。

「また、あの夢を？」

「…平気だよ。今はもう。踊るようになってから疲れて眠っちゃうんだ、もう見ない。」

「じゃあダンスも無駄ばかりではなかったかな」  
「うん。」

……なあ、ロイ、こんなふうに二人で踊ることがもうないかもしれないと思うとちょっと残念じゃないか？ 舞踏会に呼ばれる機会なんてもうないだろうし」

せっかくちよつと踊れるようになったのに。筋肉痛がない状態で踊ってみたかった。

私がそう言うと、ロイは微笑んだ。

「フイー、舞踏会でないと踊れないってことはないんだろう。君が人ごみを嫌うならば、今、こうしてるこんなふうに、また踊ればいいよ。言ったじゃない、いつでも君が望むなら僕は喜んで応じる。誘ってくれたらいい」

「本当？」

「もちろん」

宵闇の静けさに、再び歌が混じる。もうすぐワルツは終わり。でも、いつか、また。

そう思うと、先ほど唐突に覚えた奇妙な寂しさは薄れた。

それから、満ちかけの月を眺めながら、今日の晩御飯は何か当ててみたりくだらない話をしたりして、ゆったり帰った。たまには、こうやってロイとのんびり散歩するのもいいものだ。そんなことを思う。舞踏会でロイが踊るのを見られるかもしれないと思うとわくわくした。さぞかし高貴なかたがたの視線を集めてくれることだろう。

来る舞踏会で何が起ころうとも知らないこの時の私は、今思えばひどくのんきなものだった。

9 ・それは糖のような（後書き）



### 閑話3

舞踏会前日。

「鍛冶屋のロアンが参加を断つただと!? 理由はなんだ? 服とマナーがないって!? ああもう、服はこちらで適当に誂える、マナーを披露する必要はないからとやかかく言うなど伝える。……今度はなんだ。料理人のアルペジオがどうしたって? 珍魚ウリララ材料費!? 知るか、こっちは財政難だ。ありきたりの魚をどれだけのものに仕上げるかが一流だろうと突っぱねておけ」

全てのトラブルがまわされて来る。気まぐれな王のせい、王の補佐はひどい目にあっていた。こともあろうに1ヶ月前に、奴はほざいた。相変わらず身内に対しては覇気のないどこか間延びした声を思い出す。

「催しに職人を呼ぶことにした。ただ踊るなど退屈でかなわないからな」

「……常よりも尚、頭がどうかしてしまったのでしょうか。神官を呼びましょうか、ああ、でも奇跡如きではそのやんごとなき蒙昧さには光を当てられないでしょうか」

まさか熱でも出たのでは、と本気で思った。だが王は、補佐の前で不敵に笑う。

「ふん。心配してもらえるのは嬉しいものだが、貴婦人から愛をこ

めて、でなく嫌味と誇り一杯にお前からされてもちつとも嬉しくないな。例の招待客一覽を諳んじられるくらいには俺の頭は冴えている。

…そうそう、全くお前はひどい奴だ、あれからまたしばらく徹夜だった。あんなもの、お前が覚えているならばいいじゃないか？それで」

「私はあくまで裏方ですよ。前に出て、私が王侯貴族を相手に語れとでも言うのですか。侮辱と受け取られて首が飛んだらどうします」

「身分はともかくその口の滑りやすさとその危険は高いな。お前は生首だけになっても賢しらに話し続けていそうだが」

「あなたへの讒言は尽きることなく浮かんできそうですから、あるいはそうするかもしれませぬね。」

……はあ。そもそも徹夜は自分で溜め込んだ仕事のせいでしょうが。話をそらさないでください。ただか貴方の退屈しのぎのためにいらぬ催しをするなど、今頃になって言い出されても困ります」

「ちっ」

「ちっ、じゃない」

「やれやれ。いいか、クエイン。この国は今まで他国との国交は一切が断絶、その上国内は荒廃しきっていたんだ。だから今度来る他国からの来賓には、こちらの交流の意欲を示すと共に、国交を始めだけの価値がこの国にあることを示さねばならない。これからこの国がどれだけ立ち直れるか、現時点でどれだけ力があるかを。まあ、武力に関しては俺たちがいるし、竜の守護は戻ったから下手なことをしてくる奴は居ないだろう。だが交易が盛んとならなければ財政は立ち行かなくなる。国を立て直していくには必須のことだ」

「だから、この国の職人を呼んで技能を見せ付けると？」

「ああ。」

闇に覆われる以前には、内輪に閉じ込めてた才溢れる彼らの存在を国外に知らしめるにはいい機会だろう。幸い彼らは、竜と関わり深いこの国への愛着が強く、混乱のさなかも残っていてくれたか

らな。建築やら土木関係の職人達のお陰で復興も早く済みそうなのは、少しこの国を歩いて見れば分かるだろう。だが他は、会場で実演でもして見てもらったほうがいい」

王がやけに熱心なのが気になった。なにやらとってつけたような理由だが、まあ筋は通っていないくもない。

「分かりました、そういうわけなら。…忙しくなりますね」

商人達を再び呼び込むには、舞踏会に訪れる国外の王家をこの国の製品に惹きつけてしまうのが手っ取り早いのは事実だ。たかが暇つぶしのためならそんな提案はさっさと無視するだったが、王なりに考えてはいたらしい。納得の色を見せると、彼はにっこり屈託なく笑った。女なら誰しも見とれるだろうそれに、嫌な予感しかない。

「よし、呼ぶ職人は見繕っておいたからあとは頼む」

「はい？」

名簿とその他書類がばい、と投げて寄越されたのをクエインは危ういところで受け止めた。

これはよもやこの間の仕返しだろうか。

「貴方は子供ですか!？」

「まだ若いからそうかもしれない」

21は立派な大人だろうか?世間では17で成人だ。

「王。私は既に今メインにしていることで一杯一杯なのですが」

「メインディッシュがどうした。ケーキは別腹なんだろうか?」

この間彼が仕事をさぼるあいだにこっそり食べた彼の分のケーキのことをまだ根に持っていたのか。

「しかしこれは、おまけのデザートには不味そうな上に量が多すぎて喉につかえそうです」

「それならば尚のこと主に食わせるものではないな」

まったく、この王は。

「いつそそんなもの捨ててしまおうのが一番ですがね。もういいですよ。やりましょう」

「流石！　じゃあな」

「待て」

どこぞへ飛び出していこうとした彼のマントを掴む。

「やたら準備が良すぎやしませんか？」

ある程度のことをしていなければそもそも受ける気はなかったが、面倒くさがりな彼にしては手回しが良すぎる。

「たまには可哀想な部下を思いやって多少仕事を減らしてやったままで。もう十分働いた。ではな、俺は汗を流しに行く。後は頼んだ」

そう言うのと、するりと豪奢なマントを外して彼は去った。

手に残るのはまたもや訓練場に行ったのであろう戦闘狂と名高い男が入っていた重たい抜け殻と、ずらりと人名が連なるリスト。マントは面倒だがたんで主のいない机に置いておいた。本当は火にくべてやりたいところだが仕方ない。

問題はこちらだ。

クエインがうんざりする思いで束ねられた書類に一通り目を通してみると、なるほど、無駄に変な知識はあるらしく、あらゆる職の一流といわれる者が選択されていた。ご丁寧に会場の設営と当日の運びまで計画されていた。招待状の草案まで付いている。

「本当にやけに準備がいい」

正直気持が悪いくらいだ。何を企んでいるのだろうか。と、あのページで手が止まる。

「細工師、フィオナ…ですか？」

天才と既に名高い細工師フィオレンティーノなら知っている。しかし、名前が違う。あの馬鹿、間違えたのだから。なにも性別まで間違えなくともいいのに。そう思いながら、クエインは溜息をつい

て、訂正を入れる。

フィオレンティーノのなら、一度見たことがある。本人でなくて細工の方だが。昔付き合っていた女がどうしても欲しいというので買ってやった。値は少々張ったが、それに見合う以上の価値があると思わせた。あまりに似合うせいで、生まれ付いてそれを身に付けていたように自然に馴染んで、彼女の胸元で揺れていた細い銀であしらわれた葉と雫を模した細工。あれはなかなか良かった。実演をするというなら、本人を少し見てみたいものだ、と王の補佐は考えた。多少楽しみが増えたな、と思う。

そのあと、そんなことを考えている時間すらないと思い出して走り回ることになったのだが。

連日あまり休めていないせいで、物思いにふけっていたらしい。

「クエイン補佐、疲れてませんか」

「休憩とってていいですよ、俺らやっときます」

「そうそう、目の下の隈がひどいですよ、本当に」

部下が心配そうに声をかけてきた。好きな銘柄の茶がどこからか差し出される。部下達も疲れているだろうに気遣ってくれる。上司以外は仕事熱心で心配りの出来るいい職場環境だが、あれ一人のせいで何度職務を放棄しようと思ったか分からない。まだ、彼が即位してそう日数を数えていないのに。そんな主はまたもやどこぞへと消え去っている。職務放棄もはなはだしい。帰ってきたら覚えていろ。

一杯飲んで一息つくと、般若の顔を払い、部下のために彼は微笑んだ。

「すみません。多少疲れていますよ、大丈夫ですよ。終わらせなく

ては話にならないですからね」

そう言つと、部下がほつとした顔をした。なんだかんだ言つても、やはり現場を指揮している彼が抜けると苦しいだろう。明日に舞踏会を控えて準備は佳境だ。耐えて見せる。

「さあ、今日でお仕舞いです、がんばりましょう」

「ええ！」

舞踏会、当日朝。

「シライ、襟とか曲がつてない？」

「だいじょうぶ」

「じゃ、これで一応出来上がり、かな」

ようやく姿を現した、正装した2人に工房の職人たちと店子は感嘆の声を上げた。この日、本来工房は休みの日ではあるものの、みなロイとフィーを激励すべく集っていた。舞踏会まで忙しかったが、当日ともなれば、もう仕事も一区切りつき、暇だったのもある。

2人の格好はどうなるかということに興味があつたことも大きい。王主催、かつ国際的な集いとなると例え脇役であつても、中途半端な格好は許されない。従つて、そこそ高価な服を身に付けることとなる。そういう服は、ロイにはともかくフィーにはあまり似合わないさそうだと彼らは考えていた。

結果。白でとところどころ飾りの入れられた黒い絹で仕立てられた貴族がまつつても遜色のない衣装をさらりと着こなしているロイは流石だったが、フィーに驚かされることになつた。フィーは普段いい加減な格好のことが多いが、きちんとした服を身に付けると、か

なりスタイルがよいためか案外似合ってしまうことが明らかになったからだ。身につけた上衣の深い緑色が、その薄い茶色の髪と瞳に映えている。いつも四方に散っている髪も櫛通され後ろに撫で付けられており、形の良い耳があらわになり、すっと伸ばした背筋は凛々しい感じがした。

「意外とスタイルいいじゃん、フィー」

そう声をかけられて、フィーは少々照れてしまった。さらしを撒く必要もないことを思うと、本来女性のフィーはスタイルがいいといえるか少し迷うところだが、それを気にせず彼女は素直に喜んだ。

「うん、本当。フィーさん、足長い！」

「髪が短めの本物のお貴族の坊ちゃんみてえだな」

「ロイさんは、想像してたけれど本物にはかなわないわ。やっぱり王子様のようね」

「オーナー、結婚してください……」

「ロイ王子!!」

「美しいです！」

フィーは「どうも」と笑い、ロイはうつすら微笑んで「ありがとう」と受け流した。

レオナが珍しくおずおずとした様子で、フィーに声をかけた。

「本当に似合ってるわよ、フィー」

フィーから返されるのは穏やかな笑みに、少しレオナは見とれてしまった。

「当たり前だろう。なに言ってるの？」

が、紳士然としていても、中身は悲しいことに相変わらずだった。レオナはふらりとして顔を覆った。

「うん、フィーかっこいい。ロイ兄ちゃんと並んでもそんしょくな

い

シライは自分がいけないことには残念そうだったが、2人の晴れ姿を前に嬉しそうにはしゃいでいた。

「ありがとう。しかし惜しいな、今日はロイより男前を目指していたんだが」

「男前、という観点でいけば、中性的なロイよりそう見えるわよ。凜としてるし」

店子の一人のビスクがシライの頭を撫でながら、そう言った。

「ビスクさん、嬉しいな、そう言ってもらえると」

「何で私に対してとは態度が違うわけ」

フィーは彼女に貴族式の礼を取るのをみて、レオナがわめいたがフィーはあっさり無視した。

「切ない…」

「ある意味特別だと思えば？」

「そうだよ、フィーがこんな態度とるのレオナだけだよ」

「それって喜ばしいのかしら…」

落ち込んでいるレオナにほん、と手が置かれた。ロイだ。

「元気出して。フィーは君のこと嫌いじゃないと思うよ？」

「ロイさん…！」

レオナが感動していると、

「うっとうしいと思ってるけどな」

と言ってフィーが脇をすたすた歩いていった。

「あ、フィー待って」

ロイも慌ててあっさり去っていく。

「行ってきまーす！」

少し進んだところで、工房を振り返りながら、フィーとロイは声を揃えて手を振った。徒歩で城へ向かうそんな2人に、激励の音が飛んだ。



「行つてらっしゃーい」

「ロイさん、貴族の女に惚れちゃいやよ!？」

「変な連中に騙されるなよ」

「フィー、食い物に釣られてどっか行かないようにな」

「いつも通りでいいが、氣い抜くなよ」

「緊張せんようにな!」

「ついては行けないが応援してるぞ!!」

「お前らがエルフランド工房の誇りなのを忘れるなよ」

町外れで朝っぱらから起きた騒動に呆れて、通りからいくつかの顔が工房の方をそれぞれ家の窓から覗いている。そして場末に似合わない2人に注目することになった。そんな目も構わず、よく晴れた、すがすがしい朝の空気を渡って、颯爽と2人の若者は歩いていった。

残された面々は、次第に散っていく。そんな中、レオナはポツリと呟いた。

「ロイさんって優しいのかどうか微妙だ……」

優しいが先ほどはあっさり置いていかれた。

「お兄ちゃんはふつうだよ。おだやかなだけ。やさしいところもあるけどその度合いが人によって違うもの。たいていの人はそうでしょう」

僕とフィーには特別優しいけどね。

シライはそう言うてにこにことした。

「……どんまい、レオナ。まあ、嫌われてはいないって言われただけ良かったじゃないの。それにしてもシライ、あなたって相変わらず鋭いのね」

ビスクが相変わらずシライの頭を撫でている。彼の髪はロイに似て艶やかでさわり心地がいいのだ。

「えへへ」

シライが照れている横で、レオナのほうは頂垂れて溜息をついた。

まあ、一つ屋根の下に暮らす縁がある者に比べれば自分に対する情が多少薄くても仕方ない、と彼女は溜息をついた。それにしたってフイーは冷たいと思ったが。

それでも彼の成功をいつも祈っている。今日も……

とりあえずは無事に帰ってきますように、とレオナはそっと祈った。

## 10・城に着いて

王城は戴冠式の行われた神殿とは少々離れた町の中心の高台にある。その大理石でできた建物は、朝の眩しい光を受けて輝いていた。

舞踏会場である其処を見上げ、フィーはただ溜息をついた。感動の溜息である。闇に覆われて以来、ここまで来ることにはなかった。最後に来たのは、随分幼い頃だったか。あのときの衝撃は今も覚えている。それが、小さかったから、過去のことだから、そうなのではないかという疑念があったけれど、やはり違う。

「ダランシア、あんたはやっぱり偉大だ」

この城に畏怖しないものはいないだろう。これを設計したのは、ダランシアという一人の女性だったといわれている。遠目に見ては、この城のすばらしさは本当にはわからない。近寄ったとき、はじめて、随所に凝らされたダランシア自ら手がけたとされる数々の石像を見て人々は息を呑む。それはまるで命を持っているかのような、妖艶な悪魔、清らかなる天使、力強い人間の像。美しく絡み合う蔦模様、こぼれんばかりに咲き誇った花々、豊穣を示す稲穂や果実の装飾が壁を這う。派手になりかねないのに、長い年月を超え色あせない桜色を帯びた大理石で出来たそれらは一つの建物を彩るものとして調和している。巨大な城の外壁全てを覆っていて壮観の一言に尽きる。ちなみにダランシアは、絵も手がけた。内部では、彼女の描いた神々しい竜の降臨や英雄叙事詩を大胆にモチーフにした天井画が連なっているという。フィーはまだそこまで見たことがない。舞踏会はともかくそれらをこれから目に出来ると思うと、嬉しくてもたまらない。美しさを汚すことを好む闇もどろろというわけか手を出さなかった、この城の全て。

フィーのうきうきした気持ちに気付いたのか、ロイは隣で微笑ん

だ。親がはしゃぐ子どもを見るような視線と感じるのは気のせいか。

「なあ、ロイ、城は何で無事なんだろう？」

「・・・城そのものにも何かの力が宿っているみたいだね」

そつと壁に手を触れてロイは呟いた。術石を扱うから、彼にはそういうものが分かるのだろう。そうとう清冽な力が宿っているのかもしれないが、フィーにはそれが分からない。ただこれが、一人の人間が作ったものであることに嫉妬を超えて衝撃を受ける。一人の人間の命の短さを思うと、偉業という他ない。

二人は城に早めに着きすぎたこともあって、城の周りをぐるりと周っていた。集合場所は、使用人が使う方の出入り口がある方の、城の前。

うつとりと城を眺めてしまう。

「おや。あなたがたは貴族の方ですか？どうしたのです、舞踏会にはまだまだ早いはずですが」

黒衣に身を包んだ衛兵は二人をなぜか放っていたというか、怖いくらいに直立不動だったが、声をかけてくる者がいた。金髪碧眼のモノクルをかけた文官風の男だ。城で働いているものだろうか。彼は仕立てのいいござっぱりとした地味な色の服をしているが、その布が高価そうなことと、落ち着いた物腰を見て、下っ端ではなさそうだった。

「いえ、貴族では」

「……ほう？失礼をいたしました。なにやら高貴な身分の方のように思われましたもので。そんな方々が供も連れずに、このような時間にこのようなところで一体どうなさったのだろうと思ひ、声をおかけしたのです」

なるほど。衛兵は貴族と思って放置していたのだろうか。まあ、城に入るうとしたら止めていたのだろうが。

「貴族の方でないとなると、ひよっとして」

「ええ、我々はお招きいただきました職人です。ただ、少し集いには早すぎたようで、せっかくの機会ですからこの美しい城を見学しております。それでこのようにお気を煩わせてしまって、すみません」

ロイが丁寧な頭を下げ、フィーもそれに従った。

「エルファンド工房のオーナーで術細工師のロイ・エルファンドです」

「細工師のフィオレンティーノです」

すると相手も同様に丁寧な仕草でこちらに頭を下げた。ロイがおや、という顔をしている。フィーも少し驚いた。なにせ平民に頭を下げる貴族はこの国では少ない。王が平民出身であるからこれから変わっていくかもしれないが時間はかかるだろう。そんなわけで、目の鋭さやら冷たい雰囲気だが、この人感じはいいな、とフィーは思った。

「王の補佐をいたしております、クェイン・ジュランと申します。どうぞ、クェインとお呼びください」

彼はそう言い、すっ、と手を差し出た。その手をとったロイに続いて握手すると、優男風の外見に反してクェインと名乗った男のそれは、けして労働を知らぬ手ではなく、固い手だった。向こうもこちらに似たような感想を抱いたようだったが。

王の補佐、か。あの王様を知っているから気後れすることはないが、やはり高位の文官だったようだ。

「ロイさん、フィオレンティーノさん、今日はようこそいらっしやいました。ここでお待ちするのも退屈でしょう？一足先に会場まで私のご案内いたしましょう」

「しかし」

「いいんですか!？」

フィーとしては早く中に入ってみたい気持ちでいっぱいだ。断りの文句をさえぎられたロイが困った顔をしているのは気にしない。

「ええ」

そんなわけで、クエインに連れられて、二人は一足早く会場に入るようになった。

城に入り、クエインは2人を案内していた。職人にしては若くどこか気品もあることや、普段滅多に間違ふことのない王がなぜかフイオレンティーノの名前を間違えたことが気になっていたせいもあって、なんとなく彼らに興味がわいた。浮かれている様子のフイオレンティーノはさておき、落ち着いているロイにいろいろ話を聞いた。

その一方で、王が作った職人リストになぜか女性名で記されていたフイオレンティーノを観察する。そうしてみると、首の細工師紋といい、口調といい、この人物が女性とは思えない。少々背が低く声が高めで、細いというものの、まあそういう少年もいる。やはり、あれは王の間違いだろう。

それにしても、クエインは困惑していた。

稀代の細工師は魂が文字通りどこかへ消えてしまったように、ある場所で動かなくなった。それは今日の舞踏会場の中心で、ダレンシアの最後かつ最高の作品であるとされる、神々しい竜神降臨の絵が頭上に置かれているのが最もよく堪能できる場所だった。空を裂いて現れる竜の足元には渦巻く混沌が、その向こうには秩序と楽園

が意匠されている。この絵は、全体的に明るく澄んだ色調で描かれている。それは、竜が長らく冬のように荒廃していたこの国に春のような繁栄を齎した瞬間を表したためだろう、と言われていた。躍動感に溢れた絵だからまあ、踊る場所には合っているのでは、と言うのがロイの淡白な感想である。それ以上に特に感想はない。そんな絵を、一心に見つめる人間。

「あの、フィーさん？」

彼は先ほど、長い名前だと呼びにくいだろうし愛称で構わないといったが、呼びかけても反応が返ってこない。

「すみません。フィーはダレンシアを崇拜しているもので……と言っても僕も本当は見惚れたりきよきよろしたいんですけどね」

「いえ、構いませんが。まだ時間がありますし。それにしてもここまで感動している方は初めて見ました」

絵を眺めていたと言ったロイは、だが、連れの少年の方を先ほどから温かく見守っていた。兄弟にしては似ていないが、先ほど少し聞いたところによると彼らは共に暮らして長いらしい。だから、ロイにとってフィーは大切な弟分なのだろう。そうクェインは考えた。

真紅の絨毯に立ち尽くして、シャンデリアの眩しさに負けず一心に天井を眺めるフィーは一見、若いというよりただ幼い印象を受ける。どうしたら、彼のような少年にあの細工が生み出せるのだと思ってしまう。

そう思っていた。

しかしよく見ると彼の茶色の瞳は、貪欲に目に映るものを飲み干そうとしているようにどこまでも透明で。思わず引き寄せられるようにその目を覗き込んでいると、自分まで吸い込まれてしまいそんな不思議な錯覚を覚え、クェインはぐらついた。

「っ！？」

……なるほど。これがフィオレンティーノか。

しばらくすると、硬直が解けたようによるよると動き出した彼に「フィー、満足した？」とロイが尋ねると、彼はこっくり頷いた。「すっごいな」

一言だけ幸せそうに言うと、はっとしたようにクエインの方を向いた。

「ああ、クエインさん、すみません。つい見入っちゃって。こんな機会、滅多にないから浮かれてしまった」

「いえ」

「それにしてもここで働いている人はいいな、毎日これだけのものが見られるんだから」

心から羨ましそうに、フィーはそう言った。クエインは首をかしげて苦笑した。

「私など会場で動き回っているうちに見飽きてしまいましたよ。あなたからすれば贅沢なことですね」

「それは…羨ましいです」

苦笑するほかない。

どんなに価値あるものでも、人の受け皿はそれぞれだ。フィーやロイのような芸術に携わる職人は、きっとそれが巨大なだろう。

それなりに美しいものを見たい気持ちはあるが、クエインは自身の受け皿はそう常人と変わりないだろうとそう思う。残念だが、こればかりはしょうがない。まあ、あの馬鹿王が意外と自分よりもそういった、ものを見る目があるらしいのは癪だが。そう思いながら、クエインは首を振った。

「私の方こそあなたが羨ましい。あなたが特別な人なのだと言うのが分かったように思います。今日の細工作りが楽しみです。」

……おや、皆が来ましたね」

どうやらそろそろ、予定した時間のようだ。職人達が部下に連れ



られてやってきた。

フィーは目を見張った。

「うわ、なんだかすごいな」

やってきた集団は、なるほどどこか一癖ありそうな者が含まれていた。

全身が職人紋で覆われた人や、随分奇抜な髪をした人、いかにも職人気質のおじいさん、筋骨隆々としているが口紅を引いていてどこかくねくねしている人など様々だ。凡人然とした人も勿論いたが。

「俺たち、浮いてないか」

この中ではなんだか、平凡な気がする。いや、ロイはある意味で非凡だが。集ってきた人々もロイのほうに自然と目が行くらしい。当の本人は平然としている。

「平気さ。非凡さを求められるのは見かけじゃなくて中身だよ、フィー」

「まあ、ね」

それもそうだ。見た目からして非凡の人に言われたくはないが。フィーがそんなことを考えていると、

「あなた方は大丈夫ですよ」

と、まるで見抜かれたようにクェインに言われた。

「どうも」

どの意味で彼はそう言ったのかひっかかったが、フィーは素直に受け取ることにした。

「さて、では私は全体の案内をしますからこれにて失礼します」

「ああ、ありがとございました」

ロイと並んで礼を言つと、彼はどういたしまして、とにこやかに去った。

それからしばらく待っていると、クエインの声が少し遠いところからした。

「ようこそいらつしやいました」

早速ですが、この度みなさんの技を見せる場は、舞踏会場の壁に沿つて用意してあります。あちらをご覧ください。事前にお預かりさせていただいたそれぞれの作品や用具が展示されていると思います。どうぞ、それを目印にして準備を始めてください。午前一杯時間は差し上げます。午後には一度、舞踏会本番の流れと注意点を説明する予定です。それから早めの食事を取っていただいて、6時から舞踏会を始めます」

なるほど、とフィーは頷いた。

準備することはそんなにないらしい。結構時間は余りそうだ。しかし料理人などは鮮度が命と言うから、今日食材の仕入れをしたり、それを下ごしらえしたりするだろう。職によるのだ。

「ロイ、どうしようか」

「そうだね、時間は結構あるししたいなら城内見物でもしてきてもいいよ。迷わないようにね」

「ロイは？」

「僕らも使う宝石類は今日届くから、僕はここで待っていたほうがいい……ってフィー、話したと思うんだけど？」

「……そうだった」

「そうだよ。やっぱりあの時酔ってたんだね。まったく、君が実際に作るのに、大丈夫？」

「多分」

大丈夫だと思う。作ることに心配ない。  
そう答えるとロイは苦笑した。

「フィーのそういうところ、悪いとは言い切れないけど、緊張感ないなあ」

「まあね。私はこの両手がある限りは緊張しないからな」

もし、例えば踊らなければならなかったら緊張しただろう。  
しかし、唯一のとりえともいえる好きなことを、思うままに披露するだけ。フィーとしては、誰の前でどこであっても恐れはない。

「さて、今からどうする？」

「ロイが動けないんなら、ここにいるよ。まだこの天井見ていたいし」

「そう」

心なしかロイは嬉しそうだ。ひょっとして、一人になるのが心細かったのだろうか。

「心細かった？」

「ん。いや、違うけど。フィーが傍にいないのはちょっと淋しいな、と思ったのは事実」

「それを心細いと言わないか？」

「そうかな」

「そうだと思うけど。違うのか？」

「まあ、いいや。とりあえずここでロイと一緒に待つよ。他の職人の準備にも興味あるし」

というわけで、フィーは午前一杯ロイの隣で過ごすことにした。  
辺りを眺めてみると既に動き始めているところも多い。例えば料理人。野菜を断つ職人の技の切れはなるほど見事だった。

そういえば彫刻師などもいるし、刃物を扱う場合はどうするのか

と想っていたが、展示・実演の場はすでに結界で囲まれており、その外に一定の大きさ以上の金属は漏らさないつくりになっているようだった。どうも、持ち込むことは出来ても出すことは出来ない仕組みらしい。なるほど、これならお偉方も安全、こちらとしても準備に滞りがなくなるし、作品を盗まれることがない。

そんなことを考えたりしながら、午前はのんびり過ごしたのだが、ハプニングは午後になって起きた。

## 11・とある商人

「ああつ、ロイさん!!」

「うわ。懐かしいな」

午後。クエインが今日の一連の流れを話すと予定された時刻の、少し前のことだった。

見知った顔がいきなりすごい勢いでやってきた。

「……」

ロイが絶句している。彼の美麗な顔が無表情に固まると人形のようだ。ちよつと面白い。その前で一人幸せそうにしている、ようやく現れた商人は、ロイが最も苦手とする相手だった。

「ロイさん、私との結婚については考えてくれましたか!？」

「いや……。君は、僕の今日の格好を見てもそういうんだね」

「男装の麗人ですね、ああ、ぞくぞくします。私が今日父に変わって彼女の元へ来ると知つての采配でしょうか、神よ！」

ロイは違った意味でぞくぞくしているみたいだが、商人はまるで気付いていないようだ。

「相変わらず、一途だな。ナンテス、父上はどうした？」

再び固まっているロイに代わって私は聞いてみた。青年は、ナンテスと言う。原石も含め、あらゆる宝石を商うロイが最も信用している店の一人息子だ。

彼は幼い頃からロイに盲目的に惚れており、周囲の言葉に一切耳を貸さない。あるときから、姿を見なくなつたと思つていたのだが、おそらく彼の父がロイを思って遠ざけていたのだらう。私も会うの

は久しぶりだ。こちらを向かないまま、ロイを見つめてロイに話すようにナンテスは答えた。

「ああ、父は病床に臥せってしまい。もう私嬉しくって！」

と、失礼しました、喜ぶことではないですね。いえ、命に関わる大事ではございません。お優しいのですね、そんな花の顔がゆがむのは見たくない、そんな悲しそうな瞳をしないでください。父はこちらへ赴けないこと、ひどく詫びておりました」

「それはご愁傷様」

私は呟く。ご愁傷様、ロイ。ナンテスの父はきつと、この息子が来ることを必死に詫びていたのだろうな。ロイは先ほどから怖いくらいに静かだ。

「ああ、ロイさん、どうして先ほどから私と語らってくださいらないのですか、その低めで艶やかに流れたす声の一滴で良い、あなたに渴いた私に与えてください」

その声だが、ロイほどの低さになると、男と分かりそうなものなのにナンテスは気付かない。

「それともこれは、言わずと気持ちは汲み取れるはずと言うあなたの与える試練ですか……ああ、それほどまでに私と分かり合えると思ってくださっているのですね。そう、言葉など要らないのだと。」

ええ、必ずやその冬空のように凍てついた瞳の奥、純銀より尚輝く美しい髪の中にある頭の中、しなやかな体に眠る心の中に潜むマグマよりも滾っているに相違ないあなたの熱情を、私はかならずや読み解いて見せます」

彼の詩のような話しぶりは聞いていて滑稽でもあるが、今はそれよりも大事なものがある。

「ナンテス。すまないが、とりあえず宝石を」

「ああ、フィー、ごめんね。久々にロイさんとあい見えることが叶ったあまりの感動に打ち震えてうっかりして。こちらになりま……あれ」

「ん？」

「な、ない！ 箱がない！」

袋には見事に穴が開いていた。そこから落ちたか、盗まれたか。ナンテスはそこそこ武術に心得があったはずなので、盗人の邪な気配に気づかないとは思えない。つまり、可能性としては落とした。あまりの出来事についていけなくて、私の頭は沈黙の中、勝手に考えを進めている。鍵は付いているはずだから……とそこまで私が考えていたとき、声が響いた。

「……ナンテス」

ああ、ロイの声がぞつとするくらい冷たい。久々に寒い。私のほうは、ようやく事態に心が付いてきてパニックを起こしかけている。

「は、はい」

「君が僕の愛を勝ち得たいと思うなら、とりあえずさっさと落とし物を見つけてきなさい」

ロイは冷静そうだが、その分、かなり怖かった。

「す、すす、すみません！ 今すぐ、必ずやあなたの求めるものを持って、はせ参じますから！！ 私のあなたへの愛は永遠ですー！！」

そしてナンテスは来たとき同様、怒涛の勢いで去っていった。

「あんなこと言っつてよかったのか？ 見つけたら結婚を迫る声が大きくなりそうだ」

あれ以上求愛が激しくなったら、ロイはどうするつもりなのか。私は思わず考え込んでしまった。そしてしばらくしてはっとする。

「……いや。そんなこと考えてる場合じゃない！ どうするんだロイ！？」

今日の予定が全部狂ってしまふ。よりによって宝石がないなんて、どうしよう、どうすればいい、どうするんだ、ロイ！

焦る私を、彼は冷静に見返した。

「大丈夫。僕はナンテスが『僕の愛を勝ち得たいと思うなら』といっただけで、彼が宝石を見つけたところで僕への思いの証でしかないよ。そもそも宝石を無くすなんて失態をしでかして、許しを請う立場だろう、彼は」

なるほど。……ではなくて。

「そっちじゃないって！！ ……やけに落ち着いてるな、ロイ？」

「宝石のこと？ ああ、だって箱はここにあるもの」

ロイはふんわりいつもの笑みを浮かべて、作業机の下で見えなくなっていた足元から箱を持ち上げて見せた。

……いつの間に。

「気付かなかった」

「術具を使っただ。音は出さないように最大限集中していたからね」

そんなことに術具を使いましたか。使える回数に限りがあるのに。「それですつと黙っていたわけ」

「そのとおり」

全身から力が抜ける。私までしてやられた気分だ。ナンテスの勢いに当てられていて、気付かなかった。

「ナンテスの父親なら、まず僕がこんなことするのを許しはしないだろう。まだ彼は家を継げないな」

ロイは得意げだ。

「なあロイ」



「どうしたの、フィー？」

「ナンテスを追いつ返すためにやっただろ」

「当然」

「やっぱり。」

「はああ。今、ナンテスがちょっとかわいそうだと思った。今頃あいつ走り回ってるんじゃないのか？」

「いい気味じゃない？」

「穏やかに笑っているのに、珍しくロイが怖い。」

「……分かった。人を嫌うのが珍しいお前があいつを嫌うのも分かるしな。でも私は、ちょっとあいつを探しに行ってくるよ」

「フィー!？」

ロイの静止を叫ぶ声が聞こえていたけれど、とりあえず私は走り出していた。ナンテスが丁寧に来た道を辿っているなら、走れば追いつくだろう。

いくらなんでも、どう探しても絶対に見つからないと分かりきったものを探し続けるのは無益だ。それがどんな

城の中は複雑に入り組んでいた。

私は飛び出した方がいいものの、迷子になりやすい自分の気質をすっかり忘れていた。それで危うく何も考えず動き回ってさ迷うところだったが、途中で天井画なら全部覚えているのを思い出し、それを記憶の中で一番最近見たものから順に辿っていくことにした。これは上手くいった。

「ナンテスー？ その辺這いずり回ってたら返事しろー!!」

午後であるためか、思ったよりも人通りが多くてナンテスはなかなか見つからない。声を上げて呼ぶ。

「ナンテス！！ いないのかー！ 箱見つかったぞー」  
そんなふうに、何度も呼んでみる。

そのうちに、とうとう城の入り口まで来てしまった。けれどナンテスは見つからなかった。

「どこにいるんだよ…」

まだ、時間を考えても城を出ているとは思えない。  
もう一度城の中を探そう、と振り返ったとき。

「ナンテス？」

助けを求めるような、叫び声がした。あれは、ナンテスの声だ！

「と、ちよつとどいて！！」

城の使用人たちや、時に貴族を押しつけ、彼らに罵られながらも声のした方へと進んでいくと、うずくまった格好のナンテスを見つけた。取り囲まれている！？

「あの、どうしたんですか！？」

とりあえず回りの野次馬をとっ捕まえて聞いてみた。

「ああ、あの男、なんか貴族令嬢の足元で妖しい動きしていたとかなんかで。探し物してたつて言うけど、本当なんだか。いやらしいねえ」

話しかけたおばちゃんは、親切に私に答えてくれた。

あの馬鹿。相変わらず変に要領が悪い、というかどうせまたいつもの調子で余計なことでも言つて疑いを深くしたのだろう。

「そうですか……ありがとうございます」

ロイ一筋なナンテスが他の女に興味をもつはずがないではないかと言つても聞いてはもらえないだろうが、とりあえず助けることに

した。ぐいぐい謝りながら人を掻き分けていくと、なんと騒ぎの中心からもうひとつ聞き知った声がした。

「ルーカス、この人は悪気はなかったのだから許して差し上げましょうよ。それに私このようなよき日に、このように美しい場所を汚したくないわ」

「いや！ 許せるわけがない、この軟弱男、あなた様の足元を這いずり回っていたのです！！」

それなのに謝罪もないばかりか、『このような女性に興味を持つはずがないだろう？ 僕の目になうはただ一人、あの、月の女神のような美しさを持つ女性だけ』などと！ 何たる侮辱、あなた様の美しさが月の女神に届かないと！？ 貴様、大人しく我が剣のさびとなるがいい！！」

「あらまあ。落ち着いてくださいませ」

これは。

「あら？」

連れの貴族男性をなだめていた女性は、こちらを向いてリスのようにはちくり瞬いた。金の巻き毛は今日は美しく結わえ、そのエメラルドの瞳は私の姿を捉えた白いドレスの乙女。

「あなた、フィーではありませんか？ 今日随分とおめかしなさっているのね。素敵よ」

彼女は、ローズ嬢であった。

「こんにちは」

向けられる柔らかな笑みに、

「こんにちは」

思わずつられて笑って、いつものように挨拶を返してしまった。

ルーカスと呼ばれた男が私たちの様子に動揺し、ナンテスはまるで気づかないように一心に宝石を捜しているのが見えた。

「ろ、ローズ嬢、この男は」

「ああ、フィーとおっしやるのよ、彼の手は誰より優れた手と私は思っているわ」

「な！ お前、私と手合わせしろ！」

すらりと抜かれた剣がこちらを向く。野次馬は叫びを上げていたが、フィーは思いのほか冷静だった。帯剣しているとはつまり、舞踏会はまだ始まっていないとはいえ、よほど高貴な身分か、あるいは城の護衛騎士かと考えをめぐらす。それにしても誤解をどう解くか。

「いや、私は」

「あら嫌だ。彼の手を傷つけたら、国中の乙女が泣きますからお止しになって」

ローズ嬢……。

「何。貴様ローズ嬢がありながら」

「だから、」

「彼は国の財産ですわ」

「くっ、そこまで」

「大事な人です」

「……ありがとうございます。しかしローズ嬢、もう十分でしょう。彼はあなたをとて愛しているようだから、あまり苛めてくださいますな」

なにより私も苛めてくれるな。ローズ上は茶目っ気たっぷり微笑んで見せた。

「あら、ばれた」

「いたずらがお好きなのはなかなか変わりませんね。ほどほどにしてください」

「悪戯……？」

呆然とした男に私は言う。

「自分のために嫉妬してくれるのが女性は時に嬉しいものでしょう？」

「そうなのか？」

「そうです」

「いや、だが。だとしたら君はローズ嬢にとって何者だ」

「細工師フィレンティノと申します。彼女に贈り物をする際には我らがエルフランド工房を是非にご利用いただきたい」

「細工師？」

「そうよ。彼の腕は国一ですわ！」

「ああ、そういう意味だったのか。……悪いことをした」

「いえ。おあいこ、ということでしょうか。私の古くからの友人が、私のために失せものを探していた折に失礼をいたしてしまつたようで、その無礼を許されたい」

「友人？ まさかこいつのことか」

「フィー、来てくれたんだね？ ロイに注ぐ愛情に勝るまでもないが、君への友情もまた僕の胸に一番星のように輝いて、幾億のときを尽きるまで」

「ええ、こいつのことです。申し訳ありません」

ようやくこちらに気づいたナンテスを見無視して、しっかり礼を取る。相手はある程度先ほどの騒ぎで興奮を収めていたらしい。気まぐすそつに目をそらし、剣をしまった。

「もついい。しかし友人には口の聞き方を教えておいてあげたほうがいい」

「ええ。しっかりと説いておきます」

私は一応頷いた。

昔からやっているのだが。その上で多分無理だと思つてはいるが。「ルーカス、フィー、ごめんなさいね、私の悪ふざけが過ぎましたわ」

「いえ」

「そうです、ローズ嬢は悪くないのです。ただ、私があなたに愛を試されるほどあなたへそれを示せなかつたことに罪があるのですから。愛していますよ」

「まあ、ルーカス、嬉しい。もつと言って」  
「ええ何度でも」

私はとりあえず収まった場から退却することにした。ここにいると馬に蹴られそうだ。もとい、実際に斬られそうだ。冷やかす人々も、たまらない、と散り始めた。

「フィー」

なにやらまだ詩句らしきものを紡ぎ続けているナンテスの背を押していくと、ローズ嬢の声がかかった。

「なんですか」

「ありがとうございます」

ルーカスを抱きしめたまま、彼女は首にかかった清楚なエメラルドのネックレスと、耳にゆれる真珠に触れた。彼女がかわいいものを、と言ったから、耳飾には真珠を抱えるリスを金で作った。思わず彼女のことを考えていたら栗鼠型になっていたのだ。噂では斬新だと随分好評だったとか。細工の礼のみではなかったようだ。

それから彼女は抱きしめ合っているルーカスをそつと指差した。溜息も出ない。想いあうというのは、いいものなだろう。私に迷惑をかけない限り制限を付けたいが。

「どういたしました」

そういう気持ちをこめてウィンクすると、彼女もこっそり返した。  
「フィー、君はあの人のことを」  
ナンテスが何か言いかけたが、

「五月蠅い黙れ」

とりあえず一回殴っておいた。

うんざりした思いで人ごみを抜けると、そこには人にまぎれて立

つ白の衣装の男がいた。

あんなに目立つ格好をしているのに、誰も彼に気付かないのか。銀で袖や裾を蔦もように彩られた、真っ白い人物を。髪が黒だから余計に映える。

何故、誰も気付かない存在に、私は気付いてしまったのか。彼は見ていたからだ。真っ直ぐに、私を。おかしな言い方だが、その気配は全てこちらに向いていたと断言できる。思わず眺めやったこちらの視線を拾って、濃い青い、凧いだ海を思わせる目が笑みで細まった。

「お疲れ様、とまず言っておこうか。久しぶりだな、フィー」  
「ヴィー、か。何をしている、こんなところで」

王様は含み笑いをした。気に障る笑みだと思った。

「野次馬精神旺盛なもので」

見ていたのか。人が斬られかかっているというのに見物とはいいい度胸だ。笑っていたに相違ない。

「野次馬ねえ。そのうちお前も別の馬に蹴られるな、いやむしる蹴られてこい。今あそこにいる騎士と令嬢の周辺に大量発生しているから是非行つて来い。不埒な根性をたたきなおすのにいい機会だ」  
「冗談だよ。それでもお前を探していたんだ、会場には居なかったから。……それにしても苛立ってるな。私が会いに行くといいながら会いに行かなかったことを怒っているのか？ すまない、ここ一月わが有能な補佐殿主導で城に拘束されていたのだよ」

会いに行く……？ そういえばそんなことを言っていたような気もする。

「ああ、謝らなくていい。今の今まで忘れていたよ、こちらも目が回るくらい忙しかったものでな。ただでさえ馬鹿な友人を拾ってく

るのにさんざ甚振られた拳句、ようやく解放されたと思いきや会う予定もない嫌いな人間が目の前にいたから苛立っているだけ」

「それは大変だな」

……他人事か。

「まったく件のお相手は話すら通じなくてうんざりするよ」

「フィー、この人は？」

黙って様子を伺っていたらしいナンテスが尋ねた。まったく、こちらは暇を持て余しているらしい王様です、とでも言ってみてやりたいところだが、適当な紹介に留めておこう。騒がれても面倒だ。

「ああ、こちらはヴィーと言う名だそうだが、随分影が薄い奴でうっかりすると存在を忘れがちになるくらいだから気をつけるよ。ヴィー、これはナンテス、私の古い知り合いだ……そうだ、ある意味お前とは気が合うかもな」

「何故？」

ヴィーが問う。まあ、確かにこのナンテスと気が合うといわれたらほとんどの人が首を傾げるだろうが。

「こいつはあのロイが好きだ。ヴィー、お前も私を気に入っていると言っていたらう」

女性のように美しいが男のロイをそれと知らず女として好む男、男として生きようという私を女として気に入るといふ男。どこか似ているだろう？ なんとも無為なところかな。

嘲笑ってやる。私を。彼を。彼はしかし、ぴくりとも表情を動かさなかった。ただ、こちらを澄んだ目がじっと見つめた。

「ええ！ この人がフィーに恋をしているって！？ あの、フィーは確かに細っこいですが、男で……知っていますか？ それでもというなら止めないけど……」

ナンテスは自分のことを棚にあげてそう言った。彼は幼いころの私といっても男装をはじめてからの私しか知らないし、私のことを



男だとそう信じて疑わない。ロイを女と信じて疑わないと同様に。まさに、恋は盲目。

「ほう。そうなのか？」

尋ねられて、王は問い返した。

「そうですよ」

「ふうん。貴殿の目は少々曇っているようだな。うむ、私とは似ても似つかない」

「はあ」

「だってロイよりこの人のほうが可愛いだろう？」

そう言うと、王はせっかく整えた髪をぐしゃぐしゃとかき乱した。つかまれたりしたこともあるので知っていたが、この手は大きい。

……私の頭を一掴みで持てそうなほどに。そう思ったとたん、あまりのことに呆けていたが、嫌悪が駆け巡った。

「なにをする！ 放せ！！」

蹴りを繰り出すと奴は数歩引いてこちらを満足げに眺めた。

「うん、その方が似合う」

ぐしゃぐしゃになった私の髪を見て、王は屈託なく笑った。力が、抜ける。

「あんまり自分を苛めるな、疲れているみたいだから少し休んでおけ。本番に差し支えるぞ？」

そう声をかけられ、怒りやら何やらでかっとなって、私は私より如何にロイがかわいらしいかを修辞句を駆使して伝えようとするナントスを引っ張って城の出口へ向かった。ともかくこの災厄の源をとっとと追い返そう。

「また後でな、フィー」

聞きたいことがある、などと。呪いとしか思えない言葉が背中か

ら聞こえたような気がしたが、無視した。

## 12・昔話

ナンテスを連れ、彼を見送るために城門のところまで来て、ようやく私は一息ついた。

「ねえ、フィー」

そのとき、私が一連の事情を話している間は沈黙を保っていたナンテスが声を出した。

「何だよ、用は済んだ、お疲れ様、もう帰れ。それとも袋代の請求か？ ああ、あの男のことなら尋ねてくれるなよ、もううんざりしてるんだから」

本当にヴィーにはうんざりする。私にはナンテスが理解できない。一部始終、ロイのしたことまで話しても、ロイさんはいたずらっ子だね、と笑う彼が理解できない。盲目的とは思っけれど、ローズ嬢をあのように許すルーカス同様、やはりナンテスの想いは、偽物ではないのだろう。

「違う違う。……フィー、どうして私のこと探しに来てくれたんだい？」

「まあ、お前があまりにかわいそうだったからな」

「本当にそれだけ？」

ナンテスの目が問うようにこちらを向く。ロイが関わらないところではこの青年はやけに鋭かった、と思いつく。しばらく会わないうちに忘れかけていた。

それにしても、かわいそうと思ったのだ、という理由では納得いかないほど、ロイと同じくらいにナンテスに対して私は冷血だと思われていたのか。否定はしないが、そこまでではないと思いたかったのだが。つらつら考えていると、ナンテスは静かに言葉を続けた。

「フィー、君が話したくないって言うなら無理には聞かないけどさ、昔いろいろあったんだろうな、っていうのは私でも分かる」

「なんだ、過去なんて、」

「関係ないと言おうとした。」

「関係あるんじゃないのか、探し物をしてた私になにかが、誰かが重なったんじゃないのか。」

「……」

本当に、やけに鋭いな。

さくさく歩いて、門から少し離れた。あそこでは通行の邪魔になる。日も随分傾いた。あと2時間ほどで舞踏会が、始まる。吹く風に、私よりも濃いナンテスの茶色のウェーブがかつた髪が揺れた。泣き黒子に少々垂れ目なところが色っぽいといえなくもない。ロイへの妄執を知らなければナンテスはまともだ。一体彼はどこで人生を間違えたんだらう。

「否定できない？ 嘘を、つくのが下手だね。相変わらずさ。君がああして、かばってくれたことはとても嬉しかったよ。ありがとう。もし過去のなにかがなくても、君は私をかばってくれたらうって、信じてはいるのだけれどね」

「正直に、庇うのもやりすぎで気になったって言えばいい」

「まあそうとも言っ」

「おい」

「冗談」

疑わしいというように睨んでやったら、ナンテスは肩をすくめた。

「いや、まあちょっと、かなり本音だけどね。あんまり抱えてないで話して楽になることもあるんじゃないのか、君はなにやら人に隠すところが多いように感じるもの。私だってそれなりに、友のことが心配なのさ」

……まあ、過去にいろいろあったから黙っていることは多いけど。本当、お前が私の男装に気付かないのは何故なんだ、奇跡か？

「後半に対して前半が占める比重が大きいと思うが。まあいいや、そんなに聞きたいなら話してやろうじゃないか。たいした話じゃないって後悔したって知らないからな」

「しないさ」

まあナンテスは聞きたがる割に口は堅いし、悪い奴でもない。彼が本当に少しは心配してくれているのも知っている。だから話してもいいか、と思う。今日に連なる1つの過去。悲しい記憶。

だが正直面倒かも。

「全部はちよつと話せないかな……。長くなるしな。お前を探しに行っただけ、素晴らしく短くはしょって話してやろうか。お前が探しても意味がないものを探していたからだ」

「フイーは、何を探したの」

ナンテスは、今回のことを言っているのではない。分かったのか。私と、ナンテスを重ねたって。仕方ない、話してしまおうか。

「父親と、母親だよ」

ああ、それは無益だった。もういないと知っていて探した。

「私が孤児だったのは知ってるだろう。目の前で死んだ、2人ともだ。殺されたんだ、あの時代に。闇にな」

そんな身上の人間は少なくない。現に、ナンテスも驚いてはいない。こちらを痛ましげに見てはいるけれど。事情は違えど彼だってあの時代母親を亡くした。ロイも父親を亡くしている。

「でも私が殺したような、ものだったんだ」

この国で闇というのは、竜の加護をなくした後、夜を支配した屍

鬼を中心とした集団を言う。人は恨みを抱えて死ぬと屍鬼になる。日の光の前には朽ちるが、夜の月や星の光、人の手による光を彼らは取り込んでしまう存在だ。屍鬼と総括されているが、その全てがぬらりと黒い色をしている以外、おのおの形は異なる。魂がその差異を生むという。獣のようなものも居れば、植物のようなものも居るが、人の形を取るものは極めて少ない。そして、生前の姿を取り戻すためのか、あるいは消えない恨みのためか、闇は人を喰らう。この国で守神とされる竜は、古の英雄との契約から、屍鬼の発生を防ぐため、人の埋葬される大地を国に結界を敷いて浄化して来た。英雄の子孫である王家の治める国を守ってきた。しかし、前王に至るまでの、昨今の王家が、血みどろの継承争いの末に竜との契約の証である冠を汚し、竜の加護が失われた。そして、屍鬼はどこからともなく現れ、瞬く間に国中に蔓延った。それから国は狂乱に陥った。

その上、だ。ある時、統率されるようなものではない闇を一人の人間が統べ、操ることに成功した。穢れた冠で以って。こうして、継承争いの発端となった王家の末裔が、闇をもって国を支配したのだ。はじめ、人々を襲っていた闇が悪戯に人を襲わなくなると俄かに国民はわいた。しかし、闇は、日中城に集結し、夜になると王都をまるで覆うように黒い集団となって歩き回る。自らを支える存在に寛容な「王様」は、闇に、好きに光を食らうがいいと言った。そうしてそれが日常となったのだ。気味のよいものではない。人々は門扉を固く閉ざし、闇を呼び寄せ光を夜は使わないようになって。夜は恐怖の中でひたすら朝の訪れを待った。こうして夜から光は奪われた。

それから君臨した王は竜を祀る神殿の勢力を排して独裁政権を布くようになった。闇の支配者である彼に反発するものは居ない。恐怖から人々は彼に服従した。国外に逃げるものも多きだったが、竜の

子の血が流れるとされる国の民であることへの強い誇りから動かないものもいたのだ。フィーの両親もそうだった。子供心に、どこか寂れて暗い王都の様子を不思議に思ったことを覚えている。

事態に反発し、竜の加護のない彼を、偽王と誇る者も時にはいた。そんな者たちを、王は闇を用いて次々に殺した。王に媚びへつらう者、恐怖政治を愉しむような輩だけが残り、もともと腐敗しつつあった王政はさらに腐っていった。やがて、後に王と呼ばれる一人の男が現れて神殿騎士や国の強者たちを従え、王も含めて闇を屠ることになるわけだが、そんなこと、誰も想像が付かなかった。みな、終わりの訪れない悪夢を見ているような感覚だったと思う。

……だから、あの男を人々は讃えるのだ。英雄の再来と崇めるのだ。私の両親を食い殺した憎き存在を払ったのは、彼。それを分かっている、私は彼を憎むことを辞めようとは思わないけれど。

話を戻そう。

ある、いつものように静か過ぎる夜のことだった。闇が、私の家を襲ったのは。

興味本位で、使わなくなってしまうこまれていた蠟燭を引っ張り出して火をつけた私のせいで。その行為の意味することが、よく分かっていたいなかった。闇は光を食らうのが本能だ。夜は光を立てないのが鉄則だった。光を立てた途端押し入ってきた闇に殺されても誰も文句を言うことは許されないのだから。

それなのに。明かりをつけて、私が奴らを呼んでしまった。

「二人は死んだ。俺は本当に、馬鹿だったよ。俺を隠して守って、二人は死んだ。」

そう、私が殺したようなものだ。

「俺は、押し込まれた衣装箱の隙間から全部見てた。当時は、誰も幼すぎた咎を責めなかったし、俺もなんでそんなことになったのか

良く分かってなかった。少し年をとると自分が何をしたのか記憶から知って、殺したいくらい自分を憎んだよ。俺、物心付いたころから鮮烈な色をした映像だけは覚えてるんだよ、だから忘れられない闇の黒。初めて見た蠟燭の火と、散った血の、鮮やかな赤」

鮮明に瞼に蘇ってくる両親の抜けていく命の色。

「……それで、鬱々としてて、自分がいなくなったほうがいいんじゃないかって思ってたあの頃、読んだ絵本にな、死ぬ気になって出来ないことはない、がんばりましようってあった。……なんて児童書だったかな、もう覚えていないけど。それで、預かられてた教会ではさ、善行を積んで死んだ魂は楽園で過ごすといずれまた復活を遂げるのです、って言っていた。俺は、そうか、必死になれば二人の生まれ変わりに会えるかもしれないって思った。生まれ変わりでいい、ただ、もう許しを請いたかった。どうしようもなく会いたかった。だから、目的地も分からないまま、ただ必死になって教会を飛び出した。王都の外に出て、ひたすら歩き続けた。夜なんか、本当地獄だったよ」

探しても探しても見つからなかった。闇から命からがらに、這うように逃れ続け、盗みやらなにやら悪いこともして、数ヶ月に渡るくらい放浪を続けた。飲まず食わずなんてざらで、見る間にやせ衰えた。放浪とは言っても幼い足では遠くにいけず、ずたずたになった交通網もそれを許さなかったが。

結局、情けないことに、元いた王都からあまり離れていないところをうろろろしていた。そのため、今も生きているともいえる。

「一ヶ月以上も続いたのが奇跡だと今は思うよ。で、あるとき山中でぶっ倒れて、石探してた今は亡き師匠に拾われてさ」

こんなところにいる事情を話せといわれた。長いことこんな生活をしているというと驚かれた。命を救ってくれた人だったし、しぶ



しづ正直に話したら張り倒された。

「前世も来世もない、その命はその一度きりよ。だからあなたのおとうさんとおかあさんくはもう探したって見つからない」「ないものは、ない。かといってどんな奇跡も同じ命は2度作れない。はつきりと彼女は言った。

そんな師匠はもう居ない。彼女の命も二度とないから、もう会えないのだ。

「死ぬ気になって、というのは死ぬことそのものを目指すんじゃないのよ。あなた、償いに死のうとしていたでしょう？でもあなたの命はたくましかった。何泣いてるの、生きたいと思うのが罪なものですか。あなたのご両親はあなたにそのたくましい命を守って、もつと生きて欲しくてそのため死んだのでしょうか。あなたのせいじゃない、あなたのため亡くなられたのよ。それを違えるならあなたは両親を侮辱していることになる。彼らはあなたが生きていることを喜んでくれると思うわ。

……それでも蠟燭をともした自分の行いを罪と思うなら、私の言うことを卑怯とんでもない。痛みを覚えるな、なんて言わない。それでも、生きなさいよ。いない人を探すために人生を尽くすのではなく、目の前に生きる人を力いっぱい想いなさい。例えば、そうね、初対面でなんだけど私ではどう？」。師匠は、そう言った」

そう言って笑ったのを今も思い出す。

包み込むような笑みと言うよりか、豪快な笑顔だった。でも、なぜか両親の笑顔を思い出した。

正直、長ったらしい説教だと思った。似たようなことは言われたことがある。でも、彼女の言葉の中に私の胸には刺さるところがあった。私は死んだほうがいい、と思いつつ、きつと生きたかったのだ。常に苛む両親への罪の意識に、苦しんでいた。謝って、もういいよ、と言われたかったのだろうか。私は卑怯だ。でもそれを罪

でないと言った。私が生きたいと思うのは罪でないのだと。今を生きていいだろうか。おとうさん、おかあさん、それを、許してくれるだろうか。そう、たくましい師匠の胸に縋って泣いた。膿が出て行くように、とりついていたものが消えて、自分のために目の前にいる人のことを考えて生きてもいいのかと思ったのだ。傷跡はいつまでも残っていて。

こうして、「もういない人」を探す私の旅は終わった。

「で、ないものを探しても仕方ない、か」

「そ。両親のことは忘れないよ。忘れられるわけがない。でももう探さない。祈るときも、謝るんじゃないくて、お礼を言えるようになった」

「それで、よかったんじゃないかな」

「ああ、そうだな」

そう思う。

「で、なんとなく今日のナンテスは幼い日の俺を思わせたってわけ。全然違うのに、変な話だな」

決して落ちていない箱をこれから一晩中でも探すだろうと思われたナンテスと、決して会えない人をひたすらに求めて彷徨った自分と。

「成程。愛を求めるところは似ているかも」

「そ、そうか」

そうか？

「つまり。フィーがそうやって生きて、私も今日は命を救われたわけだ。人生は分からないものだ、私は今日ロイさんへの愛のために殉死したかも分からない」

ナンテスもだが、ロイへの愛に加えて、ルーカスのローズ嬢への愛のために私は首と胸が離れていた可能性はあるな。どちらも盲目的過ぎる。

「感謝を捧げようじゃないか、フィーのご両親と、師匠と、君自身に！ 命が命を救う。愛と命は連鎖する、世界はこうして廻っていく！！」

「……」

壮大だな。また、詩の朗読の口調になっているし。まあふざけているようでいてお前がいつも本気なのは知っているが。

だがそんなもの、かもしれない。

「フィー、今日はありがとう」

「いや」

まあ、こんな理由だったし。

ふと、早口にナンテスは言った。

「フィー。私は、無知は罪ではないと思うよ。それはどうしようもないこともある。まだ物心の付かない幼子は特に。かれらに学べというのは酷だ、無理な話だろう。幼子の無知やつたない悪戯ゆえになにかが起こったとすれば、それは時代やら環境やらが悪かったのだと思う。それごときで崩れないのが平常、大人が守るべき平和というものだろうしね。ただ、無知であることから、それがために時に過ちもすれば人を傷つけることもあるから、人は学ぶようになるんだろう」

「そう、だな」

早口なのは、照れているのか。これは、彼なりの励ましだろうか。それらを一気に言い終えると、

「というわけで。じゃあね。」

いきなり別れを告げられた。

「うわ、あっさり」

だが、そういうナンテスのあっさりしたところが嫌いではない。

長い話を遮らずただ聞いてくれた。それは、嬉しかった。

「長い話聞いてくれたから、いろいろチャラにしてやるよ！ついでにロイへの恋も多少は応援してやる〜！！」

たまに遊びに来たっていい。ロイには多少耐えてもらおう。まあ、今までもそう諫めたり反対した記憶はないが。

去っていく背中に告げると、こちらを振り返らないまま、片手をあげて振っているのが見えた。

もう片手に、ロイによって切られてしまった、底の抜けた袋を持っているところが、ナンテスらしくった。

## 閑話 4

ナンテスの見送りから戻ってみると、宴会場、もとい舞踏会場はほとんど準備が終わりつつあった。職人の方々も鷹揚に構えているし、立食の用意がなされ、後は客を待つばかりといったふうにはほとんどはなかった白い豪華な生花が活けられて揺れている。赤い絨毯に華やかな天井、ピンクの壁と来て、白と緑は目に涼しくてよかった。「フイーー！！ 大丈夫だった？ さつきローズ嬢に謝られたよ、なんか斬りかかられたとかって！？ 怪我はない？」

「大丈夫。大げさだな、刃に触れてもいないのに」  
持ち場では、ロイが立ち上がってうろうろしていた。私の姿を見つめるなり駆け寄って、確かめるように頬に手を添えられた。熱気の中でも彼の手は冷たい。

「……ごめん」  
そのまま、そっと謝られた。

「どうして」

「僕が余計なことをしなければ」

「いいって、ナンテスは行き過ぎなところもあるし、なに言っても聞かないし。ロイが遠ざけたくなるのも分からなくはない」

「……でも」

「まあ、ちょっとは優しくしてやれよ。悪い奴じゃないんだ。そのうちロイのことも分かってくれるさ」

多分な。

「彼の人柄が嫌いなわけじゃないんだけど。あんなふうだし、あんまり男扱いされないから苛々してて、それがピークに達しちゃって」  
私なら女扱いされなくてもいらつかないしむしろ喜ぶのだが、彼と私では事情が違うからな。

「そうか。まあ最近、ビスクさんには中性的とか言われてたし、工房の奴らにも分かかって相変わらずプロポーズしてくる奴とかいる

しな」

納得してしまう。しかしいつも平然としてる割に怒っていたのだから。長い付き合いなのに、分からなかった。

「まあそれもあるけど」

なんだ。じゃあ、他に何かあったか。

「いい。なんでもない」

「いいのか」

「ともかくフィーが無事帰ってきたからどうでもいい」

それでいいのか。

「なあ、とりあえず手を離して欲しい。そして櫛を貸してほしいんだけど」

先ほどから彼は私の頬に長い指を添えたままだ。もう彼の手には私の頬の温み移ってしまっているくらい時間が経っている。

「あ。ごめんね、つい」

手が外されてほっとした。実は見上げる体勢で首が痛かった。

つい、か。そういえばお前は天然にそんなことをする奴だった。

作威的な王とは違って、いいことだ。

「櫛ならこの辺にあったと思うけど。あ、あった。どうしたの櫛なんか……」って、随分髪が乱れているようだけれど？」

「ナンテスを送ってきたんだが、外の風が激しくてな」

全く心地よさから程遠い嫌な風だった。大きな手と粗暴な手つきを思い出して溜息をついた。なんなんだ、私が身なりを整えているのは滑稽とでも言いたいのかあの王は。

「……風、ね」

「なんだよ」

「ううん。ねえフィー、僕が梳きなおしてあげようか？」

櫛を手に、ロイがにっこり笑った。なんだか怖いがどうしてだろうか。

「い、いや、自分でやるよ、それくらいは出来る」

手先だけは器用だからな。自分の髪を扱うのはあまり得意ではな

いが。ただ髪をすくだけのこと、器用さを発揮するまでもない。

「綺麗にしてあげるのに」

「いや、適当でいいって」

少し落ち込んでいるロイをいぶかしげに見つめながら、私は髪をさつさと整えた。結ぶほどの長さではないので、することはほとんどない。ロイって、そういうえぼトリミングが好きだったっけ？ 昔、近所から預かった犬の毛を率先して優しい顔つきで梳いていたの思い出す。梳きながら、「フィーの髪に似てるね」とか、そういうえぼ言っていたような。……というか、私は犬のような髪なのか？

「そうだ、フィー、職人の人たちで実演のために呼ばれた人たちも最後の30分は舞踏に参加してもいいんだって言ってたけど……」

「うん、踊らない」

手はともかく足は結構疲労している。ナンテスを追いかけて再発した筋肉痛のためだ。

「私は休んでるよ。ずっと彫金した後になるだろう。その頃にはきつと、くたくただ」

ロイは、風の悪戯が何者か知っていた。

フィーが王に会ったというのは、ローズ嬢が教えてくれた。不思議そうな顔をして。「なんだか嫌がるロイの髪をかき混ぜていたわ。誰かと思ってよく見たら王様なんだもの、びっくりしちゃった」と。

それを聞いたのは、フィーはまだ帰っていないときのことだった。彼女のことだ、たぶんナンテスを送りに行ったのだろうと思った。それにしても王、彼は、フィーをどうしたいんだろう。彼女に寄せ

るのは、単なる興味か、それとも、好意なのか。そんなことを考えていると、王は、説明係となつていられるらしい彼の補佐のクエインと共に現れた。クエインが進行の具体的な説明をするのを聞きながら、王の様子を伺う。銀糸で末端に細やかな縫い付けのなされている以外、無駄がとことん排された白い衣装。黒い髪と白い服のコントラストは、その精悍さをストイックに引き立て、彼によく似合っている。王の蒼い目は、楽しげに場内を眺め回し、やがて自分に止まったように思われた。

視線に気付いたのだろうか。

僕の近くにフィーがないことを少し訝しんだようだったが、彼は笑つてこちらに手を振つた。回りの人たちが驚いたようにこつちを向いてくる。当然だ、何を考えているのだろう。放っておくわけにも行かずに、仕方なく手を振り返す。……相変わらず、陽気なことだ。補佐が咎めるような視線を向け、彼が苦笑して受け流しているのをぼんやり眺めていた。クエインが再び話し出すのに合わせたように、不意に、その存在感が嘘みたいに消える。人々は王からその補佐へと注目しなおす。

相変わらず王様は、気配を断つのが得意なようだ。今日の彼は、冠を嵌めていた。フィーが今も欲しがっている冠。あれが全ての発端で。

クエインの説明を聞きつつ、そんなことを考えながら彼を眺めていると、注目が完全に収まった頃になって、彼はこちらにまたもや目を向け、「フィーはどうしたのかな」と口の形だけで聞いてきた。そしてなんとも挑発的な笑みを見せてくれた。その意味は。

多分問うまでもない。本当は分かっている。あまりに認めたくないだけで。

ヴィー。過剰な好意をフィーに寄せないで欲しい。彼女をかき乱さず、そつとしておいて欲しい。

そう思いながらも、彼女が何に傷つくかを分かっているから身動



きを取れない自分が齒がゆく、彼女を傷つけてもなにかを動かして行く彼に憧憬と期待と憎悪と、そして哀れみが混じった複雑な感情がある。何も知らなければ何の枷もない。だが彼女は振り回されて傷ついていくだろう。彼はそのどちらも理解していない。だから望むままに動くだろう。聡明と言われる彼ならいずれその意味が分かるかもしれないが、その時には、多分すでに手遅れだろう。もう、どうしようもなく傷だらけなのに、さらに深く傷ついてしまったら、彼女はどうなるだろう。そんなことを思う、幼い頃からただひたすらに彼女だけが好きだった自分は、彼女を誰より知っていて、だから動けない。

やはりがんじがらめに過去は自分を縛っている。

それを自覚するから、居心地の良い今は、もう崩れ始めているのを最近感じて焦ってしまう。彼女を『少年』と偽ることは年を経るごとに難しくなる。彼女は気付かないだろうか、ゆっくりでも確実にその体がその本来の性に則った成長を続けているのだと。

ただ穏やかな関係。彼女にとっても近いのにどこまでも遠い場所。そこにずっと居たいかと言われれば正直よく分からない。

けれど、だれより傍にいたい。これだけははつきりと変わらないもの。

そう思っている自分がいる限り、王が現れなくても、長くは、樂園は続かなかつたのかもしれない。

ナンテスにいつにも増して苛立ちを覚えたのは、自分が昔から変わっていないような錯覚を覚えたから。彼女にとつての自分が、いつまでも兄で、気取らずいられる中性的な友達であることに不満を抱いていたと気付き愕然とする。けれど今のたち位置が王によって揺らいでいくのを見て、それが全てなくなったとき彼女にとって自分は何になるのか、今度は怖くなった。臆病にも。

だから、もつと別な存在になろうとしても、いきなりには難しくて。

かといって自分の望むとおりに動けば、間違いなく彼女を傷つけ

てしまう。

傷ついて欲しくない、それなのに。

王だけでない。

無情に過ぎていく時間は、人をそっとしておいてくれない。

### 13・舞踏会場にて

定刻となり、舞踏会は始まった。

弦から吹奏、音色様々な楽器を構えた一流の音楽家たちによって華麗な宮廷音楽が響き始めると、開かれた扉から夜気を纏って、目に眩い人々が次々と入場してくる。そうして会場は見る間にとりどりの花を撒き散らしたかのような状態になっていく。

人が入るその度に忙しくその名前が読み上げられる。伴って登場する人物たちに、時に歓声が上がったり、息を呑んでみたり。

いつも思うのだが、貴族は自分の名前を最初から最後まで正確にいえるんだらうか。無駄に長い上に発音しにくい。彼らが数多く背負って喘いでいる、あるいは胸をそり返して支えている生きるのに必要のない重さの象徴のようだ。……まあ、その重さへ貢獻するもので生きている私の言葉ではないが。

なにせ闇がなくなって以来久方ぶり、そう、10年ぶりになるかの集いに皆気分を浮上させているようで、舞踏会場はなかなかの盛況ぶりだった。よく彼らが生き延びていたものだ。赤の他人の私が感心するくらいだ、このような場で再び知己と出会うのは一人の想いがあるだろう。お葬式のようにうら寒い舞踏会もあると聞くから、それに比べれば、今回は全くの成功と言っていいに違いない。城は広いので、相当な数の人間が収まってなお息苦しさを感じることはないが、なかなかの喧騒ぶりだ。

その中心には、例の冠を被ったヴィーの姿があった。まあ、彼の祝賀の会と言ってもよいから当然だ。ひっきりなしに彼の元へ人々は寄せていく。そこに含まれる他国の王族にも怖じることなく、やはり一人の王として泰然とそこに居る彼は、昏間のふざけた人物とはなんだか別人のようだった。エレガントな艶を感じさせる、私見を抜きにすればかなり魅力的な男性だろう。私にとっては軽く生き

ているだけの未知の生物のように思われるが、私を除く大勢の人々にとつてはそうではないらしい。伴侶もない彼は、今日この場に  
いる女性たちの一番のお目当てのようだ。熱い視線とアピールを受  
けて、笑顔で応じている。やはり軟派なのだろう。しかしそんな彼  
は、すこし踊ってみせるだけで、大胆に力強く女性をリードし、見  
事な足捌きと存在感を見せ付けて場を圧倒する。運動神経が良いの  
だろう、上手いものだ。認めがたいが、ただの軟派ではない。

シャンデリアの煌き、振舞われるご馳走、鳴り止むことのない交  
響曲。上品に囁きかわされるお喋りと陰謀。なるほどな、これは私  
にとつて異世界だ。

ああ、その中から一際美しい青年が私のもとにやってくる。これ  
は、夢だろうか。

「フィー、なんとか付いてきた人たちを撒いてきたよ。なにか手伝  
うことはある？」

馬鹿げた空想から醒めるべく、私は目を瞬かせた。

なんてことはない。美しい青年は、先ほどまで、エルフアンド工  
房の宣伝活動、もとい貴族並みの社交を行ってきたロイである。な  
るほど、この絢爛豪華な風景は彼の際立った優美さにしっくりと馴  
染む、と思う。勿論、術具の研究にふけてしばしば寝食を忘れて  
ぼろぼろになり、くたびれた工房の木の机の上で薬草茶の配合の実  
験にいそしみ、あるいは菜園で泥まみれになって収穫物の人參を片  
手に微笑むロイが私にとつてのロイだが、今の彼を見てそれを信じ  
てくれる人が果たしてどれくらいいるだろうか。ナンテスも絶賛す  
るところのロイの流れる銀の髪は、今夜纏っている服と同様に黒い  
絹のリボンで上品に一つにまとめられている。私よりも白いんじや  
ないかと思われる肌は、この眩しさの元でも一つとして欠点を見出  
せない。お陰で後ろから彼を見るものはその美しい襟足に酔いしれ

るのではないだろうか。見慣れない人にとってはかなり毒だろうと想像はつく。それに惹かれてかは分からないが、舞踏会が始まってすぐから今まで、ロイは随分長いこと高貴な方々に連れ去られていた。

「手伝いなら今はいらないよ、ありがとう。一段落つけて、ちょっと休憩していたんだ」

彼も疲れただろう。人によるが、私は1時間に一度の休憩を挟むことにしている。なぜなら意識的に休憩を取らないと、私は廃人になるまでひたすら細工に取り組む悪癖がある。刃物を扱う職人もいるから、敷かれた結界を越えてまじまじ顔を寄せて眺める者はいないが、私に与えられた舞台にはけっこうな数の人が集って遠くから見守られていたらしい。しかし、少し前に始まったワルツの音色にほとんど散っていったという。私はひたすらに集中していたので、ワルツが始まるまで人の存在に気付いていなかったが、少し前にルーカスを伴って様子を見に来たローズ嬢が教えてくれたのだ。この調子で頑張ったら、さらに人気が出ちゃって大変ね、と。それなら望むところだが。

「はい、お疲れ様」

「あらどうも」

ロイが持つてきてくれた果実の生絞りをいただく。さすがにおいしい。こんな会場に来てまでどうかと思うが、なんとなくいつものように作業机に並んでかけてロイとまったりくるくる踊る人々を眺めていると、鈴を転がすようなお声がかかった。ロイに。

「ロイ様、こちらにいらしたんですの!? 探し回りましたのよ、先ほどはあのよういきなり去ってしまわれたから、私、びっくりしてしまいました」

現れたのはなんともかわいらしいお嬢さんである。若草色のドレス

スの濃い茶色の髪と勿忘草の瞳をしたばら色の頬。今日作ったシンブルなペリドットの耳飾が似合うかもしれない、と私は自然とそんなことを考えた。一種の職業病だ。

彼女のような女性は運動は苦手な方が多いのでどれほどかは断じかねるが、息が上がっていることからロイを探すのに彼女なりに結構苦労したのだろう。

「ああ、シェリル嬢。申し訳ありません。私はこの細工師の保護者のようなものですからあまり長くここを離れるわけには行かないのです」

ロイはにこやかにそう言った。保護者と仰いますか。まあそうですけれど。

「ではこの人が先ほどお話をなさっていた腕利きの細工師の方？」  
こちらに少し眦をあげた目が向いた。訝しげな顔をしないで欲しい。

「おや、ご紹介いただいたようで光栄です。改めて、フィオレンティーノと申します、シェリル嬢」

にこ、と微笑むと、少し彼女の雰囲気や和らいだようだ。私も仕事が出来れば、このように追いかけてくる人もいただろうか……踊れないが。

「私はシェリルよ。ご機嫌麗しゅう、フィオレンティーノさん。

私、どうしてもこの方と踊っていたきたいの、あなたからも説得願えないかしら」

ほう？ うん、ロイのきらきらしさには少し劣るが、それを補ってかわいい女性だ。小ぶりだけれどスタイルが良くて、元気なお嬢様。大事な兄弟子の踊りの相手として不足はない、かな。女性が誘ってこの国ではマナー違反でない。禁止な国もあるようだ。職業などの差別を考えると、不思議なお国柄だ。実際、あまり積極的には誘わないものらしいが。おそらく彼女も勇気を出し、思い切つて

のことだろう、なにせせつかくの機会である。

丁度、誰でもいいからロイと踊って欲しかったところだ。そうでもない、今も鈍く存在を主張している私の筋肉痛が報われない。そんなわけで、彼女にご協力いたしてさしあげることにした。

「ロイ、こちらから頭を下げて請うべきかわいらしいお嬢様のお誘いだ。まさか断ったりしないよね」

「……フィー」

だめだ、今日はそのような助けを請う表情には従わない。目をそらしつつ、シエリル嬢に聞こえないようにロイの耳元で囁いてやった。

「宣伝」

ぼそり、と呟いた。私が知らない相手と言うことは、新しく開けるべき市場を彼女が抱えている可能性は高いのである。曲もどうやら変わり目だし踊るのにはうってつけた。

彼にそれが分からないはずがないのに、どうしたというのだろうか、ロイは素直に頷かず、こちらを見ていたが、諦めたように溜息をついた。

「わかった」

ロイはしぶしぶといった様子で立ち上がると、優雅に彼女に腕を差し出した。彼女の赤い頬がさらに紅潮する。その気持ちはよく分かる。可愛らしい。

「ああ、シエリル嬢、ロイをはじめて誘ってくださった御礼にこの耳飾を差し上げましょう」

初々しい様子の彼女に、ペリドットの嵌めこまれた花をモチーフにした耳飾を手渡すと、彼女の顔は喜びに満ちた。

「まあ、綺麗ね。素敵だわ…でも、頂いてしまったてよろしいのかしら？ 私持ち合わせがありませんが」

「ええ、お礼ですから」

下心はたっぷりですが。どうか工房の名を広めてくれ。……お礼

の気持ちもある。

「ありがとう」

笑顔を浮かべ、ロイの手をしつかり引っ張って少女は去っていった。輪舞の中心へ。

暇になったので周りを眺めてみると、齒噛みして二人を見つめる女性が幾人もいる。ロイよ、なんとももてることで羨ましい。美しさというのは力だなあ、と思う。人を惹きつける直接的な力。

因みに今日のロイはいつものしらない手袋をしている。踊りの際、直接女性の肌に触れるのはよろしくないというわけで、このような場では当然の礼儀だが、それだけで彼の場合、いかにも王子様に見える度合いが増しているように思うのは私だけではないはずだ。そんなロイの踊りぶりを、第三者の目で見れるとは。自分で踊っていたら持てない視点で見ることが出来る。楽しみだ。

しかし、同じように生活しているのに、あの洗練されたしぐさが私に身につかなかったのは一体どうしてだろう。去り行く彼を、残った飲み物をすすりながら考えていると、

「性格の違いじゃないですか」

と言いながら、クエインが現れた。

「はい？」

いきなり現れて何を言うのだろう。

「あなたとロイさんのしぐさの違いについても思いをめぐらしていたのでは？」

正解です。何故分かる？

「あなたも随分顔に出ますね」

ふ、と笑われた。先ほどに加えてなかなか失礼な口ぶりだと思っていると、彼は言った。

「おや、お気を害してしまわれましたか。すみません」



「あの」

「なんでしよう」

「今、私話していませんでしたよね」

「ええ」

怖い。顔を見ているだけでそこまで分かるものなのか。

「クエインさんって結構、言う人だったんですね。俺、知りませんでしたよ」

会ったばかりだが、冷たそうに見えて感じのいい穏やかな人だけ思っていたのだが。

「普段はかなり気を遣っていますよ。うっかりぼろが出ないうちにかかわりを断つように心がけているのです。つつい、思うがままにいるいると言ってしまうから」

思ったままに。それはかなり危険だ。

「じゃあこのような場合は、」

「苦痛ですね」

そうだろう。化かしあいの場だ。

「平民の彼が王として立てば、こんな面倒な場も少しは変わるかと思っけて付き合っています、なかなか難しい」

へえ、と言う他ない。あんまり私に語り過ぎではないだろうか。

そもそも何をしにここへ、と考えて、一つしかないかと気がついた。

「ひよっとして、細工を見にいらした？」

「ええ。息抜きも兼ねてね」

のんびりとクエインさんは言った。

「すみません、もうすぐまた作り始めます。ただ少しだけ、お待ちいただけないでしょうか。ロイの踊るところだけ見たいんです」

「ええ、もちろん待ちますよ。あと、ここに来たのは他にあなたに伝言を届けに来たのもあります」

「伝言？」

なんだか嫌な予感が首筋を這う。

また会おう、と言っていた声を思い出した。案の定、クエインさんは言った。

「王があなたに会いたい、と。聞きたいことがあるそうです。舞踏会の後に、少々お時間をいただけないでしょうか」

「無理だと言ったら？」

「謹んで遠慮したい。」

「そうですね。今日は職人への慰労もこめて城内での晚餐が予定されていましたが、あなたの分はキャンセルとさせて、」

「行かせていただきます」

「それではお願いしますね」

なんとも、してやられた気分だ。晚餐に使われる間に、ダランシアの絵、『ある晴れた日に』がある。見たい。私のその欲求を、王の補佐は見抜いていたものらしい。それにしても私はこの手の交渉に弱いが大丈夫だろうか。ロイが良く使う手だ。

人々のさざめきだけだった場に、その時再び楽の音が響いた。

「おや、次の曲が始まったようです」

「そうだ、ロイはどこへ」

なんだか速めの曲調だが大丈夫だろうか。

そんな心配は無用だった。いつせいに踊り始めた人々の中に、ロイを探すとすぐ見つかった。彼はとても目立つから。今の、意図的に存在感を放っている王様と張り合えそうなくらいには。とりまく人々も自然と彼に目を奪われている。私のように。

なんと優雅に踊るのだろう。

流れるみたいに滑らかに、フロアを彼が動いていく。王子様呼ばわりも納得できるくらいに、彼のダンスは見事だった。相手の女性も踊りは得手であるらしい、楽しそうだ。やはり下手な私が相手だったから、ぎこちなさがあっただけで、彼はもう十分に踊れるよう

だ。練習の成果が発揮できているのは、とても嬉しいが、何か少し寂しい。……寂しい？ なんだろう。

不思議な感想を心が漏らした。

まあ、兄に恋人が出来る妹は寂しいものと聞くしな。逆もあるというが。そう思つて私は納得した。

いや、それよりも、だ。工房の宣伝の旗でもつけておくのだったと少し抜けた感想を抱く。いけない、ロイの儲け優先の思考に毒されている。そんなことはしなくとも、彼は意外と装飾品を多く身につける人だから、それで十分、価値のわかる人は彼にその作品の場所を尋ねるはず。それでいい。

舞台はやがて人々が動きを止めて見入ってしまうために2人の男の独壇場となった。

ヴィーとロイは色彩の上でも対立していたけれど、気性が表れるようなダンスも二人は全く違っていて、まるで補色のように、お互いを引き立てていた。色で例えるなら穏やかなロイが青、王様はオレンジだろうか。

踊りが終わると、ロイはこちらに顔を向けた。よくやったな、という思いをこめて笑顔を向けたのに、彼はなんだか私の顔を複雑そうな目で一瞬見た。……なに？ 嘲笑ったわけじゃないんだが。私の戸惑いが伝わったのか、彼はいつものふんわりした笑みをこちらに向ける。怒つたのかと思つたのでその顔にほっ、と安堵する。それからロイがこちらへ来ようと足を踏み出したのだが、いきなり、わっ、とばかりに王とロイには女性たちが群がって。続いて男たちが。彼は様々な人に囲まれて、あっという間に見えなくなった。

「……うわ」

「王はさておき、凄いですね。ロイさんは実に人気者だ」

確かに、すごい。まさかあれほどまでとは思わなかった。宣伝効

果はあるだろうが、貴族でないのに、この場であんなに目立って後々大丈夫だろうか。無駄なやつかみを買わなければいいけれど。

「まあ、元はといえば王も平民ですから大丈夫でしょう」

……もはや顔を読むのでは済まされないと思う、クエインさん。

「はあ。今日はいいつに対抗しようかと思ってたけど、やっぱり無謀だと実感したよ」

「そうですね？ あなたもここに座らずに動き回れたなら、そこそこ女性の注目を浴びたことと思いますが」

「そんなことはないと思う。なにせ今日は二人も目立つ奴が……つて、すみません、つい」

うつかり敬語を話してなかった。

「いえ、謝ることはない。苦手なんでしょう、敬語が。私はこだわりませんよ」

「でも、貴方は」

「私が敬語で話すのは、こちらが落ち着くし習慣みたいなものです。だからあなたも好きにすればいい」

「……それなら助かる。そう言ってくれたなら引き下がるなよ、私はもうこのままで、次会っても話し方は変えないからな」

「構いません」

クエインさんは笑った。笑うと彼の冷たさが消えて、少しとっつきやすく感じる。

「じゃあ遠慮なく……ああ、そうだ、細工見たいんだっけ？ もう十分に休憩取ったしな……。踊りの方も一段落したみたいだし、始めるか」

今日は主に指輪を作っている。大きな器械や火を必要としない工程だけ見せるために、することは宝石を金属に埋め込む石の彫り留めと金属に装飾を彫りこむ彫金だ。ジュエリーが細工師としての私

の専門で、全ての工程を一通りこなせるが、彫金と石留めは私が一番得意な作業でもある。

「ほう。タガネというのを実物で見るのは初めてです。すごい数ですね」

ずらり並んだ、黒い鑿で金属を彫る。70本はあるだろうか。その中から今から使うものを一本選び取った私に向かって、クェインは驚きの声を上げた。

「うん、それぞれ彫り具合や用途が違うからな。俺はこれくらい使う。いろんな表情を出したいから」

そろそろ最後の作業に取り掛かるうか。

「おや、指輪はもう作らないのですか」

彼が問うのも無理はない、私が作業机に持ち出したのは、金属の長い板。

「ああ、残念だったな。でも面白いものを見せてやれるよ」

ジュエリーだけで腕を見せたかったが、小さくて見るのが難しいものよりも、もっと分かりやすいもので。

これは、ある付き合いの長い宝飾店に頼まれていた仕事。闇の跋扈で失われていたらしい、その店の看板作りである。家の人と思えば、私が今から作るのは冠。そう考えることにする。

それからは一言も発さず、金属を彫っていくことに没頭した。

## 14・勘違い

会場に、割れんばかりの拍手の音がした。腕の立つ職人ばかりを呼んでいたため、今夜それはとりわけ珍しいことではなかった。けれど、それはますます大きくなるようなのだ。踊りにも、貴族連中との語り合いにもうんざりしていたこの耳に飛び込んでくる歓声。その方向は。

「おや、一体何事ですかな」

「フイー、か？」

「フイー？」

話していた相手がいぶかしげな顔をしたが、適当に誤魔化す。

彼には悪いが、一言断つて、音の元へと赴くことにしようか。もととフイーを見に行くつもりではあったものの、次々に誰かに捕まってしまうて行けないままだったから、丁度いい機会だろう。

「よし、私が様子を見てこよう」

「ヴェイエア王!？」

俺は呼びかけの声も無視して、さっさと彼女の元へ歩き出した。

やはりエルファンド工房のためのスペースに、人々は集っていた。こちらに気付くと、色とりどりの野次馬の壁は開けて道ができる。そこを抜けて歩きついた場所で見たものに、俺は言葉を失う。

竜がいた。

いや、それは錯覚だった。

ただ一瞬、一度だけ出会ったことのあるあの竜が、そこにいる、

とそう思った。それが彼女の彫り物と本気で分からなかった。色も、質感も、大きさも違うのに。たかだか金属の板に彫られた平面の表現であるのに、錯覚したのだ。歓声を上げる人々の気持ちも飲み込めた。

それだけ、それは竜だった。

鋭く煌く、その鱗の一枚一枚が。こちらを見据える、感情の伺えない、人の理解から遠いところにある笑みを浮かべた目と牙の覗く口元が。黒く光るただの石で出来ているはずの瞳にはまるで、命が宿ったようだった。

フィーはというと、あたりの喧騒に構わずなにやら竜の脇へと装飾文字を彫りこんでいる。騒がしい音は一切聞こえていないらしい。

「フィオレンティーノはやはり国宝級の才能の持ち主ですね」

いつの間にもやら隣にいた補佐が言う。どこに行っていたかと思えばこんなところにいたのか。伝言にやっってからもう随分たつというのに、ここで彼女の仕事を眺めていたらしい。正直羨ましい。

「あれは、なんだ」

「看板だそうですね、宝飾店の」

よく見れば、竜は困うようにして宝飾品の上に立っている。なるほどな。

あれは一つの店で収めるにはもったいないくらいの出来ですねえ、とロイは呟いた。まったくだ。

「あれを、俺に献上する気にならないかな」

「そんなことに権力を使っていると、竜の血に殺されますよ」

「冗談だ。いや、少し本気か」

「その宝飾店は観光名所になるな」

「そうですね」

彼女を表に引つ張りあげたのは俺だが、多少心配だ。これだけ耳目を集めると、それだけ性別に関してはばれる危険が高まるだろう。

「フィオナ」

「……」

早速ばれたか？

変なところは鈍感なはずのクエインの呟いたその名前に、少し緊張が走る。お固いこいつにはばれたならば彼女は細工師資格を剥奪されかねない……が、どうかな、国宝級と認めた人間だからひよっとすると。忙しくそこまで考えていると、クエインは言葉を続けた。

「とか、王は間違っていたようですが、『フィオレンティーノ』ですからね。あれだけの人物の名前をすっかり間違えるほど、女性に飢えているんですか、しっかりしてください」

「ああ、職人名簿のことか」

一瞬焦ったのを取り繕う。

「そうです。書類不備には気をつけてくださいね、余計な労力は使いたくありませんから」

ああ、クエイン。お前が仕事人間で、さほど女に興味のない男で本当に良かったよ。相変わらず変なところで鈍くて助かった。

「なんだか、今王に馬鹿にされた気がしたのですが気のせいでしょうか」

「いやいや、いつだって優秀でありがたい部下だと感謝していると」

「心にもないことを」

「可愛くないな」

「すみませんね」

「心にもないことを」

「……」

「……」

いや、こいつのことはどうでもいい。



「フィー」

「……ん？ ヴィ、じゃなかった王様？」

作業を終えたらしく顔を上げたフィーに近づいて声をかけると、額に浮かんだ汗を拭いながら彼女はこちらを嫌そうに眺めやった。せつかく乱してやった髪が整っていて残念に思う。

「お前に会いに来た。この彫り物、思わず竜と間違えたよ。相変わらず恐ろしいほど良い腕をしているな」

「ありがとうございます、王様にそのような言葉をいただけで身に余る光栄です。私は少し外の空気を吸ってきますので申し訳ありませんが失礼させていただきますそれでは」

「……おい、フィー？」

一息に言うと、フィーは押し寄せる人々を掻き分け、去っていった。その速いこと。呆氣にとられるうちに、その場にやってきたばかりらしいロイが、彼女の後を追っていった。

いきなり取り残されて、みな、啞然とした顔をした。一体何が起こったのかという顔でこちらに目を向けられても困る。俺が一番困惑しているというのに。

「……何故呼び出したいなんていうのかと思いましたが。お知り合いだっただのですか？」

「ああ、少し、な」

「へえ。随分な嫌われようで。彼、敬語は苦手だと言っていたのに、すらすら述べるほど嫌っているみたいですね、あなたのことを」

俺を嫌っている。

そう言われ、傷つくべきところだろうが、顔は笑ってしまう。あ

のひとを思い出して。

「そこがいいところだ」

「王様の性癖についてとやかく言いたくはありませんが、仕える主が変態というのは我慢なりませんね」

「とやかく言っているじゃないか。まあいい、伝言は伝えたんだろ  
う？」

ええ、とクエインは首肯する。ならばいい。あとで会うことは出来るのだから。というよりどこへ行ってしまったか、もはや分からない。あつという間に少女は姿を消していた。

気付けば走っていた。

「ぜ、ぜえ、うう、げほっ」

息が上がって酸素が足りない。

「フィー、どうしたんだ、走り出すっ、なんて」

追いかけてきたロイも息が上がっている。それに、顔が運動のためですこし紅潮している。私もそうなのだろうか。

「ぜえ、ぜっ……分か、らない。気付けば走り、出していたんだ。

よほど私、はヴィーが苦手、らしい」

「そ、か……」

私もかなり苦しいが、ロイも結構苦しそうだ。

こんなに走ったのは私も彼も久しぶりだ。子どものとき以来だろうか。しばらく道の端に並んで座り込んで黙っているうちに、ようやく息が整ってきた。

「はあ、死ぬかと思った……。追いかけてこなくても良かったのに、ロイ。せっかくの服がぐちゃぐちゃだ」

「フィーも、だよ。いきなり出て行くから、心配した」

「ありがとう。でもロイ、お前確か女の子連れてたんじゃなかったか」

「いや、フィーの仕事終わったら一緒にいろいろ見て回ろうと思っ  
てたから、彼女とは別れてきたんだ。それでようやく駆けつけたら、  
あの騒ぎだったから驚いた」

「そうか……」

申し訳ない。でも、少し嬉しい。微笑んでしまう。

「ひよつとして、喜んでる？」

「いや、まあ、そうかな。なんか、まだ兄離れできないみたいでこ  
めん」

「……」

「ロイ？」

「フィー」

いつもより低めの声が耳に届く。並んで座り込んでいる彼の手が  
こちらに伸びる。

何故だが、空気が張り詰めて。

その時。

「エレノイア様あ！！　こちらにいたんですか！

あらら、なんて格好してるんですか、うわあ、髪まで。どうしよ  
う俺殺されてしまう！　早く行きましょう、今から急げばなんとか  
最後のダンスには間に合う！！」

唐突に、この国では見かけない方の騎士服に身を包んだ男が、な  
にやら叫んで飛び込んできた。いきなりすぎてわけが分からない。

「え？」



たロイの制止の言葉に、はっと私も気が付いた。そうだ、それがあつた。メイドと騎士も、ぴたりと止まる。

「首？細工師紋？」

「そうです、首！」

私が慌てて顎を上げてそれを見せ付けると2人は一瞬押し黙った。しかし。

「あああ、エレノイ様、何たること！」

このような刺青をいつの間……今まで隠していらっしやったんですね、私は悲しいです」

騎士は頭を抱えて嘆いている。

「大丈夫、私の化粧の技術を甘く見ないでください。必ずや殿方の目に分からぬよう隠蔽し続けて見せます！」

メイドはそう言って胸を張った。

「そうか！ よし、ならば君に任せたぞ。では、参りましょう！」「ええ、いざ参りましょう！！」

待て！

「だから違つて！！ 痛っ」

逃げようともがくと、手をより強くつかまれた。逃がさないという意思を感じる。私は無関係なのに。痛い。

「往生際が悪いですよ……おっと、なんですか、あなたは。どいてください」

騎士が立ち止まった。なんだろう、と見やると、冷たいオーラを纏ったロイが暴走する騎士とメイドの前に立ちふさがっていた。

「そちらこそ、一体なんなんだ。家の者に手を出さないでくれるかな、君たちは勘違いしている。彼は間違いないく僕の知っているフィード、他の誰でもない。細工師の手に、何をする」

その通りだ、離してくれ。

「こちらエレノイア様を見間違えるはずはない。そこを通さぬというならば無理にでも通ります。ライア、エレノイア様を連れて行ってくれ、僕が止める」

そして、ロイに向かって騎士が構えたおかげで片方の手は外れたが、もう片方の手が外れない。ライアというメイド、彼女も力になり強い。男ならさっさと突き飛ばしているのに！

再びどこかへと引つ張られていくが、私は結局、抵抗できなかった。ああ、もう。こんなに必死になるなんてエレノイア様とやらは何者なんだろう。どこにいるのか知れないが、はた迷惑なことこの上ない。

「ロイ……」

が遠ざかっていく。

「フィー！……どいて。さっきの言葉、そのまま返すよ。君が誰か知らないがこちらもお手加減しない」

「いいでしょう。見たところ剣もお持ちではないようですが、どうするおつもりで？」

相手は既に剣を抜いている。ロイが無言で術具を取り出すのが見えた。

「おや……術具使いですか、おもしろい。しかし、術師より恐るるに足りません、ねえ」

馬鹿にしたような高笑いが聞こえる。私なら絶対にロイが怖くて

そんな真似は出来ない。

「さあ、どうかな」

ロイの一言を最後に、二人が戦い始めたようだが、もはやよく聞  
こえない。すごい勢いで2人から遠ざかっていく。

「どこへ行く……?」

「エレノイア様に与えられているお部屋ですよ、決まっています！  
！ ドレスの代えと、あら、耳飾と指輪はそのままですわね、  
ああ、でも首と髪が！ 急ぎますよっ、エレノイア様」

「これ以上は無理だろう。というか、私はフィオレンティーノとい  
う細工師なんだが」

「しつこいです。もう騙されません!」

何度も諭したが無駄だった。私は一度も騙した記憶はないのだが。  
しかしこのままだと。

「待て、ドレスだけは着たくない!!」

「だめです、着るんです。こんなに大きくなったのに我儂言っ  
てどうするんですか。もう大人でしょう?」

もう、女の装いなんて二度としたくないのに。

ふいに。どこかへ辿り着いてしまったようだ。扉が開く。

「うふふふふ。すっかり男の子のような顔しちゃって。腕がなりま  
すねえ、これを元に戻すとすると」

やたらにびやんびやん輝いて見える、フリルとぬいぐるみに囲ま  
れたいかにも少女趣味な部屋に連れ込まれ、花をあしらった鏡台の  
前へと無理やり押し込まれた。

怖い。

それからはショックのあまり半ば気を失ってしまいよく覚えてい

ない。押さえつけられ、手が頭やら顔やら首やらを這い、着せ替えられ、どこぞへ連れて行かれる間、私はエレノイアという見知らぬ誰かを呪いながら、されるがままになっていた。

「エレノイアは見つかったのか」

「はい、見つかりました。なんでも男装して男と共にいたとか」

「誠か……あの愚か者めが」

「賢いお振る舞いとは申し上げられませんが、よほどお嫌だったのかもかもしれません。幸い、手遅れにはならず済みましたし、お許しして差し上げていただけませんかでしょうか。」

ああ、それから、エレノイア様を発見した騎士が重症を負って倒れておりましたが、どうやら相手の男にやられたようです」

「エレノイアはどうしている」

「今、ライアが手を尽くしておりますゆえ、イオナイア国王との謁見には間に合いますでしょう」

「そうか。ならばよい」

壮年の男は胸を撫で下ろすと共に、報告に来た部下を下がらせた。舞踏会場は相変わらずの喧騒ぶりだ。賑やかなその中心には、年若い新王の姿があった。快活に笑い、語るその姿を、男は憎憎しげに見つめた。

あれを必ずや、王座から引き摺り下ろしてやる。王の血だと？

それならばエレノイアの方が強い。竜の血を飲んだからなんだというのだ、あれが本物だという証がどこにある。

彼はそれを糾弾してやろうとわざわざこの国へやって来た。それ



なのに、鍵となる娘がいなくなり、一度はパニックになりかけたが、無事見つかったことで落ち着いていた。

隣国の王である男は齒噛みする。闇が払われてすぐ、国力の弱ったこの地を併合しようとした、ところがどうだ、英雄だと祭り上げられた男が王位についたというではないか。屍鬼が出てこないのは奴らを倒し尽くしたただけであって、竜の加護でもなんでもないに違いない。

エレノイアは、この国の姫だったものの血を引いている。彼の妻だ。それは国が狂乱に陥る前だったから、その血が穢れているとは言えないだろう。

例え相手が認めなかったとて、エレノイアをヴェイエア王の妻となれば、それからでも機会はある。王を殺して、女王とさせ、息子を立てればいい。そしてわが国に従わせる。ぬかりはない。

男は王であるのに似つかわしくない下卑た笑みを浮かべた。

## 15・王と踊って

ロイは歩き回ったが、フィーの連れて行かれた部屋がどうしても分からなかった。もう、彼女が連れ去られてから、随分経ってしまった。彼を邪魔した男はいやに粘ったため、思わぬ手間がかかってしまった。

フィー、あんなに嫌がっていたのに。

彼女はドレスを特に嫌う。とある事件があつて以来、昔は下手すると見るだけで気絶していたが、今はだいぶましになった。それでも決して着ることはない。

「フィー……」

呼んでも、返事はない。仕方なく舞踏会場の方に戻っていくと、ふと、目の端に何か映った気がした。なんだろう。辺りを見回すと、また何かがひっかかる。立ち並んだ、甲冑をロイは見つめた。また、そのうちの一体の内側、目元あたりが光ったような気がしたのだ。まるで、人間でも入っているように。

「ん？」

思わず近づいてよく見ると、甲冑の切れ目から布が覗いているのが見えた。これは、服？

「人かな？」

「きゃああー！」

ばっ、とロイが兜部分を外すと現れたのは、明るい茶色の髪、とび色の瞳。

「フィー？」

彼女は、こちらをじいっとその目で見据え、首を愛らしく傾げて見せた。

「あなたさまはだあれ？　美しい人」

「フィー……、じゃない。あなたは？」

「ああ、ごめんなさい。こんな格好をして、恥ずかしいわ。私エレノイア・ランドカルセ・フィオーネ・フィオール・アラスカシア。隣国アラスカシアの第1王女です。……信じてくださいますか。そしてあなた様のお名前を伺っていいかしら。まるで、絵本から抜け出した王子様のようなお方」

彼女は、フィーと間違えられたエレノイアだった。

ロイはとりあえず、彼女が重い甲冑を外していくのを手伝った。一体どうやってこの中に入ったのだらうと半ば頭痛のする思いだった。

なんとか甲冑から抜け出た彼女は、フィーと同じように男装をしていた。それに驚きながら、成程、普段からこんな風に逃亡するなら、フィーが間違えられるはずだとロイは納得した。

それにしても、まさかフィーが王女と間違われてしまったとは。……エレノイア姫、私は、本日職人として招かれたロイと申します。残念ながら王子ではございませんよ。あなた様はここに、隠れていらっしやっただですよね」

「ええ、うまく隠れるところが思いつかなくて。舞踏会を逃れたところで、父の望みを果たすまで逃げ切れるわけがないと分かっているのだけれど」

自嘲するように彼女は笑う。その顔でそんなふうに笑われると、責められなかった。

「理由をお聞きしても？」

出来ればこの人を説得して、フィーを救い出したい。フィーの心底嫌う、『女装』から。

「お話したら、あなたは私をどこかへ攫ってくださいる？……ふふ、

冗談ですよ、そんな顔なさらないで。初めてお会いした方に申し上げることはありませんでした」

「いえ……こちらこそ理由を問うなど不躰なことを申しました。実は私にとって大切な人が、連れ去られてしまった。その人はあなた様と瓜二つの容姿なのです。そのため、彼女こそエレノイア姫だとあなたの国の方は思い込んでしまったようです」

「そんな……本当に？」

「ええ、信じがたいことかもしれませんが、本当によく似ていらっしやいます」

見かけだけならばつきり異なるのは、髪長さだけだろう。自分ですら一度見間違えてしまった。

エレノイア王女は、ロイの言葉にさつと顔を青くした。

「大変だわ、彼女殺されてしまいかもしれない」

「……どういう、ことですか」

殺される？ 思わぬ言葉にロイの血の気が引く。

「父がしようとしていることは、この国の乗っ取りよ」

血の証明をすると彼女は言った。彼女の母は、この国の英雄の血をひくものであったという。その血の証明とはつまり。

「なんてことを」

「ええ、とんでもないこと。英雄の血なんてかわりのない人が血の証明をするなら確実に死んでしまう。国の乗っ取りなんて……私はそのようなことをしたくない、望まないと、そう何度言っても聞いてくださらなかったから、逃げていたのに。ごめんなさい、わたしのせいで」

「あなたのせいではないです。」

しかし、急ぎましよう、フィーがどこにいるかお分かりになりま

すか」

「多分、従者達は彼女を父の元に連れて行ったに違いないわ。王の前に共に立つために」

「本当に見違えましたわ、大丈夫です。自信を持って、この一步を踏み出していらっしやってください。さあ、あなたたち、エレノイア様を頼んだわよ。かの偽王を暴いて見せるためにも」

「はい、お任せください」

メイドが去っていく。

貴族の男に手をとられて、私はようやく我に返った。いつの間にか連れて来られたここは、舞踏会場の入り口ではないか。

「離せ！」

「姫、大人しくなさってください、はしたないですよ、げふ！？」「触るな」

うるさい男を、私は遠慮なく蹴っておいた。彼はびくびくしているが放っておく。まったく、まさかダンスの成果がこんなところに出るとは思わなかった。基本的に手はあまり使いたくないので、蹴る力が付くのは大歓迎だが。周りの注目を、苛立ちのままに見回し、視線で押さえつけた。誰もが「見てしまった」、という顔をしていたが気にしない、後々噂が立つのはエレノイア様とやらにであって私ではない。しかし蹴りづらかった。

そんなことを思いながら自分の格好を見下ろして、淑女よろしく卒倒しそうになった。見事にひらひらした明るい黄色のドレス。コルセットは幸いにもされなかったらしいが、これはひどい。顔にうつすらのっているらしいのは化粧だろう。しかしまつ毛はどっしり

と重い。唇の感触に、口紅など塗られては、何も食べれないではないかと憤りを覚えた。さつさと全て落したい。脱ぎたい。だがここから逃げ出す前に、私を心配していそうなロイを見つけなければ。だが、ロイは見当たらなかった。倒れてはいないはずだ。騎士と戦っても、きつと彼は無事だと思う。ただひよつとすると、まだ私を探してくれているかもしれない。それなら下手に動くよりここにいたほうがいいだろう。

「やってくれたな」

思わず呻いてしまう。着替えるにしろ、問題は着替えがどこにあるか分からないこととどこで着替えたらよいのか分からないこと。こんな格好だと動き回るのも一苦労だ。筋肉痛なのにヒールの高い靴を履かされるとは、なんたる拷問だろう。

ともかくこの場をどう乗り切るか。一番手っ取り早いのは『エレノイア様』ご本人を彼らに差し出すことだが、隠れていると言っていたし……。さて、どうしたものか。ロイがひよつとすると彼女を探してくれるかもしれないが、ともかく今は待つしかない。手持ち無沙汰に一人途方にくれて、私が鬱々と頭を抱えていると、声をかけてくる者がいた。それも複数。

「連れの人はいないの」

「ねえ、君、勇ましいね」

「可愛らしい人じゃないか、何を言う」

「さっきの見てなかったの？惜しいなあ」

「僕と踊ろうよ、もうすぐ次の曲が始まる。そろそろ最後だ……」

「うるさい。どいて」

この暇人どもは、厚い化粧に騙されたか知らないが、冷淡に突き放しても付きまってくる。しつこい。

どの顔も、私の身近にいる人物のせいか、ちらとも魅力を感じな

い。男の格好をしていたときは見向きもされなかったのに、これだからこんな格好はいやだ。ろくなことが起こらない。面倒だ。

「いい加減にしろっ」

とうとう堪忍袋の緒もぶちりと切れて、怒鳴ったとき。

「……フィオナ、か？」

その声は。

「何をおっしゃいますのやら、私はしがない通りすがりの一貴族のご令嬢でございます、さらば」

「そんなことを言うご令嬢がいてたまるか」

脇を通り抜け立ち去ろうとしたのに目の前に立つ男。

「……フィオナと呼ぶなと言ったはずだ」

「やはりフィーか」

現れた王は目元を緩ませて嬉しそうに笑う。すると、こちらの様子を伺っていた連中が立ち去っていった。さすがに王様を相手に女の取り合いをする度胸はないらしい。しかし不快で厄介なのが目の前にいるのは先ほどと変わらない状況だ。そう、存在は不愉快だ、しかし、目の保養になるという点でなら合格点をやってもよい。低めな私の鼻と比べてうらやましくなる理想的な高さの鼻、加えて目元が涼しい。今日は結われていない漆黒の髪は、さらりと広がっている。口元に浮かぶどこか斜に構えた笑みはいただけだが。開け放たれたその存在感を、こつも間近に感じるのは戴冠式以来だ。圧倒されて立ち尽くす。思わず足に力を入れた。

「そうだけど」

「なかなか『女装』も似合うじゃないか」

「褒められて嬉しくないのは初めてだよ」

「初めて、とは光栄だな」

なんだかいかわしい。睨んでやると、ヴィーは言った。

「いいんじゃないか、本当に綺麗だと思うが」

まじめな顔をして言うな。余計に冗談を言っているとしたか思えない。

「……望んでこんな格好をしているわけではない」

「どうした？」

「なんかエレノイア様、とか呼ばれて拉致されたんだよ」

溜息混じりにそう言つと、王はしばらく考え込んだ。

「ふうん。エレノイア様、ねえ。よほど似てるんだな。たしかに、本人は、まだいないか……」

ん？あれは……面白いことになったな」

王が何かを見つめているのに気付いてその視線を追つと、こちらに駆け寄ってくる壮年の男がいた。重たげで豪華な服がそれを困難にしているようだ。その男は一心に私を睨み据えている。ひよつとして……

「あれつて、エレノイアを知っている人ではないのか」

問うように王を見ると彼は、にやりと笑った。嫌な感じだ。王の補佐はいつもこんな気分を味わっているに違いない。かわいそうなクエインさん。

私がクエインへ黙祷を捧げていると、王はにやりと笑ったまま言った。

「とりあえず踊ろうか」

はい？

「なんだと!？」

何故そうなるのかよく分からない。

「色気ない叫びだな、ここは恥らうところだ。この俺に誘われて嬉しくないのか？ せっかくの機会だ、ここで踊れるなど早々ないこ



とだぞ？ それとも踊れないのか」

秀麗な顔に、嘲笑が浮かぶ。

いらつ、とした。

「踊れなくはないが踊りたくはない。そしてちっとも嬉しくない」  
足はまだ痛いし、ヴィーと踊るなど御免だ。

「頼む」

また彼は、真剣な顔をする。しまった。私はいやなことに気がついた。

ロイの目が蕩けるアクアマリンのようで好きなのだが、ヴィーの目はサファイヤに似ている。そして、こんなふうにまじめな鋭さを帯びるとそれは。

「お前のためなんだ」

なんとも苛烈に美しい、と。悔しいがそう思ってしまった。

おそらくもうかなり傍まで近づいてきているエレノイア様の父親と思しき男が、何か関係しているのだろう。私のためというのはよく分からないが、おそらくヴィーの目を見る限りは本当なのだろう。そして今、私としては捕まりたくないのも事実だ。ここは便乗してやろう。

「……足にあざができて私も私は知らないからな」

そう言つと、王は笑った。

「誘いを受けてくれて光栄だ……あざがもしできたらいい記念にさせてもらおう。天才フィオレンティーノが刻んだ跡、としてな」

滑らかな動きで差し出された手を掴む。大きい手だ。

「そんなこと言っていると、跡が絶対に消えないくらいに踏んでやる」

音楽が鳴り始める。

手を引かれ、眺めていただけの舞台へ向かう。不思議と騒がしいはずなのに喧騒は聞こえない。王の声だけがする。

「芸術的な跡にしてくれるか？」

やがて立ち止まって向かい合う。その眼を眺めやりながら気がついた。分かった、これは緊張という奴らしい。

「そんなに私は器用でない。先に謝っておこう、もしこの歩きにくいことこの上ない高く先の尖ったヒールでお前の足に穴が空いてもそこに他意は一切ない、と」

実際、有り得ない話ではない。

「まったく。こんなときでも憎まれ口をたたき続けるのだな」

彼は手を離し、やれやれと溜息をついた。

「性分だ」

踊る前に少し距離を取って礼を取る。そして再び腕が引き寄せられる。

「……ヴィー、近くはないか」

ロイと踊ったときはもう少し距離があったように思うが。抱き込まれるように密着して、悪寒が走る。

今は、パニックになっただけとはいけない、と強く言い聞かせて自制を保った。危うく蹴り上げるところだった。

「も、う少し離れてくれると助かるが」

見上げてすぐのところ、美しい顔がある。

「もしかして照れているのか？」

王が微笑した。腰に手が回る。何を言う。正直可能ならば走って逃げ出したいくらいだ。

「まさか。もういい、踊るぞ」

さつさと終わらせてしまおう。終わった頃には多分、ロイが私を見つけれなくとも本物のエレノイア様を見つけてきてくれているはずだと信じよう。

「よろしく、フィオナ様」  
「その名で……うわっ」

ステップが踏み出される。力強く大胆な踊り方をするものだ、と遠目にこの男を眺めていたとき思った。しかしこれはそんなものではない。

「は、やす、ぎ」

「面白いだろっ?」

王様は楽しそうだが翻弄される一平民としては目が回るどころではない。

シャンデリアを透かして、天井画がくるくると動いていくさまは、まるで万華鏡のようだ。実際に動いているのは私の方だが。

「足、がなんだか地に着いていないような」

「浮かんでいるからな」

「……なんと仰いましたか。」

「足が痛むんだろっ?」

ほとんど抱き上げられているような格好だ。思わず呆けて天井に向いていた目をヴィーに向ける。

「なぜ」

黙っていたのに。

「引きずっているみたいだったからな。一言言えばいいものを」  
「うるさい」

お前に人を気遣う心があったとは驚きだよ。

「重くはないか」

人一人はそんなに軽いものではない。しかもこの速さで動き回って。

「お前はもう少し肉を付けたほうがいい」

「肉付きが悪いのは分かってるよ」

お陰で動きやすいからいい、と思うことにしている。

「羽のように軽い。これでも心配している」

この男の目はどこまでも青いな、と思った。サファイアの瞳。その石言葉には確か、慈愛というものがあつたっけ。

「食は昔から太いから心配には及ばない」

目を逸らして言った。

「なら安心」

慣れてくると、面白いな、と思った。自分の足でステップを踏めないのが残念だ。こんなに人がいるのにぶつからない。たくさんの男女とすれ違う。それぞれが一心に見つめあい、どこか恍惚として楽しげで。傍から見ると、わたしとヴィーもそう見えるのかと思つた。

「フィー」

「何」

「こっちを向け」

「嫌」

「お前が女とばらすぞ」

くっ。

「分かつた」

そう答えて仕方なく眺めやると満足げに笑う顔があつた。

綺麗で、憎い、顔。

そうして私たちは見つめ合ったまま一曲、くるくると踊り続けた。

## 16・血の証明

三拍子の曲が緩やかに止まって、ダンスは終わった。

ようやく地に足がついて、安堵しながらもどこか残念な気持ちがある自分を腹立たしく思う。繋いでいた手が離れていく。感じる空気の冷たさに、ああ、王様の手は熱いのだと知った。

グイーが取る優雅な一礼。私もドレスの裾を持って、形ばかりの礼をする。彼に比べたらぎこちななうがしょうがない。初めてなのだから。

土砂降りに似た拍手の音がする。音楽はもう聞こえない。そう、最後の曲だったのだ。これで、思えば一瞬だったようなダンスの時間は、終了した。

「楽しめたか」

「まあ、な。お疲れさま」

体重が軽いとは言っても疲れただろう。一応ねぎらいの言葉を述べておく。

そうして一息つくと、私は何より気になっていたことを尋ねた。

「で、だ。結局お前は私を何から守ったんだ？」

「……まだ、エレノイアは現れないようだな。ならばもうすぐ、分かる。」

本物のエレノイアが現れるまでの時間稼ぎだったのか。見渡せば成程いない。

ふと、ちっ、と王は舌打ちした。苦い顔だ。

「ほら、おいでなさった」

すぐに、しゃがれた男の声がした。

「グイエロア王、随分と情熱的なダンスでしたな。一曲中抱きかか

えて踊るなど、それほどに私の娘はお気に召されたかな？」

現れた壮年の男は、エレノイア様とやらの父親だろう、と私が先ほど思った男だ。何を考えているのやら、顔に浮かぶにんまりとした笑みがとても不快だと思った。悪だくらみをしている人間というのは人相が悪い。これは私の偏見だが。さて、私はどうでるかな。エレノイアであることを否定しておきたいところだが、ヴィーはなにやら考えているようだし、それに乗ったほうが安全だろうか。仮にも私のためにあれだけ労力をはらって踊ってくれたというのだ、悪いようにはしないだろう。そう判断して、取りあえずは事態の推移を見守ることにした。

「これはアラスカシア王。今日お話しするのは初めてですね。ええ、『この娘』はとても気に入りましたよ。なんとも愛らしく、時に皮肉なところもいい」

ふうん。私は偽者であると否定はしない方がいいようだ。後半部がなんとなくむかつくが。

「皮肉？エレノイア、王をあまり貶めるものではない。申し訳ない、少し我俣に育ててしまったようで」

やかましい、睨むな。お前に育てられた覚えはない。大体、私が自分の娘かどうか分からぬような男など、そのように偉そうに父親面をするものではない。エレノイア様とやらも不快だろう。……エレノイア様、早く帰って来ていただきたいものだ。よく分からないが、私の危機だ。

「いやいや、大人しいだけのお姫様よりよほど楽しめましたよ」

「そう言っていただけだと幸いですな。ところで王、少々お話があるのですが……貴方と、この私の娘に関わることです」  
なんだろう。

「それならば聞き捨てなりません……込み入った話であれば、明日にでも個人的に伺いたい」  
是非そうしてくれると助かるな。

「……いや、今、この場がいいでしょう。人が集う、この場が」  
「……」

あのヴィーが渋い顔をしている。なんだその、嫌な予感が当たりましたという顔は。

「エレノイア、こちらへおいで」

アラスカシア王にいきなり手首を掴まれた。かさりとした乾いた手に不愉快さが増して思わず払いそうになったが、現状、そうするわけにもいかない。

「待て」

ヴィーも、私の手を掴む。

「なんですか、父が娘を呼び寄せることに何の問題か？あなた様と私の娘が親しくなったのはよいことです。だが、まだ、正式に婚約を結んだわけでもない。その手を離していただけますかな」

「問題はある。アラスカシア王、その人に何をするつもりだ？」

「血の証明を」

「なっ……」

私は声を失った。血の、証明だと？それはもはや滅んだ王族にのみ許された行為。竜の血とは関係なく英雄の血を継いだ血族にのみ現れるという再生の性質を証明するものだ。……それは、生きたまま頸動脈を裂いても生き残れるというほどの力を示すもの。つまり、首を切る。

「待てっ、私は」

「黙らせる」

やってきた騎士がもがく私を完全に押さえつける。おい、止める、私が血の証明なんざしたら。

「静かにしろ。覚悟をきめておけと言ったはず。何、激痛があると  
言っても死にはせぬ」

死ぬぞ、間違いなくな。

今私の顔はさぞかし真っ青だろう。

「王よ、あなたは竜の血を飲んだという。しかし本当ですかな」

「…疑いますか」

「ええ、実際は杯に注がれたのがワインであつたか竜の血であつたかなどもはや分からない。しかしこの娘の母は間違いなくこの国の滅びた先の王家の血に連なるもの」

「知っているが、血の証明など正気の沙汰ではない。そのような年端も行かぬ女性にそれを施すというか？」

「怯えているのですか？ あなたには出来ないことだから？」

「……」

気持ちには分かるが、せめて黙るな。私の命の危機だぞ！

胡乱げに見つめてやると、ヴィーはやれやれと溜息をついた。そしてふ、と笑う。

何かを思いついたように。

「なんなら私がそれをやって見せるなら、あなたはその娘に手を出さないと誓うか？ 彼女が痛みに顔を歪ませるのは見たくない」

え……

「は？ はははっ、素晴らしい、エレノイアにそこまで惚れ込みましたか。痛みを味あわせたくない、それだけで、高々一度の逢瀬のためにその命を懸けると？ 仮にあなたが本当に竜の血を取り込もうが、あの王族に連なつたわけではないというのに！ 血の証明を



あなたがするならば、間違いなくあなたは死ぬでしょう。わざわざ命を捧げて認めるのですか、この娘の方がこの国を継ぐにふさわしい血と！」

「いや。かの王族の時代はもう終わった。しかしその娘が死ぬのは忍びない。どうしてもするとそう言うなら、私が血の証明をやってやるっ」

こいつは、何を言っている？

「やれやれ、エレノイアにそれを施したところで死にはしないというのに」

いや、死ぬがな、私は。それよりヴィーはなにをとち狂ったのだろうか。ヴィーの方を見るといつも通りに凧いだサファイアの瞳にぶつかる。

「どうか、シヨックのあまり死んでしまいかもしれないでしょう。それに俺は命がけとは言っていない、ひよっとすると頸動脈を引き裂いても生きる力が俺にあるかもしれない……無論、試したことはないが」

間違いなく死ぬと思うぞ。まさか首を切って生き延びるという有り得ない可能性にかけて冷静なんじゃないだろうか？

「何より、貴方の目的は最終的には俺の首だろうか？」

その言葉に、一瞬アラスカシア王は押し黙る。

「おや、ご存知でしたか。あなたは邪魔なのですよ……しかし今、こつもあつさり死んでくれるというのなら、確かに一番話が早い。剣を持って」

アラスカシア王の命を受け、剣を持ったアラスカシア騎士が現れた。ずしりと重そうで、刃渡りの長いそれを、アラスカシア王は受け取る。ちよつと、待て。本気か？

私は押さえつけてくる騎士の手を、頭を振って払った。

「何言ってるんだ、ヴィー、よせ！ あんた、そんなことしたら…  
…むぐ！」

再び押さえつけられてしまう。ヴィー、それは駄目だ、お前は憎い、けれどまた私の『ため』に誰かが死ぬというのか！ 止めようともがく私を見て、ヴィーは笑った。

騒ぎに人が集ってきた。ヴィーが、異常に気付いて駆け寄ってきた近衛に手で合図して止めた。馬鹿、一体何を考えている！？

アラスカシア王は抵抗を見せない彼に満足げに剣を構えたが、ふと止まった。思いついたように笑って。……本当にこの男の笑みは虫唾が走る。

「エレノイア、お前がやれ。王を上手く誑かした褒美だ……これはどまでにお前に惚れている男にとって良い饞となるだろうよ」  
響き渡る、狂ったような、哄笑。

何を言ってるんだ、この人。私に、ヴィーを、斬れと？

「さあ、剣を取れ。どうした、お前もこの男に情が移ったとでも言うのか？ 愚かしい、血の証明を見せ付けたあと、王としての資格に怪しいこいつから王位を奪うにしろ、結婚を迫るにしろ、こいつは殺すのだと言ったろうが」

いやだ

私は剣を渡す手を払いのけて、あたりを構わず叫んだ。

「そんなこと知るか！ あんたはどうかしてる。おい、ヴィー何笑ってるんだ、大馬鹿者！ 聞け、私はエレノイアに似てはいるが違

う、私は細工師フィオレンティーノだ！！ だからヴィエロア王は私を庇っているだけだ！」

周囲が私の言葉を聞いて、ざわめきを増す。ああ、確かにあの顔は……という声があちらこちらで聞こえた。

「だから本物に血の証明などやらせればいいだろう、こいつがそんなことをする必要はない！！」

「黙れ！！ いきなり何を血迷ったことを……王を殺すと宣言したからにはもはや手遅れだ。ヴィエロア王を屠るしか道はない。そしてこれは絶好の機会だ、そんなことも分からないのか？ ……もうよい、お前がやらぬというのならわしがやるう、ヴィエロア、覚悟！！！」

剣をとらぬ私に耐え切れなくなったように、アラスカシア王が自ら剣を抜くのが見えた。

その時。

「父上、待って！！」

高く凜とした声を響かせ、光沢のある、ピンクのドレスを纏った少女が場に乱入した。

「な、エレノイア？ でも確かにここに、エレノイアが」

まるで双子がいるかのような光景にアラスカシア王が剣を振り上げていた腕を下ろして固まった。明らかに混乱している。

「お、お前は、誰だ」

「私が、エレノイアよ。分からないというの？ エレノイア・ランドカルセ・フィオーネ・フィオール・アラスカシアはこの私。父上、ヴィエロア王を放して……血の証明をせねば気が済まぬというなら私がする！」

少女が、私が先ほど振り払った、父の手にある剣を取った。

「しかし、エレノイア。こいつがいなくなつた方が確実だ」  
「……ねえ、父上、あなたはそんなにこの国が欲しいの？」

一步、アラスカシア王から引くと、首筋に少女は刃を当てた。血の証明は、悪趣味なそれは歴代王が王位に就くたびに行われていた儀式だ。大衆の前で自らの首を切り裂いてなお死なない王家の血を見せ付ける、なかなか陰惨な儀式である。ヴィーが王位についてからは、彼が英雄の血を継がぬゆえに無くなるとされる儀式。それを、国を奪いたい故にアラスカシア王は娘にやらせようとしたのだ。

斬られると、再生して死なぬとはいえ、やはり激痛を伴うと聞く。エレノイア姫が逃げ回るのも分からなくてもない。おかげで大変な目にあつたが。

それでもともかく、彼女は、覚悟を決めて現れた。すぐ傍に立つその姿は、なるほど鏡を見るように私と瓜二つの顔をしているが……彼女のほうが、高貴な気がした。やはり一国の姫として育てられた気品がある。

その気高き姫は、き、とその父を睨んだ。

「私はあなたに従いたくないのです。国を獲るなど興味はないし、痛いのだつてごめんだわ。だから逃げていたら、ここにいて彼女が代わりに捕まつてしまった。

……こんなことのために誰か死ぬなんて理不尽は許されない。どうしても父上が言うのなら、血の証明とは、唯一私がするべき儀式なのです。でもそれを証したところで、国が手に入るわけではないのに。ようやくこの国に訪れた平和を乱すように争いが、戦争が起きるでしょう……けれど、わたくしたちの国はきつと負ける。私はヴィエロア王が竜の血に認められたのだと、分かるもの。そう何度も申し上げましたのに、お聞き入れてくださらなかつたですね。ねえ、父上。私が死んだら、その野望は潰えるでしょうか。ヴィエロア王、あなたは父の非礼を許してくださいますか、私の命で」

その首に、刃が食い込もうとする。何、みんな固まってるんだ、こんなやつてない。何故王といい、このお姫様といい、自己犠牲が一番素晴らしいとばかりに死のうとする？

そう思うのに私も動けなかった。だが。

「フイー！」

ああ、ロイの音がする。

そうだ、彼が姫を連れて来たのだろう。ふと、私の手足はもう自由だと気がつく。彼の声は私を落ち着かせる作用がある、彼のいつも淹れてくれるお茶のように。パニックから落ち着いてくると、私はあることを思いついた。

「お待ちください、姫君」

エレノイア姫の近くにいた私は彼女の手を押さえつけた。簡単にそれができる。私のほうが力が強いのだ。ああ、こんなに震えている。そして、私よりもきつとこの腕は細い。触れば、柔らかい手なのだと思う。私と彼女は違う。どんなに顔の造りが似てはいても。

「王女、あなたが死ぬ必要はない……要は、その馬鹿親父にこの国の馬鹿王が、英雄の血はなくとも間違いないと竜の血に認められたって証明すればいいだけだ」

そう。それだけのことだ。今まで動転していて、失念していた。剣を握る手をそっと包んで微笑んで見せる。

「ふい、フィオレンティーノさん？何を……」

「剣を、私に」

剣を姫から有無を言わず取った。人々が安堵した空気が漂う。しかしそれは再び次の私の行動で、張り詰めたものとなった。

私はヴィーのほうに向かい、剣を突きつけたから。

「フイー？」

なんだそのにやりとした顔は。お前は最初から分かっていたんじゃないか？こんな茶番をしなくとも。

「指、出せ」

「仰せのままに」

私が差し出された彼の指を薄く切りつけると、ぼたりと血が流れ落ちた。それを確認して私は叫んだ。

「誰か、杯を持って来い！」

「はい、どうぞ」

いつの間にやらやってきたロイが差し出す。よく分かっているな。グラスには、水が、入っている。

「よし。ここにあるのはただの水……しかしどうだ、こいつの血を入れるとそうではなくなる」

ぼたりと血を一滴落す。

アラスカシア王がわけが分からないという顔をしている。もう少し、この国の伝承を調べておくべきだったな、アラスカシア。

「知っているか」

「何を、だ」

「竜の血の別名を」

「なんだと言っんだ！！」

激昂して叫ぶ男の元へつかつかとヒールをならして歩み寄った。私を止めようと彼の護衛が寄ってきたが、ロイが黙々とぶちのめしていた。

よろしい。遅かったが許してやらないこともない。お陰で、目的の人物に難なくたどり着く。

勢いに引いているアラスカシア王の口先に、持っていた器のグラスの口を当ててやった。

「教えてやる、『裁きの血』だ、召し上がれ」  
無理やり流し込むと、口を塞ぎ、鼻をつまんでやった。ちゃんと全部飲むように。息が出来ないために仕方ないように嚔下して、途端に男はのた打ち回り出す。

「な、なんだ、この水、は」

「竜の血に認められた『王』の血にも裁きの力は宿る。この国の王として資格あるものかそうでないかを処断する裁きの血が王を常に監視する。竜の血を飲んだ者の子孫は多少血が薄まるといだが、こいつの血は竜の血と同じくらいの濃度だろう。お味はいかが？  
いいか、よく聞け。再生の力より何より、この国に要るのは竜の血の加護だ。ここを、乗っ取るつもりだったんだろう？ならばお前も試される予定だったんだ、竜の血に。いい予行演習だ」

「ぐえ、げほ……し、死ぬのか、私は」

床を無様にのた打ち回り、息も絶え絶えな男を睨みつける。

「さあな。仮にもあんたは王様だ、日頃の行いが物を言うだろうよ」  
死にはしない。誰だつてあの量で死ぬわけがない。資格が無ければ、苦しんだろうが。内臓が焼けるように痛いと聞くから、まあ、エレノイア嬢に血の証明をしようとしたような人間にはいい薬だろう。

「分かったか。王が飲んだのは間違いなく、裁きの、竜の血だ。もし毒だとも言って認めないなら、王の首に直接かじりついてでもみるんだな、そしたら今度は命の保障は出来ないが。なにせあんた水で薄めたのにそれだけ苦しんでるんだから」

切られた指先をのんびり眺めるヴィーの方を振り向いて、私は言う。

「過去の英雄の血がなんだ、どんなにその再生の力が神秘に溢れようと、その血の流れる子孫は結局国を絶望に落とした。今ではもう、闇を払ったあいつが英雄だと国民は皆言うだろう」

私を除いてな。王の頭の上にある、冠を睨みすえる。やはり憎い。それでも。

「ヴェイエア、あいつが、この国の王だ」

どこから歓声が上がった。怒号のように、人々が沸く。王を、讃えて。

みんな、いい気なもんだ、こっちは死に掛けたというのに。とんだ茶番を演じてしまった。

私はうんざりと、そんなことを思った。王は、歓声に構わず、暢気に指から出る血を舐めていた。



## 17・お姫様と細工師

私は悩んでいた。

先ほど、自分こそが「フィオレンティーノ」だと名乗りを上げてしまった……。どうしようか。

事件の関係者として、とりあえず会場から動くなと言われていた。早く着替えたい。床をのた打ち回っていたアラスカシア王は、医師に運ばれて行った。今、ヴィーは忙しく場をとりなしている。ロイは、足が痛む私の代わりに私の服を探しに行ってくれている。

私自身は、あまり動きたくないの、結局エルファンド工房のためのスペースに戻って、椅子に腰掛けてぼんやりしていた。

「フィオレンティーノさん」

「はい？」

呼ばれて振り向けば、鏡を見ているような感覚を起こさせるお姫様がいた。

「あの、」

「すみませんでした、エレノイア様」

「え？」

向こうが何かを言う前に、立ち上がって頭を下げると彼女は動揺した声を上げた。

「大変な目にあわせてしまいましたね、あなたの父上を。私頭に血が上ると突き進んでしまうところがあって、本当に申し訳ない」

つい慣れている男のような礼を取ってしまったが、そのまま頭を下げ続けた。怒られる前に謝っておいたほうがいいと思ったから。

彼女の父のことは、やりすぎたと反省している。のた打ち回る男を見て唾飲を下げたからとは……言えないが。父親をあんふうにされれば、娘として腹が立って当然だ。

けれど、お姫様は言った。

「頭を上げてください……謝るのは私の方です。こんな格好までさせてしまって、あんな、命が危ぶまれるような恐ろしい目にあわせて。それに」

彼女は、疲れたような目でアラスカシアの従者と思える人々やこの国の意思に介抱される父を見やった。

「本当に、今回のことは父にはいい薬になったと思います。どうかしてたんです。ようやく平和になったこの国を奪い、皆に望まれた王を貶める真似をするなんて」

「エレノイア様……」

彼女は父親を憎んでいただろうか。いや、彼女は父の罪をもその身を呈して贖おうとしたのだ。本当は、父のところへ駆け寄りたいたいのかもしれない。けれど私のところに来て謝罪するのを優先してくれたのだろう。

「なにより感謝しています、あなたは私の命を救ってくださった」  
そつとそのしなやかな手に、手を握られる。

「あの、フィーとお呼びしても？」

「ええ、構いませんよ」

頭を上げて、ああ、彼女は少し私より背が低いな、ということに気付く。そっくりだけど、きつと、よく見ればいろいろに違うところはあるのだろう。彼女は私を見返して微笑んだ。

「フィー。少しあなたと、お話してみたかったです。あなたを見て、とても驚きましたわ。本当不思議ですわね、私たち双子みたい。それに」

「なんででしょう」

「フィオレンティーノと男性名を名乗っていらしたけれど。あなたは、女性ですね」

ぎくりと身がこわばる。

「やっぱり、そうなのですね」

「まずまず、私たちそっくりですわね、と彼女は言った。」

「その」

「大丈夫、決して他言はいたしませんわ。ロイ様は、あなたが男性だと仰っていたけれど……」

「ロイ様って。」

「ロイ、お前はやけに遅かったが彼女との間に何かあったのか。」

「最初におかしいと思ったのは、ロイ様や、ヴィエロア王様があなたに向ける態度と目です。あれは、想い人へ向ける瞳に振る舞いですもの。彼らがひよっとしたら男性が好きということかもしれないけれど、ヴィエロア王は女の方が好きなことで有名ですし。羨ましいですわ、あんな素敵な方たちに想われて」

同じ顔なのに、私では駄目なのかしらね、と王女は、ほう、と溜息をついた。

「2人が私を想っている？異性として？」

「そんなことはない。」

「有り得ませんよ。ロイは、小さい頃からずっと一緒にいた兄弟子みたいなものだから、家族を想うような心なんだと思います。あのヴィエロア王は」

「よく、分からない。でも。」

「彼は私の細工の才に惹かれているのでしょ」

「それだけかしら？」

「彼女は、私の言葉にどういうわけか懐疑的だ。」

「そう思いますが」

「それをきっかけにあなたに惹かれるかもしれないでしょ。……あなたには彼らに惹かれないの？」

「私は……私の一生を、女としては生きるつもりは、ないので。今は、少なくとも。二人が魅力的な異性であることは認めよう。」

私が惹かれる、惹かれないはともかくとして。

「……あなたはそれでも、生きていけるのね」

勿体ないと想うけれど、うらやましいわ、と彼女は遠い目をした。「私は選べないから。贅沢を言うとお思いでしょう、何不自由ない私の身でそんなことを想うのは。」

けれど本当に、選べない。

血も、性別も、身分も、職も。生まれついたものから逃れられない、逃れる力もない。あなたと私は似ているのに、こんなにも瓜二つなのに、まるでその人生は違っている。不思議なものですね」

「そうですね。」

……けれど、エレノイア姫様とはとても比べ物になりませんが、私も、選べないことは多くありますよ。過去が、たった一つでも違っていたら、私は細工に携わらなかつたかもしれないし、平凡な町娘として暮らして一生を終えたかもしれない。可能性なんて、無限にあるようで不思議と制限をかけられているものです。出来る限り、後悔をしない選択を繰り返してきたつもりです。それでも失敗は付きまとうし選べなかつたこともある。けれど、今どこで生きているか、ということを考えてときに、今いる場所を私は大切に想う。無為の結果ではなく、それなりに努めて得た場所ですから。

……それでもやはり私は恵まれているでしょうね。好きなことをして生きていけるのだから」

一時、2人で黙って互いの、人生を思った。どちらも相手の身になることなんて、想像が及ばないくらい、別世界の住人だというのは分かった。それでもとてもよく似た二人は、並んで、だんだんと閑散となる舞踏会場を眺めていた。

「あなたの事をいろいろ聞きたいわ、いいかしら？」

「ええ、私もあなたの話を聞きたいです」

そうしてしばらくの間だったが、二人でいろいろな話をした。私の過去の話、細工や宝石の話、彼女はとても興味津々で行った様子で聞いてくれた。彼女の城の様子、姫として受けなければならぬ様々な教育、脱走の冒険談の数々と彼女の話も面白かった。どんな

男性が好みかなどと問われたのは、男装を始めて以来初めてだった。楽しかった……自分がどこにでもいる女の子になったみたいで。

ロイと王様がやってきた。

残念だが、そろそろ、お喋りはお仕舞いだった。

きつと、もうない機会だと知っていて、また会う約束をした。

「元気でね」

「ええ、お姫様も」

「エレノイアでいいわ。ねえ、あなたは嫌いかもしれないけれど、ドレスもとても似合うわよ」

いつか入れ替わって1日遊んでみたい。そんな話をした。

「とりあえず、父上の様子を見に行った方がよい。エレノイア姫」

そう言いながら、ヴィーはこちらへやって来た。

「フィーと話はできましたか」

「ええ。とても、楽しかったですわ……」

一瞬、彼女はうつむいていたが、毅然と顔を上げて王を見据えると、深い礼を取った。およそ、王族のとる礼の深さでない。

「ヴィエロア王様、此度は親子ともども誠にご迷惑をおかけいたしました。ご処断はいかようにもお受けします」

先ほどまで、うきうきとどこにでもいそうな乙女であった少女は、あの、刃を首に当てた凜とした王女へと変貌していた。

「そんな！ 未遂じゃないか。それにあなたは何もしてはいないのに」

思わず留める声が出る。彼女が、裁かれるなんて、そんなの嫌だ。

「いえ。私が逃げなければあのような事態は避けられた。仮にも一国の王の命を危険にさらしたのです。フィーさんだって、危なかった」

「私は大丈夫だ！！だから……」

「どうぞ、ご裁断を」

彼女は頭を下げたまま。

王はそんな様子を見て微笑んだ。

「いえ。その必要はない、アラスカシア王ご自身が今日得た苦しみが罰となりましょう。勿論外交上でこれを理由にいくらか有利な立場に立たせてはいただくが」

「けれど」

「かの王は私を試してくださったのでしよう。王として相応しいかを。戴冠の儀で私が竜の血に認められたと信じ切れなかった者たちも、これ以降は騒ぐことはない。一々証明する手間が省けたというものです。今回はそういうことにしておきましょう、ただ」

ふ、と彼の顔に浮かんだのは、ぞつとするような笑みだった。王の言葉に顔を上げていた王女は、それを受けて微かに慄く。

「これ以降わが国を冒すことがあれば、それなりのお覚悟を」  
「……」

「そう伝えていただけますか」

「はい、必ず。感謝、いたします」

はつきりと頷き、そう答えて、エレノイアは去っていった。

## 18・感謝と謝罪

揺れる華やかなピンクのドレスと薄茶の長い髪を、私はずっと見送っていた。

「本当に、そっくりだったね」

「全くだ、この世には幾人か同じ顔がいるとは言いが」

並んでいたヴィーとロイが、エレノイアが見えなくなっしてからこちらを向いた。……二人してじろじろ顔を見るのは止めてくれ。フリーの方が顎が細いとか、いやちよつと鼻が低いとか本人の前で語るな。

「でも、一目見たただけだと見間違えるくらいには似てる」

「ああ」

聞き流していたが、彼らはそう言う結論に落ち着いたらしい。

「……顔は、な。でも、言葉遣いの上品さや立ち居振る舞い、なにより私は誰かのためや国のために死のうとするような真似できない。やっぱり彼女は私とは違う、覚悟を持ったお姫様だと思うよ。それよりも」

そう呟いて、私は二人を睨みつける。

「どうしたの」

「どうした」

ヴィーは相変わらずのにやにやとした顔で苛立つ。ロイの方は、心持ち、こちらを見る目が蕩けているように思っのはどうしてだろう。まあ、それはどうでもいい、ロイ、まずはお前からだ。

「二人には言いたいことがある……まずロイ」

「なんでしよう」

「ロイ様？」

一瞬彼は押し黙った。

「……なんだい、急に気味が悪い」

「しらばつくて、今の間は何だ。というかお前は遅れてきてお姫様と何をしていたんだ。お姫様から様付けで呼ばれるようなことがあったのか。こっちはその間に大変な目にあっていたというのに」  
「なんだか腹が立つ。」

「フィー、俺と踊れたじゃないか」

「王様は黙っていてくれるか」

お前と踊ったのはともかくその後の災難は一切なかったことにするの。そうか、お前に任せた私が馬鹿だったんだ。それを思えば、ロイには迷惑をかけたし、実際助けられた。私は王様からロイに向き直った。

「いや、ロイ……感謝してる。私を、見つけれなかったからエレノイア姫を、探し回ってくれたんだろう」

それにあの時名を呼ばれなかったら。彼はエレノイア姫と私を間違えてはいない、私の目を見て名を呼んだ。そうでなければ、彼女は死んでいたかもしれない。あんな震える手で、死に至るほど首を掻っ切れたとは思えないが、ヴィーの言ったようなショック死が、彼女に絶対に起こらないと誰が言えよう。だから。

「あの時名を、呼んでくれたことも。ありがとう」

彼はふわりと笑った。ああ、いつもの笑みだ。

「どういたしまして。遅くなったのは本当にごめんね。王女の準備に手間取っちゃって」

「準備？」

「彼女もフィーみたいに男装していたんだよ」

「それは……」

驚きだ。じゃあ彼女を見つけた後で今度は一から準備しなくてはならなかったのか。



「お疲れさま」

「ん、大丈夫。僕は髪を結うのを手伝ったくらいだし。フィーは怪我ない？」

危うく頸動脈が断ち切られるところだったが、未遂だ。

「なんとか。それより、『ロイ様』のほうは大丈夫か」

「大丈夫だけど。こだわるなあ。僕だってそう呼ばれるのは断ったんだけど、彼女が聞いてくれなかったんだよ」

「ふうん」

どうせいつものように極めて紳士的な態度をとって、無意識にお姫様を陥落したんだろう。そう、例えば……「明かりが少ないから掴まってください。お怪我をなさってしまうのではないかと心配です」「まあ、ありがとう」「しっかり捕まっていますよ」「近づくと二人。「エレノイア姫」「ロイ様……」みたいな感じか。そうか。なんとはなしにロイを睨んでいると、放って置かれてすねた王様が堪らなくなったのか声をかけてきた。

「おい」

「なんだ王様」

「お前、ひよつとして怒ってるのか。ヴィーでいいと言っているだろう？」

「示しがつかん。そんなだからあんなことになるんだ」

「それでその態度か」

「いや」

「ロイに言いたいことは済んだようだが……俺に言いたいことはなんだ」

王様の指を見る。包帯で縛られているが、血がその上に滲んでいる。

「……悪かったな」

「なんだ」

「指！」

包帯でぐるぐる巻きにされているのを指差して怒鳴った。ついつかり深く斬ってしまった自覚はある。

「ああ、これか。責任でも取ってくれとでも？」

にんまりといやな笑みを浮かべて言う。なんだこの男。

「その程度の傷……」

「ほら、まだ血が滲み出してくるぞ」

それは傷口を押せばそうなるだろうよ。平気なくせに。

「だから、悪かったと言っている」

正直腹が立った。こいつはきつと死ぬ気はなかっただろう。時間稼ぎだ、ただの。何が命がけで惚れた女を救う、だ。例え首を切り落としてもこの男なら死ななかつたんじゃないだろうか、ひよっとして。私の心配を返してくれ。後悔していると、王様は言った。

「お前が口付けの一つでもくれたら治るかもしれない」

そんなことを言ってるようなら大丈夫だな。

「相変わらずの絶対調みたいだな、それ以上調子に乗ってくれんな。私にそんな傷を癒す力はないよ。仮にあつても何もしないだろうが。そもそも、元はといえばあんたが悪い。血の証明の他の手段に気が付いていたなら、最初から自分でどつか適当に切つてアラスカシア王にその血を飲ませてやればよかったんだ。そしたら私があんなことする必要は無かった」

「いや、血の証明を試してみるのも悪くないかと思つてな」

つまり、まだ試したことがないということ。

彼が竜の血を飲んだのは戦乱の後だ。それから傷一つ作らなかつたというのか？ ……考えていて、ふと、彼と紅茶屋で会ったとき彼の手の甲を傷つけたのを思い出した。あの時だつて傷は治らなかつた。そして今だつて。

「馬鹿か、指の怪我を見れば分かるだろう。死んでたんだぞ！」

「死んでた、ね」

王の皮肉げな笑みは、なんとむかつくことだろう。

「俺が、憎いんだろう？　ならば、それでいいじゃないか、万々歳だ、おかしなことを言う」

「ああ、憎い。だが、この手で殺してやりたいわけじゃない」

憎い。それは変わりない。しかし、いなくなつて欲しくとも殺してやりたいとは思わない。複雑だ。それに、こいつは私を庇つた。それも事実だ。だがそのことに礼を言おうとは思えない。もう、私のために誰か死ぬのはこりこりだ。そんなことで感謝されると思つてゐる奴は絶対に間違つてゐる。

「お前は死にたいのか。私は、礼を言う気はないからな」  
そんなことを言う私に向かつて。

王は、あの、底の知れない笑みを浮かべた。

「剣を突きつけられたとき」

「なんだよ」

「殺してくれても俺は構わなかった」

「な、にを」

あの時王はどんな顔をしていた？「フィー？」と私に何かを問うように。

笑つていた

「お前は俺を憎んでいるんだろう？」

こちらを見ている、その目は、何を。

誰を？

「まあ、生きているに越したことはないがな」

私が呆然となつてヴィーを見つめているのに気付くと、彼はまる

で取り繕うようににやりと笑ってそう言った。

「あのさ、」

感じた違和感について問いかけようとした。だが。

「王！ 全く、何をなさっているんですか！？ 隣国との外交問題など起こしてくれて！！ あそこまですることはなかった。事前に資料をお渡しして、万一場合の対策まで打ち合わせていたでしょうが…… ああ、もう行きますよ、とりあえず変な噂が立つ前に、舞踏会の終了を告げると共に事件の説明を！ ほら、早く」

やってきたのは、怒り心頭のクェインだった。王の補佐は忙しそうだ。

「対策？ 予定はいつでも未定だと知っているくせに。それに人の口に戸は立てられない」

「屁理屈はいいから急げこのど阿呆」

半ば引きずられながら彼はクェインに引っ張られる。

「と、いうことらしい。また後でな、フィー。帰るなよ、被害者とはいえ重要参考人なんだから……あと、舞踏会の後会つと約束していたが無理そうだから、晚餐の後に……」

また会おう、と。遠ざかっていく。

「もう会いたくはない……」

今日はもう、疲れた。

「どうする？ フィー」

「どうしようか」

ロイと顔を見合わせる。周りの好奇の視線を受けたまま、ここから抜け出すのは難しいと分かっていたから。

「女装のことを、どう説明するか」

私が、あるいは女ではないか、という視線で見る人間が増えるのはいただけない。これが趣味かと思われるのも嫌だ。エレノイア姫

が、死にたくないが故に私を身代わりに立てたなどという弁明は、彼女にとっては不名誉だし。

「王女は私の性別を見抜いたけれど、黙っててくれるってそう言った。あの、メイドは……多分放つとしても彼女が口止めしてくれるんじゃないか。これだけ似てるんだ、余興に女装しましたって言うのはどうだろう？ 私とエレノイア様があまりにそっくりだったから、会場で偶然出会った二人で驚いたついでに入れ替わって、舞踏会の最後の見世物として示し合わせた、とか。ばれないように彼女は隠れていた、それで父親は知らなかったから勘違いしました、と」「うん、それでいこうか。もういろいろ考えるのも面倒だしね」

「そう、面倒だ」

ロイが持つてきてくれた、今日元々身につけていた一張羅を片手に、うんざりため息をつく。ちよつと皺がよつてくたびれてしまったその姿は私のよう。まったく、細工を作るより疲れた。楽しくもないし。

「それにしてもフィー。ヴィーに近づかないって言ったよね」

「……そうだっけ」

「言った」

約束を破ると彼は怖い。

「私は近づいた覚えはない、あいつが勝手に近づいて来るんだ、断りもなく」

事実だ、私は無実だ。都合、今日3度、いや4度か。あいつが私と認識してやって来たのは。今日はもう二度と会うこともないだろうと会う度に思ったのに。

「そう言えば一度なんか全速力で逃げ出してたね……」

あれは疲れたな。あれ？

「あの時、ロイは何か言おうとしてなかった？」

思わず飛び込んできた騎士とメイドに中断されたけれど。

「なんでも、ないよ」

「そう？　なんか、大事な話かと思ってたけど。違うならいいや」

真顔だったし。

「大事な……そうだね」

「なんだ、やっぱり大切な話なのか？」

「フィー、今日は君が連れ去られてから、すごく心配した」

それか。

「血の証明なんて聞けばな」

誰だつて焦る。

「死んでしまおうかと思った。実際危ないところだったでしょう？  
ねえ、フィー」

気付けば、その腕の中に閉じ込められていた。懐かしい感覚。彼の腕の中は冷たいのに、温かい。小さい頃から細工の作業や悪戯でしょっちゅうひどい怪我をしたり危ない目にあったりする私に、ロイはよくこうしてくれていた。今は、そんなに怪我もしなくなった。だから、久しぶりで少々、照れくさい。ロイの体からはハーブの、香りがする。落ち着く香り。今日のこと、本当に、心配してくれたのだろう。

「なに。私ももう子どもじゃないから泣いてないよ」

こうしているとんだかとても、気が緩むけれど。涙は出ない。

「」

なんだ？ ロイが呟いた、短い一言を私は聞き逃す。

「フィー、僕の前からいなくならないで」

聞き返そうとしたときに続いたのは、弱弱しい声だった。それに驚く。腕が少し、震えているのが伝わる。そんな言葉をあげるのには、もっとと相応しい人がいるだろう、ロイ。私たちは離れる必要のない、家族じゃないか。

「何言ってるんだよ、今だって傍にいるじゃないか。これからだつて、変わらないよ」

「約束」

「する」

でも。

「ロイが……いや、私が『お嫁さん』を買ったら出て行かなきゃいけない」

新たに家庭を持てば、それぞれに独立して生きることは大切だ。それにしてもロイのお嫁さんか。やっぱり髪は銀色がいいなあ。

いろいろ希望はあるが、どうも、想像がつかない。

「それでも縁は切れないからな」

そう言うと、ロイは、

「僕を買ってくれるんじゃないの？」

と、いつもの調子で言った。私は笑って、気が向いたらな、と答えおいた。

## 19・冠の話(1)

結局自分がされた行為に逆上してしたことが、王女の命を救い、王の名誉を守ったということにいつの間にもやらなくなって、あれから随分城の皆に親切にされた。その一環で、一室を貸し与えてもらって、ようやく重い服を着替えることになった。なんと今日は、ここに泊まってもいいという。手の込んだ細工のなされた調度品の数々を眺めうつとりと私は溜息をつく。王城の客室用の部屋だ、そのどれをとってもなかなかのもの。

とりあえず着替えよう。そう思って、いそいそとレースやら宝石やらがじゃらじゃら重い黄色のドレスを脱ごうとしたときのことだ。与えられた部屋の備え付けの鏡に映った自分に気付いた。

そこには、エレノイア姫がいた。……偽者の。鬘を取ってみた。苦笑いが漏れる。短い髪は、ドレスにはやはり合わない。彼女は似合うと言ってくれたけれど、私は彼女のように、なれないだろう。彼女が、私になれないように。私は私だから。

それから職人のみの晚餐に向かう。

私がドレスから着替えてくると、ロイは、

「もうちよつとあのままでも良かったのに」

と血迷ったことを言った。お前、私がドレスを嫌っていると分かっ  
つていてその発言をするのか。

「フイー似合ってたよ、綺麗だった」

「そうか？」

「うん」

「ロイも一度着てみればいい、どれだけ嫌か分かる」



歩くたびに裾は足にまとわりつくわ、体を動かすのは億劫だわ。

「それは遠慮しておく」

はつきりとロイは断った。

「ほら見る。自分が嫌なことは他人に押し付けてくれるな。……なにより私は、これが一番自然で落ち着くんだよ。楽だし」

私はそうぼやいて、着慣れた男物の服をつまむ。今回改めて女性というのは苦勞が多いものだと思った。男の衣装は軽く動きやすいものが多いのに。

「質素なワンピースとかはだめ？」

なんなんだ。そんなに女装させたいか。

「走りにくい作業しづらい」

「そう……」

「私の男装は似合わないか？ それとも滑稽？ 貧弱だから？」

「ううん。そんなことはないよ。それも似合ってる」

「へへ、ありがとう。なあ、ロイ、とりあえず食べよう。冷めてしまっ」

テーブルの上は豪華絢爛だった。

ああ、目の前にはご馳走。動き回ったせいでお腹がすいていたので、ひたすら詰め込むように食べた。幸せだ……。

「フィー、よく噛んで」

「ん」

「聞いている？」

「ん」

話す余裕もなくそんな風に返していると、ロイに呆れた顔をされた。まあ、いつものことだ。素晴らしい勢いで食べることに熱中する私の様子に、周囲が多少引いていたのを感じたが構わない。

「あのドレス姿にはまさか、と思ったが」

「あの実に豪快な食べっぷりはやはり男だろう」

「そうだな……」

放つといてくれ。成長期だ。

ようやくある程度人心地がついたところで、声をかけてくるものがいた。

「今日あなたの細工見たけどすごいな、あれ。本当に竜がいるみたいに感じたよ」

「嬉しいな」

看板など作ったのは初めてだったから、少し心配していたけれど始めたらいつものように勝手に手が動いた。そう言えば王も一瞬竜と間違えたと言っていたっけ。奴も見る眼だけはあるから、それだけの物は作れたのだらう。いい宣伝になったかな。

「宝飾品も見た。素晴らしかったよ……でも何故かな、欲しい、という気持ちにはならなくてなんと云うか」  
なんともいえない顔をする。

「あの細工と、見合う人は、欲しがるんだよ、あれ」

不思議とこの人なら合う、と思う人に売れる。そして私の作った細工を盗む輩は、結構少ない。

「そうなのか……じゃあ、俺が見合うものは無かったんだな、残念でも、とつても良かった」

にこりと笑う。大柄で朴訥とした、感じのいい人だった。

「君の仕事は？」

「ああ、俺も細工！お宅みたいに石や金属じゃなくて木彫りのほうだけ」

「あ、それ見た！ でかい鼻彫ってただらう？ なんかすごく温かみがあつて」

「そう思う？」

にこにこ話し合っていると。

「フイー」

「なんだ」

「王に呼ばれていたよね？ 行くよ」

「ああ……そうだったな。悪い、先に失礼させてもらう」  
「すみません」

「いや。王に呼ばれているなら急いだ方がいい」  
気のいい青年に見送られて、私は慌てて席を立つ。ロイは先にたつてすたすた歩き出してしまった。心持、機嫌が悪いように感じたのは気のせいだろうか。変な奴。

晩餐の場を抜けると、夜はだいぶ更けてしまっていた。時刻は真夜中近い。ようやく、一日が終わる。酷く長かった。今日だけで随分と工房の宣伝にはなったと思うけど、疲れた。さっさと眠りたい。しかし、その前に嫌な約束を果たさなければならぬ。

とりあえず貸し与えられた部屋にいったん戻って身づくろいをしたのち、私たちを呼びに寄越された騎士に案内されて、いわゆる執務室にやって来た。

「失礼します。お二人をお連れしました」  
「ありがとうございます、下がってください」  
「はっ」

見渡すと、そこはともかく無駄のない部屋だった。

あるのといえは渋い色をした重量感のある木で出来た机と椅子だけ。深紅の天鵞絨のカーテンは大きく開け放たれており、満月の光が毛足の長い青の絨毯を照らしている。

部屋の中には、逆光を受けて影になっている王と、補佐のクエインがいた。

なんだか、不吉な雰囲気をかもし出しているが、彼の人柄を考えるにわざとではないだろう。

「で、呼び出してまで何の話があるんだ」

さっさと用件を聞いて立ち去りたい。眠い。

「そうですね、何の話ですか、王。出来れば早めに終わらせていた  
だきたいものですね……ふあ……。失礼。というか私はここにいる  
意味があるので？まあ、いいですけど」

もう疲れきりました、というようにクエインは先ほどから欠伸が  
止まらないようだ。彼も眠いのだろう。声に冴がない。場にはなん  
とも締まりのない空気が漂う。

「フィーも今日はだいぶ疲れたみたいですから、こちらとしても早  
く御用が済むなら嬉しいと思っていきますよ」

ロイが言ったのに、ヴィーは片眉をあげたようだった。

「……お前もついて来たのか」

「もう夜も遅いですからね、『弟』が心配です」

にこりと微笑んだロイに、王様が苦笑した気配がした。

「敬語はいい」

「そう？ならば遠慮なく。一体何の用だい、国王様」

…思いの外あっさりやめたな、ロイ。

用意された椅子を勧められ、腰掛ける。話し合いの用意ができる  
と、王様は切り出した。

「ふむ。本題に入ろうか」

「なんだ」

何の用だか知らないが、ともかくさっさと終わらせてしまおう。  
そう思いながら私が尋ねると、彼は答えた。

「冠の事について聞きたい」

途端。ざっと血が引いた気がした。いや、血が上ったのかも分からない。

「私に」

声が、詰まる。

「私にそれを聞くのか」

「いけないか」

王は、分からないという顔をしている。

「お前が適任だろう。冠をお前が俺にさしたあの日、神官長に聞いた。これを作ったのはお前の師匠らしいな、彼女からおそらくお前に受け継がれたのが、竜……」

「黙れ」

そのことを。

「師匠のことをお前が口にするな。これ以上話を聞くといいなら私は出ていく」

「おい？」

「おやすみなさい、国王陛下」

私は部屋を飛び出して、急いで扉を閉じ、追いかけてくる声も憎い王の姿もなにもかも遮った。

体が、眠いのもあってかいやに熱いを感じる。

今日はもう、眠ってしまおう。

## 20・冠の話(2)

彼と王はよほど折り合いが悪いのだろうか。

フィーの出て行った扉を見つめ、クエインは溜息をついた。

フィオレンティーノの何らかの逆鱗を、寸分違わず王は撫で上げてしまったらしい。人を怒らせることに関しては何かの才能に恵まれているらしいからな、この王は。

「王、また逃げられましたね……この嫌われ者」

「こうなると、お前も来たのは好都合だったな、ロイ」

「無視ですか」

酷い話だ。こんな夜遅くに呼び出しておいてこの扱いだ。辞任表を突きつけてやるのか。

「フィーと同じくらい僕が冠のことを知っていて、さらにそのことを僕が答えるとは限らないよ」

「お前は、やはり穏やかなわけでも優しいわけでもないな」

「あなたにそうする理由がないからね。会ったびフィーを傷つける」

「ふぁ……」

ひとり欠伸をかみ殺す。眠い。

「傷のつかない人生に意味などあるか」

「つかなければそれに越したことはない、傷つきすぎれば壊れてしまっ」

ああ、話が脱線している気がする。

「あの」

「なんだ」

「なんですか」

同時に似たような表情でこちらを向くその様は、仲良く見えなくもない。

「私はあなた方のよく分からない言い争いをわざわざ聞くためにこの場にいるのですか。それならば帰らせていただきたい」

心からそう思う。だが二人は青年は引き止めた。

「そんなことはない」

「いてくださると助かります、二人きりなど何をされるか」

「男に興味はないぞ」

「へえ。フィーには？」

そう言うと、フィオレンティーノの保護者を名乗る青年は不敵に笑った。穏やかに見える青年も、こんなに意地悪く笑うことがあるのだと思った。

「お前はどうか？」

彼と似たような笑みを浮かべても、王はいつも通りだが。

……帰りたい。

こいつらはさつきから何の話をしているんだ。そもそも、冠の話をするんじゃないのか。眠い。

「さつさと話を進めろ、この色呆けのど阿呆どもが」

ああ、何か言ってしまった気がする。

「……クエインさん、本当に疲れてるんですね」

「……悪かったな、お前に付き合ってもらおうなどと言い出したのは勿論嫌がらせだった」

それ、謝っていませんよ、王？

「まあ、できれば同席していただきたいところですが、あまりにお疲れならお休みになってもかまわないですよ。もしここにいるのがフィーで、二人きりになろうなどと言うのなら、この王様の轟く騎士としての名も廃れるところでしょうけど」

「英雄色を好むという。まあいい、俺が聞きたいのは冠のことだ。率直に聞こう、この欠損が何であるかお前は知っているのか？ よく答えてくれないと再びフィーを呼び出して問うことになるが」

「脅迫とは卑怯だ」

「交渉だよ。で、答えは」

ロイさんはじつと王を見つめた後、静かな声で答えた。

「……それは穴だ」

「見れば分かる」

「うるさいな。鍵穴だよ」

「鍵穴？」

わけが分からないことを、ロイさんは言う。

「だがそれは、欠けた形で出来上がったといえるんだ、細工師としては。だからその製作者をなじるような真似はくれぐれもしないでくれ……仮にも僕の母親だからね」

欠けた形で完成している？ いや、細工師としては、と言った。被る者としては違うと言うことか。

母親。そう言えば。

「フィーさんとロイさんの師匠は、クレア・エルフランド。あなたの母親でしたか」

名は知っているが、細工を手がけたとは初めて聞いた。

「そうですよ」

ロイさんは微笑む。彼女のことを何か思い出しているのかもしれない。



「オーナーなだけと思っただら彼女も製作者だったと知って驚いたよ」  
王は、そのことをとつくに知っていたようだ。

おそらくは彼の祖父に当たる神官長に聞いたのだろう。竜と会話すると言われる彼なら、竜の契約の証たる冠の作り手である細工師のことを知っていておかしくない。

「細工師資格は女性には与えられないから。父がいないからずっと、彼の分彼女が細工師として工房を支えた。闇の時代にも」

ロイさんはそう言った。それは間違いなく違法だが、冠を見る限り、彼の母親のその腕はおそらくフィオレンティーノに比肩するだけのものと見受けられる。それほど冠は見事なできれば良かった。繊細にして大胆な造りなどは、フィーに受け継がれているのが分かる。「そうか……彼女は、もう亡くなったのだよな」

「ああ。だからもう、時効だと思うよ。ちなみに、その冠が最後の作品」

王は、冠に目を落とした。時折月を雲が覆い、そのたびに部屋は薄暗くなる。そのため、その表情はよく分からなかった。

「成程」

「それであの反応ですか……」

その死は、おそらくこの王の王位と何かしら結びついているのだろう。間違いなくこの冠を通して。そうでなければ、フィオレンティーノがあれば執着し、怒るわけが分からない。

「クレア・エルフランドは王位の犠牲となったとでも？」

その率直な言葉に、ロイさんは曖昧に微笑んだ。

「……仮に、そうだとして。俺自身は王位など望んだわけではない、と言っても何の言い訳にもならないな。むしろあらゆることへの逃げ口上にしか見えないか」

「そうですね、しっかりしてください。あなたは多くの人間の命を

左右する立場に既に立っているのですから」

「まあ、そうかもな。俺は人がそこまで弱いとは思わないが」

弱くなくても。少なくともこの国は、今の時代は、支えが要るのだ。王という名の。」

切り替えるように、王はロイさんへと質問を続けた。

「それで鍵穴とは？これが何かをしまいこんでいるか、あるいは扉とでもいうのか」

「まあそういうことかな」

ロイさんは目を瞑った。そのまつげの長いこと。女性なら、傾国の美女であったろうと馬鹿らしいことを考えた。……考えながらも、また欠伸が漏れた。連日の徹夜のつけだ。眠すぎる。

「ヴィー、あなたは、術が使えるよね」

「そうだが」

ロイさんは、王を見つめた。術具を作るといふ彼は、おそらく人の中の力の流れが分かるのだろう。

「とても清らかな力が漲っているのが分かる。そうだな、その気になれば、あなたの代だけで鍵を全て手に入れて開くことが出来るのかも知れない。かの英雄は一人でなしたと言うから……まあ、それほどでなければ竜が彼を友人とは言わなかっただろう」

「鍵を開くのに術力がある？ ということは、精霊がかかわっているのですか」

「ええ、そうです」

「ふうん」

石、か。そう、王は呟いた。

ロイさんは、そんな王をじっと見ていた。

「……さて。もう、僕は十分話したと思うんだけど？」

「やはり全てを言う気はないか」

「話してあげすぎたくらいだ」

確かに。何がしまわれているのか、術と精霊でもってどう冠の穴を埋めるのかはよく分からなかったが、取っ掛かりとしては十分だ。

「つまり、王はそれを埋めるべきだということですね」

「どうでしょうね」

ロイさんは首をかしげた。

「先ほど言ったように、今のままでも国王の冠としては完全ですから。有事の際、竜の力を純粹に、多く得ることができる造りですよ。申し分なく。だから石を鍵にする必要など全くないと、そう言えなくもない」

「ならばなぜ、そんな話を？」

「気まぐれです」

「……そうですね。」

どっと疲れた気分になっていると、銀の髪的青年は再び王へと向き直った。

「ヴイー、そう言えば話したいことがあった」

「なんだ」

王が問うと、ロイさんはこちらにちら、と目を向けた。目でわかる。ああ、居ると言ったり出て行けと言ったり、彼は随分身勝手な面があるらしい。まあ、好都合だ。

「私はもう休みます、眠い」

「ちっ、もう行くのか」

王が舌打ちした。彼は本当に私を過労死させたいのだろうか。そこそこ興味深い話ではあったが、私がいなくてもよかったのは間違いない。聞かずともあの馬鹿が話してくれただろう。これから話す

話となるとさらに興味はない。

「さすが、話が分かりますね。ごめんなさい。良い夢を」  
ロイさんがにっこり笑う。

「ええ。あなたも」

部屋に着く前に力尽きてしまえそうなくらい、眠かった。今日はよく眠れるだろう。

## 21・問いかけ

「さて、生き残ったのは二人きり、か」

おどけてヴィーが言うのを、ロイは見やった。眠りを死というのはそれらが酷く似ているからだろう。動くもののない静けさ。城はとつくに、そんな静寂の中へと沈んでいる。そのため、話し声はやけに響いて、籠った。

月の光が二人が向き合う間に注ぐ。月明かり。ああ、これもこの王が取り戻したもののか。

フィーは、もう眠ったかな。眠れただろうか。また、悪夢を見ていないだろうか。うなされて、いないだろうか。

「もしそうなら、死にそびれて頂垂れたい気分になるだろうね。あなたと二人きりの世界など」

「悪くないだろう」

「それなら、あなたがフィーに近づく心配がないといった点では悪くない、かな？」

「いや、やっぱり嫌だな」

「ならばクエインを帰さなければ良かっただろう」

「いや、彼はもう、立ちながらうとうととしていたし」

安全に帰っただろうか。可哀想な王の補佐を思い出す。

「さて、俺も実は結構眠いんだ。用はさっさと済まそうか。」

フィーの話か？ お前がクエインに聞かれたくない話とは。先ほどの話で、フィーが私をやたらと憎むわけはまあ、分かったと思う。しかし、まったく彼女を傷つけない、なんていうのは所詮無理な話だ。お前はどうかやらそれを強く望んでいるらしいが。

俺が近づこうと近づかまいとに関わらず、同じこと。分かってい

るんだろう、完全に誰かを、動き続けるこの世界から守りきるなんてのはただの理想だ」

それでも、だ。

「かといって今、誰かが他の誰かの手で傷つくのが分かっているなら、そのままにしてはいれないだろうと僕は思う。あなただって、それが嫌で立ち上がったのではないのか」

守ろうとした対象が、一人の人か一国かの違いはあれ。

「まあ、そう言われればそうだが」

「大体、あなたはフィーに対して中途半端にすぎるよ」

僕の言えたことではないかもしれないが。

「さつき。フィーから大体、アラスカシア王にまつわる一連の話は聞いたけど」

「それで？」

「あなたはフィーを二重に利用した」

その言葉に、ヴィーはびくりと柳眉を動かした。

「どういう意味かな？俺は彼女を救ったし、あまつさえ彼女に切りつけられた」

それも事実だ。しかし、一面に過ぎない。

そしてそのまま、フィーは彼の謀に気付きそうに気付かなかった。終わりよければそれでよいと考える彼女の気性はうらやましいが心配だ。こんなふうには、気付かぬうちに誰かに利用され、それに気付いたときまた深く傷つくかもしれないと思うから。

「僕が遅くなつたのは本当に失態だった。彼女が、フィーが斬られそうになったときに、あなたがアラスカシア王の意識を強く逸らしてくれたことは感謝しても足りない」

そうしなければ、ほぼ間違いなく彼女は死んでいただろう。

「それはどういたしました」

おどけたようにヴィーはそう言った。それを、思わずロイは睨む。「だが、あの時あなたは彼女の言うように気付いていたはずだ。

竜の血を本当に飲んだかどうかが疑われているという時点で、自らの血をアラスカシア王に飲ませれば証明など簡単にできるし、なら被害は出ないはずだと分かっていたんだろう？アラスカシア王はともかくあなたは知っているのだから、自分の体に流れる血の意味を」

それは裁きの血なのだ、と。

「茶番を演じたのは、アラスカシア王が明確に自分に殺意をもっていたと示す必要があったから。これは、フィーが斬られても、仮に彼女が本物のエレノイアの方だったとしても、示せない。そこで彼の一番の狙いを曝け出させるために自分が切られる役を買って出た」

「……全くフィーは鈍いよな。あそこまで俺を責めておきながら、なぜかそこまで行き着かない」

素直に相手は認めている。そうだったのだと。それに対しては、ロイに怒りは湧かなかつた。別にフィーも、彼が命を張って自分を助けるような男かは心底疑っていたようだし。さらに言えば、剣に手を一度もかけなかつたので彼に非がないのは明白で、それに加えて血を飲ませるといふ汚れ役を全てフィーが買って出ってしまった。

まあ、彼女は後悔しないだろうが。

「そう。フィーは肝心なところでいつも抜けている。だから僕は心配なんだけど。今言ったことを別に責めはしないよ、僕にも落ち度があつたから。……ただ、自分のために人が死ぬ、ということにフィーが特別拒絶を示すのは覚えておいた方がいい。もし、これからも彼女に関わるつもりなら。」

そんなことより、2つ目のほうが問題なんだ。このことを考える限り、二度と彼女の前に現れて欲しくないくらいに、僕はあなたが嫌いだ、ヴィエロア王」

睨みつけると、彼は苦笑した。

「これはまた、フィーに続いて随分と嫌われたものだな」

「……何故、あんなことを言ったんだ？」

「何かな？」

「惚けるな。『殺されても良かった』だって？しかもあの目はなんだ」

「少し過去に思いをはせたただけだ、他意はない」

「何を、誰を見ている？」

フィーに。

その問いに、ただ、王は笑ってみせた。暗い目をして。

「あなたはフィーが自分を憎むのを厭わないで彼女に近づく」

「ああ、そうだな」

「フィーに嫌われたままでいたい」

「まあ好いてくれても構わない。大歓迎だ」

「ふざけるな……人を憎むことが苦しくないと思うか？」

今日だってあんな顔をして。……ここを去り際のフィーは、相手を視線だけで切れそうなくらいに酷く鋭い眼をして、そしてそれだけで辛そうだった。もう、そんな顔をして欲しくないと願っていたのに、やはり僕には救えないのか。ロイは、王を憎むことに苦しみ、そしてその度悲しいことを思い出すフィーのことを想った。

「彼女をあなたの『贖罪』願望に利用してくれるな」

「俺もそれなりには苦しんでいる」

ふと真顔になって、彼は言った。二人で、睨み合う。

「憎まれた相手に殺されたいだって？ 正直、僕があなたに引導を渡してやりたいところだが、あいにくそんなに優しくはないんでね」

王である、この男は。

寛容で、頭も悪くない、何より戦いを好む人種には珍しく彼は平和を愛している。国も、人も。王として、良い方向に導いていくだ



ろうと思うのに。

「そのざまはなんだ、クエインさんじゃないが、しっかりしてくれ。お前は王だろう。私事や過去に縛られるな、ただ、今を見る」

母の教えだ。ただ、今を生きると。それが全てだと。彼女の場合後先を考えない猪突猛進なところもあつたが、それで自分達を食わせていたのだ、それなりに意味はあると思う。

「そしてフィーをお前の濼みに巻き込むな」

「別にそこまでするつもりはない」

「心の奥で望むならばそれは同じことだ」

「手厳しいな」

王は、笑った。いつもの笑みだった。こうやって、彼はいつも誤魔化しているんだろうか。おそらく彼にも辛い過去があつたのだろうと思う。だが、詳しく知ろうとは思わない。

ふと、ヴィーは言った。

「なあ、フィーに関しては望みが薄いという点で俺とお前は似ているな。似たもの同士、仲良くやろうじゃないか」

「あなたほど望みが薄いなんてことはない。僕の方が彼女の傍にいる」

「傍にすぎると意識しなくなるとはよく言うな、その典型じゃないのか？抱きしめられても相手が反応しないとは」

見ていたのか。ヴィーにだけは見られなくなかった。というか、彼に言われる覚えはない。

「触れるのさえ嫌悪される人間がよく言ったものだね」

「それだけ俺が意識されているってことだろうよ、『お兄さん』」

「あなたのような弟を持った覚えはないし、予定もないな、空気より存在感の軽い王様？」

「あれはなかなか難しい技術だ」

「どうだか」

フィーに何度となく忘れかけられた分際で。

「……あなたは、フィーにまだ近づくつもりなのか？」  
もういいだろう、とロイは思う。もう放っておいてやって欲しい。

「そうだな……今日のフィオナは俺を導く力強い女神のようだった。  
そう思わないか」

「それで？」

「戴冠式。そして、今日。俺は二度彼女に王だと示されて、今ここに  
いるわけだ」

「……」

「ならば、お前の言うように、今を考えると、彼女を抜かして考  
えるわけにはいかないだろう」

「引く気はないと」

「聞くまでもないだろう」

面倒だと思った。一体、この男はフィーをどうしたいのだろう。

そう思うのに、なぜか奇妙な安堵がある。

「なぜかお前に励まされたかのような変な気分だな」

考えていると、王はぼつりとそんなふうに呟いた。

「頭に蛆でも沸いたんじゃないだろうね」

「素直に感謝は受け取れないのか」

分かりやすく感謝を伝えられないのか。

「ま、いいや。何かよく分からんがすつきりした、ありがとな」

「感謝される覚えはない」

そんなつもりはロイにはなかった。けれど、聞きたいことは聞き、  
言いたいことは言ってしまったのですつきりとしたのは同じだ。結  
果的に、少なくとももう彼が悪戯に彼女を傷つけることはないだろ  
うと少し思えた。だから、先ほど、安堵したのだろう。

「言いたいことも言ったし。僕はフィーの待つ部屋に戻る」

「……待て」

「なにか」

「部屋は分けたはずだが？」

「予定外に客が増えたらしくて頭を下げられて、二人部屋でいいよ、と言ったのはフィーだ」

「あの馬鹿」

「それじゃあおやすみなさい」

「待て！おい、……」

呼び止める王を一人置いて部屋を出て行った。既に朝が近い時刻になっていた。フィーはきつともう眠っているだろう。

## 22・憎しみのわけ

ヴィーに怒りをぶつけてからすぐ、呆気にとられた顔をした3人を残して去ったが、あれから彼らはどんな会話をしただろうか。一人、部屋の中でそんなことを思った。

不可解な顔をしているだろうか。執務室から部屋に戻ると、枕に押し付けるように涙で歪んだ顔を埋めた。溢れ出してくる悲しみと、怒りが胸の中でぐるぐると渦を巻く。

「ヴィエロア・・・！」

『冠のことを聞きたい』

『これを作ったのはお前の師匠らしいな』

何も知らないで。あんな奴。あんな奴……。

あの時、刺してしまえばよかった

「そうしたら」

楽になれたかもしれなかった。

『その命は一度きりよ』

「師匠・・・」

けれど彼を刺したら、私は私を許さないだろう。殺したくは、ない。師匠が私を生かすために使った言葉を穢すことになるのだから、でも酷く苦しかった。

分かっている、私が勝手に彼の所為にしたただけだ。誰かを責めていないと悲しみはあまりに大きくて、堪えられそうになかったから。だから彼を憎んでいる。自分は多分間違っている。でもやはり

彼が王位につかなければ、師匠は生きていたかもしれない、そう思うと止まらないのだ。

「でもきつと、彼が闇を払わなければ、たくさんの方がまだ苦しんでいただろうし、死んでいたんだろうな……」

私の両親のように、誰かが誰かの大切な人を失って、泣いていたかもしれないのだ。だからと言って、師匠と他の人を天秤にかけて他の誰かが師匠より重いとは思わないが。私の視野は狭いから、傍にいる人の外側を大切に感じてあげられない。師匠が生きているなら何人死んだって構わない。

「酷い、話」

どうかしてる。

ベッドの上で、うつ伏せから仰向きになる。顔の上に置いた手の指の隙間から、暗闇が瞳に映った。明かりもつけずに、ただただ天井のほうをじっと見つめて、ぼんやりしていた。眠れなかった。

だから、師匠との古い思い出を手繰り寄せようとしたり。そうしたらよく眠れる気がした。暗い思考を遠ざけようと固く目を瞑って、いつしか私は眠りの中に落ちていった。

『教会からこの娘を連れて行くと、そう仰るのかな？』

『ええ。彼女の同意も貰いましたから、ね、フィー』

師匠の服にすがり付いて、後ろに隠れるようにしながらも、しっかりとこくこくと頷く小さな女の子。薄茶色の、長いお下げ髪が揺れている。

幼い頃の私だ。

師匠と私の前には、分厚い眼鏡をかけた青い神官服の男がいる。この教会の神父の男。なぜだか夢の中なのに目が合った気がして、ひやり悪寒が走った。

やけに鮮明な夢だ。この情景は、記憶から取り出して思い出すこ

とがなかったが、映像として私はよく覚えているようだった。改めて眺めると、神官はエレノイアの父親くらいの年だ。でっぷりと肥え太った壮年の男だった。女でも、師匠の方がはるかに格好いいな、と私は思った。神官のほうは師匠を男と思っていたようだったが。

師匠は私よりはるかにたくましく、男装が似合う女性だった。彼女が女だということ、工房の人間は最後のときまで信じなかった。勇ましく強い人だった。彼女の傍ならいつだって安心していられた。だから彼女の前で暮らしたいと告げた。師匠は快諾してくれて、それである日両親の死後引き取られていた教会にそのことを伝えに来たのだ。ここからこの子を連れて行く、と。

神官はしかつめらしい顔をして、師匠を人攫いでも見るような目で睨みつけていた。そして言った。

『私はこの娘の父親代わりのようなもの。フィオナがいなくなつたときには、日中探して歩いてまわって、それでもいなくて胸を痛め続けていたのだ。ようやく戻ってきてくれて、こんなにも嬉しいのにあなたは私からこの娘を奪うというのか。大体、フィオナは言葉では何も言つてはおらぬ。フィー、騙されているだけだろう？ この男は優しいかもしれないが、きつとそれは今だけ。戻つておいで、良くしてやるから。戻つて、来るだろう？』

神官の男の浮かべたただの笑みに見えるそれに、私の足は無意識にがたがた震えていた。怖かった。けれど、師匠の手がそんな私の手に添えられた。彼女を見るとにっこり微笑まれたから、それに力づけられて幼い私は神官の男をにらみ返した。

『わたしはあなたなんか、嫌い。ししようのところに行きたい！！』

『なっ……』

『あなたの一方的な悦びのためにこの子を縛り付けるのは愚かとい

うものです、神官どの』

師匠が冷たい口調で言った。

『何を』

『フィーがいろいろと話してくれましたよ……彼女の背中には随分ひどいやけどの痕があった。少女を痛めつけて苦しむ顔を好むなど、随分な趣味をお持ちで。あなたが神官とは世も末です』

神官の顔に大きな焦りが浮かぶ。多分このときの私は、弾劾される彼をいい気味だと思って眺めていた。今でもそう思う。この男のいやらしい表情を浮かべる眼が、触れると乾いてかさついたあの手が、大っ嫌いだったから。

『それに加えて申し上げるならば、私はれっきとした女ですよ、失礼な』

師匠は憤慨した様子だった。彼女は日に何度もそれを主張している気がする。

『戯言を申すな、お前のどこが女だ!!』

師匠の顔には相手を張り倒してやりたい、というような険を孕んだ笑みが浮かんでいたが、幼い私はそれをただ頼もしく思った。

神官は激昂している。

『フィー。考え直さないとどうするか分からんぞ。おい男、いいか、こいつだって進んで私の罰を受けたんだ。罪深いその身だ、誰かが罰を与えてやるのが当然じゃないか』

首を必死に振る幼い私の姿が、とんだ自己憐憫だと分かっているも痛ましいと思った。進んで？ 違う。嫌だった。進んで彼の下す『罰』を受けたことなんて一度もない。ただ、拒むことも出来なかった。罪をあがなうべきという言葉を私に暴力を振るうたびに男は発した。「お前の所為で尊い命は奪われたのだ。分かっているだろう？ さあ、懺悔しなさい」。これは受けなければならぬ罰だと思っていたから、ただ耐え続けた。男は、他の子供に優しく、シスター達にも慕われていた。誰も、いびつな私とあの男との関係に気付かなかった。体のいい無口なサンドバックと、それを殴り笑う男

という関係に。傷はいつも見えないところにでき、私は肌を見せるのを嫌った。フィーは恥ずかしがりやね、と言われて、ただ黙っていた。言っても信じてくれないと思った。誰も信じられなかった。今思うと、あの日々は地獄だった。

『やはりあなたがフィーをこんなに追い込んだのですね。この子は私に言わせれば罪深くなってる。ただ、幼かったのです。どうしてあなたはこの子に裁きを与える資格が自身にあるなどと思いつたのですか？ 彼女は両親を探すという目的と同時に、あなたから逃れたかったのです。当たり前のことでしょうね』

『恥知らずめが……！ 育てた恩を忘れたか！』

師匠の言葉に男は呻くように言った。こちらを見据える目がギリりと光ってその表情は歪んでおり、幼い私が師匠の服の裾にさらに強く縋りつくのが見えた。

そつとそんな私の髪を撫でながら、師匠は男にさらりと返す。

『恥知らずはあなたです。歪な欲のために、こんな小さな子ども抱かなくていい罪悪感をわざと呼び覚まして、それを否定するどころか利用するなど。神官長のほうには私がお伝えして置きましたから、近いうちにあなたは解雇されるでしょうね』

男は顔を真っ赤にし、憤怒の形相で手をこちらに向かって振り回した。私は思わずいつものように目をぎゅっと瞑っている。しかし何も起こらなかったため、目を恐る恐る開くと、男の太い腕をあっさり師匠が片手で止めていた。

『やれやれ。女性には優しくするものだ。あなたの神はお教えにならないかったのか？ ならばどうやら、あなたの神は私の知る極めて紳士なあの竜と同じ神ではないようですね』

つかまれた手を離そうとする巨体の反抗に、ちつとも師匠は揺るがない。涼しい師匠の表情を見て、ネズミと猫くらいその力が違うのだと気付くと、神官は、今度はがたがたと怯え出した。

『もう一度言う。彼女のことは私が引き取ります。さあ、ここへ署名を』



男はがくがくと頷き、言われるままに何か書類にサインしていた。それを終えると師匠はざつと目を通し、満足したのかくると書類を丸めた。

『よし、話はずいたぞ。行こうか、フィー』

『はい!』

晴れ晴れと頷いた私が掛けていこうとしたとき、神官が悔し紛れにぼそりと呟いた。

『畜生、フィオナ、このメス犬め……誰にでも尻尾を振りやがって』

ああ。これを聞いたときの師匠の表情を私は忘れないだろう。

『一度生まれ変わって来い、腐れ神官』

ごきり、となつてはいけないような音が教会に響き終わったのを最後に、二人はそこからすたすた歩き出す。私はそれを眺めていた。こんなことも、あった。彼女はこんなふうに私を救い出してくれた。この後も何度も。守ってくれた。私を弟子として、そして、わが子のように愛してくれた。師匠は素敵な女性だった。いつだって私の憧れだった。

あの神官から解放されたことから心底嬉しげに師匠を慕う笑みを浮かべる幼い私の頭を、師匠はぐしゃぐしゃと撫でる。懐かしい。そして羨ましい。自分に向かってそんなことを思っていると、ふ、と師匠がこつちを向いた。

え？

ぱちり、とウィンクを残し、彼女は去っていく。

見とれてしまう。ああ、なんて都合のいい夢なのだけ。それでも私は、この教会を出て行ったあの日と同じ晴れ晴れとした気持ちになつていた。

「いい夢……」

「うん？ 目が覚めた？」

「朝……？」

目が覚めると、もう朝で、開け放たれたカーテンから眩しい光が差していた。

だんだん意識がはっきりしてくる。ここはそう言えば城の部屋か。そんなことを思い出しながら周りを見渡すと、ベッド脇の椅子に座ったロイが肘をついて、私のほうを眺めていた。柔らかい銀髪が、朝日を受けて眩しく輝いている。

しまった。

「ロイ！ ごめん、ベッド占領して眠ってた……」

「平気。よく、眠れた？」

「うん……」

いつもなら人がやってくると目が覚めるので大丈夫と思っていたのに。

「ロイ、そこで寝てたのか？ ソファがあるのに」

「本を読んでたんだよ。枕元に来ないと明かりがないでしょう？」

もう帰ってくるのも遅かったし、いまさら眠れないって思ってたね」

彼の膝元にはなるほど本がある。しかし。

「昨日戻ってきてからずっとそこで本読んでいたのか？ その割にはあまり読み進んでいないようだがどうしたんだ？」

そう問うと、

「フィーの寝顔を見てたから、って言ったら怒る？」  
え。

「何故私は気づかなかったんだろう……」

師匠に寝ているときだけは気配に敏感になった方がいいわよ、な  
どと言われて、なるほど夜盗などが現れては集めた宝石が危ない、

と特訓を積んだのに。

「鍛えなおした方がいいのかな」

「そうかもしれない。」

「フィー、それだけ？」

「何が」

「恥ずかしがる、とか」

「いまさら何を言っている」

寝顔ごときがなんだというんだ。

「そうだね……」

ロイはなにやら溜息をついた。美人が吐息をつくのはひどく色っぽいので、襲われない為に頻発しない方がいいと思う。

気を取り直したようにロイは言った。

「あの調子じゃ眠れないのでは、と心配したけど、うなされてもいないみたいで良かったよ。何の夢を、見ていたの」

「師匠の夢。一緒に元いた教会に行ったときの」

「ああ。神官を全治3ヶ月に追い込んだときの？」

「そうそう。あのときの師匠はすごかったな。あんなに強い女の人がいるとは思ったことも無かった」

「確かに母さんは強かった。今は、いい思い出だけど、こっちは後始末に奔走してばかりだったけど」

くすりと、とロイは笑う。

「ロイは大変だったな。私は毎日楽しかった。暗い闇の時代でも、彼女はいつもあんな調子で、悪漢相手にけんか売って、げらげら笑って……大好きだった。私、あんな元気な人が病気になるなんて思いもしなかった。しかも、逝ってしまうなんて」

声が詰まった。でも涙はもう流さない。師匠の葬式で、もう泣くだけ泣いた。涙が枯れ尽きてしまうほどに。彼女の病は治るはずの病だったのだ。本来ならば。

「時が、悪かったね」

新たに立つという王様のために、病を押しして命を削るようにして、師匠は冠を作らなければならなかったから。それは、師匠にしか許されない、彼女だけに課せられた仕事だった。今は私が仮に継ぐことになっている、その『荣誉ある』立場ゆえに。

彼女は『竜細工師』と呼ばれる特別な、選ばれた細工師だった。

この国の竜と王に捧げる細工を作ることが求められる唯一の細工師。闇がいなくなった後、国を守り立て直すために、王を少しでも早く戴冠させる必要に迫られて、悲劇は起こった。

「母に悔いは無かったと思うよ」

「うん、分かってるよ。……これは私の勝手な私怨だ」

「フィー……」

「ごめん」

「王を、憎まないで」

「悪いな。ロイは王に憎しみを抱くな、と教えてくれたのに。私も自分が駄々を捏ねているようなものだ、分かってはいるんだけど。やっぱり駄目みたいだ、どうしても仇として彼を見てしまう」

師匠の死に様が生々しく記憶の中に刻まれて、そう間もない今はまだ。師匠はきつと望んじやないだろうけれど。

「それでも昨日は王にも悪いことをしたな、一応は命の恩人なのに」  
一応は、だがな。

「……別にフィーが彼に罪悪感を抱くことはない」

「なんだ、ロイらしくない」

「そう?」

「うん、ロイなら今の私の言葉に、そうだよ、って言うところだ」

「僕はそんなに人に優しくくないよ。特に彼には」

「でも憎むな、って」

「ロイはそう言ったのに。」

「分からない?」

「ん?」

「そういうこと言うのはヴィーじゃなくて、フィーのためだよ。君

にはいつだって笑っていて欲しいから」

とても、優しい笑顔でロイはそういった。

「ありがとう」

そう、望まれるほど私はいいい人間でもないが、嬉しかった。

「いや、僕の我侂だ」

「ロイは私に甘いな」

本当に甘い。

「フィーが大事だからね」

「家族として、な」

「それは」

「ごほん」

咳払いの音がした。

「すみませんがお二人で、無意識に変な空気を出さないでいただけますか？」

「クエインさん!？」

既にびしりと糊のきいた文官服を身に纏った王の補佐役がそこにいた。今日はひどく眠そうだった昨日よりはさっぱりとした顔をしている。

「どうしたんです、こんな朝早くに」

「いえ、王にお前ちよつと奴らのところに行つて様子を探つて来いという不可解な命令を出されて狩りだされたまで。こちらも何故こんなところにいるのかさっぱりですよ。まだ眠いのに全くあの能無しが」

そう、王様が。様子を探つて来いとは一体なんなんだ……というか私まだベッドから降りていないし、よれよれの昨日の服のまま着替えてもいないのだが。このままではあまりに失礼なのでとりあえず布団から抜け出す。そんな私を、やれやれ、といった顔でクエインさんに見られて、恥ずかしい思いをした。しかしこれは、私が悪いのだろうか。

「ノックぐらいしてくれても」

「しましたけど、何度か」

あれ？気付かなかった。

「本当に兄弟仲がいいんですね、羨ましいことです」

「いやそれほ」

「仲がよいというのも行き過ぎると嘆かわしいことになりませんが恋愛も嗜好も個人の自由で強制は出来ませんから是非私の目の届かないところでならばどうぞお好きなようになさってください咎めはいたしません」

言葉を途中で遮られた上、何か一気に言われてよく分からなかったがなんだか貶された気がした。

「最近フィーと二人きりになったと思えば邪魔ばかり入るね」

私に向かってそう言うロイは、安堵したような、残念そうなような表情を浮かべている。クエイさんはこちらに謝った。

「それはすみません。お邪魔したお詫びとしてはなんですが、とりあえず、お食事のご用意はしておきましたから。あと伝言がごさいます」

「何？」

誰からかは分かっている。あの王だろう。

「『昨日は知らず、いろいろと悪いことをしたらしい。すまない』」「いいよ、もう」

彼への憎しみが消えたわけではない。けれど、終わったことだ。舞踏会というお祭り騒ぎはお仕舞いだ。後は彼へ口止めの作品一つ渡せばもう特に会うこともないのだから、こんな気持ちもいずれば薄れて消えていくはず。

しかし。

お許しが出たらもう一つ伝言をしておけと頼まれたのだ、とクエ

インさんは言った。

「なんだ？」

「『後日、付き合っただけで欲しいところがあるのだが』」

「それは拒否したい」

「その場合、『うまくすればデマントイドガーネットが拝めるぞ』、  
だそうですが」

デマントイドガーネット……！？ それは、かなり希少な宝石で  
ある。み、見たい。

ああ、でも断った方がきつといい。

「やっぱり断るよ。俺はあいつの前で昨日みたいに嫌な思いをした  
くない。あいつもそうじゃないか？」

はあ、とクエインさんは溜息をついた。

「まあ普通そう思いますよね。もう、面倒くさいです。そもそも私  
がこんなことをする必要が分からない。頼みごとをしたり謝った  
りしたいなら、人づてでは無くても自分でしなさい。王、いるのでし  
ょう。私は仕事に向かいます」

「ばれたか」

部屋のドアを開いて王様は渋々といった態度で現れた。朝から正装  
しているのは、今日も来賓たちと会う予定があるのだろう。忙しい  
だろうに、こんなところで何をしているのか、この男は。

「ヴィー、いたのか、というかあんたひょっとして盗み聞きしてた  
のか？」

「いや、すぐ外で堂々と聞いていた」

「……へえ」

ドアの前で腕組みでもして堂々と立っていたのか？

「昨日は、済まなかった」

その目は、澄んでいて、真っ直ぐに私の目を見ていた。それを眺  
めていて、この男も向き合うことから逃げていたが、私も逃げてい  
たと思った。向き合う、べきだろうか。

少なくとも今彼は私に向き合ったのだ。ならば私もそうしなければならぬだろう。それで私は言った。

「いや、いいよ。俺があんな態度を、とるべきじゃなかった。感情に身を任せてしまった。事情を知らないあんたは混乱しただろう」  
頭を下げる。ヴィーは、そんな私に驚いたようだった。

「俺が憎いのではないか？」

「……ロイに少しは事情を聞いたか？」

「ロイは多分何か言っただろう。」

「大体は。不用意な言葉でお前を傷つけたことは分かった」  
やはりな。

「そう。少なくともあんたが王位に立たなければ、世界は例え救われなくても師匠が生きていたのは間違いないだろうと思っている。俺はそつちを望む身勝手な人間だ。理不尽だと怒ってくれてもいい。あんたが師匠の死に手を下したわけでも望んだわけでもないのだから」

「それは」

「そして昨日の舞踏会で、あんたは仮にも俺を救った。そして俺はその恩に対して無礼で返した。あんたが俺に何か望むなら、昨日果たせなかった分、話を聞いてやらないことも無い」

「……お前は律儀だな」

王は、ふ、と笑った。いや、元は断るつもりだったんだがな。

「王様、不愉快な思いをさせるかもしれないが構わないか？」

「ああ。前も言ったがヴィーでいい」

「ではヴィー、聞こう。どこに付き合っただけ欲しいんだ？」

「墓だ」

「ヴィー!？」

今まで黙っていたロイがなぜか声を荒げたが、

「大丈夫だ」

と王様は言った。



「本当にただの、慕参りだから」

「しかし」

ロイは何か言いたそうだ。

「別にいい。でもいいのか、慕参りなど」

「お前と行きたいんだ、駄目か」

「いや、構わない。あんたがそれを望むなら」

「では約束だ。では、また後日……フィー、今の髪型似合ってるぞ」

抗議するまもなく王様は慌しく去っていった。

「あいつは……」

「確かに寝癖のフィーは可愛いけど」

寝癖を褒められても嬉しくないのだが。

## 閑話 5

薄茶色の髪と、薄茶色の瞳をした俺の好きだった人。  
彼女はもういない。

舞踏会はハプニングも起きたものの、盛況のうちに幕を閉じた。

アラスカシアとの間に持ち上がった問題は、この国の輸出品にかか  
る多額の関税を大幅に下げていたことで片をつけた。当然強く  
事件についての緘口令を敷きはしたが、どれほどの効果があるか。  
まあ、かの王の失態が漏れたところで俺に痛いところはないが、と  
ヴィーは思った。

さて、仕事もある程度済んだことだしそろそろエルフランド工房  
へと行こうか、と彼が立ち上がったとき。

「王。どこへ参られるのですか」

目前に遮るようにそこにいるのは、彼の補佐のクエイン。帰って  
こないうちに出て行こうと思っていたが、会ってしまったものは仕  
方ない、誤魔化すに限るとヴィーは決めた。

「ああ、調べ物が出来たので書庫に行こうかと思ってな」

「……そうですか。なんなら私が代わりに参りましょうか？」

モノクルのふちがきらりと光る。疑われているな、これはとヴィ  
ーは思う。彼自身は最近真面目に仕事をしていたつもりなのだが。

「いや、結構だ。お前も仕事が山積しているのだろう？」

「まあそうですね」

「ではそちらに励め」

「……まあいいでしょう。早めにお帰りになってくださいよ？ああ、  
土産にロイさんが作っていると評判のハーブティーを貰ってきてく

「ださい」

すっかり行き先がばれている。ヴィーには騙しきれぬ自信はもとより無かったから、許可が出ただけよいほうだろう。

「悪いな、行って来る」

そついい残してヴィーは部屋を後にした。

ばかりと扉が閉まる音を聞きながら、クエインは窓の外を見た。その方角にあつて、ここからは見えない場所に眠る人を思った。

「ヴィーは、いまだ忘れられないのか」

そうなのだろう。

先ほど、どうせ先日墓参りの件で出て行くつもりなのだと思はずぐ分かった。つい習慣で止めようとしたが、やめにした。何故墓参りにさして関係もないヴィーを誘うのかと思つたが、よく考えればヴィーの髪と瞳は、王だけでなくクエインのある幼馴染の姿を思い起こさせた。容姿は全く異なつていたが色だけならば似ていると言えなくもない。

そして何より王に怒りをぶつけたときに見せた瞳に宿るものを出せば、細工師に王が何を見たのか明らかだ。悪趣味だと言わずにはおれない。けれど、王が受けた傷の大きさを考えれば、言葉が出なかつた。

「まだ、それほど時を経たわけではない。それでももうあれから3ヶ月は、経つたのか、彼女が亡くなつてから」

戦いを思い出す。尽きず黒い夜にもがくように抗つた日々を。彼は静かに、しばらく目を瞑つていた。

瞼に浮かぶは暗闇に立つ一人の青いドレスの少女。

ヴィーのいる工房への道は入り組んでいる。エルファンド工房は、良質な宝石を産することから宝石細工の工房の多いこの国でも国内

随一の細工師が集うと呼び声高い。しかも先日城に招かれたことから、名実共に国内外にその腕が認められることとなった。最近かなり繁盛していると聞く。その割りに。

「随分控えめな佇まいだな」

ヴィーは、相変わらず質素な建物を見上げた。いや、城に目が慣れすぎただけかもしれない。それでも、こんな奥まった立地からまったく動く気がないらしいエルファンド工房の主の気は知れない。

彼はとりあえず表から入ることにした。今日は休日だ、たいして客はいないだろう。

「いらつしゃいませ、御用は何でございましょう」

「細工師フィオレンティーノを所望する」

「家の娘は貴方のような男にやれませんねえ」

「……お前な。あいつの父親か」

他人行儀で出迎えたロイの姿にヴィーは溜息をつく。ロイは、細工をよく見せるためか日光のよく入る明るい店内で下手をすると細工より輝いていた。

「全く、お前が女なら放っておかないものを」

「今つくづく自分は男でよかったと実感したよ、ヴィー。君のような節操なしを相手にする煩わしさを想像するだけでうんざりだ」

「こちらも棘の多すぎる花と知らず摘むことが無くて済んで良かったよ。ともかくフィーを出してくれるか」

ロイはそれに対して、真剣な目で王に尋ねた。

「傷つけないか？」

「ああ、安心しろ。俺が前を向くために、過去に折り合いをつけようと思っっている」

「……そう。ならば呼んであげよう」

そうしてロイはフィーを呼んだ。すると、作業場へ続く扉の向こうから、「ちょっと待っていてくれ」という男だったら少し高めと感じるだろう声が返ってきた。ヴィーは徐々に聞く声に顔を緩める。

だが、本人に会うにはどうやらもう少し時間がかかりそうな様子だ。  
「ロイ、なんならお前も来るか？」

「こちらとしてもそうしたいのは山々なんだがあいにく今日は体調が悪くてね」

なるほど、銀の髪の下の顔は白さを通り越して青白い。

「どうせ来客の予定もあるから、ここを離れるわけにも行かないし。邪魔は、しないよ。ただし、君がフィーに何かしたと知ったなら、金輪際会わせはしない」

「分かったよ。だが俺としては、男女交際は個人の自由であるべきと思うが」

「実際、あんまり過剰に近づくなら、フィー本人もあなたとの付き合いを望まなくなると思うよ」

「グイーは、先日声をかけた途端逃げられたことを思い出す。そうなる可能性は高いのだろう。」

しばしロイは何かを考え込んでいたようだが、思い切ったように言った。

「この間言いそびれていたけど、フィーは男に触れられるのを好まないからね」

「そんな話を本人にも聞いた気がするな」

「……あなたはそれでいながらあんな態度をとり続けたわけかい？あんまり酷いようなら、王様といえど遠慮なく斬るよ」

「俺に剣で敵うとでも？」

「さあどうでしょう」

険悪な空気が漂いかけたとき、パタリ、と扉が開いた。

「待たせたな、ロイ。なんか言い争ってたみたいだけど、どうした

……げ、王様か」

フィーが嫌そうに顔を歪めながら現れた。

「相変わらずだな、フィー」

「まあな。なんだ、墓とやらには今日行くのか」

「ああ」

「分かった。じゃあちよつと準備してくるから」

「そのままでもいい、行くぞ」

「えっ、ちよつと待て」

「ヴィーが構わず店を出て行く。」

「ロイ、悪いけど出かけてくる。無理するなよ」

「了解。気をつけて行っておいで」

「ああ」

「フィーを見送りながら、全くこんな日に限って薬が切れるなんて、とロイは溜息をついた。」

### 23・ソラについて(1)

私の隣を歩く王様は、町歩きを楽しんでいるようだった。

だがあいにく天気の方は空が重たくのしかかっているように曇っていた。工房を出るとき傘を持って来ればよかった、と思う。まさかこんなに早く、彼と墓参りに行くことになるとは思わなかった。

王様が城の方に向かっていくから、墓は城に在るのかと尋ねたら否、と返ってきた。

「ヴィー、何で私を墓に連れて行くんだ？」

思えば変な話だ。墓参りというのは何かしらそこに葬られた故人と縁があるものが行くものだ。特に彼と話すことがあるわけでもなく、かといって道中黙りこくって二人並んでいるのもどうかと思ひ尋ねてみた。

「フィーとデートしてみたくてな」

彼は心底陽気な笑みを浮かべる。その長く真っ直ぐな黒髪は適当に括られ、商人のような格好をしているが、それでもどこか様になるとは達人筆を選ばず、といったところだろうか。

「はぐらかすな。デートで墓になど行く奴がいるものか」

「ここに」

「……言いたくないのか？」

「どうだろうな。言いたいような言いたくないような」

どっちだ。問うように見つめると、青い目はおどけているようにこちらを見返した。

「質問を変えよう。誰の墓だ」

これなら答えられるだろう。しかし大きく間が開いた。彼は一瞬無表情になった。

「呪われし前王の恋人」

「なっ……どうして？」

闇の眷属のための墓は一切作られなかったはず。それなのにその最たるものの一人というべき前王の恋人であるという女性の墓が、どうしてあるのか。

返ってきたのは思いもよらない言葉だった。

「彼女は俺の幼馴染だったから、俺が作った」

「それでも！」

例外は許されなかったはず。

「あいつは闇に染まって無かったんだ。死ぬ直前まで、前王を止めてたんだよ」

「じゃあ、何で死んだ」

そんな女性ならば助けてやればよかったじゃないか。この男にはその力があつたはずだ。

「自殺だ」

「自殺？」

なぜ。

「彼女は、前王を愛していた。そして、俺が彼女を愛していたのも知っていた」

「……前王を殺したのは、お前だよな」

「ああ。俺は、彼女を救うつもりだったんだ」

俺はとんだ勘違いをした愚か者だったと王は苦笑した。滑稽だろう、と言つて。

ちつとも笑えない。それだけ聞けば何があつたか分かった。彼女はおそらく死を以つてヴィーに復讐したのだ。…それは、なんて悲しい連鎖だろう。ナンテスがいつか愛が救いをもたらすと言つたのを思い出した。だが、この場合、愛が運んだのは死だった。

さくさく歩きながら、私はしばし黙り込んでいた。

彼女は何故あの前王を愛したのか。どんな、人だったのか。



「なあヴィー、まだ墓につくまでは結構かかるんだろう」

「そうだな。すまない、遠くまで付き合わせて」

「いやそれはいいんだけどさ。まあ、時間がかかるだろうから、その人の話を聞きたい。駄目か？」

「……いいだろう」

王様は深く息を吸って、話し始めた。私は彼の青い目が、少し曇って遠い過去に馳せているのを見た。

ヴィーが彼女に出会ったのは、父の元から神官長の暮らす神殿へと神殿騎士となるべく居を移した日だったという。聞けば彼は神官長の孫だそうで、彼女も神官長の孫だったために、それが二人の縁となった。

「あなたがヴィー？ 神官長様にあなたのことを聞いていて会えるのを楽しみにしていたの」

「そうだけど、お前は誰だ？」

青いワンピースの、いきなり自分に話しかけてきた初対面の少女にヴィーはそっけなく尋ねた。彼女はそれを気にも留めずにつこり笑っていたという。

「あなたの従妹。ソラっていうの、よろしくね。このことで分からないことがあつたら聞いて。あなたより年下だけど、ここにいる年数ではあなたより先輩ですもの、何でも知ってるわ」

神殿で暮らし始めの頃、年が若く神官長の孫であることから浮いた存在であつた彼を、あつさり彼女は仲間達に馴染ませた。いつも笑顔で人懐っこい彼女は、闇の存在のために陰鬱となりがちな空気も明るくさせていた。血を吐くような訓練と闇との闘争の中で、荒

みがちだったヴィーも彼女に救われることがあったという。そうやって、ヴィーが彼女に惹かれるのにそう時間はかからなかった。

ソラは、癒しの力に優れた、時期神官長と目された存在だった。けれど、ヴィーはあまり癒しの力を見たことが無かったらしい。彼はさほど酷い怪我をしたことが無かったし、さして気にも留めなかったそうだ。

そんなヴィーがある日、重傷を負った。

「ヴィー、また外で大怪我したって本当！？ 大丈夫なの？」

「大げさだな、こんな舐めとけば治るよ」

実際には、息も絶え絶えだった。死ぬかも、とあのヴィーが一瞬でも思ったというから相当酷い怪我だったのだろう。ソラは平気な振り続ける彼を怒鳴りつけた。

「消毒してちゃんと治療した方がいいに決まってるでしょ、馬鹿！ 強がらないで」

彼女がそつとヴィーの怪我へと手を添えると、肉眼では耐えられないくらい強い真っ白な光が生まれて傷を包み込んだ。そして。

「よかった……」

傷は全て跡形も無く消えていた。何も無かったかのように。

「すごいな、これがお前の力か……」

「凄いでしょ。恐れ入った？」

「ああ」

と、少女はめそめそと泣き出してしまった。

「お、おい」

「ヴィー、死んじやうかと思ったじゃない。本当に心配したんだから。国を救いたいっていうのはわかるけど、あなた自身を大事にして。そんなふうに身を削るようになっていたら死んじやう……」

滅多に泣かない少女が他でもない自分を思っ泣いてくれたのが、

申し訳なく、けれど同時に胸が熱くなるほどに嬉しかった。だから  
ヴィーはソラがふらりとしているのに気がつかなかった。ただ伝え  
たい言葉でいっぱい。

「悪かった……あの、ソラ、俺お前のことを」

ヴィーの言葉の途中で、いきなりばかり、と少女は倒れてしまう。  
「ソラ!？」

ヴィーは傷は消えていたが失血で動けず、誰か、と呼び続けた。  
慌ててやってきた人々が、真っ青な顔をして少女をヴィーの元から  
連れ去っていった。

当分動けず、彼女を心配していた矢先にやってきた神官長を問い  
詰めた。

「ソラは無事か!？」

「ソラなら大丈夫です」

「狸爺、おい、本当だろうな」

「本当ですとも。ここ数日、重傷のものばかり診ておりましたから  
な、力が尽きたのでしよう」

「尽きたって……。癒しの力の元はなんだ」

「命です」

「なんだと!？」

だから、あまり使うところを見かけなかったのだ。使ったびに死  
に近づくから。

「命ならば皆持っている故、癒しは本来誰でも使える力です。ただ、  
費用対効果を鑑みた結果、ほんの少しの損失で多く癒すことが出来  
る人間が神官となる。」

湿った木に火をつけるより乾いた木に火をつけるほうがはるかに  
簡単でしょう。木を命と思いなさい。発火させたら後は違う力を用  
いてその火を大きくする。それがいわゆる術力ですな。術力の量と

質も癒しに向くかどうか関係している。ソラはその命も術力もほかの誰より癒しの力として長けている……私よりも」

「そうなのか……だが」

「大丈夫。私がこの年まで生きてますからな、ソラはもつと長生きする。命の磨耗具合により癒術師の引退の時期も決められておりますよ」

それを聞いてヴィーはようやく一息ついた。しかし自分を助けるために彼女が命を使ってしまったことに衝撃を受けたヴィーは、彼女に謝りたいと強く願った。そして告白の言葉も、きちんと伝えられた。

ようやく動けるようになって、ヴィーが彼女を探すと、珍しく一人で中庭にいるのを見つけた。ソラはいつものように青い服を着て健康そうだった。昼の光に照らされて、流れる雲でも眺めているのかぼんやりと噴水の縁に腰掛けて足をぶらぶらさせているその仕草が、もう18になるのにそれより彼女を幼く見せた。ヴィーにとつて誰より守りたい人。

「ソラ」

「ヴィー……ごめんね」

「？」

「倒れたりして、心配したでしょう？私、全然平気なのに」

「でも、命を使うんだろ？」

「……やっぱり神官長に聞いたんだ。こういうことになるから、黙っていつていつたのに。ヴィー、そんな顔しないでくれる。私はこの仕事に誇りを持っているの、私の力で治った人に悲しまれたり哀れまれたりはしたくない」

「ちが……いや、ごめん。そう、思ってたかもしれない。でも、俺あの時凄いと思ったよ、ソラのこと。綺麗だった、天使みたいで」

「そこまで言われると照れるなあ」  
ヴィーには本当にそう見えたそうだ。

「ありがとな」

「どういたしまして」

につこり笑った彼女にヴィーはどうしても伝えたくて。

「ソラ。俺、お前のこと好きだ。いや、愛してる」

「ええ！？ でもヴィーたしか、ミラーナとかリオンとかマリアとかチータとか、ああもう忘れたけど全員恋人だよな？」

「全員別れてきた。本気だ」

「そ、そんないきなり言われても。ヴィーは確かに強いし男前だと思っしても」

「急がないから」

「本当？」

「でも否定の言葉は聞かない」

「そんな！」

ヴィーは真っ赤になった彼女の可愛さのあまり、頬に一つ、口付けを落した、らしい。

ここに来て一言言わずにはおれなかった。

「なあヴィー、惚気ていないか」

「いいじゃないか。今から俺が地獄に落ちると思えば聞き流せるだろうっ？」

「そうか。しかしソラは芯の通った女性だな」

私なら、自らの命を削ってまで他者には尽くせない。その仕事に誇りを持ち、人を救い続ける女性。癒しの力は一度だけ見たことがあるが、他の術と比べてもなんと神秘的な術だったからよく覚え

ている。ソラという人が、癒しの力を使うさまはさぞ美しかっただろ。

「ああ。彼女は強かった。そして美人だったし」

「……女好きで手に負えない上にお前は面食いそうだよな」

「そうでもないが」

「……何故私の顔を見ながら言う？」

グイーは笑って答えなかった。

「フィー、もうすぐ墓場に着くぞ。

彼女に関する話の残りは実はそんなに長くないんだ。続きを話そうか」

## 24・ソラについて(2)

少しずつ、ソラの気持ちを自分に向けていく日々は幸せで、王国の闇を払い続ける作業も随分佳境に差しかかっていた。もうすぐ、平和になる。平和にしてみせる。そしたら彼女と結婚したい、とヴィーは思っていた。

しかしあっけなくその日々に終わりはやってきた。

「ヴィー落ち着いて聞け」

神殿を守るために残留組となっていた彼の同僚だったクエインが、闇を払いに外へ出て戻ってきたヴィーに言った。

「さつき国王その人が結界を越えて突然現れて」

「国王が!? ……被害はまるでなさそうに見えるが」

国王が現れたことにヴィーは驚いたが、神殿に荒れた様子は無かった。ただ、やけに静かで空気が重たい、気がした。そうだ。

「ソラは？」

いつも迎えにきてくれていたのに、この日彼女の姿は無かった。

「ソラは、」

クエインは言葉を切つて続けた。

「攫われたんだ、国王に」

「……どうして! お前がいながら何故、」

「すまない……俺には手出しできなかった。強かったよ、あの男はわけが分からないまま何人か、“消された”。俺は卑怯にも立ち尽くしていた。多分、あの呪われた冠の力だろう……その力を見せ付けた後、国王は人質を求めてソラを指名した。彼女は、もう誰にも手を出さないなら、と約束させて、進んで人質になった」

「何でソラが……」

「分かるだろう、交渉するために一番価値が高いのはソラだ。神官長にとつてもお前にとつても」

「そんな」

「事実だ。あいつも追い込まれて、焦つてとつた策だろうが、痛いところを突かれた。すまない、俺が戦つていれば」

消失する仲間を前に、果敢に立ち向かっていける人間がどれほどいるだろうか。ヴィーはクエインを責めかけたことを悔やんだ。

「少なくとも、お前が生きててよかった、クエイン。責めるようなことを言つて悪かった」

「ヴィー……」

「……恐らく、当分は殺したりはしないだろう、ソラは癒術師の力もあるからな。何か起こる前に、俺が絶対ソラを救い出して見せる。クエイン、手伝つてくれないか」

「……そうだな、やろう。俺も命がけで付き合うよ、今度は逃げない」

それから闇を抜く筆頭だった神殿側は、国王に従うようになった振りをして、かの居城の内部に潜入するために策を練り続けた。1年がたった。神殿の古い書を漁るうちに、神殿の地下と城の地下がつながっていることをようやくのことで知った彼らは、そこから闇の大人しい昼の間を選んで城へと潜入し、ヴィーが先頭に立って内部を一気に制圧した。

いくつも闇を斬った為に、そして最後に王を斬った為に、闇の黒い血と人の血の赤が滴る剣を携えて、彼が鍵のかかっていた王室をこじ開けた瞬間。

薄茶の髪少女が思いがけず飛び出してきた。

「ヴィー？」

「ソラ！無事でよかった、迎えに来たんだ」



安堵にヴィーは微笑んだ。しかしソラは答えない。

「……」

「ソラ？」

「あのひとを殺したのは、ヴィー？」

「あの人……？ ああ、国王か？ その通りだ、俺が斬った。俺は奴に消されない唯一の人間だから。なによりそのために、竜の加護まで受けたからな」

ヴィーは、彼女を救うために、竜に会いに行った。彼にとって辛く長い一年だった。でも、それを越えて、ソラに再び会えて彼は嬉しかった。血塗れた手を伸ばすことは出来なかったけれど。

「終わった、全部。ソラ、帰ろう」

「……」

どこか茫然自失とした様子の彼女を連れて、ヴィーは部屋を出る。そこには、久しぶりの月の光が照らす惨状があった。床を埋め尽くす黒い絨毯のような屍鬼の死骸、そして、一人だけ赤を纏って倒れる男。それらが永遠に沈黙する一方で、返り血を浴びながらもなお白い神殿騎士の服を着た人々が、歓声を上げている。

「ソラ、どうした？」

黒い冠を被った男の傍に来ると、彼女は足を止めた。

「ごめんね、ヴィー。私の居場所はここなの。あなたの隣でなくて、この寂しい人の隣」

そう言うと、彼女は、そっと男の隣に座った。そして、その死に冷えた頭をとて愛おしそうにかき抱く。

「何を、言って……」

「私、彼に話した。こんなこともう止めましようって。何度も何度も。頑なな残虐な人だったけど、でも孤独で不幸な人だったと分かったから、幸せにしてあげたかった。彼は段々、私の話を、聞いてくれるようになったわ。彼は、闇と契約を切ろうと決意してくれた

……つい、昨日のこと。彼の罪は重くなりすぎてもう取り返しがつかないの、知っていたけれど。それでも彼が分かってくれたと嬉しかった」

「ソラ……、」

「あなたが来たとき、この人なんていったと思う？ 『隠れてる。君に会えて、良かったよ。僕は罪を償わなければならないからもう行くね』って。『ありがとう』って、そう言った」

涙がぼたぼたと零れ落ちた。それが、黒い冠に染みるように落ちていく。

「ソラ」

「鍵は、開かなくて。私も、一緒に行くって言ったのに。あなたを一人では逝かせないって言ったのに。彼が罪を償うときは、私も傍にいるからってそう……。約束を破っちゃった。」

……ねえ、ヴィー」

呼びかけられて、ヴィーは、ただ、彼女を見つめるしか出来なかった。王の血で濡れた手を握り締めながら。彼女は真っ直ぐに、ヴィーを見た。

「あなたは私を愛したけれど、私もあなたを確かに好きだったけれど。でも今は、こんなにもあなたが憎いの、どうしよう？」

彼女の目に浮かぶのは、黒い感情。いっばいの悲しみと、憎悪だった。

「ヴィー。それでもあなたは、まだ私のことを愛おしいと思う？」

泣きながら問う彼女にヴィーは、頷いた。再び会って、ただひたすら、彼女を変わずに愛しいと思う自分を知ったから。人を省みることなくただ生きた残酷な王すら惚れるような女性だ。ましてやこの自分が、ソラを愛おしいと思わないわけがあるうか、とヴィーは思った。彼女は彼を見て、悲しげに微笑んだ。

「そう……じゃあ、愛する人を失う苦しみをあなたにもあげる。さようなら、ヴィエロア」

彼女は、そう言っつて。

世界は真っ白になった。

ようやく景色が各々の色を取り戻した時、残されたのは、抜け殻のように崩れ落ちたソラと、夥しい傷跡が全て消え、けれどやはり死んだままの王。周りでは、不思議と傷の癒えた騎士たちが驚いていた。

ヴィーは、ふらふらと、青い服の女の元へ歩み寄る。

「ソラ？ソラ！おい、返事をしろ！！」

けれど彼女から答えが返ってくることはついぞ、無かった。彼は彼女を抱いて、ただ慟哭し続けた。やって来たクエインが見かねて気絶させるまで、ヴィーは遺骸を手放そうとはしなかった。

## 25・始めよう

「これが、ソラの話」

ヴィーが話し終わる頃には、ソラの墓があるという岬はもうすぐというところまで来ていた。

「俺は今でも、自分が正しいことをしたか分からない。でも、一番守りたい人が消えた後、俺が守りたいと思ったのは生まれ育ったこの国だったから、だから王になった。その力は、あると思った。闇を払ったら王になると、竜と約束していたしな」

ずっと黙りこんでいたために、少し先を進んでいたヴィーが振り向いてしまつて私は顔をそむけ、俯いた。

「どうした、フィー？……お前、泣いているのか」

「泣いて、ない」

そうは言つたが、それは瞳から落ちてくる。

私は一体何故、泣いているのだろう。悲劇なんてそこかしこに落ちている。闇に覆われた10年、もっと悲しいことなんていくらでもあった。それでも、私はただ泣いていた。誤魔化すように目をぐしぐし袖で拭う。

「憎む奴のためになど泣かなくていい」

「別に、お前のためじゃない。私はただ、ソラさんの想いが悲しかった」

言い訳をするように言つたが、実際そうだった。彼女を愚かだと思つたけれど、それ以上に救われなれないと思つた。ソラという人は、国王を愛しながらも、きつとまだヴィーのことが好きだったんじゃないか。そしておそらくその為を選んだのが、彼の言つた結末だったのだ。

ヴィーの方をふと見ると、彼の瞳はうつすら潤んでいた。零れてくるものは無かったけれどそれはきつと涙なのだろう。誰もが見過ごしてしまいそうな、淡い涙。瞬き一つで消えてしまう。

なんだ、この男は。散々のろけて暢気なことだと思ったのに、いっぱいに悲しかったのか。今でも、悲しいのか。

「フイー、お前は泣き上戸なんだな……幼い頃絵本など読むたび泣いていたんじゃないか？」

涙が奇妙に止まらない私を見やり、呆れながらも、ヴィーの口調は柔らかい。彼はそつと手を伸ばし、珍しく優しい手つきで私の目を拭った。無論手で払いのけてやった。彼は、そんな私に苦笑を漏らした。それから真つ直ぐ前を向く。

「もう終わった話なんだ。いや、今日、終わらせに来たんだ。……着いたぞ、あれが、彼女の墓だ」

城の高台を登って、城をぐるり回ってさらに進んだ奥の方。初めて訪れたその場所は、海を見下ろす断崖絶壁だった。ひっきりなしに季節に合わない塩辛い冷たい風が吹いている。

「ここに来るのは、もう何回目になるだろう」

王様はじつと墓標を見つめている。

「青が好きだったソラは海と空が何より好きだったから、俺はここに彼女を埋めた」

今日という日は空がひどく曇っているから見えないけれど、晴れた日にはいっぱいに2つの青が広がるのだろう。ヴィーの束ねられた黒い髪が風に揺れる。私の短い髪も舞い上がる。彼は、今日、何故私とここに来たのか。

「俺は、許されたかった」

その場所には、一つ墓標が立っていた。『ソラ・ギルファレス』  
とそれだけかかれた白い墓標。この下で永遠に眠る彼女の名前。  
「俺は責められたかった」

どこかでそれによく似た、叫びを聞いたと思った。そうだ、あれは自分の声だ。『ごめんなさい、ごめんなさい。許して、私が悪かったの、私のせいでお母さんとお父さんは死んでしまったんだよね。私を叱って罰して、責めて、それでも構わないから』

もう一度会いたい。

「でもそれは叶わない望みだった。彼女は亡くなったのだから」

『その命はその一度きりよ』。これは師匠の声だ。

「彼女のことを、一日も忘れられなかった。」

……そんな俺の戴冠式に現れた突拍子もない少女は、俺を心底憎んでいた。そうだ。俺は具合よく登場したお前を彼女の代わりにしようとしたんだ。お前の憎しみと彼女の憎しみは、近いものだと感じたから。実際そうだったな。愛するものを奪った相手への、燃えるような憎悪」

どこか自嘲するように笑って、彼は言葉を続けた。

「すまなかった。」

俺がずっとお前に関わろうとすることで、お前が俺を憎み続ければどこかで思った。癒えるべきお前の悲しみも無視して。しかもお前に責められるたびに俺が思い出すのは、ソラが愛した男を殺してしまったことで、お前の師匠のことでは、無かったんだ。ソラに對しても、フィーに對しても、俺がやったことは最低だった。ここ

に來たのは、フィーにその話をするために。そしてフィーに、ソラに、謝るために」

私は、彼を責められない。だって、私は昔、彼と似たことをしようとした、同じ愚か者だから。両親の生まれ変わりに会えたなら、その人たちに私を責めさせようと、許させようと願ったのは、彼とどこが違うだろう。

ただ：そうだ。私にはその過ちを教えてくれた人がいた。死んだ師匠を思い出す。城で昔話をしたとき、ナンテスにも彼女の言葉をなぞってみせた。たしかに覚えていたのに。それでも私は亡くなつた彼女のことにとずっとこだわり続け、一人の男を憎み続けた。行き場のない世界への憤りと喪失の悲しみの態のよい生贄として。

知っていた。師匠はそんなことを望まないだろうって。だって、彼女はいつもなんと云つたか。

『目の前にいる人を力いっぱい思いなさい』

今まで、ごめんなさい、師匠。そこまで思つて、私は呟いた。

「ヴィー、生きる」

「なにを」

「私に、誰かに殺されることなんて求めるな。あんたは、ソラを愛したんだろう？その彼女も、お前を憎んでいたというけれど、結局殺せなかった」

そこにまだヴィーへの愛があつたのかは、私には分からない。それでも、彼女は彼を殺さなかった。力を使いきつて、皆を、彼を癒して自分が死んだ。他にも方法はあつただろうに。

「彼女に生かされたと思え、お前の愛した彼女はお前がその苦しみを味わつて、それでも生きることが望んだんだ」

だから生きる、とそう言った。

「フイー、お前は……」

「私の言葉は残酷か？ 卑怯か？ 私も、罪に苛まれて生きることの苦しみは味わった。生は死より難しと言っしな。ただ、私は今、お前を責めているつもりはない。私はもう、お前を憎まない」

気が付いたから、だからもういい。そう思ったとき、師匠が悲しむだろうからもう流さないと決めた、師匠を思っつての涙がついと頬を伝ったのを感じた。なんだ私は、今日は泣いてばかりだな。

「フイー」

「なんだ」

「俺も、もうお前に憎まれたいと望まないよ」

「……そうか」

「だから新しく始めよう」

……それも悪くないか。

いびつに歪んだ、擦れた過去の連鎖から抜け出して、目の前にいる男を見ると、彼は随分と清らしい顔をしていた。私は、一体どんな顔をしているだろうか。

ヴイーはこちらに手を差し出す。いつだって憎らしくてたまらなかつたそのてを私は見つめる。

ふと、厚い雲が割れて、青空が垣間見えるそこから光が差し込んできた。たくさんの天使の梯子が海に、私たちに、墓標に降りた。

「握手」



そう言って笑った男の大きな手を、私は握り返した。

あれから、城のそばに来て、

「俺はここで帰るよ。またな」

と言ったヴィーに、

「……何かあればな」

と答えて別れた。ヴィーは私と別れるとき再び会うような言い方  
しかししないな、とふと思った。ただの口癖かもしれないが。

去り際に笑みを浮かべる彼を、初めて完全に憎悪から離れた目で  
見た。もう傾き始めた日が王様の青い目を照らしているのを眺めな  
がら、ソラはきつと彼の目を好きだったろうと思った。本当に美し  
い蒼だったから。

それから帰る道すがら、ふと、彼が私に「拝めるかもしれない」  
と言っていたデマントイドガーネットのことを思い出した。そして  
少々騙された気分になる。この国では産出されない、あの鮮やかな  
緑の石の名前にかけて含まれていた意味は、おそらく、『真実』。  
それならば、確かに目の当たりにした。彼が私に何を見ていたのか、  
ようやく分かった。

彼の愛したソラという女性のことを思う。想い人を追って死んで  
しまった女性。それくらい、男の人を愛するのって、どんな気持ち  
なのだろう。想像もつかなかった。師匠を想う気持ちとそれは、違  
った種類のものだろうか。

……よく分からない。

思いあぐねて空を見た。雲があつたのを忘れたように、素晴らし  
く晴れ渡っている。この天気同様に、人の関係というのもしいきなり  
変わることがあるものだな、と思う。時間が何かを変えていくこと  
もある。けれど私たちは、時が経つのをただ待つのでなく、自分の  
意思で今まで互いに向けていた感情を変えていこうという決意をし

ただ。ヴィーも私も、今なお愛しい故人を忘れることはできないけれど。

それでも、始めよう、と彼はそう言った。それは、私は師匠を通じてに彼を見ること、彼はソラを通さずに私を見るといいう、そういうことだ。

しかしそうしてみると、そこにいるのは本来なら関わりを持たないはずの一国の王様と、ただの一人の細工師だ。またな、とあの人は言った。しかし。

「正直接点がない気がする」

ああ、でも彼に細工を作ると言ったか。今なら少し、進められそうな気がして、工房に帰ったらデザイン画をいくつか描こうと思っただ。

それから、寄り道もせず私は真っ直ぐ家へと帰った。少々急いでいたのは、体調を崩していたロイが心配だったのもある。それでも私が工房に着く頃には4時を回っていただろうか。随分遅くなってしまった。城からここまででは結構離れているのだ。

見慣れた工房の扉の前につくと、そこで途方にくれている女の人を発見した。彼女はノックをして、待って、を繰り返している。とりあえず営業用の声をかけてみることにした。

「お客さまでしょうか？」

そう尋ねると、はっとしたように女性は振り向いた。手に、何かの袋を持っている。

「あ、いえ、私は薬屋の遣いで。あなたがロイさん？」

「いえ、この工房の者で、フィーと申します。薬屋の方ならノックなどせずとも中に入ってくださいって構わないのに……」

「ああ、そうだったんですか？ 恥ずかしい」

私は首を振った。礼儀を弁えた人なのだろう。

「いえ。そういえば、いつもの方とは違いますね？」

「ああ、いつもは私の夫がお届けしているんです。はじめまして。今日は夫の代わりにこちらに伺ったのですが、お休みの日だからとりあえずノックを試してみたら、返事が無くて。もし、お留守なら引き返そうかとそう思っていたところなんです。でも今日お届けすると、お伝えしていたはずでしたし……」

返事がない？

「おかしいな、ロイがいるはずだけど……まさか」

私は慌てて扉を開いた。

「ロイ！」

案の定、カウンターの椅子から崩れ落ちるようになり倒れたロイの姿がそこにあった。

「おい、ロイ！ しっかりしろ」

叫んでも、蒼白な顔は人形のように固まったまま。息はしているが、意識が無い。まずい。

「その薬屋の奥さん、薬を出してくれ！」

「は、はい！ 今すぐに」

その間に奥から水を持ってきて、薬を受け取るとロイの口にそれを流し込んだ。この薬は確か即効性だったはず。

「ロイ……聞こえるか」

ぼんやりと水色の瞳が開いた。ゆっくり私に焦点をあわせると、彼は眉を寄せた。

「フィー？ あれ、僕なんで……もしかして倒れてた？」

「ああもう、馬鹿。一瞬死んだかと思っただじゃないか。薬が切れてるならそう言え！ 知ってたなら、出かけたりしなかったのに」

「ごめん。今日持つてきてもらおう予定だったから大丈夫とと思ってたんだ。それに死ぬわけじゃないじゃない、知っているでしょう？」

「それでも心配した!!!」

「ごめんごめん。もう大丈夫だから。ありがとう」

彼はむくりと起き上がると、微笑して私の頭を撫でた。それからこちらを心配そうに見やっていた人のよさそうな薬屋のほうへ向くと頭を下げた。

「薬屋さん、すみません。お休みの日なのに無理をさせた上、驚かせてしまいましたね。お陰で助かりました」

「いえ、ご無事でよかったです。お得意様だから、と夫が申し出ておりましたし」

構いませんよ、と薬屋はほっとした顔で笑った。間に合ったことに安堵したのだろう。薬を受け取ったロイが支払いを済ませると、彼女は出て行った。

「なあロイ、珍しい女性だな」

「何が」

「ロイの美貌に何一つ反応を示さないとは」

「何を考えてるのかと思えば。彼女の旦那さんは素敵な人だからね、僕など眼中にないのだろう」

「なるほど、その人ならお前と違ってうっかり薬を切らしたりしないんだろうな」

「フィー、冷たい」

ロイがやれやれと溜息をつくのを睨みつけてやった。

「ひょっとして、フィー怒ってる?」

怒っているとも。腹が立つ、立っているのも辛いくせに隠しているところとか。

「平気そうな顔だけは相変わらず得意なんだからな。私はそんなに

頼りないか。店番くらい出来るぞ、部屋でとつと休んで来い」

「……ありがとう」

部屋に向かうロイを見送った。反論一つ出来ないのは、相当体がきついんだろう。

手に持っていた薬包紙を捨てようとして、毒々しい紫色の粉粒がぱらぱら落ちるのを見た。体に悪そうだが、当然だ、これは本来毒なのだから。けれどロイには薬になる。なんとなく指についたそれを舐めてみると苦かった。苦味というのは、そう言えばもともと毒を判別するためについた味覚だったわけ？ 良薬口に苦しという。薬と毒は完全に区別できるわけでもないのかもしれない。

「それにしてもあいつは病気じゃないのに、病人みたいだな」

蒼白なロイの顔を思い出す。後ですりおろしりんごでも持って行ってやるうかと思った。多分喜ぶだろう。

「ハーブティーは？」

開口一番、今は俺の補佐をしている友人はそう言った。

「ない」

「頼んだのに」

「ハーブティーをもらってこいと言うお前に、俺は悪いな、としか言っていない」

ちよつと忘れていただけだ。後で気付いたから、別の茶葉を買ってきてやったじゃないか。

「そういうのを屁理屈というんですよ。残っていた仕事押し付けられた上に望んだだけの報酬はなしですか。人が働いている間、自分は散歩とほいい気なものです。」

……ずいぶんと晴れ晴れした顔をしています、気は済んだので

すか」

「まあな」

「それはようございました」

皮肉のように聞こえて、これは本心なのだろう。浮かぶ表情はクエインにしては柔らかかった。

「クエイン、お前が気に病むことはもう、ないんだからな」

はっとクエインが顔をあげた。

ソラが死んで以来、この男は今も、彼女が攫われるときに立ち向かわなかったことを悔やんでいると知っていた。それについてクエインは何も言わなかったが。もしそれについて何か言ったら、俺が否定すると分かっている、だからクエインは何も言わなかった。俺から否定されることで、何も無かったことにするような、俺のような卑怯さはこの男にはない。

「ソラを死に追いやったのは俺だ。前王を抜きにして、それだけ彼女に憎まれたのも愛されたのも俺以外にいないのだから。俺以外には許さない」

「そう、ですか？」

クエインの顔が何か言いたげに歪むのを遮った。

「そうだ。だからもし俺を見限りなくなったら遠慮することはない」  
「……」

クエインの苦しみを知っていて、俺から何も否定しなかったのは、こいつを恨んでいたわけではなく、自分ただ一人で彼女の死を背負っていくのが辛いと思ったからだ。そうやって否定しないことで、俺に向ける罪悪感でクエインを縛り付けてしまうと分かっているも黙っていた。全く自分は弱いな、と思う。なんでこんな男が王となつたか不思議なくらいだ。

「それにここはお前にとって居心地の良い場所ではないだろう？」

クエインが貴族社会を疎んでいるのは知っていた。ここはこいつにとって息苦しいところだ。その上、こいつはここでなくとも好き

なように生きていけるだけの能力を持った男だ。

「好きなところへ、行ってきていい。今まで、悪かったな」

クエインはじつと俺を見ていたが、ふと昔の口調で呟いた。

「……罪悪感だけで馬鹿な友に付き合い続けていたわけじゃない。それなりにこの仕事は気に入ってる」

「いいのか？二度と言わないぞ」

こいつがいなければ、正直王国は破綻しかねない。

「ああ」

「……ありがとう」

「礼を言われる覚えはないがな」

そう言って、クエインは笑った。

「……それにしても、あなたがそんなことを言い出すとは思いませんでした。フィオレンティーノと、ソラのことを話したのですよね」

「ああ、全て」

クエインは、俺が彼女にソラを重ねていると気付いていたようだ。

「それで彼はなんと言ったので？」

「思い出す。こちらを真つ直ぐに臨む目を。怒るかど、罵るかど、そう思った。けれど彼女の出した答えは違っていた。」

「生きると、言われたよ」

「それはまた随分と飛躍していますね」

「全くだ。そんな言葉が彼女の口から出てくるとは思っていなかった。いつそ殺されて贖おうとした俺を、否定した。」

「そして、俺をもう憎まないのだとそう言った」

「許す、ではないんですね」

「そうだな」

もし、許す、と言ったならばそれはフィーが俺に抱いていた憎しみ



を肯定することになるからだろう。憎まれるのに十分な理由はあると思う。それでも、彼女はその言葉を言わなかった。ただ、もう憎まないとそれだけ言った。

フィーは、一体どんなふう生きてきたんだろう。

あの若さで、細工を作らせれば誰をも夢中にさせるような一流の品を生みだす。器用でいるようで、どこか抜けている。醒めた顔をしているくせに、憎んだ相手の話でぼろぼろ泣いて、そうかと思えば凜とした顔であるような言葉を寄越す。まだ彼女のことを、よく知らない自分に気付かされる。以前、「今を生きる」と彼女と同じことを言ったロイは、やはり彼女に最も近い人間なのだろう。

少し、それを羨ましいと思った。苦笑する。……どうやらまだ、俺は彼女に惹かれていたらしい。彼女がもう俺を憎まないとしても、彼女の師匠のことを、聞いてみたい。彼女の男嫌いのわけを、考え方を、彼女という人を、もっと知りたい。そんなことを思う。

「またな」と言った別れ際に、「何かあれば」と彼女は言った。会いたいと言う理由だけでは不足だろうか。

そう言えば。

彼女との接点は残っている。いささか不安な話題ではあるが。

「王様、何を考えていらっしやるので？」

「冠だ」

「はい？」

「謎解きを始めようじゃないか、クェイン」

## 27・ロイと竜

ロイは夢を見ていた。

薬を飲んだ後、内臓が焼け付き、血が高温で煮え滾るような苦痛から逃れるように眠った後のことだった。あの「薬」は彼の過ぎた術力を抑えるのに非常に役立つが、同時に劇薬でもあった。

夢の中の景色は、緑深い森だった。絡み合った木々の群れはどこまでも続くかのようにロイの目の前に広がり続け、彼はただひたすらにその合間を縫うように歩いていた。何かに呼ばれているような焦燥感があつて、それに引き付けられるように次第に足が速まった。緑一色。木の幹すら隙間なく苔で覆われ、足元にも茶色の大地を覆いつくすように丈夫な草が茂る。森は長い年月存在していたかのようにくぐもつた孔雀石色をしていた。

どこまでもきりが無い緑に酔ってしまいそうなほど、ロイが疲れを感じたとき唐突に森は開けた。そこは円形に開けた空間だった。木が、壁のようにその空間を囲っている。振り返ると、自分が通ってきた隙間も、埋められてしまったようで、もう戻れないと分かった。

進むか、止まるか。

辺りを見渡せば、背の高い樹木の壁に囲まれてなお、息苦しさを感ぜないくらいにそこは広がった。山が一つ入るのではないかというほどに。ただそこには何も無い。草すら生えていない、赤い大地がただ広がっていた。星をちりばめた夜空がその上にある。

自分は一体、何に呼ばれたのだらう。その円形の地の中心まで彼はあてどなく歩いていった。しばらくして、ようやく目的の場所へ

とたどり着く。しかし何も起こらない。

どうしようか。途方にくれたように、ロイがそう心で呟いたとき。

「ロイ・エルフランド」

頭上から降ってきたその言葉に、大地は震えるようだった。

「……イオナイア？」

いきなり吹き付ける突風から身を庇いながら、見上げた空にそれはいた。天空から、それこそダレンシアの絵から抜け出したように現れたのは、このイオナイア王国の名を冠する、巨大な竜。遠くに浮かんでいるのにおその大きさを感じさせるそれは、上空で羽ばたきを続け、滞空している。星空がほとんど見えなくなった。大地に落ちた黒い影は、この広い空間を埋めるほどに大きかった。

やがて、風が収まり、ロイが神とされる竜に言ったのはこんな言葉だった。

「久しぶり、ですね」

「そうだな……大きくなったものだ。大昔お前が幼き頃母と共に会って以来、か。私を覚えていたか？」

「忘れていましたよ、先程までは。そう言えばこんな不便なところだった気がします。ところで降りていらっしやらないので？」

「その予定ではあったが、お前を潰してしまうからな。それとも潰されたいか？」

「いえ、結構です。好きなだけ浮かんでいてください。……あなた

が私を呼んだ？」

「ああ。そうだ。眠っているところをすまないな。」

「私は実体でしょうか」

「いや。精神だ」  
そう、なのか。ならば潰されはしないと思うが……いや、やはり

嫌だ、自分が透けるところなど見たいものではない。

「お前は精霊になりうるほど濃い術力を持っていてるようだからな、体があるかないか大して感覚に違いはなかるうよ」

「そうですね」

たしかに今までそうと分からなかった。それにしても。

「今日は、どうしてわざわざ会おうと思ったのですか？ここまで私を呼び寄せずとも夢の中で、会話なら出来るでしょう？」

いつもそうしているように。

ロイがこうして、体を伴わないとはいえ、面と向かって竜の前に立つのは母が死んで以来初めてだった。竜細工師の母に連れられて一度だけこの竜に会わせられたことがある。それ以来、顔を合わせることがなかった。

しかし物心ついて以来、夢の中ではこの竜はよく自分に話しかけてきた。姿はお互いに見えない。一度何故そんなに自分に構うのかとロイは尋ねたことがある。すると、ロイの中の飛びぬけた力と美しさに興味を抱いたからと竜は答えた。なるほど、竜と言うのは収集癖もあるものだ、人もその対象に含まれるのかとロイが納得すると、竜が黙り込んだのを覚えている。冗談のつもりだったが、なんとのを得たらしいと知って、あなたの傍にいく気はない、居並ぶ収集品の列へと加わる気はないのだと懸命に説得した。未だにこの竜は傍で暮らさないかと誘うが、竜の暮らすという雲の上の世界など人の身である自分には合わないかと断ってきた。勿論、フィーの傍を離れたくないと言う理由もある。断るたび竜はなんとも残念そうに大きな溜息をついた。

ロイと竜の間で夢の中で交わされるのは、たわいない会話のみでなく、時に頼みごとをされることもあった。竜細工師の母が生きているうちは竜に収める細工についての注文ごとだった。死んでから

もいくつか頼まれた。闇の動きの報告をすることもあった。例えばヴィーに冠の話をしたことも、実際はこの竜に頼まれたからだ。神官長に言えと何度抗議したか分からない。「あれは素直でないからな」と言つて、聞いてもらえた試しがないが。だから、ロイにとって竜は、特別な存在ではなかった。

恐れ多いと言うよりむしろ、下手な隣人より馴染んだ存在だった。

「今日は、成長したお前の姿を見たいと思つてな。この森の外に現れることを許されない私からお前の元に赴くわけにはいかないものだから、お前を呼ぶしかなかった。しかし、忙しそつであつたから術力を抑える間の、精神と体の結びつきが弱くなつたらしいところを狙つて精神のみ呼び寄せた」

それは実は自分が死にそうだったことを意味しないかとロイはぞつとしたが、遠くに浮かぶ竜の巨大な口は笑みを佩いていた。

「大丈夫だ、死ぬことはないだろう」

「ならばいいのですが」

ともかく会えたのが嬉しいと言うように竜が笑う。何故だか照れくさかつた。それを隠すように、ロイは尋ねた。

「何の用ですか」

「伝言がある……新たな竜細工師となるものに」

「やはり、フィーですか」

「ああ」

その言葉に、少しロイの胸が疼いた。それに気がつかないふりをして、ロイは言った。

「彼女は竜細工師となることを望まない、とそう言っています」

母がそれゆえに死ぬのを見て以来、特に。

「我はあれの作つたものしか認める気はない。国を潰したいかと問え。責めろ」

「……あなたのその傲慢さは嫌いです」

この竜、イオナイアは友人であつた古の英雄の築いたこの国を愛

している。この国の国民が竜の子どもなのかどうかは、竜は明言しなかったが、この国の人間を愛してはいる。しかしやはり人と対等ではない。

「フィオナに伝える。竜細工師の継承の儀を済ませよ、と。それから、まもなくヴェイエアロアが旅立つ。旅に、伴うように伝える」

「なぜ、フィーが彼に伴う必要が？」

「……必要なことだ」

竜は全てを語りはしない。

「分かりました」

「また、夢で会おう」

そして空の彼方へ竜が消える前に、自分の名を呼ぶ別の声がして、それに返事をしようとしたロイは体へと戻ることとなった。

「……イ、ロイってば」

「……フィー、かな」

「そう。なんか呻いてたけど大丈夫か？」

「うん、平気」

目をあけてフィーを見ると、彼女は大きな器を抱えている。酸味のある、けれど甘い匂いが漂っていた。

「ロイ。すりおろしりんご持ってきた。好きだろ、りんご」

「すぐく。フィーが、作ったの」

「そ」

「……ありがとう」

「どづいたしまして」

頭に手をやると、濡れたタオルがあった。看病していてくれたらしい。

「店は？」

「予定していた客はみんな来たからもう閉めてきた」

「そつか。ごめんね」

「いいよ。ロイが倒れるなんて滅多にないし」

店を閉めたなら、時間はある。精神だけで動いていたせいか気だるかったが、今聞いておきたいことがある。ロイと出かけて、どうなったのか。いっぱいのおすりおろしりんごを食べながら、フィーから彼女とヴィーとの話を聞いた。二人は、和解したらしい。フィーは、心持、嬉しそうな顔をしているような気がした。さっぱりしただけなのかもしれないけれど。

「そう」

よかったじゃない、と続けようとして、そうは言えなかった。もうフィーとヴィーに接点がないだろうと思うから、人を憎んでフィーが傷つくなら早く辞めさせたかった。けれど、竜はなんと言った？ 接点がないどころか彼女と彼はいずれ共に旅に出る。恐らくそれはもうすぐだ。身勝手に、それならフィーが彼を憎み続けてくれたほうがいいと思ってしまった。枷をなくしてヴィーはフィーに近づいていくだろう。フィーは、異性を嫌っているから、早々ヴィーとどうにかなるとは思えないけれど、嫌な予感がするのはどうしてだろう。

僕は？彼らについていくことは出来ない。この工房を、シライを、一人には出来ない。

「どうした、苦しいのか？水、替えてこようか」

フィーがこちらを心配そうに覗き込んだ。大きな鳶色の瞳が瞬く。自分は一体、どんな顔をしていただろう。

「いや、熱はないよ。タオルのことは構わないから」  
やけに疲れていた。

ただ、眠るまで傍にいて欲しいと。そう言って、離れていきそう

なフィーのその手を気付けば掴んでいた。

「ロイ？」

何かを彼女に、言おうとしたけれど。

掴んだ手の温もりにほっとして、そのまま、僕は気を失うように再び眠りに落ちた。



繋がれた手をフィーは眺めた。ロイは、眠るまでと言いながら眠ってしまった。

もう眠ったから放していいかな、とそろそろと手を外そうとする、まるでそれに抵抗するようにぎゅっと力がこめられた。

甘えているのだろうかと思う。甘やかされはするが、彼が甘えることは珍しい。よほど弱っているのか。

仕方なく、ベッド脇の床に座り込んで肘をつきながら、薬の副作用か疲労の色の濃いロイの顔を見た。横たわる彼の銀色の睫の長さや多さを見ていて、思わず本数を数え出す。最後の一本まで数え終わるまで随分時間がかかった。数えきったことに満足感を抱いたが、私は一体何をしているのだろうかとはっとした。ロイは一向に、覚める様子がない。柔らかそうなほっぺたを見ていてつねつねとやるうかと思案したが、彼の肌にはすぐに痕がつくので気が引ける。

「ロイ」  
起きない。あまり無理に起こしたくはない。やれやれと溜息をつく。

久しぶりだ、彼が眠っているところを見るのは。小さい頃初めて会ったときに天使の寝顔と思ったそれは、変わらず綺麗だったが、中性的な柔らかかさより鋭利な男性らしさがある気がして、無意識にフィーは彼の手を振り払いたくなった。そんなフィーの動きにすらロイは目覚めもしなければ手を放してもくれなかった。

あまり女性らしい成長が見られない自分と違って、ロイは美女のように美しいけれど異性として確かに成長してしまったと思う。昔のままがいいのに、そうはいかないのだ。

小さい頃から楽しいことも苦しいことも一緒に経験してきたけれ

ど、何もかも共有しているわけではない。

ロイは大変苦勞してきた。薬で力をほとんど押さえつけてしまわないと、暴発してしまうくらいの強い術力をなぜか彼は持っていたから。一方彼の弟であるがシライには強い術力は見られない。少なくとも、使えない。魔力と異なり安易に遺伝で受け継がれない術力の神秘性はここにある。術は他にも、精霊の力を借りるといった点で、魔物の力を用いる魔法とは根本的に異なっていた。フィーには全く何の力もなかったが、薬を欠かせないロイを眺めていると羨ましいというより面倒そうだとすら思う。

精霊の頂点に立つ存在である竜を神とあがめる為に魔法使いより術師が多いというこの国イオナイアでも術師は希少な存在だったが、ロイには術師になる気は元からなかったらしい。そのため細工に彼の力は使われている。彼の作った術具、石に術をこめたものを細工に埋め込んだ装飾品は、作れる人が極めて限られることもあって、護身具として人気が高い。細工のセンスもいいそれは、この工房の人気商品の一つだ。自分に決して作れないものを生み出す彼をフィーは兄弟子として尊敬していた。

だから、師匠が死の間際にフィーに竜細工師を継がせるといったときには、彼女は断った。竜細工師の冠作りが師匠を苦しめたこともあるけれど、なによりその職につくべきは私でなくロイだと思っただから。特別な、竜への捧げ物や、契約にまつわるものを作ること考えるとロイのほうが向いているように思うのだ。フィーは自身の作るものに誇りはあっても、それはあくまで人を彩るものとしてである。

それで未だに竜細工師の正式な継承はなされていない。

ロイに継げとフィーはいうのだが、彼はいつも断った。その上、彼はフィーこそ継ぐべきだと言うのをフィーは拒否して、二人の議論はいつも平行線だった。闇の時代には収めていなかったために、溜まっていった師匠の作った竜への捧げ物としての細工は今や残り

少ないし、竜細工師の継承はそろそろ決着をつけなければならぬ問題ではあった。ここ最近忙しかったから、すっかり忘れていたけれど……

そう、舞踏会でのロイの宣伝効果に加え、フィーのパフォーマンスもあって、工房は注文殺到で一時新規の注文を受けられなくなったほどだった。狙い通り国外からも注文が来るようになり、嬉しい悲鳴を上げていた。初めは。しかし次第に職人から本気の悲鳴が混ざるようになってきたために今日は久しぶりの休日だったのだ。なのに、王様と遠いところにある墓まで歩いたのは実際結構きつかった。

「……私も、疲れたよ、ロイ」

もう、何も考えたくない。思考がぶつりと途絶えて、次第にフィーも眠りへと誘われていった。

太陽が地平線の向こう側へと落ちる頃、遊びに出ていたシライは工房に戻ってきた。夕飯の支度をしなければならぬので、門限が特に設けられていなくてもいつも大体同じ頃に彼は家に戻る。いまだ稼ぎ手となるには年端の行かぬ彼は、家事が好きなこともあり、この家の掃除洗濯料理を進んで引き受けていた。

「ただいま！ 今日レックスとね、海辺まで探検に行つて……あれ？」

シライが勢いよく工房の扉を開けて中に入ると、誰もいなかった。「上、かなあ」

工房は2階建てだ。店と工房と食堂は1階にあり、2階がシライとロイ、そしてフィーの部屋となっている。まさか2人とも昼寝をされていて未だに目が覚めていないのかなあとシライは思った。やけ

にあたりが静かだったから、フィーと彼の兄が家にいるのなら上で休んでいるだろう。それならば、最近仕事漬けで疲れている二人を起こすのはちよつとかわいそうだと彼は思う。しかし、そろそろ夕食時である。

「ご飯は抜いちゃだめだよ」

「ご飯が出来たら起こそうと決めて、彼はひとまず台所に向かった。今日は久しぶりに三人水入らずだし、それぞれの好きなものを一品ずつ入れようかな、と思う。ならばフィーには今日遊びがてら採ってきた貝の酒蒸し、兄にはかぼちゃスープ、自分にはデザートに黒すぐりのゼリーを。材料を取り出そうとしていて、ふと、5つあったりんごがすべて消えているのに気がつく。ゴミ箱を見ると、非常に薄く切られた皮が長く長くつながったものが落ちている。

「これは、フィー、かな」

この手先の器用さは恐らくそうだろう。彼女は、味付けは絶望的に駄目でも、包丁の扱だけは上手い。ウサギ型のりんごなど作らせようものなら、やけに生々しいものを作るので返って食べにくいほどだ。それにしてもりんごを5つも何に使ったのだろうか。多少気にはなったが、後で聞けばいいや、とシライは料理を開始した。

出来上がる頃になっても、2人は降りてこない。

「お兄ちゃん、フィー、ご飯できたよ」。早くしないと冷めちゃうよ」

下から呼びかけても全く反応がないので、仕方なくシライはとことと階段を上っていく。部屋は、3つ。シライは、とりあえず手近な兄の部屋を選んで扉を叩いてみた。

「お兄ちゃん？」

やはり返事はない。まさか、いないんじゃない。

不安になって、シライがそつと扉を開くと。

「……。あちゃ」

いた。やはり、兄は寝ていた。頭に、ぬれタオルを載せて。そしてその兄の枕元に、もう一人何も被りもせず座ったまま寝ている人がいる。

「風邪引いちゃうよ、フィー……」

部屋のテーブルには、スプーンが突っ込まれた、何かの液体がたっぷり入っていた残滓のある大きな器。恐らくりんごはこれに使われたのだろう。多分、兄の看病をしていたフィーが、そのままここで眠ってしまったのだ。

「仲いいなあ」

穏やかな顔をした兄の手は、フィーの手をしっかりと握っている。一方フィーはベッド脇に座ったまま、片腕で頭を支えていて、寝苦しそうな体勢だが覚める気配もない。どういう経緯でこの状態になったというのだろう。まるで、恋人のようだと思う。気恥ずかしい。こういう場面に出くわすと、本当に自分はお邪魔虫なのではとシライはいじけたくなってしまった。2人とも、とてもシライのことを可愛がってくれていても、特に兄のことを思うと、自分はここにいないのだろうかと思うのだ。兄がフィーのことをとても想っているのは、知っている。記憶にある頃から、何かを見つめる兄の視線を追ってフィーがいないことは無かったから。それでいながら、なぜかいつもロイにはフィーへの遠慮があつて、それは自分の存在が関係しているようにシライは思っていた。

「いちゃいちゃしたいの我慢してるのかな」

通っている学校で、友人であるレックスがそんなことを言っていたのだ。好きな人には四六時中くっついていたいものなのだ。

本当はそつとしておいてあげたいけど……起こさず放っておくわけにも行かない。

「ロイお兄ちゃん、フィー、起きて」

声をかけて、揺さぶると、ようやく目が覚めたらしい。

「う……ん？」

「朝か？ あれ、私は何故ここに」

明らかにフィーは寝ぼけてる。

「夕ご飯が出来たから、わるいけど起こしにきちゃった。フィーは、ここでうつかり眠っちゃったみたいだよ。よく寝てた。お兄ちゃんはまだ大丈夫？」

「もう、平気だよ。傍にいてくれたフィーのお陰かな？」

その言葉に、はっきりと目が覚めたらしいフィーが兄を叩いた。

「ロイ、もう放せ」

「ごめん」

「いいけど。私もちょっと休めたし」

呆れたような顔で、けれどフィーは結局兄のする大抵のことは受け入れるのだ。兄はそのたび嬉しそうな顔をして。二人はいつもこんな調子だ。シライはこんな日々が続くと思っていた。

夕食時、久しぶりにあの話題が出た。

竜細工師を継がないかと、兄がフィーに言ったのだ。フィーはいつものようにする気はないと答えた。

「フィー、でも君じゃないと駄目なんだ。僕が夢で竜と話をするって言ったことあるよね？ 竜に、頼まれた」

「あくまで夢だろう、忘れろ」

「例え王と竜が契約しても、細工師の供物がないとその維持は出来ない。フィー、国がかかっているんだ」

「じゃあ、ロイがやったほうがいいよ。私の細工はあくまで人の域だ」

「僕じゃ……駄目なんだよ、フィー。君の細工を竜は望む」

「……」

溜息をついたロイが、デザートを持ってくると言って立ち上がった。

「嫌なの、フィー？」

シライが問うと彼女は頷いた。ならば無理強いは良くない、とフイーのことを兄の次に好きなシライは思う。

しかし何でこんな名誉なことを断るかよく分からなかった。神とされる存在にすら惹かれるものを創れるということなのに。

兄が戻ってきて、デザートを食卓に並べた。今日の赤いゼリーは自信作だ、これを食べれば少しはこの沈黙も解消されるかとシライは思っていた。

しかし。

「……!？」

フイーが、シライの作ったゼリーを食べた後、悶絶した。

「ま、ず」

しかも吐き出した。

「フイー!? どうしたの! 僕が何か……」

シライは自分が何かまずい物を入れたかと一瞬考えたが、そんなはずは無かった。じゃあ、どうして、フイーは?

フイーはやがて、何かの衝撃から立ち上がると、シライではなくロイを強く睨みつけた。鳶色の目が一瞬赤く見えたように錯覚して、シライは瞬いた。

「……ロイ、お前、竜の血を入れたのか」  
呻くように出たのは低い声だった。

「ごめん。あんまり時間がなさそうなんだ」

兄の表情は、どこまでも暗かった。シライは思い出していた。

「継承、の儀」

竜細工師となるものは、何故か王様と同様、竜の血を飲む儀式があった。……見たところフイーに異常はない。

「フイー……」

「事情を話せ、なぜ急がなければならなかった」

フイーは怒っている。騙されたようなものなので当然だろう。しかしこんなやり方は兄らしくくない。

兄は答えた。

「力をつけないといけないから。」

分かるでしょう？ フィー、今なら少し術力が使えるはず。それを使いこなせるようにならないと危ないんだ、君は王と旅に出なければならなくなるから」

「王様と旅、だと？ わけが分からない」

「もうすぐ分かるよ」

「……竜か。また何か頼まれたんだな？」

「そうだよ。ごめん、フィーを優先したかった。けれど、結果的には強制することになるなら早いほうがいい」

ロイは、フィーと目を合わせない。

「もう、いい。私はただ怖かったのかもしれない、もし資格が無かったら死ぬからな」

「フィーにないわけが、ないでしょう？」

「……資格はあったみたいだけど。それにしても継承の儀をゼリーにまぎれてやるなんて味気ないな、まあ元から戴冠よりはるかにそっけない儀式だが」

竜細工師の存在を知るものは少ない。そのため大仰な儀式は行われない。ただ、先代に指名されたものが竜の血を飲むだけ。ただ、資格がなければ死ぬ。資格のないような人間が指名されることなどまずないが。

フィーはもういつもの調子だ。彼女はロイに対して長く怒らない。

ふと、フィーはロイに尋ねた。

「ロイもその旅に来ないのか」

「僕は行けない」

兄はそれだけ言っつて、フィーは、そうか、と答えてそれ以上何も言わなかったけれど。

どこか心細げな目をした彼女を見つめるロイに、シライは、ああ、



また自分は二人が共にある邪魔をしてしまったのだなと悲しくなつた。

## 29・盗人

「神官長！」

「どうしました」

静寂が馴染む灰色の石の壁に赤と青を基調としたステンドグラスが埋め込まれた礼拝堂に飛び込んでくる年若い神殿騎士がいる。この場所の主たる老いた白衣の神官は、咎めることも無く微笑んだ。「地下書庫の鍵が破られました！しかも確認いたしましたところ“竜の古文書”が盗まれてしまったようです」

「おやまあ」

おやまあ、じゃありませんよ、と騎士は崩れ落ちた。

「大方あの馬鹿孫が忍び込んだのではないのですか」

「はい？」

「誰が馬鹿孫だ」

「うわ、国王陛下!？」

神殿騎士の後ろにぬっと背の高い影が差した。王に似つかわしくないほどの軽装だが、彼の顔を知っていたらしい騎士は彼を王と気付いて驚いている。対して神官長は平然と王を見上げた。

「おや、ようこそいらっしやいましたな国王陛下。城暮らしも半年早速懺悔することでも出来ましたか」

「違う。俺はいつでも清廉潔白な男だ」

「ほう、そうなのですか？書庫に侵入したのはあなたでないとすると誰ですかねえ、まったく思い浮かびませんが」

「世には悪人が五万といるのにお前にとっては俺だけ常に被疑者なのか？……それにしてもたまには慌てることを覚えたほうがいい、こんなやり取りをするうちに犯人は遠ざかるぞ」

「構いませんよ」

「なにを言う」

「レプリカですから。あんないかにも何か隠しているようなところ

に大切なものを置くのは愚かというもの」

「……本物は？」

「なぜあなたが気にします？」

「につきりと笑う神官長に、

「俺もそれに用がある」

と短く王は答えた。

「……どうやら本当に王が盗んだわけではないみたいですね」

「神官長、何をなさっているのですか」

老人は王の懐を一通り探っていた。そして満足したらしい。

「検査ですよ。しかし針金を持っていたとなると正直お前が一番怪しいのですがね……どうやら他に盗人が出ましたか」

「やれやれと神官長はヴィーの懐のどこから取り出したのか、1本の針金を掲げ眺めている。

「神官長……？」

まるで生粋のスリのように鮮やかな手際であったことに、神殿騎士は一抹の不安を覚えたように上司の名を呼んだ。

「騎士殿。言っておくが俺の盗みの腕はこの爺の手ほどきによるものだぞ」

「ええ！？」

「人聞きの悪い……」

「事実だろう？ そんなことはどうでもいい、おい狸、“古文書”を見せる」

「祖父に敬意を示すなら考えてあげないこともないですな」

「面倒くさいな。全く、お前に会うところなるから盗めば手っ取り早いと思っただのに、隠し場所が他にあるなら仕方ない。なんだ、跪いて靴でも舐めるといふのか」

「下劣な発想をするものです。人の靴を汚らしい唾で汚す行為のどこが敬意を示す行為になるというのですかな」

「……お前がクェインと仲がいいわけがよく分かった気がするよ。」

気に障る敬語口調といい慇懃無礼が肌に馴染んでいるあたりそっくりだ」

「私どもはあなたと異なりただの無礼でない分、マシでしょう」

「あのう、早く古文書の本物の方の安全の確認をしたほうがいいのでは」

騎士が思わずといった様子でそう言ったのに、老人とその孫の二人は顔を見合わせた。

「そうだな。はあ、『親愛なる我が祖父上、イオナイア唯一の尊き神官長、日頃の無礼を心より詫びましょう。そしてもし孫を想う気持ちがあるのなら、この度古文書を拝謁したく、またそのための協力をお願いしたく存じます』」

「私の深爪度合いを見て、なおそう言うてのけるあたりが、本当に嫌な孫ですな」

「お互いさま」

「やれやれ……ついてきなさい」

「よろしく頼む」

「あ、私も共に参ります。もし犯人がそちらの方にいたら捕縛は委任してください！」

2人のやり取りに呆気に取られていた神殿騎士はぴしつと背筋を伸ばした。こうして3人はそろそろと移動を開始した。

そうしてやってきたのは、教会の鐘撞き塔の天辺だった。風が強い、尖塔の足場の不安定な屋根の上に、王はともかく全く危なげなく飄々と立つ老人の方を、神殿騎士は恐ろしげなものを見る目で見ただ。この人は何者だろう、と。

「で、本物はここどこにあるんだ」

見たところ隠す場所はなさそうに見える。すると、神官長はおもむろに跪いた。

「ここですよ」

屋根にかざされた手が淡く光ったかと思うと、切れ目が無かった

屋根の一部がぱこん、と四角に開いた。

その中からふわり、と何かの紙がひとりでに出てくるのをさっと王が掴んだ。

「これ、か」

王は黙ってしばらく紙を見ていた。神殿騎士は思わず、と言った様子でこっそり覗き込む。

「あれ？」

そして首を傾げた。王も訝しげな顔をしていたが、神官長に向き直って尋ねた。

「……文字が一つも見当たらないが」

「然様ですな」

「どういうことだ？昔俺が見た、お前が言うところのレプリカには言葉が刻まれていたと思うが」

「だって仮にも古文書に文字が刻まれていないとおかしいですからね、あれはあくまでレプリカですから私が適当な詩文を」

「おい神官長」

「いいではないですか。軽いユーモアです」

「……よくはないが。まあお前のその振る舞いは今に始まったことじゃないしな……ともかくこの古文書は、どうしたら文字が出る？」

「何も書かれていないように見えるのならお返しくださるか、王」

「お前には見えるのか？」

「……盗まれていなかったのだから、もうよいでしょうに。あなたにそこに書かれたものを読み取る覚悟と確かな意思はありますか？」

無いから、そのようにその瞳には何も映らない」

「なんだというんだ」

「鍵を、開けるのですか」

唐突な問いだった。

「また、鍵か……。開けるといっのは一体なんだ？ 知らぬから意思も覚悟も俺にはないな」

「では……」

「ただ、この冠の謎に正直興味はある。今一番気にかかる女性に纏わる物だからな。いきなりこれについて彼女に尋ねるにしろ語り合うにしろ、何も知らずに下手に傷つけるわけにはいかないから、まずは知りうることを知り尽くしたい。そう思つて城の書物を読み漁るに、大して手がかりは見つからなかった。以前、ロイという男が言っていたこと以上の何かは見出せなかったよ。ただどうやら冠の鍵を探すのにその古文書が必要だというくだりを見かけたから、探しに来た」

「やれやれ、あなたの原動力は昔から何かしら女性が関わっているように思われますな」

嘆かわしそくに神官長は言った。

「放つとけ。……調べるほどに中途半端な事実しか見えないから、当初の目的を忘れるほど調べつくしたよ。それでも分からない。先代王の黒の冠には確か黒い宝石が嵌っていたように思う。あの冠は火の山の火口にその先代王の亡骸と共に捨ててしまったから確認できないがな。冠に嵌められていたのはただの宝石なのか？ 鍵はやはり宝石なのか？」

ただ一言、英雄は鍵を開けたと歴史書にいう。開かれて出てくるものはなんだ？ 詳細は何一つ記されていないかった。意図的に隠しているとしたらその目的はなんだ？ 分からない、竜と竜細工師と王とこの国と、この冠はどう関わっている？ 鍵を開けることは何を齎す？」

老いた神官長はすぐには何も言わなかった。

「今日は空がいやに青いですな」

「……そうだな」

大白鳥が空を渡っていくのがよく映えるくらいに。もう元通り、といえるほどに復興しつつある街中からは、心地よいざわめきは届くが悲嘆の色はない。老人は空を見上げて何を思ったか。彼は小さく一息ついた。

「もうすぐ収穫祭の季節ですね、10年ぶりの。ようやく訪れた穏やかさだ……私は、平和ならそれでいいと思います。悪戯に、それを乱すことはない」

「探れば、乱れると?」

「さあ、どうでしょうか。何もかも、あなたが選ぶことですがね」  
答えをはぐらかすように神官長は言った。

「彼女の師匠が、命をかけても創った王冠の本当の意義を知りたいんだ。俺が王位に就くまでに、失われたものは多い。生きているうちにせめて出来る限り一つ一つその理由くらいは理解しておきたい。そしてそれを知った上で、この国を治めたい」

その時、ふと。

王の手にあつた紙がびくり、と震えた。そこに浮かんだのは5つの宝石の絵。赤青黄色無色4つの宝石が円を描く線上にあつてその中心に一際大きい緑の石が一つあるという配置だ。

<まず石を。そしてそれを契約と共に鍵に。全てに認められたならば道は開かれるだろう。その後を選べ……>

一瞬浮かんだ文字はすぐ消えた。

神官長が言った。

「……石は、この国に散ってしまっている。欲しいのなら、探すことです。そのことはそう難しくはない……。石を見つけるまでは私がその紙を預かりましょう」

そう何かを諦めたように神官長が言って、王の手から神官長に紙は渡されようとした。その時。

「ふーん。冠の伝承ってそう言うことなの。それにしても綺麗な絵だね」

今まで、2人から少し距離をとって立っていた神殿騎士が、にこりと笑ってそう呟いた。ひよい、と2人の手から紙を奪う。

「な……?」

ただそれだけの動作なのに、いやに速い。王が一瞬動けなかったほどに。

「書庫に忍んで盗った紙切れ、わっけわかんない詩が書いてあったからひよつとして偽物かもしれないやと確認とって大正解。オレ、まじで賢いわ。んじゃまあ、これは頂いてくね、あ、石も全部貰う予定だから。そこんところよろしく。そんじゃご案内ありがと。チャーオ!!!」

先ほどまで真面目な神殿騎士だったはずの男は実に陽気に消え去った。

「……盗られましたね」

「……消えたな」

残された二人の間には、気の抜けた空気が漂った。

ふ、と神官長は笑う。彼は慌てることもなく落ち着いている。

「石を探すのはどうやら難しくなったのでは?」

「お前まさか気付いていただろう、あいつが盗人本人だと」

「あなたもでしょう、人が悪い」

「……捕まえ損ねた。まさか消えるとは思わなかった」

「私も消えるとは思いませんでしたよ。まあ正直、あなたが鍵を開けないなら私はそれで構わない」

「なるほど、それで狸は大事な古文書をしっかり受け取らなかつたというわけか」

「いやいや、偶然です」

王は、誠実な顔をしてそんなことを言う神官長を信じる様子が無かった。恐らくいつもこの老人に遊ばれてきたのだろう。



「まあ、がんばることです。ああ、あの紙がないと鍵を開けるのなんて不可能ですからな。冠の謎を解きたいなら、あやつを探さねばなりませんまい。果たして何者かは存じませんが」

「面倒なことに……こうなったら石の在り処くらい吐け、狸爺。なんか知っているだろう?」

「そうですね。宝石店にでも行ってみたらどうでしょう? 一つくらいはあるかもしれせんよ」

「本当だろうな」

「木を隠すなら森といえますから」

「お前が隠したんじゃ」

「失敬な。いたいけな罪のない老人を疑ってかかるより、城に戻って冠の番でもしたほうがいいのではないですか。そろそろクエインも怒り出しますよ」

「……もういい、とりあえず俺は行く。ここにいたって仕方ないからな」

王様はガリガリと頭をかきながら立ち去った。己の能力に似合わない失態を犯したのが悔しかったらしい。

紙の方は盗まれてしまったとはいえ、ヴィーのことだから、あの紙に表れた石の、それぞれ特徴的な形をあの一瞬でしっかり記憶してはいるだろうが。

「さて、本当に何者ですかな」

問題は盗んだ人間である。王が、反応できないほど速い動きをするとは誰であろうかと残された神官長は首を傾げる。世の中は広い、そんな人間もたまにはいるだろうが、まあ、ろくな人種ではないだろうと彼は呟いた。

神官長は、彼の纏う白く分厚い神官服に隠れて、外からはそこにあると分からないペンダントをそっと握った。ペンダントの先には、

緑色の大きな石が連なっている。盗人や王が見れば、剥ぎ取っていたかもしれない。

「鍵を開けるのですか、ヴィエロア……。我が神である、竜イオナイアよ、あなたが望んでも、私はあの子にそれを望まなかった。ヴィエロア、あなたの中の小さな欲が育たないようせめて私はいつも祈っておりますよ」

王はこの国と人を愛している。それで十分だ。国よりも大きなものなど、彼が抱えることが無くてすむように、ただ、老いた神官長はそっと祈った。

王都の外れのしなびた宿屋で、興奮したように叫ぶ青年がいる。こんな宿に似合わない、神殿騎士の白い衣装は彼のどことなく感じられる幼さにも似合っていないように、それを見ている少女は思った。青年の髪は赤い。瞳は深い緑色だ。どちらも少女の好きな色ではない。でも、彼女は青年のことは、嫌いではなかった。

「ギルう、褒めて褒めて。オレちゃんと盗ってきたー!!」

「……」  
「ねえ、王様って格好いい人だね。でももちろん俺のほうが100倍は格好いいけど」

「……」  
「ギル、なんか言ってくんないと寂しくてオレ死んじゃうよ。ああ、胸が痛い。そして寒い、日が昇らない北国みたい!!」

「紙、は？」

「ああ、これこれ。ほいよ。ん？うわ、真っ白じゃん！ あれえ、確かに絵が浮かんでただけだなあ……本当本物だよ、信じてよ、そんな目でオレを見ないで！」

「貸して……」

ばたばたとやかましい少年に動じもせず、静かな少女が紙を受け取ると、白い紙は黒く変わった。

「うあ、不思議」

やがて、その黒い紙の中に絵が浮かぶ。それは確かに青年が鐘撞き塔で見たものと同じ。

「すご。そつかあ、意志と覚悟がいるとかなんとか、あのおじいさん言ってたな。オレそう言つのと無縁だし！ あ、でもギルはちゃんと守る！！」

「うん、本物みたい。ありがとね、チット」

「えへへ、どういたしまして」

チットと呼ばれた青年は幸せそうに笑う。少女は、相変わらず無表情だったけれど、心からお礼を言っているのだと彼には分かったから。

「あとは、石、探さなくちゃ……冠、も」

「どっちもこの俺に任せて！ ぱぱと盗って来ちゃうよ、あ、ギル俺の手際に惚れちゃうかも。うわ、照れるなあ、そしたらどこで結婚しようか」

「手伝ってくれて、助かるわ」

「愛しいギルのためなら何でもしちゃう。よし、手始めにとりあえずはこの目立つ服着替えて来よっかな。ギルは？ 今からいろいろ動くなら、その色はちょっと目立つから淡い色のほうがいいかも似合ってるけどね！」

「そっね……着替えようかな」

少女は、鮮やかな青い色の服を着ていた。

### 30・宝石店での邂逅

「フィーその辺にしといたらどうだ？」

「いやだ、もう今日は帰らん」

「どうしたんだよ、もう」

「ロイが！」

「ああ、あの綺麗なお前の兄ちゃんか？ 天使みたいな顔してるよなあ、本当に」

「ちがう。あいつは悪魔だ……」

話し相手がやれやれ、といった顔で私の肩を叩いた。話し相手とはナンテスの親父さんである。ここは、彼がやっている宝石店だ。今日はお使いでここまで来た。ナンテスは残念ながらというか、不在だった。

そして、先ほどから私は、私を一番癒してくれる美しい宝石たちを前にもはやそこから動く気が失せていた。帰りたくない。ここでずっと石を眺めていたい。舞踏会の練習をしていた頃より、今のわたしは、気力体力共に充実とはかけ離れた状態にあった。

「まあよく分かんが元気を出せ。ほら、お前が欲しがってた石がたくさんあるじゃないか」

「ただでくれるんなら元気も出るが」

「お断りさせていたどころ」

「やっぱり」

じゃあ駄目だ。再びぱたんと倒れこみ、うつろな目をして宝石の山を眺め続ける私に、彼は聞いた。

「……フィー、お前竜細工師、継承したんだろ？」

「……分かるのか、流石だな」

「石を扱ううちに、見る目だけはよくなってるな。今のお前の中には先代と同じ力が流れているのを感じる」

「師匠と同じ、か。そっか、それは少し嬉しいな」

目が自然と細まる。今の散々な状態が、ほんの少しだけ報われた気分になった。

「そう、誇りに思うことだろう。先代に認められていたってことは竜に認められたことと等しい。細工もますます格が上がる。いったい何が不満だ？」

「全て……」

「なんだと!？」

「ロイがな、俺が竜細工師を継いで以来怖いんだよ。術の扱いの練習ばかりさせる」

「そりゃあ、また。でも、術の扱いを学ぶことは普通に大切なことじゃないか？ 竜に捧げる細工は術具作るときもあるし、術具作るようになるには、その力の流れくらい分かるようにならないといかんだろう？」

「術の扱いの練習と言っても、内容が実戦向けなんだ……」

「実戦？」

「攻撃とか防御とか、いかに精霊の力を借りて自然を変異させて状況に応じて戦えるかをみっちり教え込んでくるんだ。生まれてこの方、術力なんざついぞ扱ったことのない俺にだぞ！ しかも、手加減もなければ休憩も取らせてくれない。あの優しいロイがだ！」

「そりゃ、珍しいなあ。昔っからフィーを猫っ可愛がりしてたロイが」

「……最近ロイが怖い。トラウマになりそうなくらいだ」

今日のことだ。術力をうまく扱えずに疲れ果て、ぼろぼろになって、もうやめてくれ、と言った。そしたら、ロイの奴はにっこり笑

って、

「敵はフィーがそんなこと言っても容赦してくれはしないんだよ。さあ立つて。早く僕を打ち倒せるくらいに強くなって」

と言われた。笑顔が怖かった。ロイは少しでも私が暇そうだと見ると、表に連れ出して毎回こんな調子で挑んでくる。もう堪ったもんじゃない。

「ちょっとは成長したか？」

親父さんに聞かれる。

「いいや。正直に言えば精霊すら見えないんだ。細工するときには、ああ、なんか今まで使ってなかった力が細工に流れ込んでるなあとは思っただけど、実戦のほうはさっぱり」

「向いてないんじゃないのか、それは」

「その通りだと思う」

やらせるだけ無駄だ。大体戦えるようになってどうするっていうんだ、この国はもう平和になったのに。ちなみに私は、多少の体術ならそこの男は軽く打ち倒せるくらいには使える。だから正直これ以上は必要ない気がするのだが。

「それで帰りたくないというわけか？」

「そうだ」

「可愛そうだなあ」

と、宝石をあんなにも美しくカットする男とは思えない、熊みたいな風貌のナンテスの親父さんは溜息をついた。

「それでも正直帰ってくれ。お前、俺の商売の邪魔をしたいのか？」

「邪魔か？」

「お前のどんよりした気配が客足を遠のけている。さっきから、入り口までやってきては引き返す客が何人もあった」

「お得意様なんだから、たまには貸切ってことで」

「いや、帰れ」

「殺生な……」

その時、からんからん、と入り口のベルが鳴った音がした。振り向くと、入ってきたのは赤毛に緑の目をした、派手な顔つきのすりとした男だった。だがその表情はどこか幼い。

「お、いらっしやい」

「ども。へへ、壁どころか床まで宝石が詰まってるんだねえ、すごいなあ。王都一どころか国一の宝石店で、どんな石でも手に入るって噂、あながち嘘じゃなさそうだ」

「そりゃ、勿論噂どおりさ。ここなら何でもあんたの欲しいもんは揃うだろう」

店主の言葉に、男は嬉しそうに笑った。彼は、そうしてきよろきよろ辺りを見回している。いろいろな意味で、軽そうな輩だ。そんなことを思っただんやり眺めていると、目があった。

「そんなに見つめてくれるなんて、ひよっとしてオレに惚れちゃった？ ……ん、君って男の子？ 女の子？ どっちだろう？」

いきなり近づいてきた男に至近距離でじろじろ眺められて、思わず突き飛ばした。

「寄るな。俺は男だ」

「おや、ごめんね。君、可愛かったからつい聞いちゃったよ。男の子か、そっかあ、残念」

大して残念そうな様子も突き飛ばされて怒った様子もなく、私に突き飛ばされた肩をぱっぱと手で軽く払うと、男は店主に向き直った。

「ねえ、あなたがこの店主さん？ オレ、ここにならあるかなあって思っただけだけど、『乙女の涙』って知らない？」

「なぜそれを」

店主は途端、目つきを鋭くして男を見やったが、私はそれどころではなかった。

「待て」

私は再び男に突つかかった。

「『乙女の涙』、だと？ あれは俺のものだ！！」

「おいファイ……」

「黙れ」

かなり相手は背が高く、見上げるような格好になったが構わず傍に行つて睨みあげた。男は怯みもせず、につこり笑つたままだ。なんだかむかつきながらも私はそのまま尋ねた。

「この宝石店で、一番高くて、一番美しい宝石だ。お前俺がどれほどあれ欲しさに貯金を続けてきたと思つてゐる？ 5年越して、まだそれでも届かない。お前に買えるだけの金があるのか？ いや、あつてもやらんが、どうなんだ」

……大昔、「内緒だぞ」と言いながらこの宝石店の親父さんがこっそり見せてくれた、頑丈な金庫の中身に、私は一目で恋をしたのだ。うやうやしく、黒い箱から手袋のされた手で取り出されたただ一つの石。大粒の涙の形をした、どうしたらあんなに輝けるんだらうというほど美しく煌くブルー・ダイヤモンド。清らかな色合いのそれは、『乙女の涙』、別名、ウンディーネの涙、とも呼ばれている。誰にも渡す気はない。いや、まだ私のものではないが。

「ねえ、オレ、お金持つてそうに見えるかな？」

男はへらりと笑つてそう答えた。その服装は、少なくとも貴族身分の格好ではない。仮に変装しているにしろ、よい意味でも悪い意味でも貴族らしいオーラが感じられない。

「いや全く」



そう答えると彼は、

「分かつてるじゃない、だから勿論、あるっていうなら強奪するつもりで来ました。えへ」

と、言つてウィンクした。なんなんだ、この男…というよりそれは犯罪だと思う。

「…そんな正々堂々と盗めると思っているのか？」

今まで黙っていた店長がむすりとした様子で尋ねた。大男なので、仁王立ちになつた彼は結構な迫力がある。ロイによると、この店主は見た目どおり力は強く、見た目に似合わず敏捷だという。ちよつとした盗人なら片手でひねりあげてしまうところを私も見たことがあつたので、このひよろつとした男なら早々吹っ飛ばされそうだと私は思つた。いや、むしろ吹っ飛ばされると気分がいい。

しかし男は店主を上から下まで無遠慮に眺めると、途端、嘲るように言つた。

「あんたじゃ相手にならないよ。大人しく渡してくれるんなら、悪いようにはしないからさつさと寄越してくれる？」

「断る」

店主は当然のように断つた。対する男は面白そうに笑う。

「この国の人間ってさあ、本当精霊術ばっかしか使わないみたいだね。こんだけオレが力出してても気付かないんだから」

「何を……」

カウンターから出て来た店長が男の言葉に構わず彼を捕縛しようとした。しかし。

「ねえ、こんなのつて体験したことあるかなあ？」

ひよい、と男が指を動かすと、途端店長の体は動かなくなる。

「な……」

「びっくりり？」

「なんだ！？ お前からは風の術力が感じられない、なぜこんなことが…これじゃまるで」

「『魔法みたい』？」

くすくすと男が笑う。

啞然とする。初めて見た、これが、魔法か？

「おじさん、目はいいみたいだけど、そもそも体術しか使えないんならオレには敵わないよ？」

「く」

店主の親父さんは抵抗しようとしているが、その体は全く動かなかった。

「無駄だつて。うーん、ひよつとしてちよつと痛みを覚えたほうが大人しく従ってくれるのかな？ 精霊に力を借りる君たちと違って、オレには人を傷つけるのに全く制限ないし、なんなら試してみる？」

赤毛の男の緑の目に浮かぶのは、残虐さというより、玩具を甚振る無邪気で愉しそうな子どもの目とそっくりな色。しかし私はむしろそれにぞつとした。この男はきつと何の良心の呵責も泣く人を傷つけ、殺す類の人間だ。

「ほづら、こんなのどうか」

ふつと、唐突に空中に現れた鋭いナイフが親父さんの目玉の方をむいた。

「目を抉るのはきつと痛いと思うよ？ ほらほら、早く喋らないとすっかり力加減誤っちゃうかも」

親父さんの目から1cm位のところで刃先がひらひら動く。

「…」

親父さんはそれでも黙っていた。脂汗をかきながらも、刃の先をぎらぎらと睨んでいる。その態度に、男の目がすつと細まる。

「やめる!」

ようやくその時に至って体が動いた。叫んだ私に、男の、店主に向けられていた、その厭な目がこちらを向く。

「五月蠅いなあ」

ひよい、と男はこちらに手を振ったが。

「あれえ？」

私は動くことが出来た。そのまま親父さんのところまで行って、ナイフを叩き落す。それは床に落ちてくると回った。それを見届けると遠くへ蹴り飛ばし、わたしは男に向き直った。彼の余裕の表情が崩れないのに対して、わたしはなぜか足の震えが止まらなかった。それでも、親父さんを背に、私は男の目を睨みつける。彼は考え事をするように、尖った顎に手を置いた。

「君、王様じゃないし、おかしいなあ。ん、あ、そっかあ、ひよつとして君は、竜細工師かな？」

「なぜ……？」

「竜の加護。それも知らないのか。ふうん、この間王様で試せなかったから興味あるなあ、ねえ、実験体になってみる？ どこまで魔法に抵抗力があるのか試すの、きつと楽しいと思うんだけどなあ」

竜の、加護か。魔法に抵抗できるものとは知らなかったな。なんにせよ。

「お断りだ」

実験体？きつと楽しいのはお前だけだ。そんな恐ろしげなものに協力する気はさらさらない。

「残念。ん、じゃあ、体術勝負？それとも剣？オレ、どっちでも負けないと思うけど。というか、せつかく動けるならそのおじさん放つてどっかに逃げるなり助けを呼ぶなりしたほうが賢いんじゃないの」

「阿呆か。この親父は頑固なんだ、絶対に命がけで口を割らない。宝石を愛しているからな。そんなことしてる間にお前は親父さんを殺して一人この家の家捜しをして、とんずらする気じゃないのか」「ひゅう。ご明察」

そう言って、けれど男はにんまりと笑った。

「まあ、殺すのが一人になるか二人になるかの違いなんだけど」

「フイー、逃げる!!」

店主の親父が言う。わたしは首を振った。

こちらから踏み込もうとして、けれど足が言うことを聞かない。

舌打ちをする。怯えているのだ。本能みたいなものが告げている、この男は、冗談でなく、私じゃ全く敵わないだろう。全く、なんで最初にそのことに気付かなかったんだか。

「フイー、無理だ、いいから逃げる」

「やなこつた」

逃げるんならとつくに逃げている。逃げるわけにはいかないからここにいる。

「そんなに震えちゃってるくせに。このおじさんがそんなに大事？ 所詮は他人でしょ」

落ちたナイフを拾って、男はせせら笑う。私も、虚勢を張って笑って見せた。

「俺はお前に、俺の『乙女の涙』を獲られたくないんだよ」

「フイー……」

親父さんが呻く。

私は誰かのためには戦わない。私の何かのために戦う。

「へえ。じゃあこれは欲しいものを巡る男の戦いって奴？」

「そう、だな」

男はナイフをこちらに構えて、ひょうきんに笑った。まるで試合のように礼をとる。完全に遊んでいる。仕方なく、こちらも返礼する。何をやっているかという時間稼ぎである。ひよっとすると

ナンテスが少し早く帰ってくるかもしれないから。あいつならまだ、あるいは。

私は腰から剣を抜く。最後にこれを使ったのはいつだったけ？

「んじゃあ、勇敢なる戦士にせめて名前だけでも言っておきますか。オレはチットって言うんだ、職業は盗賊ってことで、よろしくねえ」  
「フィオレンティーノ。この王国の竜細工師、だ」

一瞬の間があった。

そして、それは始まった。文字通り風のようにチットが襲い掛かってくる。速い、なんてもんじゃない。リーチの差というのは、むしろ懐に入られたら仇にしかならないんじゃないかと思いつながら、師匠に仕込まれたときを思い出して、横なぎに払われた1合目は何とかはじき返すと男は嬉しそうに笑った。

「全然使えないってわけでもないんだ」

2合、3合。攻勢にまったく出れない。ひたすら守りにまわってようやく追いつくか、といったところだ。それでもあからさまに手加減がされているのが分かった。そもそもこの男は、親父さんにかけた魔法も保持したまま戦っている。それでも涼しい顔をしているのを見て腹が立った。息が、どうしようもなく上がってくる。

「それでもそんなもの、かあ。つまんないな、そろそろ終わらせちゃいましょうか」

くすくすとチットは笑った。

まずい。避けられない。

まともに、突っ込んできた男に反応も出来ず、腹部にナイフが迫る。

「ぐ、う。げ、げぼっ」

酷い衝撃だった。思わず身をかがめて咳き込む。……しかし、私

の腹から血は流れてない。

「？」

不思議そうに血のついていない綺麗なナイフを眺めていた男が、私を見やる。そして、何かに気がついたように、動けなくなっている私の腕を掴んだ。振り払おうとして、その力も出ないことに気付いて愕然とする。男は無抵抗な私の右手首を持って手先を見つめた。

「ああ、綺麗な指輪だな、ってこれ、術具じゃん！！ 初めに気付かなかったなんてオレって迂闊。ちょっとシヨック」

彼が私の指を掴んでしげしげ眺めているもの。ロイの目と同じ色のアクアマリンが嵌った指輪。そう、この、ロイが渡してくれていた術具がなければ、私は今恐らく死んでいただろう。この術具の守りがあつてなお、動けないほどの衝撃を受けたのだから。

「いいなあ、これ貰っちゃっていい？ って、嘘だろ。抜けないし……。うーん、じゃあ、フィオレンティーノ、あんた殺すのちょっと面倒くさいなあ」

男は非常に面倒そうに私を見やった。

「ほつとくか。だけどなあ、あんまオレの顔知ってる人間が多いの、嫌なんだよね。特に男。だから盗みに入るときは顔見られた場合大抵殺しとくんだけど」

そう言つて、しげしげと私の顔を見る。そして、その目は疑問を浮かべた。

「…あんた、本当に、男？オレ、女は切る趣味は、」

「…！！？」

手が伸びてくる。

記憶と、だぶる手。体を、触ろうとして伸ばされるその。手、手、手にやり笑う口元、私に伸ばされる男の手。

触るな、いやだ。やめて。怖い！！

そう思った途端。

「いやあああああああああ！！！！」

絶叫とともに、空気が引き裂かれるような音がして。私の前方の宝石店のショーウィンドウや床のガラスが目の前の男を中心にするように粉々に砕け、赤や青、ピンク、様々な色をした宝石が飛び交い、彼は身を翻した。

間一髪で、衝撃を避けながら、それでもチットはその身に傷をいくつも作り、そこから噴出す赤が四方に飛んだ。私のところまで。

記憶と重なる光景。血まみれの人。私は、何を、忘れている？

チットは、血の滴る自分の腕と、私を、不思議そうに見比べて。そしてやっぱり笑った。

「その力…ふうん、フィーって、面白いね。今日は退却してあげる、それ以上暴発されると敵わないし、人寄ってきちゃったしね」

そう言うのと、ふ、と男は消え去った。

「フィー？ おい、フィーしっかりしろ！！！」

親父さんがやってきたけれど、

「店主、ちょっと話が…ってどうしたんだ、この荒れ具合。ん？

おい、お前フィーじゃないか、どうしてこんなところに！ それに

お前、その怪我…！！！」

なんだか聞き覚えのある声があった気がしたけれど、

「親父さん、怪我、なかったか？ご、めんな、店…」

「フィー！」

私は気を失った。

### 31 男嫌いの理由

目覚めると、そこには年季の入った木の天井があった。  
見慣れた天井だ。ここは、そう、私の部屋。私は確か、ロイの使  
いで宝石店に行つて、それで…それで？

思い出せない。

「フィー、大丈夫？」

「…」

「フィー？」

「シライ、か。私はどうしてここにいるんだ？」

「倒れたんだよ、フィー。覚えてないの？なんでも宝石店が強盗に  
あつたつて…」

「強盗？ なんの、ことだ？」

頭が、割れるように痛い。シライは私の言葉に訝しげな顔をした。  
見ると、彼は私の素足に消毒液を塗っていた。少し、染みる。

「え、だつて、フィーが追い払つたつて聞いたよ」

「私が…？」

顔に違和感を感じて手を持っていくと、絆創膏が張られているの  
が分かつた。腕を見るとぐるぐる包帯が巻かれている。なぜか腹に  
打ち傷があるような鈍痛が走る。なぜ私はこんなに満身創痍なんだ  
？まるで誰かと喧嘩でもしてきたようだ。わけが分からない、と傷  
を見ている私に労わるような微笑を浮かべながら、シライは、消毒  
の済んだ私の足に包帯を巻いていき、それが終わると立ち上がった。  
「…ちよつと混乱してるのかな。もう、大丈夫だから。お手柄だよ、  
フィー。『乙女の涙』は 無事だつて。いろいろあつて宝石店のお  
じさんはここにいないけど、すごく感謝してた。…フィー、しばらく  
休んでて。僕は、ちよつとロイ兄ちゃん達にフィーが一度は目を



覚ましたから安心してって伝えてくるね。とっても心配していたから

「そう…」

『乙女の涙』？

何かが頭にひっかかる。蘇るのは、冷たい緑の瞳。血ぬれた…？  
ずき。また、頭が痛む。

…今は、考えたくない。よく分からないが。体がまだ辛かったので、ありがたく眠らせてもらうことにした。

「お兄ちゃん」

「シライ、フィーは!？」

シライが階段を下りていくと、工房には二人の男がいた。どちらも、顔を上げて問うように真剣な眼でシライを見つめた。

「うん、手当ては終わったし、目が覚めたよ。また寝ちゃったけどね。傷は深くないみたいだったから、大丈夫だと思う。ただし、」  
「ただし？」

「うん、なんか何も覚えてないみたいなんだ。シヨックで混乱しているのかもしれないけど…」

シライの言葉に、二人の男のうちの一人、ロイはしばらく目を瞑っていた。何かを思い出すようにして。

「…そうか。うん、フィーはもう大丈夫だと思うよ。シライ、ありがとう、手当てしてくれて。僕には、出来ないから」

「ううん。じゃあ僕、ちょっと学校の課題を済ませに行くね」

シライはそう断ってその場を去ったが、気を使っているのだろう

とロイは思った。シライは気が利くから。

…そうして、シライがいなくなってから、ロイはもう一人の男に目を向けた。

「フィーが無事でよかったよ。あなたが血だらけの彼女を抱えてここに飛び込んできたときには一瞬あなたを絞め殺そうかと思案した」

ロイは、そこに佇むヴィーを見やって呟いた。王様は苦笑して見せた。彼も彼女の無事を聞いて、緊張が解けた表情になっていた。

「ああ、彼女ばかりでなく俺の命が永らえたようで喜ばしいことだ…そんな顔して睨むな、俺は現場にいなかったんだから。いたら当然守っていた。…それにしても彼女の手当てを任せてくれてよかったのに。これでも看病の腕はいいぞ」

「あなただけはお断りだ。あなたに頼むくらいなら元から僕が診てる」

「ちっ」

ふと、ロイは真顔になった。

「そんな話とはかく、ヴィー」

「なんだ。フィーの記憶がないって話か。…お前は何か思い当たることがあるんだろう？」

「…今も、彼女が思い出すのを拒絶するくらいだとは、思っていない。もう、だいぶ落ち着いてきたものと」

言いよどむロイにヴィーは目で問うた。

ロイは、ゆっくりと話し始めた。

「フィーの男嫌いの要因は2つあるんだよ。一つは彼女もはっきり覚えてるみたいだけど、両親の死後に預けられた教会で、神官の男性に暴行を受けていたこと。もう一つ、これについて彼女は故意に忘れているようなんだけど、家に引き取られてから、フィーは一度誘拐されて奴隷市場でセリにかけられたことがあった」

「成程な……」

ヴィーは呻いた。

闇が蔓延った時代、犯罪者を取り締まる機能は崩れ、治安は最悪な状態にあった。現在は、次第に神殿騎士によって回復がなされたものの、前王が倒されるまでは神殿騎士すらも屍鬼の相手で手一杯だった為である。数多くなされた犯罪の中でも、一番酷かったのが、禁止されていたはずの人身売買である。特に、屍鬼や強盗などに襲われて両親を失った身寄りのない子どもが国中に溢れ、教会に引き取られた子どもはまだ良しとして、多くの孤児が人攫いに捕まって売り飛ばされた。その扱いは熾烈なものだったと聞く。ヴィーが王位についてから、全ての奴隷市場を閉鎖して回ったが、ほとんどの子ども達は栄養失調であったり、性的虐待や暴行を受けて、精神的な傷を負って酷い場合は心を塞ぐものもいた。ヴィーも同じ目にあっただろうか。そう思うと、ぞっとした。

「フィーが誘拐された後、どこに攫われたか突き止めるのに手間取って…。でも、母が居場所を突き止めたとき、孤児たちのセリが行われていた建物は半壊状態で、逃げ惑う人々や傷つき伏す奴隷商たちに埋もれて呆然と一人座り込んでいるフィーがいた、らしい」

僕は母に閉じ込められて連れて行ってもらえなかったんだけど、とロイは遠い目をした。

「それから帰ってきたフィーは、血まみれだった。丁度、今日みたいに。でもあの時、彼女自身は傷一つ負ってなくて、ついていたのは全部返り血だった」

「……フィーが、やったのか」

「そう。力の暴発があったらしい。多分、彼女に何かやらかした奴隷商に抵抗するうちに無意識に暴発してしまったんだろう」

「だがあいつに術力は」

無かったはず、とヴィーは思う。今日は宝石店の店主の話を聞い

て驚いたものだった。彼女が竜細工師になったことを聞いて多少納得したものの、ヴィーは出会ったときからそれまで、フィーから術力を感じることは無かったからだ。けれどロイは、こう続けた。

「あつたんだ。無いように見えていただろう？ あれ以来ずっと本人が抑え込んでいたんだ。」

奴隷市場から連れ戻されてから、フィーはひたすら水で手についた血を洗い流していた。どんなに綺麗になっても、その日一日ずつとそうしていた。その後、倒れるように数日眠り込んで、目が覚めるころには誘拐されてからの記憶をなくしてた。多分、心を守るためにそうなたんじやないかな。そして、術力もその日から全く使えなくなっていた。フィーの術力は、元は結構あつたんだ。そうじやなきや、力の暴発の結果、奴隷商を倒した上に、建物が半壊するほどの騒ぎになったわけがない。無意識に同じことが再び起きないようにしていたんだと思う。

彼女が最近竜細工師になってから、竜の血が呼び水になって力が少し解放された。元から竜の血は力のないものに力を与える効果もあるからね。……まあ、元から少しずつ、彼女の術力を抑え込むのに限界は来る予定だつたんだけど」

不運としか言いようがないとヴィーは思った。攫われたことも、過ぎる力を持つていたことも。

「それで男嫌いか……」

そんなことがあつたなら、あれだけ拒絶されたのも納得がいった。勿論、ヴィーのことをフィーが憎んでいたことも大きいだろうが。

「そう。フィーは、男性と話すのはともかく、体に触られるのは一番嫌みたいだね。今回は多分、強盗を相手に命の危機に落とされた拳句、そいつがフィーに触れようとしたのが記憶と重なつたんじゃないかな、と思う」

今では随分落ち着いていたのに、とロイは溜息をついた。

「最もあなたの所為で、いつ、記憶が蘇るのかとずっとひやひやし

てはいたんだけどね」

「……そうだったのか。悪いことをしたな」

ロイがヴィーにこのことを話さなかったのは、彼女が容易に他者に触れられたくないであろう過去に深く関わるからだからだろう。こんなことがなければ、多分ずっとヴィーは知らないままだった。当の本人は忘れていくというのだから。

ヴィーとしては溜息しか出ない。しかし知ったことが良かったのが悪かったのか、微妙なところだ。ロイが、彼女にある一定の距離を保っていたわけがよく分かった。自分は、これから彼女にどう接していくか

「……なんにせよ、今日のことと結果的にますますフィーの男嫌いが酷くなりそうだな。あの男、また会ったらただではおかない」

「あの男？ ヴィー、ひよっとしてチツトという男に会ったことがある？」

被害届と店の片付けのために既に帰ってしまった宝石店の店主から、ある程度の事情をロイも聞いていた。赤髪に、緑の目をしたチツトという男のことも聞いた。

「ああ、奴は以前古文書を盗っていった」

「古文書が盗られたのか……『乙女の涙』を探しに宝石店を訪ねたということ、ヴィー、やはり鍵を開けるんだね？」

「……ああ、そのつもりだ」

「そう。そうだろうと思ってたけど」  
「なんだ」

ロイが何か言いたげなので、億劫そうにヴィーは尋ねた。

「フィーに対して今話した事情から、あまり積極的に距離をつめないように。それから、彼女を守り通すこと」

「なんだ？俺が鍵を開けることと関わりがあるのか」

「残念ながら。……今から約束しておいてくれる？」

「よく分からないが、後半はともかく前半はあまり約束できない」

「ヴィー」

水色の瞳が色を強めて深い青の眼を睨み据えた。ヴィーは真つ直ぐロイの目を見返して彼に尋ねた。

「お前は、フィーが変わらないことを望むと以前言ったが、本当に本心なのか？」

「……本心、だよ」

フィーが望む限りは、とロイは言った。

「彼女の過去のことは分かった。それでも、俺にはお前の下す判断が理解できない。相手が惚れた女性ならなおさら、だ。俺は、この国を変えていくつもりだ、生きているうちにな。彼女がありのままに過ごせるような国にしたい」

「それは、」

「彼女は、別に男になりたいってわけじゃないんだろう？ 歪なんだ、今の彼女のあり方は。選ぶことが出来ない状況でそのありようを望んでいるなんて彼女に言わせるのか？ 偽りなど、いずれ崩れていく。俺が手を下さずとも。分かっているだろう、お前のやつっていることは守るのは違う」

手の中のブルー・ダイヤモンドを弄びながら、王様はそう言った。

「そんなでは恋敵にすらなりえない」

「……」

「彼女を振り向かせて過去への拘泥も男嫌いも変えて見せるくらいの意地を持て。ロイ、お前の思いはそんなものか？ 自分を抑えずに多少はわがままに生きてみたらどうだ？ 世界が違うぞ」

しばらくして、目を逸らしたのはロイのほうだった。

「僕はあなたが正直嫌いだ、初めて会ったときから」

ヴィーは彼女が男装を始めて以来、初めて『異性』として彼女に近づいてきた人間だったから。そしてフィーの眼が、少しでもヴィーに注がれた時点で、ロイは踏み込んでくるこの男を嫌った。そこに実は羨みが混じっているのだと知っていながら。

「…でも、僕に対してそんなふうに出てくれたことには、礼を言うよ」

「俺は心優しい人間だからな」

「どうだかね」

「今回は立場が逆だな」

ロイは苦笑した。

「とりあえず、我らが眠り姫の様子を見に行くか」

「……そうだね」

そうして話し終えた2人はフィーの部屋へと向かった。

### 32・5つの涙

「…と、いうわけなんだ、フィー」

「大体分かった」

実感も記憶もないが、ともかく私はナンテスの親父さんの宝石店で、『乙女の涙』を盗りに入った強盗相手に大立ち回りを演じて、それで相手にいたく傷つけられたのだということは分かった。なんでも強盗はかなりの暴れっぷりで魔法を乱発し、宝石店は今、惨憺たる有様らしい。ならば親父さんは泣いているだろうな、と思った。あのショーウィンドウは彼のお気に入りなのだから。それにしてもあの親父さんが太刀打ちできないとは、一体どんな男だったのだろうか。さっぱり思い出せない自分が、なんだか怖い。覚えてないのは、倒れるときに頭を強く打ったせいだろう、と言われた。成程、通りで目が覚めたとき頭がずきずき痛んだわけだ。

「あれ？ 私、ロイの術具をしてたはずだよな？」

指を見ると、一応アクアマリンのそれははまっていた。そうだが、術具をしていたならこんなに傷つくはずはないのだが。

「ごめんね、フィー、効力が切れてたみたいなんだ」

ロイの言葉に頭を抱えた。運が悪い。強盗現場に居合わせた上に、術具の効力まで切れていたなんて。

舞踏会での一件以降、身を守る加護のついた術具をしている。きつと最近のロイとの術の訓練で、加護を使い切ってしまったに違いない。迂闊なことにそれに気づかなかつたようだ。

しかし、いつもならロイは、術具の効力が失われていることに気づくのに。珍しいこともある…

「んん？」



ロイに限って気付かないなんてことがあるだろうか。さすがにまた頭が痛み出す。

「フイー！」

「なんだいきなり叫ぶな頭に響く……って、それは！」

「そう、『乙女の涙』だ」

ヴィーが差し出した箱の中に、神々しいくらいに輝いて納まっているのは確かに私が長年欲しがり続けてきた宝石。無事だったんだ。ほっとした。自分を大いに褒めてやりたい。

……しかしヴィーが持っているということは。彼は鍵を開ける気なのだろうか？ 恐らくそうだろう、この王様は意味なく国の金を宝石に注ぐような人間ではない。

ということはつまり、私はこの宝石を手に入れそびれてしまったということだな。くたびれ損の骨折り儲けとは、このことだろうか。

「どうした、フイー？」

「いやなんでもない」

残念だが仕方がない。私が生きている間はこのんびり鑑賞できると思っていたのだが。

「……運んでくれたのは王様だったな、助かったよ。礼を言う。私に冠のことも聞きたいのか？」

まだ帰っていないということは、そんなところだろうか。

尋ねると王様は首を振った。

「いや、お前が心配だったから」

「……忙しいんじゃないのか」

「仕事は済ませてきた。クエインをあまり働かせると過労死してしまうからな、俺だって義務は一応果たすように努力している」

「それは殊勝なことだ」

なんとなく近寄ってきた王様から身を引いた。

「……」

なぜまだ寄ってくる！ 思わずベッドの反対方向まで一気に身を引いた。ロイがさらに迫ろうとする王様を止めている。

「放せ、彼女に迫ることに關してはお前も納得しただろうが」

「僕に關してはともかく、貴方の行動を認めるとも邪魔をしないと  
も言つた覚えはないよ、王様」

納得したとはなんだ、ロイ。

「お前はこんなに薄着の彼女を前にして反応はないのか」  
「貴方と違つて理性はしっかりしている方だからね」

「なんなんだお前ら……」

とりあえずシーツをかき集めて身を覆つて限界まで端っこに寄る。  
王様が女好きという噂はやはり間違つてはいないと分かった。

彼がようやく抵抗をやめたので、ロイがしぶしぶと言つた様子で  
手を放した。

「……フィー、俺が怖いか」

青い目がこちらに注がれる。そこにはもう、ふざけた色は見られ  
ない。

「そんなことはないが」

「じゃあこの手を掴めるか」

「掴みたくはないが掴めないことはない」

「ならば」

………そんなの、特になんともないに決まっている。そつと差し出  
されたヴィーの手を、彼とこの間会つたときと同じように掴んでみ  
せようとして。

その、骨ばつた造作に。大きさに。

「!?!?」

私はなぜか拒絶反応を覚えて身を竦ませた。

「やっぱりな……」

少々傷ついた顔をしたヴィーに、なんとなく焦る。彼にあまり似合う表情ではない。なぜ、自分はこんな反応をするのだろう。この間はなんとも無かったのに。もう憎むのは止めるといったのに、拒絶するのか？

「いや、構わない……ヴィー？」

すつと身を引こうとした彼の手を掴んだ。その真つ青の目が見開かれる。

「平気だ。悪かった」

そう言つと、ふ、とヴィーは笑んだ。しばらく彼は私の手をそつと握っていたが、やがてどこか名残惜しそうに放した。

「フィー、欲しいならこれをやる」

おもむろにそう言つと、王様は『乙女の涙』を差し出したが、私は首を振った。受け取れない。宝石店の親父も相手がお前だから譲つたのだ、宝石に携わるものとして。

「……ヴィーは、鍵を開けるんだろう？」

意外と冷静だ。ヴィーが冠の話をしようものなら、また激昂してしまうのではないかと少し恐れたけれど、彼からそのことについて触れなかったから。

「……お前の師の遺したものだから、その本義を知りたい」

彼がそんなふうになんかそれを覚悟するなら、私も竜細工師として止めるわけにはいかない。

「……この石は本来この宝石を守り通したお前にやるべきなんだがな」

「記憶にない勲功によってそれを受け取るうとは思わない」

それに。

「なにより、王が望めば『5つの涙』は彼に従うのが掟」

私も『乙女の涙』をもし手に入れたとして、散々見たら、再びナシテスに売り払う気だった。元の場所へと返すため。

私はそつと立ち上がる。貧血なのか、ふらりとした私を、私が立ち上がるのを見越していたらしいロイがそつと支えてくれた。小さく感謝すると、再び王様へ向き直る。

「ヴィエロア王、いいか、石はこの円状になった王都の東西南北にあるんだ」

ヴィーに向かってそう言うと、彼はなるほど、と呟いた。

「…あの古文書の意味は、それか。分かりやすいと言うか単純だな」  
「ああ、古文書を見たなら話は早い」

あの神官長がよく大人しく王様に見せたものだ。しかし石の配置の意味を説明しないあたり、なるほど王様が彼を狸と言うのも頷ける。あまりに単純すぎて、気付かない可能性もあるわけだから。しかも恐らくその中心にある神殿の位置からして、彼も一つ持っているのに言わなかったのだろう。

王もそれに気づいたらしく、あいつが持つてる気はしていたんだがな、と呟いていた。

「で、古文書は？」

「古文書は、実は盗られた」

…それでよくナンテスの親父さんのところまで辿り着いたな。あの辺りは奇妙に似た建物がどこまでも連なり、看板もつけていないので入ってみないと何の店か分からないのだ。ということは。

「古文書を持っているのは、件の強盗か」

「そつだ」

「そつか。ならば、そいつのほうが有利だ。一応東西南北に散っているのは分かっているが、王都は広い。古文書があつて使いこなせるものさえいれば、正確に場所を示すから見つけるのは容易い。今回賊が違わずナンテスの親父さんのところにきたのを見ても古文書に認められた者がいるんだろう」

「あの男がか？」

なにやら納得がいかなさそうな王様はさておき、私は自分のコレ

クシヨン収めた宝石箱の一つを取り出した。

「賊は複数なのかもしれない。…宝石店の親父さんは、前王の冠が汚れたころ、夢の中で『乙女の涙』を手に入れたという」

ふたを開けると、その箱に収められた宝石はたった一つ。

「…それは」

「『幻炎の雫』。師匠は火山で拾ったとか言っていたがどうだかな。赤く美しい宝石の内側では、なぜか炎が揺らめいているように感じられることから幻炎の名がついた。雫形のそれを逆さにすると、灯の形にも似ているから、雫とつけないで呼ぶ人もいる。別名、火蜥蜴の涙。情熱的で鮮明なピジョンブラッドの色をした妖艶なルビーだ。」

「やる。まあ、がんばれ」

宝石箱を断腸の思いで閉じ、王様に突き出した。

「フィー、いいのか」

「くどい。私がお前が手にしている2つを思わず盗らないうちにさつさと出て行け」

「…感謝する」

王様は頭を下げた。

「…必ずすべて揃えて、またここに来る。フィーは、残りの石を見たいだろうか？」

「当然」

断る理由はないな。それにしても。

「…正直、冠の鍵を開けようとしている輩がろくな者とは思えない。さつさと残りを見つけたほうがいい」

「了解」

そして、

「またな」

と言って、王様は帰っていった。

「フィー」

ふと黙って支えてくれていたロイが、呼びかけるので見やると、彼は複雑な色を浮かべてこちらを見ていた。

「いつかはこうなると分かっていたけれど。本当にいいの？」

あれも、師匠を思い出す縁の品ではあつたけれど。

「しょうがないさ。寂しい気持ちはあるがな。それに師匠が遺したものはあれだけじゃないし」

ロイを見て笑う。彼は理解して微笑んで、そつと支える腕に力をこめた。そう、師匠の血を引いた彼の存在が、その見せる優しさが、私には大好きな師匠を思わせていつだつて尊い。

「それにしてもフィー、僕には怯えないの？」

ふと思いついたように、彼が耳元で囁いた。

「？」

「これは時間がかかるね」

…そう言つて苦笑するロイがよく分からなかった。変な奴。

### 33・ある少女

フィーが宝石店で盗人と邂逅していたのとほとんど同じ頃。

鼻歌を歌いながら、時に空を見つめ、

「ああ、今日の美しき淡き湖面のような空は我が恋しい人の瞳に同じ」

…などとうつとり呟く男が、どこか地に足がついていない足取りで大通りを行く姿が、人々の不審を買っていた。ウエーブがかつた濃い茶色の髪、泣き黒子に垂れ目の男は、その拳動さえなければ色男の部類に入るのに、と彼の友人や道行く乙女にため息をつかせることしばしばだ。彼は気にもしないらしい。相変わらずの調子で、踊るように人ごみを縫って歩いていく。その手には鍵つきの箱が抱えられている。

彼、ナンテスは、ローズ嬢の屋敷に向かっていた。

舞踏会の折、城であった一連の粗相の話が、どういつわけか彼の父親にばれてしまったためである。長引く風邪から回復した父親は、それを知ったときナンテスに力強い拳骨を一発飛ばして吹っ飛ばしたあとに、

「詫びて来い」

と店の中から「ごそごそ」なやら取り出し、彼に手渡したのだ。

「これはとっておきのウルトラマリンだ、ローズ嬢って言ったら絵がお好きというから詫びついでにお渡しすれば喜ぶだろう」

と言って。

たかが絵の具と侮れない。

ナンテスの父親は宝石店を営む傍ら、半ば趣味でラピスラズリを粉末にした顔料も作っている。純度の高い原石ですら不純物が混ざ

るので大変だが、その分この青い半貴石から作られる純粋な本瑠璃色は大変美しく希少であり、画家の間ではかなり人気がある。

現状、王ですら入手するのは困難というほど手に入らないそれならば、確実に詫びのしるしになるうというものである。

ナンテスとしては、謝罪に赴くことに正直納得がいかなかった。ロイに心酔している彼としては、ロイ以外のいかなる女性の足であれ、いくら美しかろうと興味の端にもかからないのに、変態の汚名など着せられてはかなわない。そもそもローズ嬢自身も気に留めても居ないのだ。しかし仮にもローズ嬢は公爵家の娘であるため、彼女に厄介をかけたという汚名を背負ったままでは下手をすると仕事もままならなくなってしまう。そんなわけで、仕方なくナンテスはローズ嬢に正式な謝罪をするために彼女の屋敷に向かっている。王との端から端への移動は長く、次第に彼は散歩気分になっていたのだ、謝罪する態度としてはいささか適切とは言いがたかったが。

ようやく大きな屋敷に辿り着くと、呼び鈴を鳴らし、出迎えてくれた執事に用向きを告げ、ナンテスは中に入ることを許された。初めに異変を感じたのは、彼が今にもドアを通り抜けようとしたそのときである。

チリ。

一瞬、彼の首筋に痛みが走り、ナンテスはそれまでの暢気な調子をさっと切り替えて辺りを注意深く見回した。

……何も居ない？

彼は剣の腕だけはそこそこあるので、気配には敏感だ。特に、何らかの悪意や邪な気配には。勘違いとも思えず、しばし辺りを見回していたが、結局もう何も起こらなかったため、首をかしげながら彼は執事に従った。

通された部屋は趣味が悪くない程度に、豪奢だった。



「まあ、ご丁寧にわざわざこちらまで赴いてくださるなんて。ようこそいらっしやいました」

ナンテスを迎えて、その名に相応しく今日は真紅のシックなドレスを纏った少女は花の咲くような笑みを浮かべた。彼女は相手が誰にしるこのような態度を崩さないの、フィーをはじめ、他の王都の平民にも比較的人気があった。気安い人柄なのである。

そんな彼女をじっと見つめると、ナンテスは慇懃に深く頭を下げて謝罪の言葉を述べた。

「本日は、先の舞踏会における私のご無礼を詫びに参りました」

ナンテスはあまり貴族に敬語を用いるような人間ではないと舞踏会の日に知っていたので、その態度の変わりようにローズ嬢はくすくす笑った。

「気にしておりません。むしろ、私の悪戯のせいであのように騒ぎが大きくなってしまって申し訳ありませんでした。あんな噂まで立ってしまった……私何度もあなたの不名誉な噂を否定したのですけれど」

「存じております。……あの場ですぐに、私が謝罪すればよかったです。あなたの恋人まで怒らせて申し訳ないことをいたしました」

「ナンテスさんとおっしゃったかしら？」

「ええ」

「ナンテスさん、私はむしろ感謝していますの。あの一件でよりあの人と仲良くなる事が出来ましたもの。彼もきつと私と同じで感謝していますわ」

そう言っただけでも彼女はとても幸せそうに笑った。そんな彼女に、父の手製の顔料を手渡すと、彼女は嬉しそうに頬を上気させ、何度も礼を言った。ロイとは比べ物にならないが、ローズ嬢も確かに可愛い人だとナンテスは思った。

そうして、持って来た箱をあけた彼女が、顔料の鮮やかな青を目にして騒いだ興奮がようやく冷めるころ、ふと、ナンテスは切り出

した。

「その、何か命を狙われるような心当たりはお有りですか？」

「特に今はございませんけれど……」

困惑気味な彼女を置いて、彼はドアに歩み寄った。首に感じるちりちりする痛みが我慢がならないほど増し、辺りがやけに静か過ぎるからだ。ばたん、とドアを開く。開かない。

「そんな」

ナンテスが無理にドアを押し開くと、確かにそこにしっかりと立っていたはずの騎士が倒れてドアの前に折り重なっていた。

「おい、どうしたんだ!!」

「く……ろ……」「い、……むい……や……」

うなされている彼らから、確かな言葉は聞き取れない。生きている上に外傷もないらしいと知ってほっとするが、彼らの苦しみようがどうもおかしい。

「誰か!!」

ナンテスは叫んだが、誰もやってこない。周りを見回すが、騎士をこんなにした犯人の影すら見当たらなかった。けれど、彼はこの辺りから確かに気配を感じた。すぐそばで今は、姿を隠しているらしいとナンテスは判断し、

「……大丈夫です、これでも少しは使えますからあなた一人くらいなら守れます」

そう言って、後ろを振り返った。ローズ嬢が怯えているのではないかと思ったのだ。しかし違った。

「賊が入ったようですね……私の身なら私で守ります」

部屋の奥の方からやって来て、短刀と剣を手にした少女は、はっきりとそう言った。おそらく、短刀もそんなに使えるわけではない

だろうに、その気丈さにナンテスははつとさせられた。手は多少震えていても、ナンテスを見る緑の目は震えていない。

「だからあなたはこれを。賊が狙うのは私でなくこの石でしょう。亡き祖母の形見です」

そう言つてナンテスに剣を差し出すと、彼女は胸元のネックレスをぎゅ、つと握つた。そこにあるのは、涙の形の

「5つの涙の一つですか？」

その大きさや輝きや形は、色は違えどナンテスの家にある『乙女の涙』と遜色ない。世界にそんな石はたった5つだ。

「え？ ……この石は、『太陽の欠片』と言われてますね。そう言えば、他にも涙型の美しい宝石があると聞いたことがありますわ。ひよつとしてそのことかしら」

その美しいシエリーカラーのインペリアル・トパーズは、確かに斜陽の光を封じ込めたように煌いていた。古代、太陽神の光を受けたなどといった話にも確かに頷けるとナンテスは思った。

「そう、別名を、『ノームの涙』というのです」

「ノームの、涙？」

「ええ。とても大切な石です」

ナンテスは頷いた。それと同時に、ぴりぴりとした痛みが、頂点に達した。

「よかつた、やっぱり間違つてないのね」

まるで先ほどから居たかのようなだった。それくらい自然に、けれど唐突にそこに少女は現れた。

身に着ている淡い青の服のためにどこか希薄に感じられる外見を裏切つて、酷く痛い刺さるような邪気を纏いながら、彼女はそこに立っていた。まるでその存在そのものが歪んでいるような奇妙さを彼女から感じて、ローズ嬢とナンテスは思わず身を引いた。

間違いなく、ナンテスが屋敷に入ったときから感じている気配は

彼女のものだ。そう断じて、ナンテスはローズ嬢を後ろに庇い、剣を抜く。ローズ嬢は多少抵抗したがそれに構っている場合ではない。

「君は誰だい？」

「知る必要があるのかしら」

問いに答える少女はどこまでも無表情だ。その目は酷く、澱んでいる。けれどローズ嬢は、ナンテスの後ろから彼女を見ていて、どこか悲しい目だ、と思った。

「ああ、知りたいからね。だって君はとてもおかしい。何かが狂っている。まるで無理やりそこに居るような、君の存在に似たものを僕は一つしか知らない」

「何と、似ているの？」

居ないはずなのに。今は、日も高いのに。

「闇、にとっても似ている」

そう言うと、少女は顔を歪めた。

「君の正体は、なんだ？闇ならなぜ昼に、竜の結界に阻まれずここに居る？」

「なにも、分からない……」

少女は、しばらく俯いていた。戸惑うように。しかし、次に顔を上げたときには、再び澱んだ目のまま、しかし真っ直ぐにローズ嬢の胸元の宝石を眺めやった。

「私分かっているのは、私という存在はその石を求めていることだけ」

「鍵を、開けるつもりか？」

闇が鍵など開けようものなら。いや、そんなことをやらせるわけには行かない、とナンテスは眼前の少女を睨んだ。少女は動じない。

「……どいて、別にあなたを傷つけたいとは思わない。石を渡してくれたら何もしないでここから去るわ」

石を渡すわけにはいかない。そして、人ならざる存在なら斬ることには迷いはない。

「断ろう。石はいずれ王に渡ると定められているんだよ。彼が求めたときにないのは困るからね」

一流宝石店の長男としては譲れない。石の定めを知るもの一人として、彼は少女を遮った。

「残念だわ」

少女が手を掲げた。

次瞬襲いかかってきた黒いものを、ナンテスが普段の彼からは想像もつかない俊敏さで、ローズ嬢を抱えてすばやく避けてみせた。彼女をすぐに下ろすと、ナンテスは言った。

「ローズ嬢、ここから逃げて」

「……分かりましたわ」

足手まといになるとすぐに判断したのだろう、ローズ嬢はドレスの裾を抱えながら、ドアに向かって走った。

「だめ」

ドアの前いっばいに、触れることを忌避したくなるような暗闇が広がった。

「その石を渡して？」

ナンテスは助けようとしたが、彼の目の前から数頭の闇の獣が襲いかかってきて、それに足止めを食らう。

ローズ嬢は少女と対峙して首を振った。

「……大切なものと、聞きましたわ」

「命よりも？」

短刀を構えるも、手つきが少々危なっかしいローズ嬢が後ずさる。しかし、後ろにあるのは、闇だ。どこまでも深い

「待て!!」

現れた闇の獣を全て払いきったナンテスは少女に向かって剣を払った。ローズ嬢に近寄っていかうとした少女を、豪快に尻ぐように一閃する剣が裁断してしまっただかに見えた。しかし。

「……やはり、闇か」

「少しは術力があるのかしら」

服が裂けその下に薄く斜めに傷が走ったものの、避けようともしなかった少女の体は無事だ。弱い術力であってもそれをうまく通わせた剣を使い、数頭の屍鬼程度なら屠る力があつたために、ナンテスは知った。彼女が闇とすると相当強い、と。

「分かったでしょう、あなたでは敵わない。相手がチットならあなたでも少し戦えたかもしれないけど……」

「チット？」

「……なんでもないわ。ほら、早く渡して。そうしたら大人しく去るから。そうじゃなきゃ」

「！」

「ナンテスさん!？」

ナンテスの首筋に、艶やかな黒の鎌がかかる。

「首を取るわ」

ローズ嬢と目があって、ナンテスは首を横に振った。そして彼は、この状態では役に立たない剣に術力をいっぱいこめてドアに投げた。闇が裂かれる。

「逃げる！」

一瞬間の避けたほうを見て、それでもローズ嬢は留まった。

「命より大切なものなんてありませんわ」

そう言っつて、彼女はネックレスを首から外す。

「どうか彼を放してあげてくださいませ」

すると、少女はそのとおり鎌を消して、ローズ嬢のほうに寄っていった。

「これを、差し上げますわ」

受け取ると、少女はふわりと消えた。

「ナンテスさん、大丈夫ですか？」

「僕は、大丈夫だけど石が」

ナンテスは酷く悔しそうに目を瞑った。あの為なら命を懸け守るべきだったのに。父がこの場に居てもそうしたらう。

「ごめんなさい」

彼女が謝ることはない、とナンテスは思うのに、ローズ嬢は潔く頭を下げてくる。

「あなたは武器を捨てて、命を懸けてまでこの石を守ろうとしたのに」

「……いえ、ローズ嬢。むしろ私が守るといいながらあなたの身を危険にさらしてしまいましたね。怖い思いをなさったでしょうに、あなたは一度あの少女に向かって拒否してみせた。強い方だ。……」

何よりあなたは私の命を優先してくれたんですから。ありがとう」

そう言っつてナンテスが苦笑すると、ローズ嬢は少し頬を赤らめた。

「？」

「な、なんでもありません。とりあえず、屋敷の様子を見なくては」

「ああ、私も行きます」

2人は今は暗闇のなくなったドアへ向かって歩き出した。

### 34・それぞれの断章(1)

「ギルうううううう!!」

相変わらず薄汚れている宿屋で、剣で裂かれた服を少女が着替え終わると、騒がしい青年が帰ってきた。

「ごめん、オレ1つ石取りそびれちゃった!! 本当ごめん、あんな格好付けてたのに恥ずかしい! もう何度罵ってくれても蹴り倒してくれてもいいからオレを嫌いにならないで、」

「……チット、怪我してる」

少女の手が青年の頬に伸びる。と、青年はぴたりと止まった。照れている。

「いやあ、全然平気だって……ってギル?」

少女は目を瞑って力をこめる。青年の頬にあった薄い傷が、塞がった。青年の体全体にあった怪我が、治りまではせずとも出血を止めていく。

「ごめん、これしか、できない」

それだけで憔悴してしまったように、少女は手近な椅子に倒れこんだ。

「……ねえギル、俺のために無理なんかしないでいいの。それは俺の役目だよ」

「でも」

青年の肌は傷だらけだ。剣によって受けたらしい傷もある。

「これ全然深くないからだいじょうぶ。あゝ、やっぱりギルはちゃんと盗ってきてるし」

机の上に無造作に置かれたネックレスに嵌ったトパーズを見て、青年は、がっくりと落ち込んでいた。

「……チットも、1つ盗って来たでしょう?」

少女は古文書を取り出し、しばらく眺めてそう言った。古文書に



求める宝石の在り処を問うように念じると、その石のある場所の情景が頭に浮かぶ。持ち主がいるならば、それも見える。だから少女には今、チットが一つ石を持っている事が分かっていた。

「まあそうだけどさあ」

そう言いながら、青年は懐から透明な石を取り出した。

「『北風の吐息』」

別名、シルフの涙。それは、硬度は低いが大変希少で、さらに全く混じりけのない無色透明のこれだけの大粒となるとなかなかお目にかかれないような雫形のハンベルジャイトだった。窓から注ぐ月光を静かに照り返して、宝石はどこか冷たく煌いていた。

「でもわざわざ行くからにはもう一つも欲しかったな。あれ青かったし、あつちをギルにあげたかった。ごめんね、後できっと王様から奪って見せる。でもまあ、とりあえず、お一つどうぞ」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

青年はにっこり笑う。宝石店で彼が見せていたのとはまったく違う笑顔で。

「……チット。傷、誰にやられたの？」

そう少女が尋ねると、存外あっさりとした答えが返ってきた。

「一人は宝石店でフィーって女の子にやられちゃった。……あの子の力はちよつと面白かったなあ」

「面白い？」

「うん、というか、おかしい、かな。竜細工師であることを考えても、あれはとつても変だよ。暴発して危ないから諦めたけど、あれ、実験体に欲しいな」

青年が何を見たか、たぶん聞いても少女には分からない、とそんな気がしたので、彼女はもう一つ尋ねた。

「剣で出来た傷の方は？」

彼が相当腕が立つことを知っている少女は、不思議そうな顔をし

た。

「あ、こっちは城で。なんか、デスクワークが向いてそんなモノク  
ルかけたお兄さんが、意外と腕が立ってき。もく、しつこかったの  
なんのつて。ちよつと魔力尽きかかってたから、消えるわけにも行  
かないし、撒くのに苦労した」

「……クエイン」

「ん？」

「なんでも、ない」

ギルの頭の中に、たまにわけも分からず、単語が浮かんでくるこ  
とがある。でも、それに何の意味があるだろうとギルは思う。

そんな彼女にチットは静かに言った。

「ギル、何も分からなくつてもさ、」

「うん」

「オレのこと一つ覚えてくれてたらいいよ、そしたら全部またオレ  
が教えてあげる」

「……うん」

なぜこんなに青年がよくしてくれるのか、少女にはよく分からな  
い。ただとても感謝している。

「ギル大好き」

彼女はせめてお礼を言おうとしたが、椅子にもたれかかっている  
彼女に脈絡もなく飛びついてきた青年に、ぎゅうと抱きしめられて  
どうしてよいのか分からなくなった。

「チット」

けれどしばらくしてそつと呼びかけると、青年はそのまま眠って  
しまっていた。

どうやら今日はもう、残り一つの宝石を盗りに行くのは無理そうだ  
った。2人とも、かなりの力を使っていたから。

それより少し前のこと。

「そこをどいて！」

「ああ、すまない」

道を駆け行く伶俐な美貌に、人々は自ずと引いていた。押しつけられてヴィーも一瞬素直にどころとした。しかし。

「……ちよつと待て」

モノクルをしていなかったの一瞬分からなかったが、それは見知った顔だった。そのため反射的にヴィーはその人物の手を掴んでいた。

「何を……王？ ……ああっ!？」

つかまれた手を振り払おうとした男は怒ったようにそれを振り払おうとし、次の瞬間ヴィーの顔を見て驚きの声を上げ、最後には目指す方向を向いて絶望的な顔をした。

「クエイン、どうしたんだ」

間違いなくそれはヴィーの補佐その人である。

「まったくあなたって人は、変なところで臆病者で卑怯者で、力馬鹿の戦闘狂のうえ色狂い、しまいには仕事は常に人に任せっぱなしのサボり魔、そんな人間だとは知っていましたよ。けれどそれで飽き足らず、さらに悪いことには急ぎ道に行く他者の状況も掴めない鈍感野郎であったとは」

「つい反射的にな……すまない」

王が素直に謝るので、氣勢が殺がれたかクエインは一瞬黙った。その後続けた。

「今、王様のお陰で、追跡に失敗したんですよ……」

「追跡？」

「あなたに言われて厳戒態勢をしいていたにも関わらず、どう強力

な結界を破ったのか知りませんが城の宝物庫に侵入者が入ってですね。当然言われたように王冠を守ろうとするじゃないですか、そうしたら宝石を持っていかれてしまったんです」

「……王城は王都の東の端。帰ったら調べてみる予定だったが手遅れだったか」

「どうしたんですか？」

「いや、ちよつとな。」

「……そもそも俺があんな単純なことを思いつかなかったのが悪い。いや、責めるべきは狸か？」

灯台下暗しとはこのことだ、とヴィーは落ち込んだ。いや、念のため一応城は探したがその時には『5つの涙』の影すら見当たらなかったことから、どこかに隠されてあったのかもしれない。彼を慰めることもなく、クエインはさつさと先を続けた。

「よく分かりませんが、ともかく王冠は守り通しました。それで、退却する敵を追ってここまで来たんですが、今あなたに中断されて見失いました」

「賊は消えずに足で逃げた？」

「ええ。そうでなければここまで追って来ませんよ」

「……盗人の髪の色と瞳は」

「あまり見かけない赤と緑、でしたかね。あなたが前に古文書を盗まれたといった男の特徴その通りでしたよ」

「同一人物、か。ならば恐らく結界を破ったのは魔法で、結界を破るために一時的に力が尽きたのかもしれない」

そのために消えて逃げる事が出来なかったのだろう。

「敵は魔法使い、ですか？」

「そうらしい。1つ石を盗られてしまったか……盗人は、チットという名だと聞いた。今日宝石店にも押し入って、魔法を使って見せたという。まったく厄介だ。この国に魔法使いが現れるとはな。」

……奴の背後にどこぞの国が関係していないといいんだが。もしそうだとすると、魔法を使う者の住まう国というところ多くはないが、

わざわざ外交問題に発展させたくはない。……しかし今、この国に喧嘩など仕掛けてくる愚か者などいるかな？」

「さあ、人間は実際に痛い目を見ないと学ばないものですから。アラスカシア王のような例もありますし。……魔法国家といえば、大体3国くらいでしょうか」

ジルファレス公国、ワリヤ・ファルジア連合、サセイク王国。それらが主に魔法国家とされるところだ。盗人に彼らが関わっているかは考えても今の段階ではよく分からない。

どこの国であれ、この国を乗っ取るうとする理由ならいくらでも挙げられた。うまくいけば竜の力を得ることができる上、宝石の国とも呼ばれるこのイオナイア王国は鉱物資源も豊富であり、国の位置する場所も海が近く、大国に囲まれて交易にはもってこいな環境であること。また、基本的に術師と魔法使いの仲は悪いことも挙げられる。しかし、竜の加護を得るほどの男が統治し、さらに竜の結界の敷かれたこの国に攻撃でも仕掛けようものならどういう目にあうか。過去の侵略の数々をかすり傷すらほとんど負うことなく防いで見せた、この国の歴史を見れば分かるうというものである。

「まあそれはさておき、石は手に入ったのですか？」

「ああ。2つ貰った。あと、賊が奪ったのも入れて残り3つか。」  
「今日だけで2つですか。神官長の言ったとおり、石を手に入れるのは難しいことではなかったみたいですね。問題は、盗人の存在ですか……しかしこの際、チットとやらを放っておけば、彼が再び冠を奪いに来たときに宝石も全部揃うことになるのでは？ 彼が残りの宝石を勝手に集めて来てくれるでしょう」

「いや。それも一つの手ではあるんだが、放っておくのは無理だな。狸爺のところにも石が一つあるらしいし、チットはどうやら殺しを厭わない男らしいから、死人がでかねない」

それは避けなければならぬだろう。

「王」

「なんだ？」

「出会い頭に思ったんですが、こんな状況なのに貴方はやけに機嫌がいいですよね？　なんだか素直で気味が悪い」

「……そうか？」

「そうですよ」

自分は機嫌がいいだろうか、とヴィーは自らの心に尋ねてみた。そこにあるのは、どこか温かな感情。その源は、自分の手を震えながらもすっかり掴んだ女性にしては固めな手の感触の記憶。小さい手だ、と思った。細工を作る彼女の手はとても大きく見えるのに。華奢な肩、細い手足。決して豊満とはいえない体。それがよく分かるような薄着をし、鼻の頭には絆創膏を張った彼女が、やけに幼く可愛らしく感じた。

「思い出し笑いをしないでください、なんなんですかまったく」

「仕える相手が幸福なことを喜んでくれ」

「幸福？　あなたが何かしら色めいた出来事に出会っている間奔走を続けた自分がなにやら阿呆らしくって悲しくなりますよ」

怒られた。

……フィー、か。彼女に約束したのだから、また会うためにも全ての宝石を手に入れなければならぬ、とヴィーは思った。

「それにしてもクェイン、怪我は……。愚問だな」

防衛の術に関しては、この男の右に出るものはそうはいないとヴィーは知っていた。さらに剣の腕は、神殿騎士内ではヴィーに次いでよかった。敵にすると面倒な男である。傷を負わせにくいからだ。「ご心配に及びません。それより疲労のほうが酷いです。あの男やけに逃げ足が速くって、そのせいで久しぶりに随分走らされましたよ。もう動きたくありません」

「……なるほど、運動不足というわけだな。ならばそれを解消させるのもってこいな話があるぞ、クエイン」

「……聞いていましたか、動きたくないとは私に言ったはず。あなたは鬼ですか？こんなにはぼろぼろの人間には労いの言葉をかけて労わり、早々に今日の仕事は休ませて家に帰すべきと思いますが」

「ぼろ雑巾というのは汚れ仕事をやるものだろう？ ドアが吹っ飛ばされてしまった宝石店に行って、掃除を手伝って結界をかけてやって来てくれ。あれじゃあ泥棒が入り放題だ。俺が一応かけておいたが、あまり結界を張るのは得意じゃないものでな」

「……分かりました」

正直賊を取り逃したのは、ヴィーが悪い。だがそもそも城で賊を捕まえそびれて宝石を奪われてしまったことにクエインは責任を感じているのだろう。彼はひとつ溜息をつく、宝石店の大体の場所を聞いてそちらへ向かっていった。

「悪いな、クエイン……さて、俺は狸のところに行くか」

奪い合いであるからには、行くのが早いに越したことはない。クエインを見送ると、ヴィーは王都の中心へと向かった。

### 35・それぞれの断章(2)

「相変わらず無駄にでかいな」

ヴィーは神殿を仰ぎ見て溜息をついた。長い階段の先にありながらなお巨大に見える建物。階段といえば神殿騎士時代には何遍も上り下りしたものだ。城といい、神殿といい、騎士の足を鍛えるために高台にあるのではと勘繰りたくなる。

神殿が高めの位置にあるのは国民を睥睨するためではなく、単純に天空に暮らす神たる竜イオナイアにより近い位置で祈り、祀るためである。大きさに関しては寄宿舎などを含めると城と同等の大きさはあるだろうか。これは竜の巨大さを模している、とされる。本物はこれよりさらにでかかった、とヴィーは思い出していた。山のように巨大なあれと本当に同じ大きさに作っていたなら狂気の沙汰だ。

人の想像など及ばぬ古代文明の手になるこの場所は、観光名所としてなかなか有名だ。石造りの神殿が月の光を照り返す様はなるほど圧巻だった。

もう、日も暮れてしまったな、と呟きながらヴィーは自分が求める石について考えた。

とりあえずヴィーが持っているもの以外で、『5つの涙』のうち今からチットに奪われる可能性があるのは2つ。北にあるであろう黄色の宝石と、中央にある緑の宝石。チットにもし仲間がいれば、いずれかあるいは両方が無くなっている可能性があるが、北はどこに石があるかはつきりとわからないのだからとりあえず神官長の元へと赴くのが正しいだろう。彼なら残り一つの場所を知っている可能性もあった。容易に口を割るかは甚だ疑問だが。

やれやれと思いつながら階段を上るヴィーに、ぶつかる影があった。神殿に不似合いな肌の露出も激しい美女だった。開催間近となった



収穫祭の相談にでも来ていたのだろうか。軽く謝罪し、構わず進もうとしたすれ違いざま、彼女の持つ鮮やかな色をした、ごてごてした鞆にヴィーの髪がひっかかってしまう。

「ああ！ すみません…」

「いや、大丈夫だ。こちらこそすまないな」

急いでいると思わず前方不注意になりがちな自分に苦笑しつつ、ヴィーは階段を上り続けた。

月を眺めていた。今夜はやけに冷える。そろそろ秋も訪れようかという季節なので、当然とも言えた。

神官長という地位について、何十年たったのだろうか。随分と早かったような気もするし、まったく長くてやりきれないと思うときもあった。その間、娘と孫を一人ずつ亡くした。月を眺めていると、空へ魂を返したのだろう、彼女らのことを思わずにはいられない。いずれもこの地位の後継者たる力を持ちながら死んだのだ。年寄りの自分が彼女達より長く生きているということを見ると、巡り会わせというのは分らないものよな、と思う。美しく死ぬのではなく、皺皺になるまで生きて欲しかった。自分の見れない未来を見、その先へと命を繋ぐのも当たり前前に思っていた。

けれど、今となってはこうして神官長室から月を眺めるのも一人きりである。

「憎まれっ子世に憚るってところでしょっかね」

「爺さん、独り言か？」

「ヴィー。…思ったよりも早かったですね？」

老人は部屋の入り口に立った背の高い青年を眺める。もう一人の孫だ。

彼の父の若い頃によく似ている。娘を攫っていった憎い男に。孫が可愛いと思う気持ちはあるが、思わず意地悪を試してみたくなる。「いつ泣きついてくるのかとわくわくしていたところですよ。古文書についてですか？」

「……いや、古文書のことは分かったよ」

「おや」

だれぞ孫に親切にも教えたのだろうか。……面倒なことになった。

「さあ、さっさとお前の持つ最後の『5つの涙』を寄越せ」

「……いいでしょう」

神官長が首にかけていたネックレスについていた石を渡すと、確かに、と言って彼は受け取った。

宝石の女王と呼ばれるエメラルドのティア・ドロップ。草木の色を髣髴とさせる深い緑と月光を鋭く跳ね返す光沢を持っていた。光に透かして中に内包物が見られるのは天然の宝石である証でもある。

「『ユグドラシルの葉』、か。なるほど、美しいな」

「そうですね」

「くれたことに感謝するよ。ではな」

身を翻した男の手によって、パタリ、と扉が閉じられる。

「……呆気ない」

ぼそり、と神官長は呟いた。

その、数分後。

ギヤアアアアアアアアアアアア……！！

先ほど神官長室を去った者の悲鳴が部屋まで聞こえてくるのを、老人は泰然と聞いていた。

「ヴィーは私に爺さん、なんて言ってくれませんか、偽者さん」

……ノックの音がする。神官長はおもむろに立ち上がった。

「どなたですか」

「俺だ、さっさと開ける狸爺」

「悪魔ではないですか」

「？」

扉の向こうで戸惑う様子が伝わって、神官長たる老人は笑った。

「……我が孫ヴィエロアたる証明をしていただきましようか」

「なんだ、新手の苛めか？ お前笑ってるだろう。…そうだな、俺はやっぱりあんたが大っ嫌いだ」

「はっはっは。よく言ったものですな、入りなさい」

老人はドアを開く。

「何事だ？ ……先ほどの悲鳴は？」

「ヴィー、あなたは屍鬼ばかりでなく他の魔と魔法使いについても学ぶべきですね。彼らの中にはあなたの髪1本からあなたの短期的な記憶の情報を得て、しかも化けてしまうような厄介な者もいるのですから」

「…俺の偽者、か…やったのか？」

「ええ、なかなか見事に化けた悪魔でしたが、エメラルドの真贋を見分ける目も無く豪快に吹っ飛んでくれたみたいですねえ。この間エルフランド工房で頂いてきた術具は実によく出来ていたようです」

悪魔に隙を疲れるとは不注意に過ぎますな、と神官長に罵られ、あの女か、と階段ですれ違った美女を思い出してヴィーは溜息をついた。

「戦場を離れて以来、どうにも気が鈍っていけないな。…それにし

ても、むしろお前が悪魔のように思えるな。どうせ表情も変えずに悪魔に應對して騙したのだろう？」

「聖人君子の最たる私に向かって何たる言い草」

神官長は惚けた顔であしらった。

「否定はしないんだな、相変わらずだ」

「……まったく、そもそもあなたが結界くらい軽くここに張ってくれば不躰者と無縁にいられるのに。闇のための結界すら潜り抜けてやってくるのはよっぽど高位の魔です」

「お前なら何が来ようがなんともないと分かっていたからな。魔など軽く払えない人ならばこの俺がお前を狸と認めるわけがない」

ヴィーはまったく心配する様子ではなかった。むしろどこか腹立たしいという顔で、彼は祖父を見つめた。

「あまり動じていないのはこうした動きがあると知っていたからか」  
冠の鍵を開けるのに関わる宝石を奪うような動きを、魔や、この間のチットと言う魔法使いが見せることを、この老人は知っていたに違いないという確信を持って、ヴィーは神官長を睨む。

「そう、怒らないで欲しいですな。確証があつたわけではない」

「だがお前は竜と通じているのだろう？ ご神託とやらで何か言われていたのじゃないか」

「……とりあえず、石はあなたに渡しましょう」

再び、老人は首から一つネックレスを取り出した。その先に嵌るのは、

「メノウ、か」

立て続けに貴石が続いたのに半貴石である。意外な思いでヴィーはそれを眺めた。ぬめりとした、深い深い緑の石。例にもれず涙の形を取っている。ふとその色から思い出すのは、1度だけ訪れた、竜の下るといふ地を囲んだ森の色。

「新緑というより、随分と年季が入った緑の色だな」

そう言ってヴィーが石を見つめていると、神官長が静かに語った。

「…その瑪瑙は木が宝石となったものが元なのです。珪化木をご存知かな？ 大昔に存在した木が、河川に沈む中で腐ることなく土砂に埋もれ、やがて噴火した火山の灰の体積からその細胞に宝石の元となる成分を取り込んで、長い年月をかけて化石となった…このメノウだけでない、中には水晶やアメジストなどの宝石となるものもある。木という存在は、その寿命の長さから神代から存在するイオニアが最も好む友人ですから、我らが神たる竜はこの石を選んだのやも知れませんか」

「他の石も、4大精霊が選んだものなのか」

ヴィーはそれぞれについた名前を思い出していた。ウンディーネの涙、火蜥蜴の涙…。残りはおそらく、ノーム、そしてシルフのものであろう。

「そう、彼らが殊更に好む石。それを遥かな昔、契約主との誓いをかわす証として彼らは選んだ」

「…契約、ね。少なくとも竜との契約はもう済ませたと思ったがな。なあ、神と通じる神官長、イオニアは俺に何を望んでいる？ なぜ魔や魔法使いが動き出す？」

神官長はそつと窓の外を見やった。相変わらず月は遠い。祭りの日を控えて、満月に近くなつたその放つ光は、しかしどこか不吉な赤い色を含んでいる。それが意味することは。

「…ヴィエロア。あなたが望むと望まぬに関わらず、世界はすでに動き始めている」

いずれの時代はこうなると分かっているにしても、それが彼と関わりのない場所で起こることならよかつたのに、と神官長は思った。冠が汚されたことが発端だ。英雄が結んだ竜との契約は一度破棄された。

そのために新たな王が新たな契約を元に立ったこと。彼が、選択を迫られること。他の者にとっては今このときこそが機会となりうること。

「世界？ 何だというんだ、一体」

「早々に、石を取り返すことです。さもなくば」

神官長は首を振って先を濁した。

そうしてしばらく、何かを問うような沈黙が続いた。やがて青年の方がそれを破った。

深い溜息でもって。

「…早々に石を取り返せ？ ならば最初から古文書の説明をしると言うんだ」

ヴィーは呆れたように言った。昔から、直裁に物を言わない神官長を問い詰めるのは馬鹿げていると知っている。そしてその要因は。

「お前は世界が関わってなお、俺をからかったり苛めたりすることが重要なのか」

「勿論です」

その老人とは思えないほどに若く生き生きとした笑顔を見て、ヴィーは悟った。おそらくこの狸爺に、北にあるという黄色の石の在り処を尋ねようと、冠にまつわる真意を尋ねようと、捗捗しい答えは返らないのだと。そして、この老人は当分誰が殺そうとしても死なないだろう、とも。

「…帰る」

「おや、聞きたいことも多いでしょうにお帰りですか」

「お前が答えないだろうことはよく分かった。石は貰っていくから

な

「礼の一つ寄越さないとは…誰がこんな子に育てたのでしょうか」

「全部お前のせいだと思っただいぞ」

そう応じると、ヴィーは扉に向かって行った。それを少し寂しげに見守っていた神官長だったが、

「ち、少しは心配してやって来て損をした」

去り際の青年の、小さな声で落とされた独り言を、その地獄耳で耳にして老人は微笑を浮かべた。

「やはり本物の孫はいいものです」

今日彼の孫は、どことなく機嫌がよさそうだった気がした。

ヴィーが気になる女性と言っていた、あの娘のことと関わりがあるだろうか。

神官長は思い出す。戴冠式の日飛び込んできた少年のような風貌の天才細工師のことを。その薄茶の髪は老人の亡き孫と重ねられて、彼は賭けてみた。だから少女を戴冠式でヴィーの元へ乗り込んで来るところに居させてやった。ヴィーはこの少女に取っ掛かりを覚えるに違いないと思ったから。その後、王と細工師、あの二人が傷つけあうにしろ、恋をするにしろ、それによってヴィエロアが冠に真に興味を抱くかどうかは分からなかったが…。

結局、今は竜の思惑通りに事は進んでいるが、神官長たる彼は自覚しているほどにひねくれている為に、神託を賜ろうが、別に進んで竜に協力をしたわけでもない。となると。

「こつという言葉は嫌いですが全ての出来事は、運命、なのでしょかね、イオナイア」

空の向こうに、竜は今日も居るだろうか。  
ふとそれが笑った気がした。確かに聞こえた。

「しかし、物事というのは最後までどうなるか分からないもので  
すよ」

そう、神官長が呟くと、笑い声がやんだ。

ひねくれ者め

「光栄ですな」

老人は笑った。神の思惑に逆らうのも人間ならではのあつと彼は思っている。

…この国の神官長の地位についている男はとんだ不信心者であると国民はあまり知らない。



### 36・それぞれの断章(3)

ヴィーが去ってから、フィーへのお見舞いが立て続けにあった。工房の職人や近所の人々がやがやと彼女を取り囲み、その回復を願う声をかけては果物や花を置いて帰っていく。

そうして夜も更け、彼女の見舞いに来ていた最後の人が帰った頃。月明かりに照らされた部屋で、僕はフィーに薬草茶を入れていた。シライはもう眠ってしまったている。

「……そんなに重症でもないんだけど」

失血で立ち上がるのも辛いほどの怪我を負ったくせに、フィーはそんなことをぼつりと呟いた。彼女は昔からこんなところがある。体の傷にあまり頓着しない。

「フィー、もうちょっと自分の体を大事にして」

「大事にしているさ。だがな、実際どう動いたか記憶にはないが、『乙女の涙』と自分の命を比べたとき私はあの石をとるといのは分かる。そして自分はよくやったと思う」

「そうだけど……」

よくやったとは思う。でもあんなものためにその命を懸けることはしないで欲しい。

「王にとってあれがどんな意味を持つが、どんなに美しかろうが、あんなのはただの石ころだよ、フィー」

「でも」

反論しようとする彼女を抑えるように、そっとその頭を撫でた。くすぐったそうにフィーは身をよじる。うん、頭に傷は無さそうだと少し安心をした。

「あれはただの石だよ。フィーの命に比べたら」

「ロイは……大馬鹿だな、本当私に甘い……」  
ゆつたりと彼女の頭の上の指を動かして、髪をすくようにして撫で続ける内に、彼女は眠そうな顔をした。そのまま、だんだんとうとうととしてくる。……薬草茶に入れておいた睡眠薬が効いてきたようだ。これで、悪夢を見ることなく眠られるならそれでいい。  
今日の出来事のために、今日の夢の中で彼女の昔の記憶が蘇らないとも限らないから入れた薬に感謝する。

僕とヴィーは、彼女の力の暴発の一件を賊のせいにして、本当に起きたことをフィーには黙っておくことにした。ヴィーもあんなことを言っていたけれど、彼にしる彼女を積極的に傷つけないわけじゃない。だからこそ、彼はそれに同意したのだから。

……それでも今日彼が彼女に迫ったときはどうしてやろうかと思っただけだ。

フィーはやがてすやすやと眠りに落ちた。あどけない顔をして、無防備に。……確かな理性はあるけれど、ヴィーの悪戯心が理解できないわけではない。

「おやすみ、僕の至上の人」

顔にかかった薄茶の髪をそっと払いのけ、額に一つ口付けを落とした。

がしゃん

……なんだろう？

物音に振り向くと、店子のレオナがいた。足元には鉢が割れた鉢

植えの無残な姿。

「ふ、不純」

「ちよつと……」

レオナは泣きながら走り去ってしまった。そういえば。

「彼女はフィーが好きなんだっけ……」

工房内では有名な話である。フィーは気づいているのかいないのか、レオナにはやけにそっけない態度をとる。鈍感なフィーのことだ、多分気づいていないのだろうけど。

駆け去ったレオナは、こんな夜更けにわざわざフィーを心配したために見舞いに来たのだろう。ナンテスの父親の宝石店のことは大変な騒ぎだったから。……どう言い訳をするか。思わずとってしまった自分の行動に後悔はないが苦笑する。口止めをしないと、後でばれたときフィーに怒られるのが想像できて、僕は彼女の後を追った。

ロイさんが、フィーをやけに気にかけているのは知っていた。フィーが売り物の術具をしょっちゅう持ち出そうと一応元には戻すから、と言つて看過していたし、彼が風邪を引いたとあればロイさんは工房を休んで付きっ切りで看病していたし、相当手に入るのが困難な宝石を金額など厭わず買い求めては貰ったものなどと言って宝石大好きなフィーにあげたりするのは知っていた。かなりの兄馬鹿だとずっと思っていた。思っていたけれど……

「まさか恋敵だったなんて……」

知らなかった。でもこれでようやく、ロイさんがあの豊満な美女

のビスクさんの度重なる誘惑を軽く受け流していたわけが分かった。彼はきつと女性に興味がないのだ。誰もいなくなった工房で私は存分に叫んだ。ここなら防音もされていると知っていたから。

「しかも私のフィーに口付けまでして！ あんな甘い台詞を囁いて！ 寝ているけが人になんて無体な！！」

「……後半は否定できないけど、フィーはレオナのものじゃないよ」「でもロイさんのものでもありません！」

私は音も無く現れた人をき、と睨みつけた。

「知ってる」

扉を開けて中に入り、壁にもたげて憂いを持って微笑む彼は、さながら月の女神のように美しい。この水色の瞳に酔うのは女ばかりでないを知っている。都の中には、彼の熱烈な崇拝者の男が幾人もいるらしい……これは、勝てないんじゃない。男であっても、フィーもころっと彼の魅力に墮ちてしまう、そんな気がした。

いや、弱気は恋に禁物だ。私は心に喝を入れた。

「ロイさんがフィーが大好きだって言うのはよく分かりました。あんなに切ない目をして彼を見つめるんだもの……別に同性愛だって非難しません。さつきはちょっと驚いただけ。でも、私にだって、フィーは至上の人なんです」

じつとロイさんを見つめる。彼はどことなく、複雑な顔をしていたが構わず続ける。

「負けませんから！」

こうなればうかうかしていられない。フィーに告白あるのみだ。

私は決意を胸に秘め、呆気にとられた風のロイさんを置いて工房を後にした。

### 37・それぞれの断章(4)

満月の頃、その年の収穫を祝って国は1週間のお祭りに入る。この収穫祭は別名竜神祭とも呼ばれ、イオナイア王国の名物でもある。10年ぶりともなる今年は、国の外からの客も多いことが予想され、特に大々的に祭りを行う王都は熱気に溢れていた。殆ど民意で行われるものであり、王側としては協力をするものの主催ではない。1日目を控えた前夜祭の準備で、都は朝から大騒ぎだ。高台にある城まで声が届くほどに。

そう、実に楽しそうで。

「……それどころでない自分が悲しいな」

ヴィーは溜息をついた。

「王、公爵家のヒューモンド家から公爵自身がいらっしやいました」

「ああ、分かった今行く」

重い腰を持ち上げて立ち上り、謁見の間に向かう。

この前神殿から城に帰ってくると、ヒューモンド公爵のご令嬢がナンテスという男を連れてヴィーを待っていた。この時間に現れたということも、彼らの思いつめたような目にも、嫌な予感がした。そして、案の定、その口から聞かされた事実は国の安全への自信を揺るがすほどのもので。

闇が現れたのです

しかも『5つの涙』のうちの一つの『ノームの涙』を闇が奪っていったのだとそう告げられた。闇は一見普通の少女のように見えたという。

人型の闇などと。屍鬼に溢れた時代にすら、人型のそれに会ったのはたった2人。他の獣型に比べて段違いに強かったのをよく覚え

ている。

何が起きているのか。神殿に現れた魔といい、魔法使いといい、闇といい。

危惧する一方で膨れ上がるのは。

「王、どうしたのです？」

そこにいるのは朴訥とした顔の一人の男。知らず獰猛な笑みに上がっていた口元を元に戻し、微笑へと切り替えた。

「いえ、なんでもありませんよ。ヒューモンド公爵、お久しぶりです」

「このたびは私どもの失態、王に多大な被害を及ぼしてしまつたと存じます。『5つの涙』を賊に取られるとは」

「賊が現れた時点で私が迅速に対処をするのを怠つた故のこと。貴方を初めとしてあなたのご一族に与えた苦痛と恐怖、私の責です。

申し訳ない」

力なきものが闇に触れるのはそれだけで相当な苦痛を伴う。闇の中に滾る歪な害意と暗黒ゆえに。

「……不思議とあの石を持つものは、覚悟するものですよ。命を引き換えにしようとしてこれを守る、と」

公爵は遠い目をした。

「母はそう言っていた。最も彼女は亡くなってしまいました。私はその言葉を覚えていた。平和な御世になつたゆえ、娘にまさかあんなことが起ころうとは思いませんでした。娘は、母の言葉とは異なり、命を優先しましたが、それで本当に良かった……とこれは失言でしょうが、私はそう思う。ただ、あの石を持つことへの覚悟は我々もしていたのです。

しかし王、闇が現れたのはどういふわけでしょう。今この時は、どうやら泡沫の平和なのか」

彼はヴィーに目を向ける。

「王よ、国を守って見せてくれますか」  
「必ず」

真つ直ぐ見返すヴィーの目を見ていたヒューモンド公爵は笑った。  
「貴方が職差別などを無くすというなら、それを為した後のこととなりますね」

ヒューモンド公爵は、この国を変えていってしまおうというヴィーをあつさりと支持した一人でもある。彼は愛妻家でも知られる。  
「そうなりますね」

ヴィーは溜息をついた。

ヒューモンド公爵が去った後。

ヴィーは執務室でクエインと紅茶を飲んでいた。テーブルには、冠と、ヴィーが何度か嵌めようと試みて断念した宝石が並んでいる。それを見ていると、自然と話題はそちらへと流れた。

「チットという輩は訪れませんか。闇であるという少女も」

「ああ、どういうわけかな」

探すがどうしても見つからない。騎士達も街を日々走り回り、国民にも協力を呼びかけているが見つからない。

「王都内にいないのか。あるいは、チットという男は姿を変えている可能性もある」

「……魔法とは身体を変えることも可能なのですか」

精霊に力を借りる術では、幻術でまやかしを作れても、体そのものは変えられない。

「ああ、可能らしい……まさに、魔の法だ」

神殿に行った際、髪数本でヴィーに化けた魔のように魔法使いは身を変えられる。あれから少ない資料を漁って、魔と魔法使いについて調べたが、術師としては世の理を歪めているような印象を受ける術が多々現れた。

「では見つけるのは困難ですね」

「待つしか、ないな」

「……実は向こうが来るのを、楽しみにしているでしょう?」

クエインはどこかヴィーを非難する口調で言った。

「そうかもしれない」

聞けば一人は剣術を相当使うらしい、もう一人は闇として強いらしい。

「腕が鳴る」

そう言い笑うと、クエインは呆れた顔をした。

「一人は私が相手をしますからね」

「なんだ、お前も楽しみにしているじゃないか」

「違います、向こう見ずな貴方をこれでも察じているんです……、

『王様』」

そう、ヴィーはこの国の王である。

「……分かってている。容易には死なない」

「当たり前です。絶対に死なないください。世継ぎが生まれ、育つまでは……というか、結婚してくださいよ、さつさと。こんなときこそその女好きを發揮せずしてどうしますか。相手はいくらでもいるでしょう」

「いや、一人で十分だ」

「馬鹿ですか、保険をかけずにどうするんです」

「石頭、多妻の習慣などに本当は反対の癖に」

クエインはそういう男だ。

「これとそれとは話が別です」

目の前に置かれたのは。

「さあ、全部暗記すること」

どこかで聞いた気がする。並ぶどれも同じ顔をしているような似せ絵と文字の羅列を見て、ヴィーは顔を引きつらせた。

「待て、見合いなど」

「それも王の義務です」



「権利の方は」

「飲み食いでできていることに感謝しなさい。それだと実に収穫祭らしくていいでしょう」

「祭りは楽しむもの」

「感謝をこめて神に祈るものです」

「フィア、アイリス、リリー、レオナンデ、エリーゼ、ティリア……」

ぱらりぱらりと紙をめくっていくと現れる名前の連なりをぼんやりとヴィーは呟いてみた。なるほど、その誰しも麗しきこの国の公爵家の令嬢方や他国の姫君たちである。

「……いいですか、なにやらかの細工師を貴方は気にかけていらっしゃるようですけれど彼との間には子どもは生まれないのですからね。分かっていますか!？」

王は一瞬その言葉に噴出した。

「おいクエイン、まさかそれを懸念してこんなことを始めたのか？」

「否定は出来ません」

怪訝な顔をしているクエインはやはり気付いていないのだろう。

ならばそれでいいが何か複雑な思いはある。騙しているようです。また誤解されているようです。

「……まあいいが。心配はいらないさ」

「ならいいですねど」

そう言いながら不満げな顔をする補佐に王は笑った。

### 38・レオナの告白

いつものように店番をしていたときのことだ。

「ねえ、お嬢さん。お仕事はいつ終わるの？俺と遊びに行こうよ」

「あがるのは夜更けです。ですから今日はお付き合いできないですね」

「夜更け？それは好都合だ。じゃあ終わってからさあ、一緒に飲もう」

「疲れちゃうので無理かなあ、と」

「そんなつれないこといわずにさあ、ちょっとだけでいいから」

やんわり営業用の笑顔で断り続けているのに、しつこく食い下が  
るナンパ男に私はうんざりしていた。都の賑わいのあるところなら  
ともかく、このエルファンド工房は裏通りの寂れたところに面して  
いるのであまりこういう人は来ない。なのに今日はどういうわけか  
この調子だ。

「いい加減にしてください」

少し語気を強めて言うと、

「おっと、客にそんな態度とっていいわけ？」

にやり笑った男がにじり寄ってきて、私の腕をとってきつく掴ん  
だ。

「俺はこれでも伯爵家の長男だぜ」

こんな下品な男。伯爵？ だからって偉そうにしてんじゃないわ  
よ。

「……放して頂戴。私なんかねえ、これでも」

思わず切り返しそうになったとき。

「……あんだ、さっきから見てたけど、見る気も買う気もないだろ

う？ なら、うちでは客とは呼ばない。営業妨害だ。出て行って頂  
けますか」

高めなアルトの声が割って入った。この声は。

「フィー！ 調子は戻ったの？」

振り向けば、包帯は相変わらず巻いたままのところもあるもの  
しつかりした足取りでこちらに歩いてくるフィーの姿があった。

「まあな」

「ああ、心配したんだから。一丁前に寝込んでるんじゃないわよ、  
いい迷惑だわ」

「俺だつて不本意だつた」

ぶすりとフィーは言った。そんな様子が可愛いと思ってしまう。

「ほんとによかった、無事で」

そう言つて私が笑うと、フィーはどこか眩しそうな顔をした。

「おいおい、人前でいちやいちやしてくれるなよ。なんだお前？」

すっかり存在を忘れ去られていたナンパ男が私の手を掴んだまま、

怒鳴った。

「いちやいちや？ ただの会話だろう、何を勘違いしているんだ。

大体人に名乗りもせず名を尋ねるのか無礼者」

フィーはいつもの調子に戻つて、男を鼻で笑った。

「……ああ、教えてやるよ、ひよろい兄ちゃん。シノン伯爵の長男、  
アレキサンドラだ」

「だから？」

「はあ？ お前貴族に逆らうつていつのがどういふことか、」

「お前はガキだ」

「な」

「シノン伯爵の息子がこれとは嘆かわしいな。彼は腹黒いが礼節に  
満ち満ちた態度を損なわないし、貴族というものの脆さも理解して  
いる。なああんた、まさか女を引っ掛けるのに失敗したら、脅迫に

その地位をちらつかせるのか。報復を親に頼むのか？ 虚飾に耽るだけ耽り義務も果たさず、虎の威を借るなんとやら、情けなくはないのか」

男はぐつと詰まった。

「お前に何が」

「ああ、知らないよ。だから教えてくれ、あんたは一つでも自分の手で世に何か為したのか？ 誰に頼ることなく、その腕一つで何か得ることは出来たのか？」

「……」

「お前の生まれた血筋に与えられたものは大きい。だがその見返り分何をするのか、平民に見張られていることを忘れるな。怠っただけ、過ちを犯したぶんだけいずれは自身に返ってくるだろうよ……そんなふうには、恥じて押し黙るだけの常識があるんなら、今度女性に声をかけるのなら今はまだ素のままのあなたでぶつかることだ。力によらずにな、いい恋をしてくれ」

フィーにもはや男を馬鹿にしたような色はない。口調はそっけなくも、その鷲色の瞳は男の目を見つめて真摯だった。その目に私は見とれた。

ああ、この目が好きだ。作り途中の細工にしろ、人にしろ、真っ直ぐ見るときのフィーの目が。

いつの間にか男の手は私から離れていた。彼は悔しそうな顔をしながら黙って出て行った。

「それでできた恋人へはここで細工を買っていただきたい、ってもういないか」

笑うフィーの姿にふつ、と気が抜ける。

私は気丈にあの男に言い返そうとしたものの、やっぱり怖かったのだ。フィーが来なければどうなっていたか。

「フィー、ありが」

「お前も注意しろよ」

お礼を言おうとしたらそれを遮って、フィーは呆れたように私を見た。

「？」

「レオナ、さつき男につられて言いそうになっただろう」

ああ。思い出した、伯爵の名で私を脅そうとした男に私は。

「気をつける……フィーに昔怒られて気を使ってもこれだもん。私ってば相変わらずだね」

「……まあ、レオナは変わったと思うけれどな」

思えば昔もこんなことがあった。思わず思いのままにあらぬことをぶちまけて、厄介な事になっていたかも知れないということがあったのを思い出す。また助けられた。私は、あらためてフィーに感謝した。

「ありがとう」

「礼はいらない、この間俺の好きな花の鉢植えを持ってきてくれた礼だから」

フィーはそれだけ言うと、さっさと工房に向かおうとした。冷たくても、無愛想でも。私が例えお見舞いに行っていなくても、彼は私を助けたのだと知っている。出会ったときから誰かが困っているのを見捨てられない人だったから。

「フィー、待って!!」

そんな彼を呼び止める。決意を持って。

「なんだ？」

面倒そうな目。思わず挫けそうになるが、私は言った。

「フィー、好きです!!」

「……嘘だろ」

「本当よ」

フィーが、呆気にとられている。やってきていたお客さんや、彼を思う私の気持ちなどとつくに知っている工房の人々がひゆうひゅうと囃し立てた。フィーはそれに慌てる。

「ちよつとこつちに来て」

長めの指をしたその手に掴まれ、私は店の外に連れ出された。…そして連れてこられたのは偶然にも初めて彼と出会った路地だった。

「フィーとはここで会ったんだっけ」

辺りを見回してみる。相変わらず薄暗い。人気を避けようとする、とこの通りに不思議と出てしまうものだな、と思った。

「……フィー、いきなりでごめんね」

フィーの目に浮かぶのは戸惑い。鈍いこの人は私の気持ちをきくと知らなかったのだろう。

「……なあ、レオナ。どうして俺のことを好きだなんて思ったんだ？」

私の好きな真っ直ぐな目が、問うように向けられる。

「フィーってば、知ってたけど理屈っぽいわね。恋は突然に訪れるものよ？」

「……俺は正直、恋愛感情というものがよく分からないんだ」

だから理由が欲しいのかもしれない、とどこか自嘲気味に呟く人に、私は笑った。

「好きになったのは、出会ったときからかな」

フィーと出会った日。あの日は雪が降っていたと思う。寒くて、とても寒くて。供も連れず、家をこっそりと抜け出して私は冒険を

していた。馬車からではなくて、歩き回って眺める景色は新鮮でそれだけで懐かしかった。

浮かれていたのだと思う。

思うままに歩いて、気づけば私はまったく知らない通りに出ている。柄のあまりよりしくない、裏通りというやつだ。この辺りでは見慣れない格好をした私を見つめる目が恐ろしくつて、人気のないほうへないほうへと向かっていた。やがて、深まる雪を優しく照らしていた日も次第に傾き始めて、気ばかりが焦った。

「お姉さん」

そんな私に、声をかける少年がいる。どことなく淫らな空気を漂わせて。

「花を買いませんか？」

ふうわりといい匂いが漂ってきて、彼の手から花が差し出された。花売りの少女は知っていたけれど、これは、男娼というやつだろうか。

思わず花ごとその手を振り払う。

「やめて」

道に迷っていた苛立ちも交えて私は叫んだ。

「あんたみたいな卑しい生業の人間がいるから、王都なのにこんな薄汚れた場所が出来上がるのよ。そんなふうになをあからさまに誘って、稼いで、恥ずかしくないわけ？ あんたが私に触れるとでも思っているわけ？ 卑しい、汚らしいあんたが？」

少年は、私の軽く振るった手にすら怯えるように震えていた。寒さと受けた侮辱に頬を真っ赤にして。そこに、

「あんた、自分は綺麗なつもりか」

響いた声は目の前の少年のものではない。

「自分の力で食ってる分こいつはあんたに見下げられる覚えはないだろう、身なりのいいお嬢さん」

男性にしては低めの背に瘦躯の、まだ少年ともいえそうな人がどこからか現れそうだった。

「……自分で食べていく？ そんなこと私に許されないのよ、しょうがないじゃない!!」

私だつて無為を望んだわけではない。

私の名は、レオナンデ・ジュラン・フィーオネルという。今をときめく公爵家の長女。

……ただし妾腹の。

母がいなくなつてから引き取られた家の空気はどこまでも冷たくて、誰もが私を腫れ物のように扱った。子どものいない継母は、そもそも私など始めから存在しないと考えているようだった。唯一、初めて出会つたとき目すら合わせず彼女から貰つた言葉は今も覚えている。

「会いたくはなかったわ、あのいやらしい娼婦の娘」

反論すら出来ず立ち尽くした。そうだ、母は、確かにそうだった。

私はそれを、恥だと思つていて。

母が死んだ日にも、母と喧嘩をした。私が、学校を辞めて稼いで母をそんな仕事から足を洗わせるのだとわめいたのが原因だった。

その日の晩に客に刺されてあっけなく彼女は逝つた。

母親がそんな仕事をしているのを知つたのは私がかかなり大きくなつてからで、その日からずっと言い争っていた。彼女がその両親の借金を背負わされて娼婦の職を辞めようもなかったのだとは、彼女が亡くなった後に聞かされた。突然やつてきた、顔すら知らなかった父親によつて。なぜ母を、私達を放つておいたのかと罵つたら返つてきた答えは簡単で、母の遺書で彼は初めて私の存在を知つたの



だとそう応えた。

母が、父や彼女自身の職業のことをどう思っていたかは知らない。

ただ、元々父に頼る気はなく、私に様々なことを明かさずにいながらも、母は最後には父に私を託した。正直、私は母を憎んだ。その為に私は今まで生きてきた環境の全てを奪われたのだから。仲のよかった友達も、東向きの小さな家を中心とした、細々としてはいたけれど楽しかった日々も、終わらせなくてはならなくなった。公爵家なんて、入りたくも無かったのに。

私は籠の鳥となった。

フィーオネル一家のたった一人の長女として。

父には他に子どもができる見込みがないとされ、先祖の血にこだわる一族であった彼らとしては、私はどんなに煙たくても必要な存在だった。そのため、いずれこの家を継いで婿をとる娘としてそれなりに懇勲に私は扱われたものだった。

貴族の令嬢としてあるべき姿を叩き込まれ、0の状態から必死で身に付けた。もう帰る場所は無かったから、公爵家の娘として生きていくためにひたすらに取り組んだ。

やがてそれがようやく形になるうかという頃に状況が変わった。

理由は生まれないと言われていた、正妻の息子が生まれたこと。それからというもの、影で囁かれていた様々な雑言はあからさまに言われるようになった。今まではそれなりに声をかけてくれた父も無言となり、気づけば屋敷に私の居場所は無くなっていった。私はいずれ、確実にどこかへ嫁がせるべきよそ者となっていたのだ。

家の中ではどこでも息が詰まるようで、私はただ無為に過ごすしかなかった。今まで何を目指してきたのかももう、よく分からなかった。だから、外で居場所があるわけではないと知っていながら今

日は思い立って逃げてきたのだ。

拳句に道に迷うやら母と弟を思い出して他人に酷い難癖をつけるやら、私はどうかしている。

「なぜ泣く」

瘦躯の人が問う。なんだか疲れて、いろいろな思いが溢れた。

「なんでも、ない……私なんて、いてもいなくても同じ……そうよ、ごめんね、変な言いがかりをつけてひどいことを言っつて。私よりあなたのほうが、よっぽど価値があるんでしょうね」

私は少年の手をとって謝った。彼は17歳くらいだろうか。その手は骨ばった、けれど美しい手だった。この手の持ち主をあんなふうに罵ってしまったなんて。

「綺麗な手だね。本当にごめんなさい」

「べ、別にいいよ……」

少年はもごもと言つと、恥ずかしそうにその場を去った。

残されたのは二人。

「あんたは……？」

「これでも公爵家の娘よ、不要な存在だけど」

「なぜ不要だとそう言うんだ？」

温かくも冷たくもない、平坦な口調に乗せられて、なんとなく私は全て話していた。全て話し終わると、ふうん、と瘦躯の人は呟いた。

「その若さで随分と浮き沈みの激しい人生だな」

「全くその通りよ」

「……なあ、価値があるとか、ないとか。価値のある人間なんてそんなにいないし、気を悪くするかも分からないが例えば俺とあんた

は同等だと思つ。さっきの少年も」  
それでも。

「大抵の人には必要とされる居場所があるじゃないの」

「そうとも限らない。ないなら作れ」

「持てるとは思えない」

「……もういい、付いて来い」

「へ？」

そうやって彼に引つ張られてつれてこられたのは工房。入るとふと漂つた暖かな空気にほつとする。

「お帰り、フィー……つてその人は？」

そこでは銀の髪を一つに結つた美しい人が出迎えた。部屋の中にはどこどころキラキラとした細工物が並んでいる。思わず目が奪われる。公爵家で高価な細工は見慣れていたために、ここに並ぶものは格が高いものだというのはよく分かった。囲まれて目が回りそうなくらいだ。

そんな私を放置してフィーという人は話を進める。

「こいつはさっき拾つた」

「……で？」

「雇つて」

「は？」

思わぬ言葉に、銀の髪の人と私は声を揃えた。

「価値だのなんだの言つてないで働いてみる、好きで、無為でいるわけじゃないんだろ？」

銀髪の人に向いていたフィーは振り返つた。鳶色の目が真っ直ぐ

にこちらを向いている。

「そうだけど……。あんた私が公爵家の娘だって分かってる？」

「お前の名前は」

「レオナ」

「ロイ、この娘はレオナと言っただろうだ、暇な令嬢が店子をしてくれば、売り上げも上がるんじゃないか？」

「フィー、本気？」

「ああ」

フィーははっきり頷いた。

「レオナ、とっかかりをやるう。居場所を作ってみる」

それから屋敷をどうにか抜け出しては、工房で店子として働いている。うまく時間をとれないこともあったけれど、楽しくて。私は確かに一つの居場所を得た。

「フィーのこと、初めて会ったときに捨て猫を見つけては拾ってきたら、変な男と思った」

「……」

「でもそんなあなたが、私に居場所をくれたでしょう？私を同等と言ってくれたでしょう？嬉しかった。きっかけはそんなもので私って一途だから、それ以来フィー以外が目に入らないの。細工に一心に取り組む姿も、人に丸ごとぶつかっていく姿も、好きだよ」  
そう言って笑うと、彼はまた眩しそうにした。

「返事を頂戴」

「レオナ」

フィーは、そつと言った。

「……ごめん」

真摯な目が私を捉える。胸が痛んだ。ああ、私は振られたのだな、と思う。

「私じゃ、フィーに見合わない？」

そう言うと、フィーはゆるゆると首を振った。

「恋人として、付き合ったりは出来ないけど……俺は……ううん、私はレオナのが好きだよ」

そう言うフィーは、いつもどこか様子が違う。“私”？

「……フィー？」

「いかにも女の子らしくって、工房ではいつも澁刺としていて、レオナの家事情なんか誰にも勘付かせない。常連のお客さんもよくレオナの笑顔に励まされるって言ってたけど、私もそう。レオナ、聞いてくれる？」

「何？」

「私は女なんだ」

「え？」

「騙しててごめん」

彼の、いや彼女の浮かべる笑みは儚かった。

「こんなふうに真剣に告白されるのなんて初めてで、返してあげられるのと言ったら私の真実くらいしかない。」

……今してる、これは男装なんだ。細工師であるには、この国では女であるわけには行かなくて、私は男性が苦手で、好都合だからこんな格好をしてたんだ。けど、レオナが私を本気で好きになるなんて思ってもみなかった……さっきも一瞬黙ってようかと思った。正直に告げるべきだったのに多分気持ち悪がられたりするのが嫌だった。レオナは、私の憧れでもあったから」

私にとっての理想の女の子、とフィーは言った。

その目が嘘ではないと語っていたから信じるしかなくて、けれど

受け止められなくて。

「レオナ！」

私はその場を逃げるように去った。

混乱して、ただ走るうちにまた道に迷った。ああ、いつかを思い出す。

「なにやってるんだろう……」

自分に呆れてしまうけど、好きな人が女の子だったなんて衝撃を受けられない方がどうかしている。知らず涙まで出て来た。遣る瀬無い。でも、いきなり逃げ出すなんて、フィー、傷ついたらどうなる。あんなに儂い顔をしたフィーを初めて見たもの。

「……レオナ姉ちゃん？」

声に顔を上げると、ロイさんを小さくしたような綺麗な子。

「シライ」

「泣いてるの？」

シライまで悲しそうな顔をする。

……こうして心配してくれる誰かと出会えたのも、フィーのお陰だよ。工房で、私の恋を応援してくれた職人さんやビスクさんを出し出す。彼らも、そうだ。

「うっん、ちょっと欠伸が止まらなくなっただけ」

「ごしごし拭ううちに止まった。深呼吸をする。そして笑った。

「フィーに振られちゃった」

そう言つと、シライは小さく頷いた。

「……告白したんだね？じゃあ、フィーのこと、聞いた？」

「うん」

シライはやはり知っていたのか。ならば、ロイさんもきっと知っていて、それでフィーのことを好きなのだろう。恋に障害があるのは彼でなく私だったわけだ。

「そっか。じゃあ、傷ついたよね……」

「……わからない」

傷ついたというかショックだったというか。細い手足、男性にしては低めな背。今思えば、女性として見ると頷けるところがたくさんある。ずっとフィーだけ見ていたのに気付かずになっていた自分が滑稽ですらある。

「ねえ、フィーはレオナ姉ちゃんに特別そっけなかったじゃない？」

シライはそんなことを言った。

「確かに。ずっと嫌われてるのかと思ってた」

付きまとうとよく拒絶されたり追い払われたりしたものだ。

「フィーも言っただかもしれないけど。フィーはあんな格好していても、女の子らしさって言うのかな、そういうのにずっと憧れがあったみたい。それで、レオナに憧れてた」

レオナは私の憧れでもあったから

「うん、聞いた」

嬉しいような切ないような気持ちになった。もし彼が男性だったら、フィーは私のことを受け入れてくれただろうか。

「妬む部分もあったからかもしれないけど、あんまり近寄りすぎて自分のことがばれちゃうのが怖かったんじゃないかって思う。それはずるいかもしれないけど、レオナ姉ちゃんを好きだったからこそ、どういう態度をとられるか不安で仕方なかったんじゃないかな？」

それにフィー、女の子どうしとして女の子をどう扱っていいか分からないみたいだから。フィーのことを女の子と知っている女性って、殆どいなくて」

気付かないものなんだね、とシライは溜息を付いた。



私が告白した後も、私に自分の性別について告げるか迷ったフィーを思い出す。告げられなかったら、私は気付かなかったと思う。

「レオナ姉ちゃんはフィーのこと、どう思った？」

「……いきなりで驚いたけど、……でもやっぱりフィーという人のことは、好きだよ」

そう言つと、シライは一瞬驚いて、けれど微笑んで「よかった」と言った。

「フィーがとても喜ぶと思う」

「うん」

「……泣かないで」

「えへへ、もう、大丈夫」

シライが涙を拭ってくれる。……終わったのだ、と思う。この恋は。

「僕もお兄ちゃんも、黙つててごめんね」

「……しょうが、ないよ」

彼らにとつて家族である大切なフィーのことなのだからしようがない。私も、もし同じ立場にいたらフィーの秘密を隠しただろう。

だってフィーが私に与えてくれたものは彼女の性別に関わらず変わらない。そう、私もフィーが好きだ。たくさん感謝している。今まで騙していたとしても、フィーは今日の私の告白にある意味でも誠実に答えてくれたのだから、私は『彼女』を受け入れたいと思う。

「戻らなきゃ、ね」

私はそう言つて歩き出そうとして、

「どっちだっけ？」

迷っていたことを思い出した。私の惚けた言葉に笑ったシライと

手を繋いで工房に帰った。

「ふい、フィー、元気だせって」  
壮年の男がぎこちなく励ます。

「そう、また次があるのにそんなでどうするんじや。しゃきつとせんかしゃきつと」

老人が力強く言う。

「ああ、もう泣くな男だろう!!」

青年が焦ったように言う。

工房は、泣き続けるフィーを中心に混乱の渦の中にあった。

「……どうしたの、一体」

ロイがやって来て尋ねた。

「いや、フィーがレオナを振ったらしくって」

「で、なんでフィーのほうを慰めてるわけ？」

「だって泣いてるんだぞ!!」

「いや、レオナはどうしたのさ」

「どっか行っちゃったみたいで……」

「なんで泣くの、フィー？」

「レオナに、嫌われた……」

フィーがロイに答えて、ぐすりと呟いた。

「フィー、振った女の子に好かれ続けようなんて虫が良すぎるよ」  
珍しくロイがフィーに冷たいので、正論ではあるが職人達は驚いて押し黙った。

「それにこんなところで泣いて人の同情を誘わない」

「……うん」

空気が冷たい。

「いや、こいつが裏通りで泣いてるのを家のもんが見つけてここに連れてきたただだから、オーナー」

「そうそう」

思わず職人達がフォローする。

「じゃあそれは置いといても、レオナのほうがよほど傷ついたんだろうから、こんなふう泣いてちゃ駄目だよ、フィー」

ロイの細長い指がフィーの泣き濡らした頬を伝う涙を拾った。

「うん。そ、か、そうだよな。レオナ、追わなきゃいけないのに追いかけれなくて……今から行くよ」

「うん、行つておいで」

真顔だったロイが、ようやく笑った。フィーがうずくまった状態からようやく立ち上がろうとすると、

「ロイさんなにフィー泣かしてるんですか!!」

少女が、工房の裏口に仁王立ちしていた。

「……レオナ？」

「フィー、何かされたの、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だけど」

目を白黒させて、フィーは瞬いた。空気のようにも、それでもレオナはいつもの勢いでフィーを心配してくれているのが伝わってきた。

「レオナ、目が赤い」

レオナはきつと泣いたのだからとフィーは思った。

「……平気だよ」

「……ごめん」

「もう、いいよ」

そう答えて、レオナは笑った。フィーが焦がれる、大好きな笑顔で。

「振られたけど友達でいてくれる?」

そう言ってくれた少女に、フィーは微笑んで頷いた。どこか眩し  
そうに。

「レオナは強いな」

「そうでしょう?」

「ああ、とても強いよ」

ロイは少し拗ねた顔でそれを見ていた。

「お兄ちゃん、今日は悪役?」

レオナと共に帰ってきたらしいシライは、そんな彼の傍でぼそり  
と言った。ロイは、弟に苦笑を返した。

「みたいだね。でもそれよりフィーがますます独占できなくなる気  
がして寂しいな」

「いいこと、じゃない?」

「そうだね」

開け放たれたドアの外から差し込む光にロイは目を細めた。

「よかったね、フィー」

とそう呟いて。

## 40・祭り前夜

夜がやって来た。

昼間の大騒ぎに比べて、今はさざめきがそつと流れている。ほんのり涼しくなつた空気が肌に心地よい。

書き連ねていた細工のデザインから目を離し、工房の2階から開いた窓の外を眺めると、静々と行く行列があつた。収穫祭の前夜祭の行列だ。

「この行列、随分久しぶりだな。うんと小さいときに見て以来だ」  
「10年ぶりになるね」

窓辺に座っていた私の傍に、術具の手入れをしていたロイもやって来て懐かしそうに外を眺めた。

今夜は夕食後、ロイの部屋で、2人でただぼうつとしていた。私達はよく、何も語ることもなくただ傍にいてぼんやり好きなことをしているというときがある。

これがなんだか居心地がよい。静かに満ちているこの空気が嫌いではない。

本当は自分の部屋に帰って眠ってしまつてもよかつたけれど、収穫祭の期間中に一度は一緒にお祭りに行こうと言つて騒いでいたレオナが工房から帰つてから、なんとなく一人は寂しかったのだ。だからロイに断つて、彼の部屋の窓際で作業していた。1刻ほど前まではシライもいたけれど、前夜祭に誘われたと言つて出かけていった。どこにいるかは分からないが、シライもきつとフードを被つてあの行列の中にいる。

月光の中、連なつて人々に行く。土絵の具で顔に竜紋を刻んだ町の有志の人々だ。貴族も平民も関係なく、行列にいる人はみな深い

緑の衣を羽織り、美しい白い灯を掲げて一路神殿を目指す。

竜神祭とも呼ばれる収穫祭。

明日からは無礼講で大騒ぎだが、前夜祭だけは特別だ。収穫されて人々の糧となり、神たる竜のいる空の果てへ還ってしまった命へと祈る前夜祭の儀式は、静謐な空気の中で行われるのが古くからの慣わし。亡くなった故人を偲ぶ儀式でもある。

神殿に辿り着くと階段に並んで、そろって黙祷を捧げる。術師が授けた火が元である白い灯は、その間ゆっくり天に昇っていく。黙祷の長さは一定の時間の決まりはあるけれど、それ以上祈るも祈らないも個人の自由。昇る白い灯が月の光に溶けて見えなくなる頃には大体の人が帰って来る。

行列の中に、丁度シライくらいの背格好の子どもを見つけた。その人影を見つめながら呟く。

「なあロイ、シライは」

「うん？」

並んで外を見ているロイも、私と同じ子どもを見つめていた。

「師匠のことを想うのかなあ」

「多分、ね」

あんな小さいのに、母を亡くして。でもシライは私のように憎しみに逃げたりしなかった。それを想うとシライには敵わないなあと思う。それでも。聡いし、芯から優しい子だから私達に寂しいそぶりなんて見せないけれど、想うことはきつといろいろあるのだろう。だって師匠が死んだ日はあんなに泣いていた。シライの透明な涙を思い出して目を閉じる。

……ふと、ロイが言った。

「フィーも行きかけたか？」

「どっ、かな」

そう答える私を、ロイは罵ったりしなかった。彼は私の気持ちを知っている気がしたけれど、答えを濁す私に、黙っていてくれた。

……行きたかったと想う反面、やめてよかったと想う気持ちもある。

逃げたのだ。

死者への祈りを捧げるならば、師匠の死がまざまざ蘇ってきてきつとまた追体験してしまう。まだ、それに耐えられないと思った。その衝撃に立ち向かい、受け入れるというのは難しい。

レオナといい、シライといい、強いな。自分が情けなくて溜息が出た。昼間の貴族はどうしただろうか。彼にはあのように説教しながら、自分を騙っていた私。それでも受け入れてくれたレオナの笑顔を思い出す。

私も、変わっていきこう。そっと心に決める。

「来年は、行くよ」

「大丈夫？」

頷きながら、ロイはどこまで私を分かっているだろうとそんなことを思った。彼はいつも私の気持ちを汲み取ってくれる。

でも、私は？私の方は彼のことをよく分かっていないと思った。実は彼は表情を隠すのがうまいのでよく分からないことが多い。例えば今日はどうして前夜祭の黙禱に行かなかったのだろうか。

「ロイは、行かなくていいのか？」

「……シライは多分僕がいると泣けないから」

「確かに、そうだな」

彼らはやはり兄弟だな、とこんな時思う。その距離感が少し羨ましい。決して離れてはいないけれど、寄り過ぎるでもない距離。ロイがシライを理解するように、シライもロイを理解しているように思う。私はどうだろう。ちょっと寂しい。

そんなことを思っていると、ロイはふんわり微笑んだ。

「それにフィーが寂しそうだったし」  
悔しい。

「なんで、分かるんだ」

「なんででしょう?」

珍しく意地悪い顔でロイは笑った。なんなんだ。

「フィー。明日の祭りは一緒に行こうか」

「いきなりだな」

「駄目?」

ロイ、その目は卑怯だ。国を傾けられそうな目で私を傾けるつもりか。そのうち私は倒れて死ぬぞ。

「……いいけど。彩がないな」

見た目は祭りで男二人だ。これは結構空しいと思う。祭りでは、毎夜男女で遊び飲み踊り明かしたりするものだけに、悪い意味で目立つ。すると別にこちらはナンパ目的でなくとも向こうからロイには人が寄ってくるし、私はどうなってしまうのだろう。私にも女性を誘えと? それでもいいが面倒だな。

「そうだ、ロイが女装するか?」

「なんでそうなるかな……前も断った気がするけど」

「だってせつかくだから踊りたいし」



祭りの踊りの男役なら任せて欲しい。あれは得意だ。レオナとは踊る約束をした。

「ああ、でも女装のロイにも人が寄ってくるな」  
どうしよう。

「すごく有名な詩人が来るって噂聞いたからそれを見に行こうよ、  
ファイ」

「詩人？」

「そう。世界中をもう何十年もかけて旅して周っている吟遊詩人で、  
とびきり声が綺麗なんだって」

「ふうん。ロイより歌が巧いのか」

「それで食べてるんだからそうだろうね」  
ならば聞いてみたいな。

「じゃあ行くか」

「うん、行こう」

ロイは嬉しそうな笑顔を見せた。きらきらしている。

……まあ、彼は歌が好きだからな。なんだか私もわくわくして来た。  
た。

祭りにわくわくするなんて、なんだか子どもの頃を思い出す。

そう言えば祭りに繰り出すたびにナンテスに見つかってロイが閉  
口していたっけ。明日はどうなるだろうな。

そんなことを考えていると、ふと、外が昼のような明るさになっ  
た。

振り向くと、数え切れない白い灯が月を目指して往くのが見えた。  
始まったらしい。

神殿の元で目を閉じているだろうシライが心に浮かんだ。私も、  
少しだけ。そっと瞳を閉じてみた。

『相変わらずねえ』

「！」

「どうしたの、フィー」

「……なんでもない」

「幻聴だろうか。」

ゆっくり、ゆっくり灯は昇っていった。どこの家も明かりを消して窓辺から天に行く灯火を眺めている。静かだった。沈黙の中で、人々はどんな思いを抱えているのだろう。

それぞれの、10年があったのだ。生き延びたり、失ったり、長い10年が。

「綺麗だね」

「そうだな」

ロイも私も、多分一瞬、少し目が潤んでいたと思う。

「さて、明日は祭りと決まったんだからさっさと仕事は済ませるか！」

灯が見えなくなった頃に私は腕まくりを始めた。

「フィー、徹夜するつもり？」

「そうしなければ明日の夜は空かないぞ」

「……頑張ろうか」

ゆっくりと静かな夜は更けていった。

## 41 少年と猫

「ロイ、早く行こう！」

「はいはい」

フィーの言葉に苦笑してしまう。昨日は渋っていたくせに、ひどく楽しそうにフィーは道を進んでいく。彼女の短めな薄茶の髪が肩で元気にはねていた。とび色の目は生き生きとして、原色に溢れた屋台の上を眺めている。その姿は徹夜明けとはとても思えない。

祭りだろうが相変わらずで、今日のフィーは白いシャツに男物の濃茶の半ズボンを履いていて、一見少年のよう。耳に揺らめくいぶし銀の細工のピアスと指に嵌められた護身の術具がなければ随分そっけない格好と言える。なのに、人々の中に埋没してしまわないのはなぜだろうか。別に彼女を好きな自分の欲目じゃないと思う。フィーの顎の引き方や歩き方が好きだよ、といつか言ったときに彼女は笑ったけれど、それらはある程度の人目を引くほどに、颯爽として見える。男性から見れば小さめで細い体をしていても、そんなことは動く彼女を見ていると気にならない。

祭り一日目。王都はどこも盛況だ。狭い裏通りにもかかわらず、人家の合間を縫って屋台が並んでいる。道の真ん中では音の外れた陽気なブラスバンドが音楽をかき鳴らしていて、人々は皆それに合わせて踊っている。

そんな夕焼け時に、どうにか仕事を終えた僕とフィーは人ごみをすり抜けながら、詩人が泊まっているという宿屋のある通りを目指していた。

彼女と共に祭りに行くなんて、何年ぶりだろう。つい、口元が綻

んでしまうのをフィーは心配そうに見ていた。……思い出し笑いじゃないよ、フィー。

「鼻の宿ってこの辺だったと思ったけど」

普段この辺りにはあまり来ないので、様変わりした通りから見つけるのは難しい。石畳の通りに入って、二人で唸った。

「人が集まる方にいけば、いるんじゃないか……あ、あっち。見る、ロイ」

人だかりを見つけたのは分かったから、フィー、前を向いて歩いて欲しい。

「あ、フィーちよっと」

「なに……うわっ」

引き止める間もなく、小さな少年を押し倒すようにしてフィーは倒れた。

けれど、途中でフィーは少年を庇って上にした。どすん、と重い音。

「……ごめん、大丈夫？」

少年を抱きかかえるようにして、下になったフィーは尋ねた。むしろ、フィーは、大丈夫だろうか。

「だい、じょうぶ」

ゆっくり起き上がったのは、フィーと同じ薄茶の髪に鳶色の目をした少年。

でも、顔が全然違う。全体的にあどけないようできて、よく見ると意外と大人びた目をしている。

その目を見ているとなんだかもやもやした感覚が湧き上がってきた。……なんだろう。

思わず見つめると、視線が返される。ひどく、緩慢な仕草で。なぜか、まるで人形のようなと思った。

フィーはそんなことには構わず、パタパタと少年の服を払ってい

た。

「少年、すまないな、前方不注意で。うん、怪我はないみたいだ」  
「庇って、くれたんだね。ありがとう。こちらこそぼうつと突っ立つていたから、ごめん」

「ならお互いさまだな」

よかった、とフィーは笑ったけど、よくない。

「フィー、なんか違うんじゃない？」

「そうか？」

「歩くときは前を向いてくれると嬉しいな。……フィー、怪我はまだ包帯が取れていないのに、打ち身が出来たんじゃないかと心配になった。

「いくら私でも受身くらい取れるさ。ところで少年、連れはどうした」

軽く言うフィーに悪い予感がする。

「はぐれた」

「じゃあ、連れ探すの手伝うよ。なあ、ロイ」

当たった。溜息しか出ない。彼女は普段冷淡だが、一旦関わった以上放っておけないのだ。いかにもぼんやりした少年が心配になったのだろう。少年はシライよりも年下に見えた。彼が少し迷った後静かに頷くのを見て諦める。

「了解」

2人きりなのは久しぶりだったんだけどな、フィー。

けれどしばらく探しても、少年の連れは見つからなかった。探す道すがら、うきうきしているフィーはあれこれと屋台に寄り道して、

僕や少年にいろいろと買ってきては口に詰め込んでくれたお陰で、空腹だけは満たされた。

「……そろそろ詩吟が始まるな」

あんず飴を舂めながら、フィーは空を仰いでいた。月が昇っている。前座は終わった頃だろう。

「どこにいるんだろうな、少年の連れは」

「この、人ごみだから……ありがとう。一人でまわってみる」

少年はそういって、歩き出そうとした。それをフィーは思案げに眺めていたが、やっぱり口を開いた。

「一緒に詩吟見ないか」

「え……？」

フィーのお節介。

「この都に來てる詩人が、とびきり歌が巧いそうだ。連れが見つかる見込みがないなら聞いてみるのも一興だと思うがどうだろう」

「……あなたって変な人」

フィーの眼をしげしげと眺めて、うつすらとだが少年は初めて笑った。

その、目。

「いきなりどうしたんだ、ロイ」

気付けばフィーを後ろにして少年と対峙していた。彼女は、何も感じないのだろうか。

「いや……なんでもない」

無意識の行動だった。なぜかもやまとする。そんな僕の様子を、少年は興味深そうに眺めていた。それからフィーに向き直ると、

「少しだけ、見たいかな」

少年はそう言った。

「よし、行こう」

にっこり笑ってフィーは少年の手を掴んだ。少年は何かに一瞬驚

いた様子だったが、フィーについて歩き出した。相手が子どもなら、フィーは性別を気にしない。でも。

「フィー」

「なに……、なんだこの手」

「はぐれないようにと思って」

フィーのもう一方の空いた手を掴む。

「なんだ、除け者が寂しかったのか」

フィーが笑う。

「まあね」

そういうことにしておいて。相手が子どもでも僕は気になるからね。

3人で並んで手を繋ぎ、少々周りの輦蹙を買いながらも梟の宿の下に着くと、そこにはちよつとした人ばかりがあった。

それでも1日目だからそこまで集っている人は多くなく、人の合間から詩人の姿を見ることが出来る距離まで近寄ることが出来た。フィーは少年を肩車していた。輪の中心で、鮮やかな紫の帽子を被り、ばさりと肩までの金髪を揺らした優男が一人、恭しく礼を取る。あれが件の詩人だろう。彼の脇には小粋な雰囲気の、可愛らしい老女が一人いて、アコーディオンを持ってユーモラスにお辞儀の音楽を鳴らした。観衆がぱちぱちと拍手をする。

「旅で世界を周って何十年ってわりに、かなり若くないか」

フィーが怪訝な顔で、詩人を見つめた。未だにすっかり術力が使えなくなっている彼女には分からないみたいだったので、静かに説明をする。

「……吟遊詩人についてももう一つ噂があつてね、フィー。彼は半精

「霊だそうだ」

「え」

驚いた顔で僕を見上げたフィーに構わず、

「始まるよ、フィー」

と僕はそう言った。

群衆の中、顔を上げた詩人の瞳は彼の被った帽子のようなすみれ色だった。人ならぬ色。彼はその美しい目を細めてにっこり笑って口上を述べた。

「こんばんは、眼くらむような美しい宝石の国に住まいし勇ましき竜の子たるイオナイアの皆様がた。今日はようこそお集まりくださいました。まずは自己紹介を。私は詩人のヒルカ、アコーディオンを携えた彼女は私の優しき恋人のキキ」

老女は紹介を受けて微笑した。ざわめきが上がる。

「驚きなさいますか？みなさん、恋に年の差などは関係ございませんよ。……とは言うものの、私と彼女は同い年。おや、どうやら興味を示されたご様子ですね」

詩人はひょうきんなのに、どこか切なげな眼をしている。

「それでは恥ずかしながら、私達の恋物語からお聞かせいたしましたしきよう」

アコーディオンが鳴り出すと、彼の声は緩やかにそれに乗った。

滑らかなテノールの声が旋律を持って通りに響き渡り、群衆はうつとり彼の声に身を任せる。

常人離れた寿命を持った爪弾き者の半精霊の話から始まり、彼が遅しく可愛らしい人間の女の子に恋に落ち、彼女を死ぬまで愛すと誓った話が一編の詩となって人々の心に迫る。成程、これは。

「巧みだな」

フィーの言葉に頷いた。海男を惑わす人魚の血を引いているだけのことにはある。歌声に耳を傾けるうち、彼の心に自然に寄り添って



その感覚を共有しているような不思議な感覚を味わった。

彼が歌い終わると喝采が上がった。その詩吟の上手さはもちろんのこと、老女をこの青年がどんなに愛しているか伝わったものだから。

「様々な恋があるものだ」

フィーが感慨深げに言った。

「そうだね」

彼女は古い、彼を置いていずれば先に逝くだろう。それでも傍にいたくて、少しでもたくさんものを共に味わいたくて旅をする二人の男女。彼らもいつぱいに今を生きているのだろうとそう思った。アコーデオンを途切れなく奏でる老女は歌い終えた青年の向ける温かいまなざしに恥ずかしそうに顔を赤らめて、それを人々は冷やかした。

「では、続きまして英雄伝を……これは先日作った詩なのですが、この国の王の歌」

歓声が上がる。王の名を呼ぶ観衆に囲まれて、僕とフィーは顔を見合わせて苦笑した。盛り上がるには、僕達は多分彼に近すぎる。

ふと、フィーの肩の上に乗った少年が彼女の髪を引っ張った。

「……下ろして」

そつとフィーが屈むと少年は彼女の背中から静かに離れた。

「行くのか」

フィーが少年を見やる。

「うん、もう行くよ。いい歌が聴けてよかった。いろいろ、ありがとう」

「いや。気をつけてな」

フィーが笑う。

「連れ、見つかるといいね」

その声をかけると、

「もう、声がするから大丈夫」

少年は笑った。

ぞわ。思わず硬直する。

ひとときの硬直から解かれる頃には、少年は消えていた。

そこにいたのは少女でその眼はひどく澱んでいたように見えた。

この、錯覚とも知れない彼にだぶっていたイメージが、ずっと感じていた違和感の正体だったと気付いた。

ロイと別れた少年が会ったのは一匹の虎猫。少年が後にした方向へ、何やらいそいそと向かおうとするようにした猫は、少年の近くまで来ると、何かに気付いたように顔を上げた。そして、少年に向かって威嚇するような鋭い唸り声を上げた。

唐突に飛び掛ってきた猫を、かわしきれずに少年は頬に傷を作った。少年の頬を伝って流れるのは、人というには黒めな血。怪我をしたことに驚いたように、少年は目を細めた。

「……あなたは」

「うわぁ、どうしてその柔らかかほつぺたに傷を作ってるのよう」

人ごみの間から現れたのは、純朴そうなおばさん。少年の母と言っても通用しそうである。少年の探していた連れだ。

「猫が」

「もつっ、このどら猫ったら私のこの子に手を出すなんて、三味線にしてあげるわー！」

冗談のような口調なのに、少年の連れの目に宿るものは冷たい。猫はそれでも怯える様子ではない。ただ、じっと隙をうかがうように少年のほうを見つめた。

「三味線って？」

「東の国の楽器よ、まあ私って物知り？ 惚れちゃったかしら？」身を振る一人の婦人を、少年は無表情に見やった。

「チット。この猫に手を出さない方がいいわ」

「ギルう、もうちょっとなりきって遊ぼうよ。ふざけるのが祭りの醍醐味だし、今せつかくギルのお母さん気分なのに！」

「……」

ギルは、チットを置いて歩き出した。

「あ、もう、はぐれちゃったのは謝るからあ、眼を合わせてよギルってば。オレずっと呼びかけてたんだよ？」

チットは弁解しながら、今は少年の姿をしたギルを追った。

去り際にチットがギルを追いかけながら、さりげなく猫に向けて魔法を一つ放った。それを、猫は避けるでもなく平然と受けた。

チットはその魔法に自信があったのだろう、振り返ることなく立ち去った。

……残された猫に傷はまったく付いていない。しばらく虎猫は遠ざかる奇妙な二人連れを見つめていたが、元の目的を思い出したように人だかりへと向かっていった。

## 42・同情と遭遇

「ロイ？」

少年が去った後長いことロイは硬直していたので、フィーが思わず呼びかけるときこちなく彼は動き始めた。ようやくフィーのほうを向いたロイは、真っ青な顔をしていた。

「フィー、なんともない？」

ロイはフィーの肩や腕をそつと触つて、ふと顔をしかめた。

「見ての通り健康そのものだが。どうしたんだ、先程は固まったりして。……まさかあの少年に惚れたのか」

確かに可愛らしかったな、とフィーは思う。どこかたどたどしくて、地に足がついてなくて、ぼんやり屋台を眺めながら時々驚いてびくりと小さな反応を見せるところなどが。

「そうか、惚れたのか。うん、可愛い少年だったからな、そう言うこともあるんだろう。ナンテスに対するお前の態度を慮っても、同性愛の前途は多難そうだが応援している」

「違うよ」

「なんだ、そうなのか？ 驚かせてくれるな、紛らわしい」

「……フィーと話していると、本当色々どうでもよく感じられて困るね」

少し気が抜けたようにロイは言う。

「貶してるのか？」

「いや。……フィーはそれでいいと思うよ」

ロイはフィーに苦笑してそう言った。そして彼は、どこか真剣な眼で虚空を見つめた。

「王様に少し確認したいことが出来た」

「石のことか？」

「まあそんなところ」

ロイは言葉を濁したが、フィーは追求しなかった。再び始まった詩吟に、彼女は気をとられたからである。

ヴィーについて紡がれるその詩人の歌の中では、前王を追うようにして命を落とした少女のことには一切触れられていない。そこにあるのはヴィーの偉業と功績を讃えるもので、彼の煩悶などまるで何一つ無かったかのようだ。そんな歌を聴いて、詩人の声にぞくぞくと集ってきていた人だかりは揃って誇らしげな顔をしたが、フィーはそれになんとなく居心地の悪さを覚えた。……一人の少女の墓の前に立っていた王様を想った。あの時、それまではどこまでも遅く不遜と感じられていた彼がとても脆く見えたのをフィーは思い出す。

フィーだって、ヴィーからその過去について聞かされなければ彼のことを何も知らず、集っている他の観衆と同じように良い意味でも悪い意味でもヴィーをただ「王」として見ていただろう。でもヴィーは、王たる資質を持って生まれたにせよ、王として生まれついたわけではない。それをフィーは知っているようで知らなかった。彼と会い、話し、触れるまでは。

フィーは思う。

闇の支配者たる前王を屠り竜の血に認められ王になると、ヴィエロアはけして全き存在でなくあくまで「人」である、と。

それなのに彼の偉業に隠れた苦しみはないものとして扱われてい

くに違いない。

グイーがソラに纏わる話を国民に隠したことは確かにその一つの原因ではある。闇の眷属でない存在として埋葬されたソラ。彼が意図的にソラの存在を隠したのは、闇に与したとして彼女が貶されなためだろう。愛した少女の遺骸を火口などでなく海や空に近いあの場所へ葬るために、彼は黙っている必要があったのだ。

けれどもそれ以上に、人というのは一度自らの心の中に築いた理想的な偶像を壊されるのを望みはしないということが大きい。それが、生身の「ヴィエロア自身」が省みられず忘れられていく一番の原因ではある。闇が消えて以降の国民は、偉大な「英雄」で「王」となった彼と言う存在を、自らの柱と誇りにすることで立ち直ってきたし、これからもそうしてやっていこうと考えている。それなのに王の偉業に傷が悪戯につくことを人は望むだろうか。愛していたとはいえ、たった一人の少女を亡くしたことから、国民が望み続け、なされたことへ深く感謝し、祝したその偉業すら自ら否定し、贖罪の意識から憎まれないというばかりでなくその結果としての死をも望んだ彼のいわば人らしい弱さを、この国の民は見たいと望まないだろう。

たとえ自らの意思でそれを選んだにしても、そうやって線引きをして特別視される困いの中でグイーは息苦しくはないのだろうか。それすらも受け入れて、あのように笑っているのだろうか。

竜の血を通わせることになった自分自身に別段変化があったわけでない、そうグイーは感じた。同様に、平民として生まれ育ったグイーだって自分とたいして違いはなく、感情面において劇的に人間離れたわけではないだろう。それなのにグイーもグイーも、随分と厄介なものを背負ってしまった。神と呼ばれる竜に関わった名ばかりの名誉と、ひたすらに重い責任と言うやつである。その上竜の

血に監視を受けて、常に殺される危険に身をおくこととなった。

そしてなによりも、フィーとヴィーに求められるのは至高としてのあり方であること。それは精霊の頂点たる竜に認められたものとしての、人の頂点。

フィーとて自らの細工に誇りを持っていないわけではない。自分で言うのもなんだが、人を彩るものに関しては国一の細工師であると、そう自負する。それでもそれよりなお上の高きをこの国の民もこの国の竜もフィーに求めている。ヴィーも、正しき王としての在り方から外れることは許されない。恐らくそれに耐えうると思って、それぞれ竜の国の王と竜細工師として祭り上げられたのだと思うが、フィーとしては首を傾げたい。

……まあそれはさておき、ヴィーと自分は境遇が似ているな、と彼女は思う。

だが、竜の血を受けたその瞬間から周りの人々が彼我の境を明確としてしまうことへの恐怖や孤独感といったものは、表立つことの殆どないフィーより、ヴィーは余程強く感じるに違いない。フィーが目の当たりにした脆さを持ち合わせたヴィーならきつとそうだが、フィーは確信した。それでも彼は、平気な顔をするのだ。人より「王」として在ろうとする。それは民を想つてのこと以外の何物でもない。

そこまで考えた末、今、彼女は王様に同情している。……こんなことを思う日が来るとは思わなかったが、とフィーはぼやいた。

もし詩人の声がこのようにあまりに美しくなければ、フィーは罪無き詩人に皮肉の一つでも吐いたかもしれない。詩吟に脚色されない偉業などないのだな、と。

やがて英雄歌が終わり、割れんばかりの拍手が詩人を讃えた。  
「いい声だったけど……聴いてた？ファイ、眉間に皺ができてるよ」  
拍手喝采の中、ロイが呟いたのはそんな言葉だった。細長い指が伸びてきて、ファイの眉間をそつと伸ばす。彼女は自分がどうやら考えすぎていたことに気がつき苦笑して答えた。

「皺ができるその時は、その時だ。まあ、いい歌だった、ちゃんと聴いてたさ。来てよかったよ」

ひよい、とファイはロイの手から逃れた。

一応は女として万一眉間に皺が残ったらショックだろうが、そうなったなら気難しげな職人と見えて渋くていいではないかとファイは早々諦めていた。もとより頓着するほど彼女は自身の容姿にこだわりはない。ロイやヴィーのような人間を見れば分かるが、いくら手入れしようと凡庸が及ぶべくもない天与の美が存在するのは明白なのだから、自分ごときの容姿にはこだわるだけ時間の無駄だとファイは思っている。そもそもファイの天職たる細工師業はあくまで他を飾るものであり、もとより己を飾る必要など微塵もない。

「うん、私はいい才を与えられたものだ」

「……ファイ、またろくでもないこと考えてたでしょう」

「私は誰かが私の細工で輝きを増すならそれが最も本望なんだよ、ロイ。私のことは、まあいいんだ」

「ニャー」

ロイが何かを言いかけるのを遮って、その時二人の足元から猫の声が響いた。

「ん、虎猫か？」

ファイは立ち止まって、金の目をした虎猫をしげしげと眺めた。



そんなフィーの足に虎猫はまつわりつき、ごろごろと喉を鳴らしている。フィーは普段動物になつかれることなどないので困惑し、猫好きなロイは毛並みのいい猫を見て撫でようと手を伸ばした。

「可愛いね…って、痛っ」

ロイの手が触れた途端猫は毛並みを逆立てて、ロイを引っかいた。フィーの足の前に立ち、怒ったような鳴き声を上げる。

「大丈夫か？ロイが動物にそんなに嫌われるなんて珍しいな……どれどれ」

獣から過去避けられ続けてきたフィーは、おっかなびっくり猫に手を伸ばす。すると虎猫はぺろりとフィーの手を舐めた。

「おお。見てくれ、ロイ！ 普段と逆だな、私がこんなになつかれるなんて。うわあ、猫、お前いいもの食ってるんだろっな、すごく触り心地がいい」

フィーは嬉しそうに猫とじゃれ始めた。なんだか慥然とした思いで、ロイは自分を引っかいた猫を眺める。もみくちやにされているのに猫はやけに幸せそうだ。

「動物に嫌われるなんて初めてだ……」

「もし」

振り向くと、そこにはピンクの帽子の詩人がいた。どうやら詩人は、フィーとロイが猫に構っている間に今日の舞台を終えたいらしい。彼は滑らかな動作で帽子を取って頭を下げる。

「ご静聴いただき、ありがとうございます。失礼ですが、その猫はあなた方の飼い猫で？」

「いや、違うけど」

いきなりなんだというのだろう。

「そうなのですか……やけに懐かれていらつしやるように見受けられたので思わずお声をおかけしました。ならば正直に言いましょ、その猫は、不吉です。離れた方がいい」

「そんな、ただの猫じゃないか」

フィーはわけが分からないと言う顔をしている。それと対照的に真剣な顔つきになったロイは、詩人を睨むように見つめるフィーに抱かれた猫を眺め、静かに尋ねた。

「……それは半精霊としてのあなたの意見ですか？」

「ええ。精霊としては半端ものの私でも分かります。この猫は恐らく魔に属するもの。それもひどく強力な」

「な」

フィーが呆気にとられた顔をする。猫は平静な様子だ。ロイは目つきを鋭くし、問うように詩人を眺めた。

「間違いありません。恐らくこれは仮の姿ではないでしょうか。……魔は、主と定めたものにしか懐かないと耳にしたことがございます。しかし解せない、あなたにはなんの力も感じないのに」

ロイはその言葉を聞いて目を伏せる。……思い当たることがあったから。目立つ詩人の格好とあいまって、多少耳目を集めていることを理解してロイは言った。

「……詩人の方。場所を変えてお話ししませんか。勿論あなたの恋人も一緒に」

「我々の宿でよろしければ」

「では参りましょう」

話の流れに納得がいかないフィーは、猫の喉をかいてやった。ころころ、と心地よさげに猫は目を細める。どう見てもただの虎猫。

「魔、なのか？お前」

「ニヤー」

どうやら猫は、人語を解するわけでもない。

彼らの懸念が単なる勘違いとしかフィーには思えなかったが、動き出したロイたちを彼女は猫を抱いたまま追いかけた。

### 43・器の話

「彼はフィー、僕はロイと言います。先程は大変素晴らしい歌をお聞きかせく下さってありがとうございました、……ええと、ヒルカさんにキキさんでよかったかな」

「ええ。我々の名まで覚えていただけたとは、光栄です」

詩人のヒルカと小粋な老女のキキは顔のつくりはまったく違うのにとてもよく似た顔で笑った。

あれから、詩人の泊まる宿屋の一室にロイとフィーは招かれた。薄い白いカーテンがかかった窓一つ隔てただけで、祭囃子は随分遠ざかって聞こえ、そのせいかな部屋はやけに静かだ。

ロイの髪の毛と詩人の髪の毛の金色が並んだ部屋の中は質素なのにやたら豪華に見えるな、などと思いつつ、フィーはロイの隣に腰掛けて、黙って二人の会話の行く先を見守ることにした。取りあえずは彼らの言い分を聞かないことには反論のしようもない。猫に関しては、フィーの足元にうずくまっていたのんびりと毛づくろいをしていく。

「こうして見ていると本当にただの猫ですね」

ロイはそう言いながらも、険しさの取れない顔で猫を見つめている。

「魔というのは実に人を謀る術に長けているものですから……ロイさん、お話を聞かせ願えますか？ 私にはあなたのお連れのフィーさんのことが理解できないのです。なぜ彼は力なくしてこの魔に主たりえるのか」

ヒルカの金髪が、首を傾げる彼の動きに合わせてふわりと揺れた。

「フィーのことですね。……端的に申し上げましょう。今力が見えないようでも、彼は、魔力と術力と2つの力を内包している」  
「馬鹿な」

ロイは過日ヴィーに告げた言葉を思い出す。嘘ではないものの、あの時ロイは事実を全て彼に告げたわけではなかった。今から詩人に話すことも黙っていた一つの事情。ヒルカの目がそれに見開かれる。

「事実なんですよ、ヒルカさん」

「ありえませんが、生まれるときに魔と精霊のどちらに祝されるかにその力は因るはず。魔と精霊が共に一人の人間を祝するなど起こりえません。それらは相反し、反発しあう存在どうしなのだから……万一反にそうだとすれば今のフィーさんの状態にも納得いきますが」  
「何の力もないことに関して？いや、彼には力はあるのです」  
「どういう、ことですか」

正負のように対となる力。同じ器に収まらないはずの力。それが術力と魔力である。その容れ物を『器』と呼ぶ。

普通の人はず、器を持たないものだし、持ったとしてせいぜい一つである。器があり、かつその中に魔力や術力になる大元の本人の生来の『力』があれば、生後にいずれかに祝されて術師か魔法使いになるという。これがいわゆる仮の契約である。祝された本人が自覚を持つにいたって、実際に契約を結ぶかどうかを決める。人間に対する嗜好が異なり、お互いが忌み嫌いあう魔と精霊が共に一人の人間を祝すことはまずないし、仮にあつたとしても器の中で相反する力が打ち消しあい、まるで力のないような状態になってしまう。しかしフィーはこれに当てはまらない。

「……フィーには、例外的に受け皿が二つあったようなのです」

かといって、仮に器が二つあったとして、そもそもその両方が生来の本人の『力』で満たされていることなど有り得ないと言っているのに、とロイは思った。一つの器に納まった力を過ぎれば、人の体など持ちはしないのだから。フィーだって、生来の力の収まった器は一つだけだった。

「その片方を満たすフィー自身の力は精霊の恩恵を受け、もう片方は空のままでも本人も周囲も下手をすると生涯も一つ一つの器の存在に気付かないはずだった」

「ではなぜ」

詩人の問いを聞いて、ロイは猫を見た。

「むしろこちらが聞きたい。なぜ自らの力を与えてまでフィーを主とした、魔よ？」

猫は大きく欠伸をした。まるでロイの言葉になど関心がないといった様子で。ただずっと、猫はフィーから離れる様子がない。ロイは溜息をついた。

「なあ、ただの猫なんじゃないのか」

自らの力に関しては大昔にロイから少し聞いていたこともあり今まで反駁もせず黙っていたフィーが、それだけ呟くと詩人は首を振った。

「それはありえませんが、証拠に半精霊である私とこのように反発する」

詩人が手を伸ばすと、いきなり猫と詩人の間には青白い火花が激しく散った。フィーはそれを見て息を呑む。

詩人はそつとその手を引いてフィーに向き直った。

「魔でなければこのような反応は起こりえない」

「そうか。なるほど、初めて動物に好かれたと思ったら動物でなかったとは」

フィーは心持しょんぼりしている。

「あなたが今まで動物に嫌われたとしたら、魔の特有の匂いがそれに敏感な彼らを遠ざけていたのかもしれませんが。……理由は分かりませんがロイさん、フィーさんは魔に力を与えられたとそうおっしゃいましたね。だから彼女は2つの器それぞれに術力と魔力を内包すると、そういうわけなのですな」

ロイは頷く。

それを聞いたヒルカは、むしろ憐れむようにフィーを見た。

「なんとも驚くべきことです。まさかそんな人間がこの世に存在するとは……フィーさん、ひよっとして力を使い辛いのではないですか」

「ああ、そういえば未だに扱いがよく分からない。……今はしかも全く使えないがな」

フィーはまるで自分の力を窺うように、女性にしては少し大きく男性にしては小さいその手を握ったり閉じたりした。

「私など術力を扱うだけでも困難なのです。あなたの場合はおそらく、魔の力など内在するなら区別する面倒が増す分、術師や魔法使いよりもその力を使いこなすのが大変だろうと思います」

フィーはヒルカのその言葉に一瞬呆然とした後、ロイを睨んだ。

「ロイ、お前からその話を聞いた覚えがないのはなぜだ」

「さてね、言わなかったっけ」

ロイはそらとぼけた。

「……お前、俺がそれを理由に術力の訓練を怠らないよう黙ってい

たな」

「へえ、言ったら何もしいつもりだったの？」

「……」

黙りこむフィーに溜息をつくとき、ロイはヒルカに向かって言った。  
「まあ、それはいいとして。納得していただけたでしょうか、ヒルカさん」

「ええ。踏み込んだ話を、半ば好奇心から伺ってしまって、申し訳ない」

「構いません、あなたの歌声とフィーへの忠告に関する礼です。……ありがとうございます、私はきつとあの猫が魔とは気付かなかった」

「しかしあなたは」

何か言いかけたヒルカに対して、ロイはそつとその薄い唇に長い人差し指を添えて微笑んだ。ヒルカはロイの表情に、続けようとした言葉を飲み込む。

「さて、フィーのこと、他言無用に願いますね。ご存知のように精霊の頂点たる竜を神とするこの国で、魔力を持つ者と知ればいらぬ反発を招きますから」

そう言うと、ロイは立ち上がってフィーに手を差し出した。

「そろそろお暇しようか、フィー」

彼女はその手を掴んで立ち上がるとヒルカとキキの方に向かって軽く頭を下げた。

「ああ。ヒルカさん、ありがとうございます。……詩、よかったよ、キキさんとあなたの幸福を願う」

「おやまあ、ありがとうございます、フィーさん」

キキは嬉しそうな顔をした。

「では私も、あなたとロイさんの幸福も願ってるよ」



「え」

「ふふ」

「……行こうか、フィー」

「あ、ああ」

2人が歩き出すと、半ば忘れられたようであった猫もフィーの後を追って駆け出した。

#### 44・帰り道にて

「キキさん、鋭かったな」

フィーは驚いていた。男と偽る自分を看破したらしい老女に。あ  
る2人の人間の幸福を祈る、と言う言い回しは、この国では夫婦や  
恋人に手向けられる言葉である。それをロイとフィーに向けられた。  
つまり、キキはフィーが女性であるということに気づいたと言うこ  
とだ。ロイは見かけで女性と間違われることはあっても、声を聞け  
ば男性と違えようがないのだから間違いない。

「うん。ばれちゃってみたいだね、フィーの性別のこと」

「まあ、黙っててくれると思うがな。細工師であるとは名乗って  
ないし大丈夫だろう」

ロイが深くは語らなかつたから。

「それにしてもこの格好でロイと恋人同士に見られるなんて思わな  
かつたな。すまない」

「何で謝るの」

「いや、なんとなく、だ」

なぜだろうな。

「…僕はそんな風に見られるなんて嬉しかったけど？」

最近ロイがよく分からない。こんな時は、以前なら彼も適当に冗  
談で済ませていたのに。

「ロイ、そういう言葉は将来の恋人にとっておけ」

「フィー以外にこんなこと言わないよ」

「…祭りとはいえ、あまりからかうな」

「フィーは、嬉しくなかつた？」

ロイの目のアクアマリンの水色が潤んでこちらを見つめる。大好

きなはずのその瞳に、なんだか苛々してフィーは目を逸らした。

「無防備にそんな目をさらしているといずれは目玉をくりぬかれてしまうぞ、ロイ？ …さて、この猫をどうしようかな」

ロイに答えずに一つ冗談をつき、足元にまとわり付く猫をフィーは眺める。答えを濁したフィーに、ロイはどこか悲しげな目を向けたがフィーは無視をする。

詩人のヒルカたちと別れた後、すぐにロイの術具を用いて幻術を使い、猫を撒こうとしたが無駄だった。正直に言えば、歩きにくいといった以外に今のところ実害は無い。しかし、これは魔。

「不吉、か」

魔を嫌う精霊の国の一員として育った身としては、魔と言うのは理を歪めていずれ世界そのものを壊しかねない忌まわしき存在とフィーも認識している。その分行使用する力に制限が無く、万能なようである。魔法使いは魔の力を使ううちに世界に干渉したツケが跳ね返って長生きしないものが多いという。そんな力を使えるとしてもフィーは嬉しくなかった。竜細工師の継承で竜と契約し、それですら結構疎ましかったのに、さらに力を得てなんとするのか。人の身には余る。さつさと追い払うか、始末してしまうべきだろう。

猫は、だが、罪のない顔でフィーを見つめる。…かわいい、とフィーは思った。これが自分を主と慕う魔だとは、なんとも残念でない。

「それにしてもまさか今頃になって、私に力を与えたらしい魔が現れるとはな」

普通、魔は主の元を離れないと言う。なぜ今までいなかったのか、どういう意図でフィーに力を与えたのか。現れたこの猫に聞きたいことは山ほどある。しかし猫は素知らぬ顔で鳴くだけ。

「…フィーは、やっぱり覚えてないんだね。魔力を身に入れて、術

力も使えなくなった前後のこと」

気分を切り替えたように、ロイはそう言った。フィーは心持安堵する。

「ああ」

「…そう」

ロイから自分には二つの力があるという話は聞いていた。けれど彼はそれしかフィーに教えてくれなかった。

「詳しく話してはくれないか」

「自然にフィーが思い出すのを待ったほうがきつといい」

いつもこうだ。だから、全く力が無い私へのからかいか何かと思っていたけれど、実際魔が現れた。それでも彼は話さない。

「…ロイがそう言うなら」

何か考えがあるのだろう。もやもやしながらも、自分の記憶の不備を呪うことにした。宝石店での出来事といい、私の頭は何を隠しているのだろう、とフィーは唸った。

祭りの残骸を避けながらフィーとロイは我が家へ向かって歩き続けていた。月明かりが道を照らすほか明かりは無い。既に時間は深夜。今日だけが祭りではないので、人々は明日に備えて眠りについてしまったようだ。私もロイも、先程から、ささやきを交わすように会話している。

「それにしても本当にこの猫、どうしようかな」

剣術でしか今のところフィーには葬る術が無い。これを、刺すのか。猫を見下ろし、フィーは迷った。

「なんなら、僕が始末しようか」

未だにフィーの素足にまわり付く猫をとっくりと眺めた後、口

イはにつこりと笑った。

「待て」

「なんだい、フィー？」

どこから取り出されたものか、ロイの手に握られた術具の数を見て、フィーは後ずさった。ざつと10。1つで高位の魔を葬る力を持つ術具。しかも、彼の持つ細工はどれも手が込んでいて美しい一方で対魔用の術でもかなりえげつない結果を齎す部類のものばかりだ。

「それはちよつとどうだろうか」

「ああ、ここでやるのは危ないかな」

「それもだが」

「もつたいないなんてことは無いよ、これでも足りないんじゃないかと思うくらい」

「いや、そうではなく。私はこの猫に見える生き物が、それを全部受けて灰燼に帰すのを眺めるのは少々忍びない」

「でも、こいつが本性をさらけ出さずに余裕ぶってるうちに葬るのが手っ取り早いでしょう」

ロイが怖い。

今まで飄々としていた猫までも、ロイの放つ冷たい空気を感じ取ったのか耳をぴくりと動かし彼の方を見据えた。緊張した空気が一瞬漂うも、猫はロイを眺めてしばらくすると、ふ、といかにも鼻で笑ったとしか言いようのない反応を見せた。初めて見せた、ただの猫らしくない反応。

ロイから表情が消える。

「…フィー、少し離れてて。見ていられないなら目を瞑って、耳を塞いでおくといいよ」

「ま」

待ってもらえなかった。

## 45・公爵の娘

せつかくだからお祭り気分を味わおうというチツトの提案で、宝石強奪を一旦中止し変装して街に繰り出していたギルとチツトの2人組は、帰ってきた宿でのんびりと休んでいた。例によって少女にべつたりと張り付いていた青年が、びくり、と肩を揺らしたのでギルはゆっくりと振り返った。

「どうしたの、チツト」

「今。ギルはなんも感じなかった？」

「特には」

チツトは、口元をゆがめて好戦的な笑みを浮かべた。

「ふうん。今ねえ、俺と契約してる魔が、俺と同調するくらいすっごいびびったみたい」

「なぜ」

「なんか対魔用の相当強力な術が暴発するぐらいの強さで、一箇所で一息に展開されたっばい。その力を感じたって。誰だろうね、俺会ってみたいな、『それ』の持ち主と」

「力を感じたって、自分に向けられたわけでもないのに怯えること？」

「死ぬほど嫌いな食べ物臭いに埋もれちゃったようなものかな？」

「それは嫌ね」

「…あんなの浴びたらひとたまりもない。あ、俺なら避けて見せるけど。ギルが俺にめろめろになるまでは死ねないし」

「チツト、王の冠と宝石を奪うのは祭りの中での彼の剣舞の折にしましょう」

少女は相変わらず聞き流していたが、青年は頓着しない。

「了解。今度こそ、全部盗っちゃおうね」

「ええ」

祭りの一日目は更けていった。

一週間続く祭りも、残り2日となった日のこと。

「レオナンデお嬢様、お見合いの話を持ってきましたわ……お嬢様？」

とある邸宅にて、邸宅に仕えている一人のメイドがこの一家の一人娘の部屋の扉を開けると、中はもぬけの殻だった。もとより殺風景な部屋は、部屋の主がいらないとなおさら薄ら寒いようにメイドは感じた。ぶるり、と一つ震えるとメイドは引き返す。

この家の次期当主となるものの母に当たる人、現当主の奥方の元へ報告をするために。

「奥様、レオナンデお嬢様はどうやらご不在のようです」

「いよいよこの家を追い出されるとなったから逃げ出したのかしら？ 勘のいいこと」

ふわり、鳥の羽がふんだんに付いた扇を動かして濃い紅の塗られた唇は笑みを浮かべた。それは上品で毒々しい笑み。

「……まあ、今日に限ったことじゃないのだけれど。まったく、夜遊びも大概にして欲しいものだわ。毎晩どこをほっつき歩いているのかしら、あの恥知らず」

「王都の外れの方にいらっしやっているようですけれど」

メイドは手招きを受けて、黒髪の凛々しい青年の絵姿が描かれた一つの書類を淑女へと手渡す。

「王都の外れ、ねえ。あの子に似合いのいかがわしい薄暗い裏通りが連なっているあたりね」

「奥様!？」

扇を机に放り投げると、奥様ことレオナの義母は、レオナの見合  
い相手の詳細の書かれた紙をびりびりと破り捨てた。

「あんな子の相手など、下級貴族で十分よ。本人に流れる血が『雑種』な上に、既にどここの馬の骨とも知れない人間と通じているかもしれないのよ？平民出の王様なら確かに気にはなさないだろうけど、釣り合いと言うものを考えて御覧なさいな、ヴィエロア王様は仮にも竜の血を受けたお方」

「……なにをしている」

低い声が響いた。

「あら、あなた。どうかなさった？」

「どうもこうもない、こんな大切な書類を破くなどと、お前は一体何を考えている!？」

「あなたこそ、そんな大声を出すなんて、どうかしてしまったのではなくて？」

「…言っただろう、レオナデの利用価値は王妃に据えてしまえること。それが一番有益だ」

「ええ、聞いたけど。…ねえ、冷たい言葉を無理に使わなくていいわよ。あなたつたらまだあの女の面影をあの子に見出して、あの女の代わりにあの子を幸せにしてやろうなんていう甘い夢を見ているのではなくて？」

「何を馬鹿な」

唾棄するように言った夫の言葉に、妻たる公爵夫人は首をゆるりと傾げた。長い付き合いから、動揺すると夫の手が握り締められるのだと知っていたから。…丁度今、彼がそうしているように。



「『王様』なんて、レオナにとって良い嫁ぎ相手が見つかってあな  
たほつとしたのでしょうか？レオナを彼の妃候補にならせるために随  
分頑張ったみたいじゃない」

「家の、ためだ」

「そんなこと、本当はついでのなのでしょう。一番の理由は死んだ女  
のため。妄執に取り付かれるのもうお止しになつたらいかか」

「…話にならん。言っておくがお前が何をしようこれは決定事項  
だ」

公爵は、メイドに破れかぶれの見合いの書類を拾っておくように  
命じると、苛立たしげに出て行った。残された女は笑う。半ば狂っ  
ているように。

「あの女の娘が幸福になるなんて。許すものですか」

そんな女を、まだ物心の付いていないような幼い少年はじつと見  
つめていた。

「あなたの心を持っていったまま、勝ち逃げした女。あのいやらし  
い売女。ねえ、リュカ、リュカはあんなふうな女に惚れちゃだめよ、  
しまいにはとんだ腑抜けになつてしまつて物の役にも立たなくなる  
わ」

「……」

「リュカ、お返事は？」

眦の釣りあがった母親に睨まれて、少年はぼそりと答えた。

「…うん、お母様」

この家はどこまでも空気が閉じて息苦しい、と。ばらばらの紙片  
を拾いながらメイドは思った。お嬢様が家出したくなるのも当然だ  
ろう、とも。メイドとして長らくこの家に仕える彼女は、幼い頃か  
ら見てきたレオナのことを決して嫌いではなかった。

……レオナにそれは伝わっていないようであったが。レオナはこ

の家のもの全てを拒絶している。仕方ないことかもしれないけれど、家出を初めてして以来、ふとした折にレオナが見せるようになったどこか幸せそうな表情がこの家でももつと見られたらいいのに、と彼女は思う。

今頃、レオナお嬢様はその幸福な表情をくれた場所にいるのだからかとメイドは一人想いを馳せた。

「フィー！ 準備できた？」

開店休業状態のエルフランド工房には遊びに来たレオナは工房の2階に向けて叫んだ。

祭りで売れるのはもっぱら安い細工であり、工房の見習いたちは外で出店を作つて腕によつてはそこそこ儲けているようだが、工房の本格的な高い細工はこういった日には売れない。そのため店を閉めてもさして問題はなく、祭りの間は夕方から店を閉めることにしている。その閉店後に、フィーとレオナは祭りに共に行く約束をしていた。例年になく天気に恵まれ、外ではそろそろ日が暮れ、美しい月が昇り始めている。

「ああ。待たせてすまなかつた」

フィーがのたのたと、多少服に足をとられながらも階段を降りてきた。

「…フィー、何その仮装？」

「魔法使いだが…」

黒一色のローブに黒のトンがり帽子をつけたフィーを、斜めに構えてレオナは見た。レオナの方はと言うと、鮮やかな黄色の薄くひらひらとした衣装をして紫の花冠を頭に載せている事から、花の妖精の仮装と知れた。ちなみに町娘の多くがレオナのような妖精の仮装を選ぶ。普段男装をしているフィーにそれを期待するのは間違っているが、レオナはフィーの仮装に一瞬押し黙った。さまざまな仮装をしたものが集まるので、取り立てておかしいというわけではないけれど、フィーはもっと華やかな色を身につけても似合うのに、と彼女は思う。

祭りも明日を最後に迎えた今日、王都では仮装して貧富の差なく入り乱れて楽しむことになっている。前夜祭の静かな行列と比べて、今日なされる仮装行列は騒々しいことこの上ないと評判のものだ。踊ったり、酒を掛け合ったり、歌ったり、肩を組んだり、時々殴り合いをしたり。

「この仮装、変かな」

「そんなことはないけど。魔法使いかあ。へえ、随分とステレオタイプな魔法使いね。それに、そこまでするなら連れるのは黒猫じゃないかしら、フィー」

「こいつは、もともと連れて行く予定じゃなかったんだけど」

艶やかな毛をつくろうと虎猫の姿がフィーの足元にあった。フィーから多少距離を置いてはいたが。

「ニャー」

猫はレオナの視線に顔を上げると、甘えるように一声鳴いた。

「まあ可愛いからいいけど」

レオナが手を伸ばして撫でると、猫はごろごろ喉を鳴らしてそれに答えた。

「白々しい。この間のように流暢に喋ってみせたらどうだい、獣」

白く流れるような衣装を纏い、月桂樹の冠をつけたロイが現れたのを見て、恐らくフィーに『ロイは月の女神がいい』なんて言っただけで無理やり着せられたのだろうな、とレオナは思った。一見本当に女神がそこにいるのではと見紛うほど相変わらず美しいと言っただけが似合う男だ。ロイの長い銀髪は、レオナではとても真似できないくらい複雑に編まれている。フィーは自分の髪を扱うのは下手だが人の髪は見事に結って見せるから、フィーが進んでやったのだろう。それにしても。

猫とロイの間に漂う空気が寒い。

「猫が喋るわけじゃない。…ロイさん、一体どうしたの？」

「触らぬ神に祟りなしだよ、レオナ姉ちゃん。放つといた方がいい」

ロイの後ろからちよこちよここと降りてきた、小さな道化師の格好のシライがこっそりと呟いた。

しかし、フィーは遠慮なく言った。

「ああ、ロイがこの間この猫にコケにされたんだ」

「如何にも」

猫はフィーのその言葉に頷いた。

「…喋った？」

レオナは驚いて固まった。

「ニヤー」

「気のせいだよ、きつと」

「気が向いたらまた喋るだろう、多分」

「永遠に喋れなくしてやりたい」

「ちよつと。同時に話さないでくれる？なんなの、この猫は」

レオナが怯えるように聞いた。

「フィーの下僕だよ、レオナ。気にしなくていいから」

ロイは微笑む。

「ロイ、その言い方はなんだか嫌だ。私は何者なんだ」

フィーが顔をしかめている。

「失敬な若造め、我に負けた分際で」

また猫が喋る。

「僕の術具を破れずにフィーに触れられない分際で」

ロイと猫が睨み合う。

「…なんかよく分からないけど、ともかくこれは喋る猫なのね。私猫が話すの初めて見た。…変な感じ」

よく分からない存在でも、レオナは受け入れるのが早かった。

フィーはそんなレオナに笑いかけた。

「あはは、確かに。…まあなんだ、家でこの人語を解する猫を飼うことにしたんだ。そんな猫は物珍しいだろう、生活に困窮したらきつと高く売れるし」

「フィーってそういうところあるよね…」

シライは溜息をついた。レオナはどこか非難するような目でフィーを見る。

「…フィー。あんた、私についても誘拐でもして身代金を請求すればいいな、なんて思ったんじゃないわよね？」

「ロイじゃあるまいし、そこまで考えなかったが」

「ロイさん、そんなこと考えてたんですか!？」

「犯罪者にはなりたくないから勿論断念したけど」

「考えは、したんですね…」

「たかだか猫に負けた存在に気を病む必要はない、お嬢さん」  
そのたかだか猫に慰められて、レオナはなんとなく複雑な気分になった。その後ロイと猫がなにやら取り取りしていたが、聞く気になれなかった。

フィーが場をつくろうようにレオナに問う。

「レオナ、今日はどこに行きたい？」

「え？」

レオナはその言葉に頭を悩ませた。祭りも今日明日が最高潮であり、今夜は催し物が目白押しである。

「うくん、フィーと踊るのは必須だけど。他はまあなんでも…あ、そう言えば今日って王様の剣舞が見られるんじゃない？」

「剣舞？」

「そうそう。急にそんなことするって決まったみたいで。私、それに行ってみたいかな。剣舞の後に、王様と試合が出来るらしいの。英雄なんていわれてるあの人の強さを実際見てみたいじゃない？まあ、名乗り出るような人は早々いないと思ったけど、なんでも勝負にかけるものが『5つの涙』とか言うところでも希少な宝石で、それ目当てに挑戦する人が何人かいるみたいよ」

あまりのことに、フィーは絶句した。ロイは苦笑している。

「『5つの涙』を褒賞にするだと？あの馬鹿、何を考えてるんだ…」  
「確かに、賊が来るのをただ待つような性格じゃないと思ったけど。あの王様、たいした自信だね」

「もう始まっていると思うけど。どっしする、行くっ。」

レオナが問う。フィーは、

「…行く」

そう答えて、頷いた。

## 46・剣舞と猫の呟きと

フィーは、初めて見た。彼が剣を手にしているところを。

まるで土砂降りみたいな歓声の中、どこか仄赤い月明かりに照らされた真つ白な神殿の階段の途上まで登る人は、王様。人ごみの端にいるフィー達からは相当に離れているはずなのに、彼は、やたら大きく見えた。白い石段に、まるで死神を模したかのような彼の黒い服が映える。伝統衣装の長い裾や袖が一步ごとに空気に撓み、結わすおろされた艶やかな黒い髪がゆらゆらとその背でたゆとう。

戴冠式の日を思い出す。

あの日フィーは神殿の内側から、小さい窓越しに同じ階段を昇ってくる彼を見ていた。あの時感じたのは、一つの歴史の終焉と始まり、そして混じりけのない一心な憎しみ。

では今は？

今の彼の頭には冠があるが、フィーの心は凪いでいる。しかし。

繋いでいるレオナの手が少し、震えるのを感じた。これは私の震えでもあるのかと思う。

感じているもの…それは多分、畏怖、だ。

あの人を人と思ったけれど、今、まるで、まるで自分とは違う生き物だと思った。

ただ背筋を伸ばし階段を昇り行く人の何が、私にそう思わせているのかとフィーは訝った。

やけにヴィーが、遠い。

『王様』は、長い長い階段の中心で立ち止まる。振り返る。一瞬



だけ、なぜか青い目が真つ直ぐにこちらを捉えた気がして、フィーはどきりとした。

けれどきつと気のせいだっただろう。

王様はその目をゆっくりと閉じたから。それはまるで何かに祈るようだった。それに合わせて時が止まったように、静かになる神殿前の広場。王都中の人間がここにいるのではないかと思えるような数の群集が唐突に黙ったから、フィーは少し怖くなった。何かを抱え込んだ沈黙が、押し掛かるようで。

王の剣舞を行うことはいきなり決まったものだという。たかだか急ごしらえの出し物だったはずだ。しかし、階段前には赤の衣装をまとつ王の騎士と青の衣装をまとつ神殿騎士が交互に並び、これ以上ない不可侵の舞台を作り上げている。

人々の目がたった一人の男を見つめている。

…やがて青く光る目を開けると、フィーは剣をすらりと抜いた。

儀礼用の剣ではない。長く厚みがあり、どこか無骨な感じがする実戦用の剣だった。おそらく、あれで闇を払いつくしたのだろうと思えるような、使い込まれてそれでもギラリと鈍く光る剣。それを一度、彼は天に掲げる。赤みを帯びた月をまるで睨むようにして。

突然に、フィーは、剣を凧ぐとそれに伴って滑らかに動き出した。そこにはまるで空気の抵抗などないかのようだ。

くるくると剣が回る。軟体動物のようにしなやかで、常人が真似できないような大胆な動きを、階段の高低を生かしながら行うヴィ

「。時にまるで曲芸師の様に大胆に、あるいは踊り子のように妖しく繊細に。緩急をつけてヴィーの体の一部のようなになった剣が、その動きの急なときには速さのあまりにまるで円を描くように見えた。ただ、目が離せなかった。あまりにもそれは流麗だった。」

彼は初代の英雄の彫像が、動き出したかのように威風堂々としていて美しかった。

「ヴィーじゃないみたいだな」

「フィーはぼつりと言った。舞踏会の彼を眺めていても、そんなことは思わなかったのに。」

「そうだね…すごいな」

「ロイも、魅入っている。」

「どこで覚えたか知らないけど、あれは竜に捧げる舞みたいだ。…冠から、彼に祝福の力が流れているのが僕でも分かる」

「ロイが目を細めた。力を抑えているロイでさえ見えるというのだから、よほど強い力をヴィーは受けているに違いない。ロイはヴィーと多少仲が悪そうだとフィーは思っていたが、芸術の一端である細工というものを扱うロイの職業柄、生み出されるものが美しくければそれをなすものが誰であれ惹かれ、感嘆するものなのだろう。自分と同様に。」

「ヴィーに流れる力、どんな風に見えるのだろう。フィーはふと、ロイが羨ましくなった。目を凝らしてみても自分にはやはり、見えない。それでも王様の舞は、美しかった。…ひよっとするとこのように惹かれる感覚は、無意識に彼に流れる力を感じているからかもしれないとフィーは思う。レオナが横で呆けたような顔をしているのもとりたてておかしいことだとは思えなかった。もっとも、集った人間が皆ヴィーに魅せられていたのだけけれど。」

「見たいか？」

シライに抱えられて付いてきていた猫がフィーにそう言った。  
「見せてやるうか」

頷く間も首を振る間もなかった。ふ、と不思議に視界が開けて世界が明るくなったと思った瞬間、フィーは気付いた。それは王から発して都中に放たれる光だと。眩しくはない、しかしそれはまるで太陽のようで。光の中で王は舞う、舞い続ける。

陶然とすること数刻。

グイーはぱちんと鞘に剣を収めた。その途端暗くなる視界に、フィーは思わず瞬きをした。ようやく慣れてきて目を上げると、一礼をして顔を上げた彼はいつもどおりのグイーだった。そのことにどこか安堵した自分にフィーは首を傾げる。にやりと笑う彼に、沈黙と緊張感は一気に霧散した。

口笛や、拍手、王の名を呼ぶ観衆に緩やかに手を振って笑うと王は試合の準備のためか去った。

「今のが、竜の力」

「見えたの、フィー!？」

「ああ、一瞬だったけど」

あれはやっぱり。

「どうだ、我と契約すればこの限りでなく様々なものが見えるが」  
足元にいる猫によるものだった。

「…見えることは余計なこと、とはいえないか。フィー喜んでるみたいだしね。でも、見えすぎて大変だよ」

と呟くロイの言葉に、力を制御しきれないときの彼の苦痛をフィーは思い出した。だから頷いて、「断る」とフィーは言った。猫は

溜息をついた。

試合の始まりを待ちながら、フィーはほつと一息つく。人ごみはここから動く様子もなく、興奮したささやきを交わしている。今のが前座だというなら試合はどうなることやら。

ふと、ばたばた音がするのでふと見下ろすと、シライに抱えられて付いてきた虎猫が不愉快そうに尻尾を地面に打ち付けていた。

「くすぐりたい…どうしたの？」

レオナが猫の尻尾が足に当たったために、声を上げた。

「どうにも居心地が悪い。あの男め、都の結界を強めおつた…魔どもが締め出されている。この後行われるという試合に雑魚は要らんとそう言うことかな」

「…猫、それはどういうことだ」

フィーは分からずに猫に問う。街に流された張り紙からは、賊は二人とあつたはず。一人は魔法使い、もう一人の少女のことはよく分からないがともかく『5つの涙』を欲する賊は二人だけだとフィーは思っていた。

「まさか他に、いたのか？宝石を狙う者が」

フィーは首を傾げた。

「気付かなんだか。祭りの騒ぎと人に紛れて、結界を越えうる魔という魔が集っていた」

だから力が使えないのだとばやきかけたフィーを遮って、猫の言葉にレオナが声を上げる。

「ええ！？魔がうるついでるなんて気味が悪いわよそれ。どうしょ

う、私ひよつとして魔の誰かに目をつけられたかも。だって若く愛らしい娘を魔というのは食らうのでしょう？私なんて格好の餌食だわ」

「いや、それはない」

猫はぴしゃりと言った。

「なんだか辛口だね…冗談のつもりだったけど傷ついたよ」

レオナが悲しそうにする。思わずフィーも非難の目を向けると猫はぱちぱちと瞬きをした。

「それはすまん、奴らには今『5つの涙』以外には目が向かんといい意味で言ったのだが。」

それにしてもまったく気分が悪い。こんな時に呑気に剣舞など行うというからヴェイエアロア王は単なる目立ちたがりの阿呆かと思つたが、あれは竜の力を受けて己が力を増すためにやったのだらうよ。なるほど効率は悪くない。結果的に布かれた結界によって魔の弱いのは払えるし、残った輩も力が削がれておらう」

その言葉に思わず猫のいる足元を向くと、正直我もかなりここにいるのは不快だと言って虎猫は顔を歪めた。猫が顔をこんなにしかめているのをフィーは初めて見た。猫は目の上をたわめ、なんとも不機嫌そうに金の目を凝らし、髭をびくびくと震わす…悪いが正直面白い。

「いつそ君もいなくなればいいのに。元いた場所に帰るといい」  
ふとロイがそう言った。

「面白そうな出し物を見逃す手はあるまいよ」  
猫は王様と戦ってみる気はないらしい。

「…君は、石が欲しくないのかい？」

そんな猫にロイが尋ねると、魔であるそれは笑った。目を瞑って笑う猫も面白いとフィーは思った。こんなに様々な表情をするなら、猫を飼うのも悪くはない。

「あんなもの。我には必要ない。扉を開いたとて私の望むものは手に入らぬだろうよ。あんないい加減な伝承に翻弄されるほど若くはないしな」

「…『世界は鍵を開く者の思うままに』、か」

ロイは呟いた。冠と鍵にまつわる言い伝え。だが、扉を開いた英雄だつて、言い方は悪いが結局極めて普通に死んだはずだ。

「確かになんとも曖昧な言い伝えだが、なにもかも手に入りそうな響きだと思わない？魔という魔、そればかりかそれを知るあらゆる者があれを欲しているのに、要らないなどと簡単に言うね。では君は何を求めている？」

「勿論この主だ」

フィーのほうを向くと、金の目を光らせて虎猫は笑う。その時になつてフィーははつと我に返った。そうだ、これは魔物だつた。ロイの術を全て受け止めてなお平然としていた猫離れしたこの猫は、あの日、『我が名を呼べ、さすれば主が死して我が血肉となる日までは仕えよう』などと恐ろしいことをたまったのだ。どうやらそれがこの魔の正式な契約条件であるらしい。死後であるとはいえ自分の肉体が魔に食われるなどぞつとしない。それで当然のごとくフィーが断つてから、猫はどうやら拗ねてしまったのか何を聞いても無言だつた。手の打ちようもなくフィーは魔除けの術具だけして放置していたが、動物好きのシライが餌をやるうちに工房にすっかり居ついてしまった。

そんなわけですっかり忘れていたものの、思えば私を喰らう気で

いたのだ、この魔は。

「やはり帰れ」

ロイが低い声で吐き捨てた。飄々と猫は受け流す。

「おやおや。ここまで来るのに相当苦労したというのにひどい言い草だな、我らが麗しき『女神』様。故郷を捨ててまでしてようやく念願の主の元にやってきたのに今更どこに帰れと」

「土に」

いろいろと魔が気になることを言っているが、それをロイは無表情に全て無視した。真顔のロイはなまじ顔が整っているだけに怖い。だから彼はいつも微笑みを絶やさないようにしているのに、今に限ってはどうかやら失念しているらしい。

「なあ。猫、私など皮ばかりでうまくはないぞ。だから早々諦めてくれると嬉しい。私はそれに魔力など要らない」

フィーはそう言ったが猫は笑うだけ。

「まあそう言ってくれな  
しつこい。」

「…それより魔はどうして石に、鍵に気づいた？」

フィーが尋ねると猫は答えた。

「闇が覆ったであろう。逆に長らく覆っていた結界が解かれたのだから、鍵の存在など筒抜けも同然」

「しかし結界の無くなった後すぐに石を奪いに来なかったのだから、結界は関係ないと思っていたが」

「…あの時は王都中に屍鬼がいた。我々にも暗黙の了解があつてな、屍鬼には手を出さない」

「何故」

「さて、な。まあ我々魔というのは無垢に綺麗なものが歪み汚れる

瞬間が好きだ、元より歪んだものなど相手にしたくないのやもしれん」

何か誤魔化されたようにフィーは思った。

「それにしても今日はよく喋るな」

「体調が悪いところなる」

フィーにそう答えた虎猫の声は確かにげっそりとしているようにも思われた。

「普通逆じゃないかな」

ロイが言くと、虎猫は、

「放っておけ」

とだけ言った。

それから猫はまた黙り込んだ。聞きたいことは山のようにあるのに、何故だか積極的に聞く気がしなかった。金に光る目を見るたび、本当は頭が痛くなる。

何を、忘れてっているんだろう。もどかしくて、フィーは、目をぎゅっと瞑った。

「どうしたの、フィー？気分悪い？」

「そうよ、顔色が悪いわ」

目を開くと、フィーの脇にいたレオナとロイに肩車されたシライがこちらを心配そうに覗き込んでいた。フィーは笑みを浮かべる。

「平気だ、シライ、レオナ、なんでもないんだ。ありがとう」

「…帰る？フィー、無理はよくないよ」

ロイの手がとん、と頭に載せられた。

帰る…？

もうすぐ、『5つの涙』をかけた試合が始まるのだ。フィーは、やっぱり戦う王様を見てみたかった。だから言った。



「大丈夫」

「…あんまりきつくなったら言ってね」

髪越しに伝わる冷たい手の感触が痛みを持って行ってくれるように、フィーはしばらくそれに身を任せた。

## 47・試合

「勝負あり」

打ち倒された敗者と、それを見下ろす勝者。なんとも明快な構図を目にしつつ、フィーは大きく不満を抱いた。

…正直に言おう。

決着が着くのが速過ぎてよく分からん。

「まあ、宝石目当てに一攫千金の夢をかけたとは言っても、あの王様を相手にたかだか商人風情じゃしょうがないわよね」

レオナが隣で溜息をつく。

確かに圧倒的な実力差であって、あの商人の挑戦は無謀以外の何物でなかったといえよう。いや、私も何なら宝石のために挑戦したいくらいではあったので、レオナのようなことはとても言えないが、とフィーは思った。

哀れな商人はずると舞台から引き摺り下ろされていく。一閃で彼を気絶に追い込んだ男は一言、「次」と言った。王様は冠を外してきたらしく、服装だってラフな格好をしている。なんとも余裕綽々としていて隙だらけに見えるのに、実際そうでないところがなんとなく腹立たしい。

古代からあるという神殿だけあって何か不思議な仕組みがあったらしく、地響きを立てながら広場が闘技場のように変形したときには驚きもしたがもはや誰もそんなことに頓着してはいない。既に戦いの火蓋は切って落とされたのだから。

ちなみに使われているのは実剣だ。使い慣れた剣でなければ不公平になるだろう、という王様のわけの分からない理屈は置いておいても、毒など仕込まれていたらどうするのだろう、ヴィーは。フィ

ーには理解できなかった。

今のところ魔はどうやらいならしく、彼に挑むのは人間ばかりであるのか、先ほどからばたりばかりと面白いようにヴィーに立ち向かつては人が倒されていく。この場で参加したいものは勝手にしるとヴィーが挑発したために、数人だったはずの挑戦者は元の十倍ほどには増えた。確かに、英雄と剣を交える機会など、なかなかあるものでない。王様の気さくさを目の当たりにして、やってみたいと思いたつ者が結構いたようだ。フィーとしては、一応王様も人であるからしてその体力を心配しなくても良かったが、なんだかアリが人間に挑むくらいには差があるらしいと分かったために心配は無駄に終わった。いやはや、ヴィーときたらまるで御伽噺に出てくる怪獣のようだ。その強さに観衆は熱狂して王を讃えた。

それにしても、戦うときのヴィーの目が今まで見たどんなときよりも楽しげに輝いていることがフィーには気になった。いや、むしろぎらぎらと血走ってさえいるような。白い歯が零れるほどに笑う彼を見たのは初めてかもしれない。人格が違っているのではとすら思える。

「普通の人間ではもはや太刀打ちできないといったところか」

フィーは思わず肩を落とした。間違いなく自分は敵わなさそうである。あんまり弱いならいつそ自分が宝石を手に入れてしまおうかと思っただけけれど、ヴィーの奴、竜の力を下ろしているとはいえ恐ろしいものだとしてフィーは呻いた。これが仮にも英雄たる所以か。

「…倒された中には魔もいくらか含まれてはいたようだぞ。あれは本当に人間か？」

長いことただ黙って眺めていた猫がそんなことをぼやいたのでフィーは驚いた。

…魔たちは結界で力を削られることになったというからその所為だろう、きつと。フィーはそういうことにしておいた。

「まあ、魔はその本性を隠しているうちに討ち取るのが手っ取り早いというのは彼も僕と同じ意見みたいだね。できれば一撃で、というところも僕と似てるけど、これだけの結界の力に耐える魔相手にそれをするとは恐れ入る。戦闘狂、か。噂に違わないとはこのことだな」

ロイがやれやれ、と言ったように呟く。

ヴェエロア王は戦闘狂。聞いてはいたが、あんなに強いなんて。

「次。いないのか？…しょうがないな、じゃあ飛び入り参加は終わりということではいいかな」

新たな挑戦者を秒単位で倒し、汗一つかかずに問うヴェーの誘いに答えるものはいなかった。王様と斬り合いをして気絶してみたいという猛者はどうやら出尽くしたらしい。

……と、思ったのだが。

「はいはい、43番チット、王様、俺参加したいですう」

ひょい、と階段も使わずにジャンプして人間一人分ほどの高さの舞台上上がった赤毛の男が一人大声で名乗りを上げた。

「まさか変装すらしてこないとは」

少し目を丸くした王様に男はへらりと笑うと、

「そんなことしたらフェアじゃあない、と思わない？油断したあんな相手に戦うなんて、面白くないし」

と言った。

「ほう、たいした自信だな。…もう一人の少女の方はどうした？」

「…『あなたの計算どおり』、冠の方を盗りに行った。二人を離れ離れにするなんて、オレ本当はいつだってギルと一緒にいたいのに、憎いことするねえ。嫉妬?」

「実際の俺の計算では少女がこちらに来る予定だったが。それにしてもなぜ嫉妬などするといふのか」

「あゝ、そつかあ、まだギルと王様は顔合わせてないんだっけ。可哀相に」

「なんのことだ?」

「さあね?」

「…だって」

聴力が異常に優れているシライが壇上の二人の言葉を拾ってくれた。

「あれがチツト、か」

ロイの水色の目が色を強めて赤毛の男の顔を睨んでいる。まるで道化のように大仰に、王様の言葉に受け答えする奇妙な男をフィーも眺めた。

…頭痛が強まるのを、顔に出さないように努めながら、フィーは尋ねた。

「私は、あれ相手に戦ったのだな?」

「恐らくは」

ずきんずきん。痛み続ける頭に、耳鳴りが強まり、幻聴のように聞こえてくる音があった。

ばりん、とガラスが砕ける音。

途端流れてくる映像。美しく空中に散乱するとりどりの宝石。ナイフを手に、血まみれで笑みを浮かべる赤毛の…

「魔法使い、つてもつと暗いイメージだったけどそうでもないわね。にしても、あの人が暴れて宝石店をばるぼるにしてフィーに怪我負わせたなんて。陽気そうな人だけど」

レオナが呟く。

宝石店の惨状を齎したのは？

叫び声がある。絶叫の声、放たれる力、これはチットと言う男でなく、

「…フィー？ 大丈夫？」

「思い、出した」

私の所為、だ。

「フィー！？ 思い出したつて、どこまで…」

ロイの声。どこまで？

続けて堰を切ったように流れてくるもの、閉塞した部屋、薄汚れて欠けた皿、優しく笑った人、光の差さない石造りの…

「お、あれが5つの石か。揃ったな」  
フィーとロイの間の緊迫に構わず、猫が呟いたので、思わずフィーは疼く頭を抱えつつ舞台上で対峙する二人の手に掲げられたものを眺めた。

「涙…」

そこには、月の光にそれぞれの美しさを誇る赤・青・深緑・シエリー・透明の色をした涙形の石があった。離れた場所でありながら、大粒の宝石は圧倒的な存在感を放っていた。

「これをかけて、戦うのだな、賊」

「うん、俺が勝って全部持っていくからその言葉を裏切らないようにね、ヴィエロア王」

神殿騎士を伴った神官長がやって来て、2人の持つ宝石をそつと預かり宝石箱にしまう。彼が舞台から降りると、途端に殺気がヴィーとチツトの間に漂った。

「王様、負けたら実験材料にしてあげるよ。ああ、楽しみ。神たる竜の血を受けた男で実験なんて、滅多にできないからねえ」  
「残念ながらご期待には添えないな。俺が負けることはない」

次瞬、王と赤毛の男は相手に向かって剣を抜き、同時に動いた。

「ぶわり、と唐突に大きめな炎が上がると、それは王様を目指して直進する。」

「うわ、あれが魔法！？ 王様大丈夫かしら」

レオナが声を上げたが、それは王様になんら痛痒を齎さなかった。  
『竜の加護』、私と同じだ、とフィーは思った。

勿論チツトは知っているのだろう、王様の視界を火が覆った瞬間に常人離れた速さで大剣を持って迫る。きつと王様にはチツトの姿が見えないはず。

「あぶな、」

ガキン、と金属が衝突する鋭く澄んだ音が響いた。

受身なのは、チツトの方。

「後ろから襲うなんて卑怯。あんた仮にも元騎士でしょ」

「あくまで元だ。戦いの場で卑怯などと言うものではないぞ」

いつの間にチツトの背後を取ったのか、笑う王様。

「ほんと、気配消すの上手いねえ。王様も立派な盗人になれるよ、」

どう？稼ぎは悪くない」

「断る」

言い合いながらも、斬り結ぶ二人。しかしどちらの刃も相手に当たることなく、剣戟だけが闘技場に響く。

「チットの方が少し速い、かな。力は王様が多少上だ」

ロイが言う。

どうやら総合的には、2人の実力は拮抗しているように見えた。しかし。

「『元』騎士か。よく言ったものだ、術力を使わないあたり騎士道を重んじているとしか思えんな、あの男」

猫がぼつりと言った。フィーもそう思った。神殿騎士であった彼なら、術力を使った戦い方が得手の筈。

「まあ、結界の方に相当力を回しているようだからそのせいかも分からんが。実際これで斬り合いながら術力を操る余裕まであるなら真に化け物だ……不可能ではないだろうが」

なるほど。続く猫の言葉にフィーは頷く。そう言われてみれば納得がいった。相手も魔法がヴィーに利かないことを思えば、純粹に剣で決着はつくということか。

勝負はどうやら長引きそうだ。固唾を呑んで見守るフィー達を置き去りにして、いつの間にか猫が消えていたことに誰も気付かなかった。



## 48・守る者奪う者

「あれが『守りの騎士』クエインさんの結界か」

「すげえな。隙間がないぞ、あれ」

神殿の奥。そこに今宵配された数人の神殿騎士たちは、こっそりと囁きを交わしあつた。彼らは、王が先ほど置いていった冠の為にその警備に回されていたのである。今のところ、侵入者はいない。

……この部屋まで辿り着いたものは、という意味だが。王が強めた結界により弱った魔は、神殿中に配置された騎士の数に負けた。

「王様の戦いぶりも見てみたけど、しごかれた思い出が蘇ってくるのもきついしな。…むしろクエインさんの張る結界が見れるなんて僥倖だったかも」

神殿騎士だったころのヴィーに鍛えられた面々はその言葉に苦笑を交わしあつた。ヴィエロア王、彼を追って王の騎士になったものもいる。クエインもまあ、その一人といえなくもない。

ここに居る彼らは神殿に残った組だ。神官長に捕まったとも言えるが。

「確かに担当がここで良かったかもな。…この結界、素晴らしく綺麗だし」

七色に光るヴェールは、冠を覆い隠すように球状になってそれを守っていた。術力があるからこそ神殿騎士となった彼らにはそれは良く見えた。結界というのは通常網状になっているものであり、あのように隙間がないものとなると要する技術と集中力は途方もないはずだ。それをあっさりやってのけた男は、すっと背筋を伸ばして冠の傍に立っている金髪の文官風の男。

「これで剣術もかなり使えるっていうんだから、王様の傍付きって言うのもクエインさんなら頷けるよ」

「神様って不公平だ」

「神に仕える神殿騎士の言葉じゃないぞ」

「敵が来ないからと弛んでいないで、気を引き締めてください。いつ何時襲い掛かれても応じられるように」

ふと上がったクエインの声に、彼らはすみません、と答えて改めて警備に集中し始めた。

クエインは腹を立てていた。王は偉そうな顔をして宝石を餌に敵を誘き出す矢面に立って、冠を守れと自分をこんなところに置いた。騎士のうろつく神殿の最奥部、しかも結界をクエインに張らせることでここを守らせて。ヴィーはこの冠を一番安全なところに置きたかった、とそういうことなのだろう。

彼以外に魔や魔法使いを相手に戦うなどそうできることではないが、一人とは無謀に過ぎる。王の自覚があるのか疑わしい。

あの戦闘狂のことだから、何も考えていないのかもしれない。ただ暴れたかっただけかもしれない。だが恐らく違っていて。

「フィオレンティーノのことがそんなに重要ですか」

稀代の細工師フィオレンティーノ。師の作ったという冠の為に、仮にも王に向かってあれだけの怒りと憎しみを見せた人間だ。冠がもし、闇にでも奪われようものなら、あの細工師はどんな反応を示すか。ヴィーを責めることはないかもしれない、けれど一人でその奪還に向かうくらいのは軽くやってのけそうだ。それを王は案

じたに違いない。

「面倒な……」

誰でもいいから王に嫁がせて、彼の変な気の迷いを晴らすべきだ。この一件が終わったら最優先でそれに取り掛かろうとそう決めたクエインの耳に、奇妙な音が聞こえた。

それは、空間が歪むような音。

感じたのは、痛いほどの嫌悪感。これは、

「ここに冠を置いたのね」

暗い気配を纏いながら現れた何かは、間違いなく『闇』そのものだ。何度もそれと対峙したクエインは理解した。

ふ、と深くフードを被った闇は、冠の周りに集う騎士たちを、クエインも含めて見回した。背は随分と低いのに、まるでその睥睨はこちらを見下ろしているかのよう。

「……あなたたち、逃げなさい」

クエインは部屋に控えていた神殿騎士たちが突如現れた侵入者に迷わず構えをとるのを見てそう言った。背中を流れるのは冷たい汗。

「な、何言ってるんですか副長！」

驚いた騎士の一人が声を上げた。懐かしい呼び名で呼んでくれるものだ。神殿騎士たちから上がる非難と不満を受けて、クエインは笑った。

「私が逃げたいくらいなんですよ？ それを感じすら出来ないならここに意味などない。足手まといになりたいんですか」

その言葉に押し黙ると、騎士たちは出て行った。

「助かるわ、無駄な手間を省いてくれて」

「あなたに人質などとられたらたまりませんから、それだけです」

そう答えながらも、フードを外した相手の顔を見て、クエインは硬直する。

「……『ソラ』？」

薄茶色の髪。澱んではいるが確かにとび色の瞳。その顔立ち、姿、それは王が愛した少女そのもので、クエインは剣にかけた手を思わず下ろす。

「ソラ、何故君がここに」

クエインの声は我知らず動揺に震えた。

「……何を言っているの？」

その声も間違いなくあの少女のものなのに、ソラにしか見えない少女は分からない、といったように小首を傾げた。

「ソラじゃ、ないのか」

「……誰と間違えているのか知らないけれど、私は、ギルよ。別にあなたが私をそう呼びたいというなら構わないけれど」

私の名前なんて、あつてないようなものだし、と少女は言った。

そうだ、彼女は死んだはず、親友がその手で弔うのを自分だつて見ていた。死のその瞬間だつて。慟哭したヴィーに抱えられたあの少女には、間違いなくもう命がなかった。

そう思ってみてもなお、心に生じた何かを無理やり飲み下して、少女に剣を構えて立ち向かう。ここにいるのが自分でよかつた、とクエインは思った。親友は、きっとこの少女に手を出せない。

これは、ソラでなく打ち倒すべき闇。

「瓜二つの、別人か。失礼をしましたね」

「いいえ、構わないわ」

少女はそう答えるなり、す、とクエインを避けて冠へと近寄って手を伸ばしたが、バリツ、と鋭い音を立ててクエインの結界がその手を阻んだ。黒い血が滴る手を少女は赤い舌でそつと舐めるとクエインに向き直った。

「…物分りのよいあなた、抵抗などせずその冠をくると嬉しいのだけれど」

「そうも、いきませんよ。お相手願えますか、ギルとやら。言っておきますが私は相手が女性だろうと手加減しませんよ」

「結構よ。そんな余裕ないでしょう？」

ああ、無いとも。見透かされていることにクエインは苦い顔をした。間違いなく自分が打ち倒してきたどの闇よりもこの少女は強力な闇だ。

「…では遠慮なく」

「ええ」

ぶわりと少女から膨れ上がって向かってきた歪な闇を、クエインはあつさりと払い、その勢いのまま少女へ向かっていく。

「やるじゃない」

右手に闇を凝縮させた鎌でいつて少女はクエインに応戦した。クエインはひたすら打ち込む。彼女に闇を作る猶予を与えたら勝機は無い。少女はとり立ててクエインより素早いわけでも、力が強いわけでもなかった。けれど、何度も少女のその身に強い術力を纏ったクエインの剣が届いたにもかかわらず肉を深く断つまでにはいたら

なかった。それ故に彼女の闇の濃さを悟ってクエインは眉間の皺を深くする。このままでは決着が付かない。ならば一撃にかける。一瞬だけ冠を見やったものの、クエインはそうすると決めた。

…ようやくヴィーは立ち直ったのだ。彼の、清々しい顔を思い出す。王として、これからもやっていかねばならないヴィーの迷いとなるものはここで断ってみせる。

「光よ」

一言彼の呟いた言葉に、彼の剣を中心に光が爆発した。

目眩むような光が収まった後。

「ば、かな」

倒れて血を吐いたのは、クエイン。少女の放った闇がクエインの身深く突き刺さっている。

少女は、光を受けてもその姿を失うことなく、立っていた。ふらついているものの、彼女がこの場に置いて勝者なのは誰の目にも明らかだ。

「あなたは、強いわね。私がただの闇ならば、きっとあなたは今ので払えていたはず」

でも私は違うの、と少女は呟いた。

「傷つけてごめんなさい。けれどクエイン、あなたそうしないと止まらないだろうから。…これは、貰っていくわね」

クエインの一撃は、結界にかけていた術力をも回して、夜に陽の光の力を呼ぶ禁術だった。闇が最も嫌うはずの必殺の術であるそれ

を受けてなお動く少女は、消えた結界の向こう側にあつた冠を手に取り、

少女の手に触れた瞬間、それはどす黒く染まった。少女はそれを無表情に見下ろすと、懐から取り出した白い布に仕舞った。

そうして、立ち去ろうとする彼女の足をしかし掴む手があつた。それは這つてきたクエインの血に濡れた手。

「待、て」

「まだ動くの？死ぬわよ、あなた」

「やっぱり、お前は、ソラでしょう」

「…違う」

「そうでなければ何故私の、名を」

「違つて言つてるでしょう！」

少女が乱暴に蹴るようにして振り払うと、力尽きたらしいクエインは崩れ落ちて気を失った。

「違う…私は」

頭をかきむしる、少女。その顔は何かを堪えるように歪んでいる。少女の周りで、闇が膨張したり、縮んだりを繰り返した。

「私、は」

「混乱しているようだな、屍鬼」

人の通れぬ隙間をくぐつて部屋に現れて言い放つたのは、一匹の虎猫。それを見ると、少女は無表情に戻り、身構えた。それに伴い闇も収まりを見せる。

「…あなたは」

「みだりに我が名を呼ぶな、闇に呼ばれるなど虫唾が走る」

猫は不愉快げに尻尾を振った。

「言葉を話すなんて、猫被りをやめたの？」

「元より猫だ」

少女の問いに猫は澄まし顔だ。

「そう」

「…冠を、返してもらおうか」

「あなたは、魔。私は…あなたがそう言うのだから魔なのでしょう。不可侵を、あるうことかあなたが破るの？」

「我が主に関わることなら」

「あなたは本当に、馬鹿ね。繰り返すわよ」

「お前に言われたくはない。…やはりお前は闇の記憶を全て抱えているようだ。時に、混乱が見られるようだが」

猫は測るように少女を見た。少女の澀んだ目がそれを見返す。

「…それで、どうするの」

「お前を屠る」

「じゃあ、逃げるわ」

「待て」

消えようとする少女に、猫の手ではありえない魔の爪が伸びた。

ざくり、という音と同時に、少女は掻き消える。

残ったのは、彼女から飛び散った黒い血と臥した男と猫一匹。黒い血は、やがて溶けるように無くなった。

「ち」

深手は、負わせた感触があったと猫は闇を裂いた己が爪を見つめてペろりと舐める。だがその顔は険しい。

ふと、伸びている男を猫は見やった。この男の全力をかけた術が



効いていたのだろう、少女も弱っていた。それだけに千載一遇のチャンス逃したのは悔しかった。

「冠を持っていかれたな。主に何を言われるか…おい、男。お前の見せた努力故に一応治癒を施してやるから感謝しろ。…このままでは死ぬだろうからな」

失血が酷いのか青白い顔をした男は猫の声も届かないのだろう、無言だった。彼に向けて猫はひとつ魔法をかける。

「副長、大丈夫ですか！」

「かんむ、りは」

「それはいいですから！ いや良くないですけど…！」

「生きてますね！？ 生きてますよね？」

涙すら見せる神殿騎士に囲まれて、クェインが目を覚ます頃には猫はもう闘技場へと戻っていてその場にいなかった。

## 49・舞台脇にて

「ぶっちゃけもう疲れたんだけど」

守りなど考えていないかのような上段からの跳躍を伴った素早い切り込み。ひやりとするようなそれを王様はかるうじて受け止めた。

「お前俺より若いくせに何を言っている」  
鏝迫り合い。力の強い王様のほうが有利だ。

「え、魔法使いって見た目じゃ判断しちゃいけないんだよ、知ってるう？実は100歳とかかもよ？老人は労わらないと」  
すい、と距離をとると体勢を立て直したチットが氷の魔法を使って迫ってきた王様の足元を凍らすのを彼は飛んでかわした。

「それを加味した上でお前は幼い。精々見た目どおりの年齢だろう」  
そのままの勢いを乗せた力強い心臓を狙った凧ぎ払いを受けて、チットはひよいとかがんだ。

「げ。何ではれるかなあ。…にしても王様の方は、喋り方とかなんかおっさん臭いよね」。『王様』だからなの？」  
立ち上がりざまチットは切りかかる。

「地だ」

それをはじく王様。

「うわ、まじで？」

「…だって」

シライは2人の会話をファイ達へと中継しつつ、呆れた顔をしている。さもありません、無駄の一切ない動きで優れた剣術を披露しあっている壇上の男どもの会話ときたら。これが仮にも果し合いをしている人間どうしの間には交わされる台詞だろうか。王様とチットの声が聞こえることのない人々は、目にも留まらぬ速さの一進一退の攻防に目を離せずにいるようだったが、ファイ達の間にはどこか抜けた空気すら漂っていた。彼らは黙って戦えないものらしい。あの速さで動きつつ話すほうがよほど疲れると思うのだが。その意味では両者とも化け物じみている。

「シライ、王様達のお喋り教えてくれるの大変そうだからもういいよ」

レオナが労わるように言った。

「でも僕一人でこの脱力感を抱えていたくないし」

…巻き添えになれというのか、シライ。

「おお、まだやっていただけなのか」

猫の声がした。見やると、ご丁寧にシライの頭の上に乗っかっている。シライが多少くすぐったそうにした。

「あら。まだって、あなたはずっと居たじゃない…んん？違ってたけ」

「少なくとも僕の頭の上にはいなかったはずなんだけど」

レオナとシライの会話に、はあ、と猫は溜息をついたようだ。

「私の不在に気付かないとは。全く、呆けた集団だ」

「つまりはそれくらい君が不要な存在ってことかな」

「せめてお前は気付くべきだったのではないか、半端術師」

「僕はあいにく『細工師』なのでね」

「ほう。魔の存在の有無も感知できないとはまったくもって宝の持ち腐れだな」

ロイと猫の相性が悪いことはよく分かった。

「求める主に認められないような魔が何をほざくんだけ」

と、ロイのその言葉に、常なら反発しそうな猫は押し黙った。

フィーは戦う王様を見つめながらも横の会話をなんとなく聞いていて、そのことにあれ、と思ったが、そのままに舞台を眺め続けた。

舞台の上では、チツトの放った鋭い一撃を、まさしく紙一重の距離で避けたヴィーが今度はチツトの剣を持つ利き腕を狙って重い剣を振り下ろしたところだった。チツトは持ち前の速さでそれをかわす。

…それにしても本当に互いに攻撃が当たらない。器用な奴らである。ただ、もし当たれば恐らく再起不能な攻撃を繰り返しているのだ。互いに狙っているのは急所ばかりのようだから、薄めの服を着ている彼らはひとたまりもないはず。ヴィーはというと、それだけの危険に身をおきながら、心から楽しそうに獰猛な笑みを浮かべていた。余裕なのか、狂っているのか。

私のやった『火蜥蜴の涙』、魔法使いとはいえたかだか盗人に奪われるようなことになったら承知しない、とフィーはそんなことを考えていた。そこに。

「フィオナ」

猫から発せられたとはとても思えない深みのあるバリトンが響く。

…フィーに呼びかけた猫の声はどこか重く暗い。

「どづした」

心ここに非ず気味のフィーに猫は静かに続けた。

「王冠が闇に奪われたぞ」

その言葉に、頭の中が一瞬で真っ白になる。

「え、…」

冠が、どうしたって？

「どうということだ、魔」

ロイの問いに猫は返した。

「そのままの意味だ。奪ったのは闇、あの壇上にいる男の仲間の少女だ。」

…お前たち、会ったことがあるう。詩人の歌った晩に」

「…あの少年、か」

ロイが苦い顔をする。

あの、少年？まさかあの、ぼんやりした、連れとはぐれたと言っていた少年のことだろうか。一緒に祭りを歩いて、手を繋いで、お礼を言われて別れた、あの少年が師匠の遺作の冠を奪っただと？しかも少女で闇だって？何の、冗談だ。

猫はロイの言葉に答えた。

「ああ、そう言えばあの日はそんな格好をしていたか。そうだ。あれはあのふざけた魔法使いの仕業だろうよ」

「何故お前に、あの少女が冠を奪ったと分かる」

「その場にいた。…すまない、主、我の失態だ。一步及ばなかった…主？」

「…フィー？」

「冠は、今どこに」

どこか掠れた、自分のものでないような声がでた。

「恐らくはもうすぐ、舞台へ」

「フィー!?!」

呼び声が聞こえる頃にはロイヤレオナ、シライたちと遠く離れていた。

「いつてえ」「おい、あんた、何をする!」「きゃあ!」「うわ」「……どいて」

混乱した頭を抱えつつも、いまだ剣戟の止まぬ舞台へと向かって、人ごみを無理やりに縫いながらフィーは気付けば駆け出していた。

43番目の相手と戦い始めて、半刻は経っただろうか。

いまだかつて出会った中で、父に次ぐ斬り合いにおける最長記録を目の前の瘦身の男は更新し続けている。口調といい、おどけた仕事草といい、ただふざけているように見えてかなり腕が立つ赤毛の青年。ヴィーと同程度に剣が使えると言っている。魔法使いと言ったが果たしてどのような訓練を積んだらこんな人間が出来上がるのか。魔法使いになるのすら、困難であるというのに。

「どうしたの、王様？」

「いや、なんでもない」

「…ねえ、嬉しいね。そう思わない？」

その言葉にヴィーはふと我に返ったようにそうだな、と言った。「戦うのって楽しいよね。ルールは単純、ただ相手を殺っちゃうだけ」

剣をぺろりと舐め、愉悦に歪むチツトの表情。それを見て、自分もチツトと同じ顔をしていたに違いないとヴィーは思った。

なぜならヴィーは歓喜していた。相手の刃が頸動脈や心臓を掠るそのたびに。ヴィーを上回るその速さを実感するたびに。

そうして半ば宝石のことを忘れて、夢中で斬り合っていた。確かに愉しかった。久々に遠慮なく力を出せるということが。

…惜しむらくは、少々不公平な状態であること。ヴィーは術を使えないが、チツトという魔法使いはこちらに間接的に影響のある魔法は使える。それは目くらましであったり、幻術であったり。ヴィーも術を使えないこともないが、民を守る結果に影響が出るのは万

一にも防がなければならぬために出来れば剣術で倒したいところだ。

互いに、なかなか生じない勝機を窺っている状態が続く。

長引く、か。正直分が悪い……

と、ヴィーが考えていたとき。隙の無かったチツトが、何かに気をとられたようにこちらから離すことのなかった視線を揺るがした。それを逃すヴィーではない。

「おっと……しまった、なあ」

ヴィーの剣が閃き、チツトの体から、血が飛んだ。それを見て、観客から歓声が上がった。しかしチツトはぺろりと唇を舐めて、妖しく笑っただけ。ヴィーは苦い顔をした。

「こんなに血が出たの久しぶり」  
「……避けたか」

勝負を決定付けるほどの手傷ではない。ヴィーは構えなおしたが。

チツトの傍の空間が、歪に歪んだ。

そこから現れたのは半ばどす黒い血に染まっただけのものの確かに鮮やかな青をした服の少女。盛り上がりを見せていた観衆が、いきなり降って沸いた惨状にざわめきだす。

立ち尽くして、ヴィーは、息を呑んだ。

もたれかかるように、ヴィーと対峙している男に倒れこみ、目を瞑って浅い息をしているその少女は。



「ソ、」

「ギル！？ちよっと、うわ、どうしてこんな怪我して…」

名を呼ぼうとしたヴィーを遮り、彼との試合を放棄するように手に持った剣を投げ捨てて、チットは少女を両腕で支えた。少女がうつすらと開いた目は確かにヴィーがかつて心から愛したとび色。

血塗れた少女はヴィーのほうを向くことは無くチットに向かって静かに答える。表情は、無い。

「ち、と…ごめんなさ、…傷負ったけど、かん、むりここに、あるから、…予定ど、お」

「喋らないで！！今止血する」

少女に手を掲げて澱みなく呪文を呟くチットの言葉にも、少女から流れる血は止まらない。少女は再び目を瞑ると、気を失ったようだった。

「…なんで！！」

歯噛みするチット。チットはそのまま着ていた上衣を脱ぐと躊躇無く裂いて止血を始める。

…そんな二人を前にして、ヴィーは動けなかった。今斬れば、とどこかで囁く自分の声がやけに遠い。

代わりに心臓が激しく脈打ち、ガンガンと頭で反響を続ける疑問。

あの人は、ソラ、なのか？

止血を終え、まるで自分の熱を分けようとも言うように、少女を抱きしめたチットの赤毛の先が黒く染まる。彼はそれに構う様子は無く、そのまま立ち上がった。そして呆然としたヴィーを一瞥し、静かに声をかけた。

「なあ王様、ショック受けてるとこ悪いけど試合は棄権ってことで……」

「待て！冠を返せ！！」

舞台の階段から響く声に、壇上の二人は顔を向ける。そこにいるのは血濡れの少女と似た色の、けれどももっと短い髪を持ち男装している少女。

息を切らしたフィーがギリリと光る目でチットを見据えた。

チットは、フィーを見て目を見開いたが、ふと表情を変えて睨んだ。

「ねえ、ギル刻んだのってあんた？…ギルの怪我から感じる魔力の匂いが、あんたと同じなんだけど」

「…違う」

「じゃあ、なんで冠のこと知ってるの？ねえ？」

チットの目に浮かぶ狂気をはらんだ様子に、フィーはけれど怯まなかった。彼に一方的に斬りかかられた記憶が蘇った。…ただでは、済まないだろう。

「魔に、聞いた」

「へえ。…じゃあ、あんたが、そいつの飼い主？なら、ペットの不始末に責任取るのも当然あんだよね、フィオレンティーノ」

陽気さを取っ払ったチットの声は、無機質だった。チットは少女を片手で抱き上げ、そのまま空いた方の手を掲げた。

「あんたが竜細工師だからって、その体、古代禁呪にまで耐えられるかなあ。あんまり歪み受けるの嫌だから本当は使う気無かったけ

ど、今は例外。だって」

片頬をゆがめるように笑う青年。その目だけ笑っていないのが、どこか歪にフィーを捉えた。

「ギルに害為す奴なんかみんな死ねばいいから」

チットが高速で何か唱え出す。フィーにすらそれは見えた。暗い紫色の光が文字となってチットの回りで円を描き始める。次第にそれが収束していく。対処のしようも無くフィーが固まっていると、少し離れた群集から上がった声があった。

「ヴイー！ 何をぼうつとしてるんだ馬鹿、フィーを守れ！！」

「ヴィエロア王、その少女は闇だ！ 惑わされるな！！」

それにはっとしたように動いたヴイーが走りこんでフィーの前に立つ。

私を庇う、背。体が触れるほど近い。

またずきりと収まっていた頭痛が帰ってきて、思わずフィーは目を瞑る。

「へえ、ギルを傷つけた魔の主を、仮にもあんたが庇うわけ」

チットの声があった。すぐ傍のヴイーが、どこか動揺に震えるような気配を感じて目を開く。しかしヴイーの背はしっかりと揺らぐ。そこにあつて、フィーは瞬いた。…どんな表情をしているかは、見えない。けれど王様は頷いた。

「じゃあ、フィオレンティーノと一緒に死んでみる？」

くすりと笑うと、チットは掲げていた手を下ろそうとした。が、それは途中で止められる。

赤毛の青年の手を止めているのは、彼が抱えている少女のあまりに小さな手だった。

「チット、あの子は、駄目」

「ギル：？なんで。あいつが、」

「私は大丈夫だから。：ねえ、チット、あの子は私に触れて笑ったの」

少女が浮かべたそのどこか果敢ない笑みに、ああ、あの少年と同じ、とフィーは思った。間違い、ない。

少女のその顔を見てチットは詠唱を止める。

「：分かった。ギルがそう言うなら」

途端に彼の周りに展開された魔方阵も消え去った。そして、チットも魔方阵とともに姿を消した。

いきなり姿を消したチットに誰もが愕然としてみると、少し離れたところから再び彼の声上がる。

「あんたに手は出さないであげるよ、フィオレンティーノ」

チットは元の調子で意地悪く笑う。

「・・・でも、冠も、そして宝石も貰っていく」

「何！？」

チットが手品のように瞬間移動して現れたのは、舞台から離れた神官長のすぐ傍だった。そこには5つの涙が収められた箱。騎士が呆気にとられるうちにチットはそれをひよいと鮮やかな仕草で掴む

と、ヴィーに向けて手を振った。

「追いかけてこないでね、王様。プレゼントをあげるから」

「待て、勝負に決着は付いていない、それにその少女は、」

硬直していたヴィーが声を上げる。

「何言ってるの、理不尽に物を奪うのが盗人家業じゃない。それとこの子はギルドだよ。僕の愛しい人。今は、ね」

見せ付けるように少女の額に口付けたあと、ぱちん、とチットが指を鳴らす。

途端、空から轟音が響く。何か燃えながら、落ちてくるような…それに対して訝しげに頭上を見上げた誰もが絶句した。月明かりを遮るような、それは。

「隕石、だと！？馬鹿な！！」

フィーは思わず叫ぶ。

空からオレンジ色の発光を伴って燃えながら落ちてくるそれは一瞬流れ星のように思われた。

しかしその大きさと地上に迫る速度から隕石としか呼びよしの無い。あまりのことに現実味が無かったが、それは存在感を増しながら確実に王都へと近づいてくる。そのため数刻すると我に返ったように人々は逃げ出そうとした。惑いパニックに陥る人々を眺め、まるで滑稽な劇でも見るかのようにチットはけたけた笑う。

「すっごいでしょ。さ、オレに構わず早く対策取らないとあなたの大事な王都潰れちゃうよ、王様？」

では、もう会うこと無いと思うけど、アデュー」

無責任とも思える口調で高らかにそう告げるとチットは消えた。

冠が持つていかれてしまったことにフィーは愕然としたが、自分よりも失意を感じさせる人間が傍にいた。…赤毛の青年が抱いた少女のいた場所を、ヴィーは見つめ続けている。こんなときに何を呆けているのかとフィーは叱咤しようとしたものの、彼が浮かべる表情を見て、声がでなくなる。フィーはいつかと同じことを思った。やはり彼はこんなに脆い、人間だ。1歩。少女が消えた先へ彼は歩み出そうとした。フィーは何故だかそんな彼を止めようと手を伸ばしかけ、そんな自分に驚いたように手を引つ込めた。

しかしヴィーのその足は、他のものの為に自ずから止まる。彼の耳に響いた声ゆえに。

「王、助けてください！」 「王様！！」 「私、死にたくないよ…」

どんどんと近づくあまりに巨大な隕石から、逃げ切れないと悟った人たちが次々と声を上げだしたのだ。もはや時間はそう残されていないとそれで分かる。

そのためか、耳を劈くような悲鳴はさらにクレツシエンドをかけるように次第に大きさを増しながら響いた。救いを求める声、声、声。それにフィーの頭痛はいや増した。ずっと前に同じような悲鳴を聞いたことは無かったか。ずき。

足元がおぼつかなくなった彼女をそっと支えたのは、いつやって来たとも知れないロイだった。

「あり、がとう」

「どういたしまして。まったく、フィーったらまた無茶をして。心

臓が縮むかと思った」

「冠も5つの石も奪われ、おまけに隕石に潰されて死のうというこんな事態なのによに落ち着き払った彼に、うっすらフィーは微笑んだ。

「相変わらずだな。お前は叫ばないのか？心置きなく好きなことを叫ぶせつかくの機会だぞ、今なら誰も構いやしない」

「…フィーこそ相変わらずでほっとしたよ。言いたいことを叫ぶ、ねえ。死ぬその時になったら考えてみるかな」

ロイはそう呟いてフィーに向けていつものふんわりした笑みを浮かべる。

「こんなときにいちやついている場合か！」

「多分世界が終わろうとこんな調子な気がする」

花の妖精に道化の格好の二人連れ。…と、虎猫。

「あ、レオナにシライに魔」

「あ、じゃないわよいきなり飛び出してくれちゃって！殺されかけてたじゃないフィー！私と踊る約束を果たさないつもり！？」

「馬鹿主、死ぬ気が」

「いや、そんなつもりは」

フィーは頬をかいた。レオナも意外と肝が据わっていることは分かった。魔が自身を柵に上げていることも分かった。ある意味チットがおかしくなっていたのはチットの言葉を省みるに恐らくこいつのせいだろう。

…だが何はともあれ、みんな傍にいる。

事態は刻々と悪くなる一方なのにどこかフィーは安堵した。隕石は、王の結界に阻まれて速度を落としたものの、やはり迫ってきている。

ふと、いまだに王を呼ばう人々の顔をなんとなく見回してフィーはぞつとすることになる。

それはどれもそっくりで、でも一人ひとり違っていて、それぞれ等分に存在する民そのものだった。王へ縋りつつ泣き喚くその仕草は等しいその中に、赤ん坊がいる、若者がいる、老人がいる。女がいる、男がいる。たくさんの、人が一時に一人の男に頼っている。それを、無責任とは言えないだろう。

だってこれが、この国の『王』が背負うものだ。これよりもさらに多くの人が、ここにいてるヴィー一人に縋っていくのだろう。彼が王である限りは。なんて怖い、ことだろう。王様であるということ。あの人はあんなに脆いのに、この光景を見つめて何を思うのだろうか。

そう思いながらヴィーを見やって、フィーは息を呑んだ。

いつの間にか民も黙り込んだ。

そこに脆さを感じさせる人はもういない。

ヴィーは、民を見回して、いつものにやりとした顔で笑っていた。

「10年ぶりの祭りだぞ。ここに俺がいるのに台無しにすることを許すと思うか」

静寂に、朗々としたヴィーの声が響く。

途端、彼を中心に力の無いフィーすら見える可視の白い光が閃いた。それは人一人の太さの光の柱のようになって真っ直ぐに隕石へと向かっていく。

そして、重く、鈍い音と共に。



「有り得ない」

巨大な隕石は光に貫かれ、そう遠くない上空でばらばらに砕け散り、輝きながら王都中に散った。

## 51・試合終了

騒ぎが収まりを見せ始める頃、舞台の上で王の体が傾いだ。まるで体を支える力が抜け落ちたようにかのように。

「…おい、ヴィー!？」

砕けた隕石の瞬きに目を奪われていたフィーは、呆気にとられ続ける観衆よりいち早くそれに気付いて思わず彼に駆け寄った。先ほどのチットとの戦いですら一度として呼吸を荒げることの無かった彼が、激しく息をしている。額から流れ落ちる汗。顔色は血が抜け落ちたように白い。

「大丈夫か？」

心配するフィーの顔を見て、ヴィーは目を逸らした。

「民は、守った…だが、お前の大切なものを、お前の師がくれたものを、奪われてしまった」

「それは」

フィーが言いかけた言葉を、遮る大きな声があった。

「ヴィエロア王、いや、冠のない人を王と呼んでいいものでしょうかねえ？しかも5つの石まで奪われて？」

隕石が落ちてくる際民が出口へと向かって引いていたため、舞台傍に人気は殆どない。そこにいつの間にもやら立っていた、伶俐な空気を放つ異国の衣装を纏う一人の美しい女は言葉を続けた。

「なるほど、あれほどの事態から民を守ったのは賞賛に値するでしょう。しかし今のあなたときたら。かるうじて結界は保っているみたいだけれど、自身の術力を大きく失い竜の力を受ける冠も無い。もしこの瞬間イオナイア王国を攻めるものがあればこの国は容易に陥落するでしょうね」

よく響くソプラノで紡がれた言葉を耳にした民が、ざわめきだす。あまりの出来事の連続で失念したことを思い出して。

「どういうことだ？」

「そういえば、チットとか言う男、冠を盗ったなどと言っていた」

「そんな…王の象徴が何故」

「宝石も奪われたぞ！…しかしあれには何の意味があるんだ？」

「王の力が今無いって？」

動揺と不安、疑念が伝染していく。

それを身勝手と感じるフィーは、おかしいだろうか。自らの苦しむときには継り、落ち度があればさかさず糾弾する。…いつしかどこかの貴族男に言ったことを彼らはある意味そのまま実行しているだけだが、王であるヴィーの傍から彼らを見るからそんなことを思うのか。

一方で、初めの発言者である女は場の空気の流れに微笑んでいた。耳をさらすこの国の慣習から外れた髪形をしているから、まず間違いない異国の者。だが、何者だろうか。

「おい、ヴィーあれは誰だ」

「お前には分からない、か」

溜息をつかれたフィーはむっとする。なんなんだと言いつ返そうかとしたとき遮る声があった。

「息をするのも辛そうなところ悪いけど、王様、力が無いって本当？」

フィーに続いてやってきたロイが尋ねた。

「…すぐ、戻る」

虚勢ではなかるうか。本当に辛そうだ、とフィーは思った。

「それは、本当か？ヴィー」

「フィー、お前が俺に口付けてくれれば」

「ふざけてないで真剣に答える」

「真面目に言ってるんだが」

「どこがだ」

そこにまた別の声が割り込んだ。

「冠は扉、石は鍵。それ欲しさにあんたとの試合に立候補すらしただがな。俺の目的だった、世界を左右しかねないとすら言われる賞品が戦いもしないうちに失われるとは思いもしなかった。はるばるやって来たのに、どう責任を取ってくれるんだ」

別の男が声を張り上げる。筋骨隆々としたからだの背にはハルバードがひっかかっている。…巨大な戦斧がひっかかっているとしか表現できないほどに男の体は巨体だった。やかましそうな男だとフィーは感じた。

「答える、王」

大男の吼えるような声にフィーは一つ溜息をつくど、ふらり、立ち上がった。

「どちらも石を賭けた試合に元から名乗りをあげた者かな？残り二人はどうしたものか……姿が見えないが。

まあいい、とりあえず賞品がなくなつたことを謝罪しよう。こちらの手落ちだ、すまなかつた。

次に、まず一人目の女、貴女が言ったことに答えよう。冠があるから王なのではない、民が選び認めたものが王。

……そうは言っても情けないことにみすみす賊にこの国の宝を奪われた。

民は、だから俺を認めぬならば声を上げれば良い。早々に玉座から下ろす。そうすることに怯むことはない、俺は自らが王で無かるうと他国が攻め込んで来る時にはこの国を守り通すだろう。さて、

どうする？」

ヴィーの言葉を聞いて民は黙り込んだ。

そう、冠はその意味を知らぬ民にとっては『象徴』に過ぎない。

それをただ冠した人間ではなく、民にとってヴィーという存在そのものが、彼らを選んだ王なのだ。

……フィーはなんだか複雑な気持ちになった。

「そして、二人目の男。俺が勝てば元より貴方に賞品は手に入らなかったと分かるな？ そうだろう。それで責を受けたとしてももらえるか」

一息に喋ると、顔を上げたヴィーは支えとしていた剣を持ち上げて真っ直ぐに大男へと向けた。海をしまいこんだようなサファイア色の目が月明かりを受けて妖しく輝いた。その目が、相手をひたと睨み据える。

その途端に放たれるのは、場を打つかのような、燃えるような闘気。

それに、誰もが圧倒された。剣を持つのもやっとという風情の、冠の無い一人の男から放たれたそれに。

「さあお二方。望むなら相手になろう」  
静寂が訪れる。

と、それを破るように大男が噴出す。異国の女は面白くないと言った顔でふてくされている。

「ぐ。はっはあ、おもしれえ男。そんなぼろぼろのなりをして啖呵を切るか。無謀もいいとこだ、俺はそんなに弱く見えるか？ この姉

「ちゃんだって見た目に騙されない方がいい」

「黙りなさい木偶」

女から発せられた冷たい声に男は悪びれずに肩をすくめた。

「おや、失礼、氷の娘さん。……それにしても、なるほどなあ。今度の王ってこんな男か。親父にお前のことをよく伝えといてやるよ、ヴィエロア。宝石もお前が持つてくるのを待つてやるでしょう。精々王様業を罷免されんようにな」

途端に気配が揺らいだ、と思うとどっしりした大男は随分あっさり消えてしまう。

残った女はヴィーをじっと見つめた。ヴィーは目を逸らさず見つめ返す。しばらくそうしていたが、女はつと目を逸らした。

「私の魅了にかからないくらいには力が残っているようですね、ヴィエロア。一応は英雄と呼ばれるだけはあるみたいで少々ほつとしましたよ。…私が誰か分かりますか」

ヴィーはその問いに静かに答えた。

「水の精霊か……しかもかなり高位の。さっきの男は土の属性の者だな」

女はふん、と鼻を鳴らした。

「ご名答。一応人に紛れてみたのですがね。……火と風の者は、チツトとか言う男と貴方の戦いが長引くから飽きて帰ってしまいましたよ。まったく情けない。あれくらいの男、術で以ってして余裕で屠らざどうしますか」

「……残念ながら、流石に精霊ほど術力があるわけでないのね」「そうなのですか？まあ、精進なさることです。……正直この姿でいるのも無駄に力を使いますので私も帰ります。あなた姉好みの顔をしているから気に入られるのじゃないかしら、我が家にいらしたときにはお気をつけあそばせ」

ふ、と女も泡のように消えた。

「あ、れは」

「何も分からない主に教えてやろうぞ。あれはいけ好かない、澄ましきった清く正しき聖人君子気取りの精霊さまだろうよ、反吐が出る」

呆氣にとられたフィーに向かって、傍に来た猫が答えた。猫は、今まで見てきた中で一番形容しようの無い顔の歪ませ方をしている。「汚し甲斐が無い無垢と綺麗さなどこの世から消え去ればいいのに」「やはり魔と精霊は仲が悪いんだな……」  
フィーはなんと苦々しげな猫の様子に、ぼつりと呟いた。

精霊など、初めて見た。闘技場に溢れかえる人も殆どがそうなのだろう、誰もが興奮にざわめいている。

「フィー。それは魔か？ しかも主つて、お前まさか」  
声に振り向いて猫を見やったヴィーが顔を顰めて尋ねた。

「これはただのお喋り好きな猫だよ」  
フィーが答える前に、ロイが微笑んで答えた。ヴィーはロイを睨みつける。

「からかっているとしたか思えないんだが、ロイ。フィー、本当のところはどうなんだ」

「……魔だよ。害は無いんだ。悪い魔じゃない、多分」  
「魔に良いも悪いもあるか。契約は？」  
「してない」

「……これからも契約だけはするなよ」  
ヴィーの青い目が真剣な色を宿したので、フィーはこくり、と頷

いた。

「余計なことをしてくれるな、王。その言葉は自分の首も絞めようぞ？」

猫の声は心持笑ってすらいるようだ。

「何をほざくか、魔」

「さあて」

答えをはぐらかす猫にロイが言う。

「思わせぶりなことを言って何も考えていないでしょう、獣」

猫は、はつきり鼻で笑った。

「相手が『美女』なら何を囁ろうと気にはならないものだな」

ヴィー、ロイ、魔はにらみ合っている。

何か、忘れているような。3人を眺めていてそう思ったフィーは少し離れたところでどこか所在無さげに佇むレオナとシライに気がついた。多分、ヴィーに近づき、話すことにためらいがあるのだろう。

……そう、私たちはここにいて要らぬ注視を集め始めているのだ、とフィーは遅ればせながら気付いた。ヴィーも、どうやら心配するほどでは無さそうだ。潮時だろう。

「ヴィー、私は帰るよ。なにやら掻き乱して悪かったな……あと、あんたが私のことであるいと気を揉むことは無い。これから大変なのはヴィー自身だろうしな。……ただ冠と石を奪ったのが闇となると、出来る限り全力で取り返したほうがいいと思う。ああ、冠に関してはあれと同じだけの冠をもし新たに作るなら、言ってくれ。正直まだ力不足だが、出来るだけ早く作ろう。では、また、な」

「フィー」



「……なんだ？」

去ろうとしたフィーは、ヴィーの言葉に振り向こうとしなかった。

「…なんでもない。また、な」

「ああ」

そのまま、フィーはレオナたちの待つ場所へ向かって駆けた。口  
イト、魔もそれに続く。

その姿が見えなくなってから、平然と話していたヴィーは、一人  
座り込む。

「……フィオナ、済まない」

そのまま倒れこむ前に、やって来た王の騎士たちに支えられて、  
ヴィーも舞台から下りた。

残りの試合は結局、挑戦者が棄権したということでは無くなった。

そして、あれから王を糾弾する者も無く、緘口令もほぼ無駄とな  
り様々な噂の飛び交う中、祭りはとりあえず続行となった。

王が舞台から降りる頃。イオナイア王国とは異なる国の、とある  
豪華な一室で叫ぶ声があった。

「嘘っ！！」

仕立ての良い柔らかな生地に身を包まれた傷だらけの少女の横た  
わるベッドの脇で、呆然とした赤毛の青年。その手の中の開いた箱  
には、ただの灰色の石が5つ、ころりと転がっていた。

## 52・フィーを追って

フィーが、おかしい。

祭りの賑やかな人ごみの中走ると、花の妖精の格好なんて選んだためにひらひらした服があちこちひっかかっていららしてしまう。もっとシンプルな格好をして来ればよかったのだけれど、可愛いものは譲れない。

……私が今、何故走っているかというと、フィーが私たちを置いていくようにして行ってしまったからだ。彼女は考え事をしているとき、それに夢中になって周りに構わず無意識にすごい速さで歩いていってしまう癖がある。その為に周りを置いていってしまったということに、本人に自覚は無い。今がまさにその状態だった。

「ちょよ、ちょっと待ってよフィーってば!!」

フィーは、息を上げさせながらその名を呼ぶ私に振り向いてもくれない。

まるで私が告白する前のフィーのようなそっけなさだ。……フィーを好きだったことを後悔はしないけれど、ふとあの頃を思い出してちょっと悲しくなる。私がフィーに振り向いてもらいたくてどんなに積極的になっても軽く受け流され続けてきた。そうだ、この比ではない扱いを受けてきたんだからこれくらいでめげはしない。私は気を取り直して、人ごみに埋もれそうなフィーの姿を見失わないよう睨むようにして彼女を追いかけた。

精霊と名乗る人たちが去った後。

どんな関係なのやら知らないけれど、なにやら親しげに王様と話

しこんでいたフィーは、彼の元から私たちのところにやってきた。俯きがちなその時の彼女の顔は、私が知っているどの顔よりも深刻で複雑な表情だった。

どうしたというのだろう。

いぶかしげに彼女を見つめる私の視線に気付いたのか、私とシライの傍まで来たフィーは、笑おうとして失敗したみたいなへたくそな笑顔を浮かべる。それに酷くどきりとした。

フィーは言った。

「レオナ、シライ、心配かけてすまなかったな……もう済んだから。行こう？」

そのまま歩き出してしまった彼女の様子に、一体どうしてそんな顔をしているのか問い詰めようとした私は何も聞けなくなってしまう。

思えばあの時、問い詰めてしまえばよかったのだ。

なぜならフィーは、その直後に走っているのではないかという速さで闘技場をすたすた歩いて後にしてしまったのである。いきなりの彼女の行動に、わけが分からないまま私たちはあっさり大きな距離を置かれてしまった。

取り残された私たちは、人ごみを器用に縫って歩くフィーを慌ててみんなで追いかけた。しかしロイさんは、フィーと一緒に追いかける途中で工房のお得意さんというかロイさんのファンであるお嬢様方に出会い、捕まってしまったので脱落。シライも彼にそっくりなところに目をつけられて……もとい、気に入られてしまったようと一緒に拘束されてしまった。その時、ロイさんに目線でフィーを追いかけると託されたのだ。……お嬢様方に笑顔で対応しているのに、彼の目がその一瞬鋭い光を帯びたのはとても恐ろしかった。

別にそれに押されたというだけではないけれど、必死になって私

は今人語を話す虎猫と共にフィーを追っている。

「一体どうしたって言うのよフィー……ねえ、あなたは分かる？」  
「ニヤァ？」

どうやら彼は人語を操るのを辞めたらしい。やはり猫は猫、人の言葉を話すのは酷く疲れるのかもしれない。

けれどなんとなく、彼も首を傾げているような雰囲気を感じた。

「あなたにもわかんないか……どうしたんだろっね、フィー」

祭り最終日を明日に控えて今日は仮装で一晩踊り狂う。道に溢れる人々の間を抜けていくのは至難の技だ。けれど人々の纏う原色が目に痛い中、フィーの黒いシルエットはやけに目立つためどうにか見失わずにいる。

フィーに関して私に分かるのは、私が出たことのない彼女の師匠の冠をどうやら盗まれてしまったらしく、それにひどくフィーが驚愕と憤慨を覚えていたらしいこと。そして、多分それに関連してあの王様と何かあったのだろうということ。その何か、がよく分からない。

他に、ひよっとしたらと思っっていることがある。フィーは、あの王様のことをどう思っているのか、ということだ。剣舞のときと試合のときのフィーを思い出す。……横目でふとフィーを見やったり、彼女はずっと王様の一挙一動に見惚れていた。でもそれは他の観客だって同じだったはずなのに、私はそのフィーに少し見蕩れた。だってその目は少し潤んでいて、全体的にどこか切ないものが混じったとても綺麗な表情だった。

「ねえ。フィーは、王様を……うぎゃっ」

考え事に気をとられていた所為か、隕石の散った欠片に躓いて私

は見事にこけてしまった。私の少し前を走っていた猫が倒れた私に潰されてもがく。苦しそうな鳴き声に、慌てて身を起す。

「あ、ごめんね、今、どこから……。うわ、痛い」

見ると、ぶつけた膝小僧から血が出ている。どうにか立ち上がった辺りを見回しても、フィーは見当たらなかった。どうしようかと途方にくれる。

たくさん溢れる人。その中でただ立ち尽くす自分。それを感じたとき、ふと、とても冷たいものが心の中に落ち込んできた。忘れようと思っていたのに。

「フィー…どこに行っちゃったのよー…」

あてどなく歩き出すと、猫もひよこひよこことついてきた。怪我した私に合わせたゆっくりとしたペース。気遣うようにこちらを見上げるそのなにやら心配げな顔に、少しでも感じていた孤独が薄れた私は、つらつらと猫に話し出していた。

「ねえ。私実は王様の結婚相手候補になっちゃったんだよ。信じられる？」

その言葉に猫は少し目を見開いた。

「信じられないよねー。私だってそう。今日王様を見てて、確かに凄く素敵な人だとは思ったよ。でもさ、私お妃様なんかになりたくないの。あの家ときつちり縁を切って、平民の人と結婚して町暮らしするのが私の夢なんだ。……私は誰か自分で見つけた好きな人と結婚できないのかなあ」

猫はちいさく首を傾げたようだった。その仕草に微笑む。

「うん。私も諦めたくはないけど。」

それにしても、フィーが男の人だったら、私はプロポーズだって

したのに。そうしたらフィーと結婚して幸せなお嫁さんになっていたかもしれないよねー。……まあ、ふられちゃったと思うけどね」

……今日、継母は父がその話を持ち出した朝から様子がおかしかった。

いつだって私に対する彼女の態度はお世辞にもいいとは言えないけれど、今日は特に酷かった。慣れている無視に加えて、彼女の瞳に色濃く覗いた敵意と憎悪が嫌で予定より早く家を出た。私が出て行くことをあんなに望んでいたのに、彼女は一体何が気に入らないのだろう。今の私の望みだつてきつと知っているだろうに、私の不幸をいつそ喜ばばいいのに。

私は、王様と結婚してしまうことになるのだろうか。でも、そうしたらフィーは？

「どうなっちゃうのかな、いろいろ」

「ニヤー」

この祭りが終わったら。

なんだか全て動き出すのではないのかというそんな予感がなぜかあった。これは、なんだろうと思う。なんだか不思議なその予感と足の痛みを振り払うように、フィーが向かっていたはずの方向へと私は足を速めた。

### 53・魔の誘惑

気付けば知らぬ場所へ迷い込んだものらしい。

フィーは行き止まりの道にぶち当たって煩悶した。ここは、一体どのあたりだろう。見回せば、一人だ。いつの間にかはぐれていた祭りの喧騒が届かぬ裏路地となると迷路と名高いナンテスの親父さんの宝石店のある辺りだろうと彼女は見当をつけ、やれやれと首を振りながら歩き出した。騒がしそうなところに向かえば、そこで人に道を問うことも可能だろう。

王都は馬鹿にならぬ広さを持っており、特に道に迷いやすい自分などは下手に考え事などしながら歩き出すと大変なことになると、すっかりしていた自身をフィーは笑おうとして、失敗した。ふと目の前に現れたショーウィンドウのガラスに映っていた自分が、随分とひどい顔をしているのを見たからだ。

「はあ」

変わろうと、決めたのになどフィーは溜息する。あの瞬間、フィーに思わず八つ当たりしそうになった自分がいた。

師匠が命懸けで作った冠も、この国を、ひいては世界を左右しかねない宝石も、奪われてしまったことへの憤激と、そしてフィーと民に対する複雑な思いがごちゃごちゃとこみ上げていたから。

その複雑な思いを一つで表すなら、多分、失望だろうか。

一つはフィーに身勝手な望みを抱いた自分に責がある。彼に抱いたのは同情などと思っていたが、本当は自分と同列にあの人を置いて、同じ高さにおいてほしいとフィーは勝手に望んでいたのだ。そん

な自分に気付かされてフィーは愕然とした。フィー同様竜に望まれながらも、ただの民としてある高さにヴィーにもいて欲しい、と望んだこと。でも人らしいぎこちなさと脆さをフィーと同じに抱えながら、ヴィーはあの瞬間たとえ強がりでも笑ってそれを超えた。彼が精霊に向けて剣を持って立ったとき、その手がかすかに震えていたのを知っている。がたがたの体だったに違いなかった。それでも立ち向かう勇氣を見せた人。失態はあれど、自らを律し民を守り、対峙するものを見据える目。確かにヴィーは、王の器だ。竜細工師に必須と言われる術力すらうまく操れず竜細工師に相応しくない自分と違つて。そのためにヴィーにあの瞬間取り残されたような、失望と寂しさを感じたのだ。

もう一つ、冠無くとも王たり得るといふ彼の言葉。冠無くして王になり得ずと言つてもそれは正しい。不安に駆られる民をいさめる言葉としてそれ以上の言葉も無かるうが、それを他でもないヴィー自身から聞いたことでフィーに生じた複雑な感情の波は否定できない。

そして冠の象徴としての意義しか知らず、其処にかけられた一つの命など知りもしない民の姿に対する思いがあつた。

師匠はきつと、名を遣したり榮譽を授かることを決して望まなかつただろう。ひとかけらの感謝すら期待しなかつた。ただ彼女は選ばれた細工師として、そして自らの意思でもつて彼女自身の命より冠を作ることを優先し、この国に王を立てることでこの国の民が少しでも早く安楽に暮らすことを望んだ。けれど彼女が守つたものが彼女の存在を顧ることは無いということが、フィーは悲しかった。師の遺した美しい冠をまざまざ思い浮かべられる人間が果たしてどのくらい、いるだろう。あまりにも報われない。

でもその想いはそのまま、今や竜細工師となつた自分への自己憐憫ともなりうる。



それらの、自分の中に生じた身勝手な思いがフィーにとっては滑稽で、愚かしくて、厭わしかった。

今回、冠と石が奪われたこと、それはやはり所有者の王であるヴィーに責があるのは間違いない。だが、フィーは気付いたのだ、盗人のチットが連れられたあの少女はおそらくヴィーの想い人ではないのかと。ソラと言う少女の墓場の前にいたときと同じ顔をしていた彼。この上ない哀切と後悔と、計り知れない愛おしさがこもった顔。思えば、ソラ、と少女のことを呼ぼうとしていたようだった。あれがもし、ソラだとしたら。違ったとしても、彼女を愛した彼ですら見違えてしまうくらいに似ていたなら。

そのために不覚を取った彼を、はたして責められようか。

フィーだって両親や師匠がもし目の前に現れたなら、動揺し、失態を犯して、その上追わずにはいれないだろうと思う。他の何をかなぐり捨ててでも、きっとそうしてしまう。

けれど失態を犯そうと、追いかけてようとして彼は止まったのだ。あの少女を傷つけたらしい魔が、主と慕う私を背にして守ろうとしてくれた。

そんな彼に何を言えるだろう。何を、言おうとした？

そうした他者の思いを汲める人間になろうとしながらもまだまだ未熟で、竜細工師としての覚悟も中途半端で、民を想いきれず、いまだ力を満身に扱えない私が、一体何を。

頭を振る。

今とはとにかく、師匠の冠を奪われたことが、悔しかった。私はあの場で、何もできなかった。あまりに無力だった。

フィーは立ち止まる。

私に、もし、

それを望むと、つきり、と収まったはずの頭痛が蘇ってきた。何故だか人っ子一人いない薄暗い通りで、フィーはあまりの痛みにならずくまって頭を抱えた。ずきんずきんとこめかみが脈打つのを感じて呻く。頭が割れそうだと、と思う。

「力が、欲しいか」

唐突に、まるでフィーを蠱惑するような声が、空気を歪ませるような響きで耳に忍び込んできた。ぞつとして、力ない動きで顔を上げたフィーの目に飛び込んできたのは、金の髪に不吉に光る金の目をした、褐色の肌の一人の男。

「だ、れだ」

「分からぬか」

くつり、と男は笑った。その顔の歪ませ方に、一匹の獣の姿を思い出す。

「お前は、猫…？」

「ご名答」

満足げに男は頷く。

「あれは分身のようなものだ。あちらは今、レオナと言う少女の傍にいます」

「分身？では、お前は」

「大元だよ、主。これが本来の私の姿だ」

「人型とは驚いたな……では、あの姿は油断を誘うためか？」

猫の姿ならともかくこの姿を一目見れば、高位の魔であることはもはや間違いようも無い。一定の距離を保って男はフィーの前に立

ち、警戒するように彼を睨み上げる彼女を面白そうに見下ろした。どうやら、ロイの魔除けは有効らしいと知ってフィーは少し安堵すると、なんとか立ち上がって対峙した。相手はかなり背が高く、結局見下ろされることに変わりは無かったが。

「まあ、いろいろと事情があつてな……今はどうでもいいことだ」  
話す気はないらしい。

「主、力を欲するか。我と契約するなら少なくとも主の器の片方は制御できるようになる」

金の目が不気味に光った。ああ、頭が痛い。思考力が鈍ってくるのを感じながらも、フィーは首を振った。

「冗談」

「つれないことを言う。我を従える機会など、滅多に無いぞ？主が我と契約を交わすというなら、無上の快樂、性の転換、他者を翻弄する美貌、尽きぬ力、富、長寿、すべて望むがまだ。しかも死後に主の魂で無く肉体をくれるだけでいいと言うに」

毒のある蜜のような男の声がフィーの思考を侵す。

これが魔か、とフィーは思う。人が誰しも一度は望むだろう欲で釣って代償として相手を喰らう。なるほど、男性となること、そして、力。それらはフィーがどうしようもなく望むものだ。それでもやめておけ、と言ったロイやヴィーの声が頭に蘇って彼女は首肯しなかった。

「胡散臭いな。上手い話には裏があるって言うだろう」

「ふむ。誘惑では駄目か…大抵の人間は乗ってくれるのだが、仕方ない、脅迫は気に入らないんだが」

その指が、伸びて来た。

「な」

フィーは立っているのがやっとの力の入らない体を叱咤したが、

動かない。ただ、震えた。

「主を傷つけはせぬよ……今は記憶を閉じておけ」

ロイの魔除けを通り抜けてしまったその指はそつとフィーの頭を撫でた。と、頭痛が止み、体に力が戻ってくる。

「何をした？」

魔は笑う。

「冷静に話し合うための準備を。さて」

フィーは身構えた。何を言われるのだろうか。

「取引材料は王の命だと言ったら、主よ、どうする？」

## 54・動き出す

足を半ば引きずるようにして歩くレオナを、ある時から猫が先導してくれるようになった。

「ねえ、フィーの居場所は本当にこっちでいいの？ なんだかあんまり来たことの無い方向なんだけど……」  
「ミャア」

猫は振り返り、返事をするように一声鳴いた。不思議と、ともかくこの猫についていけばいいのだろうとレオナは感じた。そうして一人と一匹はフィーを求めて歩き続けた。

いつの間にか足を踏み込んでいた、どこか薄暗く、まるでわざと人を惑わそうと言うかのような方向感覚を狂わす道は、ひたすらに進むのにつれて人影がどんどんとまばらになっていく。秋に入ろうかという季節ということもあるが、ふと路地裏から吹きぬけていく風の冷たさにぶるりとレオナは身を震わせた。その風が吹き込んできた先に、猫は進んでいこうとする。レオナはそこで足を止めた。

「なんだか、ここには進みたくない……嫌な感じがする」

「ニャー」

レオナに生じた嫌悪感はそのに漂う不穏な歪みの気配のせい。猫はどこか面白そうな顔で、戸惑うレオナを眺めやって立ち止まった。金の目が赤い月明かりを反射して光る。その瞳になぜか目前にある不穏さと同等の何かを感じてレオナは訝ったが、これはただの猫なのだ、と思い直す。

「ひょっとして、ここにあるのは結界なの？ それにしてはなんか禍々しいような気がするんだけど……私はここを通れるのかしら」

その言葉にまるで笑みをもらすような顔をした後、猫は躊躇なく一歩踏み出して『そこ』へ進んだ。途端、その姿が消失する。

「え!?!」

思わず後を追うと、不思議なほどするりとその空間は彼女を飲み込んだ。入ってみればそこはもうただの路地の続きにしか感じられない。けれど先ほどは見えなかったものが見える。地に伏して、ぴくりとも動かないそれは、

「フイー!?!」

ようやく見つけた少女の名をレオナは叫んだ。フイーの耳にあった魔よけの耳飾がはじけ飛んでしまっていることにレオナは気付かなかった。

一方同じ頃の神殿では、目を覚まさない黒髪の青年を前にして腰掛けた老人が、膝にひじを付いて手を組み合わせて一心に何かを呟き続けていた。癒術室には二人以外の気配は長らく無かった。しかしないはずの他者の気配を感じ取って老人はふと顔を上げ、老いてなお鋭さの消えない目で背後を睨みすえた。

「……姿を見せなさい、魔」

「ほう、流石は神官長殿」

金の髪と瞳に褐色の肌をした一人の魔がゆらりと姿を現す。それを見て、神官長はその目を見開いた。

「イヴォルザーク!？」

「懐かしい響きだな。……しかしその名はもはや古い」

「……まさか、新たな主を得たのですか」

「然り。今の名はラエル、だ」

どこか嬉しげに目を細める魔とは対照的に、神官長は苦々しげに顔を歪めた。

「ならばラエル。またも世の理を曲げようか？あなたの力は人には過ぎる、分かっているはず」

「さてな。長きを経て、我も力を弱めたから大丈夫ではないのか」  
おどけた顔で、ラエルと名乗る魔は肩を竦めた。

「それなら喜ばしいのですがね」

そんなことはあり得ないと知る神官長は険しい表情のまま、立ち上がった。

「ここにいらした目当てはなんですかな」

「石だ、と言ったらお前は差し出すかな」

「ここにはありませんよ」

そら惚けた顔をする神官長を魔は見据えた。

「魔の目は欺けぬ」

「……成程」

神官長は懐から5つの輝きを取り出した。

「やはり闇の時代にはあなた方は屍鬼を避けていたに過ぎなかったか。……それにしても、すり替えに気づかぬとは、あの魔法使いの方は余程動転していたのでしょうか」

神官長はチットと言う男を思い出す。今回の騒動の中心にいた赤毛の青年。今頃どこにいるのやら。

「愛しいものが傷つけられたとあってはそうなるものだ」

神官長の言葉を受けて魔は静かに呟いた。

魔が愛を語るとは滑稽だ、と神官長は思ったが口には出さなかった。目の前の魔を煽るのは得策ではない。相手は大の竜嫌いの、魔界の中でも屈指の力を持つ特別な魔だ。今は対立する立場にありながらも神官長と魔は旧知の仲であったから、神官長はこの泰然としている魔の手のつけられなさを知っていた。彼にとって力づくに石を奪い、今のヴィエロアを殺して去るくらいのは容易いのだということ、分かっていた。

「この石を渡せば、あなたはヴィエロアを傷つけずに去りますか」  
その言葉を耳にしたラエルが思案げにヴィーのほうを見やる。一瞬の緊張が場を満たした。

……しかし、それを崩すように魔は神官長に向き直って笑った。  
「冗談だ、我は石など求めはせぬ。それにしてもお前のような人間が孫を持ってそれを可愛がる日が来ようとは。長く生きてみるものだ、北の盗賊の子シオンよ」  
どこか親しみすらこめられたその言葉に神官長は力を抜いた。

「……人が悪い。この年になって姿の変わらぬ相変わらずのあなたを目にする日が来ようとは、まったく、長く生きるものではないですな。さて、石に用が無いとは、何をしに来たのですか金の魔よ。昔語りでもしたくなりましたか」

魔は首を振った。

「否。まあ、主の最初の命を受けて来た」

「それは？」

「そこで寝こけている王との成り代わり、だ」



「ファイー！！　ファイーってば！　死んだんらせめてそつだと返事  
しなさいよ！　しつかりして、ファイー！」

「……ん？」

レオナが何度も叫ぶ声に起こされて、どこかぼんやりとした様子  
でファイーは起き上がった。すると涙目のレオナに出くわしてファイー  
は驚いて後ずさった。

「……っファイーの馬鹿、人が何度も呼ぶのに無視してずんずん歩い  
て行っちゃうなんてどういづつもりよ。しかもこんなところで真つ青  
な顔して倒れこんじゃってるなんて、死んでるのかと思ったじゃない  
い」

「ああ、レオナ、か。……生きてるよ。死んでたら返事は出来ない」  
「分かりきってること言ってるんじゃないわよ。ああもう心配して  
損したわ」

どうやら動転のあまり何を言っていたのか覚えていないらしいレ  
オナが、ぐしぐしと涙を拭うのを見て、

「ごめん」

とファイーは謝った。そのファイーの顔を見上げたレオナが、しかめ  
っ面をした。

「……ファイー。何があつたの」

「……なんでもないよ」

「なんでもない人はそんな変な顔しないわよ、ファイー」

その言葉を聞いて、ファイーは安心させるように微笑んだ。

「そんなに私の顔はおかしい？」

「……いや顔はむしろ好み、……違った、表情が変だって言ってる  
の！　闘技場といいさっきといい！」

レオナの口ぶりに、フィーは今度こそ笑った。  
「もう大丈夫。振り回したみたいで悪かった」

そう、大丈夫、思ったよりはなんとも無い。

「……そうなら、いいけど」

座っていた体勢から立ち上がったレオナは、ぱたぱたと黄色のスカートに付いた埃を払った。そんな彼女の膝を見て、フィーは顔を顰めた。乾いてはいるものの、赤い血の痕がそこにはあった。

「レオナ、その足怪我したのか。歩けるか？」

レオナはフィーの心配そうな言葉を受けて苦笑した。

「ちよつとね。大げさに血が出たけどそこまで痛くは無いの。だからもう平気。」

そんなことより、フィー。さつさとこんなところ抜け出して噴水前広場に行くわよ、踊ってくれるんでしょう！？ 今夜はお祭り、楽しまなきゃ損よ」

何かを振り切るように、レオナは笑うと、フィーの手を引っ張った。フィーはよろめきながら立ち上がって、ふと、ロイもシライもないことに気が付いた。目の端に猫を捉えたが、視線をずらすとフィーはレオナに尋ねた。

「ロイとシライは？」

「お嬢様方に捕まってたわよ」

「なるほど」

……ロイはともかく、シライは大丈夫だろうか。フィーは少し心配になった。

「まあ、私たちが着くころには着いてるはずでしょ。ちよつどいいじゃない。ほら、フィー。さつさと走る！私を置き去りにしたときの勢いはどこに行ったのよ」

「悪かったって」

苦笑して、急かすレオナと並んでフィーは駆け出した。こうしてレオナと過ごすことは、多分しばらくなくなるだろうなと思うと少し切なかった。

「ロイ様、聞いてくださいな。私最近ロアンという貴族に熱烈な愛の言葉を捧げられておりましたの。けれど、お断りしましたわ、だってロイ様の半分も魅力がない人に、あなたという方を知る乙女なら惹かれる道理はありませんもの」

「そのお気持ち、分かりますわ」

「私など毎晩夢を見るくらいです。あなたが月の光と戯れて青き草原で微笑まれているお姿を」

「まあ、羨ましい。私も絵師に頼んでロイ様の姿を描いていただくかしら」

「前々からお頼みしているのですけれど、一向に引き受けてくれないの。ロイ様だってそうですけれど、絵師のほうもとても絵には出来ないと言って」

「そうですね、額に収まる美しさではないわ。この流れる銀の御髪、空色に煌く瞳……」

「天上の造詣のようですよ」

「地に降りた奇跡ですよ」

むずがゆいを通り越してどこか寒気すら感じながらも、ロイは黙ったまま微笑を絶やさなかった。シライは彼の兄への賛辞に頷きつつも、その様子を気の毒そうに窺っている。兄は、観賞されるよう

に扱われるのを心底嫌っているとシライは知っていた。

「しかも今日と言う日はロイ様の弟君にもお会いできるなんて！」

「優しい顔立ちなんて本当にそっくり」

「ねえ、シライくん。私の家にいつでも遊びにいらして？いくらでも歓迎しますよ」

「あら、私の屋敷にも是非」

「そうよ、ロイさんと一緒に。ああ、二人の並んだ姿を日頃見られたらどんなに嬉しいでしょう」

「……」

終わらないお喋りに、随分前からいちいち応じることを諦めたらしい兄の頬が心なしか強張っているのを見たシライは、子どもの特権を行使することにした。

「ええと、僕の兄をそのように賞賛していただけでも光栄です。お招きくださったことも、ありがとうございます……でも、僕、今日はもう眠たいな。ねえ、お兄ちゃん」

帰りたいなあ、と眠気が耐えられないように目をこすりながらシライが呟くと、ロイがそつとシライの頭を撫でた。そうしてシライの額に一つキスを落とすとき、ロイはシライにしか聞こえない声でありがとう、と囁いた。その後、ようやくこの場を立ち去れる嬉しさからだろう、見蕩れるような笑みを浮かべて彼は言った。

「さて、弟ももう眠る時間です。それにこの場に居りますのも我々だけとなつては、夜風を遮るものもありません。皆さまの大切なお体を冷やされるのも良くありませんし、そろそろお暇させていただきます」

今宵は仮装して踊る日であるが、女性は殆どが花の精の格好をし

ている。そんなわけで実に色とりどりの花に囲まれていたロイは、その花々が上げる嘆きの声に構わず一つ流麗な礼をすると、シライの手を引いて踵を返した。

彼にとっての唯一の花を探しに。

## 55・それぞれの想い

耳に心地よく緩やかな曲が、ゆったりとあたりを満たしていた。

噴水広場にて噴水の縁に腰掛けて赤色をした月を見上げた一人の男は、静かに笑んだ。果たしてあの月が赤い意味を知る人間はどれほどいるだろう。やがて、この清浄な気配に満ちた国イオナイアすら歪み汚れる日が次第に近づいているなどと、この祭りに浮かれている人間達は思いもしないに違いない。人に混じって自分という魔の存在に気がつかないのと同じに。これが精霊国とは笑わせる、昔はこんなではなかったのに、と彼は思う。今よりはるか昔、この国の人間はそのほとんどが、神殿に関係を持たずとも魔を見抜く鋭い目を持っていたものだ。

淡い金の髪に同色の目をした男は、自分のそれよりも深い色を持つ『金の魔』と恐れられる彼の兄を追って、久方ぶりにこの国まで来た。

兄は、魔の世界において屈指の力を持ち、それでいながら、長い間大人しく監禁状態にあった。だが先日、フィオナに会いに行く、と突然言い出して消えてしまった。竜嫌いでも知られる彼の兄が、なぜたかだか一人の人間の為にこの竜を祀る国にわざわざ赴いたのか、なんとも解せない。

今回、『世界を手にするための石』とやらを奪う機会がついにやってきたという噂に踊らされた魔が、そろって大騒ぎしだした隙を縫われた。

その石があるというこの国中に張り巡らされた結界は、多少大雑把ではあるものの、強固で、おそらく上等な魔力を持たない魔ならば結界に触れただけで消し飛ぶに違いないような代物だ。5つの涙

の伝承を眉唾物と捉えている魔の方が多いので、いくら石があると  
いっても命までかけて結界を越え、この国に入ろうとする輩はほと  
んどいない。…今まではそうだった。

だが今、まだ石は鍵にすらなっていないという。そのため、試す  
価値は無いと思う魔が多いのも事実。

自分はどうか？

石を誰が奪いに行くかという時点で既にもめていた魔たちを笑い  
ながら、石によって得られるだろう力を浅ましく欲してはいなかつ  
たか？

それを男は否定できなかつた。力、それは彼が心から望んでやま  
ぬものだったから。ふと、いつも余裕げに彼を見下してくる兄の姿  
が思い出されて、彼は苦い顔をした。憧れずにはいられない。あれ  
ほどの力があればヴィエロア王が王都の結界を強めたときに耐え切  
れずその外へ逃げ出すようなことはしなかつたろうにと彼は思う。  
彼は結界の中にいる苦痛のあまり結局退散してしまった。そもそも  
あの瞬間に消え去った魔も相当いたようだが。

…あの後、王都からさほど離れていない場所で様子を窺っている  
と隕石が王都を襲った。その大きさに王都が無くなるのではないか  
という危惧を持たせるそれはしかし、王都へ届こうかという瞬間、  
粉々に砕かれた。

何が起こったのか。

王の結界の力が弱まった様を見て、訝りながら兄を探す傍らに王  
都の人間らの会話を拾っているとようやく事態が掴めて来た。

さざめくかれらの噂によると、王は冠と石を失ったという。しか  
しこの王都を賊が落とした隕石から守り、精霊に臆することなく立  
ち向かい認められたヴィエロアを、彼らは変わらず王と慕っている  
ようだった。そもそも、男としてはかの石がいまだこの国にあるの  
を感知していたので、あとは唯一失われた冠を細工師が新しく作れ

は済む話のように思われた。遠からずこの騒ぎは収束するだろう。しかし。

「次の冠ができるまで、ヴェエロアは果たして耐え切れるかな」

男は独り言を漏らした。

ヴェエロアは闘技場にて倒れたという。それは、彼の器にある術力が尽きたために相違ない。王都の結界を強め、その状態で隕石を砕くほどの力を放出したというなら、いくらヴェエロアが人間離れしていようと至極当然の結果と言える。かの身へと注ぐ竜の力で補充すればいい話だが、竜と契約した彼にいくら膨大な竜の力が常に流れ続けていようと、それを同時に国中を覆う結界へと回さなければならぬのだ。第二の竜の力の受け皿といえなくもない冠のない現状、力の行使とその補充を同時に行うことはできない。故に彼の器を満たす力を補填するには一時的に結界を解くしかない。故に石がこの国にある現在それはどれだけ危険な行為かヴェエロアは知っているのだろう。

冠が早々にできなければ、現在自らの器はほぼ空の状態のままに竜から彼へと流れ込む力を国全て覆う結界の維持にまわしているらしいヴェエロアの身は危うい。

さらに言えば、例えば隕石を砕くというような過剰な力の行使は、下手をすると器から力を放つための回路を壊す上に、器の持ち主の体もその巻き添えになりかねない。ヴェエロア王の術力の回路とていくら彼が強いといえどおそらくは無事ではないはずだ。その状態で、結界の維持のため術力を使うことをやめようとしなのは自殺行為に等しい。

この国の王はよほどの自己犠牲の精神に溢れているようだと思つた。常より他者に構うことなく我が思つままに振舞う魔の一人としては呆れる他ない。あるいはそれが王というものか。



王は、果たしてどうするのだろうか。どうなるだろう。

つらつらと考えていると、ふと妙な気配を感じて男は顔を上げた。懐かしさと嫌悪を同時に引き起こす奇妙な感覚が体を駆け巡る。

鋭く辺りを見回した男の目に飛び込んできたのは、彼の兄が好んで取る虎猫の姿。

「兄上」

ぼつりと言葉が漏れる。

わきあがる感情を抑え、男は猫の姿をした兄から目を離し、兄を従えた人間の方へと目を向けた。そして目を見張ることになる。兄を陥落したというのだからよほど匂いやかで豊満な美女なのだろうと思っていた。しかし当ては外れた。よくある魔道師の格好の黒い衣装は仮装のつもりなのか、瘦躯に短い髪をした、まるで少年のようなどけなさすら感じられる一人の人間が、そこにはいた。

「あれが、フィオナか？」

信じられなかった。だがその放つ雰囲気は間違いなく兄と契約を結んだ魔力の濃厚な気配を纏う。あれで、間違いない。

彼が慕う兄の魔力と、彼が嫌う精霊の頂点たる竜の力を混在させる奇妙な存在を男は静かに睨み据えた。

ようやく二人の少女と一匹の猫は噴水前広場にやって来た。噴水

のすぐ傍で楽隊が奏でる音楽に合わせて、それを囲むように輪を作った人々がくるくると相手をかえて踊り続けている。今流れる曲は、耳馴染みのいいこの地方に古くから伝わる民族舞踊の定番曲だ。ふくよかな淑女の歌い手が、渋みはあるけれど良く通る声を響かせている。

今宵ばかりは忘れましょう

あなたの罪も私も罪も

今宵ばかりは忘れましょう

あなたの身分私の身分

何者だとして構わない

夜が明け光が差すまでは

あなたも私もおんなじに

尊き竜の勇ましき

イオナイア国の子ども達

さあ臆さずに目の前の

かわいい人の手をとって

踊り明かして忘れましょう

日頃の業も苦しみも

「今宵限りは忘れましょう、貴方に起こったその全て」

フィーはそつと歌詞を呟いて、なにやら思索している様子だった。

「フィー？」

レオナに呼ばれて、フィーの鷲色の目がはつとした。

「なんでもないんだ。…さて、ロイとシライはどこにいるかな」

「そうね、まだ来てないのかしら」

来る途中は見当たらなかった2人を探すうちに、ふと猫が足を止めた。それにフィーとレオナも立ち止まった。

「どうしたの」

「…」

レオナの問いに答えず、フィーにのみ猫は一瞥を投げかけた。それを受けてフィーが頷いたのを見ると猫はさっと噴水の方へと駆け出して行った。

「どうしたのかしら」

「…美人の猫でもいたんだろう。そのうちに戻ってくる」

フィーはどこかそっけなく呟くと、猫の去った方を見ることなくロイとシライを探して首を巡らせた。

「…ん？ あれ、ロイたちじゃないか」

「え、どこっ？」

「ほら、あのあたり」

「あ。本当だ、間違いないわ。ロイさん、シライー！！」

フィーが指差す先に、道化師の少年の手を引いた目立つ銀髪の青年がいた。どうやら向こうもフィー達に気付いたらしく、呼びかけるレオナに手を振ってこちらへと近づいて来る。それにつれて、フィーの顔を見つけたときには安堵していた銀髪の青年の顔が曇った。

フィーの目の前にやって来たロイは、彼女の耳飾をなくした耳にそっと指を伸ばして柳眉を顰めた。

「フィー…君まさか」

「…悪かったな、せつかくくれたものを」

「違う、耳飾のことじゃない」  
すまなさげに答えるフィーに、真剣な目をしたロイが糾弾するよ  
うに言う。

「…言いたいことは分かっているよ。せつかくロイのくれた耳飾も忠  
告も無駄にしたって意味」

「…」

ロイの表情が険しくなる。

「お兄ちゃん？」

「ロイさん、どうしたの」

レオナとシライに構わずロイはフィーを見つめた。見た目には彼  
女は変わらないけれど大きくその内実は変わってしまったしていると彼  
には分かった。

「…猫は？ いないのか。」

君から目を離れた僕がいけなかった」

俯くロイに、フィーは首を振った。

「元よりはくれた私が悪いさ、ロイは悪くないだろう。…何よりこ  
うなることは私が選んだんだから」

ロイはフィーの目をじつと見る。そこには揺らぎも歪みもない。

「後悔は？」

「しない」

「そう。…なつちゃったものはしょうがないね。でも頼むから、あ  
まり力を使わないように」

「ああ」

ぼん、とロイがフィーの頭を撫でると、二人はその話題をお仕舞  
いにしたらしかった。フィーはレオナへ向くと、その手を掴んで踊  
りの輪へと歩き出した。

「さて、踊ろうか、レオナ」

「ええ！？ ちょっとフィー、今のは」

「ほら、早くしないと時間が無くなるぞ？」

「待ってよ、フィー！ ああもう」

そうして踊りの輪へと加わりこむ少女達を眺めながら、シライはどこかぼんやりとしている兄を見上げた。猫がいれば猫に尋ねただろうが、ここにはこの兄しか聞く相手がいない。シライは申し訳無く思いつつ兄の思索を遮ることにした。

「お兄ちゃん、フィー、は」

「ああ」

魔女になった、と静かにロイは呟いた。

一方猫は、淡い金髪の男の元へとやって来ていた。

「久しぶりだな、ゼダ」

「兄上。どういっつもりです」

ゼダと呼ばれた男は陽気に笑う猫に向かって顔を顰めた。フィオナの方に向かう途中、この兄に遮られたのだ。

「兄上はまたも人間に肩入れするのですか？ 失敗に懲りない人だししかもあれは貴方が嫌う竜の血が宿る細工師ではありませんか。あ

んな貧相な女に何故兄上ほどの魔が誑かされたのです？どいてく  
ださい、あれを葬って兄上の目を覚まして差し上げよう」

ゼダの目は苛立たしげな殺気に満ちている。それを猫はたじろぐ  
ことなく真っ直ぐ見返した。

「そうなるとなおさら、どくわけには行かないな」

猫は不穩に輝く金の目を細めてゼダを見つめた。

それだけで、ゼダは動けなくなる。この光景に気付くものがいれ  
ば滑稽に思われたらう。だが、一人と一匹の周りを不可視の結界  
がいつの間にもやら囲っていた。そのために、誰にも気付かれな  
いまま、ゼダと猫の間に緊張が走る。猫が発した気迫を受けてぴりぴり  
とゼダの頬に痛みが走るほどだった。

「…仮にも我の主に向かって酷い言い草だ。主を貶すことは、たと  
えそれがお前の言葉としても許さない」

「本気ですか。…本気で、貴方は敵対すると？ あの竜の味方につ  
くと？」

「阿呆か。竜の奴は嫌いだ。そもそも我は中立の存在だ、忘れたか」  
「ですが！」

あの少女と契約を結ぶということがどういうことなのかこの兄が  
分かっていないはずがない、とゼダは兄を見つめた。

「…主のみ、我の中では例外なのだよ、ゼダ。主が望むなら竜でも  
闇でも味方することはありうる。…我はあの者に賭ける」

どこか遠い目をする猫のその言葉にゼダは絶句した。

「『赤の時代』が到来するのですよ。貴方が気づいていないわけが

ない。何故今、そのように不利な賭けを！ たかだか一人の少女に  
「…魔の本質は気まぐれなもの。私の気まぐれと思え」  
「気まぐれで私よりあの少女を選ぶと。私と対峙すると、そう仰る  
のですか」

猫はくつくつと笑った。

「まあそうなるかな？ 最も主は精霊にも魔にも闇にも味方する気が有るとは思えんがな。そこが面白い、主が、細工師として、新たな王が立ち月の染まるこの時代の竜細工師として、フィオナとして何を選ぶか見ものではないか…そういう訳だ、分かったなら帰れ。主に手を出すものならここで討つ。兄弟のよしみだ、殺しはせんが」  
猫はぺろり、と鋭い爪を舐める。

兄の向ける目に、ゼダは戦慄した。

「…分かりました。しかし私はあれを葬るのを諦めるつもりはありません。お忘れなく、我が親愛なる兄よ」

兄の本気を読み取って、悔しげに呟くとゼダは消え去った。

「さらば、我が弟よ。」

……当分顔をつき合わせる機会がないといいんだが。あれは何でこの無精の兄に入れ込むか分からぬな」

猫はやれやれと首を振る仕草をする。

「それにしても体を分けるのは疲れる。主の『女神』も一応やって来たようだし戻るか」

うんざりとしたように呟くと、ラエルの分身たる猫はゼダ同様姿を消した。

「フィー、フィーってば！」

「ん？どうしたんだ、レオナ」

フィーの笑顔にいらいらしたのは初めてだ。こんなフィーを見るのは初めてだ。

次の踊りの輪に加わるべく列に並んだその間、フィーはレオナにただただ楽しい話ばかりした。闘技場でいきなり賊に向かって行った訳も、何故あんな路地裏で先ほど倒れていたかも、王とやけに親しい訳も何も語らない。細工のこと宝石のこと、職人達や貴族についての噂話、ロイヤシライ、レオナとの思い出話をいつもどこか皮肉気な口調で、けれど楽しそうに語った。いつもなら楽しいと思はず。それなのにまるで表面を取り繕うような何かを感じてレオナは苛々したのだ。：違う、フィーが何かをただ覆い隠して見せようとはしていないことに対して、悲しかった。

「フィー。何で言ってくれないのよ…」

「何が」

見返してくるフィーの顔はやっぱり笑顔。表情を崩さないフィーにレオナはとうとう切れた。

「フィーが黙っていたいならいいと思ったけど。でももう我慢できないわ。何でそんな作り物の顔をするの、私を遠いところから見るような目をするの！ 失礼しようが！」

その言葉にフィーの顔は苦笑いに変わった。

「：ごめん。楽しまなきゃ損ってレオナは言うしさ、確かにその通りだな、と思っ」

「確かにそう言ったけど。：私はフィーに心から楽しんで欲しいのよ、そんなふうに謝って欲しいわけじゃない！」



レオナはいきなりフィーの耳を引っ張った。

「痛いんだけど…」

フィーがレオナのこめる力のあまりの強さに涙目になったがレオナは手加減しなかった。

「これならよく聞こえるでしょう。フィー、一応私たち友達なのよね？ 教えてあげるわ、一人で抱え込んで苦しむのなんてちつとも美德じゃないのよ。特にフィーなんかうまく隠したつもりなんてしようけどばればれなんだから。そんなに隠されたらむしろ気になつてしょうがないじゃないの。」

…フィーは私に女だつて黙ってたとき、私があなただを嫌つかつて気にしたでしょう？ 今は一体何を気にしているわけ？

言つとくけどフィーが実は女の子だつた以上の衝撃は、あなたが何を言おうと受けない自信があるわよ、私」

レオナは豪快に笑った。

ふとその時、フィーは何で彼女の笑顔が好きか気付いた。その笑顔は、師匠に似ていた。

「吐け」

その優しい脅迫にフィーは結局屈した。

同じ頃、癒術室で一人の青年が目を覚ました。闇の中ですらその黒さの際立つ艶やかな黒髪に、深い海の色をした目。ヴィーである。つっ…」

起き上がろうとして、彼は電気が走つたように体を駆け抜けた痛

みに呻いた。

「おお。思いの外、早く目覚めたな？ 国王」

とりあえず無理にベッドの上で身を起こしたヴィーに、かけられた声は彼が予想していた神官長のものではなかった。

声の方向に目をやったヴィーはしばし押し黙った後、尋ねた。

「…ここは神殿の療術室で間違いはないよな？ 悪趣味な鏡などここに置いてあつたか？」

「口はよく回るようで安心したよ」

ヴィーの目の前の、ヴィーと瓜二つの男はにやにやと笑った。自分はこの感じの悪い笑みは浮かべるはずが無いとヴィーは溜息をついた。

「お前は魔、か。こんなときにやって来るとは…いや、こんな時だからこそか」

ヴィーは痛みを押し立て立ち上がると、珍しく気の利いた狸爺が傍らに置いて行つたらしい長年の相棒とも言える剣を手にとつてふらりと立ち上がった。

「やるか？」

青白い顔をしながらも、目は死んでいないヴィーに、彼と対峙する同じ顔が呆気にとられた。

「その様で精霊に向かったときと同じ選択をするか。死にかけとは思えんな、恐れ入る」

「生き意地が汚いものでね。まだ死ぬ気などないな」

ヴィーは笑つてすら見せる。

どこからこの青年の自信は来るのだからさっぱり分からないのに、戦うにせよこのまま助けず放置するにせよ、なぜだかこの青年は生き延びるのではと魔に思わせる何かがあるがそこにはあつた。

「…成程、私の主の心を動かすだけはあるな」

小さく呟いたラエルの言葉は、半ば意識朦朧としたヴィーには届かなかった。

「なんだ？」

「なんでもない。…そう構えるな、と言いたかったただけだ。我は今時分、おそらくお前の味方だ」

「精霊嫌いの魔が、この精霊の国の王の味方を名乗るとは随分と笑えない冗談だ…ん？ お前、ひよっとしてフィーに付きまどった猫、か」

「ほう、腐っても英雄だな、どこぞの抜けた術師とは違うようだ」  
魔は面白そうに笑んだ。

「当たり前、か。何の用だ、石か、王の座か、それとも俺を殺しに来たか」

「我はそんなものに我は興味が無いと言うに。…全く、お前はお前の祖父の若い頃と顔がそっくりでやり辛い」

「あの狸爺に欠片でも似ていると思うとうんざりするが」

「そっくりだよ…立っていることすら辛いようだから用件を端的に言おう。我は主の命でここにいる」

ヴィーはその言葉に眉を寄せた。

「主に命を受けた、と？ お前、フィーと」

「ああ。契約した」

ヴィーは、頭を抱えた。

「…やってくれたな。畜生、俺をだしにしたのか」  
「理解が早いな」

魔は笑う。

ヴィーはそんな魔に向かって言った。

「その姿でそれを言うか。…俺の術力の回路が修復し、器に術力が戻るまでお前が成り代わると言うのだろうか」

「…名答」

「できるというのか」

「我は術力を扱えぬが、魔も闇もこの国に寄せつけぬことはできる。あまり我に立ち向かうものなどおらぬからな」

それを証だてようとでも言うのか、ず、と魔から立ち上がる力にヴィーは息を呑んだ。ゆらり、とその力は魔を中心として一瞬で国を覆っていった。

「お前は、何者だ？」

「…今は主から名を受けてラエルと言うな」

おどけて喋るラエルは、それ以上答える気はないらしかった。

「さて。もう結界に回す力を器に戻して構わない。よかつたな、ヴィエロア王。死の淵から脱却だ」

「良いわけがあるか！」

ヴィーはぐしゃり、と髪をかき上げた。

「何故怒る？」

分かっているだろうに、あえて魔は問う。

「精霊国の人間なら、自分にとって大事な人間が魔の力に歪んでいくことになるのを喜べると思うか」

「…主が歪むのを厭う、か」

「…く、とラエルは首を傾げる。

「当たり前だ！」

ヴィーは声を荒げた。

「ふむ。我は楽しみだがな」

三日月形に口をゆがめる魔を眺めたヴィーは、彼らの嗜好への嫌

悪を募らせた。魔は気に入りのものが自分と同じに歪んでいくのが堪らなく好きだと一般にいう。

「…フィーとお前の契約条件は、なんだ」

「極めて良心的だ。主の死後にその肉体を頂く」

魂を取られるわけでも、今肉体のいずれかを代償に捧げるわけでもないということにほっとしつつもヴィーは尋ねた。

「解除、できないのか。俺はこんなことは望まない、一番初めの命を果たさぬうちは可能だと聞いたことがあるが」

「それは即ちお前が死ぬことを主が認めない限り不可ということ。つまり、無理だな」

「だろうな。……フィオナ。くそ、どうにかならないのか！」  
ヴィーが声を上げた時。

「話は終わりましたかな？」

扉を開けて、神官長が現れた。

「ああ。大体終わりだ、シオン」

ラエルが神官長に振り返って答えた。

「そうですね、ラエル。ご苦労様」

どこか気心の知れた様子に、ヴィーは訝った。

「先程も感じたんだが、まさか知り合いか」

その言葉に、老人はなんてことのないように頷いた。

「生きていればいろいろあるものです…それよりヴィエロア、これほど良い申し出に何故悩むのです？」

「…狸、お前の血は何色だ。フィーはどうする」

「私の血は勿論温かみのある赤ですよ、分かり切ったことを聞くものではありません」

憤慨したように神官長は鼻を鳴らした。

「フィオレンティーノのことが不安なら、彼の旅する道中、彼が魔法を使わぬよう守ることで。要はお前が生き延びて、彼が歪むことのなきよう常に守ればいい話。命を救われたのだからそれくらいが妥当でしょう」

「道中？」

話についていけずに、ヴィーは顔を顰めた。

「おや、魔に聞いていないのですか。フィオレンティーノは師の冠を盗った人物を追うつもりらしいですよ？」

「な」

反論しようとして、それが可能な力を得たのなら彼女はやりかねないとヴィーは悟った。いや、絶対にそうするだろう。戴冠式の時だって、彼女は実際命懸けだったのだから。

「ついでだからそれに便乗してあなたは石を鍵にして来なさい。せっかく『5つの涙』も揃ったのだし、こうなれば竜の思惑に乗るのも一興でしょう」

すらすらそんなことを述べ、賊の目を欺いて守った『5つの涙』を取り出して見せた祖父を、ヴィーは睨んだ。飄々と神官長は責めるような孫の視線を受け止める。

「いつもの覇気が感じられませんな、ヴィエロア。本当にあなたは今危ういところにいるのですよ。」

先程、やれるだけあなたの術力の回路を修復しましたがそれでも

ずたずただ。このように結界を張り術力を使い続けるのなら治ることとは無く、そう時を待たずお前は死ぬのです。

諦めてさっさとその空っぽの器に竜の力を蓄えなさい。

…どれだけ綺麗ごとを叫ぼうと世界は生きて何ぼのものです、生かそうとしてくれる手があるなら迷わず掴みなさい。その手はあなたが生きることこそを望んでくれていたのだから。それが振り払われ、生かすはずの人間が死ねばその手の持ち主がどれだけ苦しい人生を辿るか、お前なら想像できるはず。フィオレンティーノの手を掴みなさい。その後すべきことは、感謝を忘れず、差し出した手の持ち主が死地に陥ったときは必ず手を差し伸べる覚悟を持つこと、それ以外にありません」

結局視線を逸らしたのは、ヴィーだった。彼自身死ぬ気が微塵も無くとも、仮にも神官長である祖父がヴィーは今危篤だとそういうのなら間違いないのだろうと彼は思った。それに彼には、祖父がその命を削って自分を生かすために尽力したのだ、ということも分かっていたから。なんだかんだ言って孫馬鹿の彼の祖父は、ヴィーに生きる、と言っているのだ。要は、それだけなのだ。

「分かった」

歯を食いしばって、ヴィーはそれだけ言つと、神官長の手から5つの石を奪った。

「フィーを守り抜いて、このわけの分からない冠と石の因縁も全て解いて戻って来てやる」

そう呟いて、ばたり、とヴィーはベッドに倒れこんだ。

しかし器に力を入れ始めた所為か、血色が戻り、たてる寝息は健やかと言えた。そつとそれに神官長は毛布をかける。そして、今まで黙りこくっていた魔に歩み寄った。

「…人が悪いですね、ラエル」

「なんのことかな、扉の外で聞き耳を立てていた地獄耳の神官長」  
「ばれていましたか。やれやれ腕が落ちたかな。」

「人が悪いと言うのはあなたがヴィエロアに『主が歪むのが楽しみだ』と口にしたことですよ」  
「魔として当然の言葉だろう」

神官長はこの魔の過去の断片を知っていたから、その言葉を素直に受け取る気にはなれなかった。

「私はてつきり我が孫を試したのかと思いましたかね」  
「…さてな」

にやり、と神官長の孫の顔をした魔は笑った。

「いろいろあったのねえ。」

それにしても。ねえ、フィーは王様が好きなの？」

「…なぜ、そうなる」

フィーは、魔と契約を結んだ経緯についてレオナに語った。ついだから端的に冠に纏わる王との間の出来事も、ソラのことはぼかしつつ端的に語っておいた。それを聞き終えたレオナの第一声がそれだった。

「レオナは、私がこの国で忌避される魔女になったことには何か感慨は無いのか」

「フィーはフィーじゃない。違うの？」

けろりとしてレオナは言う。



「そうだけど」

ここまであっさりとそのことを受け入れられるとは思っておらず、フィーはむしる戸惑った。なんと言うのか、こういうところはレオナは大物ではないのかとフィーは思う。彼女のような人間が公爵になっても、面白かったかもしれない。

「フィーが男になったと言うのでなければ私にとってどうでもいいことなのよ、それより」  
「どうでもいいのか。」

「今大切なのはフィーの気持ちよ。だって、それ次第では、」  
レオナは言葉を止めた。まるで何かうっかりと口を滑らしかけたかのように。

「それ次第では？」

「ううん、なんでもない。ともかく好きじゃないの、王様のことは？」

「……だから何故」

「だって、ライバルでもないのに誰か異性に対して同等であって欲しい、なんて普通思う？ それにフィーが王様を見る瞳は恋する乙女のものだったわ！」

「そうだったか？」

どんな風にフィーを見ていたか、自分ではよく分からずフィーは首を傾げた。フィーのことをどう思うのか。フィーは考え込んだ。

「そうだな…ヴィーを見るのは夏に海を見ているのに、どこか似ているかな」

「…なんか壮大ね」

「ロイを見るのは昼下がりのゆったりした空を見るのに似ているし、レオナは太陽のようだと思うし、シライは森みたいな」  
「…そう。私は、太陽かあ。ありがとう。…って、呆気にとらわれる場合じゃないわ」

ようやく並んでいた列は、順番を迎えて次の踊りの輪を組み始めたところだった。輪を作り終わると相手をかえながら踊るので、レオナとフィーも一旦踊ったら一度別れることになる。

レオナはだから矢継ぎ早にフィーに尋ねた。

「なんだか相手を見ていると胸が高鳴ったり、とかしないの」

「目が合うとなんとなく嫌な予感がすることはあったが」

「相手を思うと切なくなったりとか」

「作ると約束している創作のアイデアが沸いてわくわくするな」

「…相手が他の異性と並んでいると嫉妬したり、とか」

「まあ、女好きで有名な男だからな、相変わらずだとは感じるだろうが」

レオナは溜息をついた。

「…フィー」

「なんだ？」

「私は今なんだか、王様と、ついでにロイさんへの同情の気持ちで一杯になった」

「なぜ」

「なぜって……うーん」

輪が出来上がり、レオナとフィーも手を取り合って踊り始めた。考え込んでいたレオナは、顔を上げてフィーと向き合う。

「ねえ、フィー」

「なんだ」

「あのね、私。今日フィーと踊りたいって言ったのは、今日でフィーへの想いに区切をつける為だったの。情けないでしょ、フィーに振られてもまだどこかでうじうじするのが抜けなくて。ずっと好きだったから」

フィーは静かに首を振った。レオナがくるりとターンする。

「ありがとう。もう、大丈夫だからそんな顔しないで。…でもこうやって気持ちを切り替えられるのも、フィーが私の気持ちを受け止めてちゃんと答えてくれて、今はフィーと友達になったから」

レオナは笑う。もうすぐ次の相手と交代だ。

「振られちゃったのは残念だったけど、それは嬉しかったのよ、フィー。ねえ、だからさ。これからもうちょっと、王様やロイさんの気持ちとも向き合ってあげて。私の気持ちに向き合ってくれたように。王様と話し合ったように。あなたの中でいろいろと完結してしまっくんじゃなくて。そしてあなた自身の思いに目を背けるんじゃあなくて」

「私は、」

「お願い、ちょっと考えてみてよ、フィー」

ウインクすると、レオナは次の踊りの相手へと向かって行ってしまった。

「わたし、は」

なぜか今まで考えようとしなかった何かに、レオナの言葉が触れてしまったようでフィーは思考を停止させた。

ロイヤ、ヴィーの気持ち？

そして、私の気持ち？

だがフィーは、結局考えるのを止めた。

「祭りが終わったら、あいつらとは会わなくなるのだからフィーは決めていた。」

祭りの終わる日、明後日には、この国を出よう。

## 56・祭り最終日(1)

あれからシライやロイとも踊って、祭りの遊びもし尽くすと家に帰って倒れこむように寝た。

一夜明けた今日は、やはり快晴だった。遅くに眠ったのでもう昼を回っている。

フィーはカーテンを開けて王都を見回した。幸運にも、この工房は1階の天井を高く取っているために2階が3階ほどの高さとなり、それは裏通りにぎゅう詰めにある家の一つとしては比較的あたりをよく見回すことのできる高さだった。

「この景色も、見納めか」

遠く高台に望める城や神殿は威風堂々と今日も健在。世界中の建築家を驚かせるという実に色とりどりの石や煉瓦を美しく組んで造られた家並みは宝石箱をひっくり返したようだ。点々と王都の中心にいくにしたがって増えていく街路樹や花壇が瑞々しく質素な石畳に映える。

隕石がこれらを消してしまふことがなくてよかった、とフィーは思う。というか、死なずに済んでよかった。

どこからか、いつも聞こえてくる下手なピアノの練習の音が聞こえてきて、彼女は苦笑した。それすら何か心に残しておくべきな、特別で尊いものであるかのような不思議な感覚に囚われたからだ。

このように帰れるかも分からないたびに出ようというときになって、実は王都が結構気に入っていたことにフィーは気が付いた。

自分はいつも気付くのが遅いな、と考えたとき、レオナの昨日の言葉が蘇った。

「どうしようもないよ、レオナ」

考えてみても、だ。

ロイは最近様子がおかしかったが、あれは女好きのヴィエロアに對して過剰に反応した結果、私を守ろうとしてくれていているに過ぎないだろう。ヴィエロアにいたっては、昨日の様子からもまだソラという少女に心を残しているように思う。好意を向けてくれているように感じなくも無いが、女であれば誰であれ、その人がソラでないなら彼にとって同じなのだろうとフィーは思う。

仮にフィーに何か特別な情を彼らが、いや誰であり向けて来たとして、男と偽り生きていく心積もりの私にその人といかような幸福を紡げると言うのか。細工だけは捨てられない。この国の外ならあるいは細工師の女を認める国もあるかもしれないが、竜細工師となつては出ることもない。元から、宝石も豊富で他の細工師の腕も卓越しているこの国を出る気はフィーにはなかった。

だからどうしようもないとフィーは思った。もうロイやヴィーと会わない、という以前の問題だった。大体男性と接触するのが嫌いな人間が、恋を楽しめようか。相手もそうだ。

「私の見目も可憐とは程遠いしな」

フィーはやれやれと首を振った。まあ、動かす分には軽いので身のこなしはいいし、そこそこ力も強いのが利点といえば利点だ。女と疑われようも無い。

そろそろ街も目覚める頃なのではないだろうか、だが、まだ外は静かだ。祭り最終日の今日は、本来旅芸人一座の奇術や劇、締めくくりの花火などがありクライマックスのはずであるが、フィーはおそらく昨日の王様の剣舞ほどのものはもうないだろうと思った。あの後、王様はどうしただろう。

…おそらく助かったはず。失敗したならこのような空気が王都を

支配しているはずが無い。

今の彼女には分かった。

王様の術力にどんなに似せてあっても、今王都を守る力は、彼女の魔、ラエルによるものだ。

昨日。

魔は卑怯に囁いた。グイーの事情をよどみなく語り上げた後、絶句するフィーに言った。

「お前はヴィエロアを救える可能性のある唯一の人間でありながら見殺しにする気か」

「こつも言った。」

「丁度いい理由になるだろう。ヴィエロアの為、これを言い訳に魔法使いとなり、力を得れば冠を取り戻すこともできる」

フィーは、魔と契約することを選んだ。

契約のために新たな名と始めの命令を欲した魔にラエル、と名づけてグイーと成り代わるようフィーは告げた。

ただ彼女はこつ付け加えた。断言するように。

「これは、グイーのためじゃない。私自身が力を得る為だ。お前に命じたことは恩返しと償いだ」

「何？」

「力はお前の言うように今欲しくてならなかったもの。いずれは間違はなく自分の無力さに耐え切れなくて私はお前と契約しただろう。私は短気だから、それが今になっただけ。」

そしてヴィーには、以前に一度、そして今日も命を救われたし、私は彼を一度理不尽に憎んだ。だから借りを返すだけ。お陰でありつへの負債が消えて清々するというものだ」

「…主は頑なだな。偽善だ、そんなものは。主がどう言おうと、どういつつもりであろうと、ヴィエロアはお前に罪悪感を抱くだろうよ」

「お前は使い魔らしくないが魔らしい物言いをしてくるな、ラエル。…まあ、その時は、ヴィーを都合のいいきっかけとして利用してやっただけだと言って呆れさせてやるよ」

「…主。全く、我と初めて会ったときから相変わらずだな」  
ラエルは金の眼を懐かしげに細めた。

「初めて、会った時？そう言えば私はいつお前と会ったんだ、覚えが無い」

フィーは眉を寄せて考え込んだ様子だったが、それをラエルは遮った。

「だろうな…。まあ、それでいい」

「まさか、お前が記憶を消しているとか言っんじゃないよな」

「さあて」

魔は笑った。また答える気が無い、とフィーは溜息をついた。

そんなフィーから一歩ひくと、ラエルは静かに跪く。臣下の礼を取るように優美に。そして呟いた。

「…誓う。汝、フィオナに名を受けし金の魔ラエルは汝朽ちるまで汝に従おう」

それから、契約印を刻むからちよっと痛むぞ、と魔が言って、動



けないフィーの体内を透かすように手を伸ばしてきた。文字通りその指は硬直したフィーの皮膚を『通り抜けた』。気味の悪さにフィーは青くなつた。自分の中の何かを、今勝手に他者が弄っている強烈な嫌悪に顔を顰める。悪趣味だ、精霊との契約もこんなだろうかとフィーは思った。

長く感じたが多分本当は一瞬で終わった作業の後、フィーはちよつとどころではすまない苦痛にぐらり、と倒れそうになった。それを支え、そつと冷たい地面へとラエルは横たえてくれた。

倒れたフィーの中にあるのはまるで、肉体の中で今まで無かつた何かが膨張したり縮んだりしながら無理やり体外へと出入りしようとしているような違和感と苦痛だった。経験したことのないそれに吐きそうにすらなる。

説明も少なく唐突に触れてきた上に、なんだか騙された気持ちでラエルを睨んでやると、魔は目をそらして口笛を吹く、というなんとも古典的な誤魔化しかたで答えてくれた。馬鹿にしているとしか思えないそれにフィーはかなりいらついたが声が出ずにただぐつ、と痛みをこらえた。

魔は、そんなフィーの様子に少しだけ申し訳無さそうな顔をしたが、立ち上がった。

「…まあ、耐えられぬ痛みではないはず。さて、どうやらヴィエロアの方がかなり危ういようだ。

最初の命を果たせなくなる前に我は行く。もうすぐ、レオナとやらをもうひとつの我が連れてくるからそれまで辛抱してくれ。ああ、後、その猫のほうの分身は、我が王と成り代わり次第いなくなるからそのつもりでいろ」

かろうじて頷くフィーを確認した魔は、この王都を発つ前に一度は顔を見せるように、と彼女にそう言っ、消えるように立ち去った。その言葉を聞いた後、フィーは気を失った。

「それにしても本当に、意外と変わらないんだな」

窓からとつくと離れて、荷造りをしつつフィーは呟いた。室内は光に満ちて明るい。宝石箱を持ち上げ、旅に連れて行くかどうか一瞬迷い、フィーは結局そつと机の上へと戻した。

…もちろん竜の血を飲んだときよりは変化がある。魔の力が自分に漲っているのが分かるし、昨日などはヴェーの結界の気配やロイの中に殺されながらもうつすらとある術力を感じることができた。だがそれは、力を得るということから分かっていったことだ。初めは新鮮だったが、昨日一晩で結構慣れてしまった。

それより、物語に聞くように自分が『歪んで』いないことにフィーにとつて意外だった。もっと何かを歪ませることが、魔法使いになるということだと思っていたが、どうやらなるその時点ではそうでもないらしい。意外と書物というのは当てにならない、とフィーは思う。もっとも、魔法というものに疎い精霊国の書物だからかもしれないが。

力を使うと歪むのだろうな、とフィーは思った。

世界の理を無視する魔の法。試してみようかな、とフィーは思う。やり方がわからないが、なんだかできそうな気がした。ロイの忠告

が頭をよぎったが、一度は力を使ってみないとこれからどうしようもないし仕方ない。何よりフィーはちよっとわくわくしていた。感覚的には、術力を使うときよりよっぽど見込みがありそうだ。

「寒いし、空気を暖かくするのとか、どうかな…よし」

自分を満たす、ラエルの魔力を解放するように念じてみる。

途端。

響いたのは爆発するような音。

「フィー、無事か！？何があった…フィー。」

飛び込んできたロイは、明らかに何かをした様子のフィーと、彼女の前にある荷物を見て溜息をついた。

「…とりあえず、降りておいで」

「ご飯できてるから、と言ってロイは静かに部屋を去った。

「あれは、怒ってるな」

フィーも溜息を一つ落とした。

彼女は荷物をいったん放置し、下へと降りることにした。

## 57・祭り最終日(2)

シライはその日、彼にしては珍しく寝坊してしまった。

起きると昼だったなんて初めてのこと、目が覚めるなり慌てて階段を下りて台所に向かった。歩きながら、やけに室温が高いな、と思う。冬に入ろうという季節なのに。昨日暖炉の火を絶えず燃やし続けた、なんてことはあるまいし。

「あれ」

台所に着くと、その流しにはすでに洗われた調理用具が置かれており、火から下ろされていてもまだぐつぐつ音を立てる鍋からはポタージュの匂いがする。

おそらく兄が料理したのだろう、この様子ではもう食べ始めているに違いない。いつもは一緒に朝食をとるけれど、今日はおそらく昨日の祭りで疲れた自分を労わって起こしに來ないで先に食べることにしたのだとシライは思う。

「…………あれ？」

だが、それにしては食堂から物音一つしない。食器の合わさる音すらしない。不審に思っただけで恐る恐る食堂へと続く扉を開ける。

そしてシライは固まった。

食卓を囲む彼の兄とフィーの二人は、静かに睨みあっていた。食堂で唯一動いているのはスープから立ち上る白い湯気。それ以外はまるで時間が止まっているかのようにだった。立ち止まること、しばし。

「……おはようございます」

「おはよ」「おはよう」

とりあえず声をかけると、ちらりと視線を寄越し、挨拶だけは二人とも律儀に返してくれた。これはいついかなるときも挨拶されたら返すものだ、という亡き母の教育の賜物だ。

……それでもその後は二人ともじつと黙って睨みあいを続けていく。多分、何かの議論が平行線を辿ったのだらうとシライは思った。いつもはあっさりどちらかが譲るのに今日は珍しくそうもいかなかったようだ。

時にはこういうこともあるので、シライはすたすたと自分の分のスープを注いで来て構わず食事を始めた。

会話のない食事は味気なくあっという間に終わってしまう。兄の料理は久しぶりだったのに、とシライは残念がった。

一人食器を片付けて帰ってきてても、今だにらみ合う二人を放っておくわけにもいかずに内心溜息をつきながら彼は原因を尋ねてみることにした。

「どうしたの、二人とも。スープ冷めちゃうよ？」

「……フィーが、いや、そうだね。先に食事を済ませよう」

「ああ」

食事が優先されてしまった。フィーはいつものようにがつがつと、兄は綺麗に。対照的な二人の食べ方を眺めつつ、シライは食後のお茶を飲みながら考えた。

二人の言い合いの種になりそうなものといえば、昨日の出来事とかがわりが深いに違いないだろう。

昨晚帰ってこなかった猫、もとい魔と契約を交わしたことに關してだろうか。フィーのことだからうつかり魔法を使ってしまったのかもしれない。踊り明かした後に食事処で湯水のごとく使われていたお金のことだろうか。

あるいは、やはり。

「冠……」

シライのもらした呟きに反応して、フィーがぴたり、と動きを止めた。

「ええと、その、げほ」

彼女が咽ながら何か弁明しようとするので、

「とりあえず食べ終わってから聞くよ」

とシライは彼女の言葉を遮った。

「……それで？」

ようやく食べ終わった2人に尋ねると、こんなときでも料理を堪能していたらしい幸せそうなフィーの表情がはっと我に帰った。

「私は明日にここを出て、旅に出ようかと思っている」

「え……？」

旅？明日？

シライは戸惑った。なんて唐突な話だろう。

「そしたらロイが駄目っていうから。この間なんか理由も分からな

いのに王と共に旅に行けとか言っただけで散々鍛えようとしたくせに」

「旅って、」

いきなりどこに行くつもり、と続けようとしたが兄の反論に打ち消されてしまう。

「……行けなんて言っただけでしょう。あれは行かなくてはならないんだよ、フィー。今度の目的が違う、しかも一人でなんて無理だ」

真顔だから兄が怒っているのだとシライにも知れた。彼の兄は本当に微笑を絶やさない人だから。

一方フィーは見るからに納得した様子ではなかった。彼女がよくするしかめっ面をしている。

「お前の言うわけの分からぬ目的よりも遙かにました。大丈夫だ、どうにかなる。私だって一人で王都を出たことが一度もないわけじゃない」

「……当ても無く、この広い世界からたった一人の人間を見つけ出すのにどれだけの労力がかかると思う？ 相手が尻尾を見せる気もなければ殆ど不可能だよ」

兄は首を振った。

しかしフィーは言い返した。

「……やってみないと分からないだろう？ 大体世界は広くとも、魔法を認めてる国なんて限られてる」

そう言えば、五指に満たないほどだったな、とシライは思う。しかしそれを全て周るつもりだろうか。何のためには明確だ。フィーは、シライの母の作った冠を取り返しに行くつもりだ。

「魔法立国へ行ってみるとでも？そのコントロールがまだ利かない力？さつきなんて下手したら家が木っ端微塵だったんだよ？」

「いや、暖めようと思ってな。使ううちに慣れるだろ、術よりよっぽど見込みがある」

「使ううちって」

兄が頭を抱えた。

室温の高さはどうやらフィーが原因だったらしい。この調子では魔力を使いこなせるほどにどれほど魔法を使わなければならぬのか。しかもその間にもフィーは『歪んで』いく。兄が頭を抱えてしまうのも無理は無いな、とシライは思った。フィーはどこか、一度吹っ切れると物事に無頓着になる傾向がある。

「フィー。魔法立国に行くとして、魔法使いでも気配に聡い者なら君の術力に容易く勘付く。そうしたらどうなると思う？」

兄の言葉がいつに無く刺々しい。

フィーはそれに静かに答えた。

「よくて実験材料になるか、悪くて灰燼に帰すだろうな。まあ、戦うのが駄目そうならさっさと逃げるさ」

笑い事じゃない。それなのに言いながらへらりと笑って見せるフィーに、兄が怒鳴った。

「戦いも逃亡も、どれだけ魔力を使うことになると思う！？ そのたびに君は歪んでしまう！」

「……声を荒げるな、耳が痛い」

「まじめに聞かないといっそ聴力を無くさせて留めるよ？」



「ロイ怖いぞ」

フィーが椅子ごと兄から少し距離をとった。

「あのな、歪むことは魔と契約した時点で覚悟の上だ。力を使う目的で契約したんだ、当然の代償だろう」

「フィー……」

その力は何のために？

分かりきっている。母の、冠を取り返すためだ。

シライは下唇を噛んだ。シライ自身もチットという男に母の遺作が盗まれたことを悔しく思わなかったわけではない。母は誰かの欲を満たすためでなく、多くの誰かを救い、守るものとしてあの冠を手がけたのだから。

それを分かっていたからこそ、フィーが王に憎悪をぶつけていたときも、亡き母の温もりを持つ冠が王に所有されることをシライは受け入れた。だが盗まれたとなれば話は違う。

病に確実に冒されながら、燃えるような眼差しをあのか冠に向けていた母の姿をシライは思い出す。血色の良かった肌は青白くこけて、骨のようになった手を動かすさまは鬼気迫るものだったのに酷く美しかった。冠ができたその翌朝シライの母は逝った。満足げな死に顔を、シライは覚えている。

竜細工師として生き、その誇りを持って彼女は死んだのだ。

そう思うことで、シライは母の死を受け入れていった。

その象徴は冠で、それが英雄である王様の頭に嵌り、彼が力強くこの国を守っている姿を見ると母を誇らしくも思った。

それが闇を連れた魔法使いの手に渡ってしまった。彼らに冠がどんな風に扱われるか想像しただけで身の毛がよだった。もしも、闇

の時代の支配者の頭にあつた冠のように母の冠が穢されてしまつたら、それはシライにとって許せることではない。

だが取り返したい気持ち以上にシライは、無力だった。

自分に力があれば。母の生きているうちに少しでも細工の手ほどきを受けれたなら。自らの幼さと無力を何度呪つたか分からない。

だから、フィーがこの国で嫌悪されてやまない魔の力を得てまで為そうとすることを理解できた。自分だってそうできたなら、フィーのように魔と契約してでも力を望んだらう。だから共に母の子のように育つた、兄のような姉のような存在のフィーのその思いが行動が、嬉しくて羨ましくて、そして、

「ごめん、フィー」

「なんでシライが謝るんだ」

慌てるフィーにそれ以上なんと言つていいか分からずに、シライは目を覆つて首を振つた。そんなシライの傍まで来て、フィーは何かを口走りながらあたふたとしている。

……彼女は今、こんなに真つ直ぐなのに力を得て歪んでいつてしまふ。

何でフィーなんだろう、とシライは思った。竜細工師なのも、魔に目をつけられてしまったのも、どうしてフィーなんだろう。

「フィー、行つちゃ、駄目だ」

シライは言つたけれど、彼女が首を横に振つたのが指の隙間から見えた。

「決めたことだから。悪いな、我がままで。……工房に帰ってきたらさ、3倍は働くから許してくれよ、シライ、ロイ」

じゃあ準備があるから、そう言ってフィーは去った。

それを追おうとした兄の足が止まるのをシライは見ていた。止まった理由も知っていた。

自分はどうして何の力にもなれないのだろう。

彼女は一人で行くつもりだ。せめて兄が共に行くのならと思うのに、兄は自分のためにここを離れる気が無い。だからこそフィーを止めているのに彼女は聞かない。以前フィーが王と旅立つ話を聞いたときから、いずれこういうことが起きる日が来ると思っていたけれど、予想していたよりあまりに早かった。

荷物にしかならない自分が、シライは心底嫌だったから少しずつ手を打とうとしていたのに。

兄の手が、頂垂れるシライの背をそつと宥めるように撫でる。

「泣いてない」

「……知ってるよ」

それでも彼の兄はその手をどかそうとしなかった。

「どうしたものかな」

途方にくれたような兄のもらした呟きがシライの耳に残った。

そしてシライは一つ覚悟を決めた。

## 58・祭り最終日(3)

金髪にモノクルという目立つ風貌の男が神殿の廊下を音無く歩き続けていた。

いまだその体にいくつか痕を残したものの、もともと丈夫な性質であるこの男、クエインは神官長による癒術と怪しげな薬湯によってどうにか体調を取り戻し、王のいる癒術室へと向かっているところだ。

部下が「あなたは化け物ですか、我々の涙を返してください」などと泣いていたが、クエインは自分でも、負ったはずの傷が塞がれていたことに不審を抱かずにはおれなかった。

『何者か』による止血が為されていたゆえに死なさずに済んだと神官長は言った。あの人はまた何かを隠している、とその老いてなお輝く悪戯心を忘れない瞳を眺めてクエインは思った。神官長との会話を思い出す。今朝のことだ。

『おや、起きましたか。皆で心配していたのですよ』

目を覚まして最初に見たのは、短くない付き合ひの中でクエインが敬愛してやまない老人の心底ほっとした笑顔だった。

『体調は?』

『もう動けますよ、でも』

神官長に答えて、クエインは冠をおめおめと盗まれてしまった昨夜の一幕を思い出す。

『…私は、なんてことを』

静かな沈黙が落ちた。国の象徴であり、契約と誓いの証。それは

あろうことが闇に渡った。

頂垂れるクエインに神官長は落ち着いた声音で諭した。

『…あなたに守れないのなら誰にもあの冠を守ることなどできなかつたでしょう。あの孫ですら。ですからこれは、起こるべくして起こったこと。あの冠の為にすでに全てが動き始めている。そもそもあれほどの闇に一人で対するなど誰であれ不可能な話です』

いつそあなたに任せた孫が悪い、とまで神官長は言った。彼が、どうやら闇がソラに似た少女であることには気付いていないらしいことに気が付き、クエインは息をつきつつも続けた。

『…いや、あいつの寄越しただけの信頼に答えられなかったのです。償いのためなら、どんな罰も受けます』

それこそ辞職でも、死でも。

『やれやれ、相変わらず極端ですな、クエイン。あなたの剣を枕元に置かなくて正解でした。ここで切腹などされては堪りません。自死などくだらない、なにことも生きて償うのがこの私の弟子になる条件と教えたはず』

力づけるように老人の穏やかな目が笑った。

『神官長…』

クエインは伏せていた顔を上げた。

『…まあ、なによりどうせ今から死にかなないほどの過労の日々が待ち構えておりますから』

『神官長？』

『いえいえなんでも』

独り言のようでよく聞き取れなかった言葉を聞き返したのだが、答えを得られず首を傾げながらも術と剣の直接の師である人物に励まされて、クエインは落ち着きを取り戻しつつあった。実は王に仕える覚悟を込めて、毒を齒に仕込んでいたのだがそれを噛むのをや

めてクエインは身を起こした。

神殿の石造りの窓から覗く晴れ上がった空を眺め、神官長は、どこか遠い目をしていた。ふとクエインはソラに似た闇のことを言うかと迷った。だが彼が何か言葉を発する前に神官長が言ったことに彼は氣をとられてしまう。

『病み上がりに頼むのは悪いのですが、あなたの上司がいまだに目を覚まさないので喝を入れてやってきてくれませんか』

『…ヴィーが、倒れた？』

いまだ目を覚まさないとはよほどひどい傷でも負ったのかと尋ねると神官長は答えず、詳しいことは孫に聞いて欲しいと言ってクエインを追い出した。あの王に限って負ける事など考えられないが、それならばどうしたというのか。クエインは首を傾げた。

「クエイン？」

延々と続くように見える神殿の石の廊下に、くわん、と声が反響したのにクエインは顔を上げる。するとそこには見慣れた黒髪に碧眼の男が佇んでいた。大きく円形にくりぬかれた採光用の窓から差し込む昼の日の強さの割りに、通路はやけに冷えてどことなく荒涼とした気配を漂わせていた。男はそこにやけにしっくりと納まっている。

「先ほど目を覚ましたよ。そちらももう調子を取り戻すとは、さすが俺の親友、だな」

片眉を上げて、愉快げに男は呟いた。

「…あなたの親友になった覚えはないですが」

クエインがそう答えると、男は目を瞬かせて、

「これは冷たい」

と言つて苦笑した。

クエインは眉を寄せた。彼の友人は、いつだって対抗するのが馬鹿らしいほど力強く凜とした、辺りを照らすような術力を漂わせる人間だった、だが今日目の前にいるこの男は。

「…あなたは誰ですか、魔」

どんなに姿を似せても明らかにヴィーとは違つたと彼にはそう分かる偽者を、クエインは睨んだ。

「…流石は、王の親友、だな。早々とはれたか。…そうだな、王様とでも呼んでもらおうか？」

答えた男のその青いはずの目が、一瞬金色に見えたように思えたクエインは目を細めた。何者だろうか。

「ご冗談を、偽者の分際で」

「…シオンは何も申さなんだか。嘆かわしく態度が悪いことだ。王都を今守るのはかの愚王ではなくほかでもないこの我だぞ、敬つてへつらえ」

その言葉にはっとしてクエインは王都にめぐらされた結界の気を探った。

それは、彼の友の力に似せながらも、あくまで歪んだ魔の力に確かに間違いなかった。

「…これは、あなたが？ その姿はどういうわけで？ 一体何が狙

いのですか？」

「まったく、そうっんけんとしてくれるな。これから当分、長い付き合いになるのだから」

「どういう」

問おうとすると、気に食わない笑いを残して王そのものの姿をした魔はその姿を消した。

……意地でも王を起こして事態の推移を問おうと、クエインは癒術室へと足を速めた。

しかし。

「ばかな」

たどり着いた部屋の中で、ベッドはすでにもぬけの殻だった。ご丁寧に整えられたその上には印籠の施された封筒が一つ。

呆気にとられつつクエインがその中身を取り出すと、2枚だけ手紙が出てきた。

ヴィーの性格に似合わないが間違いなく彼のものである流麗な字で、一枚目には昨晚の経緯とクエインを労わる言葉があった。そして二枚目。

いつか狸爺が言った言葉を前にも話しただろうか？石を鍵にするとか言うあの予定だ。あれが思っていたより少し早まっただけ……と言いたいところだが、まあ実際は状況も随分変わってしまったな。

ソラに似た闇が現れたり、胡散臭い魔がこのイオナイアを守ったりすることになるなんて流石の俺だって考えもしなかった。しかし魔の方は少なくとも狸爺の知り合いらしいし悪くはしないだろうと思う。……多分な。お前の傷をふさいだのもあいつらしいから一応



感謝はしておけ。そもそも、あいつがチットとか言う賊がぶち切れる原因を作ったんだがな。まったく。

ともかく、こんなわけで、俺は国とフィオレンティーノと竜に対して責任をとるためにも冠を取り返しに行つて来なければならぬよ。悪いがもう行く、フィーの奴せつかちどころじゃ無い短気なところがあるから、今日明日にかけて旅立ちそうなんだな。

それでは後をよろしく頼んだ。じゃあな。

ヴィエロアより国一の石頭に可能な限りの理解を求めて

…もう冬そのもの、といえそうな冷たい風が、ヴィーが逃亡のために使ったのであろう窓から吹き込んできて、立ち尽くすクエインの金の髪をさらりと揺らした。

「…あの馬鹿王！」

無人の癒術室にクエインの声が空しく響き渡った。

クエインが一人癒術室で立ち尽くしていた頃、エルファンド工房にて。

朝食、というよりもはや昼食の後、フィーは部屋に引きこもって出てこないし、シライは「ちょっと出かけてくるね」と言っていない。なくなってしまう。

あれから一階の工房で、ロイは術具を作っていた。幾人かやって来ていた仕事好きの職人達に軽く挨拶を交わした後は、一人ただ黙って作業するロイを気のいい職人達はそっとしておいてくれた。

…祭り中の今は開店休業のようなものだからいいけれど、明日にはフィーのことを言わなければならぬ、とロイは思う。もう自分に彼女は止められない。フィーが決めたことを、心から願って決めたことをロイは結局止められないのだから。

彼らは、どう反応するだろう。

あるいは帰ってこれないような旅に出るといふ彼女のことを、一体どう伝えれば。いや、フィーに話させるべきか。

頭の片隅で考えながら色ごとに石を分けていく。

静かにロイは基盤となる術具それぞれの用途に合わせて分けた石を嵌めていった。それが済むと、石に術を籠め、細工には紋を刻んでいく。

石に籠めるのは護身の術が一般的だが、ロイの作るのはそれに留まらず攻撃用のもの、心身の痛みを和らげ精神を落ち着かせるものまであった。竈から発せられる熱で工房は少し暑いくらいだった。ロイの白い額を珍しく汗が伝う。

ただ、集中して術具を作り上げていく。

彼にとってそれは一番集中できる作業だったはずだった、それなのに。

がり、

という音を立てて、彼は鑿で指を刺してしまった。どつ、と血が出るのを、ぼんやりロイは見つめた。細工を作る折に傷を負ったのは、一体いつ以来だろうと惚けたことを考えた。確か、まだ習いたての頃以来だな、とフィーや母の慌てた顔を思い出す。

「…ろ、ロイさん!？」

「店長!？大丈夫か、おい!」

「まさしく白魚のようなお手に傷が!」

「きゅ、救急箱、いや、神官を呼ぶんじゃ」

「じゃ、じゃあ俺が」

「いや、そんなたいした傷じゃないから」

どうやら横目でこちらの様子を窺い続けていたらしい、お節介で愛すべき工房の職人達が狼狽して寄ってきたのに苦笑しながらロイは答えた。

「…店長?」

不安げな目がこちらを向いた。確かに声がやけに空ろな調子だな、と自分で思ったのだからそれも仕方ないことかもしれない。水場で傷を洗っていると、背後から声が上がった。

「あのな」

それは、ロイが生まれる前からここでずっと勤めていた古株の職人の老人のしゃがれた、低い声だった。きゅ、と水を止めると、ロイは振り向いた。老人の深い緑の目がロイを静かに見つめた。本当の祖父のように慕っているその顔の深い皺を眺める。固そうな顔は老いてなお逞しい。

「わしは正直前店長がいなくなった時にな、どうなるかと肝を冷やしたもんだった。そりゃあここにはフィーつつう天才職人もいれば、どいつも腕は悪くない。だが前店長の人柄や才覚を慕ってやってきたものもいるし、大体経理も分かんたろう表にあまり出たがらないひよっこロイが店を継ぐとなると、はて工房は立ち行くものかと

心配した」

「…そうでしょうね」

ロイは微笑んだ。己の容姿が過剰に人目を集めるのを嫌い、学校を出た後は工房に籠って術具作りに没頭していたものだ。確かにあの頃の自分が頼りになるなどとは誰にも思えなかっただろう。

母が生きていた頃のことだ。彼女が、

『外に出て、あなたの容姿で客を引いて来てくれると助かるんだけど』

などと遠慮なく言ったことがあった。

『それは嫌』

知ってるからわざと言ってるに決まってるだろう、と母は笑った。『まあ思春期なんてそんな時期もあるかな。好きにしなさい。私はあなたが大抵のことはやればできる子って知ってるから。…ただ、ちょっと日に当たったほうが健康的とは思っけどね、ロイ？大体私のほうが息子より色黒って事実がちょっと堪えるからどうにかして欲しいなんてわがまま、母さんは言わないんだから！…言っちゃったけど。容姿なんて嫌でもいずれ衰えるんだから、堂々としてりゃいいのよ。全部ひっくるめてあなたは私の自慢なんだし』  
そう言っただけの豪快な笑みを浮かべた。どこから一体あの自信は湧いてくるのだろう、というような銜いの無い鮮やかな笑顔。

フィー同様、ロイも母の笑顔は誰にも負けない力があつたように思う。懐かしい。

「だがな、」

老人の続く言葉に、記憶から意識が引き戻される。

「小さい頃からおぬしを見とる所為か、どうも子ども扱いしすぎるくらいがあつたのは認めよう。背は伸びたが相変わらずの優男ぶり

で体力もあるものかというようなおぬしはしかし、よく仕事をこなしたからな。この工房の誰よりもおぬしが働いていたのは知つとる。母であり師であり竜細工師のおぬしの母がなくなったのは誰より痛手だったのはおそらくロイ、おぬしだったろう？だが弱音一つ吐かんかったな。いや、そんな暇も無かったか。不眠不休でおぬしの母親の遺作を整理して、それが済んだころにはフィーの細工を売り出して、術具で独自の顧客も掴んだ。時には容姿を利用することになつても厭わなかつたな、おぬしはこの工房を継いで守ろうといつだつて必死だつた」

老人は溜息をついた。

「気付きながらも頼りきりですまんと思いつつ今までなんもせなんだ。あまりに鮮やかに一人でこなしてしまつてな。…こちらは細工に専心するだけでよかつた。思えばかなり楽をさせてもらったものだ。ロイよ、もう十分この工房はやっていけるようになったとは思ふ。一時くらいならわしらだけでもまわせるくらいにはな。だから、あー、もし必要なら長期休暇くらいとつたつてぜんぜん構わないんじゃない、ロイ」

「…どういうことですか？」

「必要じゃろう？例えばおぬしのやんちゃんな弟弟子に付き合つたり、な」

老人はウィンクした。職人達も同意するように頷いた。

「知つて」

ロイは息をつめた。

「ありがとう。でも僕には」

「…シライか。あいつにも何か考えがあるようだったが。」

シライ、あの子は本当に痛ましくくらいに気がきくな。いろいろ話した後にはどこぞへいつてしまった」

「あの幼さでしっかりしてるよな」

「ロイさんに似てますよね、どこか」

「…シライがフィーの話を？ シライはどこへ!？」

気を緩ませたようだったロイが途端声を荒げたことに工房の人々は驚きつつ首を振った。そう言えばシライにしては珍しく行き先を告げずに『行ってきます』とだけ言っていたことを彼らは思い出した。

「しまった」

戸惑いを残す職人達を残し、ロイは外へと駆け出していった。

フィーは部屋で荷物を片付けていたが、ふと、届ける予定の細工で一つ届けていないものがあるのに気がついた。宛先を見て彼女は顔を顰めた。

「相手はとある女性だ。」

数年前になるか、今はシライの通っている学校へとフィーやロイが通っていた頃、嫌にロイに固執していた教師がいた。

そこそこ整った顔立ちのおしとやかな女性だったが、どこか妙に偏執的ところがあってロイの方は彼女を嫌っており、卒業した後はその女性がやけに店にやってきたり、ロイに細工を届けるように言ったりして困らされたものだ。そこそこに身分はある女性で、フィーとロイが在学中にどこかの貴族と結婚した。

彼女のロイへの執着は随分落ち着いたものの、どうやらフィーの細工は気に入ったようでこのように時々注文が入る。お得意さまの一人ではあるが、フィーとしては正直あまり好きな客ではない。ロイの容姿に惹かれて半ば信者でもあるがごとく付きまとう輩はよくいる。だが、あの教師はそのように単純にロイの容姿だけを目当てにするのではなく、なんとというか。

彼女のロイへ向ける視線に含まれる何かをフィーは好きではなかった。良い感じがしなかったのは確かだ、まるで何かを見透かすようなあの目。

細工を届けるのはいつものように他の誰かに頼もうかと思ったもののなんとなく工房に顔を出し辛かった。顔を合わせると、黙っ

てはいられない。今晚、彼らには話すつもりだった。それまでは。

届け物の期限が今日づけなのを見て溜息をつく、フィーは仕方なく自分でそのガーネットと花の細工をあしらった首飾りを届けることに決めた。

「あれ、フィー」

エルファンド工房にやってきたナンテスは驚いた。2階の窓から半ば身を乗り出しているのは間違いなく、彼の愛しき人を巡るライバルであり友でもあるフィオレンティーノ。

「ナンテス」

窓枠に手をかけてそこにひっかかるようにした後、まるで猫のようにしなやかな動きで往来に飛び降りるとフィーはとび色の目を煌かせて笑った。陽気なことだ。

「うわ、久しぶりだな。なんだ、ロイを祭りに誘いにでも来たのか」

「まあ、そんなところ」

「そっか。まあ応援はしてるよ」

ナンテスはふわり微笑んだフィーを眺めて瞬いた。会ったびに、フィーが段々と女々しくなっていくような気がするのだ。あれだけ美しく仕草の一つ一つがたおやかで無駄のないロイさんの傍にいる影響だろうか。やはりあの人はすごい、とナンテスと思う。周囲に影響を与えずには居れない、あの、

「……あのさ。この間だが、悪いことをした」



ロイについての思考の渦に巻き込まれようかというときに、目の前のフィーが表情をいっぺんに曇らしてふかぶかと頭を下げたので、ナンテスは首を振って見せた。

「記憶が、戻ったのか。なんてことない。むしろ僕の父はお陰で助かったわけだし、感謝しているよ。ありがとう」

ガラスはまた嵌めればいい。買えるものなら贖える、けれど命は違う。店を襲ったという闇である少女の仲間である魔法使いの青年は、昨日の祭りで英雄たるこの国の王と互角といえる戦いをした上に王都を潰すだけの力を見せた。そんな人間から九死に一生を得たのだから、謝られることなどない。

ロイに会うことに気をとられて、忘れていた父からの頼まれごとをナンテスは思い出した。

「そうだ。父が、もしフィーが事件を思い出しているようならお礼にこれをやると」

「！ くれるのか」

タイガー・アイを数珠繋ぎにした腕輪を取り出して差し出す。なぜか、今の彼女の腕にしっくりとこの虎の目石は嵌る気がした。

「うん。ロイさんに力を入れてもらって。そしたらかなり強い術具になるよ。父はこれを、饑、って言ってたけど」

ナンテスは分かっていた。石を扱う家の息子なのだから、昨日のことに関する噂だけで、一応は短くない付き合いのフィーが何をしてくす気なのか分かった。

フィーは嬉しそうに受け取りながら顎め面をするという器用なことをやらかした。

「行くの？」

彼女は首肯した。

「ああ。相変わらずロイさえいなければお前は鋭い……。明日行くよ」

「相変わらず誰に構うことなくフィーって即断即行だね……」。

そんな猪突猛進気味の刺激に満ちた行動ばかりとる君に帰ってきて欲しいような、欲しくないような、なんとも複雑な気分だ」

学生時代をナンテスは思い出す。フィーという人間は、いつも冷笑気味に一步引いた態度で世間に接するくせに、時に驚くほど熱くなって周りの言うことも聞かず何かをしでかすことがあった。今のフィーは熱くなっているのだろう、おそらくは。

……そう言えばいつしか疲れた顔をしたロイさんに君とフィーは変なところが似ているよね、といわれたけれどあれはどういう意味だったのだろうか。ロイさんの言葉の一言一句は胸に刻んでいるけれど分からないこともあったな。そうそう、

「旅人には無事に帰って来いと告げて見送るものだろうか？」

フィーが苦笑して言うので、またもやナンテスは現実を引き戻される。ああ、見ることに聞くこと全てがああ美しい人に繋がって困るとナンテスは思いつつも答える。

「旅先でロイさんほどとは行かなくとも心惹かれるような異国情緒に溢れた女性に出会うかもしれないだろう。そしたらここに帰ってくる気なんてなくなるだろうさ。そんなときも遠慮することはない、フィー、ロイさんのことだけは任してくれ！」

そういうと、いつもなら何かしら反駁するはずの彼はふ、と微笑んだ。それにナンテスは、違和感を感じた。

「はは、そうかもしれないな。……ロイのこと頼むよ。シライはいけるけど、あれで結構寂しがり屋だからさ、遊びに来てやってくれ」

「……フィー？」

「悪い。届け物に行くところだから、じゃあな。ロイに会ったらそう伝えといて」

そう言つて、フィーは駆けて行く。

「なんだか、な」

フィーを暫く見送ったあと、ナンテスはエルファンド工房の裏口に向かった。

……まさか想い人とドアを開けた瞬間激突しようとはこのときの彼は知らない。

「こんなときに朝帰りとは、よくもまあ」

こちらを見もせず、どちらかといえば父と腹違いの弟に向けられた、その呆れた口調に透ける嬉しそうな響きにレオナは心底うんざりとした。この人はどうして私をいたぶろうというときにはこんなにも楽しそうなのだろうか？フィー達と飲み明かしていたら帰る頃には白々と夜も明けようという頃だった。

「……申し訳ございません、要らぬ『お気遣い』をさせてしまって。私のほうは至って健康、健やかな乙女そのものですわ。もっとも少々眠たいですけど」

答える口調も皮肉な調子になろうというものだ。それに対して義

母はこんなことを言った。

「白々しい、お聞きになつて？　ここに一角獣でもおりましたら鼻で笑つてしょうよ」

レオナは表情だけは取り繕つて澄ましつつ、内心で、べ、と舌を出した。

義母のような、こういう人を下世話というのだろう。実際人品など貴族も平民もない、よほどエルファンド工房の人たちのほうに品があることから明らかだ。

朝帰りのレオナを揃つて向かえたのは、嫌味なほど整えられた風采の使用人の面々、そして一睡もしていないらしい血走つた眼をした父と、よく眠つたらしい義母、相変わらず顔色の悪い弟だった。眠かつたのでなにもかも昼からにして欲しいと言つて、レオナは眠つた。

そして起きたらこの調子。鬼の首をとつたかのような顔をする義母、苦々しい顔を続ける父。そもそもここに弟がいるのはどうだろうか、とレオナは思った。情操教育によろしくない。

もう、今は弟に対して思うところはそんなにない。

彼が生まれた頃には、自分ががむしゃらにやってきたことが水に流されたようでいやだった。けれど、フィー達のところでは働くようになって、読み書きがあるのもそこに知識があるというのも、いいことはあつても少しも無駄にならないと知った。だからもういいのだ。

敢えて弟について思うことを正直に言うならば、少しだけ妬ましく、一方でほんの少しだけ、病弱な彼が心配だった。

義母の彼に向ける関心も、羨ましいと思っていたのがおかしいと思えるくらい、どこか狂気じみていることも最近は気にかかっている。頭はいい子だから、改革志向の王様の下で将来的に平民からの選抜が取り入れられても、勝ち抜いて次期公爵としてやっていけるだけある才気はあると思う。だからお嬢様ながら父と結婚前は教師をしていたという少々やりすぎな義母の教育にも難なくついていく。ただ本当は、シライのような子と遊んだりする時間がこの子には必要なんじゃないだろうか。そう、思えたりもして。

「レオナ、本当に何もなかったのか」

「も、勿論ですわ！」

父の問いに、慌てたように首を縦に振る。

レオナとしては、朝帰りは我が身の潔白を疑わしくした方が馬鹿げた婚約をどうかでできると思ってた行動である。ただ、いかにも失敗した、という顔を作って取り繕った方が、義母が進んで婚約破棄に動くと思われたのでそのように演じている。

父もこんなことがあれば、王との結婚について強くは言えまい。

もしまだ父がこだわるにしてもレオナの顔を知る貴族も幾人か帰りがけに見かけたし、彼らから噂が飛び交えば『傷物』になったかもしれない娘などは王に相応しくないとあちらから願いさげだろう。

五月蠅い身内からは、縁を切る声も上がるだろう。

そうなれば願ったり叶ったり、今だからこそでできる大失態である。なのに。

「ならばいい」

「えっ」

思わず声を上げてしまっってはっとするが、義母はそれどころではない様子だ。

「あ、あなた!？」

追いつがる母に、父が話はもう終わったとばかりに部屋を出て行くこととする足を止めた。

「噂でも立ちましたらいかげなさいますの!! 感謝祭の真っ最中ですよ、誰かがこの子を見ているに違いないわ」

そうそう! もっと言っただけ欲しい。

「レオナは間違いを起こさなかったという。ならばそうなのだろう。仮に噂が立ったとして、あの王だ、気にしないだろう」

「そんな。それはそうですけど。こんな振る舞いをする娘は竜の血に認められし王にふさわしくありません」

レオナも初めて、義母と心が一致したように感じた。

父は母にとり合うそぶりも見せない。……それほどまでに、王族との結びつきが欲しいのだろうか、この男は。レオナにはそうしか見えなかった。

「あなた、あの女はもういないのよ!」

母が父の背中に叫ぶ。あの女? 母のこと、かなあ、とレオナは思う。多分そうだ、その名で呼ばれるのは母だけ。

「……」

父は静かに出て行った。

真っ青な顔をした義母が立ち尽くす。

「……ああ、なんてこと。もう、嫌」

き、と義母の目が真っ直ぐにこちらの目を睨みつけ、レオナは反射的に竦んだ。

「あなたみたいなのにもできないような売女の娘が王に見合うわけがないのに。大体あの人の子なのかも疑わしい！」

ざくりと言葉が突き刺さる。

レオナは思う、フィーならば王に見合う。才能と自信に溢れたフィーに比べ私なんか何も無い。

いや。

フィーならばこんなとき、なんていうだろう。彼女は私のこと何て言った？

「私は」

レオナが胸を張って義母を見返そうとしたとき、使用人がやってきた。

「奥様、お客さまが」

「来客の予定はないはずでしょう」  
いらいらと義母が言う。

「いえ、でもあの方が来たなら通せと以前奥様は仰いました」

「……まさか、シライ!? ああ、ならば行かなくては!」

まるでレオナ存在を忘れたように義母は立ち去って行った。

「シライ、って」

シライ? どういうことだろう。

残されたレオナと弟はなんとなく顔を見合わせる。なんだか、こんなに弟の目を真っ直ぐ見たのは久しぶりだ。どこか眠たげな焦げ茶の目。いつか見た、ロイさんに心酔している男の人にどことなく

似ている。義母とは似ていない。

「……行ってみる？」

ぎこちなく笑って手を差し出すと、レオナの弟はその小さな手を無言で差し出してそっと掴んだ。



## 60・公爵夫人

「あなた、あのロイさんの弟？」

何度同じ言葉を言われたことだろう。その言葉の裏にあるものについて考え込んだのは幾度だったろう。

美しい銀ではない、灰色の髪。まだ何においても未成熟な自分。

あの兄と、これっぽっちも似ていない。

あるときフイーの作った宝飾細工を届けに行った先の公爵家でかけられた同じその言葉に、またか、と思いながらシライは答えた。

「ええ」

ロイの弟のシライ、です。

「まあそっくりね」

貴婦人は微笑んだ。その言葉に、立ち去ろうとしていた足を止める。

「こちらにいらっしやいなさいな、少しお話をしましょうよ」

貴婦人は笑って、手招きしたのだった。

「よく来たわね、シライ」

「こんにちは」

シライは最敬礼の姿勢をとって挨拶を終えたあと、目の前に現れた婦人をそろりと見やった。

最初に会ったときと同じ。重たげな厚化粧。微笑んでいるのに笑っていない瞳。紫のドレスの公爵夫人。

「あの、お願いがあつてきました。前、お話したとおりの願いです」  
開口一番そう言つと、貴婦人の赤い唇はさらに深い笑みを刻んだ。ふわり、と彼女の手の中の扇が揺れる。甘ったるい香水の香りが漂い、少し咽そうになるのをシライはぐっとこらえた。彼女を怒らせでは目的が果たせない。

「お願い、ね・・・ふふ、ということ、あの時私が出した条件を呑んでくれるのかしら？シライ」  
「・・・はい」

シライは少し間を置いて、しかし頷いた。

「嬉しい。きつといつかそう言つてくれるのではないかと思って待っていた甲斐があつたわ。でも、随分急ね」

「今日中、じやなきや駄目なんです」

そうでなければ、間に合わないから。

「あら。何か事情がお有りのようね。まあ、いろいろと平民の方々にも事情はあるのでしょう」

嬉々とした様子の貴婦人は、言葉の割にきつと自分の事情を大して気にかけてすらいないだろうとシライは感じた。彼女にとって自分が彼女の出した条件を受ける気になつたほうが重要なのだ。

・・・願いをかなえるにはいつだって代償が必要だ。フィーだつて差し出したのだから。シライは深呼吸した。

「・・・では、早速良いかしら？」

「ええ」

シライはこくりと頷いた。

「さあ手を出して」

シライは言われるままに手を差し出す。少し震えている。覚悟していたのに情けないな、と彼は苦笑した。

シライの手を貴婦人がどこかうやうやしげにとった。彼女の口が、術語を繰り返すようにした。

きつと一瞬で済む。シライは目を閉じた。

しかし。

「待った」

声が割って入るとそれを止めた。振り返ると、そこにはしかめっ面のシライのきょうだいの一人である少女が腕を組んで立っている。

「フィー？」

なぜここに、とよく見ると、手には商売用の小箱。腕には、彼女を止めようと引っ張り続ける使用人数名。

・・・大体シライにもなにがあつたか想像がついた。

「お下がり」

公爵夫人の一言で、使用人たちは不満げな顔をしたものの大人しく下がっていった。

フィーは公爵夫人に向けて声をかけた。

「おい、ご婦人。ロイに目を向けなくなったと思ったら今度はシライに手を出すとは、ひよっとしてそいつた倒錯趣味をお持ちか？結婚したから落ち着いたのではなく、ロイが年食ったから興味が失せただけか？」

フィーを押さえつけようとしていた屋敷の使用人達をさっさと振り払って、ずかずかシライと公爵夫人二人きりの部屋に入り込んできた彼女はシライをすぼりと抱きこんで、公爵夫人から遠ざけた。シライの体が思いがけず弛緩したのを感じ取ったフィーは、公爵夫人を睨みつけた。

「あいにく貴女のようなご貴族の高尚なご趣味に付き合えるほど、シライは凶太い神経をしていないんだが、何をしようとしていたんだ？」

「あら。私はただ、その少年と『交換条件』を互いにのもうとして  
いるだけよ」

しらつと貴婦人は言ったのける。しかしその顔には思い通りに進みかけていたことを中断されたことへの不愉快が隠しきれず現れていた。

「交換条件？何か知らないが取引の間違いだろう。未成年者は『取引』に関して代理に立てても主体にはなれん。イオナイアの6か条にあるように」

「お互いに承諾しあっているのだから成立するわよ。金銭の絡まない、個人的な問題なのだから」

「個人的？・・・俺やロイを通さずこそそやってるのが気に食わない。事情を話せ・・・シライも。どういうこと？」

シライは、ただ首を振った。答えれば、フィーが気にかけないわけがないのだ。その様子を見て、公爵夫人は高笑いをした。

「まあまあ。誰にだって隠しておきたいことはあるんじゃないかって？いくら『兄弟』とはいえ、ねえ、フィオレンティーノさん？」

フィーとシライの血が全くつながっていないことを知っているかのような、いやみっいたらしいその口調にフィーは何か言いかけてやめた。唇を噛むフィーを見かねて、シライが声を上げようとしたとき、また別の声が出た。

「……血が繋がっていきようがいまいがそんなもんよ。他人同士ならなおさらだけど兄弟だろうと……親子だって同じ。全部さらけ出しあつて依存しあうのなんて真っ当なやり方じゃないでしょう。あんた、ちょっとはこの子のこと考えてあげたらどうなの、お義母様？」

「レオナ！？つ、貴女何なのです、その言葉遣いは！」

「私は下町育ちだからこつちが自然。これが私だし、この私をみんなは受け入れてくれたもの」

「はしたない……リュカ、その忌々しい女の手を離さない！早く！！」

静かに。

レオナと手を繋いだリュカは首を振った。そしてレオナの手を握り締めた。まるでその新しい温もりを離すまいとするように。

「私たちは仲良しなもの、ねえ、リュカ？」

常でないドレス姿のレオナはいつもどおりに笑った。

フィーとシライは、呆気にとられていた。

「・・・リュカ」

カツカツ、とレオナとリュカのそばへと寄って来た公爵夫人は手を振り上げた。びくり、震える少年の上に、けれどその手をゆったりとせるると婦人は甘い毒のような笑みを浮かべた。

「私の唯一の我が子。誰より愛しい子。分かるでしょう、そんなものと次期公爵であるあなたが今から付き合っているようではこの伝統ある公爵家は廃れてしまうわ。あの人みたいに、問題を起こして欲しくないのよ、リュカ。ねえ、お母様を困らせないで」

「・・・は、い」

リュカがそつと手を外す。その目はいつものように眠たげで、どこか、遠い。

「リュカ・・・」

先程見た弟の目と何か違う気がする、とレオナは違和感を感じたが、離れていく手を見ていることしかできなかった。

「いい子ね・・・さて、シライ」

再び例の笑みを浮かべた公爵夫人に呼ばれてシライは顔を上げる。

「どうするのかしら、するの、しないの？」

「お願い、します」

「シライ！」

「・・・決めたことなんだ、フィー。君みたいに、僕が自分で決めたこと」

「でもお前震えて・・・！」

「うん、情けないよね。ロイお兄ちゃんやフィーならきつとこんな  
に緊張したり、しないのに」

「そんなこと、」

「さあ、手を出して、シライ。あなたの力を」

「はい」

止める間もなく、繋がれる手。思いがけない速さで公爵夫人は言葉  
を紡いでいく。尋常でない術力が、その時ざつとその手から、い  
や、シライの体から流れるように溢れてあたりを満たした。フィー  
やレオナは力が与える強力な風圧のような圧力に吹き飛ばされそう  
になって慌てて身をかがめて留まる。その色は。

「緑、だ」

それは深い緑色だった。・・・最近ぼんやりと強大な力の持ち主  
であるラエルや王以外の力が見えるようになってきて、フィーがロ  
イに感じていた術力の色の気配と同じ。

「ああ、すばらしいわ・・・！見なさいリュカ、この力が全てお前  
のものになるのよ、この国にも数が少ない術師になれば、あなたは  
間違いなく安泰だわ。今から回路もあなたに『移植』してあげるか  
らきつと使いこなせる。大丈夫、私のこの力があればあなたを公爵  
家の中でも一番にしてあげられるわ」

公爵夫人はどこか狂ったようにうつつとりと語り続けている。

しかしフィーが聞きとがめたのは一言だけだった。

移植？

フィーは耳を疑った。はじめは公爵夫人が術語を唱えているとき、  
彼女を術師と思った。しかし術力回路を人から人へ移植するような、  
理に背くようなその乱暴はまるで。

「く……」

呻き声にはっとして思考を中断して顔を上げると、シライが苦悶の表情を浮かべて膝をつこうとするところだった。

「やめ、ろ」

しかし、フィーは声を出すのが精一杯で、動くことが出来なかった。力を、得たのに。圧倒的に奔流する術力に抑えられてしまったように、魔力を引き出すことができず、這うようにして近づこうとするのに、届かない。

シライはやがて気を失ったように倒れてしまった。それでも公爵夫人は手を離そうとしなかった。レオナが悲鳴を上げ、フィーは齒を食いしばって公爵夫人を呪った。

やがて、力が収まると、ようやく呪縛が解けたようにフィーは慌ててシライの元へと駆け寄る。抱え上げるとまるで紙みたいに血の気の引いた真っ白な顔だった。怪我が無いかを確かめ、シライをそつと横たえて自分の上着をかけるとフィーは公爵夫人に掴みかかった。

「……あんだ、なんてことをするんだ!!」

フィーは大声で問い詰めた。

しかし、公爵夫人はフィーに頓着しない。彼女はただ、シライと繋いでいた自分の手を見つめていた。光はそこに向かって収束しており、中心にあるのは。

「……石？」

まるで、脈打つような、生き生きと光り輝く石。フィーはそれを



シライの魂のようだと思った。恍惚とした顔で、公爵夫人はそれを彼女の息子へと差し出した。

「綺麗でしょう？これがあなたの力の核となるの。さあ、飲み込んで」

それを受け取った少年が石を見つめる。

飲み込もうと、少年は瞳を閉じた。が。

ひゅ。

石はまるで何かにくっついて引き寄せられるように、少年の手を離れて飛び上がった。その先にいるのは、青い石の嵌った指輪を身に付けた青年一人。彼はぱしり、と緑に輝く石を受け止めると公爵夫人へと向き直った。

「そんなことをしても力は得られない。前に貴女が私に同じことをしでかそうとした時に、確かにそう申し上げたはずですよ、公爵夫人」

白銀の髪と水色の瞳のすらりとした青年は王都に暮らすものなら違えようもない美麗なその顔を、今は無表情にして公爵夫人を見つめていた。

「ロイナス・エルファンド・・・」

公爵夫人の血走った目が青年に向けられる。

「お久しぶりです。・・・どうやら、私の兄弟たちが随分と世話になったようで。十分、お返しはして差し上げましょう」

ロイは、微笑んで、しかし非常に硬い声で答えた。

「ロイ。遅いぞ」

「そうですね、ロイさん。シライ、倒れちゃったじゃないですか！」  
怒り顔のフィーと半泣きのレオナはロイを見るなりそう言った。

「いや、フィーにもう一人のお嬢さん。遅いも何もロイさんは来る予定ではなかったのでは」

後ろから相変わらず地に足のついていない足取りで現れたナンテスがひよっこりと現れる。

「ごめん」

ロイは苦笑して二人にそう答えた。

「そこで素直に謝る貴女はやっぱり素敵だ・・・」

「そこで意見を翻す君はやっぱりどうかしてるよ・・・勝算は？」

「ロイさんが隣にいて僕が負けるわけがない」

じゃらりとロイは術具を備え、ナンテスは彼の愛剣をすらりと抜いた。

「いきなり二人ともどうしたの？」

レオナが困惑したように二人に問いかける。なぜなら二人の先には、丸腰の公爵夫人が一人で立っているだけ。どこか不気味な気配は漂うものの、たかだか淑女一人に対する構えとしては物騒だし、やけに緊張感に満ちている。

問いかけに答えることなく、対峙する双方は無言で隙を窺っている様子だった。

「・・・レオナ」

「フィー？」

「あれは、魔女だ」

「え？」

「シライを頼む」

「え、ええ？フィーは!？」

「私も行く・・・魔が、来る」

## 61・公爵夫人(2)

魔の気配を感じたフィーはレオナの元を離れて、ロイたちの元へと向かった。しかし、見渡してもそれらしい姿はない。どこかに姿を隠しているらしいとフィーは判断した。いるには違いない。なぜなら、使用人たちがこの異常事態に際して現れないからだ。

公爵夫人は、と見ると、何かぶつぶつと呟いている。呪文ではないようだ。

「……ナが、あの子が……して、……私を、愛して……ない……死ねば……殺せば……リュカ。石…術、し……シライ……」

まるでどこか壊れた機械のように、呪い文句を呟いている。彼女の言葉が紡がれるごとに部屋に満ちる不穏さが増していく。今の彼女が魔法を使っている様子はないので、何らかの結界をこの部屋の周りに布いたとしたら、魔、でしかない。

公爵夫人へとロイとナンテスは攻撃を今仕掛けたいだろうに、ただ立っているだけに見える公爵夫人には不思議と隙がないようで、彼らは静かに様子を窺っている。

「フィー、下がっていて」

ロイが横目で、近づいてきたフィーを見て、言った。フィーは首を振った。

「ロイさんの言うとおりだ、フィー」

普段ならロイを一番に引っ込めたがるだろうナンテスまでそんなことを言うのでフィーは苦笑した。

日頃のナンテスなら、そう例えばごろつき相手にフィーとロイとナンテスがいる、という状態なら、彼は崇拜するロイを無理やり下げて、フィーと並ぶことを厭わないだろう。だが、それは余裕で敵を倒せる確信があるからだ。剣の腕の立つナンテスは、現実的に、フィーとロイではフィーの方が実力で遙かに劣ると知っている。さらに言えば、術具を使ったロイ相手にナンテスは負けると分かっている。

彼は一見、騎士道精神と妄想に溢れていようとも、本当の危機に瀕したなら冷静で、男女を区別しない男だ。今の彼は、彼にとつて例えどれほど大切な存在であろうとロイを矢面に立たせなければ相手を倒せず、中途半端なフィーの戦力では逆に足手まといになると状況を判断している。さらに女性である公爵夫人に対して2対1を選択している。つまり。

「ロイは彼女が魔女だと知っていたのか？」  
フィーはまずロイに尋ねた。朝の騒動も当て気まずい気持ちがあるの少し出て、フィーが思っていたよりそっけなく責めるような口調になってしまふ。

「・・・うん。いろいろ、昔あってね」  
静かに答えるロイの口ぶりに詮索を嫌う様子を感じて、フィーは尋ねなかった。レオナが言うように、例え自分相手であれ黙っていたいこともきつとあるだろうと思っただから。

「ふうん。…じゃあ、ナンテスは、ロイに彼女が魔女だと聞いたのか？」  
そうでなければ彼がこれほど警戒しやしないだろう。フィーの問いに案の定ナンテスは頷いた。

「ああ。この公爵夫人は力のある、魔女だとね。信じがたくとも先ほどの光景を加味しても真実だろう。」

「・・・フィー、君が加わるならば庇うのに気を回すだけ戦力がそがれる」

少々腹が立つがあながち間違いではない、とフィーは思った。しかし下がる気はない。彼女は黙って、二人が感じ取っていないらしい魔の気配を探り続けた。

と、会話しながらも警戒を怠らなかつた3人の視線の延長上にいた魔女、もとい、公爵夫人がゆらり、と近づいてきたので一気に場の緊張が増す。フィーの隣にいる2人の殺気がぴりぴりと肌に痛い。少なくともロイは確実に神経が数本切れるほど怒っているな、とフィーは感じた。

ひたひた迫る歪んだ気配を放つ『魔女』を彼女は眺める。その歪みを不気味と思いつつ、自分も同じ存在となったことを考えると他人事ではない。

フィー自身でさえ感じる、公爵夫人から発せられる魔力の量から言って、相手は結構強いらしい。

「下がれ」

それを勘付いているのだろう、ナンテスは再び言った。声に余裕はない。ロイは視線で訴えている。正直そちらの方が怖い。

だがフィーは頑固に首を振った。あと少しで、魔の居場所が分かりそうなのである。気配は、後方でなく前方にあるのだ。意識をそれに集中しながらナンテスに言った。

「私に魔法はきかない、と親父さんに聞いてないか？」

「・・・聞いたよ。竜の加護だろう？だが今は術力が使えないのではないのか？」

・・・ナンテスは痛いところをつく。もつともだ。正直、現時点で魔法に耐性があるかは一種の賭けだ。

「今は、ええと、別の力がある」

「別の、力？」

「二人とも、後で話して、来る！」

ロイの声に、ナンテスは口を閉じた。

まるで空を舞うようにして、一つステップを踏むと公爵夫人が彼らに迫ってきたからだ。

人間の体にはありえない跳躍だった。

ナンテスは目を見張る。

その間にも、ロイさんが直線的に迫る彼女へと爆発系の術具を投げつける。それはそのまま当たるかに見えた。

しかし。

「な！」

空中では不可能であろう動きで、それを公爵夫人はかわした。

次瞬、3人のすぐ目の前に彼女はいた。その顔がナンテスを見上げ、先ほどまでうつむいていて読めなかった表情が見える。それはまるで痴人のように空白であるようであり、その瞳を見て目を合わせてナンテスはぞっとした。

凝縮したような、暗い憎悪や怒り、嫉妬、悔恨、苦痛、そして、  
絶望……

あらゆる負の感情が詰まった『それ』はまさしく魔法使いの歪みの表出、だった。一瞬固まってしまふ。扇を携えた右腕を上げて、公爵夫人の赤い唇は弧を描いた。はっとして引こうとして、体に受けた束縛に気付く。目を合わせた一瞬を逃さなかった公爵夫人の魔法をかけられていたのだ。

「石を、頂戴？」

避けられない。

「しま、」

「後ろに飛べ！」

公爵夫人の手がナンテスとロイさんを風ぐ前に、いつの間にもやら彼らを庇うように前に出たフィーが叫んだと思うとその手を前にかざした。

……そして文字通り、ナンテスは吹っ飛んだ。

「後ろに飛べと言っただろうが！」

何らかの力を暴発させた張本人はどうやらダメージを受けていないようだ。

「動けなかったんだ！君は周りの人間が陥っている状況を慮る気はないのか！！」

ナンテスはしたたか打った背中を押さえながら叫んだ。

「そうだったのか？」



フィーはきよとんとしている。  
「もういい・・・助かったしね。ありがとう」

どうやらフィーの竜の加護は有効であったらしい。そして何かの力があるといったのも、間違いではないようだ。フィーは笑った。

「どういたしまして・・・それにしても、ロイのほうは動けてたようなんだがな」  
「え？」

見れば、ロイさんはすでに戦っていた。空中を舞うように動く魔女相手に、やたらと重そうな装飾をつけた剣を振るっている。あのしなやかな細腕でどうしたらあんなものが使えるのか、というのは愚問だろう。術具で身体能力を補強しているに違いない。

「あれは・・・あの剣は術具？」

思わずロイさんの無駄のない動きに見惚れながら、ナンテスはフィーに尋ねた。

「ああ、あれ対ラエル用とか言ってた奴だな・・・出来上がったのか・・・」  
「ラエル？」

「いや、なんでもない。手助けしなくていいのか」  
フィーの言葉にはととする。ロイさんの戦う様が如何に美しかろうと見惚れていてどうする、彼女を助けずにして自分の存在意義などない。

「今助けます、ロイさん！」

「ロイ、ナンテス、早めに決着をつけるよー!!!・・・やれやれ」  
フィーは、走っていくナンテスを見送った。2人いるのだ、魔法  
使い一人相手ならば大丈夫だろうとフィーは思う。ロイ一人ならば、  
術具の使用時間の制限などの面から少々不安だったが、ナンテスが  
頑張るだろう。確かに公爵夫人は結構強い。だがあくまで、結構、  
だ。

フィーが加勢に来た理由は、ただ一つ。

彼女は顔を上げた。仰々しいシャンデリアの、影。そこから糸を  
たらす生き物がそこにはいた。糸は公爵夫人へと伸びている。・・・  
操っている。いや、力を貸しているだけかもしれない。

フィーはようやく探していた魔を見つけたのだ。おそらく、魔力  
を見ることに慣れていない二人には見えないだろう。魔は、不可視  
の結界を布いていた。

「蜘蛛、嫌いなんだけどな」

というよりフィーは虫が苦手だった。

派手な赤と黒というなんとも毒々しい色つきをした蜘蛛の目は、  
水晶玉くらい、生理的嫌悪を催すような長い8本の足にはびっしり  
とげとげしい毛が生えている。・・・フィーは、ナンテスではない  
が美しいものが好きと公言して憚らない。彼女の感覚にあの魔は美  
しいと映らない。うっかり涙が出そうなほど、シャンデリアにしが  
みついているそれは気持ち悪かった。

深呼吸する。迷う暇はない、早く決着をつけないならぬ。  
シライを、助けなければ。フィーが覚悟を決めてきつと睨みつける  
と、8つの目が彼女を見返した。さて、どう攻撃したものか。

いきなり義母を相手に始まった攻防に、半ば複雑な気持ちで気をとられながらも、レオナはたまに飛んでくる家具やら瓦礫やら衝撃やらからシライを守っていた。半ば抱きしめるように小さな体を抱え込むと、伝わってくる体温は、殆どなかった。寧ろ。

まるで、死んでしまったみたいに冷たい

やってくる悪い予感に首を振る。

「シライ、もうすぐ、もうすぐだから」

ただ呟いたけれど、彼女は続きを言いよんだ。

・・・もうすぐしたら？

義母は、死ぬだろうか。それが、決着だろうか。

義母は嫌いだ。

レオナに向けるひたすら無視と悪意と憎悪、反対に弟に向けるひたすらな愛情を彼女は思い出す。この家に来てよかったことなんて一つもない、あの人にあってよかったことなんて一つもない。

辛く当たられるたびにやってくる義母への憎しみに、いつもは、けれど、と声がかかった。彼女の実の母が何をしたのか、レオナは知らない。レオナの実の母へと、信じたくはないが父が義母と結婚しながらも愛を注いだのなら？レオナの母が義母の存在を知りながらそれを見せ付けたのなら？それは、どれくらい気位の高い義母に

とって苦しく誇りを傷つけられる出来事だったろう。

レオナは彼女の母本人では勿論ないが、義母にとって夫の愛を奪った憎き女の娘であることは想像できた。おそらくは義母は父を愛するから、そしてある種の誇りゆえに父へ憎しみを向けられないのだろう。父が母の働きかけなく母を盲目的に愛したなどという可能性は、信じたくないのだ。レオナの母が、いやらしい娼婦特有の手管で父を誑かした。そう思うほうが、義母にとってきつと楽なのだ。そして、彼女の実の母は何も語らなかつたのだから、レオナは確信を持って違うなんて言えないのだ。そもそも、生きるために、生活をかけて娼婦は男を誘うものだから否定する方が本当は難しい。

でも、義母が魔女なら、滅するべきではないか。

レオナの胸のうちで、彼女自身の悪意の声が囁いた。イオナイアというこの精霊至上の国において、それに疑問の余地などない。義母の正体のためにこの公爵家がどうなるかと、知ったことが。

レオナは歯を食いしばった。

そう、彼女は別に魔法使いに対して何か思うところはない。ただいなくなればいいと思うほど嫌う存在がいなくなる理由に都合がいいというだけで。憎しみ切ることができないから、理由に丁度言いというだけで。

なによりも、フィーだって、魔女だ。

魔法使いだ。だからこそ、魔女だからという理由で、沸きあがる義母への否定を心地よく肯定し、ロイたちが彼女と戦っている現状を喜ぶことなど、決してできない。

フィーにおそらく理由があつたように。

正しくない方法であつたとしても、魔女となつた義母にも理由があつたのだ。それは多分、行き過ぎているけれど彼女の息子への愛、だろう。あるいは、父の愛を求めて、だろう。それをきっかけにその後どれほど狂ってしまうくらいに歪んでいったとしても、その出

発点が間違っているなんて「好き」という気持ちを知っているレオナには言えない。義母の歪み切った瞳をレオナは見た。

恐怖を抱く一方で、なんて悲しいのか、と義母を憎むレオナですら思った。レオナが居場所を見つけた後も、義母はずっと望む居場所を得ることがなかったのだから。あの人は私が哀れんだなんて知ったら、どんな顔をするだろうかとレオナは思った。

そんなことをつらつら考えていたので、ロイたちに、義母が傷を受けて呻くたびにレオナは耳を塞ぎたくなかった。

しかし、耳は塞げない。両手で抱えているのは、灰色の髪をした頭。・・・レオナはただ、シライのために義母は罰せられるべきなのだと思った。いかに利発で大人びているとはいえ、利用するにはあまりに幼いシライ。レオナにはよく分からないけれど、シライそのもののようなあの石を守るためにロイたちは戦っている。

次第に、戦いのためにこちらに降りかかってくる火の粉も少し収まってきた。義母は明らかに弱っている。もう一押しだろう。

状況的にも精神的にも落ち着きを取り戻して、彼女は、はたと気がついた。

「そうだ、リユカ!!」

あまりの出来事の連続にすっかり忘れていたけれど、義母に連れ去られてしまった彼の姿は見えない。

「なあに、お姉ちゃん?」

「え、リユカ・・・?」

声に振り向けば、彼女の腹違いの弟はなぜかすぐそばにいた。ここに、と笑う。

「無事、だったんだ」

「うん」

「ここに」。

「どうして気付かなかったのかなあ」

レオナはひとまずほっとした。けれど。

ぱちりと瞬きした、少年の目が、笑っていないことに彼女は気付いていない。

## 62・公爵夫人（3）

フィーを見下ろしていた蜘蛛だったが、すい、と目を逸らされてしまった。ロイたちと戦う公爵夫人へその目は一心に注がれている。・・・相手にされていない。

よく考えればそれもしょうがない。飛び道具をフィーは使えないこともないが、使う予定もなかったから置いてきてしまったし、腰に帯びている剣にしたってこの距離では届かないために蜘蛛をただ見ているしかないフィーは、蜘蛛に相手にならないと判断されても当然といえる。

チットという男のように瞬間移動でもできれば話は別だが、魔力をうまく扱えないフィーには宙吊りのシャンデリアに届く術がないとなると蜘蛛のほうに動いてもらうしかない。蜘蛛の弱点・・・。蜘蛛の天敵といえば蜂。香りが苦手と聞いたこともある。

香り？

フィーはふと、ロイが趣味で作ったハーブの香水を持っているのを思い出した。胸元を探ると、ペンダントへ繋がれた可愛い甘いガラスの香水瓶を外す。

「よし。ロイ、ごめん」

駄目でもともとだ、と彼女は小さな香水瓶を蜘蛛のほうへ投げた。

「グア・・・！」

香水瓶は見事フィーの狙い通りシャンデリアへと命中して割れた。

「・・・いい匂いなんだけどな」

その香水の匂いが余程こたえたのか、巨大な蜘蛛は呻きながら飛ぶようにしてシャンデリアを離れて床へと降りた。たくさんの足をばたつかせて恐慌してもがく赤黒い蜘蛛にぞつとしたものの、今がこの魔を屠る絶好の機会なのは間違いない。フィーは剣を構えて駆け寄った。

一方、屋敷の一室で繰り広げられる事態はまるで別世界の出来事のように、公爵家は異様に静まり返っていた。娘への怒りを隠しきれない様子の公爵のせいもあつただろう。使用人たちは怯えた。公爵夫人が来客と共に部屋に籠りきりであるのもどこか不穏だ。ちなみに彼らは、ロイとナンテスという姿をくまます術具を用いた侵入者がいたことには気づいていない。もし気付いたなら一騒動起きていただろう。フィオレンティーノがやって来たときのように。しかしそのフィオレンティーノは公爵夫人に来訪を認められ、その部屋の扉が閉ざされると、今はただどこか気まずい沈黙が広がっていた。屋敷に備えられた柱時計の音がやけに大きく響いていた。

だがそれはしばらくしてやって来た一人の男によって破られる。

「突然の来訪をお許しくくださるか？ここへ訪ねているという客人に用があるのだが」

「ヴェイエア王様！？」

滅多に取り乱すことのない公爵家の使用人たちは、突然の王の登場にざわめきだす。



「今主人を呼んで来ます！」

取次ぎの一人が、火のついたように慌てて公爵の元へ向かった。

「いや、別に・・・ああ、行ってしまったか」

まあ挨拶をしないのも無礼かな、と鷹揚に男は呟いた。

「お体はよいのですか」

「ああ、もう大丈夫だ、ありがとう」

多少痩せたようだが確かに倒れたと噂されていた王の血色は悪くないようだ。彼に声をかけた使用人は一息ついた。

「客人と仰いますと、どなたのことでしょうか？」

確かに公爵を訪ねて何人か客はやって来ているが、王の婚約候補の公爵の娘、レオナンデについての用事ではないのか。そのことを不審に思いつつ使用人は問いかけながら、初めてこんなに近くで王を見る事ができたのを密かに喜んだ。しかし舞い上がって礼を取るのを忘れていたのに気付き、慌てて膝をつく、王は苦笑して構わないでくれ、と言った。気さくな人だと耳にしていたものの使用人たちは驚いた。ひとたび身分を得、敬われることに慣れると、人というのはすぐそれを自分の価値と履き違えて当たり前前に思うものだから。

「細工師フィオレンティーノがこちらにいと伺っている。彼に会いに来た」

王はにこやかに用向きを継げた。

ちなみによく見ると、仮にも婚約候補の娘のいる公爵家を訪ねるにしては王がやけに軽装だと誰もが気付いたはずだった。しかし皆その不思議なほどの存在感に圧されていたから、仮に気付いたとしてそれを気にする者はいなかっただろう。同様に、そもそも王が一人であることにも、なにやら荷物を抱えていることにも、彼らは不

思議に思つことがなかった。

一突き。

固い殻を破り、思いの外あっさりとフィーの剣は蜘蛛の体へと吸い込まれた。ばたついていた蜘蛛の動きが緩やかになると、やがてそれは静止していく。

動かなくなるのを見届けて、フィーは突き刺した剣を引き抜いてその場に腰を下ろした。暴れ動く蜘蛛を捉えるまでがなかなかの辛苦だったために彼女は疲れていた。実際ロイやナンテスに比べると劣るとはいつても、フィーが世間一般に比べて弱いということはない。そうでなければこれだけ巨大な魔を、相手が混乱しているからと言って倒せるはずはない。ただ、苦手な蜘蛛相手というのが心理的に彼女にはきつかった。及び腰になってしまい時間がかかったのだ。

不慣れながらも火に似せた魔力を剣に通したことも功を奏したのだろう、巨大な蜘蛛の魔は起き上がる様子は見られなかった。結果ももつじき、薄れて人が来るに違いない。フィーは、蜘蛛から公爵夫人へと伸びる糸を彼女の切れ味のいい剣でぷつりと切りながらそんなことを考えた。

ロイたちのほうを見ると、やはり魔の力が大きかったのだろう、公爵夫人は床に落ちて動きを鈍らせている。

私にできることはやった。一息つくくと、ロイとナンテスの見事な剣捌きをフィーは眺めた。やはり、強い。相手に魔法を使わせる隙を殆ど与えない。こうなると1対2は少し非道にも思えるがまあ、

仕方ないだろう。

もう一息だ。ロイの剣が公爵夫人に迫る。

しかし、その時、やけに通る声がした。

「剣を、下ろして」

気を失ったようなレオナとシライの首に、少年がナイフを当てていた。

「・・・レオナ！？シライ！！」

フィーが呼びかけても反応がない。

「何をしたんだ！？」

ロイとナンテスも突然の事態に動きを止めてしまう。それを、公爵夫人は逃さなかった。静かに詠唱すると、パキリ、という音と共にロイとナンテスに細く青光る電撃が走る。2人が呻いて倒れた。公爵夫人もかろうじて立っている、という様子であったが、それでも彼女は勝ちを確信したのだろう、息子に向かって笑んだ。

「よくやったわねえ、リユカ。いい子、いい子だわあ。

・・・あなた、フィオレンティーノ、とおっしゃったかしら。レオナは毒に倒れているのよ」

公爵夫人の顔は、フィーに向かって歪んだ笑みを浮かべる。

「毒だ・・・レオナを、殺す気か！？」

フィーは公爵夫人を睨んだ。

「大丈夫。あんな娘本当は殺してあげたいけれど、主人が怒ってしまつから死ぬほどの毒は使っていないわ。シライのことだつて殺す

気はないのよ、交換条件を果たしてもらいたいだけなのだから。でも貴方が反抗するのなら、そもいかないけれど。ねえ、抵抗、なさる？無理よねえ」

くすくす笑いながら、動かなくなったロイの衣服に手を忍ばせると、彼女は緑の石を取り出した。エメラルドのように燦然と輝く、シライの力だというそれを。そして彼女はそれを手に、ゆつたりと息子の元へと向かう。フィーは思わず立ち上がり、公爵夫人の前へ遮るように立った。

「待て！」

「あら、邪魔だてすると貴方の大事な二人の人間は死んでしまうわよ？」

フィーに魔法が利かないのは気付いているのか、あるいはもう魔力を使い果たしたからか、彼女はそう言いつつも苦い顔で立ち止まった。公爵夫人の言葉に震えたが、フィーは退かなかった。術式回路など移植したあとシライが無事とはとても思えなかつたからだ。フィーが止めなければ、公爵夫人は表情ひとつ変えずにそうしてしまふ。公爵夫人の息子であるらしい少年は、おそらく夫人によって操られているとフィーは考えた。だから公爵夫人の気をせめて逸らせれば、この部屋にかかった魔の結界が解けるまでの時間を稼げるかもしれない。

「ほら、おのきなさいな」

「・・・リユカと言ったか。あの子を術師にしたいんだな？」

「そうよ。そうしたら、この国での地位は約束されたようなもの」  
うつつりと公爵夫人は言う。それはあながち間違いではない。しかし。

「あの子は、それを望んでいるか？」

「なにを。当たり前じゃないの」

そう答えながらも、公爵夫人はその歪みに満ちた視線を逸らした。「それなら何故操る必要がある。リュカがそれを望んで動いていない証拠だろう」

操っているかに確信があったわけではなかったが、公爵夫人が黙り込んだところを見ると当たっていたらしい。

「愛しているのか、息子を」

「勿論じゃない、そうでなければこんなこと」

「・・・私は、両親を早くに無くしたが、家族の愛は知っている。

師匠もロイもシライも、みんなで彼らにとって他人の私を愛してくれたから。それが血の繋がった家族の間に交わされた愛に劣るなんて思ったことは一度もない。幸福にも」

「何が言いたいの」

フィーは遠い目をした。師匠が、いた頃を思い出す。細工師になることを選んだときも男装することを選んだときも、やりたいようにやってみな、と師匠は笑った。

「たくさん彼らとは話した。他の人に話したら馬鹿にされるような話を、いつだって真摯に聞いてくれた。過ちを咎めることもあった。でもいつだって私が何を望むかをできる限り優先してくれた。

・・・貴方は、彼の夢を、望みを、一度でも耳にしたことがあるか」

フィーは、リュカと同年代くらいだろうシライの夢を、知っている。リュカは誰かにそれを伝えることがあったらどうか。

「・・・」

公爵夫人は押し黙った。

「あの子が、公爵家の長男として家を継がなければならぬにしろ、持っている望みは諦めるしかないにしても。本当に愛しているならば、あなただけでも彼の言葉を聞いてやるべきじゃなかったのか・  
・親なのだから」

周りから、幼いのにすでに決められた一筋の道を歩むことを求められる。それがお前の幸福だといわれる。・・それは一体どんなものだろう。

「愛というのは、押し付けるものなのか。子は母親を無条件に愛するものだが、あんたはそれを非情に利用していたのではないのか。あの子が黙っているのをいいことに。・・いや、操ったということとは、あるいは聞かないフリをして彼の望みを黙殺してきたのか？それはあの子のことをどんなに想った末の行動としても愛じゃない、ただの自己満足のための暴力だ」

「お黙り!」

激昂した公爵夫人は、フイーに飛び掛ってきた。

### 63・公爵夫人（4）

「この部屋にフィオレンティーノはいます・・・私の妻と息子、娘に、さらにもう一人の来客がいると聞いていますが」

公爵が静かに言った。形ばかりノックを試みたが、部屋は沈黙を返すだけ。仕方無さそうに公爵がドアに手をかけると、それは開かなかった。

「・・・鍵、か？あやつめ・・・すみませんが少々お時間をいただけますか、おい、鍵をお持ちしろ」

忌々しそうに公爵は呟いた。

「いや、結構」

しかしそれを止める王の言葉に、公爵は振り返った。王は、興味深げに閉ざされた部屋の扉を眺めていた。

「お待ちになるおつもりで？」

公爵が問うと、王はにやり、と笑った。

「無論、強行突破だ」

キン、とフィーに詰め寄った公爵夫人の扇は打ち落とされた。「なぜ・・・!?」

フィーの目の前に、銀の一つに束ねられた美しい髪が舞う。フィーは少し呆気にとられて、銀髪の持ち主を見つめた。

「ロイ……？」

「うん？」

のんきに返事をする場合でもないだろうに、律儀に彼はフィーに応じた。

「お前は倒れていたはず！先ほども抵抗もしなかった！」

公爵夫人は明らかに動揺している。フィーも同じ事を聞きたいと思った。

「シライに、さらにはフィーにまで伸びる魔手をはたかずに寝こけていられるわけ無いよね」

笑顔が怖い。

「初めの一手で気づかなかった？あるいはその後戦う間に」

ロイはにこりと笑う。彼のどしりとした剣は、公爵夫人の首筋に当てられた。

「貴女の魔法から身を守る術が僕にはあった」

そういえば、確かにナンテスは吹っ飛んでいたけれどロイは無事だったつけ、とフィーは思い出した。

「狸寝入り……」

フィーは気付かなかった自分に呆れつつ呟く。……それならば、まさかとは思うが。

「ロイ、公爵夫人の持っている石って」

「偽者だけど？」



じゃあ本当であればエメラルドか。ロイの用意周到さにもはや溜息しかでない。

「さて、」

ロイは公爵夫人に向き直った。

「どうします？人質がいるのはお互いさまになりましたが」

続くロイの言葉に、今の状態は形勢不利からは多大な進歩だが、新たなる膠着に陥ったに過ぎないことに気付いてフィーは頭を抱えた。

「・・・ロイ、助けてくれたのはありがたいが、今の公爵夫人の相手くらい私だって引き受けられたんだからシライたちをこっそり解放しに行けばよかったのに」

「嘘つき。疲れてるでしょう、相当」

確かにそうだけれど。

公爵夫人の燃えるような視線が痛い。まさかまだロイに何がしかの思い入れがあるのだろうか。

「・・・ロイ。相変わらずの過保護っぷりだな」

ふと響いた懐かしい声に、フィーははっと顔を上げた。そこにあったのは、違えようも無い、懐かしい顔。昨日、言葉を交わしたはずなのに、あれから随分経ってしまったような、そんな気がした。

「フィー」

思わず名を呼んだ。流れる黒い髪、深い蒼の目。彼は微笑みで、フィーに応えた。

「使い方も分かってない幼い子どもが刃物を持つのはよくない、そう思わないか、公爵夫妻」

いつの間に入ってきたのか、そしていつの間に事態を収拾したのか。ヴィーは2本の鈍く光るナイフと、気を失ったリュカを抱えて場を俯瞰するように見渡した。

「チェックメイト、かな」

公爵夫人が、へたり、と座り込んだ。

「シライ？」

大好きな、兄の音がする。だからシライは重たい瞼を開けて目を覚ました。

「・・・僕、は」

「もう大丈夫。よかった」

脇を見ると、微笑んだ兄の姿。うつすらとその目が潤んでいるのを見てシライは慌てた。

「あ、あの、どうなって」

見渡すと、住み慣れた工房ではありえない豪華な調度品。ここはどこだろう。

兄は瞬きすると涙を消した。

「今はもう、夜だ。ここは公爵家の一室。」

シライの力は、取り戻したよ。ただ無理に引き剥がしたから定着

するのに時間がかかって、今までずっとシライは眠ってた。

・・・公爵夫人は、軟禁状態。フィーが公爵夫人の契約相手の魔を屠ったみたいだから、もうたいして悪さもできないだろうし・・・  
なにより彼女の精神も肉体も歪んでもう長くないらしい。シライ以外にも何人か公爵夫人に力を抜かれたり、使用人でも操られた人間がいたようだ。結構長い年月、魔法を使ってきたんだろっね」

一息に受けた説明を飲み込むと、シライは頂垂れる。つまるところ、自分の計画はどうやら駄目になってしまったらしい。

「公爵夫人の養子になろうとしてたって聞いたけど？」

シライを見つめながらかけられた兄の言葉にぴくり、と彼は身を震わせた。

「ごめん・・・」

その通りだ。そう、それが交換条件でシライ側が出した条件だった。

「・・・正直に言っただけ。僕と兄弟でいるのがいや？それともあの家にいるのが、」

「違う！そんなこと思ったことは無い！」

曇った顔をする兄に向かって、シライは叫んだ。

「お兄ちゃんの弟であることは僕の誇りだし、あの家にいるのは・・・」

声が詰まる。楽しく愉快な日々、やさしい兄とフィー、シライの料理を楽しみにしている、気の置けない職人達。それを厭ったことは一度も無い、けれど。

「いるのは？」

優しく続きを促される。

「ねえ、ロイお兄ちゃん。僕は、邪魔でしょう？」

ぼろぼろ泣きながら、言つまいと思つていたことをついにシライは言った。

ずっと思つていた。フィーがどこかへ行つてしまふなんて話が出る前から、ずっと。兄が、彼にとつて妹で、自分にとって姉に当たる存在に恋をしているらしいと気付いて以来、ずっと。自分がいなければ、と。

「……もしシライを邪険にして泣かせるような人間がいれば絶対にただではおかないと決めていたけど、まさか自分がそうすることになる、なんてね」

兄は、シライの目を真つ直ぐに見た。大きな空色の瞳に、ぐちゃぐちゃの自分の顔が映った。兄の目にあるのは、自分を心底愛おしく思つて慈しむ感情だった。

「シライが邪魔だと思つたことは、一度も無いよ。そう感じさせたんだとしたら僕の落ち度だ。本当に、ごめん」

兄の長い指がシライの涙を拭う。

「だって、お兄ちゃんがフィーについていけないっていうのは僕のせいでしょう……」

なおすすり泣きながらシライは言った。

「……フィーの傍には居たいよ、勿論。でも、僕は同じくらいシライの傍に居たい。そして、僕は曲がりなりにも工房の店長なんだよ」

そう言って、ロイはシライの涙を拭くと彼を抱きしめた。

「そう思ったから、ここから動かないつもりなだけ。シライは何も悪くない。・・・何も相談せずに、あんなふうに自分を取引対象にするようなことは、もう二度としないで。シライが二度と意識を取り戻さないかもしれない、と思ったときの僕の気持ち分かるかい？半身が& a m p ; # 2 5 4 4 5 ; がれてしまうように辛かった。君は僕の、唯一の大切な弟なんだから」

「ロイお兄ちゃん・・・」

シライは母が死んで以来久しぶりに盛大に泣こうとしたが、その時。

「シライ!!」

扉を蹴破るように飛び込んで来て、突進するように自分に抱きつく塊があった。

「・・・ファイ？」

「馬鹿、シライがよその養子になんかになったら私はロイと天涯二人つきりなんだぞ！それがどんなに辛いか。養子になるなんて嘘と言ってくれ!!」

ファイは本気だ。

「ちょっとファイ？」

兄が悲しげに呟いた。

「私の弟にシライがなるなんて大歓迎だけど、ロイさんとファイが二人きりになるなんてちょっとねえ」

続いてやってきたレオナの言葉に兄は黙った。

「久しぶりだな、哀れな重度シスター・コンプレックスにブラザー・コンプレックス持ち。弟君、大丈夫か？」  
いつか遠目に見た王様までやって来た。

「黙れ」

今度はびしゃりと兄は言う。

「ロイさんになんて物言いを！！」

「いや、ナンテスさん、この人は一応王様だけど」

シライはやれやれと呟いた。ナンテスさんまでやって来た。おちおち泣けやしない、そう思ってなぜか苦笑いが顔に浮かぶ。

「知っているよ。・・・無事でよかったね、シライ。・・・少し話があるんだけど、いい？」

ナンテスさんに声をかけられ、兄にならともかく、一体彼が自分にどんな話があるのだろう、とシライは思いつつも頷いた。

部屋を何故だか追い出された。

「なんだっていうんだか。・・・まさか、な」

フィーは首を傾げた。少しだけ思い当たることがあった。けれど、ナンテスがそんなにシライのことを知っているとは思えない。確かに学生時代、幼馴染である彼は工房にたまにやってきていたけれどそんなにシライと親交があった記憶は彼女には無かった。

「ナンテスさん、話って」

「起き上がらなくていいよ、寝ていて」

ナンテスはにっこりと笑った。シライは落ち着かない気持ちで横になると、ナンテスのくるくるした巻き毛を眺めた。ナンテスはおもむろに言った。

「僕はロイさんが好きと知っているよね」

・・・知っている。シライはこくりと頷いた。まさか兄との仲を取り持てといたりしないだろうかとシライは不安になった。シライは何度が彼に自分の兄はあくまで『兄』だと告げたが聞いてもらえなかった。

もつとも、そんなにナンテスと話した記憶は無く、どちらかといえば彼の父がよく店に宝石を運んできたりにしていたので親しい。

ナンテスはシライの戸惑いをそこ吹く風と続けた。

「今日、君を見ていてさ……僕はなんて覚悟が足りなかったんだらうと思っただ」

「か、覚悟ですか」

ナンテスは大きく頷いた。いい人とは知っているのだけれど、どこか芝居がかった人だなあ、とシライは思う。

「ああ。たとえ自分の想いを犠牲にしたって、愛する人が幸せでいて欲しい、幸せにしよう、という覚悟」

その言葉に、ぱちくりとシライは瞬きをした。

ナンテスは続ける。

「フィーが旅立つという話をしたときに、僕はただ嬉しかった。ロイさんがどれだけフィーに心を寄せているか、知っていたから」

彼はフィーを男と、兄を女と信じてやまない。さながら兄は、二人の男の間で揺れるヒロインと言ったところであろうか。兄はともかくフィーはきつとさほど自覚がないだらうけれど。

「卑怯と思う？でも、僕は、ロイさんを愛しているし、だからやっぱり愛されたかった。無私の愛を捧げられるほどに無欲ではいられなかったな。まだまだだよ」

いろいろ複雑なところはあったが、シライは首を振った。それが普通の精神ではないかと思ったから。シライだって、好きな子には好きになって欲しいだらうし、大好きなロイやフィーには自分を好きでいて欲しいと思うしその愛情を独占したい。

シライの様子にナンテスは首を傾げた。



「だって君は、ロイさんのために、あんなことをしたのだろう？それが無私の愛というものでは？」

・・・フィーのためでも、あるけれど。

「そう、ですね。でも僕とあなたでは立場も違いますし、想いの形だって違います」

シライはそう思っている。兄にナンテスが抱く気持ちは、シライもまだ知らない恋という感情。

けれどナンテスは言った。

「ロイさんへの気持ちは、『憧れ』という共通点が僕と君の間にはあると想うけどね。君は、ロイさんやフィーのような細工師に成りたいのだと思つてたけど？」

シライは驚いた。

「知つてたんですか」

「まあね。見てれば分かるよ。」

確かにあんな人たちが身近にいたら、細工師に憧れるだろう。君はどうやら才もあるらしいしね。僕らが行つたみたいな芸術の専門校に通つていられるのもそのためなんだろう？

この国で、細工師になるという夢を叶わせたいけれど、ロイを引きとめるわけには行かない。ついて行くのは明らかに足手まといだと君は思っていた。そこで選んだのが養子だ。

確かに、この国で君の周りの平民身分で今、君のような子ども一人増えても平気なくらい経済的に余裕がある人はそんなに多くないし、学生寮だつてまだ機能していない。だから君は公爵家の養子になろうと画策した。違う？」

違わない。レオナの家とは知らなかつたけれど。

「すごいと思うよ僕は。その身をなげうつほどの覚悟を。そんなに幼いのに、まだ自立なんて考えられないのが普通なのに、君は選んだ。家族から離れてでも、ロイさんが望むことを知っていたからそれを叶えさせよう」と  
「・・・」

兄が望むこと。彼にも分かるのだろう。

「彼女が望むのは、どうしたってフィーと共にいること。悔しいけれど、長年彼がフィーに向ける目を見てきたんだ、本当は知っている。この恋は叶いつこないんだって」

ナンテスは胸に手を当てた。

「でもこの思いに偽りないよ。彼女に誰より幸せでいて欲しい。だから僕は彼女の足を踏み出させたい」

シライの目をナンテスは真っ直ぐに見つめた。

「シライ、うちに来ないかい？」

ロイさんの弟だもの、三食作ってくれるならそれだけでいいよ、とナンテスはいたずらっ子のように笑った。

「エルファンド工房の細工師連中と未来の天才細工師に貸しを作るのは悪くない。

養子にきたって勿論構わないけれど、そのままだって全然いい。宝石の勉強だってできる。それは細工師になるんなら必要不可欠だ。どうする？」

びっくりするくらいのない条件だ。家事は今もやっているし。

シライは、僕とフィー、同じくらい傍にいたいと言ってくれた兄を思い出す。あの瞬間、何か凝り固まっていたものが自分の中でほどけていくのを感じた。だからもう、十分だった。

シライは、

「お願いしたいです」

といった。ナンテスはくしゃり、シライの頭を撫でた。

公爵夫人との戦いの後、大変だった。フィーは回想する。

部屋は実に悲惨な有様になっていた。

高級そうな調度品が見るも無残に破損していたがそういう問題ではない。

ヴィーに続いて訪れた公爵が言葉を失うのも無理は無かったろう。

シライは意識不明の重態、毒にやられたレオナと電撃をまともに受けたナンテスも右に同じだった。公爵家長男はヴィーに昏倒させられているし、公爵夫人は放心状態で膝をついたまま動かない。しかも部屋には、明らかに禍々しい気配を放つ蜘蛛が一匹。

「一体、何が」

苦虫を噛み潰したような表情をして、声を絞り出すように吐き出した公爵に、答えを返したのはナイフを打ち捨てた王様だった。

「・・・魔に魅入られた末の騒ぎだろうな。魔は、あの死んでいる蜘蛛あたりがそうだろう。・・・おそらくこの惨状、ほぼ間違いないあなたの妻の仕業だ。何をしようとしたかは本人に聞くなり、フイオレンティーノたちに尋ねるなりご随意に。まあ見るからに碌なことではなからうが」

淡々と述べる王様をフィーは見やった。少し痩せたようだが相変わらずその態度は飄々としている。飛び込んでくるなりこちらが必要としていたことをあつさりこなすあたりがなんだか小憎たらしいが、流石は元神殿騎士隊長といったところか。仮にも公爵夫人に口イが剣を突きつけていたにもかかわらず、王様であるヴィーがあつさりフィーたちに味方するのに問題を感じなくも無い、と少しひねくれたところがあるフィーは思った。

公爵はどう判断するだろうかとリュカとレオナの父である男を見ると、彼はヴィーの言葉を信じたらしい。

「お前が、これをしたというのか」

第三者の背筋の冷えるような、凍てついた目で彼はその妻を見た。

「ああ！あなた違うんです、聞いて」

「何が違う」

底冷えのする声。偽りを許さない糾弾だった。

「確かに私はシライから力を抜き取った。リュカを操ってレオナに毒を飲ませた。・・・魔の、力を借りて」

公爵夫人が話しながらその目から零す涙を、レオナなら憐れみを以って見たかもしれない。けれどフィーは、そう感じることは無か

った。ただ愚者のように取り繕わずに己の仕業を告白する女が、公爵の問いに偽りを持って答えないのは彼女が彼を確かに愛しているからなのかもしれないとフィーは感じた。彼女の流す涙の方は・・・そこに悔恨が無い様子を見る限り、あるいは単なる自己憐憫か、同情を誘おうとでもいうのか。彼女は公爵へとふらふらと歩み寄ると、その服に縋った。

「あなたはそれを、私がただレオナへの悪意から行ったとお思いでしょう？確かにそれはそう、でもそれだけじゃない。愛するあなたと私の愛しいリュカが、尊い血を持つあの子が公爵家の長としてこれから立つのにまったく恥じないだけの力を手にするためにやったのよ。…そう、私には魔法の才があった！けれどこの力はある子には受け継がれなかったし、精霊国では術師になった方が遙かによいある日魔が言ったのよ、お前の子を幸せにしてやりたいかい？つて…だから私、」

「黙れ！」

凄まじい恫喝だった。思わず身が竦むほどの。話しながらどこか恍惚とした様子の公爵夫人は公爵にかけて手を、火に触れたように放した。

「あ、あなた・・・？」

「もう、いい…幸せを望んだのは、だれのものでもなくお前の幸せだろう、リジア」

その言葉に、公爵夫人は身を震わすと、ますます慟哭した。まるで、赤子のような泣き方だった。厚く塗られた化粧は剥げ、ひどい顔だった。

それを相変わらず冷めた眼で、けれど先程よりわずかに同情を孕んで公爵は眺めた。

「魔女であることを隠していたことに気付かなかったのは私の落ち度だ。許そう。ただ、あの子らを、リユカを、レオナを理由にするな。平民の無関係な者を、巻き添えにしたことも許されはしない」

彼はつかつかとレオナやリユカの傍によると、硬直して事態を伺っていた使用人達に声をかけた。ちなみにシライは、公爵たちの会話にフィーが気取られている間にロイが近づいて行ってなにやらこっそりと手当てしていた。

「この子らを別室に運び出せ！至急慰術師を呼んで手当てさせる・  
・妻も、ひとまずどこか落ち着くところへ連れて行け」

「はい！」

率先して動いたのは一人のレオナ付きのメイドだった。他の者も慌てて動き出す。

ばたばたと使用人が入ってきて、出て行つて。

取り残されたのは、公爵と王と、フィーと、シライの頭をそつと抱えて何かの術具を当てているロイ。

「・・・王よ。あなたは妻の告白をお聞きになった。・・・裁きますか、貴方の『ご友人』であるというフィオレンティーノとどうやらその縁者をこの騒ぎに巻き込んだ妻を、忌まわしい魔女として」

あげられた公爵の声は平だった。何かを諦めるように、そして公爵夫人よりずっと、何かを悔いるように。王はといえば、蜘蛛の方に寄って行って興味深げに突いていた。構わず公爵は続けた。

「私は一度、燃えるような恋をしました」

まだそれほどの年では無かるうちに、そこそこ整った顔立ちの公爵の髪には白い毛も混じっている。その彼の言った脈絡のない言葉は、どこか人を寄せ付けない様子の公爵から発せられるのに似合わない言葉だった。ただ、否定させないような実感が込められていたから誰も冗談とも取らずに公爵を見つめる。

「我が公爵家の、次期公爵とすでに定まった矢先のことでした。私には婚約者だつて既にいた。それなのに町の花売りの少女に恋をした。・・・実に愚かと思うでしょうね、実際私も何度悔いたか知れない。けれど、私は何度でも彼女と出会う選択をするでしょう。それほどに愛していた」

公爵のどこか遠い目は、その少女を思い描いてのものであるだろうか？ふとフィーはレオナの言葉を思い出した。

「…貴方は、レオナを、いやその母だつて放置していたのでは？」  
思わず尋ねる。公爵はいきなり声をかけたフィーに驚いたようだが、答えるように頷いた。

「そうだな、放置せざるをえなかった、というのが正しい。何度だつて探した。でも見つからなかったのだ。」

私は彼女を、娼婦として買ったのではなかった。互いに恋をしたと今も信じている。彼女を妻にするつもりだった。親だつて説得してみせるつもりだった。

そうでなければ地位を捨てるのだつて厭わなかった。ただ、そんな矢先に彼女の方から突然姿をくらましたんだ。子どもが出来ていたことすら、知らなかった。情けない話だが。知っていれば・・・いや、こんな仮定の話は無益だな。

それ以来失恋を癒すように私に残された公爵という地位を全うするよつに必死になった。

けれど彼女を、忘れることはどうしてもできなかつた。気付けば

搜索の手を伸ばしていたことがいったい何度あったか。しかし足取りすら、つかめなかった・・・ようやくの思いで見つけたのは、彼女が死んだ後だった。初めて会ったとき、我が娘の向けてきた目は、忘れられない。激情の詰まった目・・・父親に向ける目でなかったことは確かだ」

フィーはふと、あるいは公爵とレオナはすれ違っていたただけだったのかもしれない、と思った。決定的に、どうしようもなく。もし、などと思うのは公爵の言うように無益だが、人は何度ももし、と思うに違いない。後悔のない人生など存在しない限りは。

公爵は再び王に向けて話し始めた。

「妻は、そんなレオナを拾ってきてからの私をずっと見てきました。妻を愛していると信じるときもありましたよ、けれどそれはレオナの母に向けたようなものとは比べ物にならなかった。それを、そんな私の心情をいつもリジアは感じていたのを知りながら目を逸らし続けました。」

レオナの母が亡くなったと知ったとき以来もう全てどうでもよくなりつつあった。けれどあの娘のことは・・・レオナは、幸せにしたかった。貴方に嫁がせてやりたかった。これ以上の相手はいないと思いましたがね、自分は自由な恋愛を求めながら何を、と仰るかもしれませんが貴方が相手で不幸になる女性はいないでしょうし」

「どうかな？買いかぶりだと思うが」

蜘蛛の口を開けてなにやら作業をしながらヴィーは呟いた。・・・公爵はソラのことを知らないのだろうか。

「そうでしょうか。まあ、今となってはそんなことを言えた立場ではなくまりましたが。」

…さてここまでお話すれば、王、お分かりでしょう。妻が魔に魂



を売ってあんなことをしたのは、私に責がある、と」

グイーは顔を上げて公爵を見つめた。

「ほう。貴方はてつきり奥方を愛されていないのかと思ったが庇うか」

「・・・レオナの母であった人への想いを妻のリジアに向けた感情が越すことはない。けれど、苦しみながらリジアは私を愛し続けた。本来その刃を受けるべきは私であったのに、精神的に追い詰められてなお私にそれを向けようとしなかった」

「あなたに向けられるそれは狂ったような、愛であったとしても？」

公爵夫人を愛した、と？

「ええ。狂ってまで私を愛した妻を、私も愛していたようです。こんな昔語りをするくらいですから。

・・・妻をあそこまで歪めたのは、噂に聞く魔法の行使でなく何よりも私自身であったと思います。責は私が受けましょう」

「・・・グイー、ロイ、どうだ？」

王様は、こちらに顔を向けた。

グイーとロイは顔を見合わせた。グイーが口火を切った。

「例えあなたに要因があったとしても彼女は酷いことをした、と思うよ。シライの気持ちを利用し、リユカを操り、レオナを毒した。正直に言えば許すべきではないと思う。

けれど、シライなら、今の話を聞いて元は僕が望んだことだし、とか言って、下手したら死んでいただろうに全て許してしまうだろ

うな。

私が唯一つ言うことがあるとすれば二度と関わってくれるな、ということだが……。関わりたくても無理だろうな、魔は死んだし、実際公爵夫人は、魔法を使った代償である歪みが相当進んでいてその命はもう長くないと私は思う」

それこそが、そのまま罰となるだろうとフィーは思った。

「……僕もほぼ同意見。ただもしシライが死ぬようなことがあったら、あの人を殺していただろう。そして誰が手を下さずとも僕が公爵家そのものを潰していただろうね。シライは幸い生きている。・  
・よかったね」

ロイの纏う空気は冷たい。

「だ、そうだ。私が口を出すことではないな」  
「王……」

公爵が何か言いかけたが、そこへばたばたと使用人が一人飛び込んできた。

「公爵様！」

「どうした」

「レオナ様が解毒剤を飲ませるのですが目を覚ましません。どうしたら……」

「……おそらくこの蜘蛛の毒だからだろうな。流石に魔にやられた毒というのは特殊であるらしい」

ひよい、と使用人に向かって、試験管のようなものを投げつけながらヴィーは言った。

「これを神官長に渡せ。蜘蛛の毒だ。俺の名前を出せばさっさと薬くらい作るだろう」

「王様……！」

「王よ、感謝します。行って来てくれ」

「はい！」

そしてナンテスやレオナ、リュカが治療を受け、シライが目覚めますまでの間、ロイはシライの看病をし、フィーは王と公爵におおまかな事情を説明して過ごしていた。

そしてシライが目覚まし、ナンテスに追い出されて今に至る。

「とりあえず皆無事でよかったな」

フィーは、発声元である向かい側を見やった。そこにはゆったりと椅子に腰掛けたこの国の英雄が一人。

ここはレオナに引つ張って連れて来られた客室である。ロイが公爵夫人に少し話がある、と出て行った後、レオナは彼女自身も公爵家の娘であるにもかかわらず、お茶入れてくるね、と言ってそそくさどこかへ行ってしまった。なんだか変に気を回されている気がする。

そんなわけで二人きりで向き合っていた。なんとなくフィーにはいたたまれない。

グイーはその蒼い目で真っ直ぐにフィーを見ているが、フィーは俯き気味にテーブルを眺めて目を逸らしていた。真っ白なテーブル

クロスには見事な百合をあしらった刺繍がなされている。眺めのよい部屋で、外で祭りの花火が開いては散っていくのが見えていたが、楽しもうという気にもなれなかった。

「・・・ああ。あんたには感謝してるけど」

一体何故こんなところまで私に会いにやってきたのか、という言葉をフィーは飲み込んだ。今話すべき根本的問いでありながら、聞くべきかなぜか迷った。

「フィオナに会いたくてわざわざここに来たんだが、嬉しくないのかな、その様子からして？」

「な・・・!!」

詰まっただ言葉をまるで読んだように王様は言った。思わず顔を上げると、そこにはいつもの人を食った笑みがある。

「・・・名前で呼ぶな」

からかわれているようで気に食わない。フィーは再びヴィーから目を逸らした。なぜこんなに苛々するのだろうかと彼女は訝った。

「相変わらずだな。・・・なあ、フィー」

「なんだ」

す、とヴィーが立ち上がると回りこんできた。彼は唐突に膝をつく。フィーは目を丸くした。

まるで主に礼を取る騎士のように厳かに、女性に跪く紳士のように流麗に、止める間もなくヴィーはフィーの手をさつと取ると柔らかに口付けた。

「共に旅に出る許しを。私は貴女を守りたい」

65・そして(2)

「公爵夫人」

かつてリジア先生、と呼んでいたこともあった人物は、空を見つめていた。窓のないどこまでも閉塞した白い部屋。その中心の椅子におかれたように腰掛ける女はまるで人形のようなようだった。自分の声が聞こえているかも分からない。

「私をお呼びだと伺ったのですがね」

呼び出した相手の顔に浮かぶ表情は虚無。

ぼりぼりとロイは頬をかいた。溜息をついて出て行くこととする刹那、自分を掴む腕があった。

「あの子が駄目なら、お前から」

妄執に取り付かれた顔はひどく歪んでいて、掴む手の強さは弱弱しいものだったが、ロイはあえて振り払うことなくただ冷たい笑みを浮かべた。

「まだ、そんなことをなさる。無駄です。あなたはもう魔法が使えないでしょうし、ご存知かと思いますがだいぶ前から術力は殆ど薬で殺していますから」

お陰であなたのような輩に絡まれることもなくて静かなものですよ、と皮肉げにロイは言った。

「何年前でしたか。僕があなたの畏にかかってシライのように術力を抜かれそうになった日のことを、お忘れですか」

公爵夫人は何かを思い出したようにびくり、と震えた。

「あの日に、懲りたと思っていましたが」

ロイの笑みはあくまで穏やかで、けれどどこまでも冷えていた。感情を押し殺しているのだとフィーがいたら思っただろう表情だ。

「こんなことになるとはね。今度手を出したら容赦しないと伝えていたし、まさかあなたがシライの力に気付くなんて思いもしなかった。シライの力は、僕と違って一生表に出ないはずだった。回路が閉じていたのだから。・・・あなたは何か術力を見る特殊な目を持っているようです。なにせよ、余計なことをしてくれた。シライがどれだけ苦しんだか・・・本当なら殺してしまいたい」  
物騒な言葉を吐いている割にその空色の目は静かだった。

「・・・殺せばいい」

「そうしたいのはやまやまですが、できません。シライに感謝するんです。あの子にわざわざあなたごときの死を背負わせたくはありませんから。・・・聞きたいことが一つ。今回のこと、仲間が、いたりしませんか」

今回の事件を示唆したような。今後のために確実にしておかなければならないことだ。

「いないわ」

公爵夫人は目を閉じて答えた。

「本当に？精霊と竜にかけて誓えますか」

目を開いた公爵夫人は、ロイの中の何かを見ていた。フィーが嫌悪していた、あの、厭な目つきで。しかしふと、そこに今まで浮かぶことのなかった恐怖が浮かんだ。

「…ちか、う」

震える声で公爵夫人は搾り出す。ロイに何を見たのか、がたがたとその体は怯えていた。

「ならいいです。もう二度とあなたとお会いしないよう願っていますよ」

ロイはにっこり笑ってさっさと部屋を出て行くとした。しかしドアを閉める直前、

「化け物め」

一言、公爵夫人は呟いた。ロイは一瞬だけ動きを止めたが、何も言わずに出て行った。

「さてと。お湯から沸かすかな」

厨房から料理人たちを追い払って、レオナは一人お茶とお菓子の準備にいそしんでいた。

「・・・葉っぱは確かこつちに」

一つ棚を空けようとして。

「うわ！」

レオナは固まった。そこに少年が一人うずくまっていたからである。

「な、なに・・・リュカ？」

柔らかな茶色の髪の毛、まだ幼いレオナの弟は棚にすっぽり嵌っていた。

「レオナンデ、お姉さま」

くしゃりとその顔は見るからに歪んで、今にも泣き出しそうな顔へと変わった。

「あんたこんなところにいたの。とりあえず出てきなさいな」

引つ張り出そうとすると、少年はいやいやするように首を振った。

「ごめんなさい、僕、酷いことを・・・」

「お義母様に操られたんでしょう、しょうがないじゃない」  
「でも」

義母とロイたちが戦っていたあのとき、レオナはリュカに毒を受けたらしい。らしい、というのはあまりの早業にいつ毒を受けたかも分かっていなかったからである。気を失っていたレオナが目覚めますと、心配そうな顔をしたフィーや王様、父、そしてリュカの姿があった。なぜか王様がいたのにもびっくりしたが、それよりリュカがレオナと目が合った途端どこかへ走り出して行ってしまっただけよと傷ついた方が大きい。

こんなところに隠れているのを見ると、叱られるとも思ったのだろうか。

「僕、ちゃんと逆らわなかったから。そうしたらいろんなことが違っていたかもしれないのに。こんなことには、ならなかったのかもしれないのに。母上だって傷つかなかったかも、しれないのに」

ぼろぼろと泣くりュカを見て、レオナは切なくなつた。レオナに



とつて義母は他人と同然と言つても過言ではないが、リュカにとつては唯一の母親なのだ。そして子どもというのは、何かがおかしいと感じても親を愛せずにはいられない。そしてその親が負うべき責を自分で負いがちだ。

「えーと、なんだっけ、ほら、不可抗力ってやつだったのよ。言っちゃ悪いけれど逆らったところであんたじゃどうしようもなかったってこと。あの人すっかり魔に魅入られたのだから王様が言つてたわ」

歪みが進行することを魔に魅入られたとも言つう。

魔法の反響を受けて精神的・肉体的、一説には空間的にも魔法使いは歪んでしまう。しかしなにより、魔法使いとなつた者は、力を使ううちにその力に溺れてしまい、倫理や良心・理性と言つたものを置き去りにして欲望に忠実になつてしまいがちとなる。特に歪みによる死に近づくにつれてその傾向は強まる。魔法使いの暴走が始まると周囲の諫めや説得など、殆ど耳に入らないと聞く。なまじ力があるだけに大変なことになりやすい。そのことを噛み砕いて話すと、公爵になるべく教育を受けている聡い少年は理解してくれた。

「母上は、自分がそんなに長く生きられないって仰つてた。僕にできるだけのことをしてくれようとしたのだと思うんです」

どうやら義母は彼女自身のことをわかつていたらしい。遣す子の事が不安だったのかも知れない。

…曲がったやり方であれ義母はこの子を愛していたのだろう。

「でも、それでお姉さまやあの子が苦しんだ。僕の、ために」

レオナはやれやれと溜息をつく。なぜ子どもというのはこうも背負い込んでしまうものなのか。

「…あんたのせいじゃないわよ。あんたは望んじやいなかったんだから。私は別にあんたに怒っちゃいないわよ」

毒だつて王様が手配してくれたという薬のお陰で後遺症もなく助かることができた。こんなことがあつては婚約者候補から削除は確実だろうが、本当に人脈がある素敵な男性ではあると思う。お陰さまで多少気だるいけれどびんびんしている。

「おねえ、さま」

レオナはリュカの涙を指で拭つてやりながら訂正した。

「レオナでいいわよ。…シライに同じこと言つてみなさい、あのこはきつと首を振つて構わないつて言うか、むしろ謝つてくるんじゃないかしら」

シライはそういう子だ。ナンテスに部屋を追い出される前にもみんなに謝っていた。

「もうお義母様にリュカを操るような力はないわ。…あなたは、どうしたいの」

リュカは、首をこくりと傾げた。

「…まだ何か希望を持てるほどに、世間を知らないのよね…私と一緒に城下町に行く?」

この子はきつと、誰に言われずとも義母の味方をし続けようとするだろう、とレオナは思った。それを止めるようなつもりはないけれど、母に囲われた狭い世界でなくもつと広いところを見て欲しい。自分がいつか飛び出して初めて見た景色のように。

レオナの弟は小さく頷いた。

随分長いこと同じ姿勢で頭垂れていたのだが、ヴィーは顔を上げた。フィーが彼女らしくないことに、すぐ手を払うこともなく、叫ぶこともなく黙りこんでいるのを不審に思ったからだ。余程怒ったのかと思いきや、そこにあっただのは思いがけず表情をなくしたフィーの顔だった。

「・・・フィー？」

そつと声をかけると、はつとしたように彼女は瞬いた。

フィーは黙ったまま、ヴィーにとられた手を引くと、思い切ったように彼の青の目をじつと覗き込んだ。他の女にないフィーの反応を面白がるように観察する彼に、彼女は静かに尋ねてきた。

「なぜ？」

と。そう来ると思った、とヴィーは思う。

「・・・俺の命の恩人であるお前を守りたいと思った、という他に理由が欲しいか？」

ヴィーがにやりと笑って聞くと、彼女は嫌そつに顔を顰め、頷きながら言った。

「その理由だけでも気に入らないところだ。お前に恩人扱いされるいわれがない。ようやく貸し借りに関しては対等になれたかつてところだろう。まあ、約束の細工はまだできていないという問題があるがな」

フィーのその言葉に反駁しようとするヴィーを遮って、フィーは

言葉を続けた。

「・・・あなたが私の旅に同行しようなんて言い出す理由はそれだけじゃない。違うか？なんだかいやな予感がするんだ」

いやな予感、か。

「成程？男に跪かれ手に口付けられて請われようと、照れるところひとつ見せない可愛げがないところは相変わらずだが今回は鋭い・・・睨むな」

きつく睨んでくるフィーに向かってヴィーは苦笑しながら、理由ねえ、と呟いた。

「そうだな。」

冠を奪われたのは俺の失態であるにもかかわらず、それを取り返すために危険を犯して一人旅をしようなんて少女を見過ごすのは、理に反するし元神殿騎士隊長としても騎士道に反することが一つ。仕事を常時逃れようと画策する俺としては堂々とさぼる為の丁度いい口実になるのが一つ。

いつか世界を見て周りたいたいと思っていたのが一つ。

どうせ今は術式回路が壊れているから治るまで具合よく休みを取れるのが一つ。

実は盗まれていなかった石を鍵にするのもついでに済ませられそうなのが一つ」

つらつら述べるとフィーは溜息をついてばやいた。

「石、盗まれてなかったのか・・・。それは良かった。だが、あんたそれでも国王か？」

本気で呆れている様子の彼女に、ヴィーは笑ってみせた。彼としてもそれは時に疑わしい。

ふとヴィーは浮かべていた笑顔を引っ込めて、彼には珍しく随分と真剣な顔をした。

「もう一つある。・・・お前のことが結構気に入っているから」

その言葉に、フィーは一瞬目を見開いて虚をつかれた顔をしたが、すぐに平静を取り戻した。

「・・・だから？」

先を促されて、ヴィーは言った。彼女の薄い茶色の瞳を見つめる。

「魔の力を使って歪んでいくお前を俺は見たくない」

フィーは言葉に詰まったようだった。やがて息を吐き出すと、彼女は言った。

「今日、公爵夫人を見ていて。覚悟はしていても、あんなふうになんてしまうのが恐ろしいと一瞬でも思った。歪みで死ぬなどごめんだ、とも。情けない。だからそんなふうに言ってくれることは・・・ありがたい」

フィーは言いながら、ヴィーが先ほど口付けた右手の甲をしげしげと見つめて複雑そうな顔をする。やがて彼女はその手をひらひらと振った。

「男は嫌いだけど、あんたのことを私はそんなに嫌いじゃないらしい。・・・あまりあんなふうに触れて欲しくないがな」

彼女はヴィーに向かって苦笑して見せた。

「本当は一人で行くことがちょっと心細かったところだ。付いて来てくれるって言うなら正直助かるよ・・・その代わりと言ったらなんだが、あんたの石に纏わる目的の方にも付き合おう」

「いいのか？」

存外あっさり了承を得たことにヴィーは驚いた。

「なんだ、変な顔をして」

「いや……」

言葉を濁す。説得に一日はかかると思っていたことは黙っておこうと決める。

「じゃあ、よろしく」

「こちらこそ」

彼女と初めて出会ったときはこんなことがあるとはヴィーだっと思わなかった。フィーだって言わずもがな、だろう。目の前の細い少女を見つめると、彼女はヴィーを見返して何か思いついたように目を輝かせた。

「5つの涙を見せてくれないか？ヴィーのその旅姿からして、今持ってるんだらう？」

フィーとヴィーのいる部屋に戻ろうとして、扉を開けようとしたロイはそこから漏れてきたフィーの声に足を止めた。

「付いて来てくれるって言うんなら正直助かるよ」

その言葉に、ロイはしばらく絶句していたが、やがて何かを飲み込むようにして、そっとその部屋から離れて歩き出した。

「あれ。シライったらもう動いて大丈夫なの!？」

フィーたちがいる客間へと向かっていたシライとナンテスは、お茶とお菓子をいっばいに抱えたレオナとリュカに出会って目を丸くした。

「まだちよつときついけど今日はどうしても家に帰りたいたいから。…それにしてもレオナとリュカって仮にも公爵の血を継ぐ者でしょう。この家でそんなことしたら使用人の人たちの立場がないんじゃない?」

シライの言葉にレオナは軽く笑った。

「気にしない気にしない。ほら、フィーたちのところに一旦行くんでしよう、一緒に行きましょう」

「・・・分かったよ。それ、手伝うから渡して」

ナンテスが手を差し出すと、レオナは大人しくお盆を渡ししながら首を傾げた。

「ありがとうございます、ええと」

「ナンテス」

「ナンテスさん」

「どういたしまして」

そうして4人でフィーたちのいる部屋に向かう途中、彼らは頂垂れている一人の青年に出会った。銀の長い睫が伏せられて影を作るその憂い顔は男すら魅了してしまうのもなるほど、と頷ける風情だった。そんな人間は彼らの知る限り一人しかない。

「ロイ兄ちゃん？」

「ああ、シライ、か。もう体は大丈夫なの？」

シライが始めに声をかけると、ロイは微笑んだ。その笑みが何かを誤魔化すものだ、シライはロイの弟だからこそ気がついた。

「僕はいいよ。なんか、あつたの？」

ロイは首を振ってみせる。

「そんな心配そんな顔をしないで。悪いことじゃないよ。フィーの一人旅に同行者が見つかったというだけ」

「え・・・？」

「なんとなくこうなる、気はしていたんだけどね。これでフィーの身を案じる必要はもうなくなった。行こうか、そのお茶が冷めてしまっ前に」

なんでもないように歩き出そうとするロイを、レオナが引きとめた。

「ちょっと待ってください。フィーが旅するってどういうこと？それに同行者って、フィーに過保護なロイさんが任せて安心できる人なんですか？」



そんな人がいるなんて思えない、といわんばかりのレオナの言葉にロイはちよつと笑った。

「・・・フィーから旅については君には話すと思う。同行者は国王だ。ヴィエロア・ギルファレス・イオナイア。この国の名を冠する英雄だ、安心した？」

そう言ったロイに、レオナは思わぬ反応を返した。

「ロイさんの馬鹿！どこが安心できるんですか！？」

「ええと、レオナ？」

今にも掴みかからんばかりの勢いでレオナはロイに詰め寄る。彼女の持つている高級そうなティー・セットががちゃがちゃと危うい音を立てるのにその場にいた男たちは引きつった顔をした。

「ロイさん知らないとは言わせませんよ、フィーは王様に惹かれてる。そして多分王様だってまんざらじゃない。二人旅なんてしたらどうなると思います！？」

「本人の問題でしょう」

冷たい響きを持ったロイの声にレオナは引き下がるところかさらに勢いを増した。

「ロイさんらしくないわ、引き下がるなんて！フィーを好きなんでしょう！？なんにもしないうちから諦めるなんて誰が許しても私許しませんよ」

「・・・君には関係ない」

「なんですつてえ！？」

「ぶ・・・あはは!!！」

二人の様子にシライは笑ってしまった。兄はむきになっているのだと彼には分かったから。

「笑ってる場合じゃないでしょう、シライ。弟からもこの莫迦な人に言っただけでいい！」

「はいはい。・・・ロイ兄ちゃん」

ロイの空色の瞳と目を合わせてシライは言った。

「僕ナンテスさんのところに行くことに決めましたから」

その言葉に、ロイはきつくナンテスを睨みつけた。

「・・・ナンテス、何をシライに吹き込んだ？」

「愛しい人が惑い続けて苦しむのは見たくないのですよ、ロイさん」

ナンテスはほろ苦く笑った。

「わけの分からないことを・・・」

「ナンテスさんを責めないで。僕が決めたことなんだから。」

「・・・ねえ、お兄ちゃん。フィーのこと心配で仕方なくせに言いつけて自分の感情から逃げるなんて、僕の誇りの、ロイ兄ちゃんらしくないよ。僕は大丈夫。どんなに離れてたって、いつも世界一僕を大切に思ってくれるお兄ちゃんがいるって知っているから」

あのフィーと同じくらいシライの傍にいたいと兄が言うなら、それはそういう意味だとシライは知っている。

「ここまでされて、あなたは逃げる気ですか？」

今まで黙って状況を読んでいたらしいリユカにまで言われて、口

イは、白旗をあげた。

「そうと決まれば行きましようか。フィーに聞きたいことたくさんあるし」

レオナが満足げに歩き出したのをとっかかりに、揃って部屋に向かった。

「ロイ兄ちゃん、大丈夫？」

シライが兄の手を握る。

「・・・ごめん」

「謝らないで」

シライは兄に苦笑して見せた。

「フィーに執着のないお兄ちゃんなんて見ててぞっとしないもの」

それも含めていつも通りの僕のお兄ちゃんらしさだからね、とシライは言った。

一同がぞろぞろとフィーとヴィーのいる部屋にやって来た。すると、常にないどこか途方に暮れた目でヴィーが彼らを見やった。ロイを見出すと、彼は声をかけた。

「…助かった。ロイ、こいつをどうしたらいい？声をかけても死人のように反応が返ってこないんだが。かれこれ一時間この調子だ」  
「…5つの涙を、フィーに見せちゃったわけ？」

テーブルの上には華奢そうな箱に納められた見事なハンベルグ石、青金剛石、黄玉、紅玉、緑の瑪瑙がシャンデリアの光を受けて並んでいた。思わず息を呑むほど、おのおのの色を湛えてそれらは美しくかった。しかしその場にいる誰よりもそれらに熱中する人間ほどの情熱は誰も持っていなかった。

蕩けるような目をして、それらの大粒の雫型の類まれな輝きを放つ宝石に魅入られた無類の宝石好きの少年のような風貌の人物が一人。

それを相手に、さしもの英雄もさじを投げたらしい。

「ああ。まさかこんなことになるとは思わなくてな。一応目を覆うことも試みたんだが、すごい勢いで払われた」

「…だろうね」

フィーの相変わらずな様子に、ロイはなんだか肩の力が抜ける気がした。やれやれとため息をつく、少女の下に歩み寄ると彼は膝をついて彼女と視線を合わせる。ヴィーはどこか面白そうに彼の動向を見守った。

「フィー」

一心に宝石を見つめるフィーの名を呼び、宝石への興奮から上気した彼女の頬に両手を添えると、有無を言わず半ば強引にロイは目を合わせた。彼の長い銀の睫で縁取られた空色の瞳に、心ここにあらずといった風情のフィーを捉えようとする力が宿る。滅多に本気で人の目を引こうとしないロイが放つ色香に誰もが見とれた。しばらくの間、2人は見つめあった。

「綺麗な、アクアマリン」

そうしてようやくロイの目にフィーが焦点を合わせて咳く。

しかしまだどこか惚けたフィーの手が彼の目に伸ばされるのを、ロイはそつと掴んで止めた。

「僕だよ、フィー」

フィーはぱちりと瞬きすると彼を改めてじっと見つめた。

「ロイ、か？」

「そつ」

明るい鳶色の目に段々と理性が戻る。

「そつか・・・確か石を見ていて」

「王様、早くそれをしまつて」

「了解」

フィーが視線を戻す前に、さつと宝石箱の蓋を閉じてヴィーは荷物へとしまった。

「ああ!？」

フィーが無念そうな声を上げる。

「フィー、また見る時間もあるだろうから。今は、とりあえずお茶でも飲もうか」

「・・・わかった」

しぶしぶ彼女はロイの言葉に頷いた。

茶菓子の乗ったテーブルを囲み、立ったまま彼らはお茶することとなった。

シライが寝ている間に先に目を覚ましたレオナも含めて一通り自己紹介を終えていた彼らは、今回の事件についてシライとリュカが頭を下げる一幕以外に触れることはなく、気さくな王様を交えて一頻り雑談に興じながらしばらく何かを避けようとしていた。誰もがそれを避けられないと知っていながら。

しかし夜も更け、話題も尽きてくると、もはや目を背けられないのは明らかだった。

初めに核心に触れたのは、レオナだった。

「フィー、どこかに行ってしまうって本当？」

彼らが避けていたのは、その別れの確定。

「・・・ああ。準備は整ったから明日には発つ」

「そんな、急に・・・なぜ」

フィーは少し迷ったようだったが素直に告げた。

「私はまだ冠を作れない未熟な竜細工師としても奪われた冠を取り返さなければならぬ」

「どうしても？」

「どうしても」

強い意志を覗かせるフィーに、レオナは止められないのだと悟った。

「帰って、来るよね」

「当たり前じゃないか」

宥めるようにフィーは笑うが、ふとナンテスの真剣な目に捕まった。

「当然帰ってこないと許さないよ、フィー。私の大切な人を連れて行くのだからね」

「・・・は？」

ナンテスの大切な人といったら、ただ一人。

「フィー」

間違いなく怒っているので今朝以降できる限り顔を合わせるのを避けていた、その人の方を恐る恐る見やると、どこか穏やかな目にぶつかってフィーはどきりとする。

「僕も一緒に行くよ」

簡単なその言葉を解するのに、それが有り得ないことであるがためにやけに時間がかかった。

「・・・シライは、工房は!?!」  
フィーは思わず声を上げる。

「フィー。僕はナンテスさんのところで修行させてもらうことにしたんだ。だから心配しないで」

シライがどこか焦ったようなフィーに向かって微笑む。

「そんな。シライ、私のわがままの為に。そうなのか?公爵夫人の養子になるって言ったのも、ロイが私について来れるようにするために?どうして!?!」

フィーには分からなかった。ただ自分がシライを傷つける原因になったのかと思いついて悲しくなった。

「違うよ、フィー」

そんな、兄の想いもまだよく分かっていないだろう彼女に向かってゆるゆるとシライは首を振った。

「フィーのせいじゃない。僕はね・・・大好きな二人と一緒にいたいけれど何より二人と一緒にいてほしい。このままだと王様にフィーが持つてかれちゃいそうだし」

ちらりとシライがヴィーを眺めると、不敬を咎めもせずむしろ不敵に笑っていた。

「成程、あながち間違っちゃいないな」

「おい、ヴィー、冗談も大概に」

「僕の大切な兄弟で、僕も将来勤めるエルファンド工房の天才細工



師をおいそれと他人の手には委ねられません」

フィーの言葉をさえぎって、シライはロイによく似た微笑できっぱりと言った。

「ね、そんなわけだから。お兄ちゃん、がんばって」

「もちろん」

苦笑しながら、一枚上手の弟の頭をロイはそっと撫でた。

「シライ・・・」

「あのね、フィー。僕が公爵夫人と取引しようとしたときフィーが飛び込んできたときやつぱり、ってどこかで思った」

シライは笑う。

「僕が危ない目に会うときはなぜだかいつもフィーが助けにくれることになったもの、昔から・・・不思議だよ。本当に、今日は迷惑をかけてごめんね。でも、あの時僕をかばってくれて嬉しかった」

シライはフィーに抱きつくくと、慌ててそれを受け止めたフィーにしか聞こえない声でそっと言った。

「ありがとうお姉ちゃん」

## 閑話 6

「行っちゃったねえ…」

「うん」

レオナとリュカ、それに父は明日に備えて帰るというフィーたちを屋敷の入り口で見送った。ちなみに彼らは、侘びも兼ねて泊まるよう父に声をかけられたが断られた。王様もそう。彼は何も言わなかったがエルファンド工房に泊まるつもりだろう。ロイさんがそれを予期してかいやそうな顔をしていた。

そんな様子に苦笑しつつも、レオナは明日彼らを見送りに行く約束し、ナンテスさんもシライを明日から迎えるために工房に行くと言って別れた。

今夜は、またね、と言って別れられたけれど。

ふと寄せてくる感情に、レオナは首を振った。フィーたちがいな  
い間の工房を、職人の人たちとしっかり守っていくのだ。彼らが帰  
ってきたときに目を見張るくらい立派に回して見せる。私の大切な  
居場所なのだし。

居場所、か。

家族というのもいいものなのだ、とフィーとシライ、ロイを見ていて思う。彼ら自身お互いの全てを了解しているわけでは決してないだろうけれど、それぞれがそれぞれを愛おしく思いあう温かい感情が確かに彼らの間には漂っていて、すれ違うことが時にあるのだとしてもそれはとても尊いものだと分かった。

レオナの傍らには、彼女の父と、リュカがいる。毒から覚めたレオナは王様が助力してくれたことをメイドの一人から聞き驚いてすぐに礼を述べに行ったが、王様はそんなことはなんでもない、と言って彼女にとりあえず父の元へ行くように言った。

なんだろうと思って訪ねた先で父は淡々と、けれど初めて聞くほど饒舌にレオナに向かって彼女の母と彼の間の昔話を聞かせた。そうして最後に一度だけ彼は言った。

「すまなかつたな」  
と。いまさら、と思わないわけではなかったけれど。

レオナは彼の部屋を訪れた際一瞬心から安堵した父の姿を見たのだ。父のその表情はすぐに消えてしまったけれど、確かに。そのせいか自分で思っていたよりはるかに、素直に受け止めることができた。

私は確かに父の子供であり、母は父を愛し、父もまた母を愛したのだということ。

今なら、私も、歩み寄ることができるようだろうか。  
ここにいない義母も含めて、少しでも。

そんなふうを考え込むレオナは、少し俯いたために傍らの弟が、この屋敷からは少し見下ろす形になる街の灯をじっと見つめているのに気づいた。  
思わず微笑む。

「行ってみたい？」

「護衛をつけるか」

レオナがこっさり訪ねた言葉を耳にしたらしい父が、相変わらずの仏頂面で言った。それに驚いて彼女が顔を向けると父は目を逸らした。

リュカが目を白黒させている。確かにこれは天変地異だ。レオナは嘔出した。

しかしリュカはその幼い顔に思案気な表情を浮かべてなにやら考えていたようだったが、結局首を振ってこっ言った。

「…いつか、祭りの街にも、行ってみたい。でも今夜はみんなで、母上のところに行きませんか」

リュカの目に浮かぶひとつの思いを見て取って、レオナはかつての自分が母に向けた思いを思い出した。

義母は、少なくとも彼女の息子にこれだけ愛されていることに気づけたらいいと願う。

そうして彼らは、屋敷の中へと引き返した。そこは冬の近づく外よりやはり温かい。

私たちは、ひよつとしたら不器用なだけだったのかもしれないのだと思いながら、レオナは少しだけフィーたちのいなくなった寂しさが薄らいでいることに気がついた。

「なあナンテス」

なにやら王様と喧々譁々な様子のロイとヴィー、さらにはシライを横目に見ながら、フィーはナンテスに声をかけた。

「なんだい、フィー」

いつものんびりした調子で返事が返ってくる。

「なにがあつた？」

「なにがつて、常に嵐の目となりたがる君たちこそが起こした何かに哀れな道化師たる私は振り回されるだけだったけれど？」

「…なんか、いつになく棘を感じるな。お前とシライの間に何かあつたのかと聞いている」

シライからナンテスに何かを頼むということはまず考えられない。そこまで彼らは親しくない。何より自身とロイと離れることを最終的に後押しするかのような選択を、他でもないナンテスが下したことが彼女にはよく分からなかった。

「フィオーレンティーノ！共感というのは突然に起こるものだよ。仮にロイさんの弟であることを抜きにしたってちょっと見ていて切なくなってしまうくらいにいい子だ、それが起こりやすいのは分かるだろう。そして僕が彼に共感を抱いた要因は君が自分で気づくべきだ…渦中にある君があつさりと考えてるのを投げ出しにするのかい？」

「そんなこと言われてもな」

彼がシライに何らかの共感を抱いたのは事実かもしれないが、彼が彼である以上それがロイとかかわりがあるのは間違いない。そして彼は基本的にはロイのためになることしかしない。

「私に対してやけに過保護なロイがやたらに私を心配しているのを見ていられなくなった、とか？」

「…中途半端にあってるよ。まったく、何もかも私に言わせるのは酷というものだと思わないかい。誰にとっても恋とは難しく苦いもの、自分ばかり近道をしようとするのはいただけない。僕は僕の思うままに行動しただけだよ」

「そうなのか？」

そもそもなぜ万人にとつての恋の話が出てくるのか。解せない。

「君は」

ふと少し前を歩いていたナンテスがいつになく真剣な目をしてフイーを振り返ったので彼女は戸惑った。

「僕は君を、友人として大切に思っている。だからこれは忠告でもある。変なところでお節介で人を気にするくせに、一方で猪のように直行型の君は、誰より自分に向き合いがちだ。それは悪いとはいえないし生き方のひとつだとは思うよ。でもそれで周りの何かをたくさん見落としているのでないかい？」

フイーは、立ち止まる。どこかで似たようなことを言われたような。

「なんだかレオナみたいなことを言うな」

「おや、先人がいたか。そんなふうには、こんなふうには、君のために囁かれた言葉を願わくば君が後悔と共に思い出さないように願う。君の不幸は僕の愛する人の不幸でもあるからね」

ナンテスは微笑む。

「君は明日から、目的のために旅立つのだろう。けれど旅のさなか、その目的だけに決して捉われないことだ」

「万事に目を向けていたらそれこそ帰って来れないぞ」

「そうだけどね、路傍の花に目を向けることで足元をすくわれずに済むこともあるものさ。きつとたくさんの人に出会うだろう。羨ましいな、僕もロイさんについて行きたいくらいだけれど、僕はこれでもこの王都一の宝石店の跡継ぎだから。あるいはその中で君は、恋をするかもしれない」

「それはない」

「分からないよ？まあ、あのロイさんとあれほど傍にいてこんな風な君だとちよつと僕も確信は持てないけれど。目もかなり肥えてしまっているだろうし。ああ、ロイさん、貴女は月の女神のように」

「いやそれはいいから」

「・・・そう？」

ナンテスは残念そうだ。

「ああ。で？」

「ねえフィー、君自身の持つ感情は強制されるべきではないだろうけれど、君を想う人の気持ちを含んでみるんだ」

「もうほとんど同じこと言っし・・・」

フィーはがっくり頂垂れた。

「君を見てるともどかしいんだよ」

「いやがらせか。・・・でも、ナンテス、ありがと。まだよく分からないが分かった」

「・・・多少は通じたようで何より」

「シライをよろしくな」  
「ああ」

別れ道まで辿り着くと、ナンテスは手を振ってふわふわとした足取りで器用に人ごみを抜けていった。

都は明日から日常へと帰っていく。その変化への予兆を抱えながら今夜はそれぞれに祭りの最後の日を噛み締めているような気配があった。

明日にはここを発つのがだからと当分見納めになる町並みを、フィーは黙って眺めていたが唐突に王様はその静けさを破った。

「フィー、こいつらとは話にならない」

まだやっていたのか。王様はにやりと笑った。

「そうだ、お前の部屋に泊めてくれないか」

「…床なら」

「床か、妥協しよう」

「私の部屋の床は特別固いが」

「構わない」

「そうか」

適当に相槌を打つフィーにロイがきつぱり首を振った。

「いや、駄目だから」

「部屋の主がいいと言っているじゃないか」

「僕が家主。もういい、客室を使って」

「やれやれ、ようやく許可がでたか」



ロイはため息をついた。

「フィー何話してたの、ナンテスと」

「説教のような。よく分からん」

「分からないって、フィー」

呆れたロイの横で、シライが目を見張った。

「どうした、シライ」

「工房から声がする。なんだろう」

「ええ!?!」

まだ少し工房は先のほうにあっただが、シライは特別耳がいい。

何事かと顔色を変えて彼らが急いで工房に向かうと、辿り着いた先で彼らは職人たちがずらりと食卓を囲んでいるのに出会った。

「遅かったな」

「一応連絡を差し上げたはずですが」

ロイが頭をかしげる。

「ああ、確かに。でもシライも心配だったし。大丈夫そうだね?」

工房の年長者に声をかけられて、シライは、

「ご心配おかけしました、ごめんなさい。もう平気です」と頭を下げた。

「無事ならそれで良かったよ」

「まったく心配させやがって」

それを工房の人々が取り囲んで肩をたたいたり撫で回したりしている。一通りそれが済むと、彼らを代表するように最年長の老人がフィーのところに来て来た。

「…言うことがあるだろう」

「…はい」

そうして全てを話し終えたとき、俯いているフィーを老人の手がそっと叩いた。

「よう分かった。ロイは」

ロイは、老人の目をまっすぐ見ていった。

「僕も一緒に、行きます」

「ぼくはナンテスさんのところに勉強に行くよ」  
シライも続く。

「まったくこの兄弟ときたら」

老人はやれやれと首を振った。

「帰ってくるな？」

「もちろん」

声を揃えて答えると、老人は笑った。

「全員ちゃんと勉強して成長して来い、景気づけしてやるっ」

その言葉と、掲げられた酒瓶にフィーは目を見開いた。責めるのではなく、力づけるように笑う面々が集った食卓には彼らが持ち寄ったらしい豪華な食事が並んでいる。

「知って・・・待っていたのか」

「そうだ喜べ。そして今夜は徹夜だ分かったか」

「はなむけだ」

「死出の旅にならんようにな」

「爺さん縁起の悪いこと言つなよ」

「こないきなりどこぞへ行く意趣返しじゃ」

「酔ってるよな…既に」

「ありがとう」

必ずここに帰ってこようと。フィーは、そう思った。

泊まらせるとロイにたかっていたくせに、フィーがいつの間にかあつさり消えていたのにフィーは気づかなかった。

ひよい、とフィーが体に馴染んだ匂いのする暖簾をくぐる。そこで一人テーブルを拭いている、熊のような風貌の隻腕の男は現れた。フィーを見やって笑う。

「本日は営業終了いたしましたが馬鹿息子」

「それは残念だな、帰るか」

あつさりと踵を返そうとすると彼の父にがしりと掴まれてフィーは止まる。

「まあ待て、どうどう・・・なんかあったか」

「泊めてほしい」

父は呆れた顔をした。

「もとよりお前の家だ、好きにしろ」

「そうする」

苦笑する。フィーたちの中に割り込むのも考えものだったので、工房を出てどこか適当な場所で夜を明かすつもりだったのに、足を向けた先は思いがけず彼の生家。朝まで時間ができたからなんとなく父の顔を見ておきたくなったというのもあったのかもしれない。彼の父は想像に違わず相変わらずだった。

翌朝。

「で、どうした」

「…ちよっと旅に出てくるからそれだけ伝えようかと思ってな」

いきなりの言葉にも、彼の父は動じる素振りもなかった。何か納得したようにあっさりと言った。

「そうか、わかった。気張って来い」

何があったのかとかどこに行くのかとか少しは尋ねてほしいような気もした。仮にも一国の王でしかも息子に対してとんだ放任主義だ。しかし父らしい。

「行って来る」

「帰って来いよ」

「ああ」

一国の王となっても、その中で城でなく帰る家がある。それは稀有なことなのかもしれない。そんなことをヴィーは思いながら、久しぶりに訪ねた懐かしい酒場を後にした。

さてフィーたちはあの調子で今日発てるのかとふと彼は不安になった。

## 68・旅立ち

開いた窓から忍び込む冷たい風に目が覚めた。

まだ辺りは、暗い。日はいまだ昇らない早朝の澄んだ空気の中で、銀の髪を払うようにして青年は伸びをした。

一人椅子から立ち上がって、ロイは周りを見回して笑った。宴の後の食卓の惨状つたらない。

積み重なっている空っぽになった皿、倒れた杯、その中を縫うようにして幸福そうな安穩とした寝息を立てる人々。床に倒れ臥している者もいる。風邪をひかないといいけれど、と思いつながら、彼はいったん家の奥まで行って毛布を持ってきて一人ひとりにかけてやった。

昨晩は徹夜するといいいながら結局皆酔いつぶれて、そのまま眠ってしまった。

ただ楽しさだけ残るように別れを惜しんでいた。

皆、どこかで知っているのだろう。冗談でなく、もう会えないのかもしれない。そうでなければこんなに大仰に集って馬鹿騒ぎしたりしない。旅に出て帰ってこないものなど、五万という。それを皆良く知っていた。

ロイは彼に並んで座っていた、未だ寝こけているフィーとシライに毛布をかけると、旅の準備を早々済ませなければならぬのを頭では分かっているながら彼も座って、二人を見つめた。

フィーと共に行く旅が、危険を孕む少々長いものなることを、彼だって分かっている。もしシライに預かり先がなかったのなら口

イはやはりこの旅に踏み切れなかったろう。万一帰れなかったらシライは天涯孤独の身になってしまふ。けれどフィーへのロイの想いも随分前から知っていてよく応援してしてくれたこの弟は、そうしてロイが足を踏みとどまらせることを嫌った。昨日のようなことを起こすほどに彼を追い込ませていたのに気づかなかった自分を心底呪わしく思う。シライが邪魔と思ったことは一度としてない。小さなシライの髪をすきながら、弟への罪悪感と、感謝と愛おしさから、ロイは目を瞑る。必ず帰ろうと誓う。

彼はこの人の気持ちに聡すぎる優しく幼い弟を、愛していた。それは彼の想い人であるフィーに対して同じくらい強く、比較のできない類の感情で。同じ血を身内に潜ませながらも彼と弟は全く違う存在であっても、今や唯一血の繋がった大切な家族だった。

だから、この弟を一人置いていくことなど彼には考えられなかった。王とフィーが旅に出ることを竜が告げた時もそう思った。

しかし、今回は違った。状況が違う。術力も魔力も目覚めさせた稀有な存在となった未だ魔法使いとしても術師としても未熟なフィーが一人であてどなく魔法認知国家を彷徨い、末にはあの魔法使いや闇と一人で対峙するなど無謀という他ない。しかし彼女は彼の言葉を頑として聞き入れなかった。

フィーが命がけでたった一人どこかに行こうとするとなったとき、それに伴えないことは彼にとって身を裂くような苦痛だった。止めようにも彼には彼女の思考も体も拘束できない。それは縛られるのを嫌うフィーを殺すことと大差ない。説得すら早々拒絶されて、感じたのは絶望だった。彼女を喪うことはとてもではないが耐えられない。かといってどうしたらいいのか、手がなかった。どうしたらいいか分からなかった。ともかく止めなければと思うのに彼女の意思を前に無力だった。

そんな中、王が彼女についていくことを彼女が承諾した時に居合わせて、安堵より先に感じたのは嫉妬だった。何かしら事情があったにせよ国すら置いて彼女をあつさりと選べた、彼女を守りうる王への嫉妬。そして彼の申し出を受諾したフィーの態度への動揺があった。彼女が、手元からすり抜けて遠くへ行ってしまうような不安も。

と、シライの横でフィーが身じろぎした。

「ふああ、おはよう」

「…おはよう、よく眠れた？」

「寝苦しかった…。まだ眠い」

フィーはぼんやりと辺りを見回した。彼女はまだ生きてそこにいる。自分の近くに。それが嬉しいと、ロイは素直に思う。

「夜も明けてなきや、当然か。相変わらずロイは早起きだな」

「準備もあるからね」

まだうとうととしていたのフィーは、その言葉に目を覚ましたようだった。

「ロイ。昨日の、話だけど…いいのか、私なんかについて来て」

「君が許すなら」

シライ越しに肘を突いたロイが微笑むと、フィーは真顔でそれを受けた。

「なぜ？待っていてくれれば時間はかかるだろうけど、必ず冠を取り返して戻ってきて見せる。一応ヴィーもいるからたぶん死なないと



思う。心配しなくていい」

「二人旅のほうがいい？フィーが女性だってあの人は知ってるんだよ？」

「いや、そういうわけじゃないけど…あいつに手を出されることもまずないと思うし」

「それは信頼？」

「いや、勘」

それに苦笑すると彼は言った。

「…鈍感。無防備。無鉄砲」

「なんだよ失礼な」

「見てられない。王様には君は荷が勝ちすぎると思うけど？」

彼がにっこりと笑うと、対する少女は顔を顰めた。

「そんな君の傍に居たい。駄目？」

フィーは、それ以上彼に問わず、ほんの少しだけ赤くなった顔を逸らすと、

「もういい、分かった…ありがとう」

と呟いた。

「シライを頼みます」

「おう、シライなら大歓迎だ」

「任せてください」

「ナンテス…感謝してる」

ナンテスはロイの言葉に静かに目を細めた。

「あなたのお役に立てたのなら何よりです」

工房の前には、小さな人ばかりができていた。

シライの頭をわしわし撫でながら頼もしく笑うナンテスの親父さんと、ナンテスの姿に思わずロイはほっとする。夜も明けた頃、旅立つ彼らを工房の関係者がやって来て見送ってくれることとなった。中にはレオナもいて、フィーと何か言葉を交わした後彼女に何か手渡していた。

いよいよ発ち際に、シライが静かに言った。

「二人とも気をつけてね」

こんな時でも笑うシライを、ロイは抱きしめた。

「必ず、帰るから」

「うん。絶対だよ」

「ああ」

フィーがシライに、

「ありがとう」

とほそつと言つとシライは、微笑んで頷くと二人に向かい、  
「いってらっしゃい」

と言った。それに彼らは答える。

こうして二人は手を振りながらエルファンド工房の皆にしばしの別れを告げて、いよいよ旅立つこととなったのである。

王都を囲う外壁の門まで行くと、付近に佇む黒髪碧眼の男がいた。気配を押し殺すのがうまい彼は、ただでさえ薄まっているその気配の上にくすんだ色のフードを被っていたのでフィーがそうと意識して探さなければ見つけれなかっただろう。相変わらずの無骨な大剣を佩び、どこか泰然とした様子で近づいてきたフィーたちを迎えた。海のように青い目と目が合うと彼は口元を下げて不機嫌そうな顔をした。

「俺を待たせるとはいい度胸だ」

「悪い」

素直に謝ると、ヴィーは笑った。

「冗談。俺もさっき来たところだ。…別れは済んだか」

「ああ」

「それは良かった」

つい、とヴィーはロイへと顔を向けた。

「で、そのきらきらした目立つ男もやはりついて来るという訳か…邪魔な」

「身分そのものに問題ある一国の王様よりは気軽な存在なんだけど

ね。なんならこの髪を切って染めようか？」

「髪もだが顔がなあ。変形させるのはどうだろう」

「褒められたと喜ぶべきかな」

初めから険悪そうな様子に、フィーは溜息をついた。

「…あんたら、置いてくぞ」

「では行くか」

「そうだね」

途端、どこか息の揃った様子を見せる二人に苦笑する。もとより一人旅を覚悟していたが賑やかな旅になりそうだ。

…ふと、何かを忘れているような気がしたが、思い出せないのだから、たいしたことはないだろうと彼女は思う。二人の青年を連れて、曙光にその薄茶色の髪を金に輝かせながら少女は王都の門を久しぶりに潜った。

## 69. どこかで交わされる会話

少女は逃げていた。

随分長いこと駆けて、もう息はとづくに上がり、喉で血の味がして足はもつれたけれど彼女はそれでも足掻こうと走るのを止めなかった。

何も無い空っぽの白い空間で少女の背後から黒くそれを埋め尽くさんとする、まるで意思を持つかのようにのたうつ闇がそんな少女をあざ笑うように彼女との距離を着実に詰める。

「い、や。来ないで!!--」

少女は悲鳴を上げた。

とうとう彼女に追いついた闇が蠢いて、彼女を足元から捕らえて引き倒した。

「いやああああああああああ!!--」

絶望の叫びを上げる青い服の少女を、虚無の闇は飲み込んだ。

「ギル!?!」

掴まれて揺さぶられる。

少女は目を覚ました。目の前には、切迫したような色を浮かべた緑の瞳。汗だくになって未だに緩く痙攣する体を、しっかりと掴む

青年の手に掴まれた肩が少し痛かった。

「夢…」

ようやく、ずっと話していなかったように掠れた声で少女は呟く。

「怖い、夢を見たの？」

赤髪の青年が、彼女の肩を掴む手はずしてゆっくりと彼女の薄茶の髪を宥めるようにすきながら問う言葉に、頷いた。

真つ黒な闇に囚われる夢を見た。少女を抗う術無く埋め尽くし、飲み込み、彼女を彼女自身とは異質なものに変える闇。

「どんな夢を見たの」

少女は首を振ってそれに答えはしなかった。

意識がはつきりしてくれば何のことはない、闇は彼女自身だ。なぜ、それを異物のように怖がる必要があるだろう。少女は首を傾げた。

「ごめんなさい、私どれくらい寝ていた？」

「ずっと。目を覚まさないかと思った。傷が塞がらないからギルが死んじゃうかと思ってオレが死ぬかと思ったよ…」

「傷は塞がったわ」

腹に手を添えると、もうそこには滑らかな肌しかないと自分で分かった。彼女を蝕む闇は彼女の存在を生かす。先ほど見た夢は、闇が彼女にあいた穴を補ったことを暗示しているに過ぎないだろうと少女は思った。

「本当に！？良かった…」

いつものふざけた調子が無い彼の声はただ真摯で少女は申し訳なく思った。きつとひどく心配をさせたのだろう。

同時に不思議にも思う。

なぜこれほどまでに彼が、少女のような気味の悪い人と呼べるかも分からない存在を気にかけてくれるのか。いつでも切り捨ててくれていいように素っ気無く応じても彼の態度が変わることは無く、やはり少女は不思議だった。

「なぜ」

「なあに？」

少女に甘えるような声。彼女と違う澄んだ瞳。少女は言葉を飲み込んだ。今聞けば『本当のこと』を答えてくれるかもしれない。けれどそれは、互いを縛ることになるような予感があった。

「…なんでも、ない。あの後、どうなったの」

チットは顔を顰めて、少女の頭に冠を載せながら偽の石を掴まされた事を教えてくれた。5つの石が一つのところに集まったことで目的は達成されたと見たのか、古文書ももうその存在を告げなくなつたことも。十中八九王様が持っているだろうが…

「隕石落としてきちゃつたからねえ」

チットにもそれなりに大きな負担がかかっていたらしい。長距離の移動魔法もまた、大きな力を使う。何せ国境をいくつか越えてきたのだから。追っ手を撒くためのその行為は、石も冠も奪いおおせたなら彼の損失よりも利のほうが大きかったが石の取り間違いのために逆効果となつた。

すまなさそうに彼は謝った。

「当分はいろいろ無理。ごめんね」

「私が刺されなければ」

少女の言葉をチツトは苦笑してさえぎった。

「ギルは謝んなくていいよ。オレがふがないんだよねー。爪が甘  
いって言うかあ」

いつもの彼の口調が戻っている。けれど彼の顔色も決して良くは  
無い。そのことに、少女の胸が微かに痛んだ。

「…どうでしょうか、オレの女王様？」

ふざけたように問いかける彼に、ギルは思案をめぐらせた。もし、  
あの王が生きているならば『鍵』を求めて旅を始めただろう。

しかしこちらに『扉』たる冠はある。  
ならば。

ギルは口を開いた。

「ゼダ、奴は？」

「生きておられました」

またも人間と契約など下らないことをして、という言葉をやゼダは  
飲み込んだ。目の前の男が気にするのは彼の金の魔である兄の生死  
のみ。他は目の前の男にとって些末なことに過ぎない。

「そうか」



玉座の男の表情は相変わらず読めないもので、ゼダは齒噛みした。その椅子は高く、遠い。あらゆる意味で遠い。

「ご苦労。お前は今まで通りに準備を続ける」  
「は」

ゼダはけれど、ただ跪き従うことしかできない。

「もうすぐ心待ちにした戦争だ」

王たるその男は珍しくも笑っているように感じられた。

「花をください」  
「…ご覧のとおり武器屋に改装したる」

老女はやって来た男を面倒そうに見やった。

「冗談ですよ。久しぶりですね、ネリー。相変わらず勘のいいことで」

「なんのことだか」  
「平和な時には花屋、戦時には武器屋。時代が訪れる前に兆候を読み取って貴女は動く」  
「先を見ないと儲からないからね」

老女は遠い目をした。月が赤い。時代は動き始めるだろう。

「賢者つて無欲なものとはかり私は思っていましたけれど」

「強欲じゃなきゃあ、こんなに生きとらんだらうよ」

「どうせなら皺を増やすことなく時を止めればよかったのに」

老女が良く知る、彼女自身少女であった遙か昔から変わらない、少年のような目をした男は笑う。腹立たしいその調子も相変わらずだ。

「やかましい。買い物する気が無いなら帰っておくれ」

「冷たい…本当に久しぶりなのに。貴女にとって私は客以上の存在なはずでしょう」

しくしくと男は泣いた。どこその乙女なら心動かされるであろう美貌の涙にも、うざったいとしか老女には思えなかった。

「いや、私にとって客以上の人間なんて居やしないよ。ほらさっさと出て行った」

「買います、買えばいいんでしょう。じゃあこれください」

無造作に引つつかんだ剣を、拗ねたように男は老女に差し出した。

「目は腐ってないみたいだねえ」

かの精霊王国の初代英雄王が手にした剣。

その模造品である品は英雄王にあこがれる人々のために腐るほどこの店にあるのに、男はあっさりその中から本物を取った。

「当たり前ですよ」

男は微笑む。彼が間違えるはずは確かにない。老女も、知っては

いた。

「でもそれは非売品だ」

「…もともと私のじゃないですかこれ」

不満そうに言う男に老女は首を振った。

「あんたが畑買うからって言って私に売りつけたんだから、買った私を持ち主さね。だからどうするかは私の勝手だ」

「そんなあ。鍬でこれからの時代を私に乗り切れというんですか！？」

「…売らないよ。やる。さっさと持ってでていきな」

「ネリー…！」

感極まったといわんばかりに抱きつこうとする男を老女はいなし  
た。

「抱きついたら殺してやる」

「この美青年の抱擁を拒むのは貴女くらいのものです」

老女にかまわず青年は結局抱きついた。振り払おうとして、しかし思い直したように老女はまるで年を取らない青年の背をぽんぽんと叩いた。相変わらず彼の体は人にしてはやけに冷たい。…けれど人と違う感情の起伏を持っているわけでは決して無い。

「…行くのかい？」

「守れるものは、守りたいんです。その力があるから」

「今まで傍観していたくせに」

「世の中それでもどうにかなってきたじゃないですか。イオナイアにしたってまた『英雄』が現れたって言うし。でも今度は、誰の手

にも余る。私すら止められないかもしれない」

「あなたの力は大きすぎる」

「そうですね」

「あなたはまた傷つくぞ」

「…そうですね」

男は老女から体を離して微笑んだ。

「でも行きます。剣をありがとう」

「無茶をするな」

「私を心配してくれるのは昔から貴女くらいのものでしたね。大丈夫、とりあえずどこかの国の傭兵にでも適当になってしばらくは様子を見ようと思います」

「そうか。…また、花を買いに来い」

その言葉に、一瞬眩しそうな顔をして青年は老女を見た。何かを思い出すように。

「ええ、ぜひ」

青年はそう答えて出て行った。

「また、繰り返すのかねえ…」

あの時と同じことがおきるのか。

世界は一体あと何度この大きな変動に耐えられるのだろう。そう思いながら、老女は青年の出て行った扉を、しばらく見つめていた。

## 70・雪の降る村

その小さな村に、雪はちらちらと降っていた。

ここ一週間は今年初めての雪が全てを覆い尽くす勢いで降っていたので、今日という日は村の住民にとってようやく訪れた穏やかな日である。

真つ白な大地には子供たちが勇んで作った手袋と帽子をはめた愉快な顔つきの雪だるまや雪うさぎがあちこちに点在していて人々の心を和ませた。

この村の名はリルク。イオナイア国の領海を除いて陸地上では最北に位置する王都から南へ下った、国のほぼ中心にあるこの村には、つい最近終わった収穫祭で王都に訪れていた他国からの旅人たちが数多く滞在していてなかなか賑やかだった。中には芸人一座などもおり、ここ数日村の酒場は雪で動けない旅人たちの歌と踊りの喧騒が絶えることがない。

「セネカー、遊ぼうよー」

「やだよ」

一人の少年と少女が、村のはずれにいた。少年に誘われた少女はかかった声にべ、と舌を出した。10歳くらいの可愛らしいこの少女の手には、使い込まれた木刀が握られている。

「今日はようやく稽古ができそうなんだから！」

「素振りばつかしても意味ないっての」

「うるさい！ともかく今日は遊ばない」

「セネカのけち。女が英雄王みたいになれるもんか。お前が英雄王

と同じのはその真っ黒な髪の毛ぐらいなもんだろ。さっさと諦めればー？」

木刀を持って襲い掛かる少女をいなしながら、捨て台詞を吐いて少年は去っていった。少女は追いかけることなく、いつもどおり村はずれの木の元で素振りを開始した。

強くなりたい。闇の時代に親友の女の子を亡くした少女の切なる願いだった。夢は、あの忌まわしい闇から国を救ったかの英雄王のようになって、もう目の前で誰かを喪うことのない強い剣士になることだった。けれど農業と旅人に宿を提供することで生活を営む村には彼女に剣を教えてくれる人などあろうはずもなく、少女にはただがむしゃらに体力をつけるための走りこみと腕力をつけるための素振りくらいしかできそうなことはなかった。けれど何もしないよりは、ました。少女の心情を知っている親は、彼女が幼い今くらいなら、と見逃してくれていた。彼らは村でも比較的大きな宿を経営しているために余裕があったことも大きいだろう。村の大半は白い目で彼女を見ていたけれど。親だってセネカが年頃になれば何と分かからない。

将来のことは考えたって、しょうがない。

考え出して手が止まっていたことに気づいたセネカは、首を振って素振りを再開しようとした。しかし。

「…あの。ここ、リルクであってるかな？」

自分に向けて発せられた穏やかな声に、セネカは振り向いて絶句した。

そこにいたのは滅多に見ない、美しい人だった。一つに束ねられ

た髪はイオナイアではよく見かけるくすんだ金ではあつたけれど、その顔の造形を見たものはきつと老若男女問わずにセネカと同様言葉を失うだろう。神が自ら無垢の大理石に彫り込んだのではないかと思われるほど、白くすつと整った鼻梁、桜色の薄い唇。極めつけは天空をそのままに固めた宝石をはめ込んだような、水色の瞳。

村人は勿論、垢抜けた様子はこの村に訪れる旅人だってこれほどまでに衝撃的に美しくはない。

「あの？」

見とれて固まった少女に問い直す言葉は優しい。

「ここは、リルクですけど。あなたはまさか女神さまですか？」

「ぶ」

セネカが思いきって言った言葉に噴出す者がいた。

「髪の色を変えたくらいでは駄目みたいだな、ロイ」

「笑わないでくれるかな、お…ヴィー。でも道中は目立たなかったし」

「遠目だったからじゃないか？」

「フィーまで…」

あまりに美しい人間に目を奪われて気づかなかったが、ロイと呼ばれた人には二人の連れがいた。

フィーというらしい一人は薄い茶色の髪ととび色の生き生きとした大きな目をした少年。背の高さは平均的だが、随分細身で、どこか凜とした目を引く風貌だ。ロイという人物ほどではないけれど。首にある竜の紋様がなかなか格好良くて、何の職の紋だろうとセネカ

は思った。

そしてもう一人。ヴィーと呼ばれていた男性に目をやって、セネカは再び絶句した。

「…ほら見る、ヴィーも人をこんな風にする。まったく、お前たちは二人揃って目を引きすぎる。やはり一人旅のほうが問題なく動ける気がしてきた」

「俺を見捨てようとはいいい度胸だ、フィー」

「なんなら僕は幻術を上掛けにするけど、この人はいつそ置いていこうか？」

「あの！」

なにやらセネカをそっちのけにして言い合っている3人に声をかけると、フィーという人が一番に気づいてセネカに向けて首をかしげた。

「なんでしょう、可愛らしいお嬢さん？」

笑顔と共に言われたその言葉に少し紅潮しつつも、セネカは尋ねた。

「あの、そちらの黒い髪の人って国王様、ですか」

「そ」

何かを言いかけた茶髪の少年の口を、その両脇から伸びてきた手がほぼ同時に塞いで少年は口ごもった。苦しそうだ。

「いや。なぜ？」

黒髪の人がその艶やかな青い目を向けて問うので、セネカは答えた。

「あ、その国王様の絵姿をこの間のお祭りに行って実際に王様を見たという絵師が描いてるのを見て、あなたはそっくりで」



よく見ると男性と分かるロイという人同様、束ねられているもののさらさらと流れる黒い髪、海のように青く輝く目。女神のようなロイという人物と並んでも引けをとらない、けれどもっと硬質で精悍な美貌。しなやかに鍛えられているのが纏う黒衣の上からでも分かる。佩びられた剣は使い込まれていて、いつか見た貴族がしていたような飾り物でないのが分かった。彼は顔を顰めてセネカに答えた。

「俺は似ているだけの別人だ。世界には同じ顔の人間が何人かいるって言うだろう？本物の王は玉座に行儀悪く腰掛けて仕事もせず部下を楽しそうにいびってるだろうよ。あれと一緒にされるのは屈辱だ」

「…容易に想像できるが、お前は人のこといえないと思うけど」  
なにやら呆れたようにようやく開放された少年が呟いたが、セネカはそれどころではなかった。

「国王を馬鹿にしないでください！」

セネカの怒りを孕んだ大きな声に、黒髪の人は目を見開いた。

「わたしがあなたを王様と間違えてしまったのは、ごめんなさい。  
でも、王は…王様は偉大な人です」

木刀を握る手に力が籠る。どんなに頑張ったって願ったって、セネカができなかった闇を払うという偉業をなした彼女の憧れを販されることは我慢ならない。

「あの人は、国を救った人です。この村の人だって、あの闇に何人も殺された。怖かった…その日々を、終わらせてくれた人です。み

んな感謝してる。わたしたちに夜を返してくれた人です。今だってお城に縛られて、国を守り続けてる英雄を誰もこの国の人は貶してはいけないはずですよ」

唇を噛み締めるセネカは、自分の言うことが押し付けがましいことだとは思ったけれど、間違っていないと信じた。だから撤回するものかと、きつ、と自分よりも高くから見下ろしてくる憧れの人の絵姿そっくりの青い目を睨みつけると、存外その目に浮かぶ感情が柔らかなことに気づいて驚いた。

「…悪かった」

その人は笑うと、くしゃりとセネカの頭を撫でた。セネカはその大きな手の感触に大いに照れた。

「わ、私がぶしつけなことを」

「構わない。国王は、果報者だな。君みたいな人間がいるなら守り甲斐があるだろう。先ほど君は英雄が城に縛られているといったが、結構気ままに生きてるみたいだから心配は要らない」

「あなたは王様を、知っているのですか」

「まあな」

「お、お話を聴きたいですよ！」

セネカは顔を上げた。

「私、宿屋の娘なんです、ぜひうちに泊まってください！！」

3人は、セネカの様子に顔を見合わせると、苦笑して頷いた。

「よろしく」

「あいにく一部屋しか空いていませんが」

「それで構わないよ。どうやらどこも満員らしいし」

「そうですね。申し訳ない…まけてる銀にしときます」

「本当に安いな。ありがとう、助かるよ」

フィーはさつさと言われたように銀払うと、ロイのところに戻った。少女に連れられてきた宿屋は村一番という少女の言葉どおり、どっしり落ち着いた雪に負けない石造りの、なかなか豪華な宿だった。

「ヴィーは？」

「捕まってる。あの子に随分懐かれたみたいだね」

ロイの視線を追うと、なるほど、ヴィーの話にわくわくした様子の少女の姿が宿屋の隅にあった。どうやら本人から聞いた話として闇の跋扈を払った時の話をしているらしいが、彼以上の話し手は文字通りいないだろう。何せ本人だ。詩人よりも実際に起こった状況もその時生じた感情も把握しているのだから。

「かわいい子だ。剣だこが痛々しかったけれど」

まあ、フィーも細工を作るうえで鍛えられた固い手をしているので人のことは言えないのだが。

「…王様を擁護する時の顔を見ても、なにか、あったんだろうね。」

あの子が剣を使わずにすむ一生を送って欲しい」

「そうだな」

出来る限り、そうあってほしい。

「で、部屋は取れたの？」

「ああ」

「何部屋？」

「一部屋」

簡潔に答えると、ロイはがくりと肩を落とした。常人なら情けなく見えそうなそういう姿さえそこそこ様になるとは美形は得なものだ。そんなことをフィーは思った。しかしどうしたというのか。

「フィー……」

「なんだ？」

「もういい、なんでもない。そうだね、一部屋のほうがある意味君が何かをしてかさないように見張っていられるかもしれない」

「なんだ人を危険人物のように」

「自覚がないのが僕としては一番怖い」

ロイはなぜだか苦い顔を見ると、寒いしとりあえず部屋に行こうか、と階段を上り始めた。

部屋に着いて荷物を置くと、ようやく人心地ついた。なにせ、王都を出て以来こうしたしっかりとした宿に泊まるのは初めてだ。

「うわあ、ベッド……」

「フィー、とりあえずまだ眠らないでね。せめて夕飯を食べてからにして」

「まだそれまで随分時間あるじゃないか……」

「そこにいると確実に寝るからこっちにおいで」

ロイの言うことももっともなので渋々起き上がると、ロイの水色の目が笑った。

「すごい目してるよ、フィー」

「…女神様と比べたら仕方ないだろう？」

「怒るよ？」

やはり気にしていたらしい。幻術で一番目立つ、この国では珍しい銀の髪を隠してなお美しいロイは人の目を引くことが基本的に嫌いだ。

「悪い。で、なんで寝ちゃいけないんだ」

フィーがあっさり謝って尋ねると、ロイは地図を広げた。

「針路を決めようかと思つて。僕たち今南に向かつてるでしょう」「そうだな」

話し合いの結果、フィーはとつと魔法国に行きたかったが、王様が今術力をうまく扱えずフィー自身の力が未熟なこともあり、それを道中回復し鍛えつつ王様の目的を最初は優先することになった。5つの涙を鍵にするにはそれぞれの石に冠せられた名を持つ精霊に会わなければならない。精霊の頂点である竜がおり、かつ数多くの精霊が暮らす豊かな国イオナイアであったが、実際のそれぞれの属性の精霊を司る長とされる精霊は国外を住処としている。よってフィーたちはいずれにせよこの国の外に出る必要があった。

土のノームは東、水のウンディーネは西、火のサラマンダーは南、風のシルフは北。

それぞれの居場所においては、国を挙げて神として精霊を崇める精霊国もあれば、少数民族に祀られている場合もある。

イオナイアは、東西を険しい山脈に囲まれている。冬に入り、雪の影響で山脈を越えるのは現状、面倒だ。

ではフィーたちが最初に目指すのは進むのは南か北がいいだろうということになる。

北のシルフを祭るのは精霊国であったが、海を挟んだ孤島にあるその国は風の精霊によって守られ、複雑な海流は人を拒むと有名だとなると残りは南。こちらは古くからイオナイアと友好を結ぶ隣接した精霊国である火の国アウエンが統治しており、しかもサラマンダーの住処の火山がある。イオナイアとアウエンは、長年築いた関係から国境を越えるのにそれほど面倒な制限を設けていないのも決定的だった。

そんなわけでフィーたちは南を目指している。

「今の時期にこの村でどれくらい食料を得られるかによるけど、まっすぐ南を目指すと同境まで町も村もないからちよっと迂回しなきゃね」

「狩をするにもその辺の草を食べるにも、冬でなんもないしな。どこかによらなきゃ飢え死にって訳か」

「そう。で次にどこを目指そうかと思って」

「そうだなあ。食べ物がつまいとこがいい」

「フィー…」

「冗談」

とりあえず今まではこの村、リルクを目指してきた。ラエルの力が行き届いているのを証明するかのように道中特に問題も起こっていない。…ラエル？

「しまったな」

「どうしたの？」

「ラエルに、国を出る前に一度会いに来てって言われてた」

「…無視してよかったんじゃない？」

「いや。なんか、嫌な予感がする」

魔の不敵な笑みを思い出す。

ばたばたと半ば衝動のままに出てきたが、あの魔に聞くべきこともいくつかなかったとも言いきれない。ロイとヴィーという恐ろしい指導者の元再び術力の訓練を始め、魔力の制御もこっそり勉強しているフィーの身としては気になることもある。

「呼んだか」

「うわ！」

突如としてフィーの背後に現れた豪華な服をまとった男は、黒髪碧眼のこの国の王。の、偽者だ。

「ラエル!？」

フィーが驚きのままに叫ぶと、魔はにやりと笑って本性の金の魔の姿をとった。金の髪と瞳、滑らかな黒い肌。ヴィーが好む黒衣にそれは良く映えた。

「それが本来の姿かい？随分派手だな」

「貴様に言われる覚えはない。おや、髪の色を変えたか。無駄な足掻きを」

ラエルはまるで初めからここにいたふうになささとくつろいでいる。フィーの頭にずしりと押し掛かって。

「…重い」

「とりあえずフィーの頭にのせた汚い腕を放したらどうだ？」

「主への仕置きだ、口を出すな」

ラエルは口の端を上げた。本当に重い。まだ猫になってくれたほうがいい。

「顔を出せと言つた。無視してくれおつて。この主ときたら」

かなりご立腹らしい様子に、うっかり約束を忘れたフィーは反省した。…少しは。

「それは悪かった」

「本当に反省しているのか、主？」

まあ、そのことに対しては後ほど処罰してくれよう。…それよりこの村、妙な気配があるぞ？」

そうラエルが言った後。階下から物が壊れる音と悲鳴が鳴り響いた。

「そういえば例の男は今術力が使いこなせないのではなかったか。面白いことになりそうだな」

ラエルの言葉がのんきに響いた。



## 71・闇の襲来

ラエルの言葉から事態をなんとなく察してロイと二人で走って階下に向かった。辿り着いた先の宿の入り口もあるその一室の中は、予想したより遥かに恐慌状態に陥っているのに、いやに静かで、そして、

「…暗い」

部屋は真つ暗だった。

室内の灯火が灯っているはずなのにそこに光はなく、ひたすらに黒い闇がただただ広がっていた。

屍鬼が現れたに違いない。

そのことはわざわざラエルが術力について触れた時点で分かっていたことだったが、闇を構成する中心にあったのは彼らが思い描いた獣の姿ではなかった。

一番闇の深いところにあるのは、一人の少女の形。

「ギ、」

言いかけてフィーは止まった。暗闇に目が慣れると、少女は薄い金の髪と灰緑の瞳をしており、ギルと呼ばれた少女とはまったくの別人だったからだ。それにヴィーが好きだった少女と瓜二つのあの女性に比べて、この娘はまだ、幼い。

幼いその少女の足元で、薔薇の棘つきの蔓のようなものが床からまるで生えるように気味悪くのたうっていた。それが収束して這う

先に、魂を抜かれたようにその少女に見入るこの宿屋に連れてきてくれたセネカと名乗った少女と、彼女を蔓から庇うようにして剣を掲げる青年がいた。ヴィーだ。彼の剣は着実に闇を捉えるが斬られる度に闇は再生していた。おそらくほとんど術力を使えないのだろう、いつもはどこか余裕の表情を崩さない男の顔がどこか苦味を帯びているのを見て、フィーの足が知れず動いて口はその名を叫んだ。

「ヴィー！」

「フィー待つて、落ち着いて」

飛び出そうとしたところに冷静な制止がかかる。

「君にはまだ、闇の相手は無理だ。僕が行くから」

「…分かった」

ロイは本来、戦う時には術具を使う。けれど相手が闇ならば術のみならず剣がいる。だから彼は下に降りてくる際、すでに帯剣していた。

すい、と細身の剣を抜いてロイが動く。フィーはその剣が静かに淡い緑の光を帯びたのを見た。現れた人型の闇に対して硬直している人々の隙間をあっという間に縫って彼は迷わず少女へと斬りかかった。しかし、その途端にセネカが劈くような叫びを上げた。

「止めて！」

ロイの手が止まった。

もつとも、その言葉が無くて、ロイの手は止まっただらう。セネカとヴィーを攻撃していた黒の蔓はロイが少女に近づくなり方向を変えてロイへと向かい、ロイが少女に切りかかる頃には一つの茨

の壁を作り上げていたのだから。ロイがそれを掃う頃には少女は数歩下がって無表情にロイを見つめていた。様子を窺うように、崩れた闇は再び蔓の形をとって敵と認識されたいらしいロイへとゆるゆると向かう。

ロイはそんな闇と少女から目を離さないままにセネカに尋ねた。

「この子は…君の友達だった？」

「そうっ…！！アンナ、その子は一番の友達のアンナです！だから止めて…！」

「違うよ、セネカ。『これ』は闇だ」

ロイははっきりと言い、首を振った。

「でも、人型なんて…！！嘘ですよね？」

闇は通常獣の形をとるのだ。だからこそ目の前の友人の姿をした少女が闇でないと信じたくてたまらないセネカの気持ちはフィーにも分かった。けれどロイは頷かなかった。

「人型の闇は、多くはない。でも、確かにいるんだ。死者は生き返らない。君だってもう分かってるはずだ」

「そんなことって」

セネカの目から涙が零れ落ちる。それを見たヴィーの手が、泣く少女の頭にそっと乗った。一つその小さな頭を撫でた後、これから起こる惨劇を隠すように彼の大きな掌は少女の両目を覆った。

「ごめんね」

鋭く先のとがった蔓が鞭のようにロイに振り下ろされたが、彼は紙一重でそれをかわし、少女の懐に入ると心臓の辺りを貫き、そのまま刃を抜いた。鮮やかだった。

一瞬の間をおき、ごぼり、と少女の胸元と口からやけに黒い血が流れ出す。

息絶え、絶命するかと思われた瞬間、闇は少し口を利いた。

「い、し」

地に伏せるようにしながら、その手が伸ばされる方向は、ヴィー。ヴィーは少女が倒れいくさまから目をそらすことなく、じっと見据えていた。

「ラエル、どういうことだ？」

フィーは部屋に戻るなり顔も見せずにいる魔に尋ねた。姿を見せなくとも、魔はフィーが戻ってきた時点で全て把握しているようだった。

セネカはあれから部屋に引きこもって出て来ようとしなない。きつと泣いているのだろう。例え違つとどんなに言つても、親友と呼ばれる少女を彼女は二度失つたに違いないから。かける言葉もなかった。

ヴィーはその後ふらりとどこかへ消えた。ロイは闇の抜け殻である少女を、闇を屠った術力を扱える身として埋葬しに行った。

ヴィーだけが、ラエルにどうしても尋ねたいことがあり宿に残った。

「お前が闇を寄せないといったのは偽りか？」

「いや」

「ならば、なぜ!？」

「魔と闇の不可侵を破るだけの意思があるものがあるのだろう。ただの闇なら満ちる魔力を避ける。それをしないで現れる闇、心当たりがあるんじゃないか」

ラエルはあくまで淡々と答える。

「…ギルか」

「そう呼ばれていたな」

椅子の上で気だるそうにラエルは座り、顎肘をついて考え込む。ヴィーを楽しげに見上げた。

「如何する、主？」

フィーは考えた。「いし」、といった闇の姿をした少女を思い出す。あれがギルの寄越した影ならば、やはりチット達は間違いない。ヴィーの持っている石を狙っている。本人が来ないだけかもしれませんが、いえるかもしれないが果たして本当にそうか。今、闇に対抗できるのはロイのみだ。とても安全とはいえない。

「こちらの居場所がチットたちには割れているわけか。しかもあのよう闇を寄越せると。そしてこの国に満ちるお前の力では闇を掃えない。すると国を動く間は闇に襲われる可能性が高く、しかもそれを目撃した人間から王様への不信を買う。今のよう」

実際あの子の騒ぎはすごかった。闇はロイによって屠られたとはいえ、かつての村の一員である少女が屍鬼として現れたのだから。王の加護によってこの国に闇が現れることは決してないはずだった。動揺する目撃者たちを何とかなだめたものの、彼らの不安と不審は払拭されきらなかっただろう。

「残念ながらこのまま行くと闇が現れたことによる余波が恐ろしくろくな」

猫は呟いた。

まったくだ。闇がこのように現れる事態はもう二度と繰り返さないようにしなければならぬ。

「とりあえず急いで国を出るしかない。しかもできるだけ人目を避けた強行軍にするしかないか……。そもそもそれが可能かも問題だが、たどり着いた先の国々でも闇に襲われ続けるとなると辛いな」

「主、いいことを教えてやる。4大精霊の住み着く国には闇は入り込めないだろう。魔力とは違って、闇は基本的に術力には触れられない」

「そうなのか？じゃあこの国はなぜ」

「阿呆な竜の怠慢だ」

ラエルは竜を余程嫌いらしい。その名を口にするのも厭う様子だった。

「まあそもそも竜が人間に手出しをするという時点で異例というよりもはや異常だが」

「……どういつ？」

「ふん、そのままの意味だ。それより主」

はぐらかされているのは分かってても、フィーは正直それどころではなかった。だから大人しく聞き返した。

「なんだ」

「条件次第では、現状を打開してやらんでもない」

「取引が好きだな、ラエル。魔法使いというのは契約したら意のままに魔を従えるのかと思っていたが？」

「取引好きは魔の性質だ。今はただでさえ我ですら負担が大きいことを果たしているのだから、このように言い出すだけでも感謝して欲しいもの」

「…わかったよ。条件を聞こうか」

「浄化の火か。美しいな」

「…ヴィー」

ロイは一人、少女の形をした闇の葬送に来ていた。村の外れの墓地の、さらに片隅である。闇への忌避から、村人たちは着いてこなかった。聞いたところによるとこの屍の主である少女の親族は既に他界したものらしい。闇によって。

闇に殺された者が死して闇になる皮肉を思いながら闇の遺骸に術具の一つを用いて白い火を付けたロイの元に、ヴィーはふらりと訪れた。二人の前には、白い炎にさらさらと解けていく漆黒の遺体がある。煙が昇ることはない。ただ、火が煌々と日の暮れた地面を照らした。

「俺はそのようには術力が使えないからな。専ら戦いの術だ」

俯いて影になったヴィーの顔の浮かべる表情がよく掴めなかったが、自嘲しているようにロイには感じられた。

「でもそれで守ったものも救ったものもあるんだろう?」

「どうかな?今など満足に使えないし」

「王様、無力が口惜しいかい?」

「ああ」

はつきりとした返事だった。

「情けない王もいたものだ」

ロイの見る限りヴィーは、多少なら今も術力は使えるはずだ。それでも彼は、親友の姿をした少女の闇に見入るセネ力を背に、少女を斬れなかったのだらう。それが優しさなのか同情なのか、あるいは他の感慨があったのかはロイには分からない。祭りの日に現れた闇の少女を彼も知っていたふうだったことを考えると、やはり彼に起こったのは同情だったのかもしれない。ロイはフィーからヴィーの過去をあえて聞くことはなかったから確かなことは分からなかった。

それでも、おそらくは彼の持つものを狙って現れた闇を自らの手で斬り損なった事実は民を守ると決めた彼にとって重いのだらう。

「…人間なら多かれ少なかれ情けないものだろう」

「まあそうだが」

「今は力がないものの悔しさを学べばいい。あなたは常に持つ者だっただらうから、ちょうどいい機会じゃないか」



「…そうかもな」

自らを『持つ者』ということを否定しない辺りが憎らしいが、この王に限っては事実だろう。

白い火が尽きる。闇の痕跡も消えようとしていた。どちらともなく目を瞑る。

闇を『屠る』と人々は言う。動き、意思のある塊を生と見做すなら、人型をした闇を屠ることは人殺しだろうか。その闇は心を、記憶を、魂を、『命』を持っているのか。

知らないから、そこに明快な答えはない。ロイは例え少女の形をしていようと迷わず闇を屠ったし、ヴィーも同様に闇の跋扈した時代に人型のそれを屠っただろう。

けれど消える闇を一時彼らは悼んだ。

そして目を開けるとヴィーはロイに向かって笑った。

「まあ自分、我らが唯一の術師に随分頼ることになりそうだな」

「…早く君の回路が直ることを祈ろう」

「なんだ自信がないのか？」

「フィーはともかく君が襲われても僕は助けるつもりはないから」

「それは酷い」

無駄口を叩きつつロイとヴィーは宿に向かったが、途中宿の方向からフィーの怒号が聞こえた。

『ぶざけるな！！』

「…原因はラエルか？」

「多分」

…おそらくろくなことではないだろうと思いつつ二人は宿へ急いだ。

## 72・セネカと

「そう怒鳴るな」

「…怒鳴って当然だろう。細工師に向かってなんて事を言うんだ」

くつくつと魔は笑う。それを相手に、フィーは眼光を増した。

ラエルは肩をすくめてそれを受け流した。

「ただの冗談だというに。そんなものを我は喰えないしな、残念ながら。まあ、奪うことはできるが我は喰えぬものにはさほど興味が湧かん」

「笑えないな。それを条件にするくらいなら、いつその両足を差し出す。或いはいずれかの感情でも構わない。それなら魔たるお前は喰らえるだろうよ」

「そんなに細工の才が重要か？」

ラエルがふざけて出した条件は、フィーの細工の才能を差し出すこと。

「…私にはそれが全てだ」

フィーの声は震えた。もしそれが無くなったら？自分に何が残るというのか。それはおそらく心を無くすことなどより余程つらい。フィーは自分の才を失うことを想像しただけでも身が& a m p ; # 2 5 4 4 5 ; がれるような気分だった。細工を作る時間を、細工を生む自分を、出来上がった細工を、細工を喜ぶ人々を、それを見る

瞬間を、なにに代えても失うことはできない。

そんなフィーをふざけていた調子をなくして静かに見つめ、ラエルはどこか哀れむように、或いは唾棄するように言った。

「竜に捧げる才などと。言っておくが我が気に入るのは主の美を作る腕ばかりではない。主に仕えようと思った最たる理由とて別のものだ。才能？そんなもの魅力的であろうがたかだかお前の一面だ、それが全てに代わるなどつまらぬことを言っな」

「なにを」

「…まあいい、別の条件で明日望むようにしてやろう。とりあえず今日は寝る」

「おい」

ふ、と猫の姿になると言葉通り魔はフィーのベッドを奪ってさっさと眠ってしまった。

聞きたいことがあった。力のこと、歪みのこと、魔のこと。

見かけによらず疲れているのか、起こしてやるうかと抓まんでもつついても、丸まった虎猫は起きる気配がなく、フィーもどさりと横になった。

明日、聞けばいい。元からずっと眠かった彼女もすぐに眠りについた。

「…寝てるな」

「寝てるね」

男2人で走ってこの部屋に戻ったにも関わらず、そんな人の気も知らぬ様子で一人と一匹は穏やかな寝息を立てていた。フィーはどこかあどけない顔をしている。ヴィーとロイの二人は揃って溜息をついた。

「こうして見ると、フィオナは幼い」

「本人の了解も取らず触らないでね？」

無意識にフィーに伸ばしかかった手は、ぱしりと天使のように微笑むロイに払われた。ここに至るまでの道中似たようなことが幾度かあったが、これがなかなかヴィーには痛かった。いつの間にか、フィーのすぐ横で寝息を立てていた魔とはいえ可愛らしくも見える猫は冷たい床へと移動させられている。

とんだ守護者もいたものだどヴィーは思う。

「相変わらず信用がないな。何もしないというのに」

「どうしたらあなたを信用できるようになるかぜひご本人にご教授願いたいものだ」

「無垢の心の持ち主になれ。お前が妄想するほどに俺は淫蕩な性質ではないぞ」

「君から無垢という言葉が出るとは。僕の妄想、ね。ただの事実をわざわざ歪めないで欲しいな。あなたの女好きは城下まで広がるほどというのに言い訳をするわけかい？」

「それこそとんだ曲解だ。俺の祖父は聖職者の頂点たる人間だぞ」

「英雄の子は英雄とは限らないものだからね」

「蛙の子は蛙というだろう？」

ヴィーは言いながらも欠伸をした。ロイもどこか眠そうな目をし

ている。彼らもまた、疲れていた。

「僕はそもそも貞淑を謳う聖職者に子がいる時点で懐疑的になるけれどね…君と話していると疲れる、フィーも眠ってしまったことだし今日はもう休もうか」

「愛を持つことは誰であれ許されるべきと思うがな。そうだな、休むか」

やがてその一室の明かりが消されると、部屋は静寂に包まれた。一時の、休息。

ゆうべ早くに眠りすぎたために、フィーは夜中とも取れそうな早朝に目を覚ました。

ロイもヴィーも未だぐっすりと寝入っている。フィーがそつとカーテンを開けて外を眺めてみるとやはりまだ日は昇っていない。

白銀の世界を星明りがうつすらと照らして世界は幻想的だった。

・・・と、その静けさの中動く影があった。

「セネカ？」

小さく呟くとフィーは動き出した。一応自身の剣を取ると、なるべく音を立てないように部屋を抜け出し、階段を下り、外に出る。宿の外では雪が足音を消してくれたので、彼女はさくさくと小さな背中を追いかけ、追いついた。

「どこへ？」

声をかけると、びっくりとして少女は振り返った。

「フィー、さん」

「セネカ。眠れないの？」

「…はい」

頷いてそつと答える少女がどこに向かうか知れないが、夜中に一人で歩かせるのもよくないだろう、と黙って、

「じゃあ付き合っよ」

とフィーは言った。この少女の力になれるとは思えなかったし多少頼りないだろうが、彼女の目的を果たす間の護衛役くらいには自分だってなれるだろうと考えて。

少女は墓場へと向かった。

そうではないかな、と黙っていたがやはりそこに着いた。

「私。今日ここでアンナが焼かれるのを、宿から見えていました」

「…そうか」

それはアンナの姿をした闇だ、と敢えて言おうとはフィーは思えなかった。

「わたしお別れを、しに…あの後すぐは、ちゃんと、できなかったから」

少女はこの地方独特の手の組み方をすると静かに祈った。しばらく

く二人分の吐く息が白く、天に昇っていった。

やがてフィーがぼつりとこぼすように呟いた。

「・・・アンナが再びセネカの前に現れて喪われたのは、多分私たちがここへ来たせいだ。私たちが持つものを、闇が狙っているからだろう」

「そんな…そう、なんですか。なぜ、わたしにそんなことを言うんですか」

セネカが目を細めて尋ねた。

「：事実だし、想いの持つて行きどころがないのは苦しいだろうから」

返されたフィーの答えに、セネカは苦笑した。

「うらむべき人は、あなたたちだと？

何もうらんでないとかそんなきれいなこと、言う資格があってもなくてもわたしは言えません…ばかりにずっと泣いてて、わたし、ロイさんって人をうらみました。闇の存在をふたたび許した王様を。それが間違ってるとは思っても、どうしても」

それが普通の感情だとフィーは思った。たとえば師匠の遺骸がもし刺されるならそこに魂がもう無くてもそれがすでに闇となってもフィーは刺した人間へ怒りを覚えるだろうから。フィーは言った。

「しょうがない、と思う。ただ、偶然、ロイにその力があっただけで、『アンナ』を斬ったのは私だったかも知れないし、ヴィーだっ



たかもしれない。だからロイだけを恨まないで欲しい」

セネカはフィーを見つめて答えた。

「そう：アンナをわたしが斬らなければならなかったかもしれない。人の型をしていなければ、獣の型をしていれば、元はアンナであってもわたしは闇が斬られたとき喜んでロイさんをほめたかもしれない。なにも、知らずに。」

：本当は、もし恨むとしたら、死んだアンナをこんなふう汚す闇をうらむべきなんですよね。そのこと、私の様子を見に来てくれた友達が、言っていたんです」

フィーもセネカを見返した。

「そうか。：卑怯な言い方だけど、もし君も本当にそう思うならそうだと思う」

「ならば、わたしはそうします。」

：あの『闇』はあなたたちを狙って現れたにしても、ヴィーさんはあの時アンナに飛びつこうとしたわたしを守ってくれた。ロイさんも。わたし、あの2人がアンナを：闇を焼く時にそれを悼んだのを宿の窓から、見てたんです、本当は」

そう言って、セネカは掌を見つめる。

「強くなりたいたって言って何も分かってなかったし知らなかった。いいえ、分かったつもり、知ってるつもりだった。わたしはただ、英雄王にあこがれて同じように闇を斬れる人間になりたいと思っていたけれど：闇の時代に、王様も仲間だったひとを斬ることが、あったんでしょうか。どんな、気持ちで」

それは、フィーにも分からない。ただひどくやるせなくて悲しいことだと思う。

屍から生まれる闇である限り、屍と言うのはあるいは誰かの愛しい人だつたらうから。そしてこの国の人は皆、そのことを知っている。闇を恐れ憎みながら、だから根底では多分哀れむ。悼む。

だからこの国を守る王は、その相反と悲しみを生まないために竜の力を借りて闇が生じる前に遺骸を浄化するだけの人物が選ばれる。それが、ヴィーだ。

彼は、早く使命を果たして帰らなければならないのだとフィーは思った。強く。

「セネカは優しいな」

「いいえ。わたし、いつもいろんなことに気付くのが遅いんです。きのうだってロイさんをなじるところでしたし。」

…ねえ、フィーさん、手に持っているところを見ると、その剣をあなたは使えるんですね。手合わせをしてくださいませんか？」

「いいよ」

それで多少なりと、気が晴れるならば構わない。そう考えて、剣に鞘をしたまま、セネカの携える竹刀とフィーは向き合った。

### 73・条件

「あ、フィー」

「おはよう」

「おはよう。…背負ってるの、セネカ？」

「ああ」

日もすっかり昇った頃部屋に戻ると、目が覚めたらしいロイに声をかけられた。王様は猫となにやらやり取りしていたようだったが戻ってきたフィーに気付いて、こちらを向いた。

「この魔がお前のことは心配ないというから部屋で待っていたんだが。どうしたんだ、その子は」

「お互い早く起きたから、ちょっと二人で運動してきたんだけどこの子のほうは疲れたのか寝ちゃったんでそのまま連れてきた。まだ朝早いから、この子の両親もいる部屋まで運ぶわけにも行かないし」

「…そうか」

フィーが、自分が使っていた寝台にセネカを下ろし、傍らに少女の竹刀を置いたことで『運動』の内容は知れたらしい。

「セネカ、何か言ってた？」

ロイが問うのでフィーは、寝台の隅に腰掛けて目を閉じて答えた。

「…優しい子だよ、お前とヴィーを思いやってすらいた」

「…そう」

フィーが目を開けてみるとロイは目を細め、王様のほうは黙って少女の前髪をかきあげてやっていた。彼らは、何を思っているのだ

ろう。セネカではないがフィーも一瞬考えた。

しばらくして立ち上がり、寝台のある部屋を彼らは出た。荷造りのためと、少女を起こさないために。

「ちなみに手合わせのほうはどうだったのだ、主？」

猫の姿のままの魔が尋ねるのでフィーは答えた。

「…この子は剣の才もある。下手すると私より強くなるかもしれないな」

セネカは素振りばかりしていた、と言っていたけれど、少女と同じ年のころのフィーより遥かに動きはよかった。それが、彼女にとって幸か不幸か、フィーには分からない。彼女が騎士をまだ目指すならその才は役には立つだろうけれど。才か、と考えに沈むフィーの耳に、ヴィーの声が入ってきた。

「…ほう。美人になりそうだし城で将来雇うか」

「王様、半ば本気で言うのはよしてくれ、頭痛がする」

「女が剣を取るなどという法はない。慣習があるだけだ。俺はそれを変えると前も言っただろう、ロイ」

フィーは瞬きしてヴィーを見つめた。「冗談を言っている顔ではない。」

ちなみにこの国では女性騎士の前例は無い。厳然たるイオナイアの職差別のためである。

騎士のほかに、そもそも金銭となる売り物作りには女性の手がかけられることはほとんど無い。それもあってフィーには、もしこの才がなければ、あるいは彼女自身が女性とばれてしまったら、どうなるのかという思いが常に頭の片隅にあった。

「本気、で？」

フィーが思わず問うと、ヴィーは確かに頷いた。

「もうとりかかり始めてる。頭の固い奴も多いがな。」

さつきこの魔とそれについても少し話していたところだ。個を判断する時強さにもっとも重きを置く魔には人の世界の慣わしはよく分からんといわれたが

「…働いてたんだね、一応」

ロイの言葉に、

「当然」

とヴィーは笑った。

フィーは少し眩しく彼を見た。ひよっとしたら。自意識過剰かもしれないけれど、自分とかわりを持ったことが彼にそうした意向を持たせる要因となったなら。

「…うれしいな」

「ん？」

「あ、いや、もし他にもいろいろ変わったなら私も気が楽になる」

「そつだろっ」

「まあ、まだまだ時間がかかるらしいけど。ねえ、フィー、もし生きていくうちに変革が見込めなさそうだったらいつそ他国に工房を移そうか？」

ロイがにこりと言う。

「…本当に信頼が無いな」

ヴィーは溜息をついた。

「それはさておいて。主、取引の話だが」

「ああ」

突然の話の転換に、ロイとヴィーが困惑した様子だったが取り合わずにフィーは尋ねた。

「全てを解決してくれるといったな。その条件は？」

猫はどこか遠い目をして窓の外を見つめた。フィーもつられてそちらを見る。今日はよく晴れて雪は降っていない。ただ寒い、北の島ほどではないだろうが、とフィーがそんなことを思っているところエルは言った。

「今の進路を北にとってくれるなら、考えよう」

「北？」

「正確には絶海の孤島、風を祀る国シンセに行つて欲しい。もとよりそうして貰うつもりではあった。南に進んでいたのという文句は聞かぬ、主が我の言を忘れるのが悪い。…ここから動けぬ我の代わりにして欲しいことがある」

いつの間にか金の目の人の型をしたラエルはおもむろにくたびれた様子の一冊の本のようなものを取り出した。

「それは」

「…ある、人間の日記だ。あの地であればどこでもかまわない、これを燃やしてきてくれ」

手渡されてみると、それはずしりと重かった。

「中を見ても？」

「構わん」

開くとフィーには読めない文字の羅列。ただ、数字だけは世界共

通であるので分かった。それからすると、毎日欠かさずつけられたものであると知れる。横から覗き込んだヴィーが言った。

「なるほど、シンセの文字で綴られているな。俺はあの国の言葉にたいして堪能でないから読めはしないが」

「…『奴は拗ねたのか口を利いてくれない。昨日のご飯が魚でなかったからだろうか。私だって我慢して…』」

ロイがすらすらと読み上げると、ラエルが笑った。

「読めるのか。」

持ち主は日々の食事にすら事欠く貧乏な奴だった…まあ、その件から見ても分かるように本当に下らないことばかり書かれた日記だ」

「…誰の、と聞いても答える気はなさそうだね。なぜ燃やすの？」

「我がようやく手放せるようになったから、だな。約束もある。さて、条件は以上だ。どうする？」

フィーがロイとヴィーを窺うと、ヴィーは尋ねた。

「解決って、この現状のだな？」

フィーは頷いた。いかに早くこの国を出るかという解決困難な課題を今フィーたちは抱えている。

「ああ。条件を飲めばラエルは私たちを魔法によって目的地へ一瞬で移動させてくれるという」

「…なるほど、チットが使っていたあれと同じ魔法か。魔法とというのは本当に何でもありだな」

術力ではそうしたことはできないのだと最近フィーも学んだ。空

間を歪ませることに精霊は力を貸さないためだ。

「…一応言っておくが、国を超えるような移動など誰もが扱える術ではないぞ。莫大に力を食う上、制御が難しく例えばその未熟な主が使うなら肢体がばらばらになってしまうことも覚悟したほうがいいだろう」

そんなことを嘯くラエルは相変わらず偉そうな態度を崩さない。フィーは少しむっとして言った。

「お前なら扱えるത്?」

「可能だ」

「…風の地にはいつかは行かなければならないうえ、あの海流を越えて入る手段を悩んでいたこともある。悪い条件ではないか」

ヴィーの言葉に確かにそうだとフィーも思う。風の精霊の頂点たる存在によって、余所者が足を踏み入れることが叶わない異国之地に入るには絶好の機会といえる。

「どうだ、好都合だろう?」

そのラエルの問いかけにフィーは答えた。

「裏があるのではないかと思えるほどだがな」

「なに、私の都合と主らの都合が重なっただけのこと」

「…そうか? まあいい。」

よし、条件を飲む。いいか、ヴィー、ロイ?」

「ああ」



「構わないよ」

それからラエルが急かすので、フィーたちは荷造りを手早く済ませて再び金の魔の元へ集った。

「急かせるようで悪いな。…できればその日記をその持ち主の命日である今日中に燃やして欲しいものだから」

ラエルはフィーたちに向けて、珍しく済まなさそうな顔をした。

「では早速行ってもらおうか。主、力は我が出すから、『テ・シンセ』と一言言ってくれるか」

「え、早速って…私は、まだお前に聞きたいことが」

「…魔法のことならひねくれ者の魔より魔法使いに聞いたほうがいだろう。まあ、この頼みごとを済ませた後なら聞かんこともないが。ほら、始めるぞ」

ラエルが長い腕を持ち上げる。次の瞬間、ぶわり、と空気が動くほどに、ラエルがかざした掌の先から力が蠢いた。魔の力が球を作るようにしてフィーたちを囲む。それをうけて、強風に抗するよう腕で前を庇いながら、フィーは言った。

「『テ・シンセ』？」

「しまった」

ラエルは3人の消えた後を眺めて独りごちた。

「複数に対してあれを使うのは久しぶりだったからな…少々失敗したか」

まあ何とかなるか、とラエルは無責任に言った。

「…だ、誰？」

後ろからかけられた声にさっと振り向いて、そこに竹刀を構えた幼い少女の姿を見つけたラエルは顔を顰めた。

「お前、セネカなどと言ったか？」

「…見られるとは。まあ、その記憶は消すつもりだったから別にいい」

「え？」

「今主の使命を果たす身の上では」

少女の目の前でラエルの金の髪は黒くなり、その目は青くなっていく。

「この村に住む者たちが昨日目にした記憶は邪魔だ」

ヴィーそのものの姿をした魔は、王の威容を現した。豪華な黒の衣装、流れる漆黒の髪をした男を前に、少女は息を呑んだが、一拍置いてむしろ目前の存在を睨みつける眼光を鋭くした。

「イオナイア、国王？いえ、違う。あなたは、何者？」

気丈な様子の少女に意外そうに魔は目を見開いた。

「ほう、震えもしないか。なるほど主のいうようにお前は弱者ではないな？面白い。

…我は今確かに玉座につく者。ただし精霊が嫌いなうえ魔法を使う所謂紛い物だがな。だからこんなこともする。悪いが」  
にやりと王を真似て笑むと、少女に向けてラエルは一言告げた。

「『忘れる』」

少女は、目を覚ます。

「セネカ、起きなさい！！いつまで寝てるの？」

少女がいるのは彼女自身の部屋のベッドだ。いつも通りの日常。ただ…ただ？

生じた違和感を払い落とすように、腫れぼったい目をしたままセネカは頭を振った。起き出すと着替えて顔を洗い、再び部屋に戻った彼女は、窓からよく見える墓場を無意識に見つめている自分に気

がついた。

なんだろう。何かを、忘れて、いるような。

分からなかった。ただ彼女の心に、もっと強くなりたいという思いはいつも通りあった。

今日も素振りしよう、とセネカは思う。何もしないよりはそうすることで強くなれるはず。

そうだ、アンナのお墓に花を添えに行こうかな、とも彼女は思った。なぜかそうしたい気持ちが強かった。

「セネカ、ご飯できてるわよ!？」

「はい!!今行きます」

母の自分を呼ぶ声にぱたぱたと駆け出した少女はこの時まだ気付かなかつたが、彼女の部屋の机の上には王印のされた一枚の城への推薦状が載っていた。

悪戯好きの魔が残した一つの繋がり。その引き起こす顛末は……また、別のお話。

## 74・シンセ到着

天蓋つきのベッドの中で対峙する、二つの黒い影。

しかしその間に色めいた情は見られない。

一方はなにせ刃を構えており、他方は今日覚めたといった様子だった。自分に向けられたらしい刃を見てもちらとも動かなかった影は、ただ、もう一つの影を見上げた時初めて表情を動かした。見上げられた刃の持ち主は、相手の顔に浮かんだものに絶句した。

「悲しいの？」

刃を携えた影は、あまつさえ己に手を伸ばしてきた相手から逃げるように立ち去った。

「お頭！」

「なんだい、ドン。寒いねえ、今日は」

敵ついで様子の如何にも山男、といった男にお頭と呼ばれた年若い青年は、なんだか見ているだけで微笑ましくなってくるような人物だった。そのふんわりした白い髪と白い肌は雪に同化してしまいそうだ。降りしきる雪にほつぺたと鼻の頭を赤くして、きらきらとその灰褐色の目を輝かせて空を仰ぐ様は子どものように。散歩と称して吹雪の中思うままにふらふら歩き回る様は、青年の部下たちの不安の種だったが青年は頑として周りの言うことを聞かず、雪が降るた

びろろと楽しげに歩き回っていた。

「いや、お頭、今日に限らずシンセは年中寒いですけど・・・じゃなくてですね。今見張り台の奴がいきなりよその人間が空から降ってきたって言うてるんで俺はお頭にご指示を仰ぎに来たんでさあ」

崖っぷちなど、何を好き好んでこのお頭は歩いているのかとドンは頭を抱えつつも報告をした。

「はあ？鳥もなしにか？」

「そうです」

「どうやって来たんだろう。不思議な話だなあ。ねえ？」

「・・・とりあえず振り向いたまま歩かないでください、って、あ！お、お頭！！」

「あ」

白い髪青年は地面の無い空中に足を出し、そのままこれ以上ないほど見事にまっさかさまに遙か遠くの地面目指して落ちていった。

残された男は一瞬あっけに取られた後絶叫した。

「うああああ、お頭あ！！！？...：そうだ！ジ、ジルフェ様助けてください！！」

すると男の横に、いかにも無気力そうな美人が唐突に現れて、ふと笑った。いや、人ではない。今は手の形をしているが、そこに先ほどまで収まっていたのは翼だった。人に擬態した人ならぬ彼女は青ざめてすがり付いてくる男をひよいとかわすと冷たく言い放った。

「放つとけばそのうちなんでもないふうに登ってくる。心配するだけ無駄でしょ」

「そんな殺生な!?!」

お頭と呼ばれた青年、ロコ・マルシエ。ただいま人生において幾度目になるか分からない走馬灯を空中浮遊しながら眺める羽目に陥っている彼は、昔からついていない人間である。

「つてて…」

この時間なら普段は全くの無人である雪原と化した海辺で、雪塗れで立ち上がる者が、1人いた。

「ん?」

フィーである。

きよろきよろと辺りを見回して彼女はどうやら魔法が上手く行ったらしいことを確認した。

片方には海、片方には断崖絶壁。降りしきる雪。

イオナイアでも今の次期見られそうな光景だが、一つだけ違うものがあつた。

まず、イオナイアではずっと感じていたラエルの力を今のフィーは感じない。それに。

「・・・よく分からないが、術力の気配が濃いような気がする。魔力では、無いな・・・。ここがシンセなら、これが風の力か？」

未だ術力も魔力もその扱いが未熟に過ぎる彼女には、はつきり力が見えるわけではないが、そんな彼女でも捉えられるようなひつきりなしに渦巻いて吹き付けてくるような透明な力があつた。

とりあえず一人ごちていてもしようがないので、ヴィーがロイに確認しようとした彼女は、二人の姿が無いことに気付いた。

仕方なく崖沿いにしばらく歩いて、彼女はようやく地面から伸びている2本の腕を見つけた。すこしぎよっとしつつも辺りをよく見ると、もう少し進んだ先にも足が一本でている。

・・・彼女の旅仲間の二人を発見したようだ。

無事目的地に着いたのはいいが着地はどうやら失敗したらしい。

この移動の魔法に自信満々な様子だった魔を呪いつつ、思いがけない面白い光景に笑いをこらえながらもフィーはまず手前の腕から引つ張り出そうとした。

「お、も・・・」

予想よりも遥かにしつかりとヴィーだかロイだかは埋もれていたそれを呻りながらどうにか引つ張ると、途中からその人は自力で這い出してきた。

「げほつ・・・ああ、フィーか。助かった。死ぬかと思ったぞ」



黒い髪についた雪を払いながら、雪から出てきた青年は顔を顰めた。実際この英雄がこんなところで死んだらなかなかのお笑い種になるだろうと思いつつ、フィーは言った。

「ヴィーの方だったか。無事みたいだな」

「・・・ロイは？」

「ん、多分あれだ」

フィーの指差した方角にある、雪原から生えた一本の足にヴィーは遠慮なく大いに笑った。

「くっ・・・はは、奴に惚れ込んだ乙女が見たら泣くな」

「どうかな？喜んで助けだして貸しにするんじゃないか？」

「・・・それはそれで怖いな。というか、助けてやら無いのかフィー」

「そうだった」

そうしてロイのものであるう足を目指して近づいていくにつれ、フィーはふと違和感を覚えた。

「・・・靴が、違う」

「は？ああ、そういえば確かに」

雪から飛び出した足にある皮素材でできた靴はロイのしていた靴と色は同じだったが形が明らかに違った。

「ロイじゃ、ない？」

「・・・とりあえず、引つ張り出してみるか？」

二人で顔を見合わせて頷きあい、ヴィーがその足に手をかける。

「よ、っと」

グイーによってあっさりとは片手で引きずり出された青年は、明らかにロイとは違う真白い髪をしていた。彼の気絶した整った顔には、どこか天国に召されでもしたような幸福そうな色すらあつたが生きているようだ。とりあえず青年についた雪を払ってやって崖にそつと寄りかからせた後、2人でロイを探して辺りを見回してみたがそれらしい影は見つからず、2人は一旦諦めることにした。

「いないな。」

・・・それにしてもこの男は崖から落ちたのか？その割に傷一つ負わないとは運がいい・・・グイー？何してるんだ？」

グイーはというと、自分の荷を漁っていた。

「気付け薬を探している。この男をこのまま放つとくわけにも行かないだろう？確かロイが入っていたはずなんだけど」

グイーがようやく気付け薬を見つけて嗅がせると、男はぱちりと目を見開いた。

「あ、れ？ここは」

「大丈夫か？」

グイーがそつと覗き込むと、彼女に焦点を合わせた灰褐色の目はある一点で止まった。

「うわ！それ、フィオレンティーノの耳飾じゃないか！！！！？」

「え？あ、ああ。そうだが」

「え、ねえ、君よく見たら指の奴もそうじゃない？ひよつとして彼の知り合い？紹介する気は！？僕、彼に頼みたいことがあってさ！」  
がしりと手をつかまれて目を白黒させるフィーを哀れんだのか、  
ヴィーが二人を引き離すと言った。

「……とりあえず、お前は誰だ？」

その言葉にはっとしたように我に返ったらしい青年は、頬を搔いた。

「あ。ごめんなさい。つい興奮しちゃって助けってくれた人にとんだ失礼を。僕はロコ・マルシェ。職業は……」

「お、お頭あ！無事だったんですね！！？」

青年の言葉を遮るようにして、いきなり青年に飛びついてきた塊に彼は哀れにも潰された。

「ああ！お頭！！？」

ロコと呼ばれた青年は、再び気を失ってしまった。

「……聞くが、そいつは何のお頭だ？」

熊のような男に涙ながらに肩を掴まれ激しく揺さぶられても、一向に意識を戻さない白髪の青年を眺めながらのヴィーの言葉に、熊男は激昂した。

「ふざけてんじゃねえ、シンセでこのお頭を知らないとは言わせんぞ！見りゃ分かるだろう、他に類を見ないこの白い髪を持ち主といたらただ一人、北の盗賊の頭に決まってんだだろうが！」

その白い髪を見せ付けるようにしようという意図はわかるが、熊男に襟を掴まれている青年は息が苦しそうだな、と思いつつも助けはせずにフィーは尋ねた。

「北の盗賊って？」

あまりにきよとんとした様子のフィーに、熊男は驚いた様子だった。

「知らねえつてのか！？・・・そうか、ひよっとしてあんたらが侵入者か？」

ああ、とヴィーが頷いた。

「お言葉通り俺たちはよそ者だが、別に悪意はない。それに北の盗賊なら知っている。」

大陸中至る所に現れる神出鬼没の盗賊集団で捕獲が極めて困難。理由はその腕と、義賊と呼ばれるだけの人徳にあるとされるな」

「おお。よく分かってんじゃねえか」

熊男は照れた様子で笑った。

「まあ実際捕まらないのは、この地を拠点にしていることと…なにより風の精霊の加護を受けているからというのが本当のところ、そうだろうっ？」

「な！？」

「シオンって知ってるか？」

「そりゃ知ってるが。伝説の盗賊じゃねえか」

「俺の祖父だ」

ヴィーがこともなげに言った言葉に熊男は絶句した。

## 75・お人よしの盗賊と

ずっとその場にいるわけにもいかず、ヴィーに話を聞きたがる熊のような男、もとい盗賊の一員であるというドンと名乗った男に連れられて、フィー達は盗賊のねぐらに向かうことになった。

ロイはもう一度探してみたけれど、やはり見つからなかった。「まあ、大丈夫だろう」というヴィーの無責任な言葉にフィーは怒りはしたものの、この国においてこの盗賊以上に人探しが上手い人間はいないとヴィーがこっさり耳打ちしたからしぶしぶ従ったのである。いくら国としてはイオナイアより小さい島といえど土地勘も人脈もない島でいきなり人探しは難しいだろう。

盗賊の頭とか言うロコという青年は、ドンの背で気を失ったままだ。随分ひよろりとしていて貧弱そうだが、本当に盗賊のしかも頭なのかとフィーは思った。それに義賊と入っても盗みは犯罪、おっとりしたこの青年はむしろ盗むより盗まれる側のように思われた。首を傾げるフィーはそっちのけで、興奮気味にヴィーに向かってドンは喋り続けている。

「なるほどあんたがヴィーに、そっちのお連れさんはフィーと。よろしくな！」

イオナイアって、あの竜の統べる精霊国か？海を渡ってよくここに來れたもんだ、だがシオンの子孫なら朝飯前ってところか？

それにしてもまさか北の盗賊の創始者の、盗賊の時代と呼ばれる時代を築いた息子、シオンに孫がいたなんて！誰も姿を見ることが叶わず、どんな罨も鍵も彼の前には無意味とあって、心やましいところのある金持ち連中はいつシオンにお宝を持ってかれるかって震え上がってたっちゅうじゃねえか」

「…らしいな。それが誇張でないところが怖い」

まるで壁抜けできる透明人間のように語られる男が、あののんびり笑っていたヴィーの祖父のことらしいと知ってフィーは目を見開いた。ヴィーはなんでもないように、苦笑している。ドンはにこにこしている。

「そうなんだよ。盗賊が思い描く夢そのものの盗賊だった。俺もガキのころにシオンに憧れたもんだ。もつともその頃には王家すらとうとう捕まえることを諦めてて、シオンも行方知れず。唯一ご存知だろう風に聞いてもなぜだか口を割りやしない、こりゃあ、まだ若えのにととうおっ死んじまったかってこの盗賊団でも噂されてたが…ひよっとしてご存命か？」

そわそわとドンは首をかしげた。フィーも首をかしげた。

「…ヴィーの爺さんって、あのしんか」

神官長だよな？と言おうとしたフィーの口元をヴィーはすかさず覆った。その上で、フィーには胡散臭いことこの上ないと感じられる実に神妙な顔をドンへと向けた。

「残念だが、祖父は亡くなった」

「そうか…まあ、生きてたって結構な年だもんな。悪いこと聞いたな」

しょんぼり、とドンは項垂れた。ヴィーは寂しげに首を振った。

「いや、気にするな。…奴が生きいてた頃、俺に昔の冒険譚に加えてこの盗賊の話を良く聞かせてくれたものだ。風に好かれるだけあって気のいい連中だって言ってたよ」

「へへ、なんか照れるな。なあ、あんたも、やっぱり盗賊だったりするのか？」

「まあ技はだいたい学んだ。針金でいかに鍵を開けるか、足音や気配をどう殺すか、果ては煙突からの家屋への侵入の仕方まで」

「直々に、そりゃ凄い」

「確かにあれは一流だった。だが捕まった場合の対処は残念ながら聞いた覚えがない」

「がっはっは！そりゃあシオンだ、捕まらないことが前提だったんだろうよ。捕ったにしろな、鎖やお縄を潜り抜けて頑丈な牢の鍵も開けちまったろう」

フィーは、彼らの会話中ヴィーが神官長の生死を偽っているのに抗議しようとしたが、結局ヴィーに手を放してもらえずにそれは叶わなかった。そもそもドンはこの状況をおかしいと思わないのだからかと感じたが大笑いしているドンを見てフィーは諦めた。そこで口を塞ぐ手の主を睨み上げると、ヴィーはなにやら目配せしてきたので、何か意図があるらしいということ承諾して頷くとようやく解放される。フィーは息をついた。この寒いのにヴィーの手は熱い、と彼女は思う。ロイの手と逆である。ロイの手は、冬には死人のように冷たい。思わず心配してしまうほど。体温というのは人さまざまだ、心の温かさとは反対になるといふ俗説は本当だろうかなどとフィーは思った。

いつの間にかヴィーからのある程度の接触を気に留めなくなりつつあることに彼女はまったく無自覚である。

そんな彼女がああ神官長の若い盗賊姿を想像しようとして躍起になる間にもヴィーとドンの話は進み、一行は気付けば崖の上から下方を見下ろすような高台にいた。



それなりの厚着をしていても風は身を切るように冷たく耳が痛いほどにシンセは寒い。身を震わせながらフィーは崖から見晴るかす寒い地方特有の青色をした海の向こうにイオナイアの陸影を求めたが、やはり見ることは叶わなかった。よく見ると波が高く押し寄せるときも、何かに阻まれるようにそれは一定の位置からこちら側へ来ることがなかった。怪異である。風の力だろうか、とフィーは思った。ヴィーの結界のように、この国を覆う雄大な力。

高台の島の内側の方には、背の高い杉の森が広がっていた。その中の道なき道を、躊躇うことなく自称盗賊ドンは進んでいく。それにフィー達は従った。

「どうしてあんたらはここに？」

ドンが尋ねた。

「実は、このフィーの似ていない兄弟を探してここまで来た。ロイと名乗っているはずだ。水色の瞳に薄い金の髪：まあ髪は銀色などに変わっているかもしれないが、見違えようのない実に目の覚めるようなきららしい美人だ。残念ながら男だがな。歳は俺とそう変わらない」

ロイの名前が出てきたのでフィーは顔を上げて話を聞いていたが、なにやらここへ来た目的の趣旨が変わっている。確かに目下の重大な関心事ではあったけれど。平然と嘯くヴィーの言葉をあまり真に受けない方が良さそうだとフィーは思った。もとよりそこまで信頼しているわけではなかったが。

ドンはというところさり信じた。

「へえ、そりや凄い。わざわざこの不可侵の国に足を踏み入れるとは、泣かせるねえ。まあ心配いらねえ、すぐ見つけられるだろう。なんせ美人は目立つからな！…もっとも顔隠してなきゃの話だが。」

どっちにせよ人探しなら任せてくれ」

「ありがたい、手伝ってくれるか？」

「ああ！他ならぬシオンの孫の頼みとあっちゃあな。代わりといっちゃなんだが、シオン譲りの技いくつも見せてくれると嬉しいよ。秘伝とかじゃないなら」

「それは構わない。恩に着る。…ところで、北の盗賊を加護しているという風の精霊にお会いすることは可能か」

「可能だな。ま、あの風に慕われてたつていうシオンの話を聞いてたときたら当然興味があるだろう。ねぐらに行けば、望もうと望むまいと会えるさ」

「どういう意味だ？」

「着きゃわかる。お、見えてきた」

フイーは言葉をなくした。そこにあるのは塔のような建造物。周囲の異様に高い木々とほぼ同じ高さだが幅はこちらが勝るだろう。それは、ガラスできているようで中を透かせることなくこちらを鏡のように映していた。上の方に風車のようなつくりのものがいくつか側面につき、からからと廻っていたがそれもまた透明。うつつらとした曇り空から届くかすかな太陽の光を反射して、建物は輝いていた。

「古代の遺物の一つ、シンセの“水鏡の塔”。まさかこの目で見る日が来るとは思わなかった。…美しいな」

ヴィーの言葉に口コを抱えたドンは振り返った。

「お、シオンから聞いてたか」

「まあな」

「やっぱり。北の盗賊のシンボルみたいなもんだからな、これは。生憎中はほとんどすっからかんだが。ま、入れ入れ！」

そう言つと、ドンは門をあけてすたすた入って歩いていってしまう。ヴィーが足を止めたのは、動かない少女がいたからである。

「…おい、フィー？」

ヴィーが呼びかけてもフィーは心ここにあらずだった。半ば予想していたことに苦笑しながらヴィーはフィーの手を引いた。

「中、入るぞ」

「ん…だが」

ぼんやりついてくるフィーはいやいやながらといった様子だった。しかし。

「…フィー、この中、見たいんじゃないのか」

「行く」

ヴィーの言葉に、フィーはヴィーの手をはずすとさっさと先に中へ入って行った。そんなフィーの様子に一つ溜息をつくとき笑って、彼は彼女の後を追った。

## 76・風の精霊

「あれ」

私は、不思議な透明な扉の中に確かに入ったはずだった。けれどそこにあるのは、ただひたすらに広い荒野。高い空には鳥が舞い、心地よい風が吹いている。一体何が起きたのだろうか。いつか、見たような景色だ。もういない両親を求めて彷徨ったあの頃、どこかで。

「これがあなたと私が初めて会った日。あなたはまだ可哀相なくらいに小さくて、なのに一人ぼっちでよろよろ旅をしていた」

降ってきた声にはっとする。声は、どうやら頭上の白い鳥からだ。少し低めで滑らかな、そしてどこか気だるげな女性の声。

「何者だ？」

鳥の向こう側の太陽の光が少し眩しくて、私は目を細めた。幻術だろうと思うが感触がやけに現実的だ。風の感触に眩しさまで生々しい。相手は大きな力を持っている。鳥は再び話した。

「…フィオナ、初めまして、とは言わない。私とあなたは何度かお互いを見ているのだから。あなたの作る細工は風の精霊も好んでわざわざ見に行くもの、私も例外ではない」

「…風の精霊？」

「そう」

鳥が降りてくる。それは地面に降り立つと、白く神々しい羽を仕舞う。鳥の薄い色の瞳に見つめられたと私が思った瞬間、そこには同色の瞳の、美しい女性が現れた。

「私もまた、風の精霊の一人。ジルフェと呼んで。竜細工師を北に住まう風は歓迎する」

その言葉と共に、荒涼とした景色は途端に消え失せた。

「うわ」

思わず瞬きして、私はおそらく幻術が解かれたからだろう、現れた光景を確かめる。

そこにあるのは床も壁も、水晶のように幻想的な輝きを放つ塔の内。螺旋の階段があり、見上げると2回の床は壁から離れた大きな円状のガラスの板のようなものが浮かんでいる。それが、幾層も。きらきらそれらは輝いていた。

今見ている景色のほうに余程幻のようだ。塔の壁に開いた小さな隙間を通してだろうか、吹きすさぶ風が美しい音色を奏でる。横笛の名人の鳴らす音楽のように。なんて、綺麗で、不思議なんだろう。

「どうだ、フィーさんにヴィーさん、驚いたか！うちのジルフェ様

の歓迎はすごいだろう?」

ドンの声にははっとして頷いた。

目の前の風の精霊はというと、一度こちらに微笑みかけた後、呆れた目をドンに向けた。

「ドンはロコを早く手当してやったら?」

ドンの小脇にロコは抱えられている。

「あ、やっぱりジルフェ様も心配だったんですね?お頭喜びますぜ」

「…下らないこと言ってる暇があるならもういつそその辺に転がしとけば?」

「今すぐ手当てします!!」

ドンがロコを背負ったまま上の方へ駆けていく。

残された私達三人は向き合った。

「あなたの噂にたがわぬ美しさにも敬服するが、二人同時に幻術を見せる力もまた素晴らしいな。ジルフェ殿?」

ヴィーが優雅に礼をとる。

「…それを早々破っておきながら」

風の精霊は眠たげに言った。

「つい反射的にな」

「随分あなたの力は弱っている、と思ったのに、お見事。戦いに身を置くものの性?」

「そんなところだ」

ふうん、と精霊はその長い軽やかに揺れる髪を弄った。

「…ところで『イオナイア国王』。先ほどあらかたドンにあなた方の事情を聞いたけど、あなたはドンに本職を明かしていなかった」  
シオンのことはともかく、と精霊はどこか不満そうだった。精霊は、虚偽を好まない。ヴィーは飄々と答えた。

「ああ。悪いが面倒ごとはごめんなのでね。嘘は言っていない」

「…相手がどう受け取るかを計算した上で事実を黙るのも一つの詐欺。その調子だと探し人の用も、ついでといったところかしら」  
「俺は探さなくてもいいくらいだが…」

「おい。ロイのことは絶対に探すぞ」

思わず声を上げるとヴィーは顔を顰めた。

「…この通りこいつがうるさい」

「ああ、ロイナスね…。フィオナには彼は、大切な人、だものね」

精霊は私を知っているだけあってロイを知っているらしかった。

「ええ。心配です、荷物はこちらにあるし…」

ロイは、何も持っていない。早く見つけ出さなければ。

「…お前があいつをどう思っているか知らないが、殺しても死なない類の人間だと思うぞ？」

ヴィーがどこかげんなりとした風に言った。私は首を振る。

「ロイは、弱くないけど。でも、そんなに強くもないんだ」  
「どうだか」

…ヴィーは、知らないから。

万一、発作が起きたらどうする。薬はこちらにあるのに。

気ばかりが焦る。美しい塔に見惚れている場合じゃなかった。

「あの…『縛られぬ自由』である、ジルフェにお尋ねします…」

精霊と直接話すのは、ひどく緊張することだった。ラエルと契約して以来開かれた感覚が、相手の強大な力をこちらに伝えてくる。言葉に詰まってしまう。声が出ない。

平然と彼女と語らうヴィーが、曲がりなりにも精霊国の王ということが今なら頷ける。ジルフェがぼんやり首を傾げてこちらを窺った。

「フィオナ、怯えないで。よく、感じとってみて。私はあなたを決して害さない。大丈夫」

す、とジルフェの美しい白い手が私の頬に伸ばされた。本当に強い力だ。私に精霊の力と相反する魔の性質もあるせいかびくりとしてしまう。けれど、触れた手から感じる力が包み込むように優しい春風に似ていて、私は力を抜いた。

「…はい」

「あなたが聞きたいのは、ロイナスのこと、でしょう？そうね。私でなくとも、盗賊たちが見つつけ出せると思うけど…」

「でも」

「分かったわ。生死の確認と、大まかな場所なら」



彼女は何かを探るように、瞳を閉じた。

## 77 少年と小鳥

『…イナス…ロイナス、目を覚ませ』

声がする。

ああ、冷たい。寒い。いや、どうでもいい。

心地よかった。このまま、眠ったように何もかも、終わらせられるなら、悪くない。そんな気分だった。

『ロイナス？』

放つといて。

もう、疲れた。身の内に眠るものを抑えるのにも。人を見世物のように眺める視線にも。もう。

『死ぬのか？ファイを、遺して…？』

ファイ。

誰だっけ。

刹那、小さな少女の姿が浮かんだ。母の後ろから、恐る恐るこちらを覗いた、薄い茶色の髪をした小さな少女。

やがて、少女はしなやかに背を伸ばし、少年のようになり、凜と背筋を伸ばし、真っ直ぐこちらを見て笑いかけるようになる。

「ファイオ、ナ」

唇は自然と動いて名を呼んだ。手は、自然と求めるようにそちらへ動いた。彼女を、知っている。

…想って、いる。

『…起きろ』

ぱちり、と目が覚めた。

「フイー？…グイー？」

一面の雪の中起き上がる。うつすら開けた視界の中に、彼女の姿はない。あの国王の姿もだ。ひどくぼんやりする頭を振った。雪が自分の体に積もっていたのを見て、下手すると凍死する寸前だったことを知ってぞっとする。

何故だか知らないが、目が覚めてよかった、と心から胸を撫で下ろした。

しばらく動き回ってみた結果、どうやらはぐれたらしいことを知る。ラエルが失敗したのだろうか。あの性格なら故意にそうしていてもおかしくはない。むしろ嬉々としてこういう嫌がらせをしそうだ。…まあ、単に失敗しただけかもしれないけれど。

感覚を研ぎ澄ます。

遠くに感じる力強く張られた風の結界の感じからして、風の精霊

の住まう国シンセには違いない。一安心だけど…どうしたものかな。溜息をついた。

フィー達がどこにいるか分からない限り、下手に動いてすれ違いになるのは避けたいところだが、ここにずっといたら凍え死ぬ。おあつらえ向きに荷物もない。踏んだり蹴ったりとはこのことだろう。しかもここは、精霊の気配がなく、ただいやな気配がある。

「戦場跡か…それとも流行り病で見捨てられた場所、かな？」

精霊はそうした穢れた場所を基本的に嫌う。時が経ち、それらの生々しい記憶が人々からも薄れたところになってまた彼らはその場所の再生に力を貸す。文字通り死も病も風化させていくのはまず風だから、その気配すらここにはないと言うことはかなり最近何かあった場所だろう。屍鬼は出ないだろうけれど、雪に隠されてあるものを考えるとあまり居たい場所ではない。

剣はかろうじて身に着けたまま。いくつかの装飾具も、そこそこに強い術具だ。いざとなれば売ってもいいし役には立つ。もっとも売る機会があれば、の話だが。とりあえず、一番近い精霊の気配がする方向へと歩き出した。抑え込んでいる力を半ば無理やり引き出したせいで頭がずきりと痛んだが、今倒れるわけにも行かない。

外界から孤立しきった、と言っても過言でないシンセに関する情報は少なく、風を崇める王国であることはよく知られているが地理といい風習といい情報が少ない。実際どれくらいの人々が暮らしていて、どのくらいの規模の町や都がいくつ存在するのか正確には分かっていない。島というだけあって動き回るのに絶望的に広いわけではないが、ここから離れて精霊の力を借りてもフィー達を見つけないのにどれくらいかかるかまったく検討がつかない。何度か見かけた記憶のある、『あの』シルフェにでも会えれば…彼女ならこの島

中探すことだつて無理ではないはず。だけど、彼女は気まぐれだし、この国にいるかどうか。

考えながらしばらく歩いてようやく、少なくとも、精霊の気配がするところまで辿り着いた。しかもそこではありがたいことに人の足跡が連なつて道を作っていた。

「よし。まず、町を探さそうかな」  
頭が痛む。一息つこうとした、途端。

「…何者!？」  
突然向けられた敵意に驚いて構えた。

「ん？」  
どこから現れたものか。よく見ると、相手はシライと同じ年恰好の少年だった。金の頭に可愛らしい白い『鳥』が乗っているのが愛らしい。ふう、と思わず抜いた剣をしまう。相手の少年はナイフを持ったままこちらの態度ににむつとした様子でぎつと睨んできた。

「この、気配。容姿。エルフ族…いや？なんなんだ、お前」  
苛々と問われる。

「…一応、人間だけど。君は？」  
静かに応じると、シライと同じくらいの年恰好の少年は、強く警戒した様子で一歩こちらから離れてから叫んだ。

「そちらが名乗れ！侵入者!!」  
ふむ。とりあえず余所者っていうのは、やっぱり分かるのかな。

「僕は、ロイナス・エルファンド。今は旅する術具師、かな」  
「術具？」

「そう。ほら、こんなふうに」

す、と指から指輪を抜き去ると、少年は目を丸くした。

「か、髪！？その、色！！なんで……」

「うん。幻術を使ってるんだ。この髪の色はいろいろ目立つから。これでも精霊術師の端くれです」

にこ、と微笑むと、彼は顔を赤らめた。

「…か、顔がちよつといいからって笑えばぜんぶ誤魔化せるなんて思っちなよ…って、痛い、痛い！何すんだよ！？」

つくつく、と少年はその頭から降りてきた白い鳥につつかれて抗議した。

「ほら、君の精霊は僕のことを『いじめるな』、って」  
「な、んだと！？」

ピーピー、と『鳥』は鳴いて答えた。

そして、ふわふわとこちらに飛んできて、僕の肩に止まる。撫でてやると目を細めた。可愛い。

「ライチっていうんだ？ふうん、彼につけてもらった名前なんだね」  
「ひ」

白い鳥は誇らしげに胸を張った。

「ライチ！？…おい、お前！ライチを放せ！！」

慌ててライチを取り戻そうとする少年をひよい、とかわすところり笑って僕は彼を見下ろした。

「ロイでいいよ？ポットくん」  
「な」

少年は凝固した。

「だってライチがそう言ってるから。違った？」  
「ポットで、あってるよ。畜生」

少年は脱力した。

「君付けするな、気持ちわりい。ポットと呼べ。お前、ロイ、確かに精霊術師の端くれらしいな」  
「そう。君より力の強い、ね」  
「ぐ」

彼はまだ精霊の言葉を聞き取れていない。だから明らかに僕よりは力は弱い。それを彼も分かるから反論してこない。最も、かなりライチに愛されてはいるようだけれど。裏表のなさそうな、いかにも精霊にすかれそうな少年だ。術力の器も結構大きい。でもまだまだかな。

「ねえ、ちょっと助けて欲しいんだ、ポット」

「術師に悪いやつはいないって言うけど、誰がお前みたいな妖しい

奴、

「頼むよ」

「い、いやだ！」

ぶい、とあらぬ方向を向かれた。頑固な。なんだかなんとなくフイーを思い出す。だから、あんまり意地悪したくなかったんだけど、しょうがない。

「…誘惑しちゃうよ、君のライチ」  
「え」

僕はライチに向き合った。そのつばらな赤い瞳と目を合わせる。

「ねえ、ライチ。僕と契約しなおすっていつのはどうかな」  
そつと鳥の顎を撫でてやりながら訊ねる。  
「ぴ、ぴ？」

「僕はポットより術力も強いし、君に似合う素敵な細工だって作れる。どう？」  
「…ぴ！…」  
いい返事だ。

「『…いいかも！』、つてさ」  
「う、嘘だ！お、俺の方がいいよな、ライチ？」

ライチはポットからつん、と顔を背けた。ポットは真っ青になった。

「…ら、ライチ？」  
「ほら、どうする？」  
「く、わ、分かったよ。何して欲しいんだ！さっさとええ！…」

ありがとう、助かるよ、なんせ、



「ちょっと今から、気を失うから暖かいところで介抱して、ほし、」  
それきり意識を失った。

78・胡散臭い医師

「いた。けど・・・調子が悪そう」

目を閉じ、柳眉を寄せた風の精霊ジルフェの言葉。  
フィーはそれにびくびくとしている。

「あ、倒れた」

「え？倒れた!？」

フィーはジルフェの一言に真っ青になって、ぎゅ、とその腕につけた猫目石の腕輪を握り締めた。王都にて彼女の知己に渡されらしく、先日ロイが術具にした一品だ。

「生きてはいるみたい」

「本当に？」

彼女はほうと胸をなでおろすと表情を緩めた。しかし変わらず眉を寄せたままのジルフェの表情に気付いて顔を顰める。

「ええ・・・でも」

「でも？」

不安げに問いかける顔は泣きそうだ。

フィーが一言一言にころころ表情を変えているのをジルフェは半ば面白がっているのにも気付かないで、彼女はただ一心にその言葉に聞き入っている。余程ロイが心配なのだろう。少なくとも生きていると言っているというのに。なるほど、一応こちらも旅仲間としてロイを心配するのも分かるし、フィーを見ていて面白いのは確かだがその過剰な心配ぶりがなんだか気に入らない。だからジルフェ

がロイの安全を確信した上でフィーをからかっているらしいことに  
対して口を挟まず、彼女を眺めていた。

「引き摺られているような」

「な!？」

「雪の上だから大丈夫じゃない?」

「まさか引きずっているそいつがロイに何かしたんじゃない?」

「多分そうではないと思う。相手は子どもだしね」

「子ども?まさかロイ、発作で・・・ジルフェ、ロイは一体どこに  
いるんです」

その問いかけに初めて、ジルフェの顔から芝居めいた調子が消え  
た。人では考えられない薄い色の目を開くと静かに一言だけ言った。

「あまり良くないところ」

「それは、どういう・・・」

フィーが聞きかけた時、がやがやと人が入ってきた。フィーもジ  
ルフエへの質問をやめて、思わずといった様子で口を閉じてそちら  
を見る。それほどにぎやかだった一行には、筋骨隆々とした壮年の  
男から年若い乙女も見えた。皆一様に、肩に白い『小鳥』を乗せて  
いる。彼らはこちらを見て、おや、と見事に揃って首を傾げると一  
斉に喋りだした。

「なんだなんだ」

「侵入者か?」

「いや、それにしちゃあ普通にジルフェさんと喋ってるでしょ」

「は、そうか!分かった、新入りだな。この濃厚な術力の気配!」

「おお、人手不足が解消するな」

「ふむ、素晴らしい」

「ええ？ただのお客様じゃないの」

「いやいや、かしの拾い物かもよ。どっかに転がってたのをつい  
うっかり、ってさ」

「ああ、よくあるもんね」

「で、結局」

「誰だあんたら」

新たにやって来た盗賊たちは口を揃えてそう訊ねてきた。・・・  
どうやらまた一から説明しなければならぬらしい。

「・・・だから、こいつは術師だっていつてんだろっが。見ろよ、  
ライチが懐いてるだろ！？」

「だが。ならば何故、契約したおもたる精霊がこんな状態の彼につ  
いていないのだろうかね」

声を潜める気もない様子 of 2人の会話に暗いところを漂っていた  
意識が引き戻された。一人はどうやらポット、みただけでもう一  
人は何者だろう。ポットの苛々とした声を受け流すように話すのは、  
淡々とした低い男の声だ。

「んなの知るか！！本人に聞けよ」

「だって今死んでるしなあ、この人」

「いや、勝手に殺すな！息してるだろ一応」

「え、分からないよ？こうしている間にも彼は儂くなっているかも。・・・なあ、ものの例えだよ、睨まないでくれ。ちなみに助からなかったら君はどうするのかね」

「・・・死んだ時は死んだ時だ」

「相変わらず素直じゃないねえ。ケツも青けりゃ、お優しいポット君。本心じゃないくせに」

「うるさい」

ゆつくりと重たい目蓋を開くと、視界にまずこちらを覗き込む白い鳥の姿が移った。

「ライ、チ」

「ぴびぴ」

僕はその白い姿に手を伸ばした。この小さな精霊を、手を上げて撫でることができくらいには力が戻っている。

「見てくれたの？」

「ぴー」

その背を撫でる僕の指に心地よさそうに目を細めながら、こくりと器用にライチは頷いた。

「そっか。ありがとう」

「さて、麗しきお姫様。起きたのかね」

その言葉に、浮かべていた微笑が無意識に強張る。ベッドの上でまだ起き上がることはできず、首だけ声の方に巡らすと、若白髪のみじった茶色の髪を適当にひとまとめにした男の姿があった。この薬品の匂いの充満した部屋の中白衣を羽織っているところからすると、医者だろう。

「ええ、お蔭様で」

努めてにつこりと言つと、相手は面白そうに笑つた。

「口元が引きつっているぞ？心配ない、絶世の美女に見えても男には興味がない。それにお礼を言われる覚えはないな、このようにポット君をその魔性でどのように誑かしたものが伺いたかつただけだから」

「俺は誑かされたわけじゃない、脅されたんだ！！」

その通りだけれど、ちつともこちらの援護にならない言葉を叫ぶポットはというと、どこかぐったりしている。皮肉屋そうなのこの医者と話していた所為というばかりではなさそうだ。

「まったく。大変だつたんだぞ、お前運ぶの・・・」

「そうそう、君より回復は早かつたが、随分遠くから引き摺つて・・・いや失礼、運んできたせいで体力のないポット君はさつきまで倒れていたのだ。本人には不幸としか言いようのないお人よしぶりだが君としては僥倖だつただろう」

力なく呟くポットの言葉を医者は補つたつもりだろうが、少年は医者を睨みつけていた。・・・今いるこの部屋は赤々と暖炉の火に照らされている。律儀なこの少年は出会いがしらにぶしつけなことを頼んだ僕を、わざわざ引きずってまで注文どおりの暖かな場所まで連れてきてくれたのだ。

「そうですね。心から感謝する、ありがとうポット」

「・・・ライチがうるさかつただけだ。調子戻つたらさっさとここから出て行けよ、ロイ」

欠伸をしながら医者と並んでベッド脇の椅子に腰掛けていたポットが立ち上がって部屋を出て行くと、ぱたぱたとライチが羽ばたき

て少年を追った。

部屋に残った医者、それをひらひら手を振って見送った後、こちらに向き直った。

「照れちゃってまあ、可愛いもんだ。なあ、ロイさん？」

「あなたと違って、ですか。刃を仕舞ってもらえますか？僕は今抵抗する力もないのですから、それほど警戒していただくかなくて結構ですよ」

「おや、ばれていたかね」

風の見えぬ刃を僕の顔面すれすれに浮かべていた白衣の男は、悪びれもせず胡散臭い笑みを深めると、刃を消した。

「いや、まるで降って湧いたかのように不審な人間をいかに弱って優美な姿をしていようが警戒しないわけにはいかなくてね。しかもただの術師じゃあないようだし」

「・・・あなたもただの医者とは思えない。もつと長く目を覚まさない覚悟をしていましたが、私に毒の中和薬を飲ませましたか？あなたは相当強い術師でもあられるようですね」

「いやあ、遠慮なく天才と呼んでくれていい」

術力を殺す薬に抗って無理に力を使った所為で倒れたため数日間目は目覚めなくてもしょうがなかった。この回復の速さは元来毒であるいつも飲んでいれる薬を中和するものを飲まされたとしか考えられない。そのような判断を下すにはこちらの持つ本来の力の入れ物たる器を見抜くだけの術師の力量と薬の知識がいる。天才かどうかはさておき目の前の男はその双方を持っているらしい。

「毒は消しきらなかった。勿論、弱らせたまま話を聞くつもりだっ

たわけだが、お前さんとしても完全に覚まされると困るんだろう、その力は。・・・おっそろしいな、お前さんは化け物か」

「いろいろ事情がありましてね」

日頃ならあるいは胸の痛むような侮辱も、あまりにあっけらかんと言われるとそこまでいやな気持ちも起こらないものらしいと知った。それにはこの男自身がちらともこちらに怯えてないことも手伝っているだろうけれど。

「あなたも、そこまでこちらのことを分かりながら僕を助けてくださってありがとうございます。・・・仮に化け物としても生えている鋭い牙は持ち腐れなものですから、僕のことは非力で哀れな仔兎のようなものと思ってくださると有難い」

「まあ、今なら確かに一ひねりだな。・・・で、ロイさん、お前さんは何でこんなところに？どうやって？」

「仲間と共に風の精霊の長を訪ねてきたのですが、彼らとははぐれてしまいました。ここへは飛ばされてきたというのが近いかな」

「・・・ふうん？」

納得はいつていないようだが、それ以上説明のしようもない。かといって一応は恩人を謀るのもあまり気が進まない。

「まあ、悪者でもなさそうだが」

「こちらが最早語ろうとしないのを見てとって、諦めたように白衣の男は溜息をついた。

「・・・あなたは、何者ですか。ここは？」

僕が問うと、面倒そうに彼は顔を顰めた。

「俺は運悪くこの町中の連中に子守を任せられたただの天才医師、



アカネだ。ここは、この国の名所の盗賊の住む森と王の住処に対してちょうど三角形の一点を描くようなところにある辺境の町トムソンの私の家兼診療所さ」

「町中の？人々はどこへ」

引つ掛かりを覚えて訊ねると、彼はにやり笑った。

「さあて？そろいも揃っておんなじ愚行を企んでいたのは間違いない。私は反対したんだが」

「愚行？何かあったのですか」

「花が枯れたのさ。・・・まあ、余所者は他人のことを気にせず、養生して、さっさとこんな町出て行くこつた」

謎かけのようなことを言ったあとアカネは笑って白衣を翻し、部屋を出て行った。

## 79・風の国の女王

「ロコ」

耳慣れたジルフェの声にロコは目を覚ました。なんだかぼんやりする。

「ん？僕、どうして…そうだ、ジルフェ、フィオレンティーノの知り合いは？ひよっとしてあれ、夢だった？」

「さあ。…その様子なら問題ないみたいかしら、ロコ」

相変わらずの調子で、ロコの寝ている真上の中空に漂っていたジルフェは首を傾げて見せた。そしてふっ、と姿を消してしまう。

「え、やっぱり夢なの？そっかあ、よその人がわざわざこんな厄介なところに来るわけないかなあ」

固いベッドから起き上がると、ロコは首を廻しながら考えた。なんと自分に都合のいい夢を見たものだ、と。

「残念だなあ。フィオレンティーノのこと、彼ならきつと、」  
「俺がどうかしたか」

ひよい、とこちらを覗き込む人物と眼が合い、ロコは動転した。あれは夢じゃなかったのか、と思う。耳にフィオレンティーノの耳飾、鳶色の短い髪と瞳、そしてあの時は襟巻きに隠れていたけれど首の細工師紋を見るに、ひよっとして。

「フィオレンティー、ノ…？え、君自身が本人？」

「一応そうだけど。フィーでいいよ、呼びにくいだろう」

「本物？竜細工師の？」

「…そうだが。なんで知ってるんだ、そこまで。公になることじゃないし、なったのはつい最近の話なのに」

眉を顰めてフィオレンティーノはこちらを睨んだ。だがロコはその疑問に付き合うどころではなかった。何故こんなところに彼がいるかは分からないがこの機会を逃すわけには行かない。

「フィオレンティーノ、僕、君に頼みたいことがあってさ！！」

「フィーでいって。質問に答えろよ。まあいい、それが何かを訊ねに来たんだからな。会ったばかりにも同じことを言っていたから気になってた。大抵のお宝なら手に入れられるって噂らしい盗賊の頭が俺に何を頼む？」

ロコは頭を下げた。

「フィー、お願いだ。耳飾を作ってください」

「耳飾、ねえ。いいよ、でも」

フィオレンティーノは微笑むと一言言った。

「報酬は？」

商談にはついてくるなと言って、ロコが目覚めたことを知らせにジルフェが来た後フィーは一人行ってしまった。ロコは一応お頭として一人部屋にいるらしく、そこを目指して階段を駆けていった。

水鏡の塔は、上の階に上つてみるとすっかり盗賊の居住空間となつており、その生活感漂うさまにフィーは少しがっかりした様子だったので、最上階にある彼の部屋ならば、と気になって仕方ないのだろう。おそらくこと似たようなものだろうとヴィーは思っている。盗賊たちが盗んだはずのきらびやかなお宝は一つとして見当たらず、素朴な白い家具や寝具、こまごました雑貨が溢れているに違いない。そんな場所に残されたヴィーは今、ぎりぎりと言音するほどの強さで盗賊たちによってお縄につけられている。この状態で置いていくなんて無情なものだと彼は少し悲しくなった。

「これだけ締めれば抜けないよな？」

縄をかけた屈強な男が満足げな顔でこちらを見下ろしてくる。

「ああ、無理だ」

ふ、とヴィーはそれに笑い返して見せた。

「俺以外ならだが」

ぱらぱらと腕から落ちる縄を払い、足を締め付けているほつもさつさとはずすと彼は立ち上がった。盗賊たちが息を呑む。

「すい…」

「嘘、なんで！？もう一回！！もう一回やってよ」

「いや、次は開錠術をやってもらおうぜ？」

「畏見破るのもやって欲しい！」

「別に構わないが」

祖父にやられたことを考えれば、大抵のことは容易い。それにしてもこの盗賊たちは警戒心というものが無いのだろうか。一通り事情を話すとさつさとこちらのことを受け入れ、ロイの搜索も気軽に

引き受けてしまった。まあ、ロイに関して言えばジルフェが既に大まかな居場所を掴んだようなので、明日そちらへ向かう手筈になっており、さして手はかからないだろうと思われた。フィーは再三ジルフェにロイの無事を確認しようやく商売つ気を見せるほどの落ち着きを見せ、ヴィーは盗賊の一人、ドンと交わした約束に応じることになり今に至るというわけだ。

「何でも求めに応じよう。ただ、どれからするかをまず決めてくれないか」

盗賊たちはその言葉に言い合いを始める。なかなか決まるには時間がかかりそうだ。それを眺めやりながらヴィーが苦笑していると、ジルフェがこちらへ来た。

「ヴィエロア」

「なにか？」

「あなたは鍵を開きたい？」

その声の静かな響きは、気だるそうな彼女の雰囲気がつかり抜けていた。まさか盗みのための開錠の話ではないだろう。

「今、それを聞くのか」

「まただ。戴冠して以来幾度かこれに類似した言葉にぶつかった。冠と石にまつわる話。」

それについては彼も長らく考えていた。風、水、土、火、それぞれを統べる精霊と会い、石を鍵にするというのはどういうことか。それは、竜という精霊の頂点に立つものとの契約の証として冠を頭上に得るようなものなのではないかと。つまり石を契約の証とする。

これは的外れな考えではないだろう。

ただ引つかかるのは『鍵』と『扉』という言葉だった。聞いて素直に答えるような性情ではない相手ばかりがこのことを口にするものだからこちらももはや閉口気味である。問いの意味も分からないのに説明もしないで答えばかり求めてくる。実に理不尽だ。そもそもその調子で、答えを得ても彼らはそれに満足できるのだろうか。

「鍵を開くことに関しては、まだ答えられない。ただ、授かった冠の意味を俺は正しく知る義務があると思っている。だからこの国まで来た。これではいけないか」

開く意思がなければ鍵にする意味がないというかと思えば、ジルフェは首を振った。

「別に。聞いてみたかっただけ。もしあなたに資格があれば、認めるのみ」

ならばやはり、扉の向こうを求めるかはその資格とやらに含まれないらしい。黙り込んだ彼女に、ヴィーはこちらから一つ訊ねることにした。今の問いで確信を持ったこと。

「ジルフェ。いや、シルフィードと呼ぼうか。何故あなたはこの国の王の元にいない？」

風の精霊の長の薄い色の目が、こちらを向いた。

「クロリス、シプリア、ディアンテ、エウニケ…コーラリア。コーラリア・サントシア・コンラツケ」

豪華な部屋で、静けさの中、暖炉の火がはぜた音と本を捲る音だけが響いている。

少女は、無心に捲っていた分厚い本のあるページを開くとその手を止めた。

「おばあさま」

庄政の記録がその名の後には連なっていた。それに対する数々の批判も。そして対照的に、まるで英雄のように讃えられる名がその後述べられている。

少女は溜息をついた。そして、本を火にくべる。それはゆつくりと燃えていった。

この本の作者は、何も知らない。おばあさまは悪くなかった。盗人が、裏切り者がいけなかったのだ。私は知っている。本当のことを聞いたのだから。可哀なおばあさま。

幼い頃の記憶に耽っていると、部屋におとなう者があった。

「ステファニア様、何をなさっておいでです？」

「あらヤナ。何でもありません」

「そうですか？」

やって来た相手は、暖炉にくべられた本を眺めて顔を顰めた。

「貴女さまが読みたいと仰るから私は市井の歴史書を随分探してお持ちして参りましたのに」

「つまらない中身でしたから。何故真実も知らないのにまるでこれが正史であると言うような大きな顔をできるのかしら、私にはさっ

ぱり理解できません」

「見る者によつて歴史など変わつて当然でしょう。遺したい真実が人によつて異なるのですから。それを記した本人にとって、そこに描かれたものは事実だった、恐らくは」

火搔き棒で本を救おうとしていたヤナは、出てきた黒焦げの本を見て溜息をついた。

「なにせよあんまり横暴ですよ。私も後で読むつもりでしたのに」  
「ヤナ、用件は何でしょう？それでこちらに来たのでしょうか」

用もないのに、この侍従が来るわけが無い。この風の国において、術力がないからこそ彼女が信頼して傍における唯一のこの相手は、馴れ合いを好まない少女の性格をよく知っているのだから。案の定、ヤナはこちらを向いて淡々と用向きを述べた。

「城に向かつて、反乱軍が動き出したようです。それをお知らせに」

少女はただ、頷いて見せた。いずれこうなると分かっていたことだったから落ち着いたものだった。花が枯れたあの時からこうなることは誰にも明らかだったのだ。

「いかがなさいますか」

「それに対して、私が何かすると思つて？」

「いいえ、陛下？」

侍従の応えを受け、自嘲するように少女は笑う。すると、少女の白い耳にあいた四つの穴に嵌った美しい耳飾が揺れた。

「無礼だぞ、ヤナ。ステファニア、お前は守るからそんな顔をする



な。攻めて来るものがあれば追ひ払おう」

今まで姿のなかった男がいきなり現れると、侍従を睨みつけながらそう言った。ステファニアはそんな精霊を眺め、緩々と首を振る。「貴方は黙っていて、エリアル。反乱軍のかかげる『新王』が誰か分かっているでしょう？もし反乱軍の先頭にもいたらどうするのです。勝てるんですか？」

「違う、ステファニア。あいつは……」

「何が違うというのですか？そう、味方なんて、この城にすらほとんどいないのに外にいるわけがなかった」

そうである限り、例え自身が犯した過ちでないとしても、王を継いだ身としてこの王族の過去の清算は彼女が被るしかない。私は籤運が悪かった、それだけのことだとステファニアは思った。

## 80・かすかな追憶

「ヴィー。商談がまとまったぞ、って邪魔したか」

ロコと話を終えてすたすと長い階段を降りてきたフィーは、ヴィーと精霊のなにやら真剣な表情を見て立ち止まった。

「いや、構わない」

そう答えたヴィーに、精霊は少し驚いた様子だったがそのまま静かに姿を消した。ロコのところに行ったのかもしれないとフィーは思う。

「で、何か望みのものは手に入りそうか？」

ヴィーが訊ねる。

「ああ。本当は盗品でもいいから宝石を貰おうかと思ってたんだけど、ロコは何も持ってないって言うから諦めた。お宝はほとんど全部民衆にばら撒いてるらしいな。だから別のものを貰うことにしたんだ」

「なんだ」

「この国に居る間の宿と、それから情報」

フィーは簡潔に答えた。

「・・・チットの情報が」

「し名答」

「なるほど、まあ悪くない取引だな」

ヴィーの言葉にフィーは頷く。

何かの情報を、というのはロコの提案でもあった。

風の精霊と契約している者の集団だという北の盗賊たちは、その気になれば簡単に世界中の情報を手にできるらしい。なにせ風の吹かない場所というのはいくつかの例外を除いてないと言ってよい。

問題はその例外が魔法使いの集う国であるということだった。魔が多たむろしていることもあり、精霊はあまり近づきたがらないその場所にこそ、チットとソラはいる可能性が高い。そこでなんとか無理を通してもらい、冠のありかを探ることをフィーは仕事をする報酬として望み、ロコはそれを承諾した。

取引成立というわけである。

「それで、何を作るんだ。あの洒落っ気のなさそうな男が欲しがるものとは興味深い」

「花を象った耳飾を作ってほしいと言われた」

「ほう、花の耳飾か。あの男なら似合わなくもない気もするが」

「贈り物らしい。・・・聞けば下手なレトリックだよ。お、ヴィー、呼ばれてるみたいだぞ」

ヴィーの名を呼び盗賊たちが手招きしていた。

フィーに促されて、ヴィーは盗賊たちのほうへ向かう。それを彼女は見送った。どうやら彼らと共に居る精霊がおそらく魔の気配を自分から感じるために少し怯えていることに彼女は気付いていた。自分を全く臆することなく歓迎すると言ってくれたジルフェは、おそらく相当高位な精霊なのだろう。とりあえず、怯えるものはあまり刺激しない方がいいと彼女は思った。

そんな事情を知ってか知らずか、ヴィーはというと、なにやら楽しそうだ。

共に旅をするようになってからフィーの知ったことだが、ヴィー

という人間は人好きする性質だ。王都を出て、彼が王として放つていた威厳というものの存在と大きさがよく分かった。それを取り払うと、やや皮肉屋の面もあるが、快活に笑い誰をも拒まない、存外に人懐こい面が途端にはつきりしだしたからである。そう、ヴィーという人間はいつも楽しそうにしている。今も。

少しその笑顔に見とれていることに気づいて、フィーは顔を顰めた。ヴィーはたががなく美しい人間の類だ。それは彼女の好むものであると同時にロイがいたから見慣れているものでもあったのに、どういうわけか最近しばしば目が奪われる。

フィーは考えていたが、首を振って気を取り直すとこの部屋を出ることにし、自分たちに宛がわれた部屋に向かった。ようやく見慣れてきた幻想的な塔の内部をうろつろとし、目指す部屋に辿り着くと自分たちの荷物からはみ出すものを見て彼女は思い出した。

はみ出すものは、一冊の日記である。

猫との約束だ。これを、この地で燃やさなければ。

暖炉にでも放り込んでおけばいいかとフィーは一瞬思ったものの、これを差し出したときの猫の様子を思い出して溜息をつくと外套を羽織った。もし、自分が予想するようにこれがこの地に縁のある人間の遺物であるなら、きつと外の大地に、風に、触れる場所の方がいいだろう。

今日はよく運動するな、と思いながら階段を降りて行き、外に出ると案の定寒かった。

凍えながら懐から取り出した日記をしばしフィーは眺めた。彼女には読めない文字で本の片隅に綴られているのは多分日記を書いた人間の名前だろう。魔は、その名すら明かさなかった。ロイやヴィー

「は読めたかもしれないが、生憎どちらもこの場に居ない。」

「一体、どんな人だったんだろうな」

これを書いたのは誰で、魔とどんな関係で、なぜ魔が日記なんて本来自分以外の他者の目にはさらしたくないような私的なものを持っていたのか。分からないことだらけだ。フィーは読めない名前をなんとなくなぞってみる。

「イヴ・サントシア・コンラツケ・・・今は亡き逃亡者の名前」

囁くような声に顔を上げると、いつの間にかフィーの目の前にある梢に風の精霊、ジルフェがいた。

「イヴ？これを書いた人を、あなたはご存知なんですか？」

「ええ。フィー、その日記を見せて」

イヴのことを知りたいのなら教えてあげるから、と言われて、けれどフィーは首を振った。

「お断りします」

「なぜ？」

ジルフェは問うように綺麗な弧を描く片方の眉を上げた。

「これを書いた人は亡き者だとあなたは仰った。死者は彼ら自身に関わるあることに対して、もし生きていたらどんなに抵抗を感じることも絶対抗議できないから、それが私と関わりのない人のことならば、私にはどうするのが正しいか全く判断しきれません。イヴという人が望んでいたことを私は知らない」

「・・・そう」

思いの外ジルフェは食い下がらなかった。ただ、じっとフィーを見つめた。

「ならば、フィー」

「ええ」

「ロコに頼まれたもの、必ず作り上げて」

お願い、とジルフェが言う。

「・・・勿論ですよ。それにしても、」

フィーは日記に火をつけようとしながら訊ねた。

「本当に咲いているんですか、この寒い国に、あの花が」

「咲いてる。生憎枯れてしまったものもあるけど」

「楽しみだな。ロイなんか花好きだから、喜びそう」

「・・・ねえ、フィー、気を遣ってるの」

「え？」

フィーは首を傾げる。

「別に何も、」

「魔法を使えば？私は別に構わない」

ジルフェは、フィーの持つ火打ち金と石を見ていることに気付き、フィーは微笑んだ。

「ああ・・・単なる習慣です。ロイとか皆は術でやってたけど、私は全く力がなかったから、師匠にこれ貰って以来ずっとこうして火をつけてた。慣れたものでしょう？」

言葉通り一度打ちつけただけで、その石が金属を削ってできた真っ赤な火花が開いた頁の表面にきれいに落ちて、あっという間に日記は炎に舐められていく。

「あなたは強いから、魔法を忌避しないのですか？」

「私も、単に慣れていただけ」

「え」

「それを寄越したものは、猫だったでしょう」

フィーが目を見張る。

「ラエルのこと、知って・・・」

「因果なもの。あの魔と、シオンの縁のものがこの危機にこうしてやって来たなんて」

ジルフェはただ煤となつて行く紙片に向かってふう、と息を吹きかけた。すると黒い欠片は銀の煌きとなり空中に舞い上がって行った。まるで浄化されたように。

「イヴ、あなたの導きなのかしら」

美しい風の精霊はその光景を、遠くを見るような茫洋とした表情で見つめて、それ以上何も話さなかった。

## 81・枯れた花と燃えた村

早朝の、この北の国の息吹はただひたすらに冷たい。しかしそれ  
にまるで構わないように、白衣の男は村中を歩き回って人を探して  
回っていた。昨夜やって来た病人が起きてみるといかなかったためだ。  
顎の無精髭を撫でながら彼は目を細めた。

「しまったなあ、もう行ってしまったか」

独りごちて彼は唸る。

「まあ動けるようならそれはそれでいいんだが」

しかし診療代がな、と言いながら男が踵を返しかけたとき。

「誰が行ってしまったんですって？」

「おや。おはよう」

朝日を浴びる麗人が、斜に構えて脇道に立っていた。田舎の村の  
光景にいかにも不釣り合いな美丈夫であるが少々顔色が悪い。

「おはようございます。…いくら私が不審であれ、そんな無礼を働  
くように見えますか」

「これは失礼、ロイさん。もうすっかりお体の具合はよろしいよう  
で？」

なんせもう散歩に出られるみたいだから、と男が悪びれもせず皮  
肉を言うと、ロイは顔を顰めて見せた。

「アカネさん、僕のことを探させてしまったのはすみません。けれ



どそもそも、僕は隣室のあなたの酈で起こされたんですよ。安静にしていられないほどのすごい音でした」

「ふむ。生憎自分の酈と言うのは聞く機会がないからその酷さは分かりかねるわな。治しようもないし諦めてくれ。それより何より診療代」

飄々とアカネは手を差し出してみせる。呆れた溜息をつきながら、ロイは懐を探ると何か取り出して、彼の手に乗せた。その引き起こした感触に、彼は一瞬言葉をなくした。

「それで足りですか」

「…十分」

一見価値の低そうな指輪のように見える無骨な色のそれは、そこそこの強さの魔ですら、軽く吹き飛ばしてしまいうるほどの力を持った術具だ。風の術師でもあるアカネにはそれがすぐに分かった。その彼の様子に、ロイはほっとした表情をみせる。

「それは良かった。实用重視ですから、デザインはほとんど無いんですけどね」

「まあ実際、この国の中では使わないんだがね。釣りは出せないぞ」

そう言って、流せばいくらになるか分からないそれを、ぴんとアカネは指で弾いてみせた。

「構いません。ただ、それは情報料込みと言うことでどうでしょう？」

返ってきたロイの言葉にアカネは片眉を上げた。

「情報ね。ふうん、まあ私は構わないが聞かれたことにしか答えな

い。質問は一つだ」

もったいぶった物言いに、あっさりとロイは頷いた。

「分かりました」

「いいのか？」

「ええ」

迷いの無い姿勢に、そもそも質問を許さなければよかったか、とアカネは顔を顰めた。面倒な問いが来そうだと感じたのだ。

案の定、彷徨おうとするアカネの目を真っ直ぐに捉え、ロイは問い一つでぴたりと核心をついて見せた。

「この村、トムソンの近くで精霊が寄り付かない場所がありますね。あそこで一体、何があったんですか」

アカネは溜息をつく。この青年はどうやら勘がいい、と気がついて。

「私はお前さんを甘く見すぎたか？花の事を聞くかと思えば」

「いえ、一番気になっていたことを訊ねたまでです」

そう言って、まだ本調子ではない様子でありながらも微笑んで見せる青年に、もう一度溜息をついて見せた後アカネは面倒そうに語りだした。

「そうだなあ。実にいい問いだよ。なんせ、花のこと、トムソンに大人たちがいないわけ、ひいてはこの国で今起きている大きな動きも全てはあの場所に原因を見ることが出来るから。まず、花について話さなければならぬかね」

「勿論ただの花ではないんですよね」

ああ、とアカネは地べたに座り込みながら答えた。その傍の雪が瞬時に溶けていく。風の精霊に加護を受ける彼の周りは周囲より温度が高い。腰はつけずに体が安定すると、アカネは話を続けた。

「まあ、いくらか特殊な花を除くともそもそもこんな年中ひっきりなしに寒いところに花は咲かない。でもずっと、それこそ風の国シンセの遠い建国の日以来咲き続けた花があった」

「契約の証ですか」

ロイは呟く。契約の証。それはイオナイア国王の冠のように、精霊と人間の間を結ぶ媒体でもある。

「しかし契約の証は人の代表者の身につけるものであったはずですね」

ロイが首を傾げてみせるので、アカネは頷いた。

「ああ。そっちは女王が身につけているほうだ。花はいわば民によく見える契約の証、この国に加護を与える結界の柱としてこの国の三箇所咲き続けた。それらの場所でのみ、この寒い国の中で豊かな土地が広がる。三点は王の住処、盗賊の住む森、そして例のシンセの傍だ。昨日、ちょうどそれを結ぶと三角形を描くようになるって言ったっけな」

「…では、花が枯れたというのは、シンセの傍のあの場所ですか？」

「そういうわけだ。もともとは村があった」

「成程」

風の精霊の守る国において、加護の柱が一つ消えた場所。あの場所ので精霊の気配が一つとして感じられないわけとしてはまだ不足している気がしたが、ロイは少し納得した。

「数十年前から花は徐々に萎れ、やがては原因も分からぬまま枯れた。それから土地は荒れに荒れたさ。なぜ、加護が失われたのか？民がその原因としてわが身を省み続けるしか無かったなら状況は変わったかもしれないがね。折悪しくというかなんというか、花が完全に枯れた頃、不吉な噂があった。女王の耳飾は欠けている、と」「欠けている？」

「女王の耳にある6つの耳飾。正確にはそのうちの3つが契約の証としてあるわけだがまあ、3組にしてバランスを取ったんだろう。そのうちの1組が、今代の女王の耳には見当たらないんだとさ」

そもそも遠目に見るしかない一庶民にはそうと気付くことなんざ出来ないもんだがね、とアカネは一息ついた。つまり、その噂の場所は女王の傍にあるということだ。ロイが考え込む間にもアカネは話し続けた。

「ついでに、あの土地は風の精霊との契約の柱があったこともあって、あそこに住んでる連中はみんな風への信仰が厚かった。そこに生きる誇りもあって、花が萎れ始めて土地がやせ始めてもそこを離れようとしなかった。花が枯れた時の連中の堪えてきたやるせない鬱憤と絶望が、どこに向かったか、もうお分かりだな」

間違いなく、風の精霊との契約の証たる耳飾を失ったという女王の責を彼らは糾弾するだろう。悪ければ、反乱を起こす。女王を王たるにふさわしくないものとして。

「こうして村は反女王派の巣窟となりましたとさ」

淡々とアカネは言う。ふと、ロイは嫌な予感がした。

「…私の通った、精霊の気配の無い場所のすぐ傍には、村の住居の跡が全く見当たりませんでした」

「そうだろうとも。…村は、ある日、跡形も無く燃えてしまったんだ。原因は不明とされているがね。それが、あの場所で起きたもう一つの出来事だ。結構最近のことさ」

「トムソンの人々は、そのことを女王の仕業だと考えた？」

「ま、そういうわけだ」

分かっただろう、とアカネは話し疲れたこともあってか、どこか投げやりな調子でロイを見上げて言った。

「こんなところ早く出て行くことだ」

「フィー。起きろ。フィー？」

いつもと違う声が呼びかけている。そう、毎日聞いてきたあの声ではない。けれど、同じくらいには、どこか優しい声。

フィーは違和感と共に、うつすらと目を開けた。見慣れた空の色でなく、深い海の青色が思いがけず近くにあった。

「ヴィーか…近い」

「これでも距離をとっているつもりだが？」

「話し辛いから離れてくれ。いやいい、私が離れる」

自身の横たわる寝台のすぐ脇にいた青年からフィーは起き上がった距離をとった。溜息をつく。旅を始めてまだそんなに経ってはいないがわかったことがいくつもある。その一つが、睡眠中に近寄る気配には敏感であるはずなのに、ロイとヴィーに関してはそうでないということだ。ヴィーに関しては気配を消すことに長けているせいか声をかけられるまで目覚めないことが多い。さらにいえば、ヴィーに部屋の鍵は意味を成さない。彼から寝首をかかれる覚えは今のところないが、万一に備えて自身を鍛えなおすべきかも知れないとフィーは思った。

それにしてもなぜいつものようにロイではなく、ヴィーが起こしに来たのかと彼女は首をかしげる。ヴィーは既に髪を一つに結び、外着をまとっていた。

「おはよう。ロイは？」

「おはよう。残念ながら、かの美人は行方不明だ。ひよっとして寝ぼけているのか」

行方不明、とぼんやりフィーは呟いた。

「寝ぼけているな。よし、相変わらず酷い寝癖だから、なおしてやるわ」

なんだか楽しげに笑いながら伸ばされる手に頭をかき回され、顔を擽めてそれを払う。

「何をする」

「髪型も整うし、刺激で目が覚めるだろう？」

「…両方逆効果だ」

立ちくらみに似た寝起きの具合の悪いのに加えて頭をぐらぐら揺らされて、しばらく放心していたフィーだったが、次第に昨日までの出来事が甦ってくる意識がはつきりと醒めた。

「そうだ、行かなきゃ」

そのまま出て行くこととするフィーをフィーは止めた。

「早めに起こしに来てやったのだから焦ることはない。まず着替える」

そう言っつてのんびりと手近な椅子に彼は座り込む。フィーはそのにこやかな笑顔を睨みつけた。

「…とりあえず出て行け、変態」

「つれないな」

フィーは居座りそうなヴィーを無理やり追い出すと、急いで身づくろいを始めた。着込まねばならなかったため、時間がかかるのが

もどかしい。

無論純粹に心配なこともあるが、わが身の安全のためにもロイを早く見つけなければとフィーは思った。

そろそろ昼に差しかかるうかと言うころになってようやく目を覚ましたポットは、自室の窓辺から女王のいる方角へと見えもしないのに目を凝らしていた。彼が精霊の力をうまく扱えるならライチに飛んでもらってそれを見ることが叶うかもしれないが、まだ彼は飛ぶことを知らない。未だあの件について黙したままの女王に一言訊いて来てやると勇んでいた父は今頃、どの辺りにいるのだろう。父も風の術師だが出て行って以来連絡がない。もう結構経つというのにだ。無事でいて欲しい、とポットは風に願う。大人達はみんな出て行ってしまった。風の精霊達や、アカネの制止も聞かず、暗い顔で、女王に会いに行くと頑なに言い張った。

父も同じだ。

ポットと同じように男手一つで育てられた彼の年の離れた兄がいる。兄は、ここトムソンの傍のあの場所、花咲くルチアの町で好き合って結婚した相手と暮らしていた。そしてあの日、突然にいなくなった。…いや、亡くなった、と言ったほうが正しいのだろうか。未だに信じられないのだ。ポットは彼の兄の亡骸を見ていない。元々あったものの元の形が全く分からなくなるほど徹底的に焼き尽くされたルチア。積もる雪がそこだけなく、ただひたすらに一面に黒く焦げて異臭を放っていた町を彼は思い出して身を震わせる。たまたまその日兄のところに遊びに行ったポットは、あの異変の第一発見者になってしまった。

花が枯れて以来きな臭くなるあの場所から引越すように再三兄



に告げ、なかば兄と絶縁状態になっていた父はそれでもこの兄の『行方不明』に泣いて怒った。ポットだって、少し泣いた。…少しだ。

そしてあの場所を焼いた人間がどうしても恨めしい。

「ライチ、あれをやったのは本当に女王なのか」

困ったように鳴くライチを見て、ポットは苦笑した。

「やっぱり答えられないんだな」

「ピー…」

シンセの人と風の精霊を結ぶ代表者である女王をシンセの風の精霊たちは滅多なことでは裏切らない。しかしライチがいつものように首を振って否定しないのを見るに、女王とルチアの焼き討ちに関わりはあるのだろう。なにせ、彼女に対して大きく反感を抱く者達が集っていた場所ではあるし。

肩の上に乗っている白い小鳥の首をかりかりとポットは撫でる。

ライチは目を細めてそれを受けた。ポットはそのまま立ち上がって部屋を出ることにした。

ライチと同様に、罪の確たる証拠ともなる他の風の精霊の肯定も否定も得られないために、ルチアの花が枯れたこともルチアが焼かれたことも大きな議論と鬱屈を巻き起こして国を混乱に陥れた。一度だけ見た女王の姿をポットは思い出す。この国の英雄が惚れ込んでいると噂になったことがあるのも頷ける可憐でどこか薄倅そうな少女だった。

しかし人というのは見かけによらぬものである。なんだかよれた白衣に無精ひげをした胡散臭い見かけに反し、腕のいい医師であり結構面倒見のいいアカネ然り、

「ああ、ポット。ようやく起きたんだね、おはよう。朝ごはん作らされたんだけど食べるかい？」

「…食べる。おはよう」

なんだかいやに料理に手馴れているらしいこの綺麗だけど存外凶々しい青年然り。ライチをつれていつものように食堂に向かうと、質素なテーブルクロスが敷かれた食卓の上によく煮込まれたポトフとパンやサラダが置かれており、ロイという名の青年はそこにいるのがさも当然と言わんばかりにのんびり椅子に腰掛けて紅茶を入れていた。

「さあ召し上がれ」

優美な笑みを浮かべて青年は言う。もしあの惚れっばい義姉さんがここにいたら、うっとりして兄をやきもきさせるだろうな。そんなことを考えて、ポットは溜息をついた。やはり自分には彼らが死んだなんて、信じられないのだ。

「どうしたの」

「なんでもない。動けるようになったんだな、まだ寝込んでるかと思ってた」

「もう大分いいんだ。君には感謝しているよ。…もっとも、起きてしまったのは無理やり起こされたおかげかな」

「無理やり？」

なかなか旨いポトフをががつと食べながらポットが首をかしげていると、アカネが咳込んでいた。

「…なあ、ロイさんや。しつこい男は嫌われるぞ」

「構いませんよ」

「嫌味か。これだから顔のいい男は」

なにやら言い合う2人に構わず料理をかき込んで、ポットは立ち上がった。

「ごちそうさま」

「待て」

そのまま出て行くこうとするポットを、アカネが止めた。強い力で腕を掴まれ、ポットは顔を顰める。

「なんだよ」

「…動くな、喋るな。じっとしてろ」

いつもと違う真剣な声でアカネが言うのでポットはきょとんとした。ロイも、全身を強張らせている。ふと、肩から震動を感じてポットは戦慄した。滅多におびえない彼の精霊が震えている。

「ライチ？」

精霊は答えず、怯えている。

「ほう、ここが変わり者で有名なあの医者の家か」

外からふと、耳障りで大きな声が響いた。

「約束が違うじゃないか。俺らは陛下を殺すとまでは言っていない

！！」

地下であるためか、興奮した壮年の男の声はいやに響いた。

「怖気づいたのですか。もう道も半ばまで来てくすり、と一つ笑って答える、まだ若い深くフードを被った男の声は一方に比べて随分と落ち着いている。

「あなた方は大切なものを奪われたのでしょうか、悔しいでしょう、憎いでしょう？ 全てあの女王が悪いのですよ。精霊は黙して当てにならない、女王の取り巻きも愚か者ばかり。あなたがた以外の誰が彼女を裁くと？ あなた方にはその権利がある」

滑らかな声につむがれる言葉は、まるで呪文か性質の悪い酒のようそこに集う人々の中に染み込んだ。彼らは、そうだ、そうだと頷きあう。手には黒フードの男が先ほどもたらした真新しい武器が握られている。しかし、いつからか熱に浮かされたような仲間と自分の間に隔たりに違和感を覚えていた壮年の男は目の前に山と置かれた武器をとりもせず、素直に頷きもしなかった。黒いフードの男は、面倒そうに一人自分を睨んでくる男を見やって訊ねた。

「なにか？」

「あなたは風の精霊を共にすると女王に伝わるからと言って、なんだ、精霊よけの結界を張るとかいったな。俺を精霊と引き離れた」

糾弾する口調に構わない様子で、黒フードの男は口元の笑みをそのままに首を傾げて見せた。

「それがなにか？ 風の国の女王に刃向かおうというのだから当然でしょう。あなた方の安全のためですよ、ひいては我々の、ね」

「…俺らは風と共に生きる根っからのシンセ人だ。それはな、俺らが堂々たる自由な人間だってことだ。風はいつでもそこにあるから、

やましいことは滅多にできない。しないようにする。だからどこにいたって堂々としてられる。そして俺達には風のもたらす翼がある。その気になればどこにだって行ける。

で、だ。俺は元々な、女王様に一言事実を聞いてやるつもりでいた。それからどうするか考えようと思ってた。それならなんら恥ずかしいことでもなんでもない、こそこそする必要もない。だからずつとおかしいと思ってた、なんで精霊から隠れて俺はこんなにおどおどしてなきゃならないんだって。やましいことなんてないはずなのに。そう、その時点で気付くべきだった」

「何をです？」

「あんたがなんかよからぬことを企んでる、余所者だろうってことだ」

ふ、と黒フードの男は感心したような息を漏らした。

「なるほどねえ…子は親に似るといいますが」

「…何を言ってる？」

「いえ、術力が強いお方はやはり違うと思ひまして。そうですね、確かに私は余所者だ、けれど今はこの地に根付きつつある。これは事実です。それにあなた方になんら悪意はないということもね」

「だが陛下に悪意を持っている」

「そんなこと、あなた達と何が違う？同じでしょう」

「俺には殺す気はないと言っている」

ふと、黒フードの男は壮年の男に近づいた。彼にしか聞こえないような声で囁く。

「あなたの上の息子さんに会いたくないですか？」

「なんだと！？息子は、」

「生きていますよ。可愛らしいお嫁さんと一緒に。この件が終わっ

たら会わせて差し上げます、必ずね。でも従わないというのならどうするか分からない」

「お前は…何者だ」

「余所者ですよ、シンセイ人になる展望を持った余所者。それでいいじゃないですか。いいですか、テットさん、あなたは力がずば抜けて強いから抜けてもらおうと困るんですよ。今回の要ですから」

期待してます、と一言続けて、黙り込んだテットを振り返りもせず黒いフードの男は去っていった。

### 83 来訪者

「おい、さっさと出て来い」

素っ気無い木の扉を叩きながら、アカネの家への来訪者は声を荒げた。先ほどから返答がないため、彼はいらだっていた。

この扉を壊してしまうかと来訪者が思案する頃になって、ぎい、という音とともにようやく扉が開く。

「どうも、こんにちは」

「…お前は誰だ？」

いやに綺麗な顔をした青年が現れて、挨拶をすると扉を後ろ手に閉めた。白衣の男、アカネが出てくるのを待ち構えていたが、やって来たのは銀の髪をした全くの別人だったので、来訪者は呻くように問いを続けた。

「医者を出せ、家の主が客人に対応しないとは無礼とは思わないのか」

「確かに僕はこの家のしがない居候で、客人をもてなすには不向きかもしれない。けれど来訪する相手によってはそうでもない。あなたこそ、何者ですか」

その体はこちらの放つ気配に対して強張っているものの、空の淡い色を映したような美しい瞳は、まっすぐと来訪者を射抜いた。

「あなたは人ではない。風の精霊でしょう、それも相当な力を持つた。何故あなたは、そんなふう威圧するような気配を漂わせているのです」

来訪者はその言葉に目を細めた。

「無論、そちらが滞りなくこちらの言うことにしたがってくれるよう力を示している。…少々妙なところはあるがお前は術師のようだな。それならば分かるはずだ、どんな恩がああ医者にあるのかは知らないが、そのために私を阻むなどとても割に合わないことだ、と」「それは僕が決めることです。ひとまず用向きを尋ねましょうか」

どういわけか銀の髪青年は、来訪者の力を分かっているなあ、退くつもりはないようだった。無謀な振る舞いに多少苛立ったように、来訪者のため息をついた。

「ひかめと言うか。奴には二三、質問があるだけだ。さあ、退け」「いやだ、と言ったら？」

青年は、彼を押しつけて扉の向こうへ行こうとする来訪者を、思わぬ力で留めた。

「貴様、ふざけるのも大概に…！」  
来訪者が激昂すると共に、あたりに大きな竜巻を今にも引き起こそうとするかのような風が渦巻きだす。大気が来訪者の力と怒りにまるでおびえるようにごうごうと唸る。渦中にある青年の銀の髪が煽られて狂ったように舞ったが、顔は顰めても彼はどこか平静な顔をしていた。

「待て」

どこか疲れた声による制止に、風は収まりだす。来訪者と青年は、扉を再び開けた白衣の男に顔を向けた。

「遅いですよ、死ぬかと思いました」



「ご冗談を。そろそろ私が来る頃だと分かっていただろうに」

まあ、助かったよロイさん、と続いた言葉に、ロイは少し微笑んで見せた。

「アカネ、か？本当にこんなところで医者をやっていたのだな」

来訪者はどこか複雑な表情でなにやらしまらない風采の医者を見た。医者は来訪者に胡乱な目を向ける。

「どうも、久しぶりというべきか。いきなりやって来て、愛おしき我が家を破壊するつもりかね、ご客人。いや、エリアルだったか」  
「覚えていたのか」

ロイは知り合いらしい二人の関係を把握しかねて様子を見ていた。無論どちらも好意的とはとても言い難い。しかしなにより来訪者の名にロイは驚いていた。『エリアル』、それは確かシルフィードの。

ロイが考える間にも、アカネはいつもの調子で強い力を持った精霊に向かって話している。

「そんなに殺気だつて、一体なんのご用だ…ってまあ、おおよそ当たりはつけてるがね」

「ならば話は早い」

「こちらとしては予測が外れていることを願って止まない。一応伺おうか」

「…謀反者の息子はここにいるな。差し出してもらいたい」

その言葉に、アカネを深く溜息をついて首を振った。

「やはり、手っ取り早く彼の子どもを脅しに使って反乱をやめさせるつもりか。相変わらず短絡的だな、誰に踊らされたんだね？」

「やかましい、ともかく差し出せ」

「断る」

きっぱりとアカネは首を振った。

なるほど、とロイは思う。こうなることをはつきりと予想していたから、アカネは先ほどのような行動に出たのだ。

エリアルという来訪者がやって来てすぐ、アカネはポットの説得を始めた。いわく、まず隠れる、そして決して出てくるなど。アカネが理由をはぐらかすためになかなか頷かないポットに手を焼いて、ロイは時間を稼ぐように言いつかって荒ぶる精霊への応対にまわされたのだ。

エリアルはほぼ間違いなく王族と契約を結ぶ精霊だろう。

分からないのは、この来訪者が何者かを声と力の気配だけで理解し、さらには旧知の仲であるらしい、『アカネが何者か』だ。ロイは風采の上がないようすだった白衣の男を見た。

今、その目つきは鋭く、まとう雰囲気は全く違う。…同じ雰囲気を持つ人間を、ロイは一人知っている。

「まだ、君達の元へ向かう彼らが謀反を企むものと決まったわけではあるまいに」

アカネは腕を組んで精霊と向き合った。精霊は眉を寄せた。

「徒党を組んで武器を持ち、精霊の目を逃れる者など信頼できるか？」

「…仮に謀反だとして。子どもを盾に取るようなやり方で、本当に反乱が治まるか？今は矛を収めるかもしれない、だがこの先は？燃え上がっている、王への不審が和らぐか？」

その言葉に精霊は黙り込む。

「君が『あの子』を大切に思っているのは分かる。だがそのためだろうと私はそんなやり方は気に入らない。君もあの子もそういう手立ては取らない、そう信じていたし、いたかったがどうやら違つか？」

「それは…だが」

「ポットを差し出す気はない。納得がどうしてもいかないというのなら、私を連れて行くといい」

「な」

「勘違いするな。昔も今もあの椅子に、欠片も興味はない。だが風と結ぶものの端くれとして、その王に降りかかる火の粉を払うくらいはしよう」

「…分かった。お前が行くというのなら、子供のことは手を引こう」

できればやりたくなかったがねえ、とアカネはぼそりと呟いて、ロイのほうを向いた。

「そんなわけで、元気だな、旅人さん」

「そんなわけだと言われましても、なにが、なんだか」

このまま行かせるのは何かまずい気もするが、ついていけばフィ―と再び会つのが難しくなる気もする。どうするべきか、迷うロイをアカネは笑った。

「お代はもう十分もらったし、あんたがこの国に付き合う必要はな

い。ポットや子供たちのことは、ロコがなんとかするだろ。だから、奴らにはよろしく伝えといてくれ」

「ロコって…」

「行くぞ」

その時、強い風が吹いた。人の形を崩すエリアルが少し見えたが、あまりの風の強さにロイが目を瞑ってしまう。

再び目を開けた時には、アカネもエリアルも、いなくなっていた。

「ロイ？」

様々なことをどう処理したものか考えあぐね、とりあえずポットと話そうと家の中に入ろうとしていたロイは、ふと耳に入ってきた声にはっとする。慌てて声の主を探すと、再び女性にしては少し低い、しかしよく耳に馴染んだ声が彼の名を呼んだ。それを追って見上げれば、大きな白い鳥の背に乗って、こちらに手を振る薄茶の髪の少女の姿が見えた。

「フィー！」

「ロイ、無事だったんだな!？」

相変わらず少年のような姿の少女が、鳥から飛び降りて、積もった雪に足をとられそうになりながらも彼の元へ走ってやって来た。

## 84・風の長

「ぴい」

ポットの腕の中で、その小さな頭を伏せ、小刻みに震えていたライチが、ようやく顔を上げて鳴いた。

「…いなくなったのか？お前が怯えてる相手」

ライチは、そうだ、というように再び鳴いて答えて見せた。ライチが怯える意味が分かったのは、アカネが出て行く直前のことだ。

あの時、外で風の力が大きく動いた。ひよつとすると、先に外に出ていたロイはそれに巻き込まれたかもしれない。

ポットは、そのときのことを思い出して拳を握った。思わず飛び出していこうとしたポットに、それまでポットに向かって隠れていたとひたすら言い続けていたアカネが、これまで見たこともないような鋭い声で、『足手まといになるからここにいるんだ』、とそう言った。動けなかった。言い返せなかった。それを見て、静かに目をそらしてアカネは出て行った。

ポットは強くはない。そして、アカネがおそらく、自分をやって来た何かから守ろうとしていたんだろうということが分からないほど鈍くもない。だから足手まといという言葉は否定できるわけもない。

だが、それをすんなり受け入れるのが嫌だった。だから子どもらしいとは分かっているにもかかわらず駄々をこねってしまった。

それでも結局、こうして隠れ、今も地下室から飛び出て行けずにいるのは、アカネの冷たい表情を思い出したことだ。ともかく切迫した事態であるのは間違いない、強大な力を持った人物がいなく

なっていたとしても出て行っているのか判断がつかない。

それに、アカネの言葉がポットの頭から離れなかった。『足手まとい』。

「畜生」

力がないのが酷く歯がゆいとポットは思った。自分の分らないところで話をつけて、全て終わった後で『大丈夫』なんて言葉を寄越すだけで納得がいくわけではないのに、文句も言えない。戻ってきたらきつとアカネはそうするだろうと予測はついた。

「…戻って、来るよな」

ふと浮かんだ不吉な予感に、ポットは首を振った。あのアカネが、まさか自身が死ぬような場にこのこ出て行くとは思えない。

「ぴ」

「どうした、ライチ？」

それまで寝めるようにポットの頬に頭を擦り付けていたライチが、いきなりぱたと飛び上がると地下室の出口に向かった。ポットはそれについて立ち上がり、扉に向かう。

「なんだ？アカネとロイが戻ってきたのか」

「ぴい、ぴい」

いやにライチは興奮している。ポットがいなければ扉を突き抜けていけるだろうに、彼がそこを開けるのを待っている律儀な精霊に、ようやくポットは微笑んだ。

「わかった、行くっ」

迎えに行こう。そして無駄かもしれないが、とにかく一体何があったのか聞こう。そうして地下室から出たポットは勢い良く表口の方へと向かった。

外では、ロイ、フィー、そしてヴィーの3人と、何人かの盗賊たちが顔を合わせていた。

「無事だったようだな。まあ、一日で死に掛けているようではこの先が思いやられるが」

「…ご心配おかけして、すまなかったね」

否定できない部分もあるので少々歯切れ悪くロイはヴィーの言葉に答えた。

「いや、俺は一切心配していない。お前が転移した先がひよつとして海中だったり火口だったりしたら面白いとおもっ…もとい冥福を祈っていたかもしれないが」

「それはおあいにくさま。…どうやら『そちら』も変わらないようでしたよ」

「…ああ、まったく悲しいくらいに変わりない。もう少しお前がいなくてもよかったですくらいだ」

フィーとヴィーを眺めながらのロイの皮肉に、ヴィーはそう返した。

ロイはそこで軽口の応酬をやめ、フィーとヴィーの連れてきた者へと向き直った。

「そちらの方々は？」

「ああ、盗賊なんだって。ロイを探し出してくれて、ここまで来るのに協力してくれた」

「盗賊ね。…あなたは、どうしてここに？」

フィーの応えを受け、ロイの問うような視線が、盗賊たちのある一箇所に止まる。それを受けて、ロコはにっこりと笑って見せた。

「あ、俺はロコ・マルシェって言うんだ。ここにいるのは俺が盗賊の頭だからかなあ。君がロイだよな？よろし、うぐ」

「ロコ。あなたじゃなくて、私にかけられた問いなのでは？」

ロコのすぐそばにいた大きな鳥が佳人の姿をとると、ロコを遮ってロイに向き合った。

「お久し振りというべきでしょうか」

そんなロイの言葉に、淡い色をした精霊は首を傾げて見せた。

「この姿でははじめまして」

「知り合いか？」

フィーの問いに、ロイは少し迷うように目を伏せる。

「知り合い、というよりも、知っている、という方が正しいかな。無論、向こうはこちらを知っている。なにせ、」

ロイは一瞬間を置き、測るように美しい風の精霊を見やったが、制止する様子がないのを見て言葉を続けた。

「…彼女は風の長だよ。フィー」



「風の、長？」

その事実を目を丸くするフィーを除き、ヴィーも盗賊たちも、平然とした顔をしている。一人驚きつつも、自身の魔力に怯えず、圧倒的な力を持ったジルフェの姿を思い出し、フィーは納得したように、「なるほど」と呟いた。

「それでああなたは何故盗賊のもとに？」

再びのロイの問いに、風の精霊、ジルフェは薄く笑む。

「風は自由。縛られない。知っているはず」

「ですが、精霊である以上、誠を好む。そうでしょうか？…契約は？  
…違えていない。私は守ろうとしているだけ」

静かに向き合うロイとジルフェの間に、雪をはらんだ風が吹きすさぶ。フィー達を運んできた盗賊たちは大人しく様子を見ていたが、ドンを始めくしゃみをしてみたり身震いしたりと寒そうにしている。それを見て、ロコはやおら二人の間に割って入ると声をかけた。

「まあ、寒いし立ち話もなんだし、とりあえず屋内に行くのはどうかなあ」

そう言っって、彼がアカネの家の扉を開こうと取っ手を手にしたその瞬間。

「おい、アカネ。終わったんならさっさと入って来い、って、ええ！？」

「…お頭！？し、すっかりして下さい！」

見事、ロコは勢いよく家の中から開かれた扉に頭をぶつけて転倒した。

「じゃあ、やって来たアカネの知り合いに招かれて、アカネはついて行くことになった。それだけだって言うんだな」

「そうだよ。大げさに騒いでもまなかつたね」

「ふうん」

渋々というふうに頷くと、ポットはロイに向かって溜息をついた。

「なあ。それで、あいつがアカネの言う『ロコ』って奴なわけ？」

「そう名乗っていたね」

「あいつに任せるなんて、大丈夫なのか…？」

大体、いきなりやって来といて我が物顔にこの家の中陣取ってるし、何者だよ」

遠目にポットはロコを眺めた。彼は、扉との衝突の衝撃から立ち直ると、お茶でも入れようか、と言っつてうろろろしだし、熊のような顔をした大男にそれを止められ、美しい精霊には貶されている。それじゃあ僕が、と言っつてお茶の用意を始めようとしたロイに、見知らぬ大勢の来訪に惑うポットはついてきて台所でロイと話していた。

「悪い人じゃないと思うよ。ほら、あの精霊も彼についている」

「それは確かにすごいけど、悪人かどうかは関係ない」

そう言いながらも、先ほどの一件を詫びるポットに、全く気にしていないから大丈夫、と言った時の青年の様子から、あれはただのお人よしだろうとポットは考えていた。せいぜいが変人だ。そんな人間が何故、ライチが先ほどからうつとり見惚れ、憧れのまなざしを向けるような精霊を連れてくるのかはなはだ疑問だとポットは思う。そんなポットの様子も構わず、さつさとお茶を入れると、ポットに持っていく盆を渡しながらロイは思いついたように呟いた。

「悪人：ああ、そういえば盗賊って名乗っていたけど」

「ふうん。ん？…盗賊！？」

「義賊の類かもしれないし…ポット？」

いきなり顔色を変えたポットに、ロイは声をかけたが、ポットは驚愕の表情でロコの方を向いている。

「…マルシエ」

「え？」

「奴の下の名前。マルシエって言うんじゃないのか？」

ポットから真剣な目でそう聞かれ、ロイは記憶を手繰りながら頷く。

「そうだったかな、確か」

「やっぱり！北の盗賊だ！うわあ、何でこんなところに頭のマルシエまでいるんだ！？」

「北の盗賊？」

一人そわそわしだしたポットにロイが尋ねると、彼は目を輝かせて語った。

「彼らは義賊も義賊、この国の英雄だ！当代も凄腕らしいけど、先代も凄くて、ひどい政治をした当時の女王様を懲らしめたい。あの綺麗な精霊、当代の頭が、シルフィードを連れてるって本当だったのかな。通りで皆あんなに騒ぐわけだ」

ふと、ロイはアカネの語っていたことを思い出した。

女王の耳から欠けた耳飾。

そして、王族への募る不信任感。その一方で、盗賊は。

「…どんなふうによ？」

「え？」

ううん、と、そうだな。貧しい奴らには凄いい人気だし、王族を糾弾する奴らは、北の盗賊のマルシェこそ王にふさわしいって言うる」

「そう」

ロイは目を細めると、「行くよか」と浮かれているポットに声をかけた。

## 85・孤独な女王

「こたびの税はどうも集まりが……」

「花が一つ枯れた件に關しまして……」

「反王勢力がこの城近辺に潜伏しているという不届きな噂が……」

ステファニアはなにやら話し合う老祭司たちをよそに窓の外を眺めていた。そんな彼女を咎める者もなければ気がつく者もない。今日はいつもとなりで不機嫌そうにしているエウリアもない。

誰も彼女を気にしないのは、彼女がその場に参加しようとしまいと同じことだからだ。一番高き座に着く女王をまるで蚊帳の外にして、会議は続いていく。女王として言葉を発しようとしたこともあった。しかし彼らが若輩者でその上『欠落者』に対して耳を貸す気がないことを知って、次第に諦めて行った。風の吹きすさぶ城の外を眺めながらいつも思いだす。あのように強い風に包まれて、祖母と飛んだことがあったことを。風の国中を、真夜中に周ったものだ。地上の儂い星空のようにぼつりぼつり瞬く民家の明かりを指して彼女は、なんと言ったっけ。

ステファニア、あれはね

続きが思い出せなくて、ステファニアは溜息をついた。

……最近、なぜかおばあさまの言葉が思い出せないことがある。記憶が段々と古くなっていつてしまっからだろうか。おばあさまが生きていれば今の私を見て、なんと言うだろう。怒るだろうか。そつだ、おばあさまに会いたい。

「ステファニア陛下？」

いるだけの女王であっても、さすがに会議中に黙って中座しようと立ち上がれば気が付かれてしまうものらしい。ステファニアは苦笑を浮かべながら、

「もう、休むわ」

と、一言告げて出て行くことにした。

このところ頓に浮世離れした表情でうつすらと諦観を浮かべる女王の姿を、残された祭司たちはそれぞれなにか含んだ顔で見送った。心配ではない。彼らの頭にあるのは、そう遠くなく今のようになるだろう王座に誰がつこうかという、そんなことだった。

この城の一番高い場所、一番最初に風の精霊と初代国王が出会った場所といわれる離れの塔の頂上にステファニアは向かった。塔と言っても、不安定に立った一本の無骨な石の柱を取り巻くように薄い石の螺旋の階段がひたすら続く、取り巻く壁の無い、風に吹きざらされている塔だ。頂上にだけ、大きめな円形の床がある。黙々と階段を登り続けるうち、一際強い風が吹き、2つの耳飾がステファニアの耳元で、まるで震えるように澄んだ音で鳴った。ステファニアは少し微笑む。彼女を長らく苦しめてきた耳飾であったが、その音は昔から好きだった。記憶の中の祖母の思い出しいつもその音が伴っていたからかもしれないと彼女は思う。その音に励まされるようにして長い階段を登り終え、目的地に辿り着くと彼女は服の汚れるのも構わずそこへ横になった。不思議と雪に埋もれることの無い

石の床は、ここまで来る苦勞に上気した彼女の頬をひんやりと冷やした。

「おばあさま」

疲れと寒さで、半分うとうととしながら、ステファニアは小さく咳く。どこか甘えるように。母を早くに亡くした彼女にとって、祖母が母のようなものだった。柔軟さには少々欠けたかもしれないが、強く優しい人だった。彼女の知る祖母は、『史実』とは違う。祖母の遺骨をここから撒いた日のことをステファニアはよく覚えている。風に弔われて空に登っていった。ようやく解放されたかのようにも、見えた。祖母は逃げられなかった。もう一人と違って。

「イヴ」

あなたは、どこへ行ったの。

もう一人の名を呻くように呼びながら、女王と呼ぶにはまだ幼さの残る少女はいつしか眠りに落ちていった。

「……それで、依頼を受けることになった」  
「なるほど。耳飾を、ね」

フィーはようやくロイに今までのことを語り終え、彼の淹れた紅茶を飲む幸せに浸かった。一日一服飲まずにはなんだか落ち着かないほどロイの淹れるお茶は旨い。それ依存症じゃないよね、とシ

ライに不安そうに言われたことを思い出す。シライはどうしているだろうか。ぼんやりしだしたフィーにロイが苦笑した。

「その調子で、身包み剥がされないで無事に済んでよかったね」

「ロイも無事でよかった……て、え？」

「フィー、君は細工師なんだよ？彼らからすれば、貴金属を持った格好の獲物だ。持ち物の無事は確認してる？」

「あ」

すっかり盗賊を信用していたらしいフィーの様子にロイは溜息をつく。

「元から君の細工を盗むものは滅多にいないし、大丈夫だろうとは思っけど。あんまり気を抜かないようにね、フィー」

「……気をつける」

「相も変わらず過保護でご苦労なことだ」

菓子をつまみながらヴィーが毒づくのをロイは見やった。そんな様すらどこか色気があるのがいやな男だ。

「そう思うなら氣遣ってほしいな。あなたのおかげでいつも気苦労が倍になる」

「心外だな。俺なりには気を遣っているつもりだが。」

……さて。今お互いの話を合わせて考えるに、なにやら厄介なことに巻き込まれるような気がするが。どう思う？」

ロイは興奮したポットをあやす、ポットと同じくらい無邪気な笑みを浮かべた白い髪的青年をじっと見つめた後、口を開いた。

「彼がどういう気にいるかは知らないけど、望むと望まざるとに関



わらず彼は女王に対するものの筆頭に置かれている。下手をすれば旗印だ」

「贈り物が突き返される可能性も大きいわけだ。まさか、あのぼんやりした男がよりにもよって風の国の女王に耳飾を渡す心積もりとはな。面倒なことになった」

二人のやり取りを聞いていたフィーは、飲み終えた茶器を置くと呟いた。

「そんなに面倒かな」

「フィー？」

行儀悪く肘を突きながら、フィーはロコを見た。

「ちゃんと言わなかった私が悪いが、ロコは本気だ。あんまり突拍子も無く女王様に耳飾をやりたいなんていうから、女王様がどんな人が聞くのも含めてロコの昔話を聞いたんだ、少し。それによると子どもの頃、ロコはうっかり彼女に殺されかけたらしい。それでも健気にまだ好きだって言うんだから本気なんだろう」

だから少なくともあいつの気持ちが揺らぐ心配もなければやることは明確だ、とフィーは事も無げに言った。

ようやく辿り着いた塔の上。風の精霊たるエリアルルが言っていたとおり、彼女はそこにいて、まるで息をしていないかのように静かに眠っていた。

「おやおや。お姫様は随分お疲れのご様子で。

……なあ、エリアルル。こうしてみると、昔となんら変わらない、そう思わないかね」

若白髪交じりの頭をした男が強風に白衣を翻しながら呟くのを聞いて、風の精霊はひよい、と少女を抱き上げ目を瞑った。

「お前がいて、俺がいて、ステファニアがいるからか。だが違う、アカネ、お前は変わった。ステファニアも。そして二人、いや三人もつとか、この場に足りない者だらけだ」

「まあいい奴のことは置いて、の話だったんだがな。私は昔からたいして変わらないさ。変わったとしたらお前達だけだ、おそらくは」

「誰であれ、生きて、変わらずにいられるものか」

エリアルルは少女の軽さに顔を顰めた。また細くなった。しっかりと食べるように言っているのに。

エリアルルの言葉をアカネは鼻で笑った。

「それは風にとっての真理だ、人はまた違うもんだ。いくら人が老いようと、いかにここが風の国であろうといえどもな」

芯のところでは変われない奴も、変わろうとしない奴もいるんだよ。

そう言ってアカネは目を細める。そう、変わらず一途な奴もいる

ものだ。アカネはそれを思っただとくつくつ笑い出しそうになった。

しかしのんびりとしていたその雰囲気は、やおら近づいてきた静かな足音に気づくと硬質なものへと変わる。そんなことはさっぱり気にしたふうもなく、現れた人物はしばらく場を見回した後、淡々とした口調で口火を切った。

「随分探したんですよ。こんなところにいらっしやったのですか、陛下、エリアル……ところでそちらの方は？」

「名乗るほどの名でもない。私はなまじ腕がいたために不本意にもここまで連れ込まれた哀れな医師に過ぎないからな」

警戒を解くことなくきっぱりとそう答えて、アカネはエリアルへと密かに目配せした。顔を顰めながらも頷いた精霊に満足げに笑うと、欠片も風の気配のない異質な男へと彼は向き直る。

「で、お前さんこそ何者かね」

「私はヤナ、と申します。医師殿、こちらへは何をなさりにいらっしやっただんですか」

「知らないか？ 医者やることと言ったら治療と予防。患者を診て『悪いところ』を取り除き、禍をあらかじめ被うために来たわけだ」

「ほう、それは興味深い。私の里には医者などおりませんでしたからね。晚餐の席で詳しくお聞かせ願えますか？……誰が患者で、どこが悪いのか、あなたの見解を是非伺いたい。

ああ、エリアル。陛下がそれまでにはお目覚めになるよう、頼みますよ」

挑発的なアカネの笑みに動じることなく薄く微笑み返した男は、「では後ほど」と告げて立ち去った。

「なんだ、あれは」

「ステファニアの選んだ従者だ」

「従者、ねえ」

どこか不機嫌そうにアカネは男の立ち去った辺りを見つめていた。ふと、先ほどまで静かだった場に再び風が吹き込めた。

「要は、お前が女王様を盗んで来ればいいんだろう？」

「えっ」

ゆつたりアカネの家の居間でお茶を嗜み、互いの情報を交換しながら晚餐まで済ました後。

世間話の延長といった気軽なふうにフィオレンティーノを名乗る少年から難題を振られ、白髪の盗賊頭、ロコはしばし固まった。フィオレンティーノは戸惑うロコに対して不思議そうに首を傾げる。

「そしたらロイヤヴィーヤ、もう眠ってしまったちびっ子が言うところの不穏な予感でいっぱいの城から女王様を遠ざけられる。それに、彼女を守るって言うんなら、彼女にあんたには敵意が無いって分かるんじゃないか。贈り物もしやすくなる。何の問題がある？」

「いや、その、ちょっと」

「がんばってくれ、俺はその間に注文の品を仕上げるから。ああ、仕上げの前にできれば耳飾を贈るご本人を拝みたいので早めによるしく。いくら他の耳飾の原画や姿絵を見せてもらえらるとはいえ、やっぱり心許ないし。耳飾の元となった花と同じに、身につける予定の実物を見ないことには、俺としてはやりにくい。あんた仮にも世界中で有名な盗賊の頭なんだろ、できるよな？」

「は、はあ……」  
「お頭！？ なに頷いているんですか！」

騒ぐ周囲も気にせず、言いたいだけ言って満足したのか。

勢いに押されたロコの返事に頷くと、「じゃあ早速、下絵でも書き始めるか」と、与えられた自室へ向かう横暴な細工師。それを為すすべもなくロコは見送った。

「よりもよって、風の守護のもっとも強固な城に盗みに入ることになるなんて」

しばらくの放心からようやく立ち直って呟くロコを、彼の仲間が哀れんだように見やった。皆、風の使い手であるからこそ風の厄介さを知っている。

「それもあなたを避けるに違いない相手そのものを盗む、なんて」  
「無謀ですねえ」

さらりとロコにとって認めがたい事実を付け加える美しい精霊と断言する熊のような男にロコは溜息をついた。それを面白げに見守っていた黒髪の男が口を開く。

「惚れた相手くらい、盗みがいのあるものもそうないだろう？」

その言葉に目を丸くし、にやりとロコは微笑んだ。

「……違いない」  
「そうだろう」

いつもの腑抜けた様子と違う雰囲気を見せる彼に、ヴィーは同質の笑みを返す。

それを見ていた盗賊たちも沸き立って笑い出すと、「よっしゃあ、やってやれ！」「そうだ、お頭ならできる！」「と騒ぎ始め、途

端に酒盛りが始まった。

「僕はロコを手伝おうかな」

おもむろにそう言った銀の髪の青年を、ヴィーは意外そうに見や  
った。

「フィーの傍についているつもりかと思ったがな、ロイ」

「そうしたいところだけど、細工を作ることに關しては僕がフィー  
にしてやれることはほとんどないから」

信頼以外にも何か複雑に混ざるその口調に気づきながらも、ヴ  
イーはただ、「そうか」、と呟いた。その様子に苦笑して、ロイは  
言葉を続ける。

「それに、彼らに僕を見つけてもらった恩もあるしね。ちょっと心  
配な人も城にいる」

「アカネ、という医師か」

「そう」

ロイが頷くと、ひょこ、と白髪頭が二人の間に割って入った。

「アカネがどうかした？」

「いや、今城に向かったのは危険ではないかと思って」

ロイがポットの先ほどの話を振り返りながらそう答えると、ロコ  
は首を振ってみせる。

「あれは生き汚いから大丈夫さ、きつとね」

そのあまりにあっからかんとした口調に、ロイが問うような目を  
向けると、ロコは笑った。

「まあ、手伝ってくれて言うならこちらは大歓迎だ。まずは明日、村の子どもたちを我々の塔に移動させてからの話になるけれど」「それじゃあよろしく」

その時、では俺も手伝うか、と言いかけたヴィーの手を、後ろから引つ張るものがあつた。彼が振り返ると、薄い色の髪と目をした精霊が無表情に彼をじつと見つめて手招きした。無言で家の外へと向かう精霊に、ヴィーは一瞬迷つたものの付き合つことにする。

外は相変わらず吹雪いておりひどく寒かつた。格段に寒く感じられるのは、ここが精霊の守護を失つた一角に位置するせいなのか。

「冷えるな。できれば早めに用件を伺いたい。わざわざここまで連れて来られたくらいだ、ろくな用件ではないだろうが」

ヴィーがそう言つと、

「ヴィエロア、あなたにお願いがあるの」

精霊のその真つ直ぐな目に、なんとなく嫌な予感がしてヴィーは顔を顰めた。

「いやだと言つたら?」

面倒そうにそう返されて、風の精霊の長は薄く笑む。

「ヴィエロア。鍵が欲しいのでしょうか?」

「……やはりそれに関わることか」

「気乗りがしない?」

「別に？」

そう答えながら、まだ元通りとは言えない自身を巡る力に内心ヴィーは舌打ちした。石を鍵にする。ただ精霊に会えばいいものかと楽観視していたが、やはり、そう簡単にはいかないらしい。

「では、この手をとって」

差し伸べられた手を、ヴィーは胡乱げに見やった。

「なんだ、試練でもくれるわけか」

「さあ……でも、あなたは仮にも現世界の中枢たる精霊国の王、なにであれ求めるもののためにやっつてのけるでしょう？」

それはまるで、ロコに好き勝手に言い放ったフィオナと同じ調子で、彼女にそう問われているようで。

「かしこまりました、シルフィード」

ヴィーは苦笑して答えると、しなやかな精霊の手にその手を伸ばした。



## 87・花の元へ

家主不在に構わず、どんちゃん騒ぎをやらかしていた自称義賊の盗賊たちも寝静まった夜半のこと。

細工の大まかな意匠を考えたり描きつけたりするのに没頭していたファイは、ずっと机に向かって同じ姿勢をとっていたために硬くなった体を伸ばすようにして椅子に深くもたれ、指で眉間をほぐした。

そうして蝋燭のともし火にやわらかく照らされた天井を見上げながら、作業に集中したいという理由で一人部屋を確保できてよかった、とファイはぼんやり考えた。その理由ももちろん大きかったのだが、細工師フィオレンティーノとしては性別を偽っているため、それが露呈する危険を少しでも避けたい、という事情もあった。

この地で自身が、竜細工師フィオレンティーノであると見抜かれるとは、ファイにとつて思ってもみないことだった。そもそも細工師と知れたところで仕事を頼まれることになるとは思ってもみなかったのである。

なにせ、国外からの注文も増えてきたとはいえ、シンセ人と取引を持ったことが彼女の記憶にある限りはない。それは絶海の孤島である上、国交が盛んでないこともあるだろうし、彼女がかねて風の国について想像していたとおりに、そもそもこの国の人々が装飾品にたいしてさほど執着がないのもあるに違いない。この国に来てわずか二日程度だが、シンセの人々の気性は飾らないもので、なにより縛られないことを好むらしいということが分かった。

そんな国でファイとしては、異国の細工師の顔と名を知るものなど居るわけがないと高をくくり、今回自分はヴィーの追従者くらい

のつもりだった。

それが、こんなことになるとは、不思議なものだ。

フィーはぼんやりとしつつ、ロコがどこから手に入れたものか持ってきた、風の精霊との契約の証たる耳飾の元々の意匠の描かれた紙の束を見下ろした。いくら見ても飽きないその内容は、実に素晴らしい仕事ぶりだった。それはいい。

問題はひとつ。

相当古いものであるのは間違いないのに、不思議と今なお鮮やかな色を残す、一組ごとに異なる形の耳飾の下絵。それを囲むように細かく詳細を綴った文字を彼女は『読める』。シンセで書かれたはずのそこにあるのは、間違いようもなく彼女の国の言葉。それだけならまだ、フィーは何も感じなかったかもしれない。しかし極め付けに、一枚一枚律儀に数字が割り振られた紙の束の最後の一枚にあった一語が彼女の動揺を呼んだ。

竜細工師……

達筆すぎて読めない製作者の署名の前、やたら堂々と綴られたその身分に彼女はため息を漏らす。ロコはこれを見たからこそ、彼女に声をかけたのか。どうしてイオナイアの竜細工師の名が、この北の地にあるのかは分からない。しかし、これはつまり、ただの細工でなく術具を作らなければならない、遠い先達に恥じない仕事をしなければならぬということ。

今代の竜細工師として仕事をする。そういうことだ。

「安請負に過ぎたかな」

苦笑しながらフィーが思い返すのは、ロコと初めて会った時のことである。フィーが竜細工師である云々はさておいて、フィーの身

につけた細工を少し見ただけでそれが誰の手によるものか見出した  
口を、彼女は気に入った。それがあつたから初対面にして乞われ  
た仕事を請け負うことにしたのだ。

未だ術力を扱えるとは言いがたい自身の手を、しばらくフィーは  
見下ろしていた。だがやがて彼女は顔を上げ、首を振った。

消えたという耳飾の完全な模倣はしない。しかし残ったとされる  
他二組の耳飾の隣を飾るにふさわしいものを作らねばならない。

自身の手で何枚も試しに描いた意匠のうちひとつを取り出して持  
ち上げ、真っ直ぐに見つめる『フィオレンティーノ』の目にはす  
でに、迷いも恐れもなかった。

その翌朝は、早くから一騒動あつたらしい。らしい、というのは  
フィーが一行の中で一番遅く、昏前になって目覚めたせいだ。

まず、皆が起き出して二日酔いもさめる頃に、「ヴィーがいない」  
、と誰かが気づいて騒ぎ出したという。これはすぐに、精霊が「大  
丈夫」、と言い切ったことで鎮まった。その行き先も目的も、彼女  
は触れなかったにも関わらず。このことからしてジルフエがまがり  
なりにも風の精霊の長として皆に信頼されていることがよく分かる。  
その後、この村、トムソン中の子どもたちを集めるに及んで騒  
ぎがあつたらしい。

そもそもこの小さな村の子どもたちは良くも悪くも自立している  
ところがあり、アカネという医師が一手に子守を引き受けていたと  
いうものの、ほとんど放任で大丈夫だったという。ただ、ロイによ

るとどうやらアカネは嚴重な結界をこの村に施すだけの腕を持ち、その上どういふわけか子どもには好かれていた。村人はそんな彼がいたからこそこんなふうにごどもを置き去りにできたのかもね、とロイはどこか皮肉気な口調で言った。

しかし、そのアカネが突然の所用でいなくなってしまった今、子どもたちの安全は保障されない。そこでアカネに名指しされたロコが彼らの身柄を預かることになったわけだが、いくらそれが事実とはいえ、いきなり現れた見知らぬ大人についていくことに納得しない子どもたちを説得するには、相当骨が折れたようだ。

そして今。アカネの家にはもう、昨晚から今朝にかけての騒ぎの跡はどこにもない。綺麗に片付いたテーブルで遅すぎる朝食を堪能するフィーに付き合っつて紅茶を飲む、どことなく疲れた様子のロイによつて語られたのが以上の顛末である。

フィーたちとまるでこのために来ていたかのように、たくさんいた盗賊たちは皆、嫌がる顔ひとつせず子どもたちを連れてめぐらである塔へと飛び去つた。フィーがぐっすり眠りこんでしまつていたこともあり、後ほどフィーとロイを件の花の下へ連れて行くべく盗賊の頭たるロコと、子どもから逃げ回られて拗ねている熊男のドンの2人が戻つてくるつもりらしい。

「すまないな、今頃起き出して」

一通り話を聞いたフィーが食後の片づけをしながらぼやくと、ロイは首を振つた。彼の顔が少し隈のできたフィーの顔を覗き込む。

「よく眠れた？」

「ああ」

フィーの顔のすぐ前まで来ていた彼は、それを聞くと淡い水色の目を細めて微笑んだ。

「ならよかった」

「でも、」

「フィーにはフィーの仕事があるでしょう」

ロイの静かな声に、フィーは黙って頷いた。すると、彼の大きな手が彼女の頭にぼん、とのせられて、軽く撫でると離れていった。本当にいつまでも、『兄』だなあ、と彼女は少しくすぐったい気持ちで考えた。彼の行方が知れなかった最中には意識できていなかった心細さが薄らいでいくのを感じながら。

食器の片付けが済んで、身支度も終わると、二人は暖炉の前で並んでこれからのことを話しながらロコたちを待っていた。

「……それで、我らが国王陛下は結局どこへ行ったんだろう」

「昨晚ジルフェに声をかけられていたみたいだから、おそらくは」  
フィーの当然の疑問に、ロイが答えようとしたとき、柔らかな風が二人の頬を撫でた。

「彼もまた花の元へ」

「ジルフェ」

毎度唐突に現れる淡い色彩の美しい風の精霊は、外でロコが待っている、と呟いて二人を促した。立ち上がった彼らは、ふわふわと歩いていく彼女を追う。

「ならば我々と同じところへ？」

「いいえ。彼は枯れてしまった花の元へ」

歩いて家の玄関へ向かいながら問うフィーに、精霊は気だるそうな声で答えを返す。

「というと、ロイが話していた荒れた土地の方が……ジルフェ。あなたはヴェーに試練を授けたのですか」

「いいえ。どちらかといえば……お願い事を。それに」

精霊は触れもせず外へ続く扉を開いてみせながら、薄い色の目でフィーを見た。

「彼には見てもらいたかった。そして、知りたかった」

どういうことだろう、と首を傾げるフィーの目に、雪の上でこけているらしきロコの姿が映った。

「ドン。見てないで起こしてくれてもいいじゃないか」

「お頭。風の強い日に倒れている鉢植えを起こす無謀さってご存知ですかい？」

熊男の風体のドンはロコのそばにかがみこみながらも一向に彼を助ける気配がない。

「そりゃああれと同じにまたうつかり何度も倒れるかもしれないけど、ただ突っ立っている鉢植えよりかは幾分ましなつもりなのに」

「むしろ鉢植えは動かないでいてくれる分、お頭よりも……いや、それはともかくとして。大体、お頭その状態のままが案外楽でいいって思っついていやしませんか」

「うん。でも寒い」

「じゃあ起きりゃあいいんだ」

「うん。でもだるい」

「やれやれ。飼い犬は主人に似るって言いますけど、お頭とジルフエ様ってそういうところ……ってジルフェ様」

「やあ」

自力で立ち上がればいいのに倒れたままの一人と、それを放置したままにやらジルフェに向かって弁解を始めたドンの姿に、呼び鈴の一つも鳴らなかったのはこういうわけかとフィーは妙に納得する。

「それで、この国の柱たる花を見せていただけると伺いしましたが」  
フィーの横で、ロイが呆れた顔をしながら三人を見やると、彼らは揃って頷いた。

「そうそう。城のほうはまあ、反乱軍に警戒してる今見に行くのは無謀から、俺たちの住んでる森のほうに咲いてるのを見せてあげるよ」

立ち上がったロコが一言、ジルフェ、とかの精霊の名を呼ぶと、佳人の姿がゆるやかに大きな鳥の姿へと変わる。そしてその隣にもう一羽小さな鳥がドンの肩から降りてきたかと思うと、こちらも瞬時に巨大な猛禽類の姿をとった。

「とりあえず二人ずつに分かれて乗っていこうと思うんだけど、ってあれ？」

どうしようか、と聞く間もなく、ロイが風の精霊に見とれているフィーの手をとって、ジルフェの背に颯爽と跨るのをロコは呆気に

とられて見つめた。まるでそうするのが当然といわんばかりの態度にロコは戸惑う。

「ええと、一応飛ぶ精霊の各々の契約者の後ろに乗ってもらうのが普通かなと思ってただけ。もう、聞こえていないな、きっと」

既に飛び立ったジルフェの小さくなっていく姿を見送り、「ひよっとして俺たちわざわざ来なくてもよかったのかなあ」と彼がぼやいていると、その背をドンがはたいた。

「何をぼんやりしてるんですか。俺らもとつと追っかけますよ」

「でも、俺いなくてもジルフェが全部やってくれるだろうし」

「拗ねてないで行きますよ。ジルフェ様に無視されるのはいつものことじゃないですか。気まぐれなあのお方が、あいつらを広い森に置いてけぼりにしたら大変だ」

項垂れている自分のお頭よりも、まだ会ったばかりの二人を心配したロブりのドンは、ロコを彼の精霊の背に乗せると自身もその背に飛び乗った。鳥は荒々しく羽ばたくと、ドンの言葉に従い青く晴れた空へと向かう。

かくして彼らは一路、花の在り処を目指した。



「こんな風に空を飛ぶ機会なんて、まずないだろうな」  
「そうだね」

肌を刺すような冷たい風にさらされながら、ジルフェの背から覗いた真下に広がる景色を見下ろして、フィーとロイは目を細めた。陽の光にきらきらと白雪を輝かせるシンセは、まるで海の青の中に埋もれる無垢な真珠のように美しかった。一面が濁りない、白に染められた大地。

「この風の国は、綺麗だ」

「本当に」

そう二人は小さく囁きを交わす。

「ありがとう」

すると珍しく、どこか嬉しげな声をジルフェはあげた。

そうしてどれくらい飛んでいただろうか。

「そろそろ花の元に着くから、しっかりと掴まって」

ジルフェが合図と共にゆったり降下し、ふわりと木々の合間の地面に降り立つと、二人はその背から降りた。あたりは森の中にあつて、比較的開けたところだった。そこだけまるで、春のように暖かく、雪の積もらない地面はむき出しだった。

「ほら、ここに」

そうやって人の形を取ったジルフェが指差す先を、突然の変化に戸惑っていた二人が見れば、傾斜が急な盛り上がった地面がある。

そしてその上のほうから、青々とした葉を茂らせた枝が垂れてきており、その端で見事なフクシアの花が咲き誇っていた。

「これが……」

薄紅、紫、赤、白。

様々な色を見せながら下向きに開く可憐な花々。

「なるほど、昔ロイが話していたとおりに、”女王様の耳飾”という別名があるのも納得がいくな」

それを聞いた覚えがあったからこそ、フクシアの形をなぞらえた耳飾を女王へ、と望むロコの話聞いたとき、フィーは言葉遊びだと思ったものだが。

フィーは初めて目にするその花を見つめる。花からは、この国で感じていた清冽な力の濃厚な気配が漂ってくる。ここがこの国の中心の一つだということを知らしめるかのように。目に焼きつけるために、色形様々な艶麗なフクシアの花を彼女は眺めた。

「精霊と結んだシンセの人は、あなたの加護を受けたこの花を見て風との契約の証を耳飾にした、とそういうわけですか」

フィーの隣で同じく花に見とれながら口を開いたロイの言葉に、ジルフェは頷くと花に近づき、そっとその花びらを指で撫でた。

「シンセの初代の王は花が好きだった。

あの人は言った、『そなたは根無し草であろうが……時には一つのところで一つのものを見続けるのも面白いもの。種から芽が出て、育ち、根付くさまを。国が生まれ、育ち、人がいついて暮らすさまを』、と。私は初代の王が好きだったし、言われたとおり、じっとして花や国を見守るのは面白かった」

フィーがいつか見たような、遠くを見る目をして風の精霊の長は続けた。

「けれど、私は時々思う。ひょっとすると私は、あの人の植えたこの花を守っているのであって、この国を守っているわけではないのかも知れない」と。結果として同じことになってはいいても。だから花が枯れたあときは、本当に……」

そこで言葉を区切ると、彼女は顔を上げた。

「ロコたちが来る」

それだけ言うと、いつものごとく彼女は唐突に消え去ってしまった。

どこまで行っても、ひたすらに白い景色が続いていた。夜は月明かりに照らされていた青白さはいまやほのかに太陽の黄色い温かみを帯びた色へと変わっている。それでも身を切るような寒さは一向に変わらない。風は吹かず、生き物の気配のないそこは、ひたすらに静かなところだった。

漆黒の艶やかな髪を一つに束ねた男は、さして変わらぬ景色に次第に厭いてきていたが、ただ黙々と歩き続けた。彼を置き去りにした無情な精霊が言っていたものを探して。

「ここか？」

ようやくヴィーは立ち止まると顔を上げた。この国を埋め尽くす雪すら避けたように、見つけたその場所は黒く染まり、土を盛っていたような跡がある。力の弱まった彼ですら感じる不快で不穏な空気は、確かにそこを中心に行っているようだった。しばらく彼はその場に佇んで眺めていたが、やがて挑戦的にやりと笑んだ。彼はその跡に近づくと無防備に手を伸ばし、触れた。途端、大地が彼を呑み込むように動いても、顔色一つ変えることなく彼はその場を動こうとしない。

やがて人間一人がすっかり黒の中に消えてしまうと、本当の静寂が訪れた。

夢の中で、少女は少年の姿を見た。彼女は彼と雪遊びをしていた。少年の、白いやわらかそうな髪が風にふわふわと踊るのを見るのが彼女は好きだった。人の気など知らなさそうなんきな笑顔も。それが自分にも向けられるのが嬉しくて、彼女も笑っていた。

けれど、全ては偽りだったのだ。

「ロコなんか、」

「なんか？ 酷い物言いだな、お前さん」

知らず頬を伝う涙を拭った手を、エウリアのものだろうと無意識に払おうとしたところで聞こえてきた声に、少女は息を呑んで目を覚ます。

「アカネ!？」

「やあやあ、姫君。お久しぶり」

「私は、もう姫じゃないわ。女王よ。なぜあなたがここにいるの。自分からここを出て行ったんじゃない」

はじめは驚愕に目を見開いていた彼女だが、気を取り直したようにのらりくらりと笑うアカネの手を払った。塔の上にはいたはずなのに、いつの間にか自室に連れてこられていたのも、アカネがここにいるのも、何もかも気に入らなかった。

「出て行って。顔も見たくない」

「随分ご挨拶なことだ。それに目上に対する態度としてなってない」  
「エウリア、どういうこと」

ステファニアはアカネにとりあわず、横になっていた寝台から身を起こすと傍にいた風の精霊を睨め付けた。

「あなたまで私を裏切るの」

「違う、ステファニア」

彼女の突き刺すような視線に、いつもは折れる精霊は、その柳眉を寄せながらも彼女の目をしっかりと見返した。

「落ち着け。『その』ためにアカネを連れてきたんじゃない。ただ、こいつなら分かるはずだ。あの男はやはり何かがおかしい、その違和感を……」

「何を吹き込まれたか知らないけれど、ヤナは信頼できる」

そう彼女が言い切ると、アカネが二人の横合いから顔を出して割り込んでくる。

「そうは言うがね、ステファニア。なぜ風の国にあって、欠片も風

の気配のない男がいる？」

一瞬、嫌そうな顔をして彼女はアカネを見たが、すぐに顔を背けて彼に答えた。

「稀にそういうことがあっても何もおかしくないはずよ？　そもそも風の一族なら信頼できるという戯言ならいらぬ。そうだというならあの祭司たちや王族の傍系をどう説明するの、私がいなくなることに、玉座のことばかり求めているのに」

「滔々とまあ、相変わらずの内弁慶ぶり。恐れ入るよ。不満なら祭司のやつらとその調子で戦えば尻尾を巻いて逃げ出すだろうに」

少女の攻撃的な調子に、やれやれといった風情で目を細めたアカネは、真顔になって言葉を続けた。

「確かにヤナとかいう男は一切術力を持たないようだ。……風が避けるくらいには。それで、そもそもあの男なら信頼できる根拠だが、まさか力がないことそのものだと言わないだろうか、風の女王」

「だったら何だって言うの」  
「あれが魔かもしれない、と言ったら」

その言葉に、ステファニアは身を凍らせる。

「ち、違う、それなら私にだって分かるもの。ヤナは違う、ヤナは、」

「言いかけるステファニアの言葉を遮り、アカネは話を変えるように口を開いた。

「ステファニア。ひよつとしてお前さん、あの人から昔話を聞いたことがあるんじゃないか。一匹の金色をした魔と、いなくなった一人の娘の話」

「アカネも、知っていたの……？」

呆然とした表情で自分を見る少女に苦笑を零すと、アカネは言った。

「不精者だが、一応は私も彼女の息子だからな」

「知っていたなら、なぜあんなに孤独な、寂しがりやおばあ様をあなたは置いていってしまったの」

「知っていても、私には私の道があった。あの頃は兄さんもいたし」

なんでもない風にアカネはそう言うと首を振った。

「ま、その話は置いといて聞きたいんだがね。ステファニア、お前さん『も』逃げたいんじゃないのか、本当は」

「私は」

彼女が何かを言おうとしたまさにそのとき、とんとん、と軽く扉を叩く音が響く。

「ステファニア様、晚餐のご用意ができました」

窓の外からしていた風の音が、やんだ。

## 89・耳飾とコーラリア

「よし、別嬪に仕上がった。これならあの口うるさい注文屋ももう文句は無かるうよ」

一番最初に見たのは、満足げな青年の会心の笑み。

その後すぐ、暗く静かな場所へと密封された。けして動かぬように固定されたまま、どこかへと運ばれていくのだけ感じていた。人から人の手へわたり、やがて遠くへ、まるで浮遊するように運ばれていく気配がする。

どれくらい、そのままだったろう。やがて自分をしまっていた覆いは外されて、持ち上げられた先はほっそりとした、上品な年配の女性の掌の上。それが、彼が今いる場所だった。自分と同じ真っ青な瞳が、彼を見下ろして微笑む。ころり、とそのまま転がされた彼は、自分と似た形の同胞たちと微かに触れ合い、涼しげな金属の音を立てた。

「ジル」

柔らかな声で彼の持ち手である淑女は傍にいる誰かに呼びかけたようだった。

「これよ、今届いたの。ごらんなさいな、なんて素敵なのでしょう。まるで私の好きなあの花の姿と魂をここに封じ込めたよう。しなやかな花びら、優しい夕暮れの色」

「実際に、花とそれは通じてるみたい。そう聞いた」  
どこか気だるげな娘の声が応じる。

「まあ、そうなの。竜に認められた細工師というのは本当に素晴らしい才をお持ちなのね。ありがとう、あなたとの証だもの、大切にするわ、ジル」



「くれぐれも、無くさないように」  
「もちろんよ」

念を押すような心配そうな声に、気軽に淑女は請け負ってみせる。  
「冠にすればよかったんだ、貴女が重いのはごめんだ、なんて我侭を言うから大変な目にあつた」

そんなふうには、よく響く低い男の声がしたかと思えば、ジルと呼ばれただけだるげな娘が言った。

「エウリアは何もしなかつたじゃない」

「俺は反対していたのだから当然だろう、姉上。アリエルは？」

「出かけてる」

「こんな差し迫つたときに」

長いため息の後、エウリアと呼ばれた男は淑女に向き直つた。

「クロリス、即位式では我々にももう少し威厳のある話し方をしないと祭司連中がなんというか」

「大丈夫。これからはちゃんとするから。それよりあなたたちは後悔しないのかしら？ もう後戻りは出来ないわよ？ 特にジルフェ、あなたは……」

「問題ない。……もつともあなたが女性でよかつたけれど」

遮るようにそう告げたジルフェの言葉の後、口々に生真面目な声で精霊は述べた。

「己が自由な魂にしたがつて選んで後悔などするものか。赤い月の時代を、我らと共に誰よりも伸びやかに駆け、誰よりも弓と歌に長けた娘よ」

「人と精霊の垣根にとらわれない寛い心の娘。風を束ねる我らはあなたに惚れたのだ。この国を風の止まり木にしてくれるのだろうか？」

「……ええ。任せて」

初めに感じた淑やかさはどこへやら、高らかに笑うと気風のいい女将のようにどん、と胸を叩いて淑女は頷いた。

そして小さく呟いた。ありがとう、と。お互い様、と精霊たちは笑った。

それから、淑女の耳に、ほっそりした風の精霊の長の手によって彼は取り付けられた。クロリスと呼ばれた彼女は女王になった。そして彼女の統べる国は、シンセと名づけられた風の住まう国となった。

何代も、平和は続いた。王になった者たちの耳で彼は揺れ続けた。優しい風はいつも王を守っていた。

しかしいつからか城には不穏な気配が漂い始めた。権力やら富とといったものは、人の尊厳を簡単に荒廃させていくものらしい。平和だからこそ飾り物になりつつある王位は、権勢を得るための道具として、あたかも祭司たちの気入りの玩具のように弄ばれるようになっていた。彼が風の国の王が何代目になるのか数えるのを止めた頃のこと。産声と共に新たな命が産まれた場でそれは起きた。

「一体何をなさるの！」

「黙ってその子を寄越しなさい、イコラ。今の情勢では、双子であることがどんなに危ないことか分かるだろう。片方を今諦めねば、いずれは殺し合いになりかねない」

剣を持った男と、両腕に赤子を抱えた女が、酷い顔色をして向き合っている。赤子は母親の悲鳴にわあわあと泣き続けている。どこ

か困った顔でエウリアがその傍に佇んでいた。

「ほら、急いで」

「いやです！ この子を殺させなんか絶対にしない。あなたは狂ってしまったの……？ ジルフェがいなくなったから、」

「違う！」

王はそう叫んだが、実際、ジルフェはいなくなった。今の代の王位継承者候補は男しかいなかった。代々血脈に産まれた一番上の娘が王に選ばれてきたこの国でそれは異例なこと。先代の女王が倒れ、ジルフェの意向を無視して彼が王位についたとき、彼女はどこかへ消え去った。その理由については硬く口を閉ざしたまま、「契約は決して破棄されたわけではないけれど、今のここにはいられない」とそれだけ言い残して。常に王の影にあった神秘的な風の精霊の長の姿と力が無いことは、術力のあるもの達の間には明らかであった。それは今の王が『認められていない』ことを意味するのだと祭司たちに目されてしまう。今まで放っておかれたような今代の王の弟たちに白羽の矢が立ち、密かに彼を担ぎ出そうとする者たちの画策が渦巻きだすと、城内には殺伐とした空気が漂うようになる。その渦中のものの精神を蝕むほどに。

「私のようにその子らを、兄弟の間柄なのに争うようなことにはさせたくない、それだけなんだ」

「あなた……」

悲しげに顔を歪ませる王の振り絞るような声を聞いて、王の妻は意を決したように彼の元へと立ち寄った。王の剣はみつともないほどこに震えている。

「どうか未来をそのように決め付けないで、他の方法を探しましよ

う？ 大丈夫、風はきつと守ってください。そうよね、エウリア」  
「ああ。不精の姉の分まで、必ず」

ようやく声をはさめる機会を喜んだように、頼もしげに精霊は応えた。ぐったりと剣を下ろし、崩れ落ちるように座り込んだ王を精霊は慌てて支える。

「分かった……だが片方は、『いなかった』ことにする。いいな  
これ以上は譲歩しない、という口調に、腕の中の我が子らをぎゅ、と抱きしめた母親は涙を流して頷いた。

「コーリア陛下！ ああ、どちらへいらっしやっただ……いく  
ら人見知りをなさるとはいえ婚約者である私を相手になんという仕打ち。私は貴女に語りたい言葉のために息の詰まるような思いをしているというのに」

「婚約者ですって？」

聞こえよがしに叫ぶ青年の声に対して少女は顔を顰めているらしいのを、その耳を飾る彼は感じた。

「もう決まったことでも、あの人がそうだななんて認めたくない。欲しいのはただ王配の座、それだけのくせに」

即位式はとうに済み、残すは婚儀ばかりという状態で、その日は刻々と近づいてきている。少女の父の代の王位を巡る狂乱騒ぎは風の精霊の不興を買ったものか、再びの女王が現れても城に滅多に寄り付かなかった。だからだろうか、少女の老いた父と母、そしてエウリアはともかく、城内には味方と呼べる者など彼女にはいなかった。そういう境遇の中、次代女王の自分が、肩書きだけ背負った人形のようなものだと少女はよく分かっているようだった。ある

いはただの、風の女王の力の器。誰も一個の人としての彼女は見ない。婚約者と定められた男の愛を語る耳通りのよい言葉の中身が空っぽであることも、すぐに彼女は悟ってしまった。

逃亡の末にしつこい追っ手を撒いたコーラリアという名の少女は、半ばやけを起こしたようにけして入るなといわれた城の地下に潜り込んだ。王族だけが存在を知る迷路のようなそこは、城と国の何箇所かを結ぶ道であると言う。彼女は適当に歩いてその出口を目指すことにしたらしい。

ぼんやりと光る壁に照らされた赤煉瓦の道を勘に任せて進み続けて、幸いにも彼女は出口を見つけた。行き止まりに見える道の奥にははしごが備え付けられており、その先を見上げると人一人ようやく通れるくらい黒い扉がある。やけに真新しい滑らかな感触の梯子に少し訝った様子ながら、彼女はそれを登って天井を目指した。

「眩しい」

扉を開けてすぐ、外の白い昼の光が彼女の瞳を刺す。ようやくそれに慣れてきたものか、彼女は目を覆っていた手はずして辺りを見回した。

「う、み……？」

一面の真つ青な海がそこにはあった。ほとんど城に閉じ込められたようにして暮らしてきた彼女にとっては、遠めに見てきたそれがすぐ傍にある現実には信じがたいものなのだろう。まるで魅入られたように浜辺へと身を乗り出して足を進めた。しばらく初めて触れる海を手で掬ったりそこに浸したりしてその冷たさを味わった少女は、ようやく満足したのか浜辺の造りを観察しだした。人気の無い小さな浜辺。ここには確かに、城と同じくらいの精霊の守護の力が溢れている。幻術の気配のするこの浜辺は、部外者が外から覗いても、見つけることすら困難に違いない。一応は王族の緊急避難先なのだ

から、当たり前といえるかもしれない。だが、浜辺の内側にいてなお、何かを執拗に隠そうとする気配を彼女は敏感に見出したようだ。「あれは」

崖に切り取られたようにして半円を描く浜辺の端に、巧妙に隠された力の凝った場所がある。

だが、たとえ飾り物といわれようと、平和である限りただ守るといふ地味な役割のみこなすために目立たなかりと、仮にも風の精霊の長と契約を結んだだけの力を持っている少女にとって、大抵の幻術は意味を持たない。少女の視界を半ば共有することもできる耳飾にもそのことはよく分かっていた。

「小屋、かしら。わざわざ隠すようなものには見えないけれど」

幻術を透かして見えたのは、粗末なつくりの小屋だった。首を傾げながらそこへ近づこうとした少女は、ちょうどその小屋の扉を開けてでてきた相手を見てびたりと立ち止まった。

相手もコーラリアを見て動きを止めた。……二人は鏡を覗きこんだかのようにそっくりだった。

コーラリアは愚かではなかったので、自分と瓜二つの少女が他人の空似ではなく、自身の片割れなのだとすぐに悟った。彼女をここに隠したのは両親であるということも予想できた。

「なんてことを」

女王となったほうの少女は、震える声で呟いた。

名乗りあって、お互いのことを語り合った。まるで生まれたときからそうであったかのように打ち解けた二人は、小屋の暖炉の前で並んで座り、揺れる暖かい炎の色を見つめながら様々なことへ思いをめぐらせている様子だった。小屋の中にはエウリアもいた。幻術は彼の仕掛けたものだったらしい。彼はやって来たコーラリアを見て酷く驚いた顔をしたが、何かに安堵した表情でもあった。黙った

まま姿を消してどこかへ行ってしまった。

「ごめん、コーラリア」

イヴと名乗った少女のぶっきらぼうな言葉に、コーラリアは首を振った。最低限のものだけ置かれた小屋の中で身を抱えるようにしている半身を彼女は見つめた。

「どうして？ 謝るなら私のほうよ。貴女がこんなところに閉じ込められてしまってるのも気づかずに、私は不自由なく城で贅沢に生きてきた。生まれが少し早かったか遅かったか、たったそれだけの違いで……」

「私は確かにここから動けないけど、ここはあなたが思うように閉じられてもいないし豊かだ。こんなところと思うかもしれないが魚や貝はいっぱい取れるし、エウリアの他にも、遊びに来る子もいる。最近はやかましい猫も拾った。日々変化があつて、退屈しない。でも、あなたはとても寂しそう。そしてあなたは重い役割を負わされて生きているけれど、私はただ生きるだけ、それだけなんだ」

コーラリアは黙り込んだ。ややあつて、彼女は悩むように小さな声で言った。

「それでも、貴女も、縛られているじゃない」

「そうかもしれない……お互い厄介なところに生まれついたな」

二人は顔を見合わせて苦笑を漏らした。

それから、コーラリアは結婚式の日まで、イヴの元へ密かに通い続けた。二人は共に育たなかった分を埋めるように、遊びまわった。話し、笑い、喧嘩をし、仲直りをした。シンセにしては珍しく、よく晴れた穏やかな天気の日々が続いた。海も空も、目映いくらいに青く透き通った。

そして、とうとうやって来たコーラリアの結婚式の前日。

その日は、珍しく夜遅くになってから彼女はイヴの元へ向かった。結婚式の準備に追われたのだ。地下を抜けてでると、外は久々に吹雪いていたが、寒さをまるで感じずに麻痺したように少女はぼろ小屋の中に灯る黄色い明かりを目指した。

「ああ、コーラリア……どうした、泣いているのか？」

ノックの音に、白い息を吐きながら小屋の扉を開けたイヴは驚きに柳眉を寄せた。彼女に向かって言い募るようにして、泣きすぎて掠れた声で、イヴとそっくりな顔をした少女は叫んだ。

「明日私、結婚するのよ。結婚なんて、したく、ない。どうして望まない相手と結婚なんかしなきゃいけないの、その人の子どもを産まなきゃいけないの、どうして私だけ……！」

悲痛に響くその言葉に衝かれたように、イヴも涙を零した。

「ごめん、コーラリア。ごめん……」

「あなたのせいじゃ、ない」

イヴは、縋りつくように抱きついて嗚咽を漏らす少女の背中をとんとんと叩き、中に入るように促した。ようやく椅子に突っ伏していた彼女が泣き止むと、温かい香草茶を出して、イヴは困ったように口を開いた。

「まさか明日結婚なんて。いっそ、コーラリアと代わってやれたらよかつただけど、私はこんな話し方しか出来ないし、女王らしい威厳のある上品な振る舞いも、何も出来ない」

「……そんなの必要ないわ。私の身代わりになるのは簡単、ただ、いるだけでいいのよ」

「そんなことはない。教養も、社交術も、治世の方法も、全部身に



つけるには相応の時間と努力、ある程度の才能が必要だ。あなたはそれを素晴らしいことに十分身に付けているだろうに、どうしてもそんなに卑屈になる」

コーラリアは俯いた。

「貴女こそどうして何も出来ないなんていうの。生きていく知恵があつて、身の回りのことが出来る。上辺の処世術なんかよりそういうことの方が尊いものなのに」

「そういうのは、必要に迫られたら誰でも出来るようになる」

「そうかしら」

「そうだよ。コーラリアも」

イヴに頭を撫でられて、くすぐったそうにコーラリアは笑った。気持ちは随分と落ち着いてきていた。

「おかしいわ、私のほうが貴女の姉なのにこれじゃあ逆ね」

「一日も変わらないだろう。明日には同じ17だ」

「そういえば、とコーラリアは頷いた。元から彼女の誕生日を迎えると共に結婚する手はずとなっていたのだ。

「双子なのだから、当たり前のことなのに、なぜか不思議に感じるわ。ねえイヴ、あなたは恋とか結婚とか、しないの」

「そう問われたイヴは、静かに微笑んで答えた。

「しないよ」

「そうなの？」

「ああ」

「そう」

どこか力の抜けたように呟いた後、コーラリアは顔を背けた。

「私ね、結婚してしまつたら、今より身動きが取れなくなつてしま

うの。多分、ここに来られなくなる。そしたらもう、私、誰も」

また泣き出しそうな彼女の手をイヴはそつと掴んだ。コーラリアが顔を上げると、掌に何かが載せられた。茶色と白の、円形をした小さなもの。

「これって……カメオ？ ひよつとして貴女が彫ったの」

イヴは少し照れたように頷く。

「ちょうど、カメオ用のいい貝をもらっていたから。誕生日祝いに、これくらいしかあげられるものを思いつかなかった」

「すごい。何の花かしら？」

細やかな五弁の花が集って咲く様子が、小さなカメオに白く浮かび上がっている。

「ライラック。あなたの肖像を描くことも考えたけど、お祝いにはふさわしくない気がしたんだ。それにいつも綺麗な花の形の耳飾をしているから花が好きなのかと思って、結局これにした」

「とても嬉しい……ありがとう。大切にするわ。私も何か貴女にあげたいけれど」

その落ち着いた空気から、すっかりイヴと自分が同じ年で同じ誕生日であることを失念していたコーラリアは、何も持ってきていなかった。一瞬途方にくれかけた様子の彼女だったが、「そうだ」、と何か思いついたように呟いた。

その言葉と共に彼はコーラリアの小さな耳からはずされ、同胞たちから引き離されると、イヴの掌に乗せられた。

「これを、貰ってくれない？」

「こんな見事な細工物……、大切なものなんじゃないのか？」

「お願い」

双子の姉の、どこか逼迫した声に、イヴは受け取ることに決めた

ようだ。すぐに耳飾を耳へと着けてみせた。それを見て、コーリアは微笑んだ。

「ありがとう、イヴ」

「お礼を言うのは私のほうだ。ありがとう、コーリア」

コーリアが小屋を立つ頃には、夜明けが近づいてきていた。扉の前に立った二人は少しの間抱擁を交わしていたが、「どうか元気で」という言葉と共にゆっくりと離れた。小屋を去る背中をじっと無言で見っていたイヴだったが、やがて堪えかねたかのように叫んだ。

「私はずっと、ここにいるから！ だから辛くなったらなら、いつでもおいで、コーリア！」

その言葉を受けて肩を震わした少女は、振り返らなかったが立ち止まった。やがて、小さく頷いた後、駆け出していく。吹雪にその姿がかき消されてしばらく経っても、イヴは雪の降りこむのも構わず扉を開いたまま立ち尽くしていた。

こうして耳飾である彼の持ち主は、コーリアからイヴへと移った。

## 90・耳飾とイヴ

城の中しか知らない耳飾からすれば新鮮なことの連続ではあったものの、イヴという娘の過ごす日々のはほとんどは、他人からすればおだやかで単調なものだっただろう。

彼女の視界に映るものは、彼女が魚を釣る青い海、細工する白い貝、餌をやる猫、雪に埋もれた風景、それくらいのもだった。何事も繰り返してある日々。そのすべてが浜辺の小さな家の中で完結している。それでも彼女は退屈というものを知らないようで、それを楽しげにこなしていた。それは、彼女の日課である日記からも知れた。たとえば掃除一つにしてもそこに工夫を凝らし、面白さを見出すような人間であることが。それを見て、長らく王族という身分の人間に携わった耳飾は、その一端であるコーラリアとこのイヴは、双子でありながらまるで違うと判断した。もともと、育ちがこれほどまでに異なれば当然の結果なのかもしれない。ただ、常に人に囲まれたコーラリアも、ひとりで生活するイヴも、同じくらい孤独なようではあった。

陽気な性質であるらしいイヴだったが、時々、ぼんやり遠くを眺めていることがあった。それはひたすらに降り続ける雪であったり、海の向こうであったりした。長い時間そうしているので、眠ってしまったのではないかと思われても、その顔が上げられたままであったから、彼女は起きて物思いに沈んでいたのだろう。

コーラリアはやはり来ないまま、幾月も過ぎたある日のこと。あまりに外が吹雪くので一日屋内で過ごすことにしたらしいイヴが、どこから仕入れたものか滑稽な挿絵つきの物語を読んでいた最中、とどんと、と粗末な扉を無遠慮に叩く音がした。彼女の答えも待たず、誰かが凍てついた風と共に飛び込んでくる。

「イヴ、久しぶり！」  
「シオン」

現れたのは一つにくくられた金の髪、印象的な濃い青の目をした、どこかのほほんとした青年だ。少しとがめる響きを持ったイヴの声に、彼は抱えていた大きな荷物を下ろして少し肩をすくめてみせた。

「今日はちゃんと入る前に合図しただろ？」

「……そうだけど。まあいい。本当に久しぶりだな」

悪びれない様子の青年に何か諦めたようにイヴは笑ったようだった。読み止しの本を片付けると、青年に座るように勧めてから茶を淹れだす。

「無事でなにより。機嫌がいいところを見ると、前に話していた大仕事とやらは首尾よく運んだのか」

「もちろん。悪徳商人からまんまと頼まれてたものを取り返してやったさ。俺がしくじるわけが無い」

「たいした自信だ」

「それはまあ、世界一の腕と称される義賊だから」

「盗みは盗み。犯罪の腕を褒められてどうしてそう誇れるのやら」

「そう言ってくれるな、俺のとりえはそのくらい……。いや他にもいろいろあるさ、異国の言葉も大体分かるし、その流儀を真似ることも得意。変装もまあお手の物だし。イヴにはあっさり見破られちゃったけど」

そう言っつて、青年は髪に手を伸ばすと器用に鬘を外し、手ぬぐいで乱雑に顔を拭いた。すると彼は全くの別人の顔となった。その漆黒の髪の似合う、凜然とした顔つき。これが本来の顔なのだろう。

「声は変えていなかったし。そもそもここに来る生身の人間はシオンくらいのもものだから、分かったただけだ」

そう言いながら、どこか安堵の息を漏らしたイヴに、青年はくすりと微笑んで見せた。

「この顔の方が落ち着く？」

青年と同様椅子に腰掛けたイヴは、その言葉に少し首を傾げたようだったが、考えるように茶を啜って間を置いてから答えた。

「慣れているからね」

「それだけ？」

どこか不満げに青年が問うと、いつの間にやらイヴの足の上に乗ってきた猫が、威嚇するような声で鳴いて青年を睨んだ。それを見て、青年が少し顔色を変える。

「イヴ、そいつはどうした？」

「拾った」

「……ここで？」

「ここで」

彼女の淡々とした受け答えに、青年は苛立ったようだった。

「なんで警戒しなかった？ おかしいだろ、結界を通ってこんなところまで入ってくる普通の動物なんているわけがないのに」

「シオンだってこいつと同じに『こんなところ』で倒れていたじゃないか」

「俺はいいんだ。『倒れてた』って、もしかしてまた癒してやったって言うんじゃないだろうな」

「いけないか？」

しばらく青年はイヴを睨んでいたが、やがてどこか悔しげに目をそらした。

「……いや。イヴのそういうところに俺も救われたんだから。でも、君が危ないなら話は別だ。エウリアは何か言っていないかった？」

「エウリア？　そういえばあいつが来るときいつもこいつはいないから、人見知りだと思っていたが、シオンのことは平気みたいだから違うのかな」

「なるほど、あいつが役に立たないことはよく分かった。ジルフェ」

「すぐさま、淡い色彩の精霊がその姿を現した。」

「なに、シオン」

「この猫を見てくれないか」

イヴの傍に寄り、猫をその膝から持ち上げようとして引っかかれながらシオンがそう言うと、精霊は珍しく表情を動かした。そこに浮かんだのは見えようの無い嫌悪。

「するとこいつは魔、か。精霊ではなさそうだと思っていたけど」  
猫を持ち上げるのを諦めた青年がそう呟いても、イヴは何も言わない。静かに膝の上の猫の顎をくすぐっている。

「本当は拾う前から知ってただろう、イヴ。こいつが魔だということとをどれだけこいつが巧妙に隠しているも、君が気づかないわけが無い。それなのに、どうして魔なんか助けたんだ」

イヴは問われて黙っていたが、やがて口を開いた。

「確かにそのことには気づいていた。でも私には分からない。どうして魔というのみな顔色を変える？　別にこの猫は、拾ったあの日から今まで、好き嫌いをする以外で悪さをしたわけでもない」

「それはあくまで今までの話じゃないか。歴史が証明しているだろう、魔と関わると碌なことにならない。何かあってからじゃ遅いんだ」

「なにか、か。腹が減ると鳴きわめいてうるさいとか、家が毛玉だらけになるとか？」

「イヴ……」

イヴは肩を落とす青年を見て笑った。

「人も精霊も、時に過つ。正しくあれるかどうかも、何事も、何者に生まれついたかが全てではないはず。風の王族として生まれついて、たいして術力の器を持たない私のような者もいるし」

王の元に生まれつきながら、まったくそれと関わりなく生きてきた娘の言葉に青年は口を閉ざす。それを見ながら、イヴはごろごろとのを鳴らす猫を軽く撫でてやった。

「精霊と契約は出来ないが、その代わりに、私には癒しの力があつた。こんな場所だいたいして役に立たないものだけけど、それで助けられるものがあるなら助きたい。それに、『可能性』で誰かを見殺しにすることは出来ないよ。どうか、こいつのことはいなくなるまでそつとしてやって欲しい」

そう言つて俯く彼女の頭に、ぽん、と手が乗せられた。

「ジルフェ？」

「あなたの言うことは分かった。風の精霊は何もしない。あなたに害が無い限り」

精霊はけだるげな様子でいながらも、話はきちんと聞いていたらしい。

「あと、あなたのことが大切だからシオンは口うるさいだけ。嫌わ



ないでやって」

「嫌いじゃないよ」

ジルフェの口をふさごうとした青年は、その言葉に目をしばたく。

「シオンは私にとっても大切な友人だ」

「ならよかった」

続けられた一言に苦笑った青年をよそに、精霊は嬉しげにそう言うつと消えてしまった。猫はどこか嘲笑うように鳴いた。

それからひとしきりイヴに会わなかった間の冒険談をしながら、異国の本などの土産をシオンは彼女に渡していた。そのなかで、装飾品の類を拒まれた彼は、ためらいがちにイヴの耳に手を伸ばした。耳飾はその大きな手に触れ、その瞬間、彼が大きな力を持っていることを悟った。そのことはおそらくジルフェが彼の元にいる理由の一つなのだろう。

「いつもいらないうって言われるのに細工物を持ってくる身で聞いたくは無いけど……。イヴ、これ、貰いもの？」

「そう」

心底嬉しそうに、自慢げにイヴは笑った。

「そうだと思った。会ったんだ」

誰に、と言わないあたりを鑑みるに、彼はどうやら耳飾が何であるか見抜いているらしい。

「綺麗なひとだった」

「それ、自賛になるんじゃないか。君の言うつとおりだけ」

「望まない相手と、結婚してしまったんだ」  
「そうらしいね」

吹雪の轟々という音が、暖炉の火が爆ぜる室内にくぐもって響いた。城も町も遠い、ここはいつも静かだ。

「もう会えないかもしれないって」

「そう」

「たくさん話して遊んだんだ、楽しかった。姉妹っていいなと思った。ずっと今まで二人でそうしてきたみたいに感じた。父上にも母上にも、会ったことが無くて、家族ってずっとどんなものか知らなかったから、私は嬉しかったんだ。だからここまで来るのが大変だろうに、しょっちゅう会いに来てくれることに少しでも礼がしたくて、カメオを作って、出来上がって、喜ぶだろうって渡すのが楽しみで、でも渡せたその日に」

「さようなら、か」

一気に言い募った彼女の言葉を継ぐように、シオンが言った。彼女が震えるのを、耳飾は感じた。嵌った部分が熱を持っている。泣いているのだろうか。だが、彼女が俯いた先に広げられたその両手に、涙は零れ落ちることが無かった。イヴの手は、ほっそりとしてひとつも瑕疵のないコーラリアの手と違う、労働を知る者のそれだ。「どうして、同じで、こんなに違うんだろう。どうしてコーラリアだけ、そんな目に遭わなくちゃいけない。どうして私は代わってやれない。あんなに嫌がっていたのに」

どこか淡々とそう話す彼女は悲しむより、怒っているようだった。多分、彼女自身に。

その彼女の耳元から頬をなぞるように手を動かし、細い顎を持ち上げたシオンは囁くように彼女に訊ねた。

「イヴ。いつか君に言ったように、君が本当に望むならば、俺は何だって持つてくる。女王陛下を盗んできてあげようか」

暖炉の揺れる火を映し、妖しい輝きを帯びた青い目はしかし、少しも冗談を言っていない本気の色を宿していた。だが、耳飾の持ち主は首を横に振った。そうして顎を掴んだ彼の手をそつと外す。

「私は彼女をそういうふう盗んできたりできる物として欲してはいないよ、シオン」

「じゃあ逃がす？」

「そういうことじゃない」

それに再びイヴは首を横に振る。

「それに、彼女は女王だ」

「君は生まれつきが全てでないと言ったけど？」

「ああ。でもどう生きたかはそうじゃない。そして、彼女がいなくなったらこの国はあっけなく瓦解する」

「そのために犠牲になるしかない、と」

「いや……、ううん、その通りだ。助けたいと思っけていても、結局こうして納得してしまう私は、酷だ」

青年は首を傾げた。

「どうだろう。君だって犠牲になつてる」

「そんなことは」

「ある。」

思うままにここから動けない。他者と接することが出来ない。何者になることも許されない。隠れて生きることを強制されて、どう

してそんなことはないって言える？ イヴ、俺は君をいろんなところに連れて行きたい、いろんな世界を見せてやりたい。ここでは咲かない花の咲き乱れるのを見せて、びつくりするくらい香辛料の入った料理を食べさせて、面白い人間にたくさん会わせて、君がどんな顔をするか見てみたい。でも君は今に満足しているって断るし、女王陛下を諦めるのと同じ理由で納得してしまうんだらう。

ねえイヴ、俺は時々昔の聖人の話を見たりしていると思うんだけど、一人の人間が国や世界のためだからって犠牲になるのは、なら仕方ないって済むことじゃない。その上で救われたって、本当に人々は幸せなのか？ それをもし是とするんなら、そんな世界は見捨てたっていいじゃないか、ってね」

「そうかもしれない。……ただ、私みたいな聖人と程遠い人間は、何事も自由で定められた役割がひとつも無いなら、迷いに迷って無為に過ごしてしまうだけかもしれない」

「イヴは違う。仮にそうなってもいいじゃないか。それすらできないことが問題なんだから」

イヴはシオンの断固とした口調に笑った。

「なあ。私、あのひとを一度、姉上と呼んでみたかった」

「……うん」

「シオンは優しい」

「やっと惚れてくれた？」

イヴはそれに答えず、ただ言った。

「ありがとう」

と。

夜になってシオンを迎えに来た風の精霊は、イヴに、「ねえ、イヴ。その耳飾、女王の証なのよ」、とだけ告げて去っていった。

客のいなくなった部屋は、いやに寂しく静かだった。一人暖炉の前にしゃがみこんで、耳元に手を伸ばし耳飾に触れたイヴは小さく吐息を漏らした。

「悩み事か？」

そこに、低い声が響いた。耳飾がイヴの手に渡って以来、初めて聞く声だ。客ももう去ってイヴ以外に人はいないはず。だが、それに動揺もせずイヴは『彼』を見やって答えた。

「なんでもないよ。ようやく力が戻ったんだな。ええと、」

「イヴォルザーク」

「イヴォルザーク。ちょっと呼びにくい名前だな。その姿を見るに、元気になったみたいでよかった」

「ルザークで良い。なにせお陰様で命拾いしたからな。感謝している。もつとも、そのせいで少々力が戻りにくくもあつたが。『神聖な』術は我が身には応える」

「それは悪かつたな、ルザーク」

ルザークと呼ばれた男は尊大な様子で許す、と首肯した。

「イヴ、あれに惚れたのではないか」

「唐突だな。シオンのこと？」

イヴは問いに問いで返す。

「そう、奴だ。義賊を気取り、ここの盗賊を率いて諸国を荒らす男。相変わらずと思えば、愛しい女の前に立てばああも変わるものかと

よい見世物だった」

「シオンのあの態度は冗談交じりだ。それにしてもルザーク、シオンを知っていたのか」

「ああ。もつとも猫の姿ではないときに、だが。とある品を巡って長らく争った。始終、どこか人を食った陰険な態度をしていたな。

その時には随分荒みきった輩だと感心したものだよ」

「きつと、思春期だったんだろう」

「お前こそ思春期であろうに若くないことを言う」

くつくつと魔は笑った。

「思うさま、好きに生きればいいものを、今の世の人間はつまらぬことにやたらと拘泥する。そして本音を誤魔化すようにたくさんの仮面を被り、そのうちに愚かしくも自分の元の顔を忘れる。そうならぬよう、ひたすら望むままに、愛し、憎み、邪魔なものは殺し、面倒なら逃げればいい。それが自由だ」

「それはまた、重たい自由だな。誰かを傷つけてもそう生きるべきだと？」

「人を思いやったためなどと口にするような、自分のためでない理由など何の価値も持たない」

「そうだな。どれだけ格好をつけてみても、突き詰めれば自分のためだから。ただ、思うまま誰かを殺し、憎むことは、私は遠慮しない。きつと疲れきってしまっし、悪くすると罪人になるし」

イヴはそれきりなにかを考え込んでいた。それを見ていた魔は訊ねた。

「聞かないのだな」

「うん？」

「何故俺がこんなところに、血塗れで行き倒れていたのか」

「言つなら聞くよ」

「成る程。ならば聞け。とある国の王に実に瑣末なことで付け狙われて、えげつないやり方で捕まえられ、あらゆる手管で拷問された末に死にかかった。辛くも逃げ延びたときに、魔が到底見つけれもしなければ入りたがらない一角に通りがかった。即ちここだ」  
「……大変だったな」

魔は頷いた。

「ああ。危つくあらゆるものが信じられなくなるところだった。だからお前のことも最初に会ったとき殺そうとした」

「おい」

「生憎指一本とて動かせなかつたので諦めたら、見る間に傷が癒えた。そうして拾われてからも何度か隙あらば殺してやろうと思っていた。なにせお前がかの王の手下でない証拠はどこにもない」

「……そうか」

「だが、お前はいつも俺をただの傷ついていた猫として扱った。触れるときは慎重に触れ、魚を毎日食わせ、のんきに話しかけた。生来怠け者の身には、お陰でこの居心地は悪くなかつた」  
「ならよかつた」

そう言つて少し笑つたイヴは、隣に座り込んだルザークに向き直つた。

「ここを出て行くのか？」

「今すぐ、と思つたが寂しかろう？ この吹雪の止むまで『お前のために』いてやろう」

そしてそのまま、欠伸をした金の色を纏つた魔は猫の姿に戻つて丸まると眠り込んでしまった。

「助かるよ」

彼の言葉に少し目を丸くしていたイヴは、微笑んで呟いた。

それから、吹雪の日々がしばらく続いた。あれ以来、本来の姿をとることはなく猫の姿のままだったが、魔は人の言葉で話した。また、悪天候の中でもやってくるシオンと猫はよく喧嘩していたが、そのために彼女の小屋はにぎやかだった。笑う娘の耳元で、共に笑うように耳飾も揺れた。この所有主が楽しげであることは、実際耳飾にとっても楽しいことだった。

イヴは一日の終わりに欠かさず耳飾を手入れた。そして毎日その耳に耳飾を丁寧な手つきで飾った。耳飾はそれを義務感から生じたものでない理由でこなす娘の様子が気に入っていた。同胞達が傍にいないのが残念だった。きっと口を揃えて、初代の女王の耳元にいた頃を思い出すと言うだろう。残念ながら口は無いのだが。

そんな愉快的な日々は、ある朝終わりを告げた。その朝、とうとう吹雪がやんだ。しかし、耳飾が予想していたように魔が去ったために、その日々が終わった、ということにはならなかったのだ。なにもかもが同時に起こって、その全てのめぐり合わせは悪かった。それに不似合いなくらい、珍しく晴れ渡った朝であった。

「晴れた」

朝、イヴがカーテンを開けると、燦燦と太陽の光が小さな家に差し込んだ。

「そのようだ」

イヴの隣で伸びをした猫は、眩しげに目を細めてそれを見た。そ



の様子をじっと見つめていたイヴは呟いた。

「ルザーク、魔は陽の光を浴びると溶けたりしないのか」

「……イヴ。お前は魔に対する偏見が無くて実に結構だとい先日思ったが、撤回しよう。大体今までもそんなことにはならなかったろくに」

「すまない、なんとなく」

「なんとなくも何も」

呆れた様子で何か言いかけた魔は、イヴの表情を見て押し黙った。

「世話になった」

「どういたしまして」

一度その姿を見ても、相変わらず魔をただの猫として扱っていたイヴがその頭を撫でるのを、ルザークは抵抗せず受けていたがやがてぴん、と尻尾を立てせるといきなり裏戸のほうへ行ってしまった。

「ルザーク？」

訝るようにその名を呼んだイヴは、表の方の扉を叩く遠慮がちな音に飛び上がった。エウリアでも、シオンでもない、それは。

「イヴ」

「コーラリア!？」

扉の向こうに、イヴとそっくりの娘の姿があった。だがその姿を見ないうちに、コーラリアの方はひどく大人びていた。

「ごめんなさい、イヴ。こんな朝に、急にやって来て。もう会えな

いかもしれない、なんて貴女に言っておいて……。でも、私、貴女しか、こんなこと」

「いつでもおいでと私は言ったよ、コーラリア。なにがあっただんだ？」

まるで最後に会った日と同じに、曇りきった表情をしたコーラリアへと、そっとイヴは問いかけた。

「私」

彼女は言い淀んだ。寒さのためか震えながら、一度深く呼吸すると、コーラリアは言った。

「最近体調が悪くて、お医者様に見てもらったの。そしたら……。あの人の……。子どもができてしまったんだったって分かった。どうしよう、イヴ。あの人も、みんなも、喜んで、おんなじ表情でおめでとう、これで安泰だって言うの。これで女の子だったら素晴らしい、とかそんなことを。でも私、ちっとも嬉しくない、喜べないの！ どうしよう、このままじゃ私、この子を愛せない、きっと酷いことをする。それにもし、双子だったら？ 男の子だったら？ そんなことになったら、この子……。！」

その手を腹の上に乗せながら、青い顔をしたコーラリアは泣き崩れた。

「コーラリア……。！」

かける言葉も見つからず、ただしゃがみこんでしまったその傍に寄って彼女を立たせると、家の中に連れこんでイヴはその背を撫でた。

コーラリアはずっと俯いていたが、やがて真っ赤に泣き腫らした

目をして口を開いた。

「ねえ、イヴ。どうしたらこの子を愛せるかしら。私そんなこと分らない、愛してもらったことの無い人間が愛し方なんて分らない、抱きしめればいいの、口付ければいいの？ 優しく言葉をかけて、愛してるって言って、名前を呼んであげればいい？ そんなの、あの人みたいに何も思ってたって出来るのよ。心が伴ってないなんてそんなこと、きっと私と同じにこの子にも分かってしまう」

本当に分からない、と言う顔で惑う彼女に、イヴは同じように迷ったように言った。

「コーラリア。あなたは、もうその子を、愛しているんじゃないのか」

「え……？ イヴ、何を言って」  
「あなたの王配になった人のことを、あなたは確かに愛していないのかもしれない。その人との子どもだから、愛せないと思うのもしょうがない。でも、そんなふうには、その結果生まれてくる子が傷つくことを心配するのは、その子を大切に思い始めているからじゃないのか。私も『愛している』って言うのはよく分からないけれど、相手を案じ、その幸せを願うのは愛してるって言えるんじゃないかな」

それに、とイヴは続けた。

「双子だからか、私はコーラリアが悲しいとなんだか悲しくなったりするんだけど、今、それに混じって優しい、誰かを想うような気持ちもかすかに感じているんだ。もう一つ」

「何？」

「さっき言った意味では、私はあなたを愛しているよ、コーラリア」

「イヴ」

言葉をなくすコーラリアに、イヴは笑いかける。

「双子で生まれて、あなたに会えてよかったと思っている。ただ、こうして話を聞いたり、その幸せを願うだけで、何も出来ない身だけれど。コーラリアも私と同じように思ってくれるなら嬉しい」

「貴女が……」

「ん？」

首を傾げたイヴに、コーラリアは頬を赤らめて目を反らした。

「貴女が私と同じ顔じゃなくて、殿方だったら迷わず王配に選んだのに、とまってしまいうくらいに大好きよ」

「それは残念だった」

「大体、そうじゃなければ耳飾なんて……、なんでもないわ」

何かを言いかけつつ照れたように止めるコーラリアに苦笑して、  
「少しは落ち着いた？」と問うイヴへ、こくりと彼女は頷く。その時、今度は乱暴に扉を叩く音がして、コーラリアは止めるイヴに構わず、あわてたように衣装棚へと身を隠してしまった。

それと僅かな差でいつものように飛び込んできたのは、シオンである。

「イヴ！」

「おはよう。なんだ、朝から」

「だって君が……、あれ？ イヴ、香水持ってたっけ」

「いや、持ってない」

その答えを聞いても納得がいかないように、シオンは柳眉を寄せた。

「おかしいな、花の香りがする。君は雪の匂いなのに」

「気のせいじゃないか。それよりなんだ、雪の匂いって」

「説明すると長くなるけど、聞く？」

にやりと笑ったシオンに、イヴは首を横に振る。

「遠慮しておくよ。それより用事はなんだ」

「忘れた」

「なら、もう帰ったほうがいい」

「どうして？」

「もう魔もないし、することがないだろう。それにシオンの埒の者たちも、朝から頭がいなければ騒ぎになるんじゃないか」

いつの間にかイヴの目の前にやってきていたシオンは、彼女をじつと見つめた。

「イヴ」

「何？」

「なんか隠してる？」

「……隠してない」

「そう？ 一つ教えておくけど、イヴは嘘がうまくない。魔は確かにいなくなったしそれは喜ばしいけど、他の気配がするな。隠すのも、物なら構わないけど、人なら」

そこで彼は言葉を区切り、芝居がかった仕草で重々しく腕を組んだ。

「人なら？」

「じつする」

腕組みを解いた彼は、イヴを抱きしめた。

「放せ」

慌てる様子もなく拘束を解こうとするイヴに構わず、耳元で彼は囁く。

「いやだ。どうしてこうしてると思ってる？ イヴ、俺にも愛している、って言って」

「シオン、まさか」

「耳がいいから外にいても聞こえてた。どうして？ 姉妹だから？ 双子だから？ それだけで、あんなにあっさりその言葉を貰えるわけ？ 俺は何度も君に好きだって言って、一度もその言葉を返してもらったことがない」

「応えられないと何度も言った。シオンと同じ想いは返せない」

「彼女に君が言ったのと、同じ意味でもいいから俺は聞いてみたいの」

彼は彼女を離す。

「それに、さっき教えた。君は嘘が下手だって」

「嘘じゃない」

「わかった。言うてくれないなら君の嘘を言うときの癖は教えないでおこう。また来るよ、イヴ」

そうして去っていく彼に、力が抜けたようにへたり込んだイヴは頭を抱えた。

「イヴ」

「……コーラリア」

名を呼ぶ自分と同じ声にぐったりとイヴは応えた。

「貴女はあの人に愛することを教わった？」

「そんなことはないよ」

「イヴは嘘が下手なのね、私はちっとも気がつかなかった」

イヴが顔を上げると、隠れていたせいで髪がぼさぼさになり、服も乱れたコーラリアは泣いてこそいなかったが、泣きそうな顔をしていた。

「結婚は……、恋はしないっていつか貴女が言った時、私どこかで嬉しかった。安堵した。貴女も私と同じようにそれが自由でないのだと思ったから。酷いでしょう。さっき、そのことを後悔していたわ。謝ろうと思った。でも私、今はそう思えない。だって、あの時貴女は嘘をついたのでしょ」

「あの言葉は、嘘じゃない。私は、恋はしないよ、生涯」

「どうして偽るの？ 自分にまで嘘をつくの？」

「嘘じゃ、」

「貴女は私が悲しいと悲しくなるとそう言った。私は、貴女がさっきあの人に抱きしめられているとき、私が出自分の気持ちと関係なく何を感じたか分かる？」

「コーラリア」

鋭い声をあげたイヴに怯むことなく、コーラリアは言った。

「あの人が愛おしかった。私は初めてその気持ちがどんなものか分かったわ。貴女はどうして、それを否定するの。やっぱり私と貴女は全然違う、一言言えば全て叶うくせに、何故」

そこまで言うてからようやく口をつぐんだ彼女は、やがて小さく「ごめんなさい」と言うてイヴの顔を見ることなく去っていった。

入れ替わるようにして、ぼんやりとしていたイヴの元に再び猫が現れる。

「認めてしまえば楽だろうに。あの晩言っただであろつ、好きに生きるべきだと」

イヴは猫に向かって力なく微笑んだ。

「ルザーク。少ししょうもない自己憐憫に付き合ってくれるか。私はどうしてここにいると思う？」

「お前のためだ」

「そう、私のため。」

エウリアにいつか聞いたんだ。会ったことのない両親が、私に唯一強く望んだのは『天寿を全うすること』だ。物心つく前からここにいるよう手配したのは、ひたすらにそのためだ。姉妹で憎みあって傷つけあい、殺しあうようなことがないように。私はそれに応えたくて、その思い故にこうして暮らした。それなのに、私が誰かと好きあつて、万一子どもを授かつて、遠からぬ未来にその子どもが火種となったなら？ 身内で済めば……まだいいが、もしそのために紛争でも起きたら？ 私がここで隠れるように生きてきたことも、女王であるコーラリアをその檻から救う手立てを持ちながら見捨てたことも、すべて水泡に帰す。私はそのことで後悔をしたくないんだ、けして」

「臆病だな」

「それに卑怯だ。どんなに否定してみても、自分がシオンのことを好きだなんて、本当は知っていた。だから、シオンに応えないくせに、彼が会いに来てくれることを喜んでいたんだ。」

いつからか、シオンは私にとって、窓みたいな存在だった。彼を通して、外の世界が確かにあつて、それがどんなものか初めて知れ



た。この国の人々の暮らしや生き様もそうして知った。そして、どこであれ、いかにも楽しげに動き回る彼を、飛ぶ鳥にそうするみたいに見上げて、眩しく思った。でも、彼のくれる想いも訪れも、本当は、拒みきるべきだ。分かっていた。それなのに卑怯にも拒否することが出来ないでいたから、結局コーリアをあんなふうに傷つけるようなことになった。ただでさえ彼女はあんなに傷ついて、動揺していたのに。最低だろう、私みたいな馬鹿はいない。なあ、ルザーク？」

人の姿をとつた魔はかすかに笑った。

「助けられた礼に、去る前に何かしてやろうと思っていたが、決めた。お前を逃がしてやろう」

「……ルザーク、ありがとう。でも、やめて欲しい。私はこの美しい雪の降る国に骨を埋めたいんだよ」

「悪いが、我は魔だ。こここの風の信条とするよりはるかに『自由』なのだよ、イヴ。他者の思いよりも、人の理よりも、自身の望みを誰より優先する」

その手が、イヴの頭に乗せられる。耳飾は警告するように彼女の耳元で鳴ったが、それはなんの力にもならない。

「ルザーク、待って、」

「お前の檻を全て、忘れてしまえ、イヴ」

「どこへ行くつもり」

赤い夕暮れの中、一人の娘を抱えて家を出ようとする男を睨みつける、色の淡い目があった。そのどこにも、いつもの気だるげな様子はない。いつの間にか四方に強く張られた結界の中、いくつも小さな竜巻が精霊を中心に起こっている。娘がいるためか攻撃できないことを苛立つように激しく吹き付ける風の中、男はまるで応えない様子で飄々としていた。

「イヴに何をしたの？」

「この耳飾のせいか、忌まわしい。気づくのが早かったな。我はただ、この娘の不必要な記憶を封じただけだ」

「なんて……惨いことを。あなたに彼女にとっての何かが必要か否かを決める権利はないのに」

「『お前たち』はそれを勝手に決めなかったと言っのか」

美しい風の精霊は答えなかった。

「言えないだろう。ここにこの娘を縛り付けた分際で。風の住まう国が、笑わせる。くだらない椅子のためにお前たちの愛するという自由がどれだけ犠牲になったのだろうな？」

「……イヴを返して。耳飾は彼女を持ち主と認めた。彼女がこの国を出れば、花が枯れてしまう」

「清清しいくらいに身勝手な理由だな、シルフィード。どこに行くかとお前は訊ねたな。お前のように我俣に、この娘が生きられるところに、だ」

そう言つと、魔はイヴを抱えたまま、音もなく大地に溶けるようにして消え去った。

魔は、イヴは、それからどうなったのか、耳飾は知らない。

魔に壊されてしまったわけではない。竜細工師の手で作られ、風の契約の証でもある耳飾を壊すことは、風の精霊の長の結界すら通り抜けて見せた魔であっても叶わなかった。ただそれゆえに、風の精霊と繋がり、彼女の記憶を揺り起こす可能性のある耳飾は、決して彼女に再び身につけられることのないよう、魔の手によって異界の不浄な地に捨てられてしまったのだ。

相容れない魔の力、歪みと混沌の溢れる地で、少しずつ耳飾はそれに染まっていった。それでも、侵食してくる歪みに軋み悲鳴を上げる自身から逃れるように、懐かしい思い出を繰り返し、繰り返し思い描いた。壊れてしまえば自身とつながる花が枯れてしまうことを耳飾は知っていた。歪みに囚われた末にそうなれば、どのような結果を呼んでしまうかと恐ろしかった。花から、あの国の人々が花を大切にし、風を祀る様を耳飾は見ていた。耳飾は、長く守ってきた国を、花と同じに守りたかった。

だが、限界はやって来る。

ある日とうとう、耳飾は、ぱきり、と音を立ててあっけなく壊れてしまった。耳飾は一瞬、繋がっていた花の悲鳴を耳にした気がした。

あの娘は、あれからどうしただろうかと、耳飾は最後までそれが少し心配だった。

## 91. なりたかったもの

『遅すぎたの』

目的語のないジルフェの言葉を聞いたとき、ヴィーがその後悔の意味を知ることには無かった。

しかしこの国の昔の欠片に触れることで、それを少し知った思いだった。どこもかしこも何かが歪んで見える異界の地にそれは、半ば埋もれるようにしてあった。

「これのことかと思っていたが……『イヴ』のことかもな」

ヴィーは独りごちて、砕けた耳飾の荒れた表面を指でそつと撫でた。塚の向こう側、曖昧な花の色をとった光の中を泳ぐようにしてこの地に辿り着いた末に、ようやく見つけたそれを拾い上げたヴィーに、今まで不思議な記憶の幻を見せていた耳飾。今はもう何の力も持たないことを証するかのように、それはヴィーの掌の上で鈍く光ってみせるだけだ。

国を守る花の咲いていたという塚は、空間をどう越えたものか、この場所へと通じていた。風の精霊によりあの場が境界の柱の場所として選ばれたことから考えると、あるいは元々、あの場所は『ここ』に通じている場所だったのかもしれない。それともやはり、耳飾と花が繋がっていたために起こった現象なのかもしれない。分からない。

あの夜、ヴィーはジルフェに、花の咲く塚のこと確かめてくるよう、頼まれた。彼女はその精霊としての力ゆえに、それと相反する力に弾かれて近づけないのだと語った。だから、どうかあなたに行ってきた欲しい、と。

酷い話ではある。魔の住処に人間を一人で行かせようというのだから。彼女はここまであの塚が通じていると知っていただろうか。幸いにもこの辺りには魔は暮らしていないようだったが、実際、空間を越えてここに至るまで下級とはいえ何匹かの魔に襲われた。そもそも、今こそこの地に弾かれないほどにその力が衰えているとはいえ、ヴィーとて精霊の力に頼る術師の端くれだ。『ここ』が心地よい場所のはずがない。しかし彼の体の内に眠る竜の力は渦巻く魔の力の奔流から彼を確かに守っていた。そうでなければ、自分が今どうなっていたか考えるとあまりぞつとしない。だがある意味、大変貴重な経験が出来たとも言えなくもない。未知の事柄に関して恐怖よりも好奇心を覚える性質のヴィーとしては、異界を新鮮に感じている部分もあるのも事実だ。

存在こそ知っていたが、まさかこうしてここを訪れることになるとは、思ってもなかった。精霊術師として単身この地に訪れたことのある人間はひよつとすると自分が初めてかもしれない。そう半ば確信できるくらいには、ここは精霊と関わる人間にとってある種の禁忌だ。ヴィーが辺りを見渡せば、その輪郭を掴むことを拒むように、赤を基調とした人の地の荒野と似たその場所は刻々とその形を変えて目に映った。魔は『ここ』から、彼らの世界にやってくる。大昔に人と精霊と魔が、人の地を巡って争った。その時は魔の世界である『ここ』も戦場になったという。ということは、少なくともその時点では精霊がこの地に来られたということだが、今との違いは一体何だろうか。

そこまで考えたとき、ヴィーをここまで導いた花色の光が背後で薄れる気配を感じ、彼は思考を中断して身を翻した。その光の他に、『ここ』から帰る手段は無い。

慌しくその世界を離れる一瞬、ヴィーは何故だかかすかに、いつ

か再びこの地に来ることになるのではないかという、そんな予感がした。それを振り払うように、「国に帰ったら狸爺を散々からかってやるう」と彼は呟いた。

風の国よりはるか遠くにあつて、風の国を守る木と同じ木があつた。その周りで伸びやかにそよいでいた風は、ふと凝って人の姿をとると、真っ直ぐに北を向いた。

「イヴ……、いや、違う。でも」

風の精霊の中でもはるか古より存在し、強大な力を持つエウリアとジルフェと並ぶその精霊は、しばらく思索した後、木から果実をいくつかとり、口に含んだ。そしてその後、今度は鳥の姿をとって飛び立った。

暗闇に微かに明かりが灯り、その黄色い火が丸く不思議な材質の塔の床を照らし、薄く七色に輝かせている。

そこに鉛色の地図を置いて、白い髪の青年がひとり、渋い顔で頭を抱えていた。

「ロコ」

「ああ、ロイナス、だっけ？」

声をかけると、相手は表情を緩めてこちらを見上げてきた。

「いや、ロイでいいよ」

「じゃあ、ロイ」

「うん。それにしても、明日行くことになるとはね。眠れない？」

そうロイが尋ねれば、青年は頷いて肩を回した。

「まあ、そうだよ。城にどう入ろうかって悩んでたところ。ジルフエも今度ばかりは制約か何かで途中までしか付き合えないって言うてたし。風の精霊たちも多分そうなんだろうなあ。やっぱり花が枯れた方角から入るのが一番だとは思っただけ、なあんか、やな予感がするんだ。皆いつもなら一緒になつて徹夜するところなのに、なんでか今日に限って手伝おうともしないでさっさと寝ちゃうしさ。ロイは何か用？」

ロイは目の前の毒気の欠片も無い青年の顔をしばらく見つめた。

「……君と女王陛下の話を、聞いてみたいと思って」

「ステイの？ 長くなるけどいい？」

「いや、君と、」

「嬉しいなあ。いくらでも話すよ。ステイってすごい人見知りで、昔はほとんど他人を寄せ付けなかったんだよ。僕は大丈夫だったけどね。いや、今こそ追いかけても逃げられちゃうけど、昔は逆で、彼女の方がどこでも僕の行くところについてきたがった。ひよこひよこしてて、ふわふわで、鳥の雛みたいで、たまらなく可愛かったなあ。ステイってば、あんなに美人だし、頭もいいのに、全然自覚無くっていつもなんか自信なさそうなんだよね。それでも、なんだかんだ言っただけ結局頑張っただけ、謙虚とかいじらしいとか。あと、勘違いされること多いけど、優しい子なんだ」

放っておけば、いくらでもそのまま話し続けそうで、止めようか

どうしようかロイが迷っていると、ロコはふと口を噤んだ。

「昔、一体何があったか、気になった？」

見透かすような、でも穏やかな灰褐色の目を向けられて、ロイは目を反らす。ロコは別に気分を害した様子も無く、地図に再び目を向けた。

「フィーが、あんなふうに言えば気になるよね。あ、睨まないでよ、別に君の大切な人を責めてるわけじゃない、ってなんで怒るのさ。怖いからその顔やめて、美人が怒ると迫力があるんだよ？」

何故だか酷く怯えるロコに、なんでもないと行ってロイはため息をつく。一瞬、鋭い顔をしたかと思えば、すぐいつものようなそらとぼけた調子に戻る。どちらもロコの本質だろうがなんだか話にくい。だからもう、迂遠な聞き方をするのはやめよう、と彼は決めた。

「女王陛下に、殺されかけたって、どうして？　そもそも、さっきの話からすると、君は……」

「王族だった、一応ね。アカネもそうだし」

あっけらかんと話すロコに、ロイは言葉を失った。しかしやがて「そう」と一言言った。

「あんまり驚かない、っていうか疑わないんだ」

「その方が、いろいろ、納得がいくから」

「僕が似合わないのもちろんだけど、あのアカネが王子様だったんだよ？　まあ、いいけど。もう、僕たち、別人みたいにして生きてるし」

少し拍子抜けした顔で、ロコは頬をかく。



「親子揃って、あの場所にいたことがあったなんて、今じゃちょっと自分でも信じがたいな。一時はあそこも、そんなに悪い場所じゃなかった。確かに僕にとつて『我が家』だったと思う。むしろ、何も知らなかった頃は、楽しかった。父親どうしが兄弟で、僕は母親が物心付いてからいなかったからステイの母上が半分本当のお母さんみたいな感じで、よく会いに行つたよ。ステイともいつも遊んでいたし、風の精霊も珍しくみんな揃つてた」

懐かしむように、目を眇めてロコは城の地図を見て語る。

この池で水浴びをして大目玉を食らつた、大食堂で畏まつて食べるより、台所に忍び込んで味見した食事の方がおいしかった。せがんで聴かせてもらった、楽器は巧みなエウリアの、あまりに音痴な歌に城中の人間が耳を疑つた。重要な祭儀の折、アカネが居眠りしていて隣で冷や汗をかいた。よくこの部屋で本を祖母に読み聞かされたけれど、自分は眠ってしまった、ステイにあとでもう一度話を聞かせてもらった。夜にこっそり屋上や塔の上に登つて、星空を並んで眺めて流れ星を数えたり、風に一緒に乗つて国中を飛んだりした。

そういうことを、夜の四十万を破らないやわらかな声で、彼はそつと語つた。そしてまた口を閉ざしたが、今度は再び話す気配が無い。何を思い出しているのか、陰に隠された表情はよく分からないが、どこか悲しそうにロイの目に映つた。

無理にその先を聞くことは無い、とロイは思った。女王に反旗を翻すのに格好な状況。女王より国民に愛されているという義賊の頭目。そして、さらに、彼は王族の血を引く。過去形であるにせよ。

自身の懐疑的な性格と、さまざまな条件のために、ロコのことをどこかで信じ切れない部分があつて、確かめたかつたことがあつて、ここに来た。だが、もういいか、と思つた。どう転ぶにせよ、彼が

ステファニアを悪くすることはないだろうとロイは感じた。

事の結末も、予想できなくは無かった。女王のいるために王位をなかなか継げないでいただろう王太子。直系ではなくても王族で、術力の強い親子。女王が継ぐことが多いと言われる国で、王位を継ぐ直系にありながら『なぜか』いつも自信がなさそうだった娘。何が引き金だったかは分からないが……、ありえない話ではない。親愛ほど、それが妬みや憎しみに変わったとき酷くこじれるものは無い。

物思いに沈むロコに、一言辞去の意を告げてその部屋をロイが出ようとしたとき、彼は顔を上げた。

「昔、英雄がいたんだ」

「英雄？」

ロイが首を傾げると、ロコは頷いた。

「そう。僕は、子どものころ、英雄の敵だった人のことも大好きだった。けれど、その人より英雄とまで呼ばれた存在の自由奔放さにとっても憧れて、彼の足跡を辿るうちに、ここまで来た。そして、そうなるまでに、知った。英雄は、自棄を起こしてただけだったらしくて。彼の大事な人を失ったために。その結果が偉業とされたとしても、彼自身はそれで得るものが無くなって、だから結局いなくなつた。元々探していたものを、諦め切れなくて、手にした地位も名声も全部あっさり捨てて消えた。人の目にどう映るうが本人は、欲しいものが、始めから違つてたんだ。」

英雄になりたかつたよ。でも、今は、違つ。いや、多分、僕も、始めから違つてたんだ。気づけばこの手で彼女に耳飾をつけることばかり考えてたから。

……そんなわけで、君の懸念しているような、輝かしい僕の姿は見せられそうにない。むしろ、滑稽に彼女に振られて詰られて、右往左往する間抜けな姿しか見せないかもしれない。それでも、君は

明日、手伝ってくれるかい？」

「……『それなら』、手伝うよ」

ロイは微笑み、「君を疑って悪かった」と詫びて部屋を出た。

「ほらな、あれは魔だったろう？」

「アカネ、あなたは……、馬鹿なの？」

地下牢の中ですら、飄々と笑う男に、ステファニアは無表情に言った。

「馬鹿だって？まさか、ちゃんと食事を済ませてから事を起こしたとも」

「そういうことじゃないわ。あんなもの、どこに隠し持っていたの」「ちよつと手元にあつたから」

目の前の男は、険悪な雰囲気、食事が終わるやいなや、目のくらむような威力の術具をヤナに投げつけた。そして彼は、『無事』だった。その瞬間に、ヤナはとっさに隠し持っていた魔の強い力をもつて相殺させたのだ。

「もう少し、穏便に済ませていたら、こんなことにはならなかったでしょうに」

ステファニアはため息をついたが、アカネは鼻で笑った。

「口でいくら聞いてみたって、ああいう輩ははぐらかしてくるだけ

だろうよ。それより、どういっつもりだ、ステファニア？」

「何？」

「魔と知ってなお、ヤナの方を支持したりして。そうやって私を手  
ずから介抱するくらいお優しいんなら、ついでにここから出しても  
らいたいもんだ」

「駄目」

ステファニアは、小さく首を横に振った。

ヤナは魔だった。そして驚く間もなく、ステファニアはそれを『  
思い出した』。まるでかけられていた籠が外れるように、このと  
ころもやのかかっていたようだった記憶が鮮明になった。そして分  
かったことは、自分は彼に、ずっと、彼に関する記憶の一部に蓋を  
されたまま、騙されていたということ。ひよつとすると、操作もさ  
れていたのかもしれない。それを理解して、呆然とする彼女の方を  
向いたヤナは、もはや取り繕う気も無いようだった。かすかに笑い、  
『今夜、のつもりではなかった。けれど、ちょうどよい時期だった  
かもしれないね、ステファニア』、と言った。それはつまり。

「ここでじつと大人しくしていて、そしたらすぐに終わる」

「……何が？」

「騎士軍も混ざった、反乱軍がここに来る。祭司たちの動揺がいか  
にも演技なのを見ると、彼らもきつと共謀しているのでしょうかね。  
みんな一緒になって、私ひとり我倒そうというわけ。そして『彼ら  
の』王様を、この新しい主にするつもりなのでしょう。彼はなん  
ていうかしら、どうするかしら。あなたをここに繋いで、魔と共謀  
した私を見たら？」

「はてさて、私は例え麗しき女王陛下のためといえど、偽悪に使わ  
れるのは御免被るがね」

「あら、全部事実よ。あなたの信念を曲げる必要は無いわ」

そう、事実だ。

記憶が戻ってすぐは動揺があつたが、ステファニアは落ち着くのも早かつた。そして、変わらない想いも、あつた。そんな自分が何より一番、自分を打ちのめした。

その後すぐ、ステファニアは今にも戦おうとするヤナとエウリア、アカネを止めて、ヤナの言うとおりにする、とそれだけ言った。エウリアは心底不服そうにステファニアを見やったが、結局渋々と従つた。そうするともう、アカネも何かを諦めたようだった。そして彼は、大人しくヤナの指示でわざわざ目隠しをされ、近衛騎士によつて全身縄できつく縛られた挙句に、ステファニアの手でここまで連れて来られたのだ。ステファニアは、あまりにきつそうなその縄を少し緩め、出血しているところを消毒する作業をようやく終えて立ち上がる。そしてアカネが逃げ出さないよう慎重に牢から出ると鍵をかけた。振り返って、牢の中の顔を見ると、彼を思い出した。もう随分長いこと会っていないから、ひよつとすると自分より成長しているのかもしれない。

ヤナが、ヤナに関するステファニアの記憶と共に封じていたのは、王たろうとする彼女を支える記憶だった。それがあろうがあるまいが、関係なかつたのだと知ってしまった。大好きな祖母から継いだ王位を自分は一体いつから、疎んでしまつていたのだろうか。

「ひとつだけ、ごめんなさい。出て行ったことを責めたりしたこと。私はすっかり忘れていたの、他にもない私が、あなたたちが出て行くきつかけを作つたことを」

それこそ、ヤナと会うまで、彼女を支えた根幹でもあつた。ここに、一人きりに感じるときでも、いつでも。私はああまで、祖母と同じ女王になりたかつたのだと、確認できたから。だからこそとも

言えるだろう、ヤナと彼を覚えていたし、祖母や自分を置いて出て行ってしまった二人を強く厭う気持ちは残ってもそれだけは、思い出さなかった。どんなことがあっても、忘れないと思っていたのに自分のした事を。刃を向けられたあの時の、彼の表情を。伸ばされた手を。

「ステファニア」

「『さよなら』、アカネ『おじさま』」

一瞬目を見開いたアカネを置いて、微笑んだ少女は地下牢を足早に去った。

「いったい、馬鹿はどっちだ？」

その背を見送ってから、ひよいひよいと白衣の男は縄を抜ける。

あの娘が、人に縄をかけるのに慣れていているわけがないのだ。

それにしてもステファニアは、この牢には術力が封じられる仕掛けが施されているために油断したか、あるいは逃げても構わなかったか。

それとも、相当行き詰って自暴自棄なのか。

考えてみて、そのどれでも、自分が軽く思われているのは同じな気がしたが、最後のはあまり気に食わない予想だとアカネは顔を顰めた。

「さて、息子に無理やり覚えさせられたもんだが、意外と役に立つもんだな。後は、牢の鍵、だが……どうするんだったか」

性分もあって、ぶつぶつと独り言を言いながら、髪を縛っていた

紐から針金を引き出すと、牢の鍵も彼はさっさと開けてしまった。

「……医者になったのは早計だったか」

自分でも少々驚きつつ、そこを出て彼は悟った。目隠しをされた意味。わざわざあえてステファニアが彼をここまで運んだ意味。そして、見張りも誰もいない牢の意味を。

アカネの今いるそこは、どうやら迷路の一角のようだった。

彼はぼんやり思い出す。城にいた頃、王族だけが知る地下道があると耳にしたことが、確かにあった。

興味も無いので聞き流していたが、こんなことになるなら、医者になる勉強の合間に子どもらしく城の探検でもしておくんだった。

そう彼は少々後悔しつつ、風の気配の無いぼんやり壁の光る道を、勘に任せて歩き出した。

91・なりたかったもの(後書き)

お読みくださってありがとうございます。拍手くださった方、ありがとうございます。とても励みになっております。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8464e/>

---

王と細工師

2011年2月19日15時03分発行